

の うち い せき
野 内 遺 跡 C 地 区
(第1分冊)

2 0 1 2

岐阜県文化財保護センター



古墳時代初頭の土師器 (1220S B出土)



古墳時代の木製農具

巻頭図版 2



平安時代頃の土器類



古代以降の木器類

序

岐阜県北部の飛騨地方は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。古くから高度な木工技術に基づいた木の文化を育むとともに、各地との盛んな交流により独特の文化圏を築き上げたことが知られています。その中心都市である高山市には、国史跡の堂之上遺跡（繩文時代）、赤保木瓦窯跡（奈良時代）、高山陣屋跡（江戸時代）をはじめとする、数多くの注目すべき遺跡があります。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道建設事業に伴い、高山市上切町にある野内遺跡の発掘調査を実施しました。野内遺跡は、繩文時代から江戸時代にかけての長い時代にわたる人々の生活の跡が見つかった複合遺跡です。これまでに、A地区、B地区、D地区の発掘調査報告書を刊行し、C地区を対象とする本書の刊行をもって、一連の調査はひとまず完結することとなります。

今回の調査では、古墳時代と平安時代の木器類などがまとまって出土し、当時の人々の暮らしぶりや周辺地域との交流の様子を知ることができました。本書は、平成17年度と18年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成にあたりまして、御理解と御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

岐阜県文化財保護センター
所長 高橋 照美

例　言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町に所在する野内遺跡(岐阜県遺跡番号21203-09624)C地区の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、岐阜県文化財保護センター（平成15年3月までは財団法人岐阜県文化財保護センター、平成21年3月までは財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター）が実施した。
- 3 八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘調査は平成17年度と18年度に、整理作業は平成18～23年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第1章は野々田光則、それ以外は小瀬忠司が行った。また、編集は小瀬が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの業務は、株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 花粉分析、プランツ・オパール分析、放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。金属器類の成分分析は、株式会社吉田生物研究所に委託して行った。また、木器類の樹種同定は株式会社パレオ・ラボと株式会社吉田生物研究所に委託して行った。以上の成果は第4章に掲載した。編集は、株式会社パレオ・ラボと株式会社吉田生物研究所による結果をもとに、小瀬が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
赤澤徳明、家塙英詞、諫山えりか、石川日出志、伊藤秋男、岩田修、岩田崇、牛丸岳彦、大石崇史、大森清孝、押井正行、尾野善裕、恩田知美、久保智康、笠澤正史、佐藤公保、城ヶ谷和宏、下畠五夫、下濱貴子、上嶋善治、鈴木元、鈴木とよ江、鈴木正貴、高木宏和、田中彰、谷口和人、永井宏幸、中島照雅、長屋幸二、馬場伸一郎、樋上昇、久田正弘、藤田慎一、広瀬和雄、藤原秀樹、穂積裕昌、光谷拓実、南洋一郎、三好清超、山田昌久、渡邊博人、高山市教育委員会
- 10 本文中の方位は、国土座標第VII系の座標北を示している。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄2000『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次 (第1分冊)

巻頭図版

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	11
第1節 層序と遺構面	11
第2節 遺構・遺物の概要	15
第3節 遺構	21
第4節 遺物	145

第2分冊 目次

第3章 調査の成果（承前）

 第4節 遺物（承前）

第4章 自然科学分析

 第1節 花粉化石群集の分析

 第2節 プラント・オパール分析

 第3節 堀立柱建物跡柱根の放射性炭素年代測定

 第4節 金属器類の成分分析

 第5節 木器類の樹種同定

第5章 総括

 第1節 野内遺跡C地区で出土した木器類について

 第2節 野内遺跡C地区検出遺構の消長について

 第3節 野内遺跡とその周辺区域における土地利用の変遷について

参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 野内遺跡の位置	1	第35図 発掘区全域分割図 第2遺構面(1)	57
第2図 野内遺跡の発掘区配置図	2	第36図 発掘区全域分割図 第2遺構面(2)	58
第3図 試掘坑の位置	2	第37図 発掘区全域分割図 第2遺構面(3)	59
第4図 グリッドの設定	3	第38図 発掘区全域分割図 第2遺構面(4)	60
第5図 野内遺跡B地区・C地区的立地	6	第39図 発掘区全域分割図 第2遺構面(5)	61
第6図 遺跡周辺の地質	7	第40図 発掘区全域分割図 第2遺構面(6)	62
第7図 周辺の遺跡分布	9	第41図 発掘区全域分割図 第2遺構面(7)	63
第8図 基本層序	12	第42図 発掘区全域分割図 第2遺構面(8)	64
第9図 遺物包含層における土器類の出土傾向	14	第43図 発掘区全域分割図 第2遺構面(9)	65
第10図 主要器種の部位名称と計測位置	20	第44図 壁穴住居跡(1)	66
第11図 発掘区全域図 第1遺構面	33	第45図 壁穴住居跡(2)	67
第12図 発掘区全域図 第2遺構面	34	第46図 壁穴住居跡(3)	68
第13図 発掘区全域分割図 第1遺構面(1)	35	第47図 壁穴住居跡(4)	69
第14図 発掘区全域分割図 第1遺構面(2)	36	第48図 壁穴住居跡(5)	70
第15図 発掘区全域分割図 第1遺構面(3)	37	第49図 標跡	71
第16図 発掘区全域分割図 第1遺構面(4)	38	第50図 挖立柱建物跡(1)	72
第17図 発掘区全域分割図 第1遺構面(5)	39	第51図 挖立柱建物跡(2)	73
第18図 発掘区全域分割図 第1遺構面(6)	40	第52図 挖立柱建物跡(3)	74
第19図 発掘区全域分割図 第1遺構面(7)	41	第53図 挖立柱建物跡(4)	75
第20図 発掘区全域分割図 第1遺構面(8)	42	第54図 ピット	76
第21図 発掘区全域分割図 第1遺構面(9)	43	第55図 古墳時代水田跡(1)	77
第22図 発掘区全域分割図 第1遺構面(10)	44	第56図 古墳時代水田跡(2)	78
第23図 発掘区全域分割図 第1遺構面(11)	45	第57図 古墳時代水田跡(3)	79
第24図 発掘区全域分割図 第1遺構面(12)	46	第58図 古墳時代水田跡(4)	80
第25図 発掘区全域分割図 第1遺構面(13)	47	第59図 古墳時代水田跡(5)	81
第26図 発掘区全域分割図 第1遺構面(14)	48	第60図 古代水田跡(1)	82
第27図 発掘区全域分割図 第1遺構面(15)	49	第61図 古代水田跡(2)	83
第28図 発掘区全域分割図 第1遺構面(16)	50	第62図 古代水田跡(3)	84
第29図 発掘区全域分割図 第1遺構面(17)	51	第63図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構(1)	85
第30図 発掘区全域分割図 第1遺構面(18)	52	第64図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構(2)	86
第31図 発掘区全域分割図 第1遺構面(19)	53	第65図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構(3)	87
第32図 発掘区全域分割図 第1遺構面(20)	54	第66図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構(4)	88
第33図 発掘区全域分割図 第1遺構面(21)	55	第67図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構(5)	89
第34図 発掘区全域分割図 第1遺構面(22)	56	第68図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構(6)	90

第69図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（7）	91	第106図 杭列（4）	128
第70図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（8）	92	第107図 杭列（5）	129
第71図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（9）	93	第108図 ナスピ形鋸の分類	168
第72図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（10）	94	第109図 円形曲物容器の底板と側板の結合方法	173
第73図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（11）	95	第110図 懸穴住居跡出土遺物（1）	204
第74図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（12）	96	第111図 懸穴住居跡出土遺物（2）、櫛跡出土遺物、掘立 柱建物跡出土遺物（1）	205
第75図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（13）	97	第112図 掘立柱建物跡出土遺物（2）、ピット出土遺物	206
第76図 古代水田に開わる畦畔・溝状遺構（14）	98		
第77図 自然流路に付属する溝状遺構（1）	99	第113図 水田跡出土遺物（1）	207
第78図 自然流路に付属する溝状遺構（2）	100	第114図 水田跡出土遺物（2）	208
第79図 自然流路に付属する溝状遺構（3）	101	第115図 水田跡出土遺物（3）	209
第80図 自然流路に付属する溝状遺構（4）	102	第116図 水田跡出土遺物（4）	210
第81図 自然流路に付属する溝状遺構（5）	103	第117図 水田跡出土遺物（5）	211
第82図 自然流路に付属する溝状遺構（6）	104	第118図 水田跡出土遺物（6）	212
第83図 自然流路に付属する溝状遺構（7）	105	第119図 水田跡出土遺物（7）、畦畔出土遺物（1）	213
第84図 その他の溝状遺構（1）	106	第120図 畦畔出土遺物（2）	214
第85図 その他の溝状遺構（2）	107	第121図 畦畔出土遺物（3）、溝状遺構出土遺物（1）	215
第86図 その他の溝状遺構（3）	108	第122図 溝状遺構出土遺物（2）	216
第87図 その他の溝状遺構（4）	109	第123図 溝状遺構出土遺物（3）	217
第88図 その他の溝状遺構（5）	110	第124図 溝状遺構出土遺物（4）	218
第89図 その他の溝状遺構（6）	111	第125図 溝状遺構出土遺物（5）	219
第90図 その他の溝状遺構（7）	112	第126図 溝状遺構出土遺物（6）	220
第91図 その他の溝状遺構（8）	113	第127図 溝状遺構出土遺物（7）	221
第92図 その他の溝状遺構（9）	114	第128図 溝状遺構出土遺物（8）	222
第93図 その他の溝状遺構（10）	115	第129図 溝状遺構出土遺物（9）	223
第94図 その他の溝状遺構（11）	116	第130図 溝状遺構出土遺物（10）	224
第95図 水制造構	117	第131図 溝状遺構出土遺物（11）	225
第96図 遺物集積	118	第132図 溝状遺構出土遺物（12）	226
第97図 土坑（1）	119	第133図 溝状遺構出土遺物（13）	227
第98図 土坑（2）	120	第134図 溝状遺構出土遺物（14）	228
第99図 土坑（3）	121	第135図 溝状遺構出土遺物（15）	229
第100図 土坑（4）	122	第136図 溝状遺構出土遺物（16）	230
第101図 土坑（5）	123	第137図 溝状遺構出土遺物（17）	231
第102図 不明遺構	124	第138図 溝状遺構出土遺物（18）	232
第103図 杭列（1）	125	第139図 溝状遺構出土遺物（19）	233
第104図 杭列（2）	126		
第105図 杭列（3）	127		

第140図 構状遺構出土遺物 (20)	234	第174図 包含層出土土器類 (19)	268
第141図 構状遺構出土遺物 (21)	235	第175図 包含層出土土器類 (20)	269
第142図 構状遺構出土遺物 (22)	236	第176図 包含層出土土器類 (21)	270
第143図 構状遺構出土遺物 (23)	237	第177図 包含層出土土器類 (22)	271
第144図 構状遺構出土遺物 (24)	238	第178図 包含層出土土器類 (23)	272
第145図 構状遺構出土遺物 (25)	239	第179図 包含層出土木器類 (1)	273
第146図 構状遺構出土遺物 (26)	240	第180図 包含層出土木器類 (2)	274
第147図 構状遺構出土遺物(27)、自然流路跡出土遺物(1)	241	第181図 包含層出土木器類 (3)	275
第148図 自然流路跡出土遺物 (2)	242	第182図 包含層出土木器類 (4)	276
第149図 自然流路跡出土遺物 (3)	243	第183図 包含層出土木器類 (5)	277
第150図 自然流路跡出土遺物 (4)	244	第184図 包含層出土木器類 (6)	278
第151図 自然流路跡出土遺物 (5)	245	第185図 包含層出土木器類 (7)	279
第152図 自然流路跡出土遺物 (6)	246	第186図 包含層出土木器類 (8)	280
第153図 自然流路跡出土遺物 (7)、木制遺構出土遺物、 遺物集積出土遺物 (1)	247	第187図 包含層出土木器類 (9)	281
第154図 遺物集積出土遺物 (2)、土坑出土遺物 (1)	248	第188図 包含層出土木器類 (10)	282
第155図 土坑出土遺物 (2)、不明遺構出土遺物	249	第189図 包含層出土木器類 (11)	283
第156図 包含層出土土器類 (1)	250	第190図 包含層出土木器類 (12)	284
第157図 包含層出土土器類 (2)	251	第191図 包含層出土木器類 (13)	285
第158図 包含層出土土器類 (3)	252	第192図 包含層出土木器類 (14)	286
第159図 包含層出土土器類 (4)	253	第193図 包含層出土木器類 (15)	287
第160図 包含層出土土器類 (5)	254	第194図 包含層出土木器類 (16)	288
第161図 包含層出土土器類 (6)	255	第195図 包含層出土木器類 (17)	289
第162図 包含層出土土器類 (7)	256	第196図 包含層出土木器類 (18)	290
第163図 包含層出土土器類 (8)	257	第197図 包含層出土木器類 (19)	291
第164図 包含層出土土器類 (9)	258	第198図 包含層出土木器類 (20)	292
第165図 包含層出土土器類 (10)	259	第199図 包含層出土木器類 (21)	293
第166図 包含層出土土器類 (11)	260	第200図 包含層出土木器類 (22)	294
第167図 包含層出土土器類 (12)	261	第201図 包含層出土木器類 (23)	295
第168図 包含層出土土器類 (13)	262	第202図 包含層出土木器類 (24)	296
第169図 包含層出土土器類 (14)	263	第203図 包含層出土木器類 (25)	297
第170図 包含層出土土器類 (15)	264	第204図 包含層出土木器類 (26)	298
第171図 包含層出土土器類 (16)	265	第205図 包含層出土木器類 (27)	299
第172図 包含層出土土器類 (17)	266	第206図 包含層出土木器類 (28)	300
第173図 包含層出土土器類 (18)	267	第207図 包含層出土木器類 (29)	301
		第208図 包含層出土木器類 (30)	302
		第209図 包含層出土木器類 (31)	303
		第210図 包含層出土木器類 (32)	304

第211図 包含層出土木器類（33）	305	第220図 包含層出土石器類（3）	314
第212図 包含層出土木器類（34）	306	第221図 包含層出土石器類（4）	315
第213図 包含層出土木器類（35）	307	第222図 包含層出土石器類（5）	316
第214図 包含層出土木器類（36）	308	第223図 包含層出土石器類（6）	317
第215図 包含層出土木器類（37）	309	第224図 包含層出土石器類（7）	318
第216図 包含層出土木器類（38）	310	第225図 包含層出土石器類（8）	319
第217図 包含層出土木器類（39）	311	第226図 包含層出土石器類（9）	320
第218図 包含層出土石器類（1）	312	第227図 包含層出土石器類（10）	321
第219図 包含層出土石器類（2）	313	第228図 包含層出土金属器類・鐵治闘連遺物・その他	322

表目次

第1表 調査体制	5	第20表 遺構一覧表（13）	142
第2表 周辺の遺跡一覧	8	第21表 遺構一覧表（14）	143
第3表 本書で用いる遺構記号	15	第22表 遺構一覧表（15）	144
第4表 検出遺構集計	16	第23表 転用窯の器種と墨付着部位	158
第5表 出土遺物枚数集計	18	第24表 墨書き土器の器種と墨書き部位	160
第6表 水田面積一覧	24	第25表 ヘラ書き土器の器種とヘラ書き部位	160
第7表 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構の出土遺物組成	26	第26表 木器類の分類	165
第8表 遺構一覧表（1）	130	第27表 木取りの分類	167
第9表 遺構一覧表（2）	131	第28表 馬形の属性一覧	175
第10表 遺構一覧表（3）	132	第29表 連續下駄の属性一覧	177
第11表 遺構一覧表（4）	133	第30表 着出土地点一覧	179
第12表 遺構一覧表（5）	134	第31表 火付け木出土地点一覧	180
第13表 遺構一覧表（6）	135	第32表 火付け木の属性一覧	181
第14表 遺構一覧表（7）	136	第33表 杭出土地点一覧	186
第15表 遺構一覧表（8）	137	第34表 石器類の器種別石材一覧	189
第16表 遺構一覧表（9）	138	第35表 石器類出土地点一覧（1）	190
第17表 遺構一覧表（10）	139	第36表 石器類出土地点一覧（2）	191
第18表 遺構一覧表（11）	140	第37表 石器類出土地点一覧（3）	192
第19表 遺構一覧表（12）	141	第38表 石器類出土地点一覧（4）	193

第1章 調査の経緯

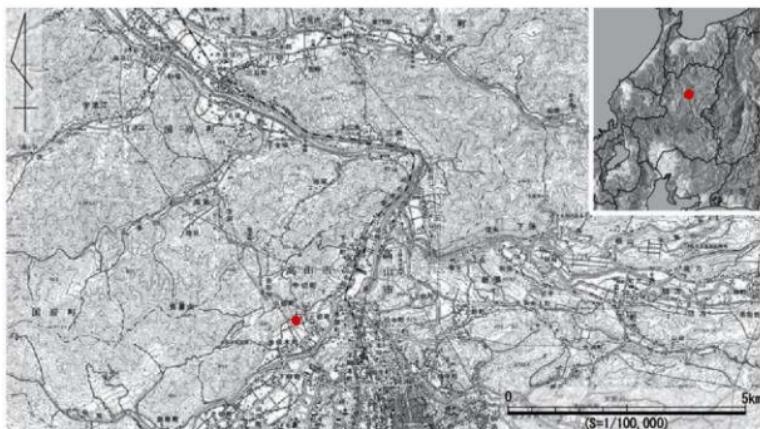
第1節 調査に至る経緯

野内遺跡は高山市上切町に所在する（第1図）。今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道の建設に伴い実施したものである。

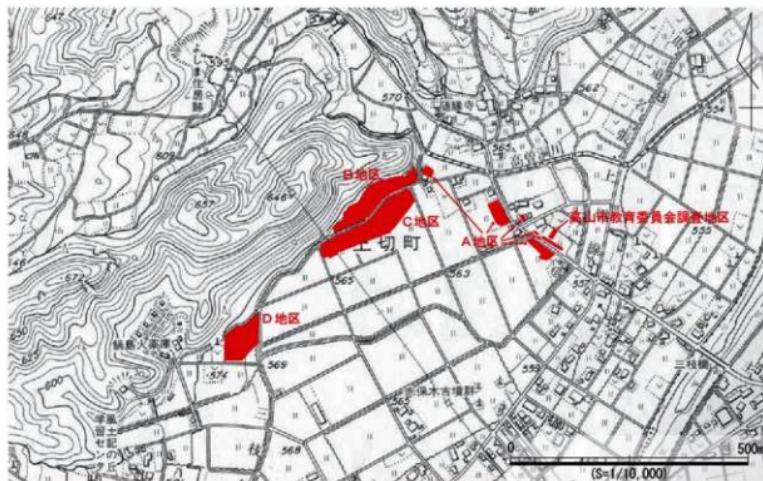
建設省（現：国土交通省）中部地方整備局高山国道事務所は、高山市を中心とする市街地の交通渋滞の緩和（バイパス効果）、地場産業の振興や観光リゾートとしての活性化を目的とし、平成4年から中部縦貫自動車道の一部を構成する高山清見道路（高山市清見町夏厩から高山市丹生川町坊方までを結ぶ24.7kmの道路）の5・6工区の事業を開始した。野内遺跡は、この事業に伴って実施した試掘・確認調査により、新たに発見・登録された遺跡である。試掘・確認調査は、岐阜県から委託を受けた財團法人岐阜県文化財保護センター（現：岐阜県文化財保護センター）が平成12年度と13年度に実施し、縄文時代から中世までの遺構・遺物を確認した。その結果を受けて、岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において発掘調査の必要な範囲を検討し、全体で23,900m²の発掘調査が必要であると判断するに至った。遺跡は広範囲におよぶため、A～Dの4地区に分けて調査を行うこととした。

発掘調査は、財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが文化財保護法第92条に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出について（平成17年4月5日付け財文保第6号、平成18年3月24日付け財文保第6号の3）を岐阜県教育委員会に提出し、岐阜県教育委員会より埋蔵文化財の発掘調査についての通知（平成17年4月18日付け教文第38号、平成18年3月31日付け教文第38号の8）を受けて実施した。

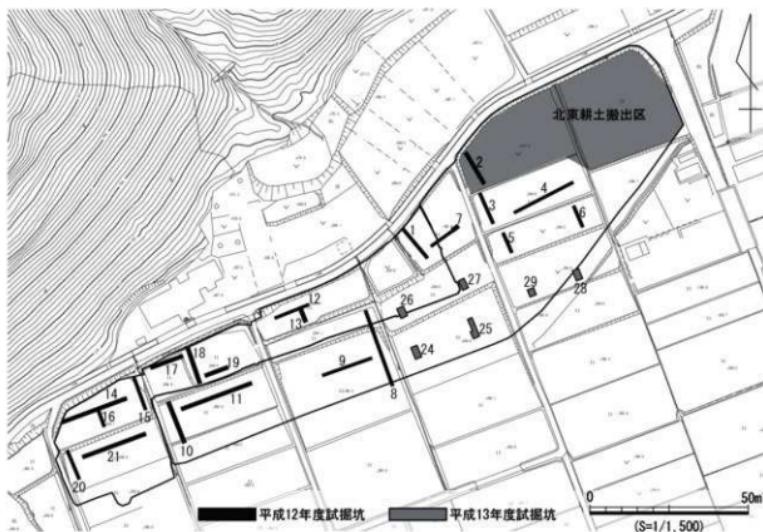
本書で報告するのは、平成17年度と18年度に実施した野内遺跡C地区9,000m²分についての発掘調査成果の記録である。



第1図 野内遺跡の位置



第2図 野外遺跡の発掘区配置図



第3図 試掘坑の位置

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

野内遺跡C地区の発掘調査は、平成17年度と18年度を行った。平成14年度のB地区の調査開始時に遺跡全体の調査方針を定め、その後、残りの各地区でも概ね踏襲しているが、各地区的実情に合わせ、適宜、修正を加えたため、年度により異なる部分もある。

グリッドの設定

従来の調査成果との整合性を保つため、A～D地区すべてに共通した1辺10mのグリッドを設定した。グリッド名は、東から西に算用数字、北から南にカタカナを割り当て、その組み合わせにより「3カ」「2タ」のように呼称した。座標については日本測地系第VII系を用いて、B地区の北東にあたるX=18, 140、Y=5, 990を原点とし、C地区においてもこれを踏襲した。ただし、測地法改正に伴って新たに世界測地系が基本となったことを考慮し、第4図に世界測地系座標を記してある。なお、遺物の取り上げ等においては、10mグリッドを四分割した一辺5mの小グリッドを設定し、北東区=N E、北西区=N W、南東区=S E、南西区=S Wの細分記号を添えた。

表土掘削

表土掘削は、バックホウによる重機掘削を原則とした。

包含層掘削・遺構検出・遺構掘削

遺物包含層（以下、適宜「包含層」と略称）の掘削、及び遺構検出・遺構掘削は、ジョレン・草削りなどを用いてすべて人力で行った。遺構掘削では、遺物の出土状況等の記録を作成しつつ、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。さらに、必要に応じて遺構断ち割り調査を実施した。

検出した遺構には、検出順に通番の登録番号を与えた。平成17年度は1番から、平成18年度は1201番から番号を付した。本書では、この番号に遺構の性格を示すアルファベット記号を組み合わせ、各遺構を「70 S D」のように呼んでいる。

遺構実測

遺構平面図の作成は、三次元測量・図化システムにより行ったが、断面図は手測りにより実施した。図面の縮尺は20分の1を基本としつつ、実測対象に応じてふさわしい縮尺を選択した。

写真撮影

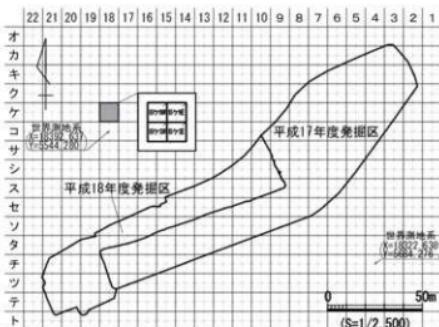
記録写真は、一眼レフ35mmカメラ（リバーサル、モノクロ）、中判カメラ（リバーサル、モノクロ）、デジタルカメラで撮影した。遺跡景観写真は、ラジコンヘリコプターによる空中写真による。

2 調査経緯

現地での調査経過は以下のとおりである。

平成17年度

平成17年度の調査は、平成17年4月18日に



第4図 グリッドの設定

4 第1章 調査の経緯

開始し、平成17年11月22日に終了した。

第1～3週(4/18～5/6)

18日（月）調査開始。重機による表土掘削。グリッド杭打ち。

第4～5週(5/9～5/20)

10日（火）作業員作業開始。

包含層掘削。写真撮影。グリッド杭打ち。発掘区の壁面清掃。

第6～12週(5/23～7/8)

遺物包含層掘削。暗渠掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。写真撮影。

第13～15週(7/11～7/29)

包含層掘削。暗渠掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物出土状況図実測。写真撮影。

15日（金）文化映画新社、現場記録映像撮影。

27日（水）「タイムスリップ探検隊」の実施（参加者：親子21組42名）。

第16～18週(8/1～8/19)

包含層掘削。暗渠掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物出土状況図実測。写真撮影。

8日（月）岐阜県高等学校文化連盟地域研究部会（高校生15名、引率教諭4名）発掘体験。

12日（金）飛騨市・高山市中学校社会科研究会研修（30名）。

第19～21週(8/22～9/9)

包含層掘削。暗渠掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物出土状況図実測。写真撮影。

第22～24週(9/12～9/30)

包含層掘削。暗渠掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物出土状況図実測。写真撮影。

12日（月）三重大学名誉教授八賀晋氏による現場指導。

27日（火）ラジコンヘリコプターによる景観撮影。

第25～30週(10/3～11/11)

包含層掘削。暗渠掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物出土状況図実測。写真撮影。

6日（木）国立歴史民俗博物館教授広瀬和雄氏による現場指導。

13日（木）株式会社パレオ・ラボによる自然科学分析試料採取。

22日（土）現地説明会開催（参加者154名）。

第31～32週(11/14～11/22)

遺構掘削。遺構実測。写真撮影。次年度発掘区の表土掘削。

18日（金）作業員作業終了。

22日（火）現場撤収。

平成18年度

平成18年度の発掘調査は、平成18年4月24日に開始し、平成18年9月26日に終了した。

第1～3週(5/8～5/26)

包含層掘削。トレーナー掘削。遺構検出。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

第4～6週(5/29～6/16)

包含層掘削。トレーナー掘削。遺構検出。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

第7週（6/19～6/23）

包含層掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

21日（水）南山大学名誉教授伊藤秋男氏による現場指導。

第8週（6/26～6/29）

遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

第9～10週（7/3～7/14）

包含層掘削。遺構検出。遺構掘削。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

第11週（7/18～7/21）

包含層掘削。遺物取り上げ。

第12～13週（7/24～8/3）

包含層掘削。遺構掘削。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

26日（水）三重大学名誉教授八賀晋氏による現場指導。

27日（木）「タイムスリップ探検隊」の実施（参加者：親子26組53名）。

31日（月）岐阜市立長良西小学校児童2名、保護者1名現場見学。

第14～17週（8/7～9/9）

包含層掘削。遺構掘削。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

11日（金）飛騨市立古川中学校生徒2名、保護者1名職場体験。

24日（木）ラジコンヘリコプターによる景観写真撮影。

9日（土）現地説明会開催（参加者115名）。

第18～21週（9/11～9/26）

遺構掘削。遺構実測。遺物取り上げ。写真撮影。

26日（火）発掘調査作業終了。

3 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は、第1表のとおりである。平成20年度まで財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターとして業務を実施していたが、平成21年度に県教育機関として岐阜県文化財保護センターが設立された。整理作業は、当センター飛騨出張所（岐阜県文化財保護センター設立に伴い平成21年4月からは飛騨駐在事務所、高山市国府町名張字峰1425-1）において行った。

第1表 調査体制

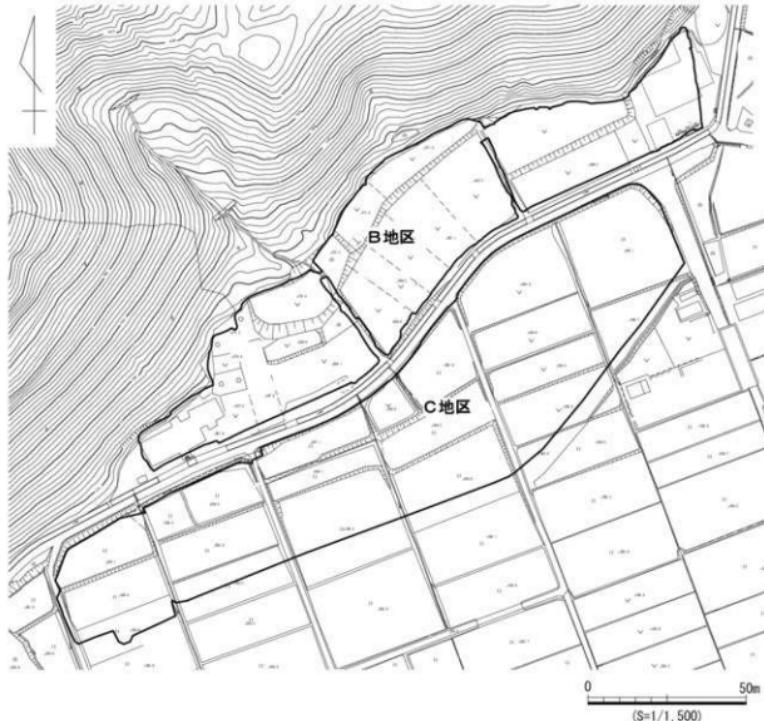
職名	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
理事長（H20まで）	日比治男	高木正弘	—	庄瀬利和	—	—	—
副理事長（H20まで）	高橋宏之 平光明彦	高橋宏之 中島正和 伊藤克己	伊藤克己 岩田信信	伊藤克己 吉田康雄	—	—	—
センター所長 (H20まで常務理事兼センター長)	田口久之	田口久之	梅村恒男	茂藤 満	高橋照美	高橋照美	高橋照美
巡回課長（H20まで経営課長）	川原豊敏	茂藤 智	加藤美好	加藤美好	長畠忠司	長畠忠司	村瀬誠二
調査課長（H20まで調査部長）	川原 誠	川原 誠	北村厚史	北村厚史	小谷和彦	小谷和彦	小谷和彦
飛騨調査担当チーフ（H20まで飛騨出張所長）	小谷和彦	谷口陽一	谷口陽一	森下茂司	森下茂司	野々田光則	野々田光則
発掘調査担当職員	大宮次郎 澤村一郎 長谷川幸志 瀧浦 伸	相馬重典 澤村雄一郎	—	—	—	—	—
整理担当職員	—	柏木賢一	小瀬忠司	小瀬忠司	小瀬忠司	小瀬忠司	小瀬忠司
整理作業員	上田里香 島田教美 島中裕子	堀田祥子 宮下真苗 村田明美	清田由美子 竹内真子 梶山美翠子	瀬戸奈美 竹内真子 梶山美翠子	中澤律子 畠中由依	畠中由依	畠中由依

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

野内遺跡C地区は高山盆地の北西端付近に位置し、見量山から東に連なる丘陵の南側に広がる緩斜面に立地する。発掘区内では北が高く南が低い緩斜面となっているが、発掘区が東西に長い形状であるため、中央北端にみられる高まりの部分を除けば、比高差は1m台にとどまる。

第5図に示したように、発掘区の北方には、すでに報告書を刊行した野内遺跡B地区が隣接している。B地区とC地区は地質学的特性の多くを共有する。第6図に遺跡周辺の地質概要を示した。見量山山系の山々は濃飛流紋岩から形成される。濃飛流紋岩は、主に溶結凝灰岩からなる火碎石堆積物であるとされる。野内遺跡B地区とC地区は、北に隣接する濃飛流紋岩からなる丘陵が崩落してできた崩積層ないし崖錐堆積層上に立地する。そのため、遺跡内でみられる自然堆積層の多くは濃飛流紋岩



第5図 野内遺跡B地区・C地区的立地

に由来する褐色系の色調を基本とするものの、それらの色相・明度・彩度には大きな幅がみられ、加えて粒径や含有物も一定していない。これは、小規模な崩積と土壤化を繰り返したり、あるいは上方から土壤化した層が流れ込んだりしたためと推定される。また、崩積地の南側には、川上川の氾濫により形成された河岸段丘が広がる。遺跡内においても、上記の崩積層ないし崖錐堆積層の下などに、河川に由来するとみられる堆積層が認められる。ただし、濃飛流紋岩は川上川の川原疊にも多くみられることから、崩積層ないし崖錐堆積層との判別は必ずしも容易ではないようである¹⁾。

以上のように地質学的には大きな差異のない両地区ではあるが、調査前における両地区的土地利用状況には大きな違いが認められた。B地区では多くが畑地であったのに対し、C地区では水田が大部分を占める。このことが端的に示すとおり、水はけの点で両地区は対照的である。すなわち、より標高の高いB地区では水はけが比較的良好であるのに対し、そこから一段下がったC地区は常に湿気を帯びた土地となっている。これがB地区

とC地区的遺跡としての性格を分ける決定的要因となったことは想像に難くない。居住に適したB地区で集落跡を検出した一方で、本書で報告するC地区的検出構造が水田跡を主体とするものとなったのは偶然ではない。C地区的出土遺物に飛騨地域最多となる木器類が含まれるのも、そうした有機物の残りやすい環境によるものであることは多言を要しない。

最後に歴史的環境との関連をも視野に入れて述べれば、遺跡の北方には北西方向に延びる寿美嶺越えの街道（通称「瓜巣街道」）が存在し、これが高山盆地と国府・古川盆地とを結ぶ最短ルートとして古くから使われたことは、野内遺跡とその周辺地域の置かれた環境の中でも特に強調すべき特性である。野内遺跡周辺が遺跡密集地域の様相を呈するのは、そうした俯瞰的視野で見た場合の立地の好条件が有利に作用した結果とみることができる。



第6図 遺跡周辺の地質
(上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』を一部改変)

第2章 第1節 注

1) 遺跡の地質学的特性については、上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』第1章「上枝村の風土」(下畠五夫氏執筆分)を参考した。

第2節 歴史的環境

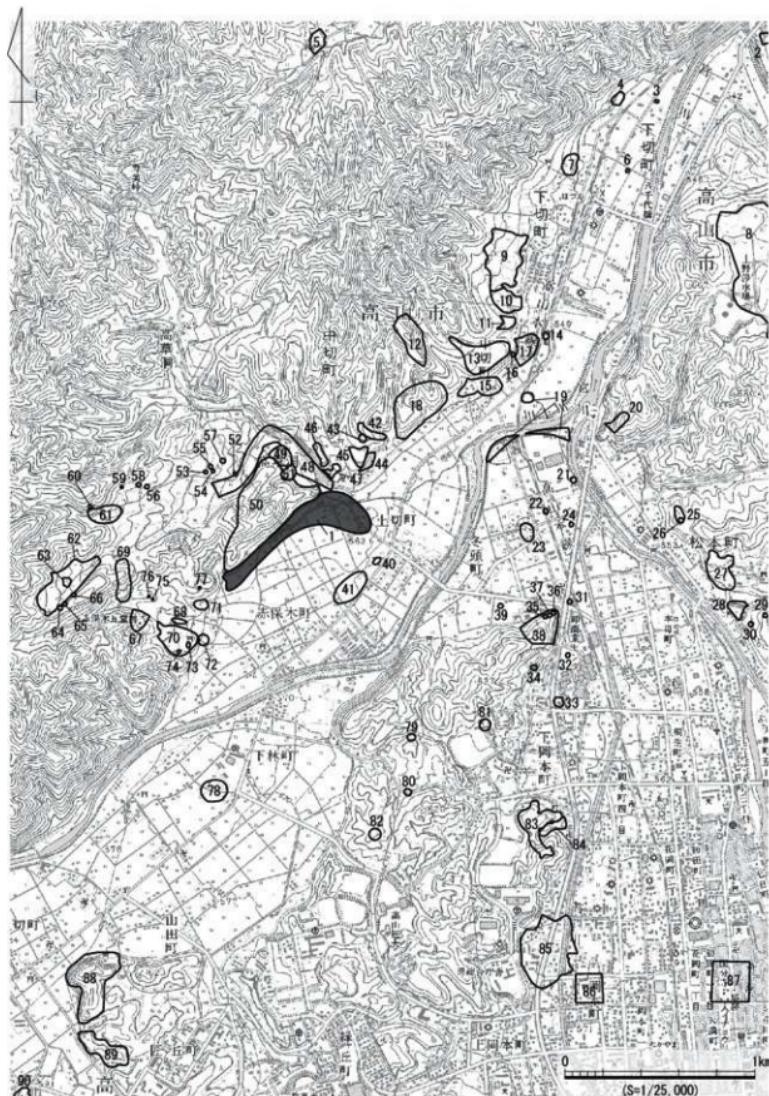
野内遺跡周辺には、川上川左岸の山麓を中心に多数の遺跡が分布している¹⁾。当遺跡と関わりの深い弥生時代から古代にかけての遺跡のうち、調査内容が報告されているものを中心概観する。

飛騨地域においては、近年、ようやく弥生時代の遺跡の調査事例が増えつつある。繩文時代から古墳時代にかけての集落跡である赤保木遺跡（70）は、平成3年度に高山市教育委員会が、平成16年度に当センターが調査を実施した。弥生時代については、中期の住居跡を検出したほか、内垣内式横羽状文甕や櫛描き波状文を施す信州系の土器が出土している²⁾。平成13年度と19年度に当センターが調査を実施したウバガ平遺跡（49）では、中期後半の住居跡・土坑などから、内垣内式土器の横羽状文甕や栗林式土器の壺などが出土した³⁾。当遺跡D地区では、平成16年度と17年度に当センターが実施した調査において、後期の住居跡を検出している⁴⁾。当遺跡に隣接する三枝城跡（50）では、平成20年度に実施した調査において前期の柴山出土系土器の壺が出土し、注目を集めた⁵⁾。

古墳時代の遺跡の報告例が多い。集落跡からみてゆくと、上記の赤保木遺跡（70）では前期から後期前半にかけての住居跡が6基確認されている。また、上記のウバガ平遺跡（49）では、前期末頃と

第2表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	野内遺跡	集落跡	縄文～中世	46	猪崎寺裏A地点遺跡	散布地	縄文
2	三川原合遺跡	散布地	縄文	47	猪崎寺裏B地点遺跡	散布地	奈良、平安
3	の場遺跡	散布地	古代	48	丘島B地点遺跡	散布地	奈良
4	赤吉塙周辺跡	今社跡	縄文、室町	49	ウバガ平遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、古代
5	後洞遺跡	散布地	縄文	50	ウバガ平1～4号古墳	古墳	古墳
6	下切古墳	古墳	古墳	51	三枝城跡	城郭跡	中世
7	下切芦屋遺跡	散布地	古墳	52	与島C地点遺跡	散布地	古代
8	松本上野遺跡	散布地	縄文	53	与島1号古墳	古墳	古墳
9	下切遺跡	散布地	縄文、弥生	54	与島3号古墳	古墳	近現代
10	宮野日高地遺跡	散布地	縄文、弥生	55	与島4号古墳	古墳	古墳
11	中切宮山遺跡	散布地	縄文、古墳	56	与島5号古墳	古墳	古墳
12	中切城跡	城郭跡	中世	57	与島6号古墳	古墳	古墳
13	中切上野遺跡	散布地	縄文、奈良	58	よしま1号古窯跡	生産遺跡	平安
14	中切上野古群	古墳	古墳	59	よしま2号古窯跡	生産遺跡	平安
15	中切王保古墳	古墳	古墳	60	よしま3号古窯跡	生産遺跡	平安
16	中切遺跡	古墳	縄文、弥生、奈良	61	与島八地丘遺跡	散布地	縄文
17	中切日向遺跡	散布地	縄文、古代	62	上切平野古墳群	古墳	古墳
18	中切前平遺跡	城郭跡	中世	63	平野7号古窯跡	散布地	縄文
19	四十九院寺	寺社跡	弥生、古代	64	平野1号古窯跡	生産遺跡	奈良
20	後島古墳	古墳	古墳	65	平野2号古窯跡	生産遺跡	平安
21	上ヶ古墳	古墳	古墳	66	平野3号古窯跡	生産遺跡	平安
22	東田古墳	古墳	古墳	67	赤保木1～6号古窯跡	生産遺跡	奈良、平安
23	冬頭遺跡	散布地	縄文、弥生	68	赤保木7号古窯跡	生産遺跡	平安
24	流れ田古墳	古墳	古墳	69	赤保木8～12号古窯跡	生産遺跡	奈良、平安
25	前平山棲遺跡	散布地	縄文、弥生	70	赤保木遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳
26	前平古墳	古墳	古墳	71	赤保木木原ノ遺跡	散布地	縄文、江戸
27	前平洞跡	散布地	縄文、弥生	72	成田正利の墓	墓地	近世
28	上塚遺跡	散布地	縄文	73	ミヨガ平1号古墳	古墳	古墳
29	牧ヶ洞古墳	古墳	古墳	74	ミヨガ平2号古墳	古墳	古墳
30	馬場古墳	古墳	古墳	75	下やせ尾1号古墳	古墳	古墳
31	冬頭山城古墳	古墳	古墳	76	下やせ尾2号古墳	古墳	古墳
32	下岡本遺跡	散布地	縄文、奈良、平安	77	真言星敷葛古墳	古墳	古墳
33	下岡本(漁木)遺跡	散布地	縄文、弥生、平安	78	下林遺跡	散布地	弥生
34	冬頭竹田の遺跡	散布地	平安	79	竹ヶ洞A地点遺跡	散布地	奈良、平安
35	冬頭山城1号古墳	古墳	古墳	80	竹ヶ洞B地点遺跡	散布地	奈良、平安
36	冬頭山城2号古墳	古墳	古墳	81	中山古窯跡	生産遺跡	平安
37	冬頭山城1号横穴	横穴墓	古墳	82	中山御文遺跡	集落跡	縄文
38	冬頭城跡	城郭跡	室町	83	中山城跡	城郭跡	室町
39	大洞塙古墳	古墳	古墳	84	下岡本神田遺跡	散布地	平安
40	ぼた上遺跡	集落跡	奈良	85	古船遺跡	散布地	平安
41	赤保木木原上1～7号古墳	古墳	古墳	86	飛騨国分尼寺跡	寺社跡	古代
42	寺尾古墳群	古墳	古墳	87	飛騨国分寺跡	寺社跡	奈良
43	上切寺尾6号古墳	古墳	古墳	88	山田城跡	城郭跡	室町
44	上切(桜木)遺跡	散布地	平安	89	弘洞遺跡	散布地	縄文、弥生
45	日経遺跡	散布地	縄文、古墳、奈良	90	打越遺跡	散布地	縄文、弥生



第7図 周辺の遺跡分布
(国土地理院発行「飛驒古川」「三日町」「町方」「高山」をもとに作成)

後期の住居跡を検出した。また、当遺跡では、東端のA地区^①で中期の大規模な集落跡を確認し、中央のB地区^②でも初頭から終末期にかけての断続的な居住の痕跡を確認している。古墳では、まず中期に属するものとして冬頭王塚古墳^③(31)、赤保木ぼた上5号古墳^④(41)、中切王塚古墳^⑤(14)、冬頭山崎2号古墳^⑥(36)がある。高山盆地所在の古墳のうち中期に遡るのはこれら4基ですべてであるが、それらのどれもが当遺跡から1.5km以内に位置していることは注目してよいであろう。後期の古墳群は、ウバガ平1～4号古墳^⑦(49)、中切上野古墳群^⑧(13)、寺尾古墳群^⑨(42)、与島古墳群^⑩(52～57)、下やせ尾1・2号古墳^⑪(75・76)など、当遺跡周辺の川上川左岸一帯に集中する^⑫。

古代の遺跡も多い。発掘調査の行われた遺跡としては、赤保木1～6号古窯跡^⑬(67)がよく知られている。昭和48年度に市教育委員会によって実施された発掘調査により、1～4号古窯が飛驒国分寺の瓦を焼成した瓦窯と判明した^⑭。当遺跡の周辺には、よしま1～3号古窯跡^⑮(58～60)、赤保木8号古窯跡^⑯(69)など、灰釉陶器窯跡も分布する。古窯跡以外では、ウバガ平遺跡^⑰(49)において、平安時代頃の土器焼成坑とみられる遺構2基を確認している。また、三枝城跡^⑱(50)で確認された、平安時代頃の山林寺院跡とみられる平場群は、当地域では稀な事例として特筆される。当遺跡B地区では、平安時代前半の住居跡と鍛冶工房跡を多数確認したほか、墨書き器・硯・腰帶具・綠釉陶器といった公的施設に関わる遺物が出土した。平安時代の当地域における開発の様相を検証し得る貴重な事例である。当遺跡D地区では、奈良時代から平安時代にかけての水田跡を検出しておらず、本書で報告するC地区の水田跡との関連性が注目される。

第2章 第2節 注

- 1) 第2表及び第7図は、岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』をもとに作成した。ただし、公刊後に明らかとなつた情報を盛り込むための改訂を加えている。
- 2) 赤保木遺跡の平成3年度調査については高山市教育委員会1993『前平山棲遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』、平成16年度調査については財團法人岐阜県教育文化財保護センター2007『赤保木遺跡』に詳しい。
- 3) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』。
- 4) 財團法人岐阜県教育文化財團文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』。
- 5) 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』。
- 6) 財團法人岐阜県教育文化財團文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』。
- 7) 財團法人岐阜県教育文化財團文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』。
- 8) 高山市教育委員会1971『冬頭王塚発掘調査報告』。
- 9) 高山市教育委員会1995『高山市内遺跡発掘調査報告書』。
- 10) 田中彰2001『飛驒地域の古墳』八賀晋編『美濃・飛驒の古墳とその社会』同成社。
- 11) 財團法人岐阜県文化財保護センター2000『冬頭城跡・冬頭山崎1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山崎1号横穴』。
- 12) 飛驒地域の古墳分布状況については、以下の文献に記述がある。
 - ①上嶋善治2004『古代の飛驒における古墳と集落に関する一考察』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会編『かにかくに八賀晋先生古稀記念論文集』三星出版
 - ②田中彰2001『飛驒地域の古墳』八賀晋編『美濃・飛驒の古墳とその社会』同成社
- 13) 高山市教育委員会1975『飛驒国分寺瓦窯発掘調査報告』。

第3章 調査の成果

第1節 層序と遺構面

1 基本層序

野内遺跡C地区の大部分は、調査前には水田であった。そのため、耕作に伴う擾拌を受けてはいたものの、大規模な人為的地形変化はみられず、層序は概ね安定している。ここで示す基本層序は、隣接する野内遺跡B地区における解釈を概ね踏襲したものである。ただし、当発掘区では水田跡が広範囲に広がるため、I・II・III層の性格は異なっている。上から順に以下のとおりとなる（第8図）。

I層：表土・盛土・現代水田耕作土などを一括してI層とした。縄文時代から近世に至る遺物を含むほか、近代以降の製品も含む。

II層：主に現代水田より前の旧耕作土とみられる。縄文時代から近世に至る遺物を含む。

III層：主に古墳時代から中世にかけての水田耕作土とみられる。II層との区分は必ずしも明確ではない。縄文時代から近世に至る遺物を含み、包含遺物の点でもII層との間に大きな差異は認められない。

IV層：発掘区の北に隣接する丘陵が崩落してできた崩積層ないし崖錐堆積層である。小規模な崩積と土壤化を繰り返したり、あるいは上方から土壤化した層が流れ込んだりして形成されたとみられ。色調・粒径・含有物などは一定していない。擾拌を受けるなどの例外的ケースを除き、遺物を含まない。地山。

V層：IV層よりさらに下に認められる無遺物層を一括する。ただし、IV層との区分は必ずしも明確ではない。IV層より粘性が高く、しまりが強いことが多いが、やはり色調・粒径・含有物などに大きなばらつきが認められる。主に河川に由来する堆積層とみられるものの、成因は一樣ではないようである。地山。

なお、層内での相対的な上下を示す必要がある場合には、上から順に「IIIa」、「IIIb」のように、アルファベットを付して呼び分けることも行っている。

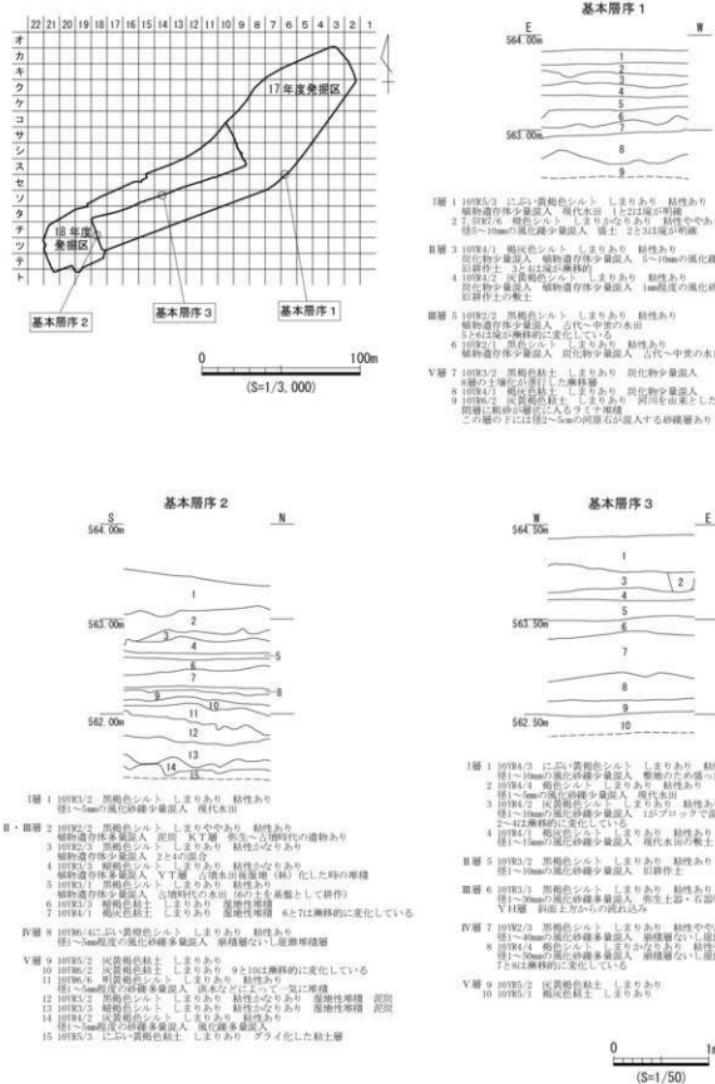
発掘区内に部分的に現われる層について補足しておく。これらは発掘調査時に、基本層序II層ないしIII層の一部に当たる層を便宜的に呼び分けたものである。名称と実態とが符合するとは限らないものの、ここからは土層間の相対的な新旧関係など有意な情報を読み取ることができるため、本書でも踏襲する。

K T層：「古墳田圃」の意。発掘区西半、グリッド12列以西において広範囲にわたり現われる。

K T II層：KT層のうち、包含遺物や層序から古相を呈すると判断した部分を区別したもの。16ゾ・16タ・17ゾ・17タ・18タグリッドなどに現われる。

Y H層：「弥生遺物包含層」の意。ただし、含まれる遺物の大半はB地区集落跡からの流れ込み品とみられ、形成された時期が弥生時代に遡ることを意味するわけではない。グリッド10列以西、17列以東に現われる。

Y T層：「弥生田圃」の意。17年度発掘区のグリッド10列以西のほぼ全域に現われる。KT層・



第8図 基本層序

K T II層・Y H層より古い層である。形成時期が明確ではないが、弥生時代にまで遡るとは限らず、出土した木製農具の年代観からは、古墳時代に下る可能性が高いと判断される。

J H層：「縄文遺物包含層」の意。17チ・18タグリッドのみに現われる。含まれる遺物はB地区集落跡からの流れ込み品である。

K D T層：「古代田圃」の意。18年度発掘区のほぼ全域に現われるが、これは単に古代の遺物を含む層を便宜的にこう呼んだにすぎず、古代水田の検出範囲を示すものではない。

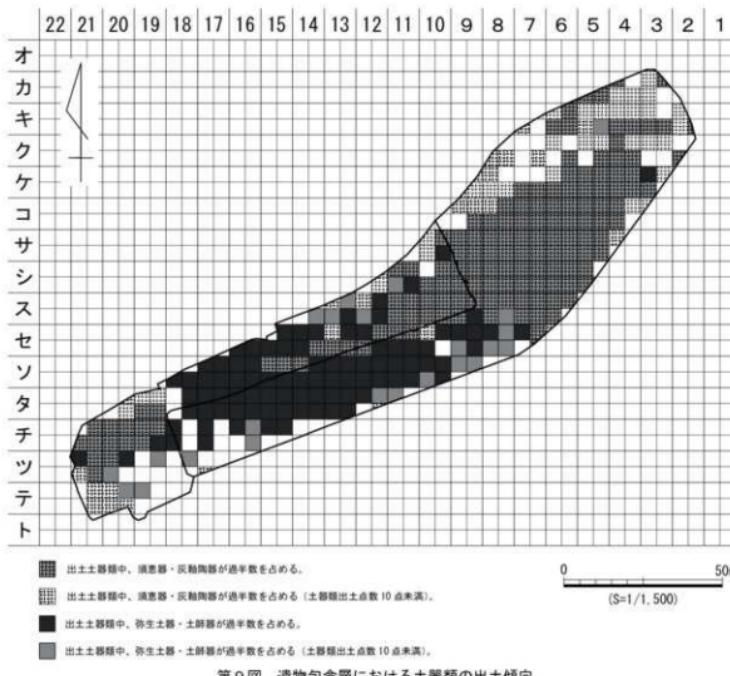
以上の各層のうち、主要なものを選んで試料を採取し、花粉化石群集の分析とプラント・オバール分析を実施した。分析の結果、II層・III層・K T層において、稲作の痕跡が検出されている。詳細は第4章を参照されたい。

2 遺物包含層について

野内遺跡C地区の北隣りに位置する野内遺跡B地区には、縄文時代から近世にかけての集落跡が広がる。野内遺跡C地区の大部分は居住域とはみなされない区域に属するため、本書で報告する出土遺物の多くは、B地区の集落からの流れ込み品ないし持ち込み品で占められるとみられる。次節から報告する遺構・遺物理解の手引きとともに、野内遺跡の全体像把握の一助とするため、ここであらかじめ、発掘区全域の遺物包含層の平面分布について提示しておきたい。

包含層出土遺物のうち、土器類を概観すると、発掘区北半と南半とで際立った相違が認められるに気付く。すなわち、グリッドで言えば、概ねス列以北では、古代、それも平安時代の須恵器と灰釉陶器が主体を占めるのに対し、セ列以南では、弥生土器や古墳時代初頭の土師器など、より古い時代の土器を多く含むようになる。発掘区全域の包含層における土器類の出土状況を5m四方の細分グリッドごとに調べて図示したものが、第9図である。出土土器類中、須恵器・灰釉陶器が過半数を占める区域と、弥生土器・土師器が過半数を占める区域とが、明確に分かれることが読み取れよう。申し添えれば、そうした包含層の偏在傾向は、検出遺構の帰属時代別の分布状況とも、ある程度、対応するものである。以下、本書では、便宜的にそれらを「須恵器・灰釉陶器集中区域」、「弥生土器・土師器集中区域」と呼ぶこととする。なお、北が高く南が低い立地のため、発掘区南半においては北半からの流れ込みとみなすべき遺物の出土量も少なくないものの、その逆はあまりみられないようである。

注目すべきは、そのような出土区域の偏りは、土器類のみならず木器類にも同様に認められるという点である。例を挙げれば、古墳時代までに特有の農具とされるナスピ形鋸には弥生土器・土師器集中区域で出土する傾向が認められる一方で、既往の出土例に照らして古代の遺物である可能性の高いと判断される杓子は、すべて須恵器・灰釉陶器集中区域で出土している。したがって、個体そのものから読み取れる情報のみでは年代判定の困難な木器についても、土器類の偏在傾向と付き合わせることにより、帰属時代推定の手掛かりを得ることができると予想される。本書で報告する木器類は、器種構成面で極めて多岐にわたる上に、帰属時代についても大きな幅を持つとみられるため、こうした手法は大いに活用すべきであると考える。この問題については、第5章において改めて取り上げることとする。



第9図 遺物包含層における土器類の出土傾向

3 遺構面について

17年度発掘区においては、可能な限り遺構面を細かく分ける方針を探ったため、部分的にではあるが計4面の遺構面を認定した。その一方で、18年度発掘区においては、すべての遺構を1面で検出すことができた。調査完了後に両年度の遺構平面図を合成するに当たり、整合性を図るために検討を行った結果、17年度発掘区の最上面が18年度発掘区第1遺構面に概ね対応し、さらに17年度発掘区遺構面は2面に統合することができるとして判断された。本書ではこの遺構面判定を踏襲しており、当発掘区全体の遺構面を2面にまとめている。第1遺構面は、包含層掘削後、最初に現われた遺構検出面を指す。その下層でさらに遺構を検出した場合に、その面を第2遺構面と呼んでいる。いずれの遺構面においても検出遺構の帰属時代は一様ではないため、第2遺構面検出遺構のすべてが第1遺構面検出遺構より古い時期に属するわけではないことに注意を要する。

基本層序に照合するなら、大部分の遺構の検出面はIV層上面であり、IV層が存在しない区域ではV層上面が検出面である。ただし、第1遺構面の遺構のうち、下層において第2遺構面を認定した区域に属するものについては、III層に包括される層の上面が検出面とみなされる。

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構の概要と報告方針

(1) 検出遺構の概要

まず、本書で用いる遺構記号と遺構番号について解説しておく。遺構記号については、平成22年に文化庁監修により刊行された『発掘調査のてびき』¹⁾において新たな標準が示されているが、本書では、発掘調査時に当センターで用いていた遺構記号を変更せずそのまま使用した。そのため、新標準には合致しないことをお断りしておく。個々の遺構の種別については、整理作業において遺構種別判定の見直しを行い、平成17年度調査分と18年度調査分とで隔絶が生じることのないよう配慮した。本書で用いる遺構記号を第3表に掲げる。

遺構番号についても、必要な編集作業を加えた上で、調査現場で与えた番号をそのまま使用している。遺構の種別ごとにそれぞれ1から番号を付けるのではなく、全遺構を通じて一連の番号としている。これは現場での方針をそのまま引き継いだものであるが、結果として文化庁が前掲書で示した遺構番号の付け方に沿う方式ともなっている。記号と番号の先後についても、現場での方針のとおり、番号が先で記号が後としてある。以上の方針により、個々の遺構は「1220 S B」のように呼ばれることとなるが、これは「1220番の遺構、種別は S B」の意味であって、「1220番目の S B」を意味するわけではないことに注意されたい。

堅穴住居跡の壁際溝や柱穴などの付属遺構については、遺構記号から「S」を除いて「1299 P」のように表示し、独立した遺構ではないことを明示した。また、複数の遺構の組み合わせにより上位の遺構が構成される場合、例えば、複数の柱穴が並び櫛跡となるケースでは、同様に個々の柱穴は「66 P」のように表示した上で、上位遺構を「S A 1」のように表示した。この場合のみ全遺構一連番号との原則からはずれることを明示するため、遺構記号を先に置いている。当発掘区で該当するのは、S A 1・S H 1・S H 2 の3つのみである。

当発掘区で検出した遺構は503基である。水田跡とそれらに伴う構状遺構を主体とした遺構構成となっている。主要遺構のうち、構造や本来の形状を明確にし得たものは少なく、多くの遺構では遺物組成等から帰属時代を推測するにとどまる。概要を第4表に掲げる。

第3表 本書で用いる遺構記号

遺構種別	記号	摘要
櫛跡	S A	櫛を構成していた可能性がある列状のピット（穴）群。
堅穴住居跡	S B	地面を堅穴状に掘り抜いた大型の遺構。なお、「住居跡」に限定せず、建物跡全般を含む。
溝状遺構	S D	平面形が細長い溝状をなす遺構。なお、溝に土を充填して形成された道路状遺構もここに含む。
掘立柱建物跡	S H	建物を構成していた可能性のある方形状のピット（穴）列。
土坑	S K	穴全般。ただし、墓穴・柱穴・杭穴・堅穴住居跡の可能性のあるものや倒木痕を除く。
畦畔	S M	水田の畦の跡。ただし、水田域を区画する大規模なものに限り遺構番号を与えた。
ピット	S P	柱穴や杭穴の可能性のある単独の穴。
水田跡	S T	畠などの穀物を栽培するために区画された農地の跡。
遺物集積	S U	掘り込みを作わない状態で遺物が集中する遺構。
水制遺構	S W	水流の調整に関わる遺構。
不明遺構	S X	類例がみられない形状で、性格も不明な遺構。
自然流路跡	N R	人为的な制御が認められない流路の跡。
倒木痕	N W	樹木が倒れてできた穴の跡。

第4表 検出遺構集計

遺構種別	記号	縄文時代 以前	弥生時代 ～古墳時代	古墳時代 後期	古代	中世	近世以降	時代不明	合計
櫛跡	S A				1				1
堅穴住居跡	S B		1				3		4
溝状遺構	S D		3	1	24		9		37
掘立柱建物跡	S H				2				2
土坑	S K				16		98		114
畠畔	S M				3				3
ピット	S P				9		261		270
水田跡	S T		30		26				56
遺物集積	S U				1				1
木製遺構	S W				1				1
不明遺構	S X				1				1
自然流路跡	N R		1						1
削木痕	N W						12		12
合計		0	35	1	84	0	0	383	503

(2) 遺構の報告方針

基本方針

検出した遺構の報告に当たっては、現場での所見に可能な限り立脚することを基本とした。ただし、必要に応じて整理作業で新たに判明した事柄を補足するなど、補正を加えた上で報告する。

本文では、まず遺構種別ごとに概要を記し、その中に主要な遺構について個別に詳述することとする。個々の遺構の大きさや検出層位などの属性については、すべて「遺構一覧表」(130～144頁)に記しており、適宜、本文でも記載した。大きさについては現場での実測値をそのまま採用することを基本としたが、整理作業において図面から測り直した補正值を記載した遺構もある。検出層位の判定についても現場所見を採用した。ただし、現場での判断に疑義が認められるケースについては、整理作業時に新たに解釈を施している。

遺構図の報告方針

個別の遺構図(66～129頁)では、原則として調査現場において作成した実測図を編集して掲載した。複雑に重なり合う複数の溝状遺構など、重複状態を示すのがふさわしいと判断した遺構については、すべて重複状態を明示した図を作成して掲載した。また、発掘区全域分割図(35～65頁)においても、遺構形状の細部よりも遺構の分布状況や遺構間の位置関係を示すことを重視する観点から、すべての遺構について遺構間の重複関係を明示してある。

時代・時期区分について

本書で用いる時代・時期区分について、ここであらかじめ記しておく。縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晚期の6期区分とし、弥生時代は、前期・中期・後期の3期区分とする。ただし、弥生時代後期のうち、古墳時代に連なる時期(概ね3世紀代)については、「弥生時代終末期」という表現も併用している。古墳時代については、今日の一般的な区分に従い、前期・中期・後期に分ける3期区分を基本とする。それぞれの暦年代は概ね、前期が3世紀後葉～4世紀代、中期が5世紀代、そして後期が6世紀代～8世紀初頭である。ただし、前期のうち3世紀代については、当遺跡では出土遺物が集中する時期であるという事情もあり、特に「古墳時代初頭」という表現も併用していることをお断りしておく²⁾。また、後期のうち7世紀末～8世紀初頭の時期については、「古墳時代終末期」

という表現も併用する。

それ以降の時代については、大きく古代・中世・近世に区分する。時代区分上の古代の範囲には諸説あるが、本書では律令制国家の時代と捉え、ほぼ奈良時代と平安時代を指すものとする。古代のうち平安時代については、通常、前期・中期・後期の3期に区分されることが多いが、灰釉陶器普及期まで一区切りとなる当遺跡の実情に合わせ2期区分とし、3期区分との混同を避けるため、特に「平安時代前半」（9～10世紀）、「平安時代後半」（11～12世紀）と呼ぶこととする。中世については平安時代末から戦国時代までを含むものとし、慣例に従い、前期・後期（南北朝期以降）の2期区分を探る。続く安土桃山時代と江戸時代を合わせて近世とするが、工芸的要素の強い遺物についての記述では、美術史区分における「桃山時代」（1573～1615年）を併用している。

2 遺物の概要と報告方針

（1）出土遺物の概要

野内遺跡C地区で出土した遺物の総点数は、接合前破片数で数えて82,567点である³⁾。遺構内出土品が24,684点（29.90%）、包含層出土品⁴⁾が57,883点（70.10%）であり、遺構内からの出土品は全体の3割に満たない。また、遺物を包含する遺構の多くは水田跡や溝状遺構など開放的構造の大型遺構であるため、遺構内出土遺物の一括性は高くないとみられる。さらに、当発掘区内には居住区とみられる区域は限られることから、出土遺物の大半が隣接する当遺跡B地区などからの流れ込み品ないし持ち込み品で占められる可能性が高い。

本書では、土器のみでなく陶磁器に分類されるものも含んだ焼き物全般を「土器類」と総称する。通常、「木製品」と呼ばれることが多い木質遺物については、当遺跡の場合、伐採した木を板などに加工する前の段階の割板や、材の長さなどを微調整するために切り落とされて生じた端材、それに人为的な加工痕が明確でない木片など、「製品」という呼称にそぐわないものが多数みられるため、「木器類」と呼ぶこととする。石製遺物については、石製の実用品（狭義の「石器」）のほか、石製の非実用品ないし用途不明品、すなわち石製品も合わせて「石器類」と総称する。同様に、いわゆる金属器と金属製品とを合わせて「金属器類」と総称する。ただし、鍛冶作業に伴う遺物は金属器類としては扱わず、「鍛冶関連遺物」とする。なお、以上に当てはまらない古代瓦、窯道具、鼈甲製品を「その他」とする。出土遺物をそうした観点で分類すると、その内訳は、土器類52,764点（63.90%）、木器類28,963点（35.08%）、石器類738点（0.89%）、金属器類32点（0.04%）、鍛冶関連遺物46点（0.06%）、その他24点（0.03%）となる。飛騨地域の遺跡としては最多となる木器類が出土したことが特筆される。

土器類について、さらに種別ごとに分けた数量を示した上で上記の内訳をまとめると、第5表のようになる。縄文時代早期から近世に至る幅広い時代の遺物が出土しているが、土器類では、弥生土器ないし土師器と、須恵器・灰釉陶器の出土数が際立っており、縄文土器や中世以降の土器類は目立たない。このことから、弥生土器が土師器に遷移する弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての時期と、須恵器と灰釉陶器が共に流通する平安時代前半、以上の2時期を中心とする遺跡であることを読み取ることができる。

第5表 出土遺物破片数集計

区分 種別	土器類															木器類	石器類	金属器類	鍛冶関連遺物	その他の遺物	合計																				
	縄文土器	弥生土器	弥生土器ないし土師器	土師器	須恵器			灰釉陶器			縄輪陶器			土師質土器			輸入磁器			山茶碗			珠洲焼			古瀬戸系施釉陶器			常滑焼			近世陶磁器			中世ないし近世陶器			時代不明の土器類			
					食器類	貯蔵具	特殊23種	碗・皿類	瓶類	陶鑊	縄輪陶器	縄輪陶器	土師質土器	土師質土器	輸入磁器	輸入磁器	山茶碗	山茶碗	珠洲焼	珠洲焼	古瀬戸系施釉陶器	古瀬戸系施釉陶器	常滑焼	常滑焼	近世陶磁器	近世陶磁器	中世ないし近世陶器	中世ないし近世陶器	時代不明の土器類	時代不明の土器類	時代不明の土器類	時代不明の土器類	時代不明の土器類								
遺構内出土	247	5	3,273	764	6,779	2,216	33	2,578	165	4	11	2	29	38	11	10	5	12	1	3	8,339	116	2	25	16	24,684															
包含層出土	1,067	152	12,189	313	11,793	5,040	43	4,716	605	7	8	11	53	108	27	6	10	310	52	68	20,624	622	30	21	8	57,883															
合計	1,314	157	15,462	1,077	18,572	7,256	76	7,294	770	11	19	13	82	146	38	16	15	322	53	71	28,963	738	32	46	24	82,567															

(2) 遺物の報告方針

遺物の報告方針について、以下に記す。なお、木器類については、極めて複雑多岐にわたるため、第4節において分類体系を示したのちに、さらに具体的に記しているので、併せて参照されたい。

掲載遺物抽出方針

土器類については、まず、寸法と全体形状を把握できる個体は大部分掲載した。さらに、当発掘区の特徴的な遺物である墨書き土器や墨の付着する個体については、小破片に至るまですべて掲載した。掲載した須恵器・灰釉陶器で、器種名を確定させていない個体が相当数あるのは、主としてこのためである。

水田跡や溝状遺構といった開放的な遺構を主とする当発掘区では、土器類の残存状態は全般に良好ではなく、以上の方針では遺跡全体としての出土傾向を示すには十分でなかった。そのため、遺構内出土品については、遺構毎にそれぞれの器種構成や年代幅を提示できるよう、さらに抽出率を高めて選んだ。包含層出土品については、遺構内出土品では示しきれなかった部分を補うとの方針の元に追加分の掲載遺物を選んだ。従来、飛騨地域では報告例の比較的少なかった中世以降の土器、すなわち、珠洲焼・山茶碗・古瀬戸系施釉陶器・輸入磁器などについては、古代までの土器類に比べ、意図的に抽出率を高めていることをお断りしておく。種別毎の出土破片数を「出土地点別遺物破片数一覧表」(第2分冊1~14頁)に掲載しているので、遺構内での数量比等については、そちらを参照されたい。

木器類については、器種名を特定できた個体をほぼすべて掲載した。ただし、出土数の多い一部の器種のみ、抽出個体の掲載をもって代えた。詳細は後述する。

石器類については、遺構内出土・包含層出土にかかわらず、器種名を特定でき、全体形状を把握できる製品を掲載した。ただし、同様の特徴を備えた個体が多数みられる場合には、すべてを選ぶことはせず、代表的個体のみ掲載した。なお、全体形状が判明しなくとも、類例の少ない特異な個体は掲載している。

それら以外のもの、すなわち、金属器類・鍛冶関連遺物とその他の遺物については、明らかに近代以降の製品とみなされるものを除き、主要な個体を掲載した。古代瓦については、特徴の乏しい小破片が大半を占めるのに加え、類似する個体が多いことから、代表的個体のみ掲載した。

実測図・写真的配列

ここまで記したとおり、当発掘区の出土遺物には多量の木器類が含まれる。土器類・石器等に比べ個体ごとの大きさ・形状の差が大きく、発掘調査報告書の遺物実測図版においては、一般に他種別とは分離して扱われることが多い。しかし、当発掘区の場合、木器単体から読み取れる情報のみでは帰属時代を明確にし難いケースが少なくないことを考慮し、遺構内出土品については木器類を分離させることなく、すべて遺構単位で掲載した。ただし、この方式の場合、同一種別・器種に分類される個体間での比較を行いにくくなる可能性があることから、卷末の写真図版においては、遺構単位ではなく種別ごとにまとめて配列する方針を探った。そのため、写真図版での配列は、遺物番号の順となつてはいないことをお断りしておく。「遺物観察表」(第2分冊15~92頁)には各個体の実測図・写真的掲載頁を記してあるので、検索に当たっては活用されたい。

出土地点と層位の表示

本文での記述や「遺物観察表」において、複数の破片に分かれた状態で出土した遺物の出土地点を示す際には、特に大きな破片の出土した地点ないしは最も多くの破片が出土した地点をもって代表させる方針を探った。ただし、遺構内出土破片と包含層出土破片とが接合した場合には、遺構内出土品として扱っている。

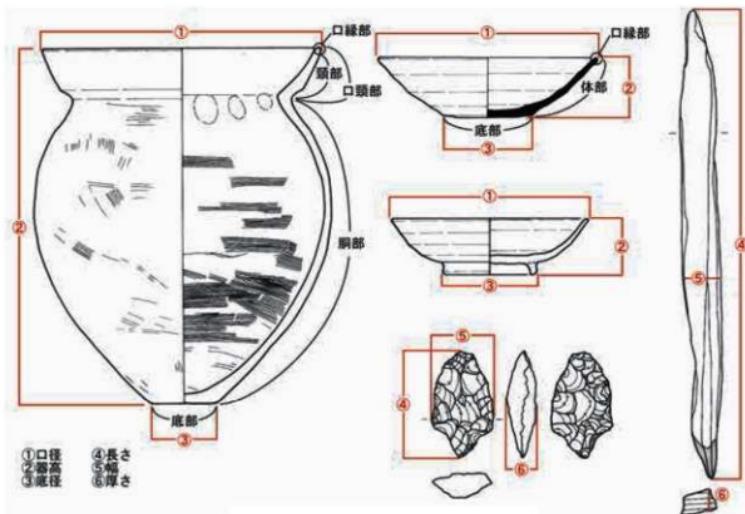
「遺物観察表」と「出土地点別遺物破片数一覧表」の「層位」欄には、原則として遺物取り上げ時点での現場での判断に基づいて出土層位を記してあるが、その後の調査・整理の進展により顛覆が生じたとみなされるケースなどでは「ー」としておいた。また、一部の遺構においては相対層位を併用しており、「U」、「M」、「L」はそれぞれ「上層」、「中層」、「下層」を意味する。試掘・確認調査時の出土遺物については、層位についての判断が本発掘調査時とは必ずしも一致しないため、「層位」欄はすべて「ー」としてある。

このほか、扱いに注意を要するものに、水田跡出土遺物がある。当発掘区の水田跡では、田面より上に溜まった層から遺物が出土したのに加え、断ち割り調査実施時に田面より下からも遺物が出土した。それらの様相の相違には水田の年代を把握する上で重要な情報が含まれるとみなされるため、前者には「覆土」、後者には「断ち割り」と明記し、容易に判別できるようにしておいた。

部位名称と計測基準

本書において、遺物に関して用いる部位名称と計測基準は次のとおりである。主要器種を例にとり、図示する(第10図)。土器類のうち、甕・壺など口縁部下にくびれを持つ器種については、原則として部位を口頭部(口縁部と頭部)・胴部・底部に分けている。頭部を持たない壺などの器種については、胴部という部位名称は用いず、体部と底部に分けた。

計測については、土器類では口径・器高・底径を計測するのを原則とし、高台を有する個体については、高台の径を底径として計測した。石器類・木器類などでは、長さ・幅・厚さを計測した。なお、木器類では、石器類の場合とは幅と厚さの計測方法が異なることに注意されたい。長さと幅の関係は、図での配置にかかわらず、原則として長い方を長さとし、それに直交する方向を幅とした。ただし、欠損品で本来の長軸方向を判別可能な場合、短軸方向より長軸方向が短かくとも長軸方向残存長を長さとした。計測値はすべて「遺物観察表」に記してある。



第10図 主要器種の部位名称と計測位置

実測図での表現手法

土器類の実測図において、黒の塗りつぶし表現をしているものは、特に断らない限り墨の付着範囲を示す。墨の薄いものや濃淡があるものについては、アミ密度による濃淡表現を併用した。また、木器類において、図中に特に注釈を記していないアミセは、「炭化範囲」の意味である。

さらに、「樹皮残存」、「黒色漆」、「強く被熱」、「黒色塗装」、「やや被熱」、「土擦れ痕」、「赤色漆」、以上についても、アミセにより範囲を示し、適宜、その内容について図中に注釈を加えた。

その他、漆・煤など、墨以外の付着物が認められる個体や赤彩のある個体などについても黒の塗りつぶしなどにより付着範囲を示し、個体ごとに付着物内容についての注釈を加えている。

第3章 第2節 注

- 1) 文化庁文化財部記念物課監修2010『発掘調査のてびき』同成社。
- 2) 本書で「古墳時代初頭」と表現する時期は、概ね瀬戸尾野土器編年における廻間II式及びそれと併行関係にある型式が主体を占める時期とする。なお、近年では、先行する廻間I式をも古墳時代の土器と捉える説が有力となっているが、飛騨地域における当該期の墓制の変遷そのものの様相が全く明らかになっていない状況を考慮し、廻間I式を弥生土器と捉えるか土師器と捉えるかについてはあえて判断を下さないことをとする。廻間式土器については、財團法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』を参照されたい。また、第3章第4節注1) を併せて参照されたい。
- 3) 土器類では、原則として1cm四方に満たない小破片については点数から除外した。それらも加えた場合の出土遺物総点数は約95,000点となる。なお、本文に挙げたもののはかに、植物の種子、昆虫遺体、炭化物などが出土しているが、それらは点数に含んでいない。
- 4) 「包含層出土品」には、試掘坑・暗渠など遺構外から出土したものをすべて含むものとする。ただし、遺構断ち削り時の出土遺物は、遺構出土品扱いとした。

第3節 遺構

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は4基検出した。「住居跡」と呼んではいるものの、当発掘区では居住施設であることが確認できる程度に良好な状態で検出できたものはない¹⁾。時代別の内訳は、古墳時代に属するもの1基、時代不明3基である。すべて第1遺構面で検出した。1220S Bにおいて、残存状態良好な古墳時代初頭の土器がまとまって出土したことが注目される。

1220S B (第44図・第45図、出土遺物: 第110図・第111図)

発掘区ほぼ中央の11S・12Sグリッドに位置する。1311S D・1250S Mにより削平されており、本来の平面形をとどめてはおらず、炉跡も確認されていない。しかし、残存長が最大で4.30mを測る大型の遺構であることと、壁際溝の可能性のある小規模な溝(1257D・1300D)と貼床層(5層)を確認していることから、住居跡とみて不自然ではない。

土師質の土器片538点が出土し、9個体を図示した。それらのうち、土師器高杯2個体(遺物番号1・2)、土師器台付鉢1個体(遺物番号3)、土師器甕(遺物番号4~7)は特に残存状態が良好で、全形を窺うことができる。詳しくは第4節で述べるが、濃尾平野土器編年²⁾における廻間II式に当たる東海系の土器をはじめ、北陸系、信州系、それに在地の土器と思われるものが共に出土しており、当地域における古墳時代初頭の土器様相を示す好例として注目される。ただし、それら多様な土器群が、この住居で同時に使われたものと捉えるべきなのか、それとも一括廃棄されたものであるのか、明らかではない。

当遺構の帰属時期については、出土した土師器から古墳時代初頭とみてよいであろう。

1224S B (第46図)

発掘区ほぼ中央の13Sグリッドに位置する。発掘区北端に位置するため、全形を確認するに至っていない。しかし、最大で3.86mを測る残存長と、貼床層(4層)を確認していることから、住居跡と判断した。遺物は全く出土していない。

1232S B (第47図・第48図)

発掘区ほぼ中央の11Sグリッドに位置する。やはり全形を確認していないが、最大で4.22mを測る残存長と、貼床層(6層)を確認していることから、住居跡と判断した。主に検出面において、多数の炭化物が出土した。また、床面で焼土を検出した。弥生土器ないし土師器の小破片とみられるものが18点出土しているが、いずれも特徴に乏しく、図示できるものはない。

1233S B (第46図)

発掘区ほぼ中央の11S・12Sグリッドに位置する。発掘区北端に位置するため、全形を確認するに至っていない。しかし、最大で2.69mを測る残存長と、残存部分の形状から整った隅丸方形となると推測されることから、住居跡と判断した。遺物は全く出土していない。

2 棚跡

列状に並ぶことを確認し、棚跡と判断するに至った柱穴群は1組のみである。これをSA1とする。

S A 1 (第49図、出土遺物：第111図)

発掘区北東端付近の3カ・3キ・4キグリッドに位置する。66P・131P・134P・146P・150P・198P・201P、以上7基の柱穴により構成される構跡である。東端の66Pから西端の201Pまでは16.64mを測る。主軸方向は、国土座標系の北に向かって45°東に傾く。柱根が残存する柱穴はない。遺物も198Pから須恵器の壺とみられる小破片（遺物番号10）が出土したにとどまる。

須恵器・灰釉陶器集中区域に位置し、1点ではあるが須恵器が出土したことと、後述するSH1・SH2に関連する遺構の可能性があることから、平安時代前半頃の遺構とみてよいであろう。

3 挖立柱建物跡

方形形状の並びを確認し、建物を構成するとの判断に至った柱穴群は2組ある。それらをSH1・SH2とする。軸方向を揃えて並ぶ2棟の建物の跡である。

S H 1 (第50図・第51図、出土遺物：第111図・第112図)

発掘区北東端付近の5ク・6クグリッドに位置する。222P・223P・238P・239P・241P・346P・349P・350P・352P、以上9基の柱穴により構成される。桁行（南北）3間、梁行（東西）1間の建物跡である。ただし、棟木を支える棟持柱の痕跡（352P）が北辺の柱筋から外側へ2.40m離れた位置で検出されており、いわゆる独立棟持柱を持つ構造となっている。なお、南辺の対応する位置には70SDがあるため、棟持柱の痕跡は検出できていない。

建物の長軸である桁行方向は、国土座標系の北に向かって34°西に傾く。桁行方向と梁行方向はほぼ直交するが、桁行東辺の柱列（223P・238P・239P・241P）は一直線には並ばず、やや東側にふくらむ。柱間寸法は、桁行では、西辺の346P・349P間と349P・350Pが2.25m、350P・222P間が2.00m、東辺の241P・239P間と238P・223P間が2.10m、239P・238P間が2.16mとなり、あまり整然とした値を示さない。梁行では346P・241P間、222P・223P間とともに4.40mを測る。9基の柱穴掘方の径はすべて30cm台から40cm台に収まっており、いずれも大型とは言えないものの、柱穴規模の点では整っている。

222P・238P・239P・241P・346P・352Pの6基では柱根が出土し、223Pには礎板が残っていた。柱根3個体について放射性炭素年代測定を実施した。その結果、239P出土柱根（遺物番号17）が9世紀初め～10世紀末、346P出土柱根（遺物番号20）が8世紀末～9世紀末、352P出土柱根（遺物番号21）が7世紀末～9世紀末との推定年代を得ている。各柱穴からの出土遺物は僅少で、柱根・礎板を除けば残存状態良好なものはないものの、223Pでは須恵器の壺とみられる体部破片（遺物番号11）と須恵器無台碗の底部破片（遺物番号12）、それに灰釉陶器の小破片が出土している³⁾。須恵器・灰釉陶器が混在する遺物組成と、上記の推定年代を併せ考え、当遺構の帰属時期については平安時代前半の9世紀代と捉えておきたい。

独立棟持柱を持つ掘立柱建物については、従来、伊勢神宮内宮・外宮などの構造上の親近性から、神聖な建物と解釈されることが多かった。しかし、当遺構の場合、建物規模と柱掘方規模がともに大きい上に柱並びが整然としていることと、出土遺物組成に特異な点が認められないことから、そのような解釈が成立する余地はないと判断する⁴⁾。むしろ、水田に近接した地点に建てられていることを重視し、水田の管理に関わる施設が倉庫のような性格の建物と捉えるのが妥当であろう。

放射性炭素年代測定の詳細は第4章第3節を参照されたい。また、柱根・礎板の樹種についてもク

リとの同定結果を得ているが、その詳細については第4章第5節に記述してある。

S H 2（第52図・第53図・出土遺物：第112図）

発掘区北東端付近の5キ・5クグリッドに位置する。S H 1の北東7.2mの地点に当たる。211P・219P・235P・354P・358P・370P・376P・377P・378P・380P、以上10基の柱穴により構成される。S H 1同様、桁行（南北）3間、梁行（東西）1間の建物跡である。ただし、北辺・南辺の外側にそれぞれ棟持柱を備えており、北辺（380P）では柱筋から外側へ0.30m、南辺（211P）では0.45m離れた位置にある。したがって、いわゆる近接棟持柱を持つ構造と捉えることができる。

建物の長軸である桁行方向は、国土座標系の北に向かって35°西に傾く。建物の平面形が整然とした長方形ではないため、桁行方向と梁行方向が直交するのは北西隅のみである。柱間寸法は、桁行東辺ではいずれも2.10mを測るもの、西辺では、358P・235P間が2.10m、235P・354P間が2.22m、354P・219P間が2.16mとなり、あまり整然とした値を示さない。梁行でも358P・378P間が4.50mであるのに対し、219P・376P間は4.32mにとどまる。ただし、それらはS H 1の柱間寸法に比べて隔たりの大きな値ではなく、S H 1とS H 2の建物規模自体は、ほぼ同等である。10基の柱穴掘方の径は30cm台から70cm台までばらつきが認められ、S H 1の場合に比べ、やや大型である。

出土遺物は僅少であり、354Pで出土した須恵器摘み蓋とみられる口縁部破片（遺物番号22）のほかには、376Pで須恵器食膳具の小破片が出土したにとどまる。しかし、S H 1に近接した位置にはぼ軸線を揃えて並んでおり、建物規模もほぼ一致していることから、S H 1と同時期・同性格の建物の跡と捉えてよいであろう。

4 ピット（第54図・出土遺物：第112図）

柵や掘立柱建物を構成することが確認されるもの以外にも、柱穴とみられる穴を多数検出している。土坑に分類すべきものが混在する可能性があるとはいえ、総数は270基を数え、当発掘区では最も検出数の多い遺構である。標高の比較的高い発掘区北東部に検出地点が偏る傾向が認められる。遺構内出土遺物から帰属時代が判明するものは少数にとどまるものの、分布範囲がほぼ須恵器・灰釉陶器集中区域内に収まることから、古代に属するものが大半を占めるとみられる。特に柵跡S A 1と掘立柱建物跡S H 1・S H 2の周辺で密度が高く、柱並びを確認できた上記3群のほかに、同様の施設が周辺にさらに存在した可能性を指摘することができる。

柱根が残存するものや埋土に柱痕跡が確認されるものなどを選び、図示しておく。

5 水田跡

56枚の水田の痕跡を検出した。それらは大きく距離を隔てた2区域に分かれ、遺構の大きさ・形状や出土遺物組成にも断絶が認められる。畦畔の識別が困難であったため全容を把握できたとは言い難いものの、発掘区南半の弥生土器・土師器集中区域で検出した30枚は古墳時代頃、発掘区北半の須恵器・灰釉陶器集中区域で検出した26枚は平安時代頃に属する可能性が高いとみられる。

（1）古墳時代に属する可能性が高い水田跡

（第55図～第59図・出土遺物：第113図）

発掘区南半のうち、グリッド14列から21列の区域で検出した。遺構番号を列挙すると、1075S T・

第6表 水田面積一覧

古墳時代水田

遺構番号	面積 (m ²)
1075	1.6
1076	—
1077	—
1078	2.1
1079	4.2
1080	—
1081	—
1082	—
1083	—
1084	0.9
1085	—
1086	1.9
1091	3.6
1092	—
1093	—
1094	—
1095	—
1096	—
1097	—
1098	—
1099	—
1100	1.5
1280	—
1281	—
1282	—
1287	—
1296	—
1297	—
1298	—
1316	—
平均	2.3

古代水田

遺構番号	面積 (m ²)
327	—
384	—
385	—
386	45.4
387	15.8
388	16.9
389	15.9
390	13.4
391	62.7
392	44.0
393	—
394	31.6
395	76.9
396	54.0
397	33.1
398	—
399	—
400	42.6
401	—
402	—
403	—
1252	—
1253	—
1254	—
1255	—
1256	—
平均	37.7

1076 S T・1077 S T・1078 S T・1079 S T・1080 S T・1081 S T・1082 S T・1083 S T・1084 S T・1085 S T・1086 S T・1091 S T・1092 S T・1093 S T・1094 S T・1095 S T・1096 S T・1097 S T・1098 S T・1099 S T・1100 S T・1280 S T・1281 S T・1282 S T・1287 S T・1296 S T・1297 S T・1298 S T・1316 S Tとなる。検出区域の東端部分（1075 S T～1086 S T、1091 S T～1100 S T）においては、推測を交えながらではあるが、1枚ごとの平面形を捉えている。1枚当たりの面積が5 m²程度にも満たない小規模な区画がなされていたことが窺える。なお、15タグリッドで採取した試料について花粉化石群集の分析とプラント・オパール分析を実施したところ、水田畦畔の高まりと推定した層の試料からは稲作の存在を支持する結果を得ることはできなかった。したがって、水田を区画する畦畔状の高まりは畦畔そのものではなく、畦畔の基底部であった可能性が高い。

これら一群の水田跡の帰属時期を明確にするのは難しい。検出区域とその周辺から出土した土器類は弥生時代終末期ないし古墳時代初頭に属するものが主体を占めるとみることができるが、周辺区域の出土土器類の中で最も残存状態が良好で帰属時期を特定可能な1220 S B出土品（遺物番号1～7）が古墳時代初頭に位置付けられることと、木製農具類は古墳時代前期のものが主体を占めること（遺物番号1462～1474など）を重視すべきであろう。したがって、古墳時代前期を中心とする水田跡と捉え、以下、便宜的に「古墳時代水田（跡）」と呼ぶこととする。上限・下限については明確にはできないが、下限については、当発掘区では古墳時代中期から奈良時代にかけての時期に属する出土遺物が希薄であることから、後述する古代水田跡との間には時期的な断絶を持つと判断する。

(2) 古代に属する可能性が高い水田跡

(第60図～第62図、出土遺物：第113図～第119図)

須恵器・灰釉陶器集中区域に当たる発掘区北半のグリッド4列から12列の区域において、古墳時代水田跡より大きな区画を持つ水田群の痕跡を検出した。以下、それらを「古代水田（跡）」と呼ぶ。

大畦畔で区画された範囲を小さな畦畔で区画する形態を示す。痕跡を検出した水田は26枚を数える。遺構番号は、327 S T・384 S T・385 S T・386 S T・387 S T・388 S T・389 S T・390 S T・391 S T・392 S T・393 S T・394 S T・395 S T・396 S T・397 S T・398 S T・399 S T・400 S T・401 S T・402 S T・403 S T・1252 S T・1253 S T・1254 S T・1255 S T・1256 S Tである。平面形を把握することでの

きないものも少なくないが、面積の平均値は37.7m²を測り、古墳時代水田跡に比べれば格段に大きくなっている。

水田跡覆土から出土した遺物のうち137個体を図示した（遺物番号31～167）。出土した木器類に、農耕に関わる器具はみられない。土器類には、山茶碗（遺物番号38・39・71・134～139）、珠洲焼（遺物番号40・70・140）、古瀬戸系施釉陶器（遺物番号41・72）、輸入磁器（遺物番号66～69）といった中世に属するものがいくらかみられるものの、主体を占めるのは須恵器と灰釉陶器である。須恵器では、古墳時代に遡る可能性のある器種はごく少数にとどまり、無台碗・有台碗・有台盤など、底部回転糸切り技法普及後に一般的となるとされる器種が多い。よって、この一群の水田跡の帰属時期については、平安時代前半を中心とする時期と捉えておく。これは、隣接する当遺跡B地区の古代集落の最盛期に当たる。ただし、B地区集落の住居跡や鍛冶関連遺構の中には、出土遺物中に灰釉陶器を含まないものが少なからずみられること⁵⁾、後述する古代水田に伴う溝状遺構の中にも、同様に灰釉陶器普及以前に遡る可能性が高いものがみられることから、古代における水田耕作の上限についても、灰釉陶器普及前の奈良時代、8世紀後半頃にまで遡る可能性を視野に入れておくこととした。

水田跡断ち割り調査時に、田面より下の層からも多数の遺物が出土しており、26個体を選んで図示した（遺物番号168～193）。それらと水田跡覆土出土品との間には、特に時期差を認め難い。後述するが、水田跡の下層の第2遺構面で検出した溝状遺構1061S Dにおいてさえ、水田覆土との間に出土遺物組成等の差異を認めることは難しい。以上から、必ずしも田面を明確に検出できる状態ではなかったことが窺える。さらに、水田跡の区域内において、畦畔とは位置・方向が一致しない杭列が検出されていることから（第103図・第104図）、水田跡の平面形についてもまた同様であり、長期にわたり営まれ続けた結果、この区域の水田は、図示したものよりさらに複雑な様相を呈していた可能性があることを付言しておく。

6 畦畔・溝状遺構・自然流路跡

当発掘区では、遺構番号を与えた畦畔は、いわゆる大畦畔、すなわち水田範囲を大きく区画する畦畔であり、水路の跡とみられる大型の溝状遺構と一体となっている。また、溝状遺構の中には自然流路跡と一体となっているものがみられる。そのため、ここでは畦畔・溝状遺構・自然流路跡をまとめて報告する。

（1）古代水田に関わる畦畔・溝状遺構

（第63図～第76図、出土遺物：第119図～第135図、第145図～第147図）

古代水田の範囲を取り巻くように、大型の溝状遺構が複雑に重複しながら広がっている。水田耕作に伴う水路の跡と考えられ、また、畦畔を伴うものもみられる。検出区域は、当遺跡B地区から連なる居住域の緩斜面とその南方の湿地帯との境に当たり、丘陵根の伏流水を水源としたと推定される。

古代水田に関わる畦畔と溝状遺構の一覧を、各々の出土遺物組成とともに掲げる（第7表）。古代水田跡も含めた全域の遺構配置は、第60図を参照されたい。

311S Dと364S Dは、水田域内を2つに区切るように南北に延びる溝状遺構である（第63図）。311S Dの北端では、取水口とみられる水制造構365S Wを検出していている。321S D・330S Dは水田域の東端を限る溝状遺構であり、321S Dに西隣りには畦畔320S Mが付属している（第64図）。320S Mに

第7表 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構の出土遺物組成

遺構番号	層位	土師器	土器類												木器類	石器類	金屬器類	鍛冶関連遺物	その他	合計																
			須恵器			灰釉陶器			縄錦陶器			土師質土器			輸入磁器			山茶碗			珠洲焼			常滑窯			古瀬戸系施釉陶器			近世陶磁器			中世ないし近世陶器			
			縄文土器	弥生土器	弥生土器ないし土師器	食器	貯蔵具	特殊器種	碗・皿類	瓶類	陶達	縄錦陶器	土師質土器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	常滑窯	古瀬戸系施釉陶器	近世陶磁器	中世ないし近世陶器	木器類	石器類	金屬器類	鍛冶関連遺物	その他	合計										
310SM	U																				32					32										
	-		78	14	464	235	1	189	9				2	2	4						145	2	2	1,147												
	M																					18				18										
311SD	U																					24				24										
	-		22	1	389	67		139	3			1	7	2	2							827	1			1,461										
320SM	-					1	1																		2											
	M																				79				79											
321SD	U																					43				43										
	-		9	11	191	52		9	2	1											1	281	2		559											
323SD	M																				1				1											
	-		1		1	1														2				5												
	I		41	1	302	63		9													122				538											
	2	3	18	5	58	13		2													39				138											
324SD	U					40	10		7	2											17				76											
	護岸		20	6	148	38		2													383				597											
	-		8		38	16		1		8										25	2	1	99													
330SD	U																				3				3											
	-		1		13	2																		16												
348SD	-	2	24		17	7		1												17	1			69												
361SD	-		53		70	5	1													44	1			174												
364SD	-		2		23	2		8	1											27				63												
367SD	-		88	24	775	204	6	128	12	1	1	1	1	1						173	2	4	3	1,422												
368SD	-		9	1	55	24		31	4				2							19				145												
372SD	-		44	19	157	55	1	32	6	1	1									72	3	5	396													
373SD	-		25		79	37		19	2											22				184												
374SD	-		8		1															1	1			11												
124SSD	-		2		10	1		6												2				21												
1250SM	-		509		660	183		392	16		4	5	1							87	11	2		1,870												
1305SD	-		21		55	10		23	3		1	1								10	1	1		126												
1309SD	-		15		42	9		20	2											1				89												
1310SD	-		66	3	62	19		15					1							3	1	1		171												
1311SD	-	1	271	2	64	13		18	5											7	1			382												
1315SD	-		32																						32											
合計		5	1	1,367	87	3,715	1,067	9	1,051	67	1	9	2	17	9	3	7	0	2	0	0	2,519	35	0	9	11	9,993									

については土層断面の記録が残されていないが、おそらくは盛土を行わず、III層を削り残した状態であったと推測される。321SDは北端において、後述する324SDに接続するが、両者間の重複関係は明確ではない。

発掘区東端付近の324SD・361SDから発掘区中央付近の1311SDにかけて、大型の溝状遺構が複雑に重なり合いながら延びている。それらは水田耕作に伴う水路としての機能を担うとともに、水田の範囲を大きく区画する役割を果たしたとみられる。該当するのは、323SD・324SD・348SD・361SD・367SD・368SD・372SD・373SD・374SD・1245SD・1305SD・1309SD・1310SD・1311SD・1315SDである。以下、それらをまとめて中央大溝と呼ぶこととする（第65図～第76図）。

中央大溝の東端区域、すなわち321SDとの接続部辺りから東方では、323SD・324SD・348SD・361SD・374SDが複雑に切り合っており、水路幅を整え直し、水流の方向を調整するための改築が

度々行われたことが分かる（第65図）。324 S Dでは、護岸のために杭・横木による補強が行われたことが窺える。（第66図・第67図）。中央大溝の中央部、すなわち平成17年度発掘区のグリッド8列から9列にかけての部分では、4基の溝状遺構、367 S D・368 S D・372 S D・373 S Dが複雑に重複する。現場ではそれぞれの平面形を確認するには至らなかった。そのため、平面図ではこの4基から構成される大型の溝状遺構を1つの遺構として示してあるが、断面図からは、数度にわたり水路の掘り直しが行われた様子を窺うことができる（第69図・第70図）。平成18年度発掘区では、それらの西側に連なる部分を、1245 S D・1305 S D・1309 S D・1310 S D・1311 S D・1315 S Dの6基の溝状遺構に分けて捉えているが、それらにおいても同様の掘り直しが認められる（第71図～第76図）。

中央大溝に沿って、盛土により築かれた大畦畔の痕跡が検出されている。大畦畔は、17年度発掘区の310 S Mと18年度発掘区の1250 S Mからなる。この2つは連続する1つの畦畔と捉えることができる。畦畔の盛土は、丘陵からの転石や川原石を込めて補強されており、大規模な土木事業により築造された様子を窺うことができる。

以上の畦畔・溝状遺構から出土した遺物については、第7表に示したとおりである。これらの遺構からは破片数で数えて9,993点もの遺物が出土したが、それらのうち4,791点が須恵器、1,119点が灰釉陶器である。須恵器には、古墳時代に遡る可能性のある個体はほとんどみられない。また、山茶碗など中世以降に属する遺物も皆無ではないものの、土器類中の0.5%程度を占めるにとどまり、混入品とみなすことが許されよう。したがって、今日の一般的な年代観に照らせば、全体としては、8世紀後半から10世紀にかけての時期、すなわち平安時代前半頃に偏る遺物群と捉えることができる⁶⁾。墨書土器・転用硯といった文字関係資料や緑釉陶器が多数含まれるなど、当発掘区に隣接する野内遺跡B地区の出土遺物と共通する要素が認められることから、それらの多くはB地区の集落からの流れ込み品ないし持ち込み品とみられる。土器類以外では、310 S M・311 S D・321 S D・324 S Dにおいて、まとまった量の火付け木が出土したことや、311 S Dで箸が多数出土したことが注目される。

それらの帰属時期と変遷については、以下のように捉えるべきであると考える。

まず、中央大溝については、その中央以西の部分においては、367 S D・368 S D・372 S D・373 S Dなどにみられるように、数度にわたる掘り直しの痕跡が認められるものの、水流の方向を大きく変えるような大がかりな改築と評価すべきものは見当たらない。各々の遺構内出土遺物の型式や組成に大きな差異を見出しづらいため、明言するのは難しいが、ほとんどの遺構では出土遺物中にまとまった量の灰釉陶器を含むことから、それらの部分改修は、灰釉陶器普及後の9世紀頃を中心とする時期に段階的に行われたものであると判断する。

これに対して、中央大溝の東端区域においては様相が異なり、より大がかりな改築がより古い時期に繰り返されたことが窺える。361 S Dでは、須恵器は76点とまとまった数が出土する一方で、灰釉陶器は全く出土していない。遺構間の重複関係からも、361 S Dは、遺物がほとんど出土していない374 S Dよりは新しいが、少ないながら灰釉陶器を含む324 S Dよりは古いことが確認される。以上から、灰釉陶器普及期より前の8世紀後半頃にはすでに大規模な水田開発が始まっており、その後、灰釉陶器普及期にも改築が継続されたことを読み取ってよいであろう。なお、中央大溝東端区域の下限については、324 S D・361 S Dと古墳時代の溝状遺構70 S Dの埋没後、それらの埋土を掘り込んで後述する墓339 S Kが作られており、その構築年代が灰釉陶器普及後の早い段階であることを手掛かり

とし、9世紀のうちには埋没した可能性が高いと判断する。

中央大溝に伴って検出された大畦畔310SM・1250SMは、断面図（第69図・第70図・第72図）に示されているように、中央大溝の大部分を埋め立てて構築されたと判断される。第7表に明らかなどおり、これは310SM・1250SMの遺構内出土遺物組成が、中央大溝に比べ、より多くの灰釉陶器を含むという新しい様相を示すことからも裏付けられる。構築され畦畔として機能した時期は、310SM・1250SM内の出土遺物から判断して灰釉陶器普及期に収まることは明らかであり、あえて実年代を示すなら、10世紀頃としておきたい。

中央大溝以外の支流と言うべき311SD・364SD、320SM・321SD・330SD、以上の2組の溝状遺構については、中央大溝との関係を把握しておくべきであろう。まず、321SD・330SDについては、321SDと中央大溝の324SDとの間で、灰釉陶器をわずかしか含まないという遺物組成が共通するため、ほぼ同時期の遺構と判断される。したがって、中央大溝の水流を分岐させる役割を果たした可能性が高い。ただし、位置関係から判断して、中央大溝東端区域の埋没後に、新たな水路として掘られた可能性も排除せずにおきたい。これに対して、311SD・364SDについては、いずれも遺構内遺物中の灰釉陶器の割合が須恵器の3割に達しており、中央大溝の遺物組成に比べ際立った新相を示すことから、中央大溝全体の埋没後に開削されたと判断される。中央大溝が大畦畔に改築された段階で、新たな水路として機能したものとみられる。

（2）自然流路に付属する溝状遺構

次に、自然流路跡と一体となった状態で検出した溝状遺構について報告する。

1067NR・1071SD（第77図～第83図、出土遺物：第141図～第144図、第147図～第153図）

1067NRは、古墳時代水田区域の東方に広がる自然流路跡である。1067NRの北隣りには、杭列を打ち込むなど人為的に手を加えた部分が認められ、これを1071SDとする。溝状遺構と流路跡との境部分では大型の横木が流路埋土に埋め込まれ、その上を溝埋土が覆っている。杭はその横木を固定するため打ち込まれているようである（第82図）。

出土遺物数は多く、1067NRが1,360点、1071SDが266点を数える。いずれにおいても、木器類と弥生土器ないし土師器に偏る傾向が顕著であり、古墳時代水田に関わる遺物を多く含むとみることができる。1067NR出土品は45個体、1071SD出土品は44個体図示した。1067NR出土品は質・量ともに際立っており、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての時期に属する土器類（遺物番号865～872）をはじめとして、曲柄鍤（遺物番号873・874）、机などの天板の可能性のある器具部材（遺物番号881）、鳥形（遺物番号882）、楕円形曲物容器（遺物番号888）、建築部材（遺物番号889～899）、割板（遺物番号903）などの多彩な木器類、それに磨製石礫（遺物番号907）、石冠（遺物番号908）などがみられる。1071SDは、全遺構中、最も多くの土木部材が出土した遺構であり、杭43個体と横木1個体を選んで図示した。それらは芯持材を使用しない点が特徴的である。詳しくは第4節を参照されたい。

（3）他の溝状遺構

上記以外の溝状遺構のうち、第84図～第94図に7基を図示した。主要なものについて報告する。

70SD（第84図、出土遺物：第121図）

発掘区東端から古代水田跡北隣りにかけて延びる。残存長54.00mに及ぶ大型の溝状遺構であるが、出土遺物破片数は、土師器30点、須恵器29点、灰釉陶器7点、木器類12点にとどまる。しかし、その

内容の特異さには注目すべきものがあり、須恵器壺蓋（遺物番号267）、須恵器鉢（遺物番号268）、須恵器平瓶（遺物番号270）、須恵器フラスコ形瓶（遺物番号271）、須恵器壺（遺物番号272）、以上は7世紀代に遡る遺物とみて違和感はない。箸や火付け木が皆無であるほか、出土木器類が僅少である点も、古代水田に関わる溝状遺構とは様相が異なる。それらとは帰属時期を異にし、古墳時代後期に遡る遺構とみてよいであろう。

なお、当発掘区では、古墳時代後期の遺構とみられるものは、この1基のみである。

1057S D（第88図）

古墳時代水田跡を取り巻く溝状遺構である。標高差から判断して、この溝を流れた水は1067N Rへ導かれたものと思われる。ただし、残存する深さはわずか0.05mにすぎず、詳細は不明である。弥生土器ないし土師器4点、木器類3点、打製石斧1点が出土した。

1061S D（第89図、出土遺物：第135図～第141図）

第2遺構面で検出した遺構である。第1遺構面の大畦畔310S Mから古代水田跡にかけての区域の下層で検出した。出土遺物数の特に多い遺構であり、破片数で数えて、弥生土器3点、弥生土器ないし土師器87点、土師器22点、須恵器821点、灰釉陶器284点、山茶碗5点、珠洲焼1点、常滑焼2点、時代不明の土器類1点、木器類1,424点、スクレイバー1点、打製石斧1点、銅鏡1点、鉄滓2点、羽口1点、古代瓦1点、以上合わせて2,657点が出土した。第2遺構面で検出した遺構とはいえ、出土遺物の大半を占めるのは須恵器・灰釉陶器であり、第1遺構面の溝状遺構や古代水田跡と比較して遺物組成に大きな差異は認められない。152個体を図示したが、の中には墨書き器が多数含まれるほか、祭祀具とされることの多い馬形（遺物番号688～691）と火付け木（遺物番号699～772）がまとまって出土したことが注目される。

なお、当遺構内には特に遺物が集中する地点が1箇所あり、「遺物集積」として遺構番号を別に与えている（1074S U）。

1293S D（第90図～第94図、出土遺物：第144図・第145図）

発掘区西端付近に位置する。溝状の掘り込みを埋めて構築された道路状遺構である。上面の中央部を盛り上げ、路面としている。上面の一部では、拳大ほどの礫を敷いていることを確認した。

なお、当遺構は、古代の遺物のみ出土した土坑1303S Kより古いことが重複関係から明らかとなつており、埋め立てられて最終形態となった時期の下限が古代に収まるとみて間違いない。埋土からの出土遺物に土師器・須恵器が多いことも、そのことを裏付けている。

7 水制造構

溝状遺構・畦畔以外で、水流の調整に関わるとみられる遺構を1基検出した。

365S W（第95図、出土遺物：第153図）

311S Dの北端、6ケグリッドに位置する。木材を疊で押え付けて補強した様子が窺えることから、強い水圧を受ける取水口に当たる部分と判断した。掲載した出土遺物は、常滑焼の三筋壺とみられる胴部破片（遺物番号910）と箸（遺物番号911）の2個体のみであるが、出土遺物破片数84点中、須恵器が39点、灰釉陶器が11点を占めるところから、古代の水田耕作に関わる遺構とみてよいであろう。現場における所見によれば、中央大溝が埋め立てられて大畦畔となった後に、水田への取水口として機

能したとされる。

8 遺物集積

掘り込みを持たないながら遺物がまとまって出土した地点1箇所を、遺構として認定した。

1074 S U (第96図、出土遺物：第153図・第154図)

第2遺構面の6コ・7コグリッド、1061 S D内に位置する。長軸3.55m、短軸1.93mの範囲から須恵器9点、木器類69点が出土した。「工」の墨書のある須恵器有台盤（遺物番号913）、火付け木（遺物番号914～916）、馬形（遺物番号918）などがみられることから祭祀関連遺構の可能性があるが、定かではない。

9 土坑

土坑の検出数は114基にのぼる。第97図～第101図には、それらのうち8基を図示した。特に注目に値する2基について詳述する。

339 S K (第99図、出土遺物：第154図)

須恵器・灰釉陶器集中区域内の5ケグリッドに位置する。長軸2.54m、短軸1.38mを測る不整な方形の土坑である。南辺には木片が残存し、その下には炭化物が認められた。出土遺物が極めて多様であることで、特に注目に値する遺構である。出土遺物破片数は、土師器11点、須恵器185点、灰釉陶器21点、木器類73点、鉄滓1点、合わせて291点にのぼる。12個体を選び図示した（遺物番号923～934）。須恵器円面硯（遺物番号925）、須恵器の転用硯（遺物番号929）、「麻呂」の墨書のある須恵器無台碗（遺物番号924）といった文字の使用に関わる特殊品のほか、須恵器では稀な器種である脚台盤（遺物番号927）、精製品の灰釉陶器碗（遺物番号930）、それに箸（遺物番号931）、火付け木（遺物番号932～934）などが含まれる。

遺構の大きさ・形状、それに出土遺物の特異な組成から、当遺構は墓の可能性が高いと考える。須恵器と灰釉陶器を主体とする遺物組成から判断して、古代の遺構であることは疑う余地がない。より詳しく述べるならば、出土した灰釉陶器碗（遺物番号930）に猿投窯黒径14号窯式の特徴が認められることから、9世紀前半頃の遺構とみることができる。ただし、この灰釉陶器碗は、当発掘区の出土品の中では例外的に古風な精製品であるため、この個体の編年上の位置付けが、そのまま埋納年代を示すとは限らないことを念頭に置くべきであろう。

339 S Kは、70 S D・324 S D・361 S Dの埋没後、それらの埋土を掘り込んで作られている。この重複関係は、324 S D・361 S Dなど古代水田の耕作に伴う水路の跡とみなされる溝状遺構の、少なくとも一部の廃絶年代の下限が9世紀代に収まる可能性を示唆する点で、極めて注目に値する。

1303 S K (第101図、出土遺物：第155図)

須恵器・灰釉陶器集中区域内の21チグリッドに位置する。長軸2.84m、短軸1.76mを測る隅丸長方形の土坑である。埋土には多量の炭化物が含まれていた。出土遺物破片数は、弥生土器ないし土師器2点、土師器4点、須恵器36点、灰釉陶器8点、石鍤1点、合わせて51点である。4個体を選び図示した（遺物番号947～950）。須恵器と灰釉陶器を主体とする遺物組成から判断して、古代の遺構であることは疑う余地がない。遺構の性格については、339 S Kに類似する大きさと平面形から墓の可能

性があると考えられるが、出土遺物に副葬ないし供獻の性格を窺うことのできるものが見当たらないため、断定はできない。

重複関係に注目すべき点がみられることを付言しておく。1303SKは、1293SDの埋土を掘り込んで作られている。先にも記したとおり、1293SDは埋め立てられて道路となったと推定される遺構である。1303SKの出土遺物は、ほぼ古代に属するもので占められ、中世に下るものは全くみられないことから、1293SDが埋め立てられて最終形態となった時期が中世まで下るとは考え難いことが分かる。

10 不明遺構

類例がみられない形状で、性格も不明とせざるを得ない遺構には、182SXがある。

182SX（第102図、出土遺物：第155図）

須恵器・灰釉陶器集中区域内の3キ・3ク・4キ・4クグリッドに位置する。長軸の残存部分が9.80m、短軸は6.20mを測る大型の遺構である。しかし、形状は整っておらず、カマド跡などが見出されなかつたことから、堅穴住居跡とは考え難い。

出土遺物破片数は比較的多く、弥生土器ないし土師器1点、土師器11点、須恵器85点、灰釉陶器32点、木器類1点、合わせて130点を数える。8個体を選び掲載した。墨書のある須恵器（遺物番号953・955）が出土している。

11 杠列（第103図～第107図）

遺構番号を与えてはいないものの、第1遺構面・第2遺構面において、杭列を多数検出している。溝状遺構などと関わりの深いものについては、すでに該当箇所に実測図を掲載し記述してあるが、当発掘区で検出した杭全般について、ここであらためまとめておく。

打ち込まれていた状態で検出された杭は、破片数で670点を数える。それらの平面分布の状況から、第1遺構面の杭列は、古代水田跡の検出区域に属するもの（第104図）と古墳時代水田跡の検出区域に属するもの（第105図）に大別できることが読み取れる。また、第2遺構面では、古代水田跡の検出区域のみで検出されていることも分かる（第106図・第107図）。

古墳時代水田跡検出区域の杭列は、主として1071SDに伴うものであり、溝の補強のために打ち込まれたと考えられる。古代水田跡検出区域の杭列でも、第1遺構面の324SDをはじめとする溝状遺構に伴うものについては同様の性格を持つと捉えてよいであろう。しかし、水田跡内において検出された杭列については、検出した水田跡の畦畔とも位置が一致するとは限らないため、合理的な解釈を施すのは難しい。さらに、第2遺構面検出の杭列についても、同様に検出遺構との相関関係を見出すのが困難である。それらについては、検出した水田跡とは異なる時代に属する水田畦畔に伴う杭列などの可能性があろう。あるいはまた、図示したもののほかに、検出に至らなかった古代水田の畦畔が存在したことを見示す証拠とも考えられる。

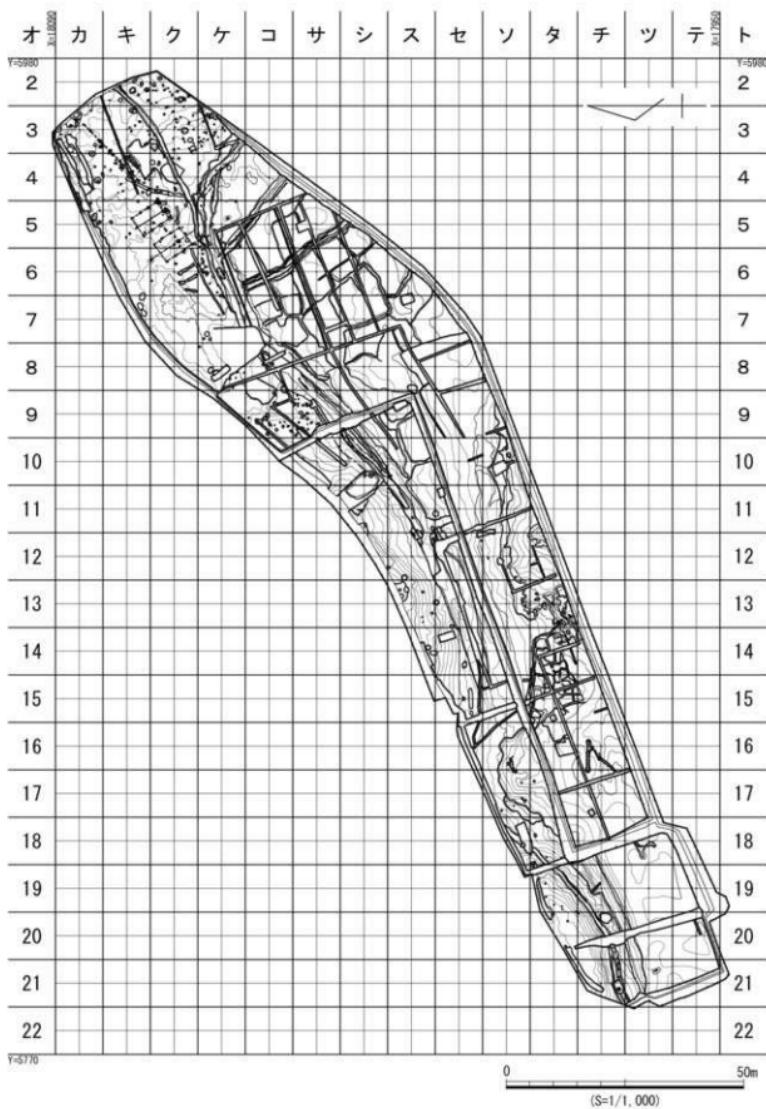
なお、当発掘区の杭の樹種と木取りには、検出区域による差異が認められる。詳しくは第4節を参照されたい。

12 その他

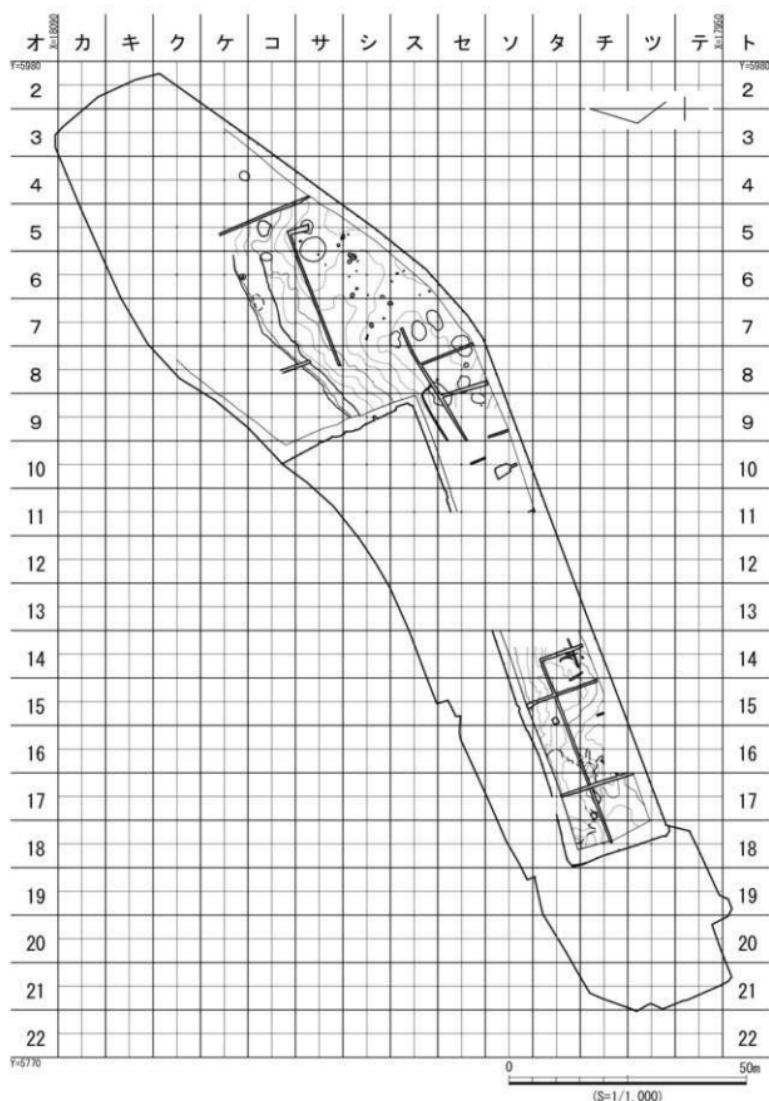
以上の人為的な遺構のほかに遺構に準ずるものとして、第2遺構面において検出した12基の倒木痕がある。詳細図の掲載は省略する。

第3章 第3節 注

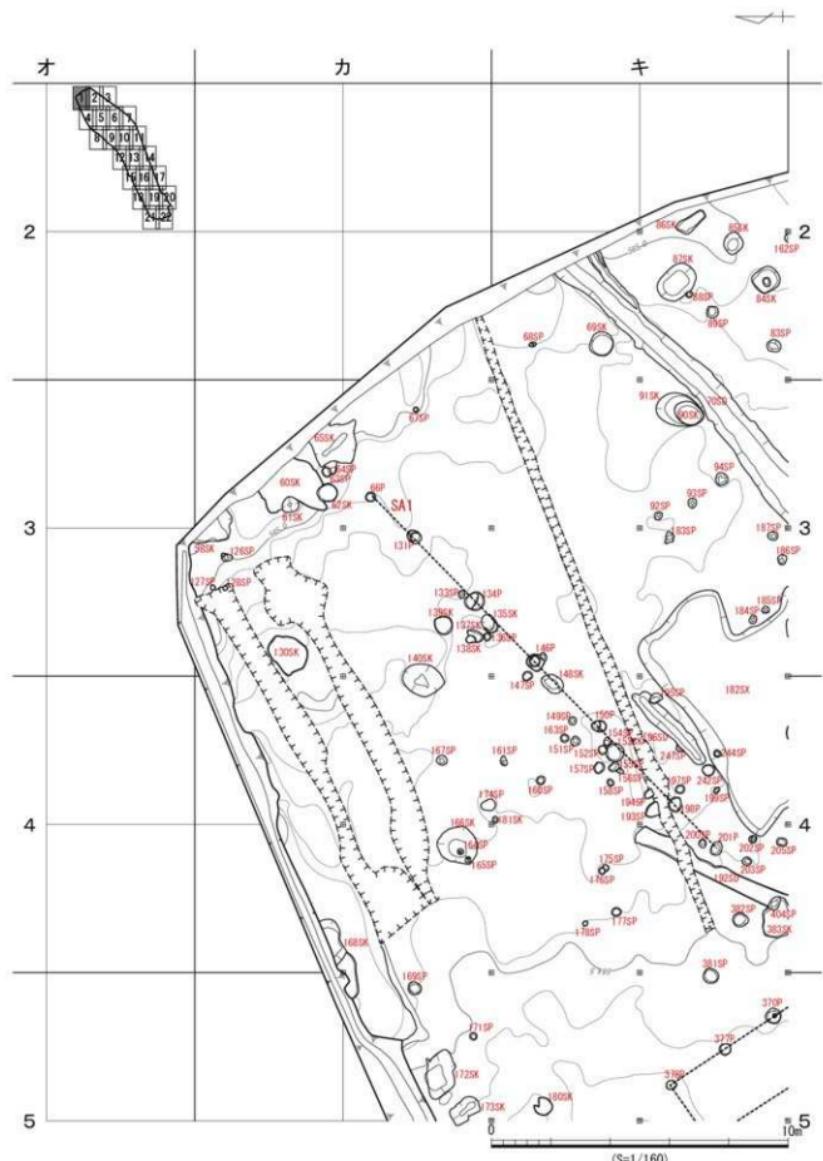
- 1) 「堅穴住居跡」という遺構名称は、近年では「堅穴建物跡」に改められつつあり、当発掘区の場合にも該当する遺構がすべて「住居」の要件を満たしてはいないことから、むしろ「堅穴建物跡」の方が適切である。しかし、当発掘区に隣接し、内容面でも関連の深い野内遺跡B地区の報告書における遺構名称と整合性を保つため、本書では「堅穴住居跡」を採用している。
- 2) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』などを参照のこと。
- 3) 小破片のため遺物として数えてはいないが、本文で記したものほかに、238Pから須恵器食膳具1点、349Pから須恵器食膳具1点と土師器1点が出土している。
- 4) 近年、独立棟持柱建物跡を神殿とする説については、より慎重に検討すべきであるとする否定的な意見が強い。文化庁文化財部記念物課監修2010『発掘調査のてびき』の「集落遺跡発掘編」163頁などを参照のこと。
- 5) 野内遺跡B地区の集落の変遷については、以下の文献を参照されたい。
 - ①財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』
 - ②小瀬忠司2011「飛騨の須恵器と灰釉陶器」『研究事業報告（平成22年度版）』岐阜県ミュージアムひだ
- 6) 須恵器・灰釉陶器の年代観については、主に以下の文献を参照した。
 - ①東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』
 - ②齊藤孝正2000『越州窯青磁と繪輪・灰釉陶器』至文堂
 - ③愛知県史編さん委員会2010『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』



第11図 発掘区全域図 第1遺構面

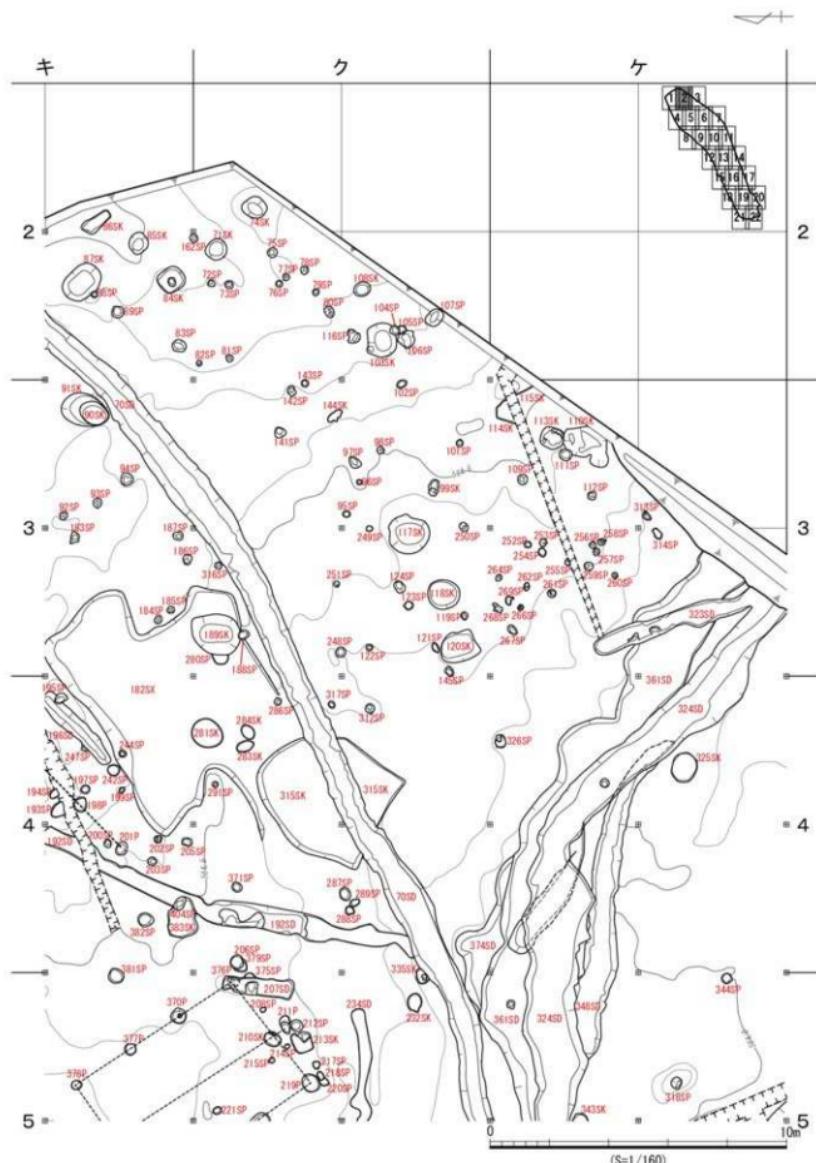


第12図 発掘区全域図 第2造構面

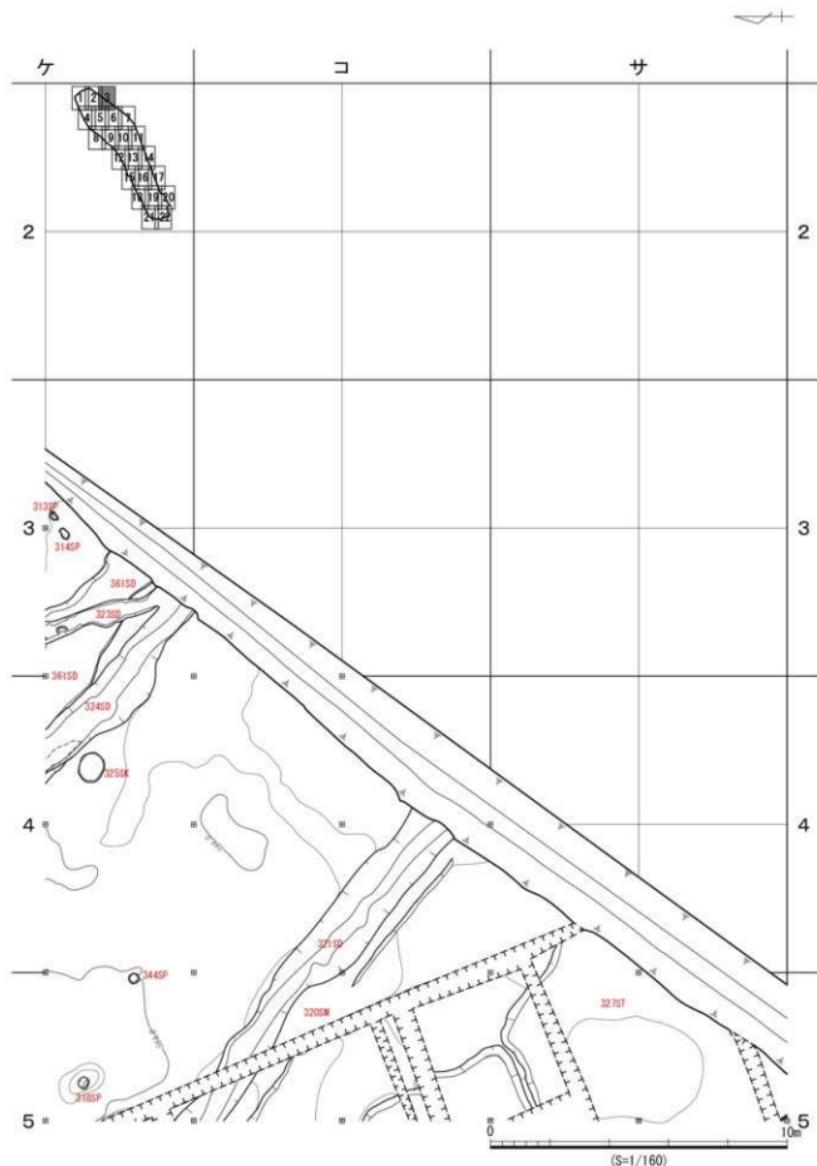


第13図 発掘区全域分割図 第1造構面 (1)

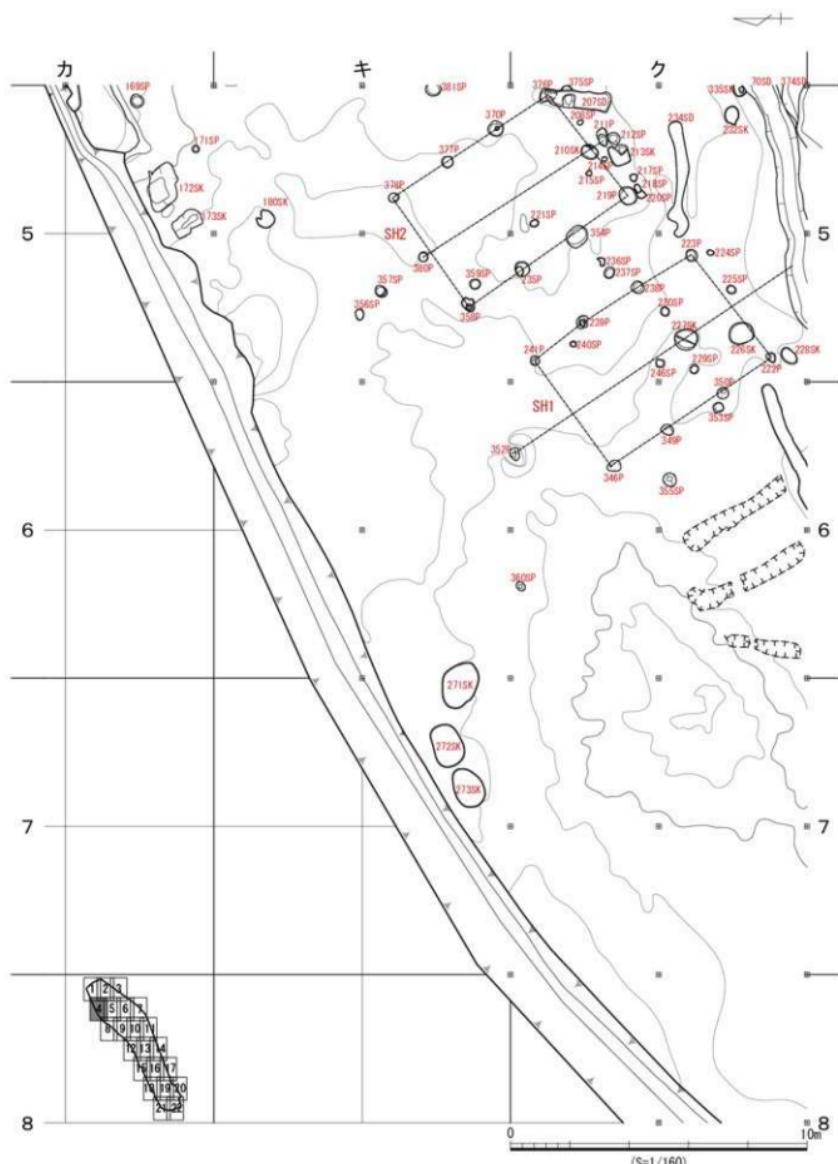
(S=1/160)



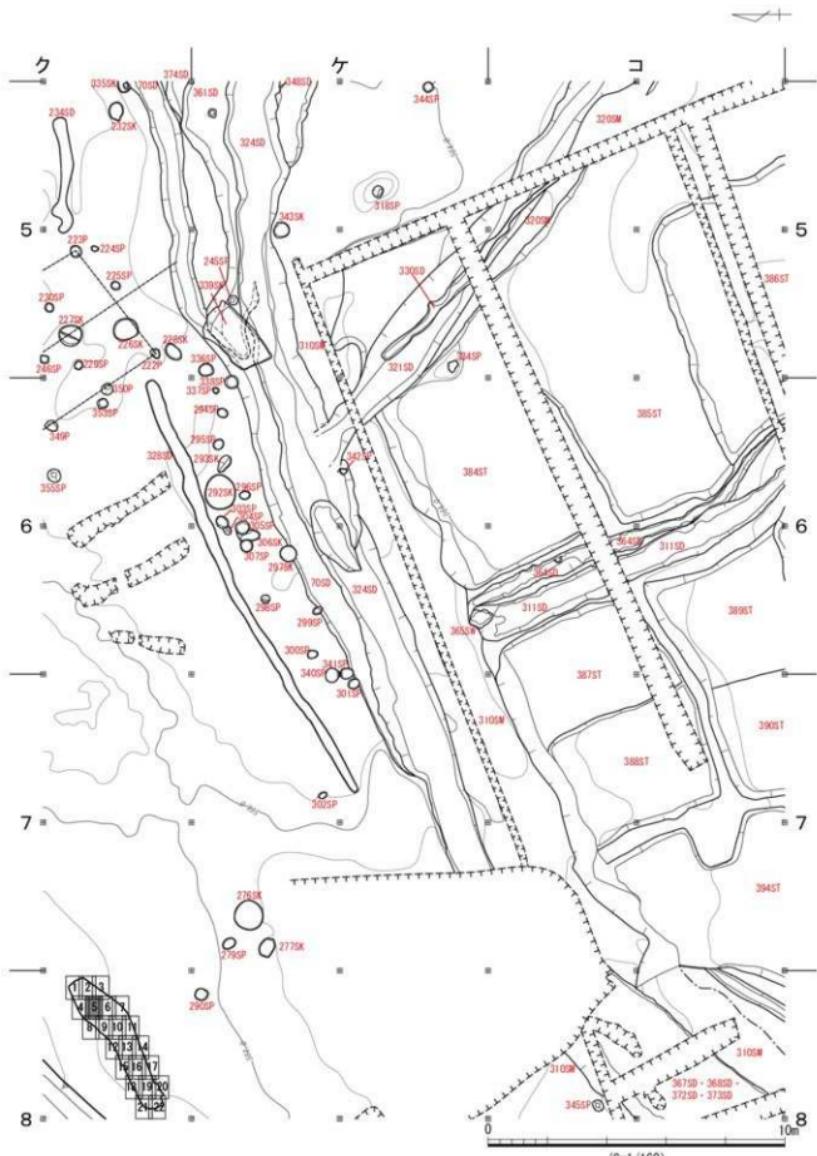
第14図 発掘区全域分割図 第1造横面（2）



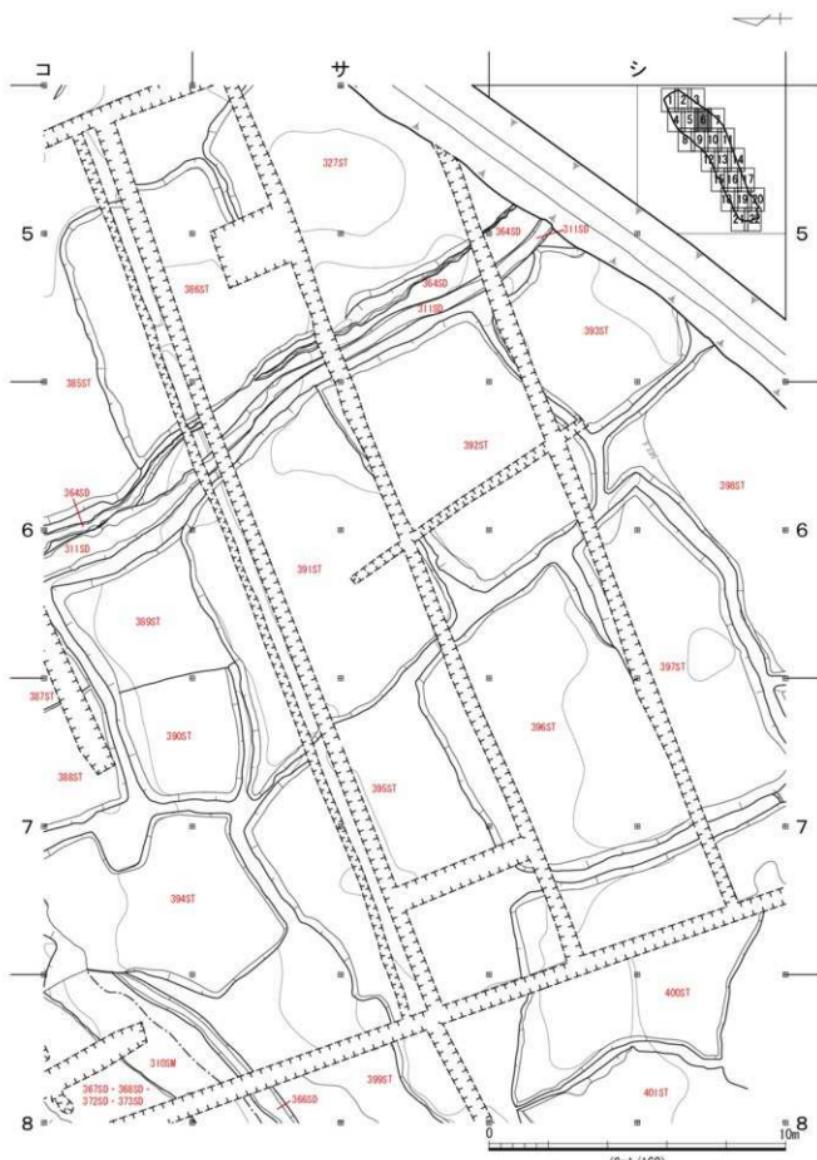
第15図 発掘区全域分割図 第1造構面 (3)



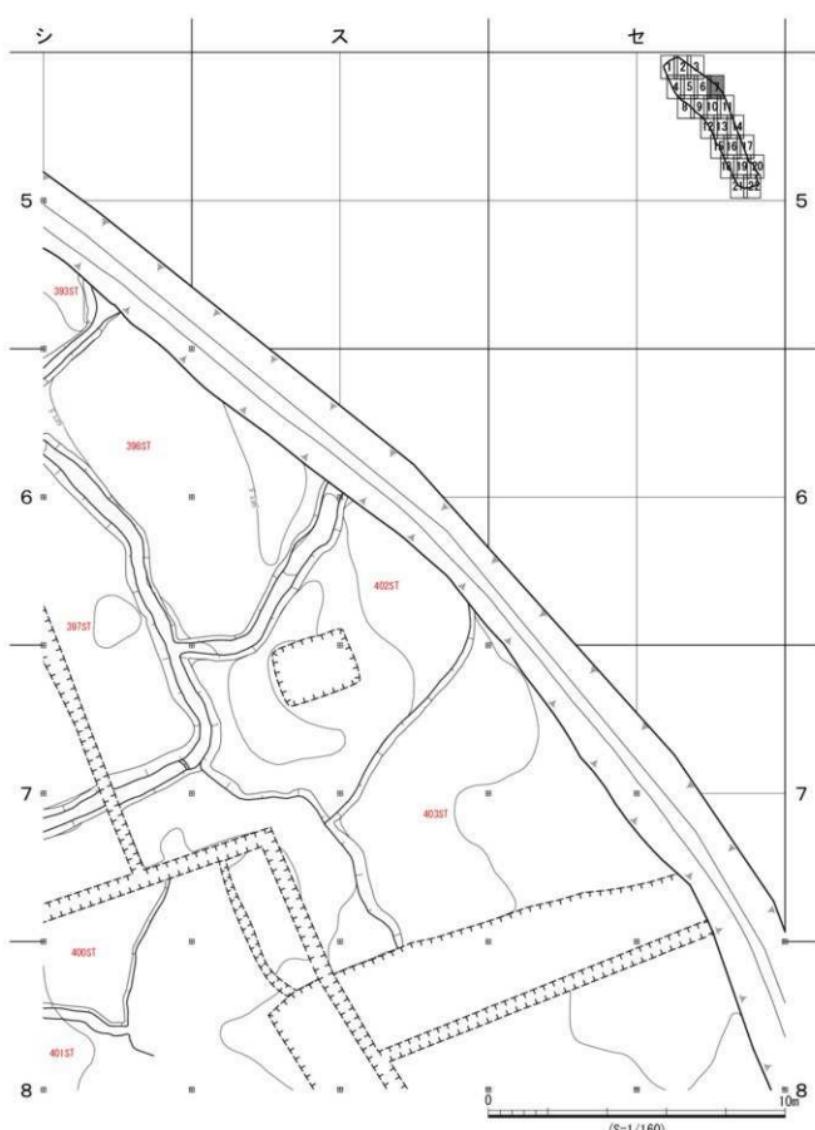
第16図 発掘区全域分割図 第1造横面（4）



第17図 発掘区全域分割図 第1造構面 (5)

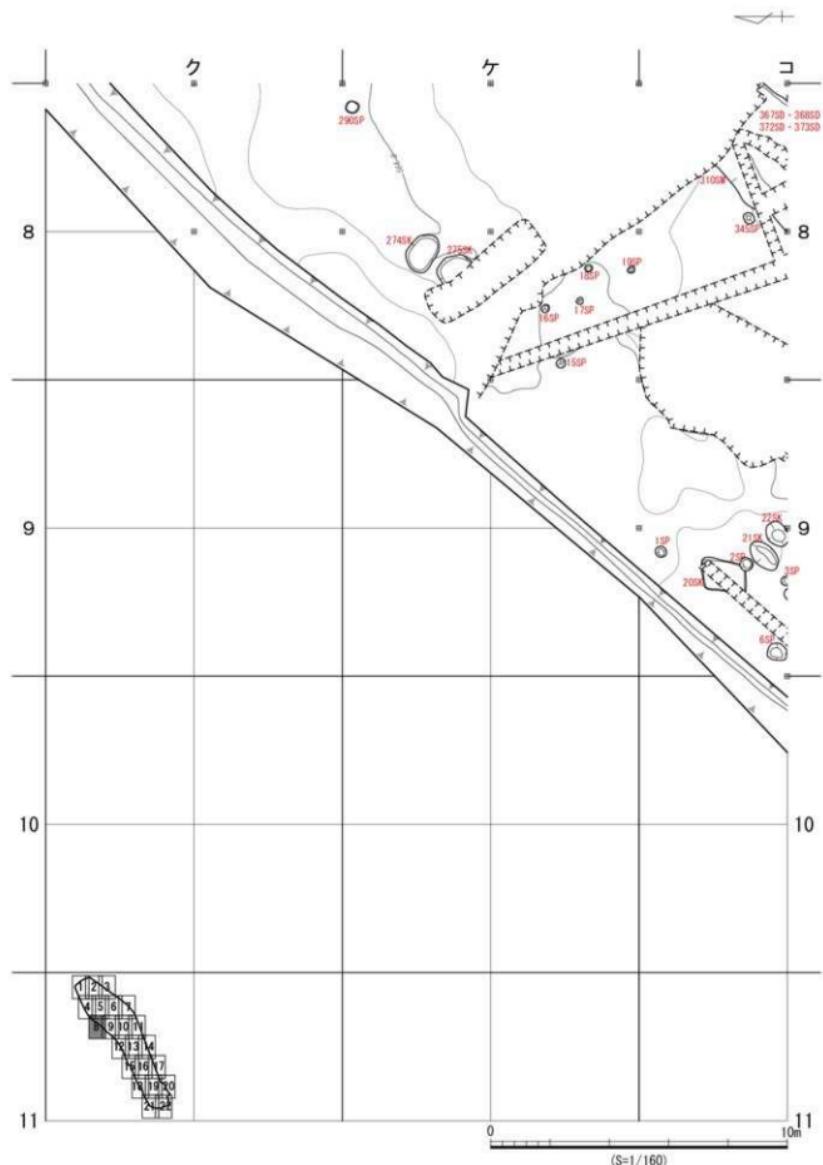


第18図 発掘区全域分割図 第1造横面 (6)

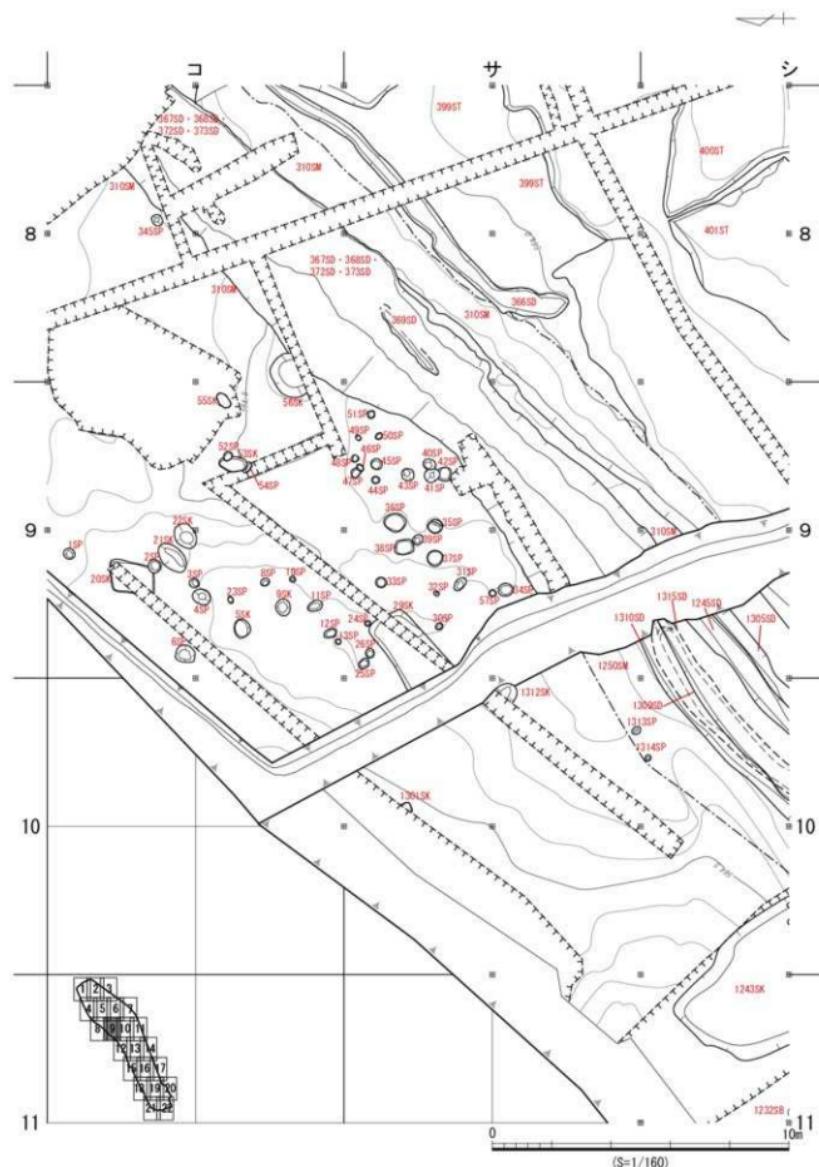


第19図 発掘区全域分割図 第1造構面（7）

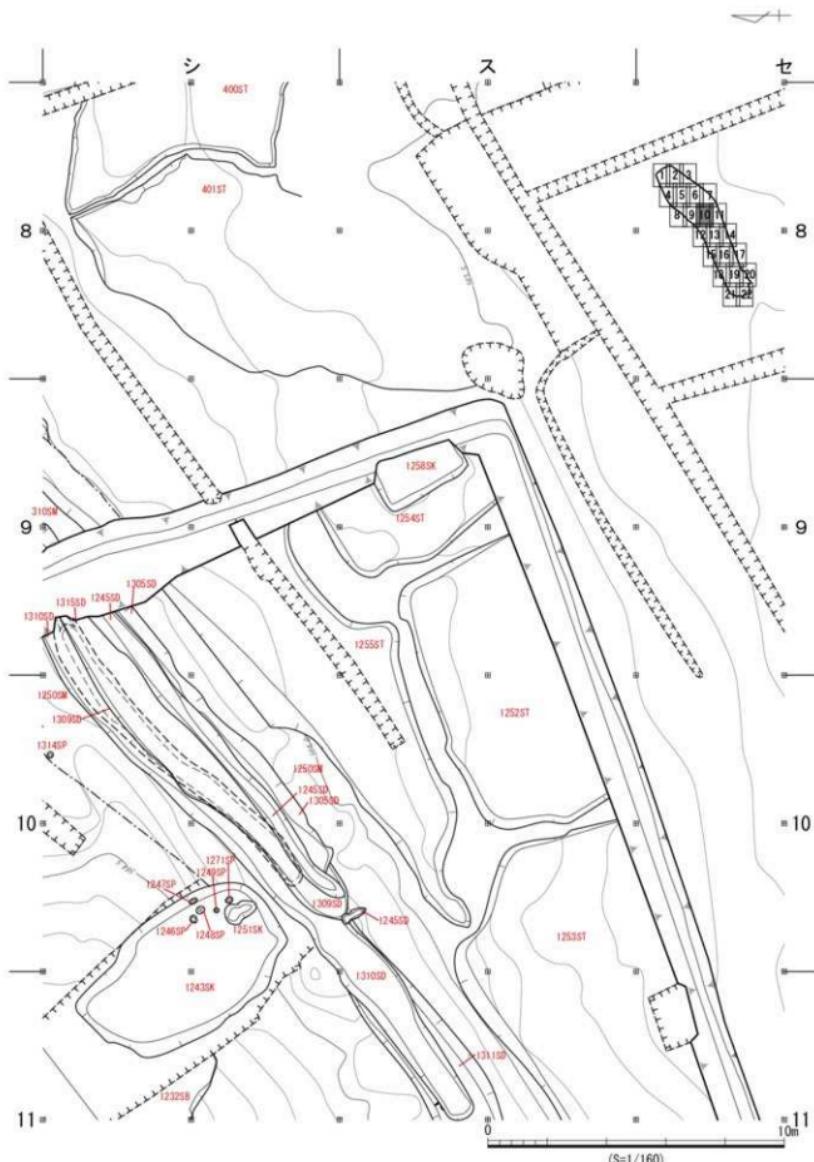
(S=1/160)



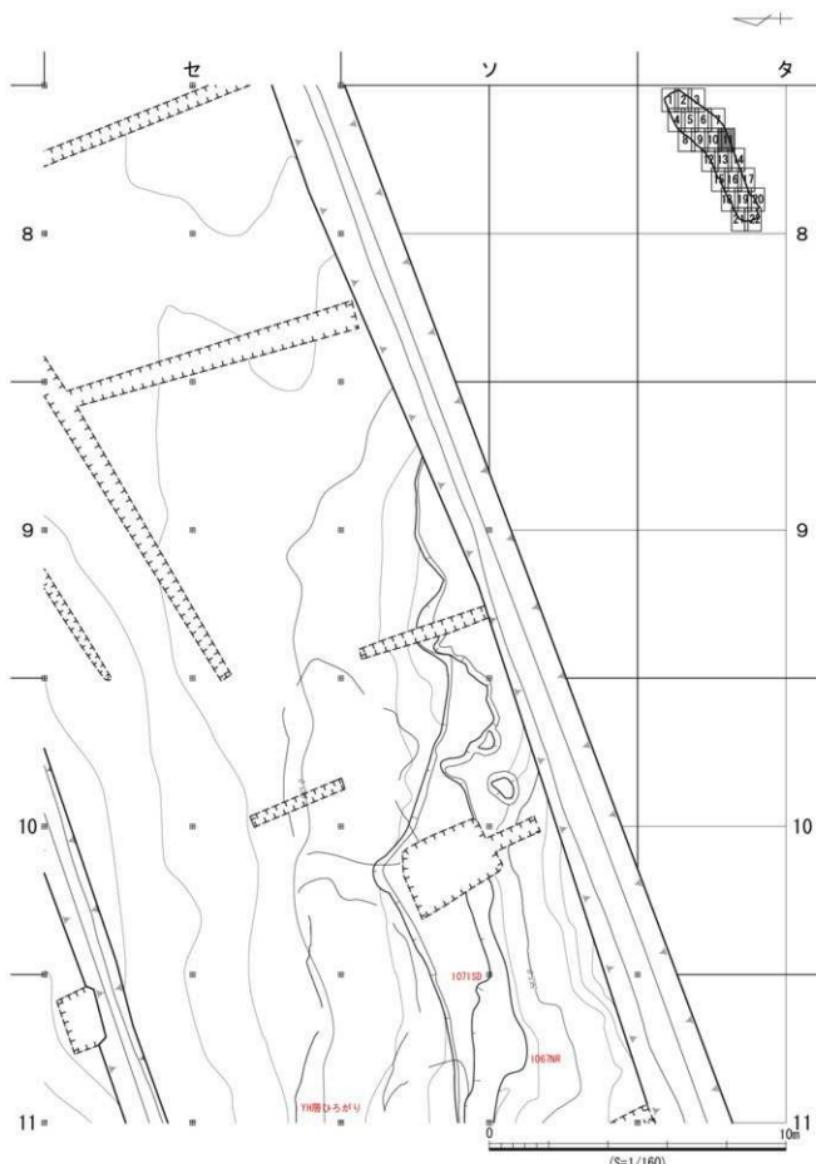
第20図 発掘区全域分割図 第1造横面 (8)



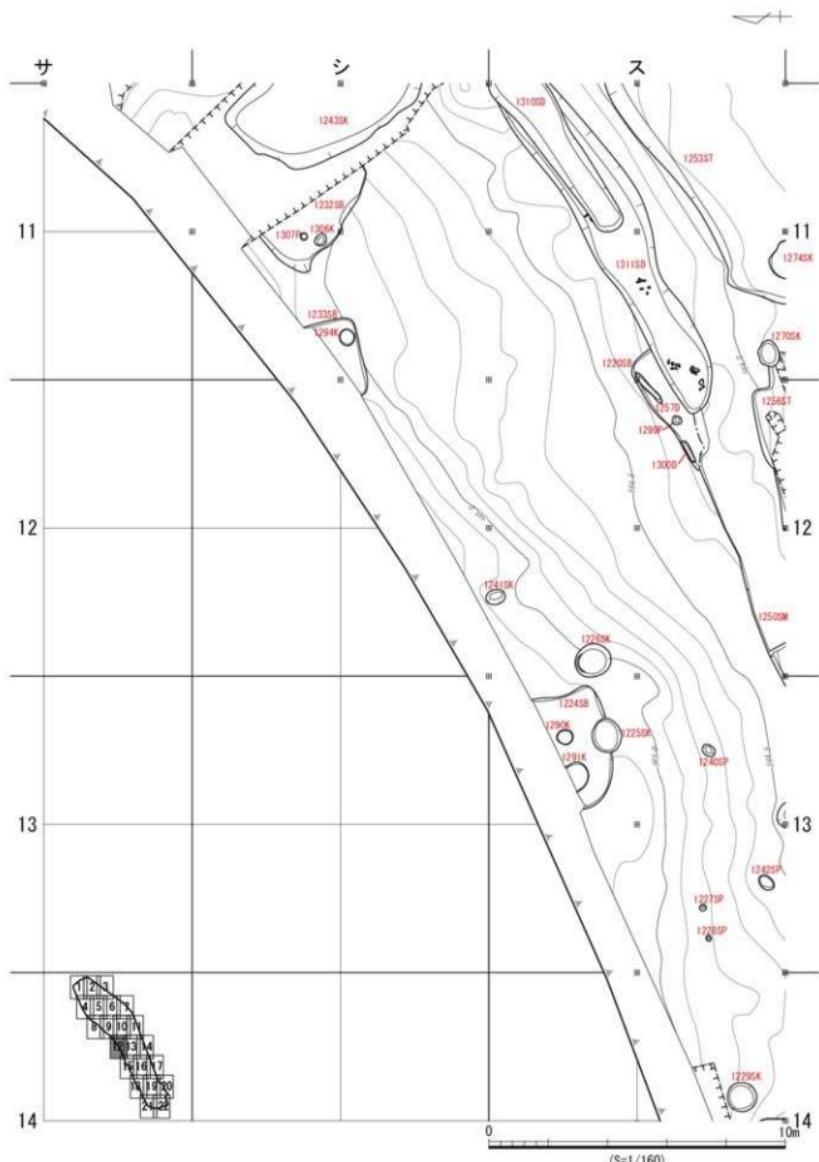
第21図 発掘区全域分割図 第1造構面(9)



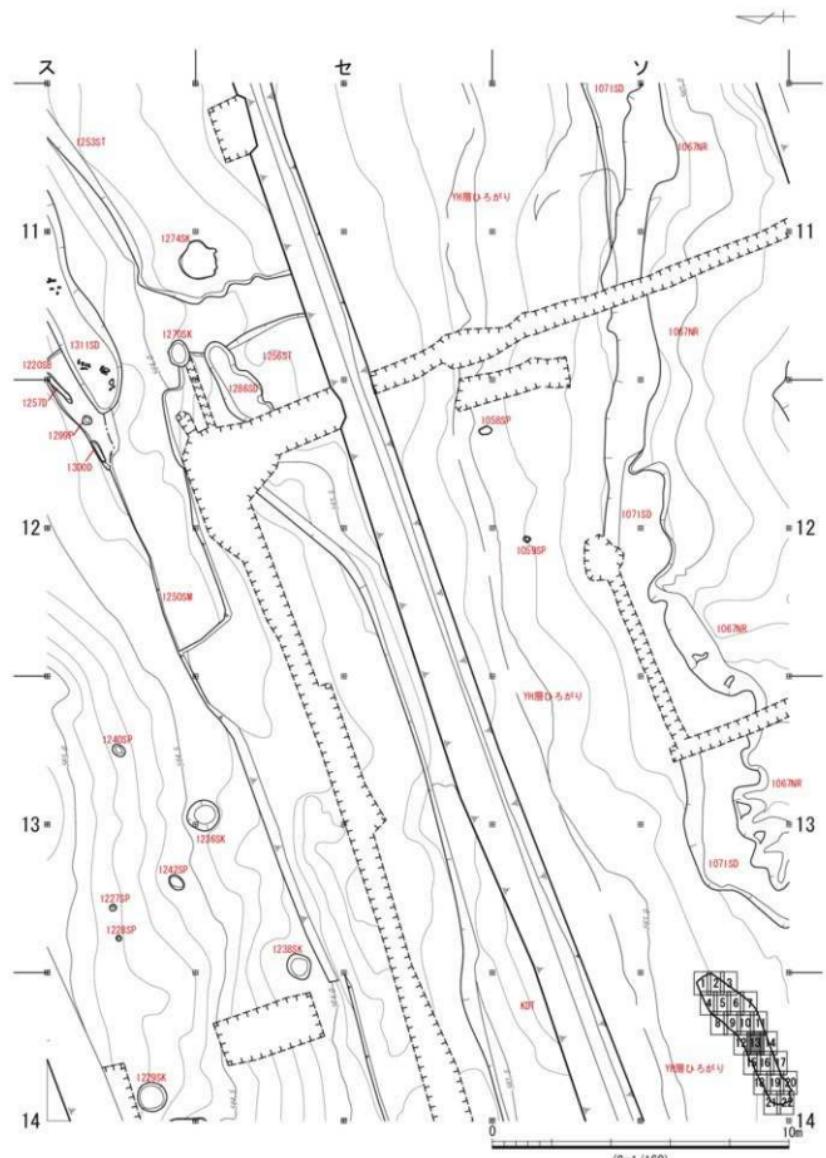
第22図 発掘区全域分割図 第1造横面 (10)



第23図 発掘区全域分割図 第1造構面 (11)



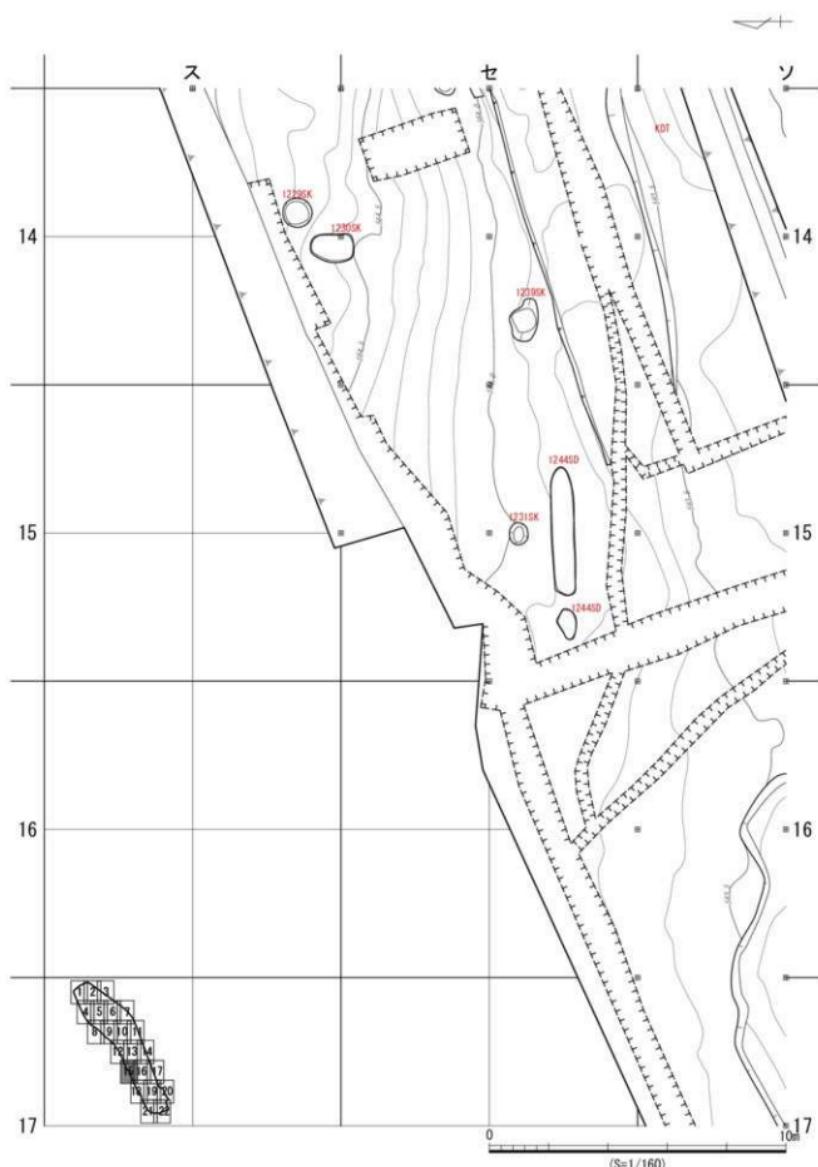
第24図 発掘区全域分割図 第1造横面 (12)



第25図 発掘区全域分割図 第1造構面 (13)

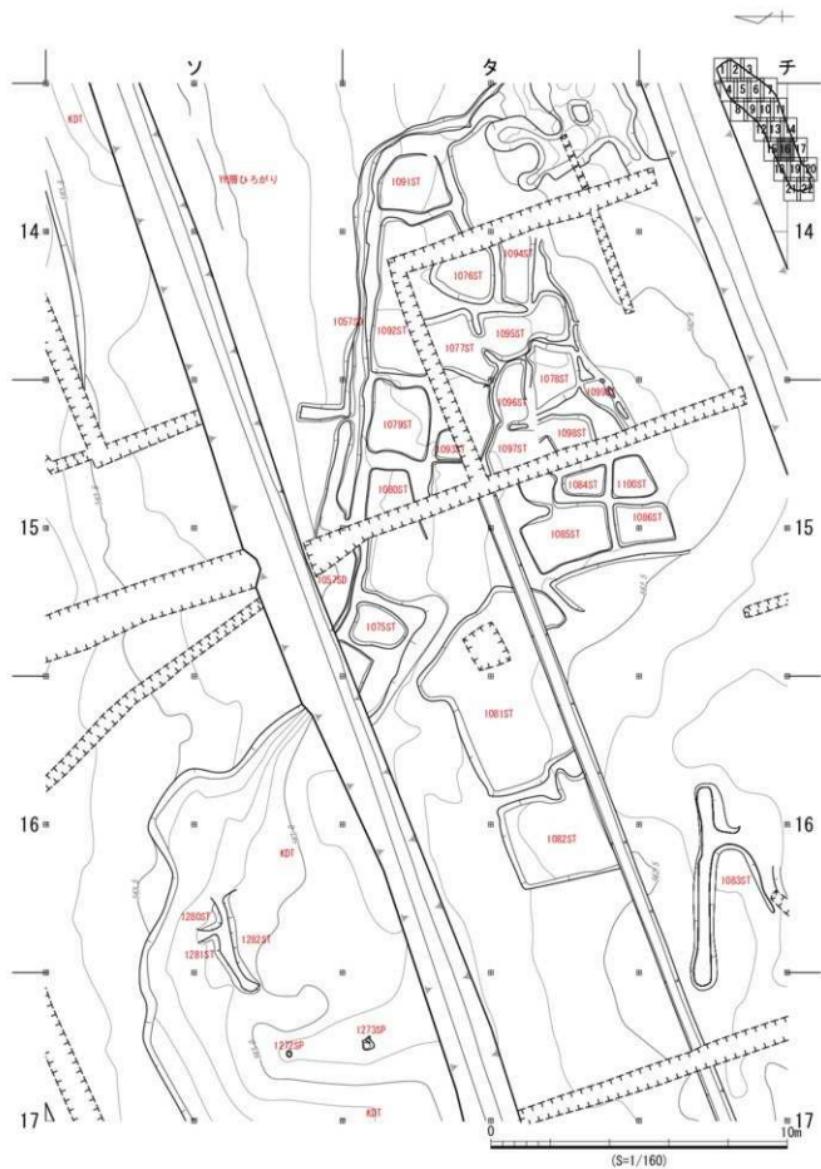


第26図 発掘区全域分割図 第1造横面 (14)

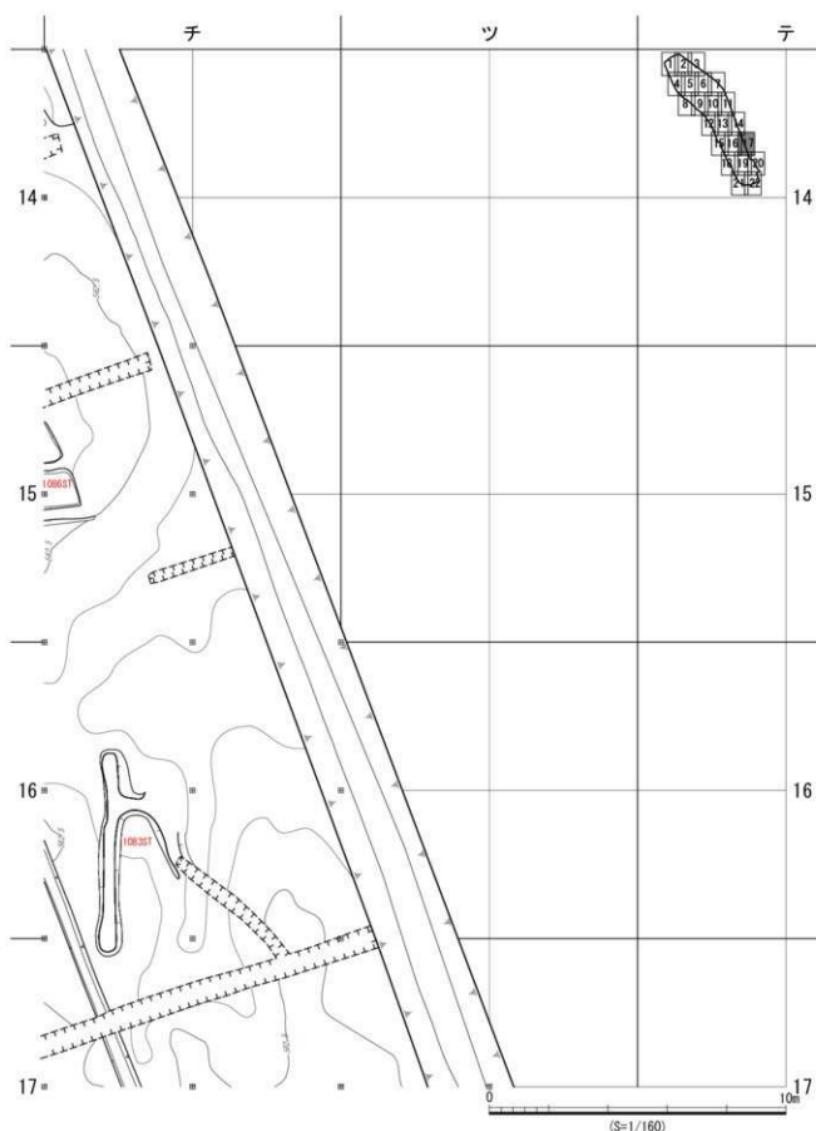


第27図 発掘区全域分割図 第1造構面 (15)

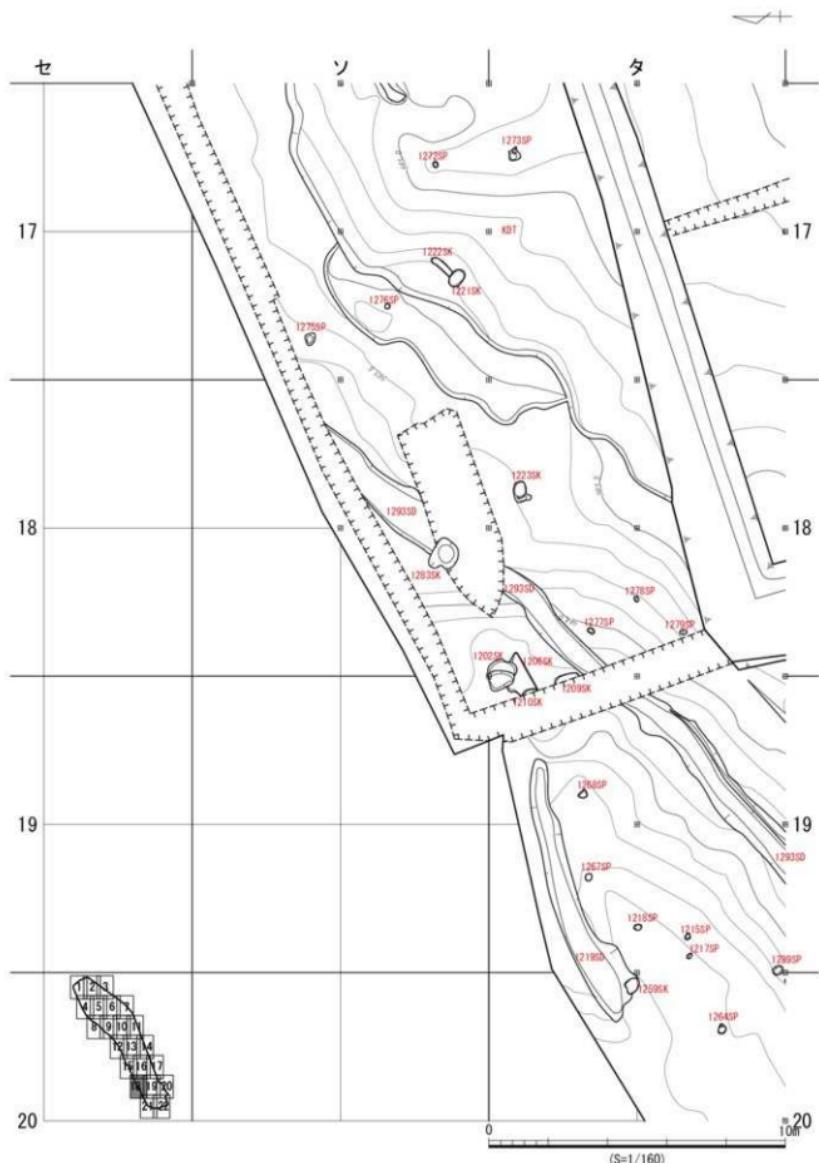
(S=1/160)



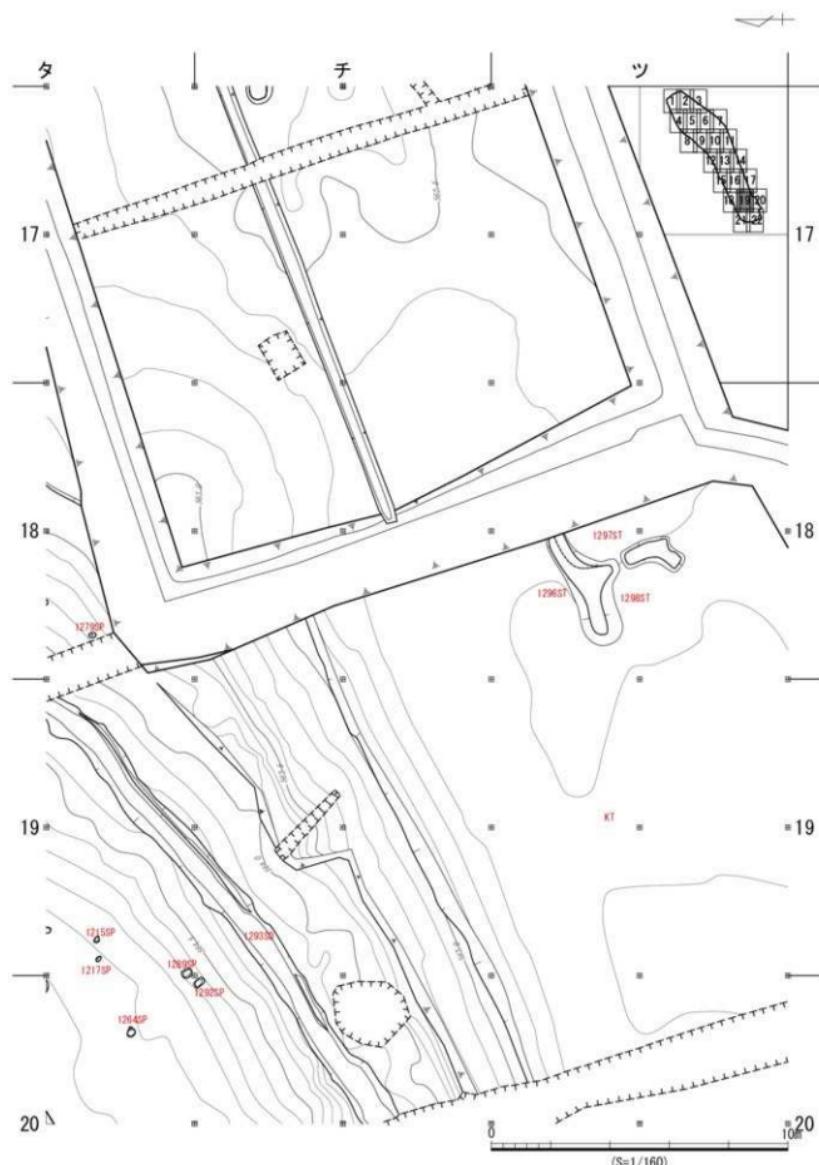
第28図 発掘区全域分割図 第1遺構面 (16)



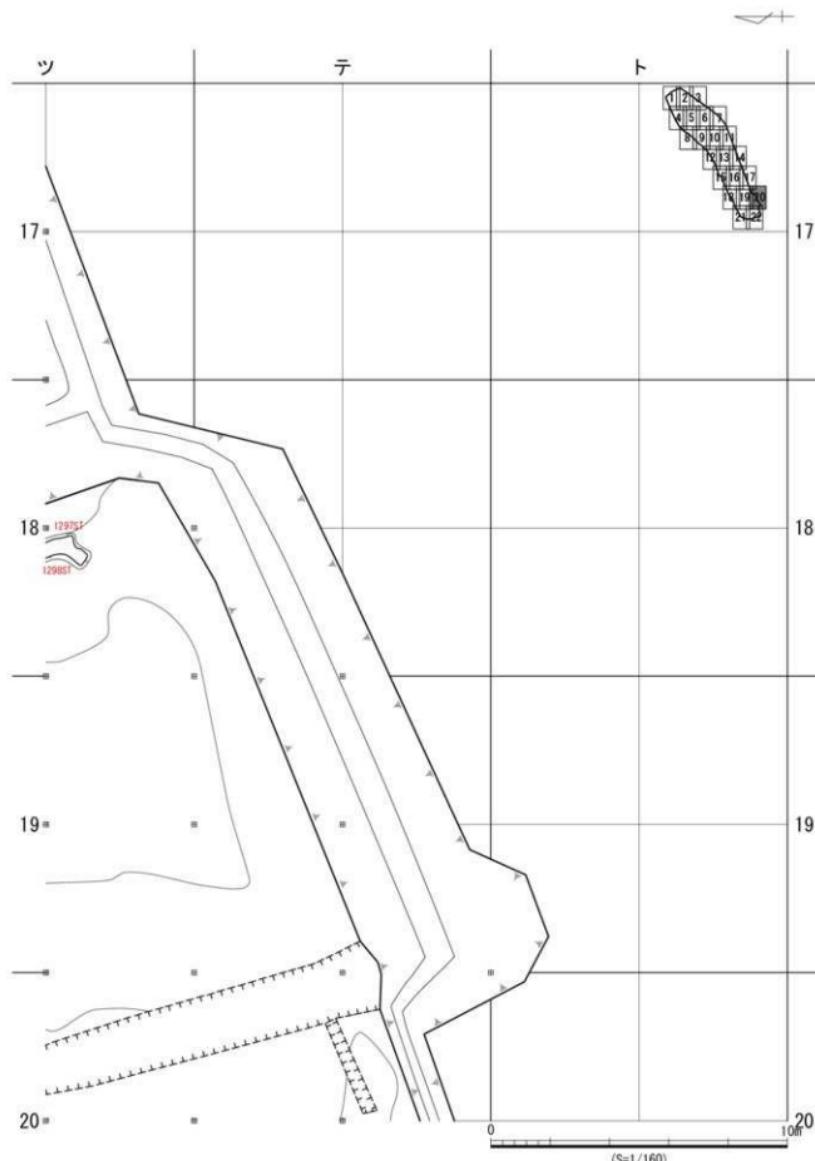
第29図 発掘区全域分割図 第1造構面 (17)



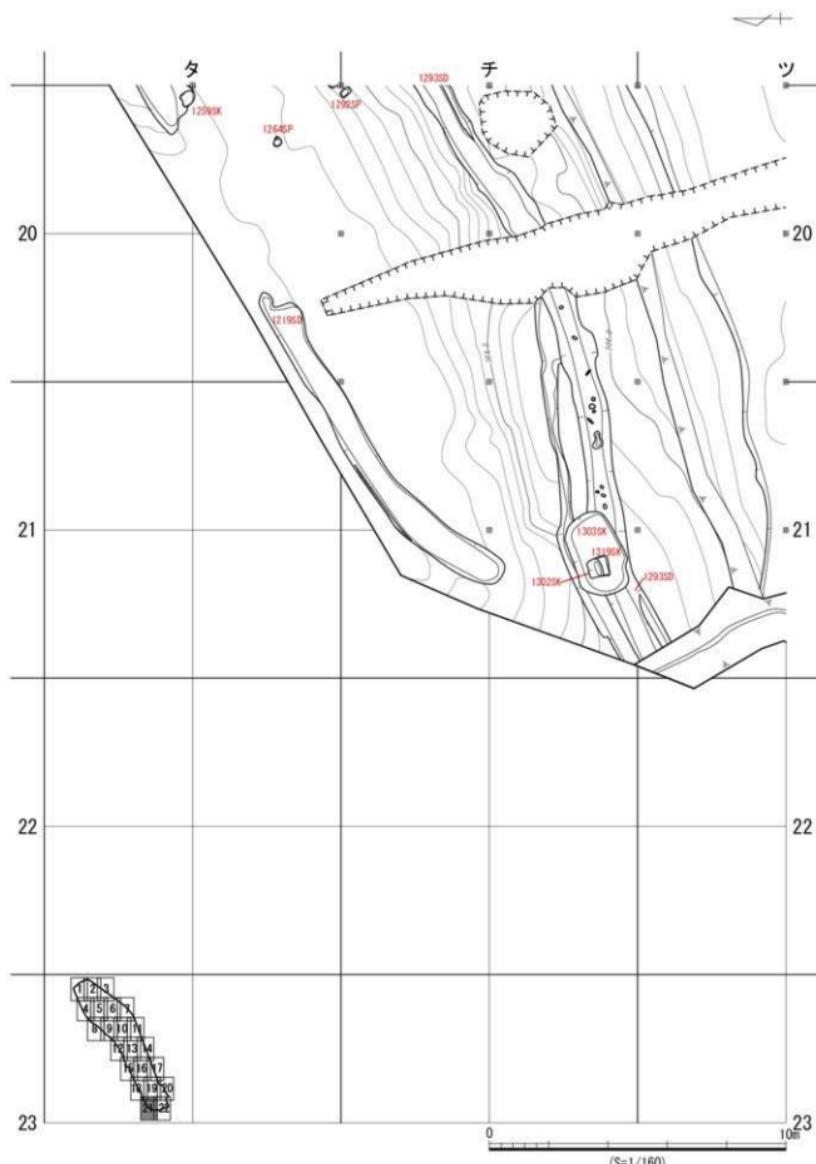
第30図 発掘区全域分割図 第1造横面 (18)



第31図 発掘区全域分割図 第1造構面 (19)

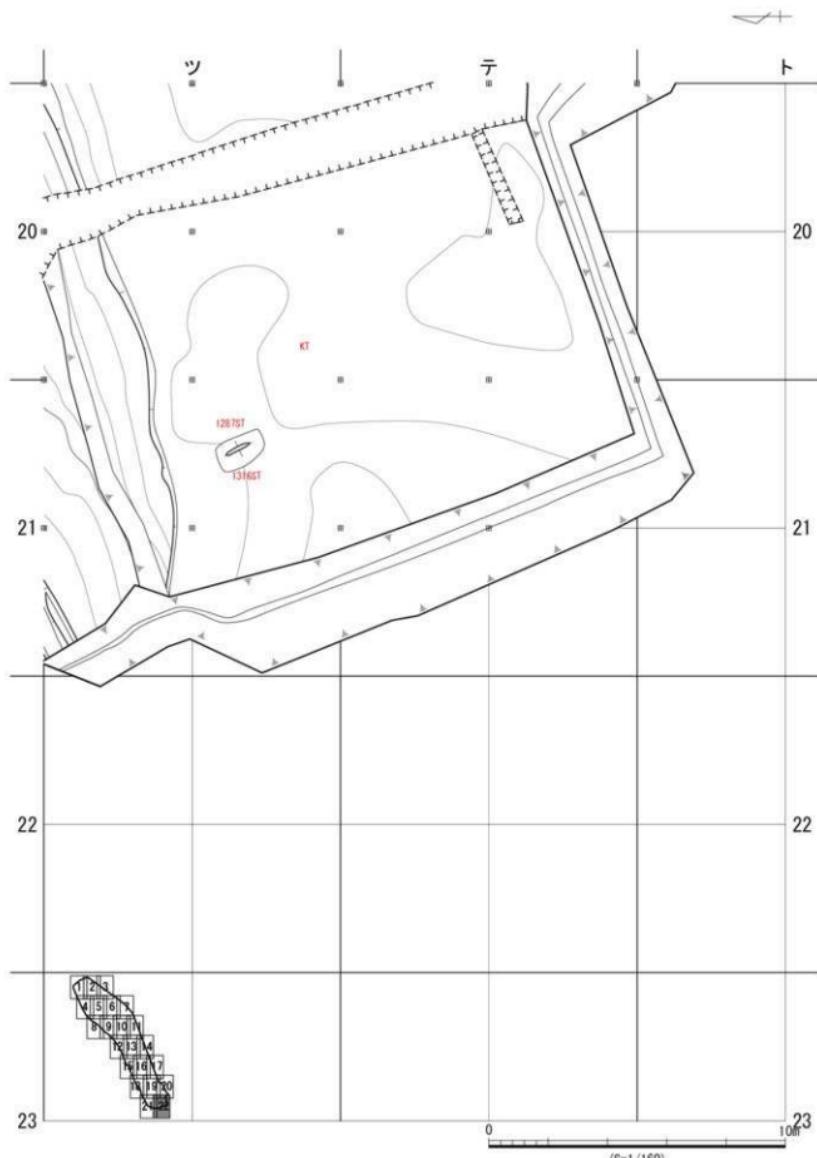


第32図 発掘区全域分割図 第1造横面 (20)

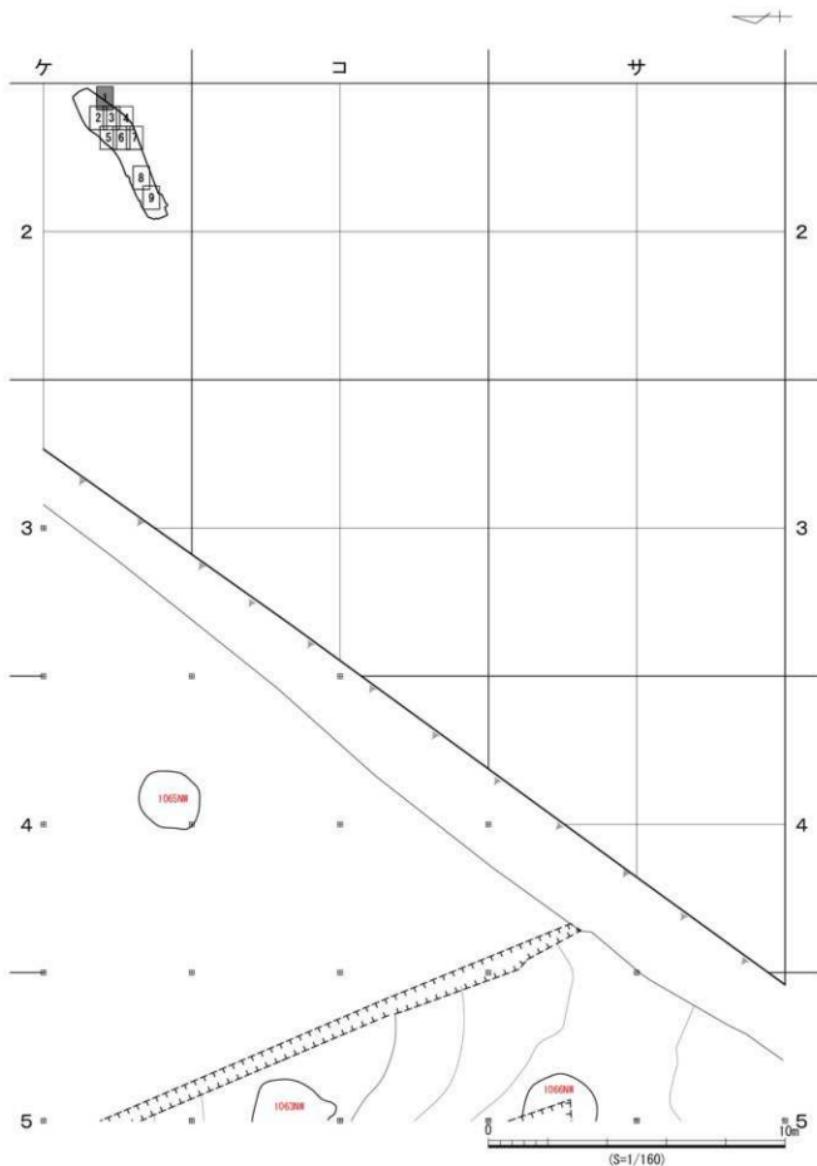


第33図 発掘区全域分割図 第1遺構面 (21)

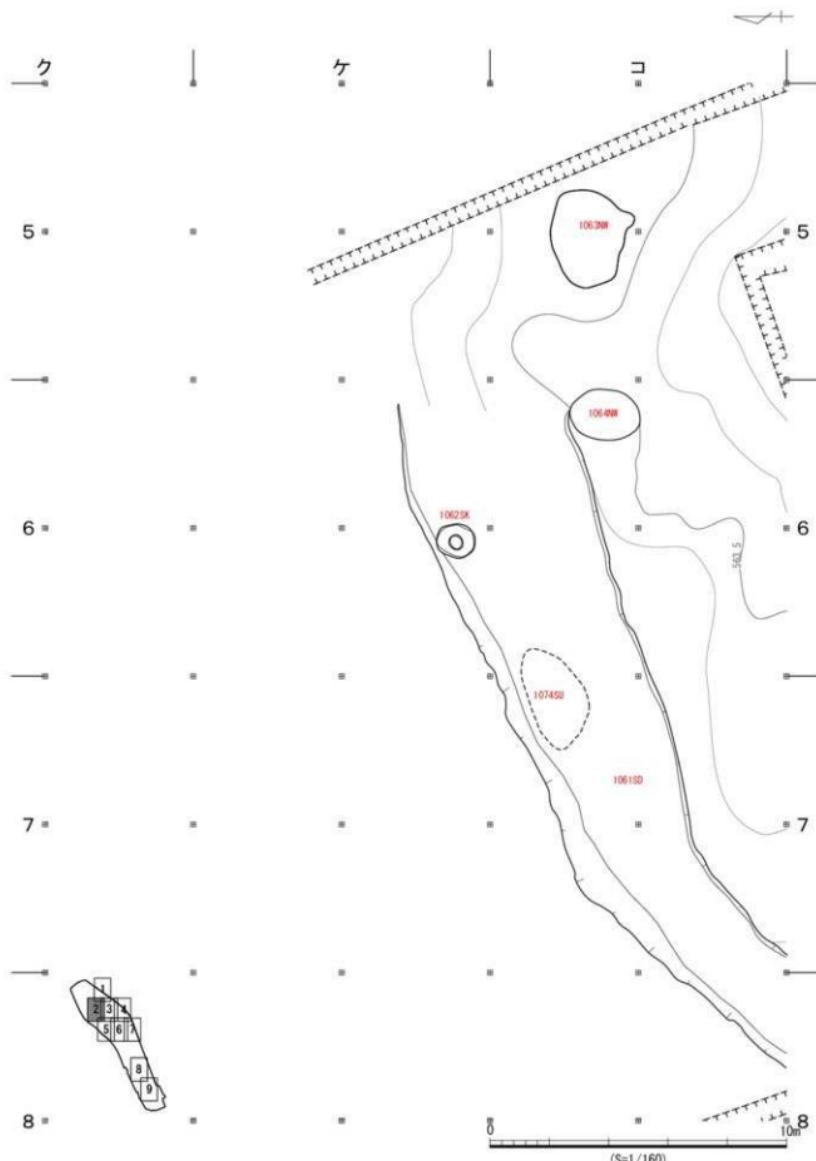
(S=1/160)



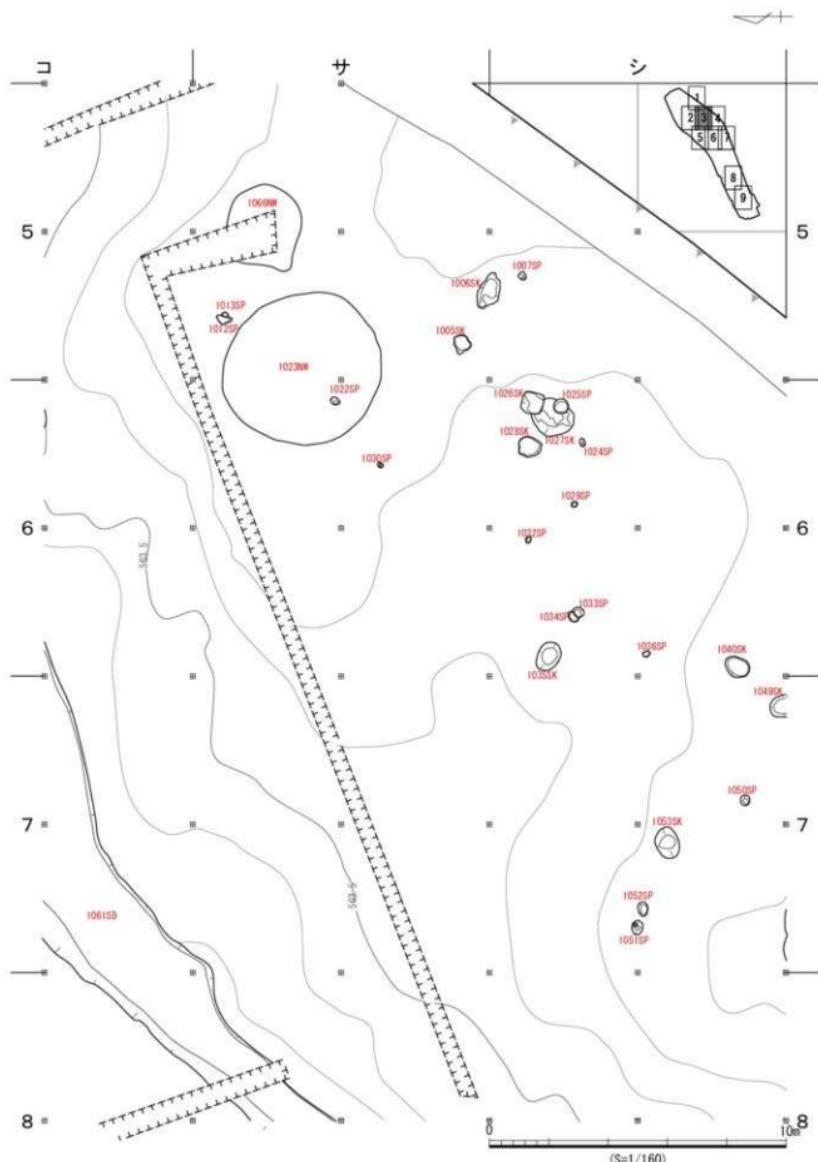
第34図 発掘区全域分割図 第1造横面 (22)



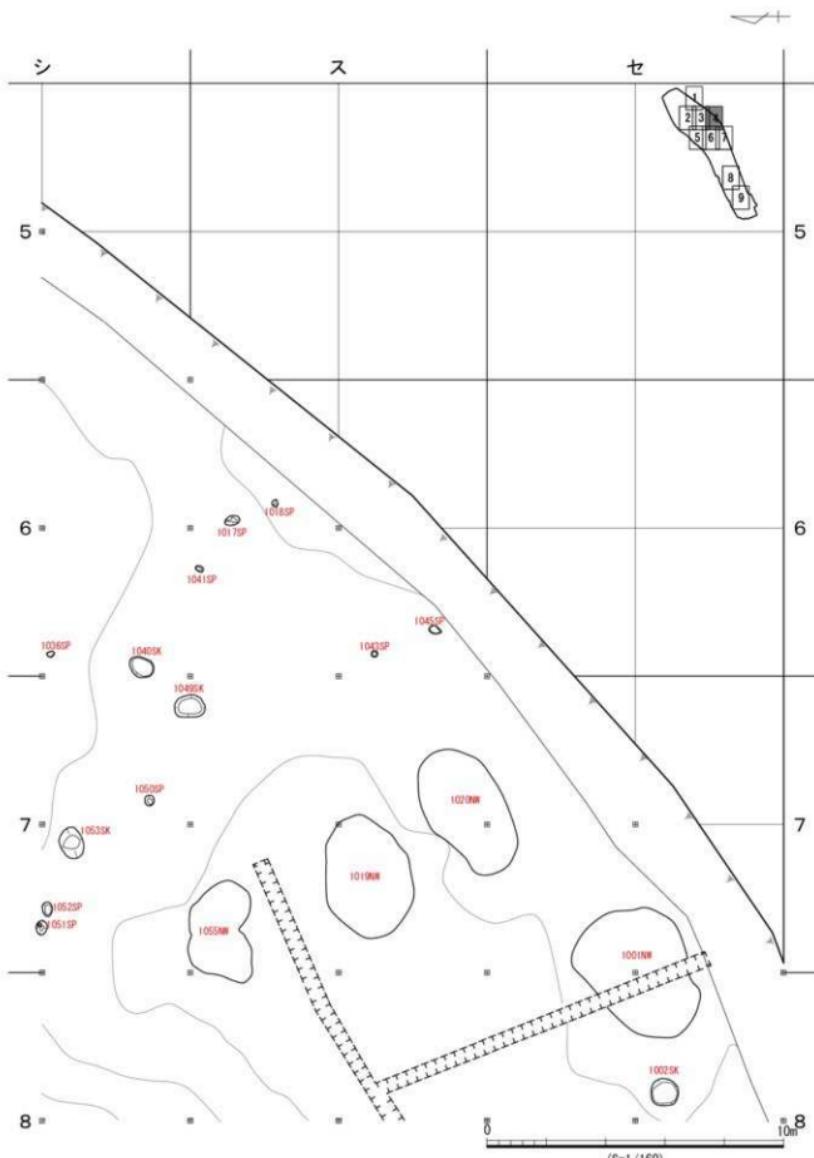
第35図 発掘区全域分割図 第2造構面（1）



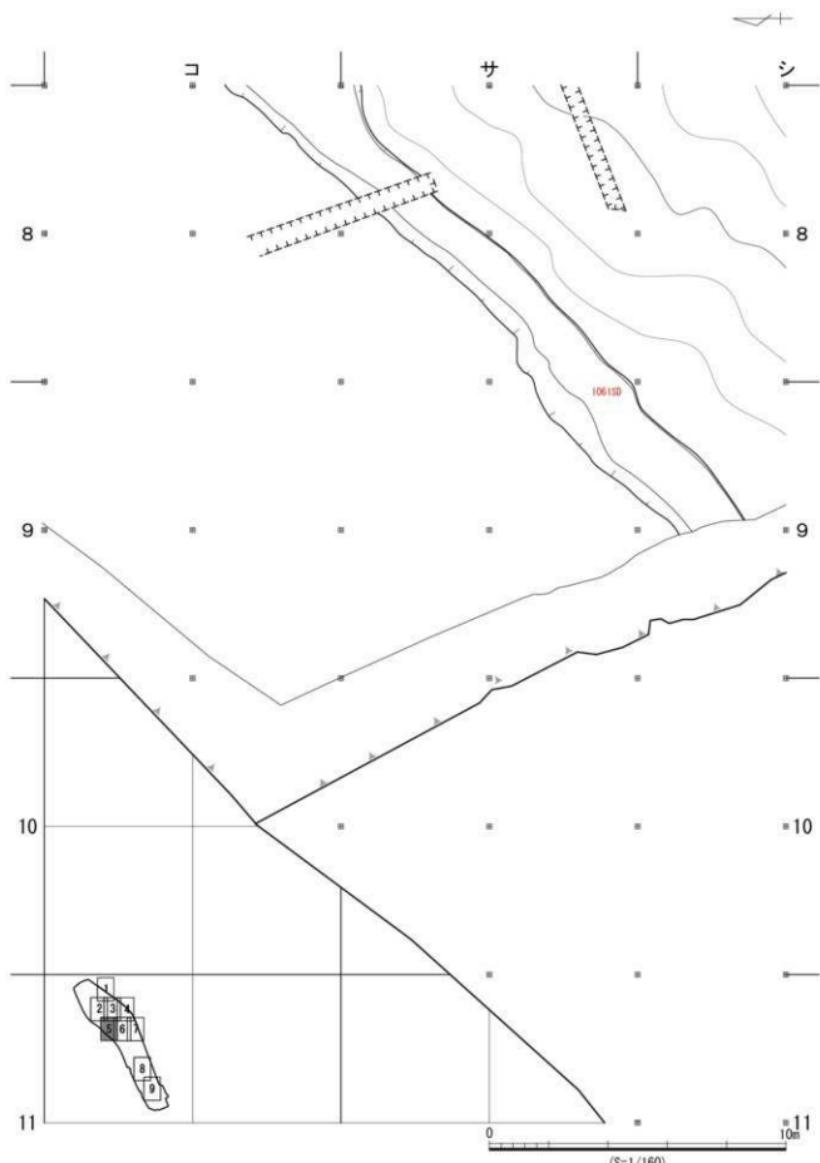
第36図 発掘区全域分割図 第2造横面（2）



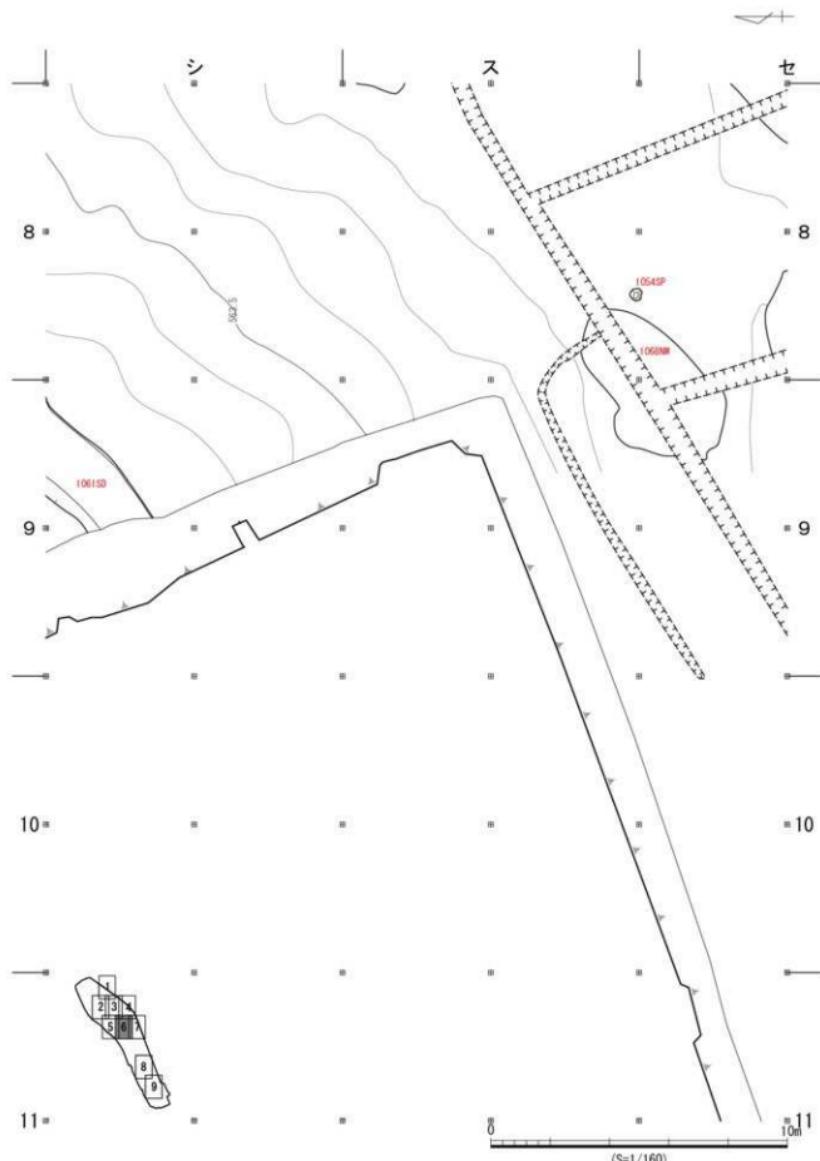
第37図 発掘区全域分割図 第2遺構面 (3)



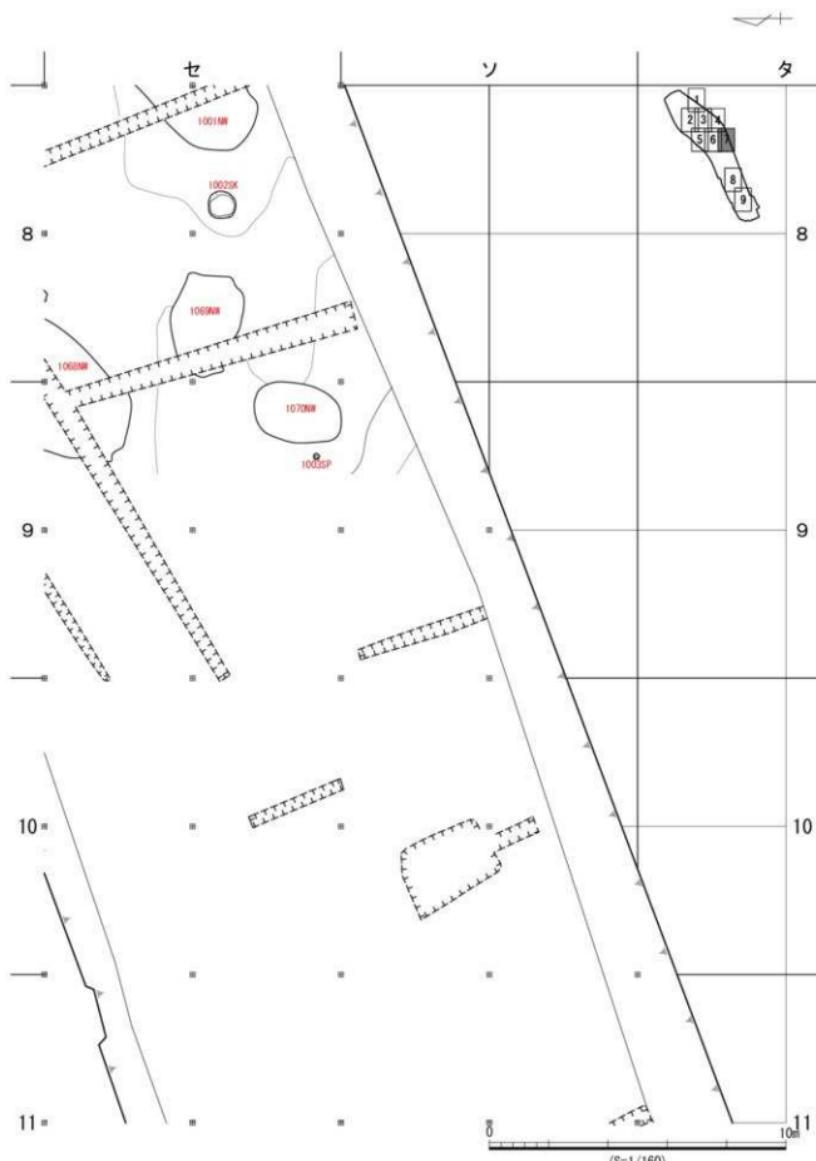
第38図 発掘区全域分割図 第2造横面 (4)



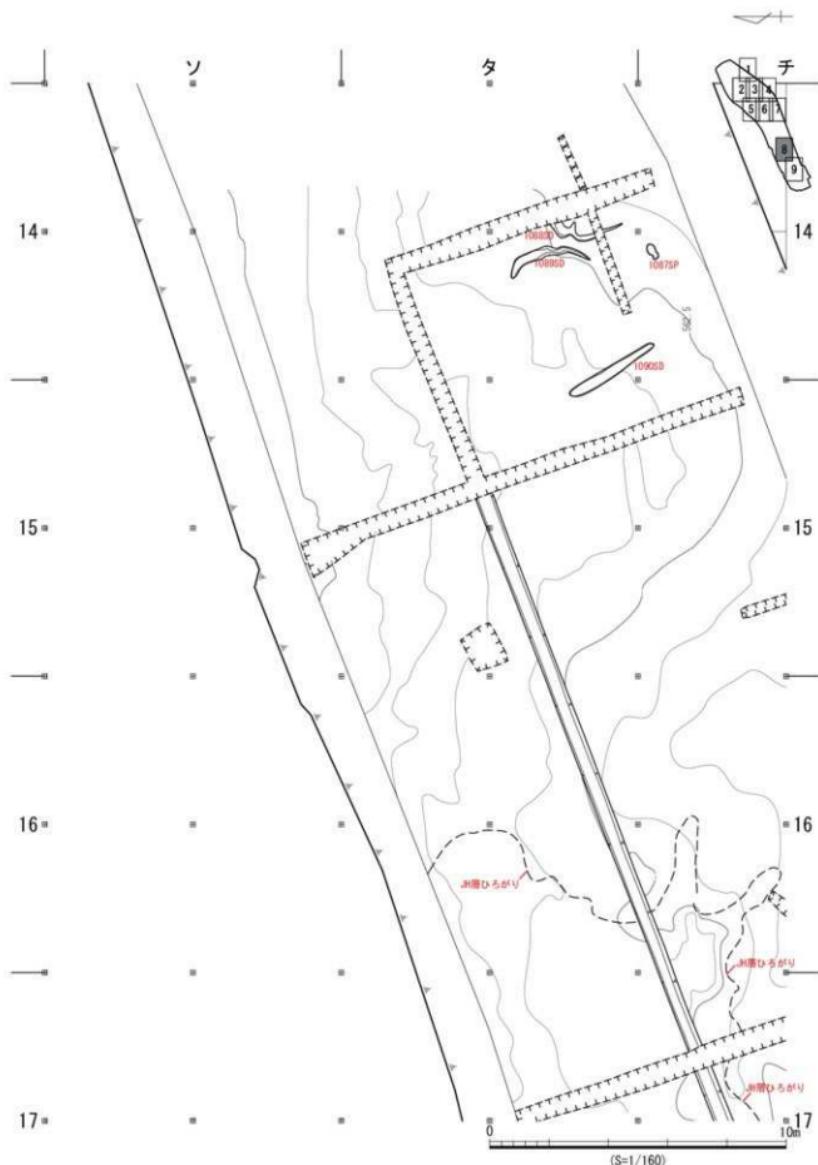
第39図 発掘区全域分割図 第2造構面 (5)



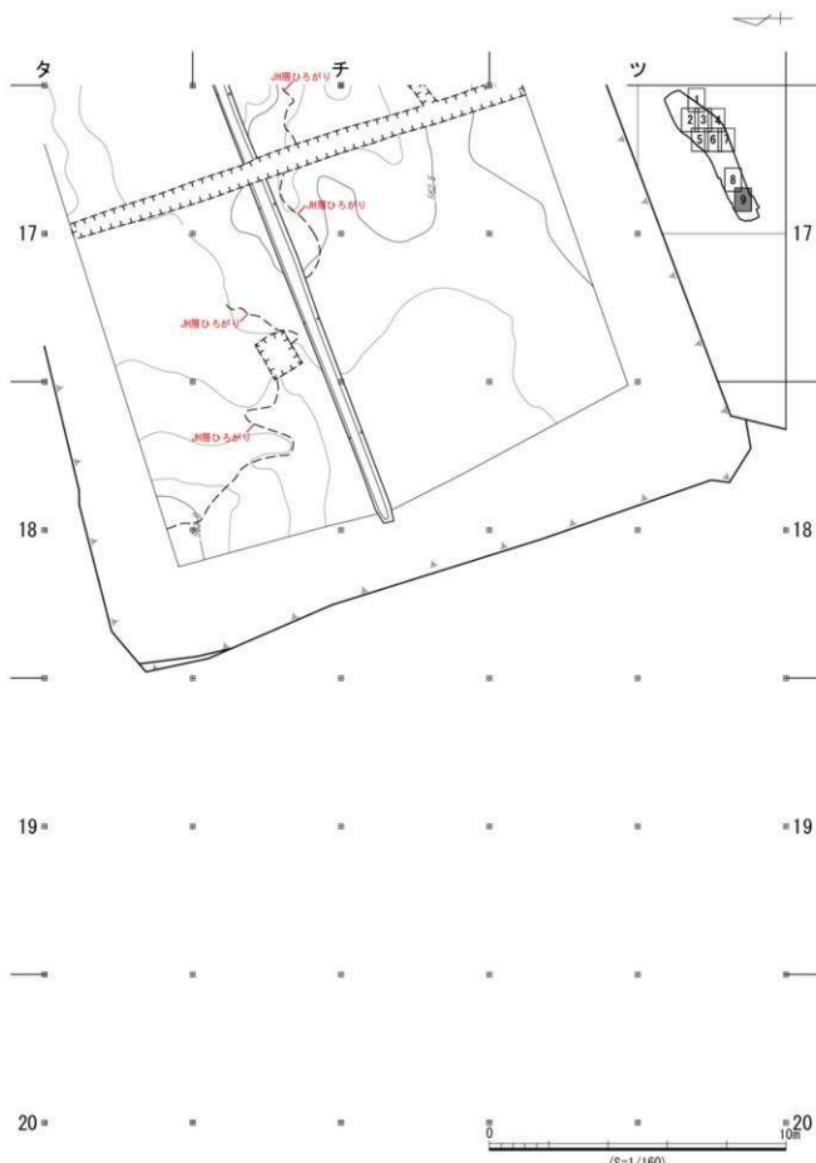
第40図 発掘区全域分割図 第2造横面（6）



第41図 発掘区全域分割図 第2造構面 (7)

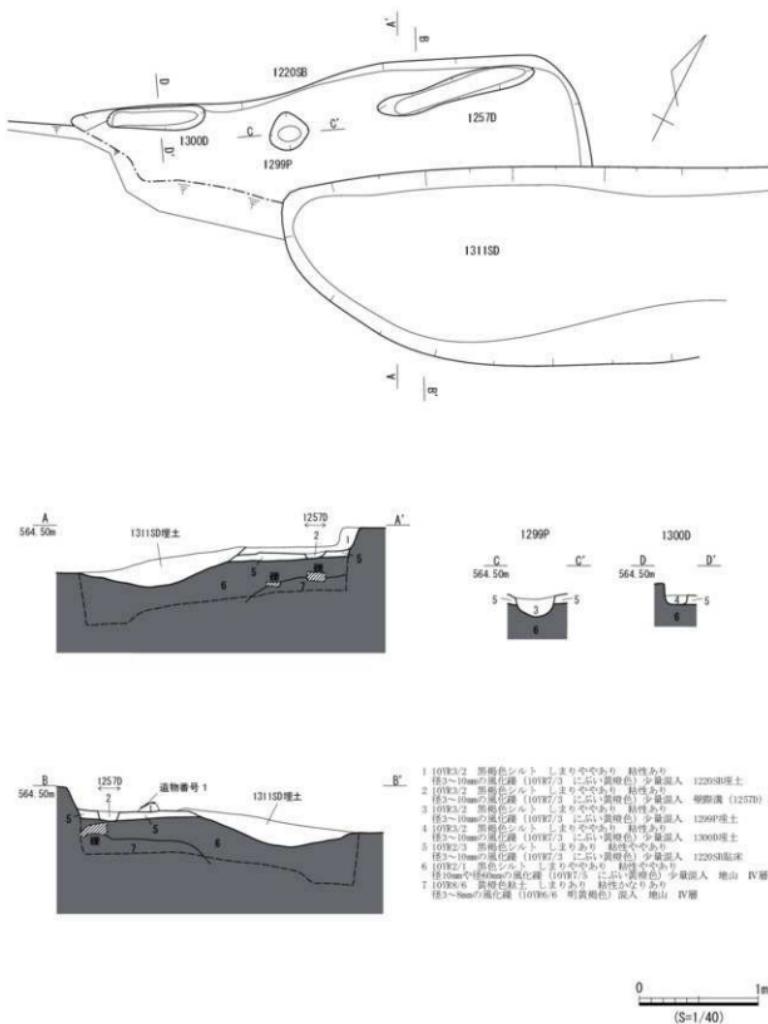


第42図 発掘区全域分割図 第2造横面 (8)

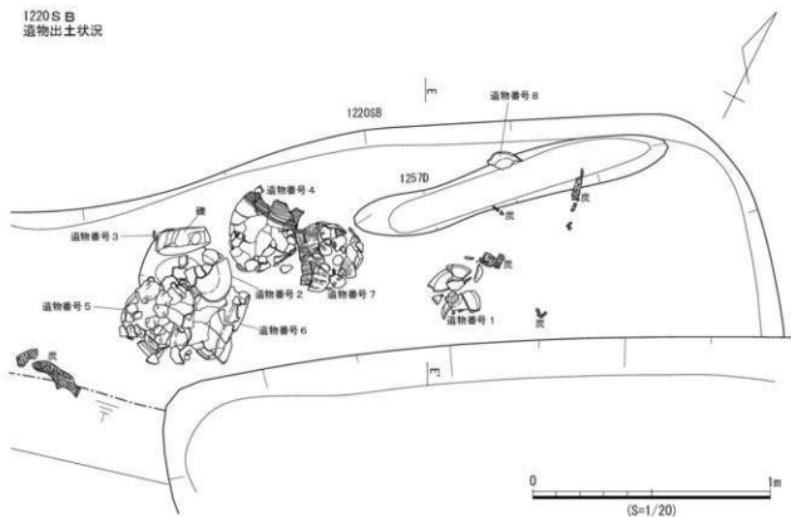


第43図 発掘区全域分割図 第2造構面 (9)

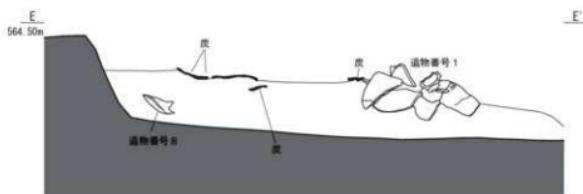
1220S B



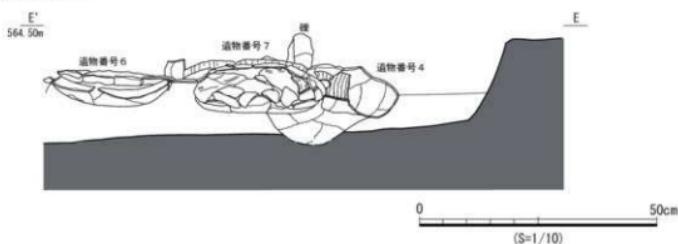
第44図 竪穴住居跡（1）

1220SB
遺物出土状況

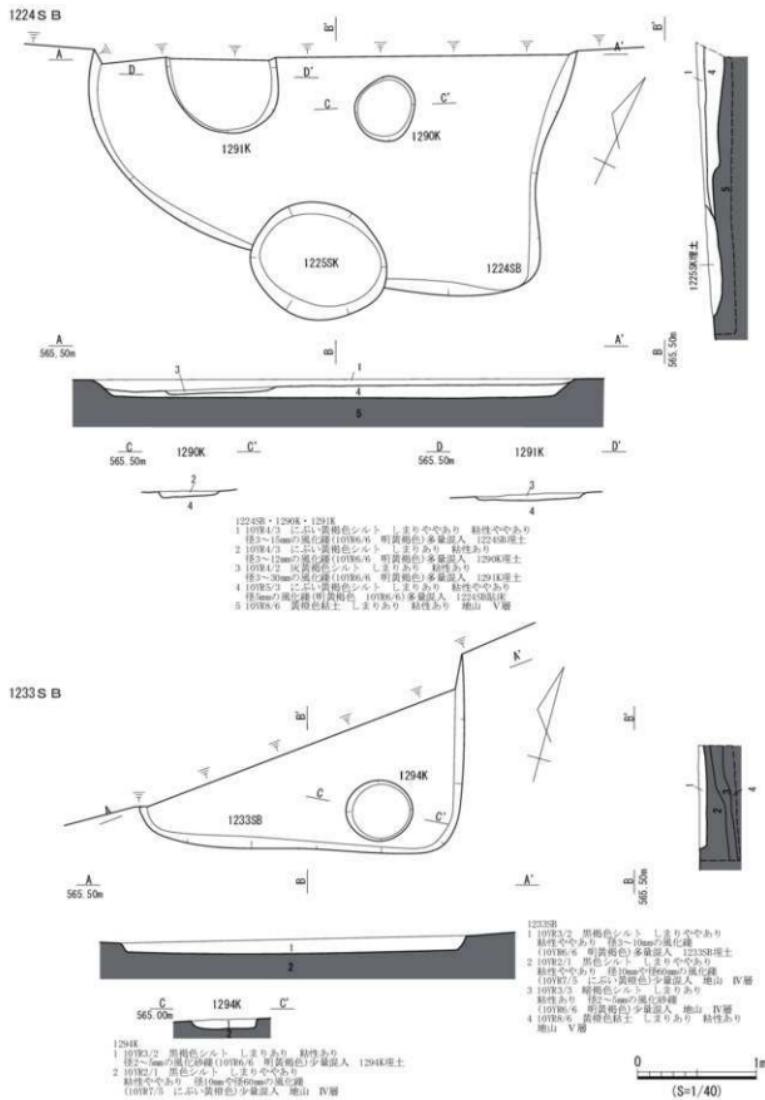
遺物出土状況見通し (西から)



遺物出土状況見通し (東から)

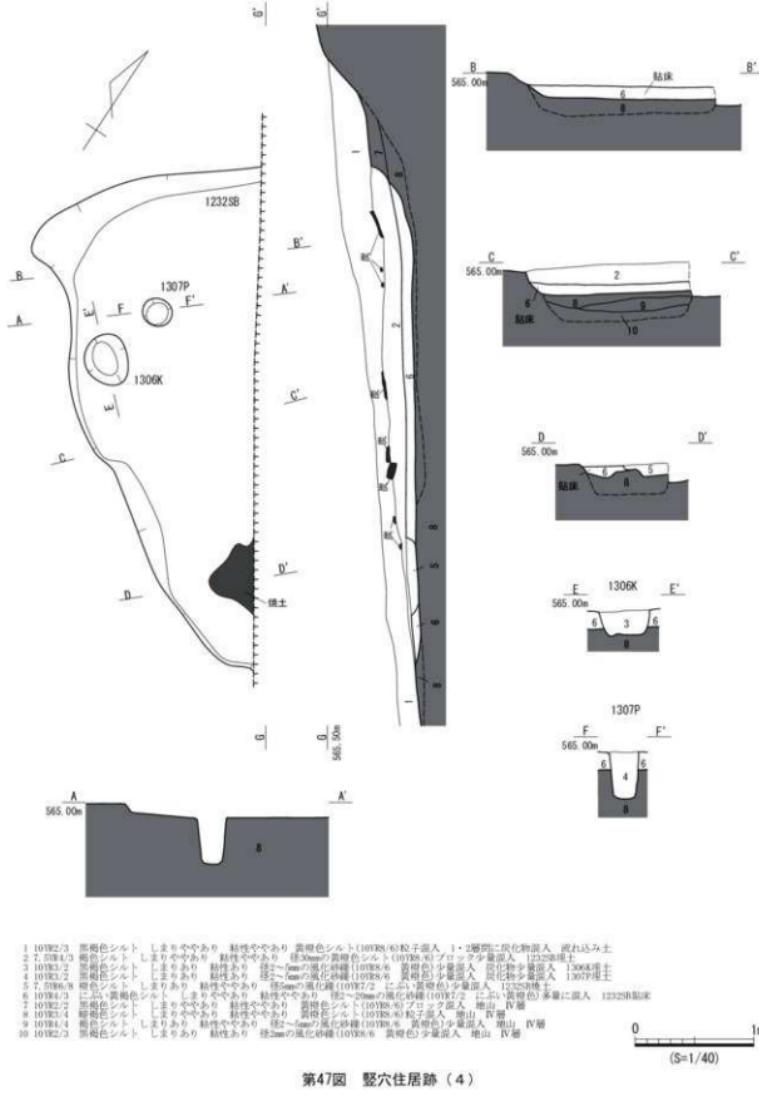


第45図 積穴住居跡 (2)



第46図 壇穴住居跡（3）

1232SB

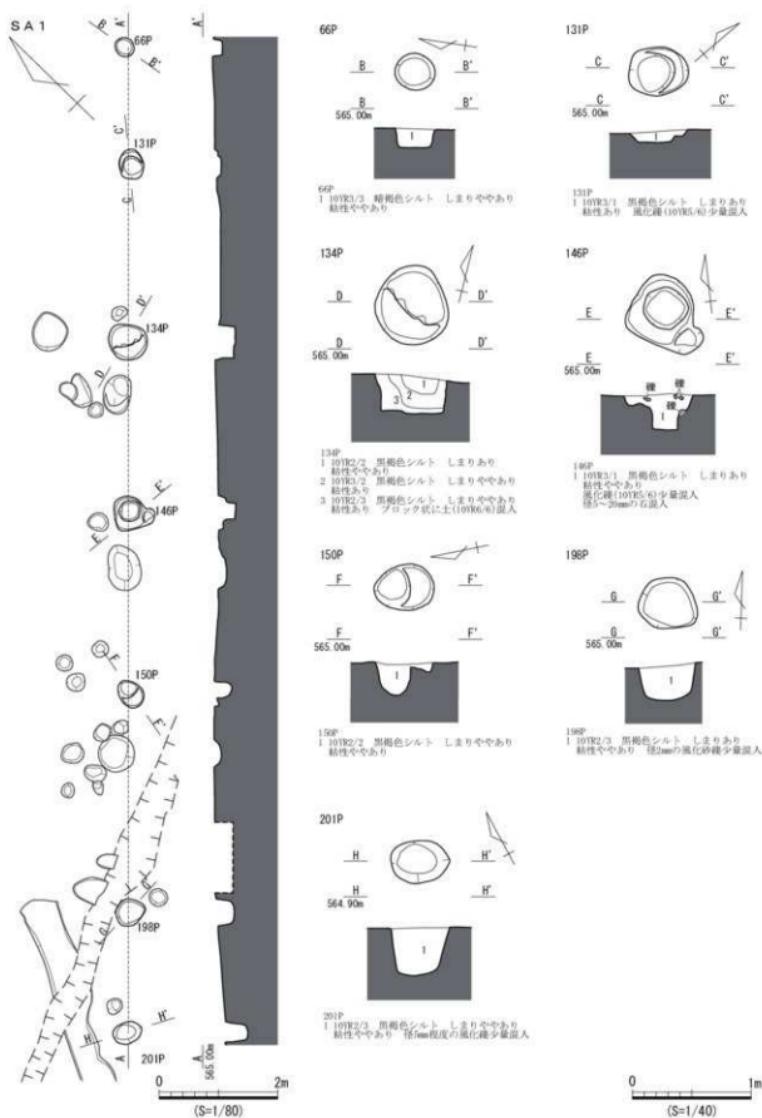


第47図 整穴住居跡（4）

1232 S B
炭化物出土状況

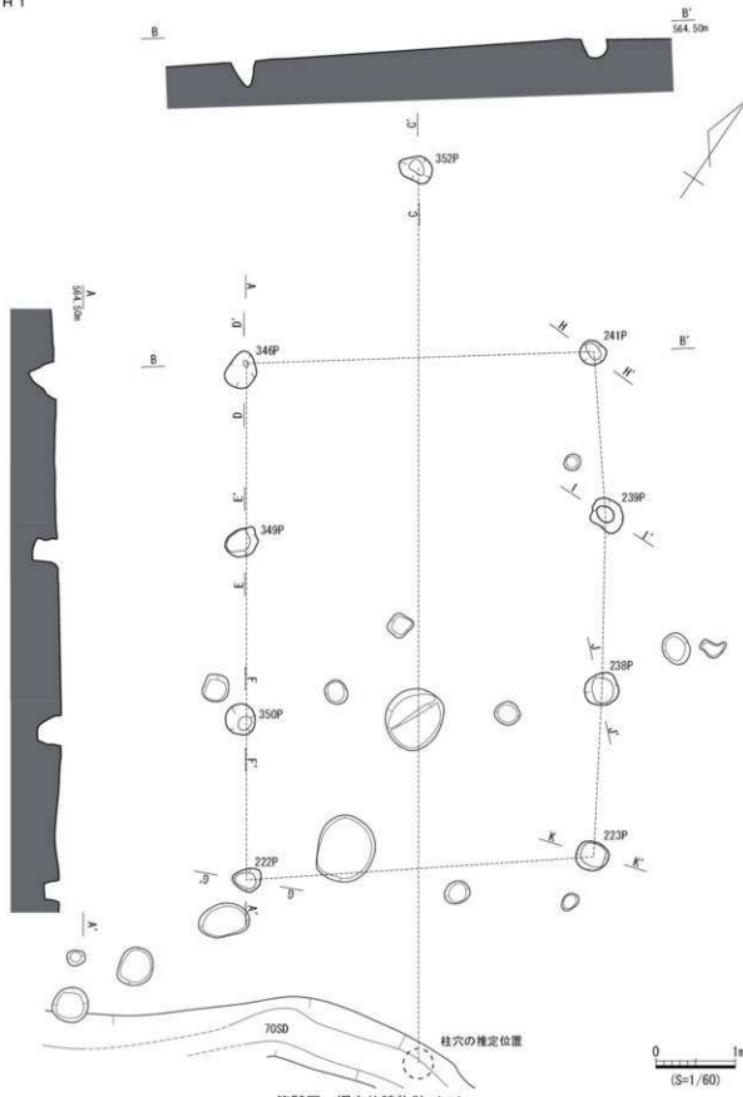


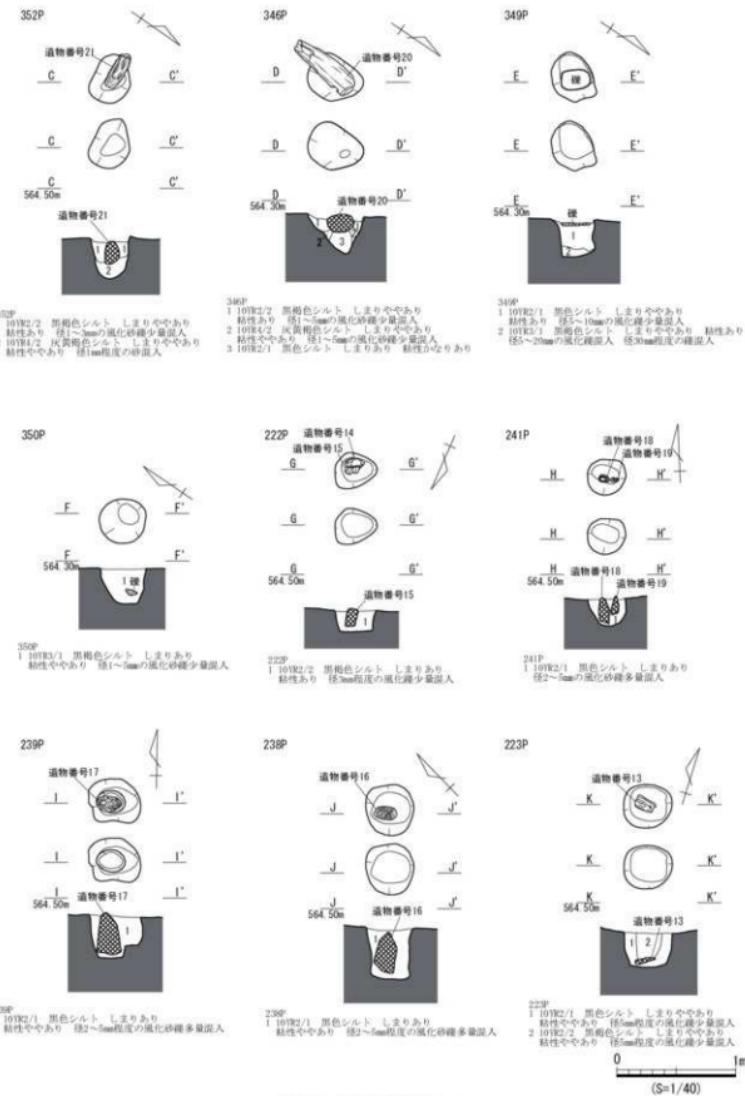
第48図 傾穴住居跡（5）



第49図 横跡

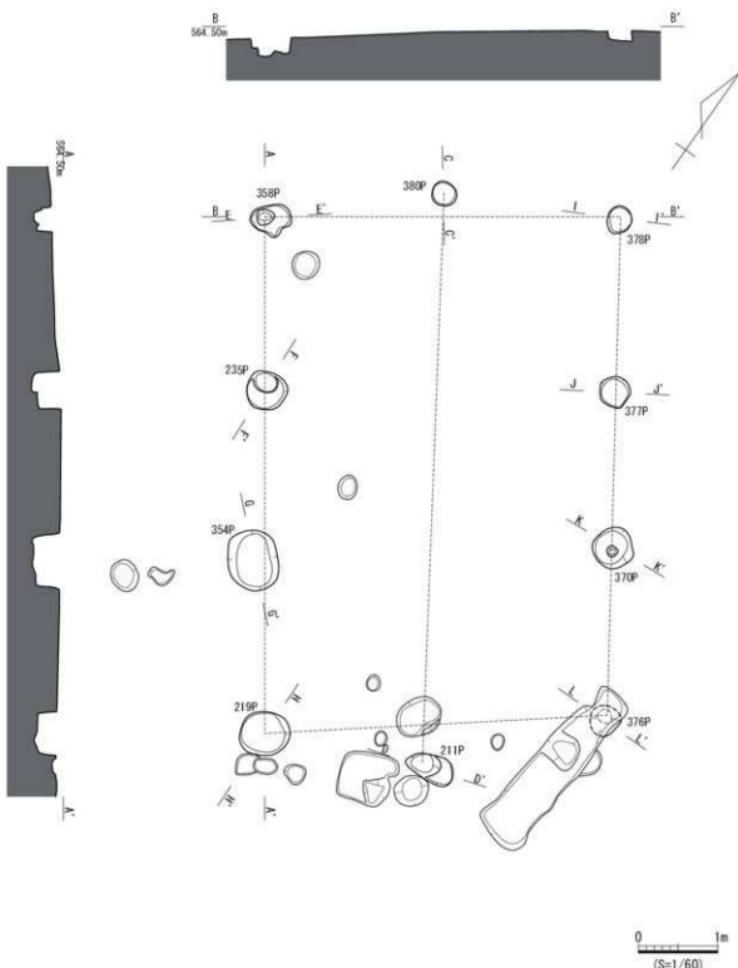
SH 1



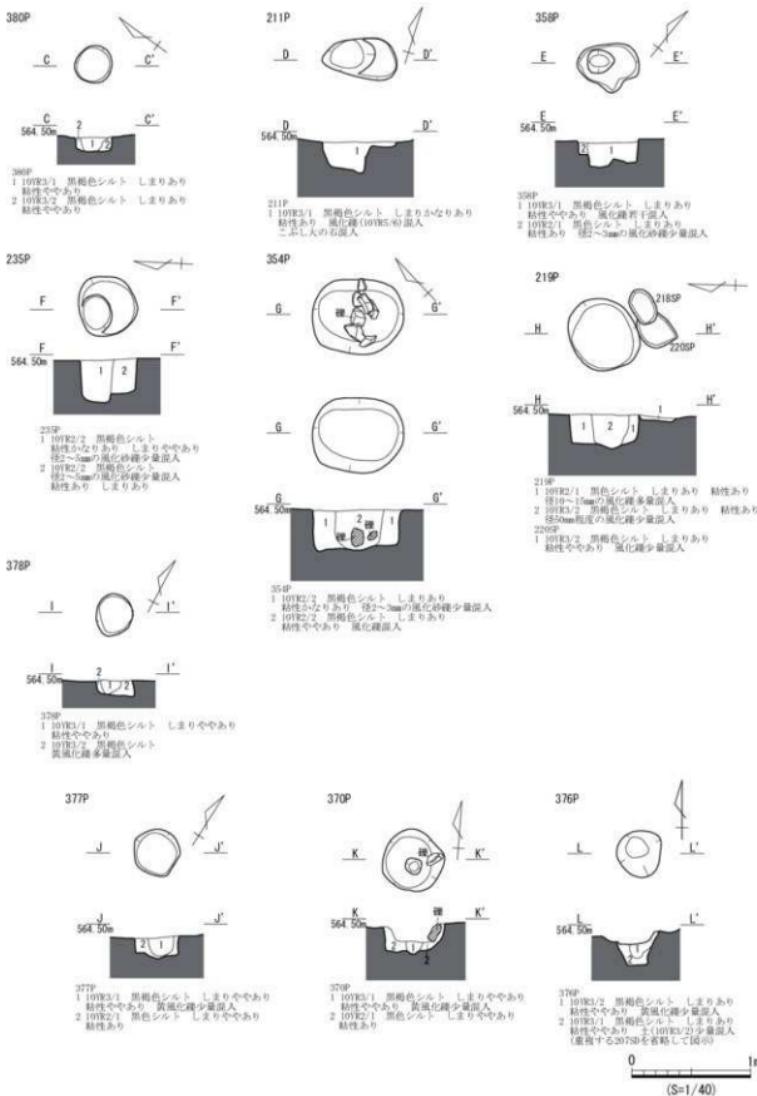


第51図 据立柱建物跡（2）

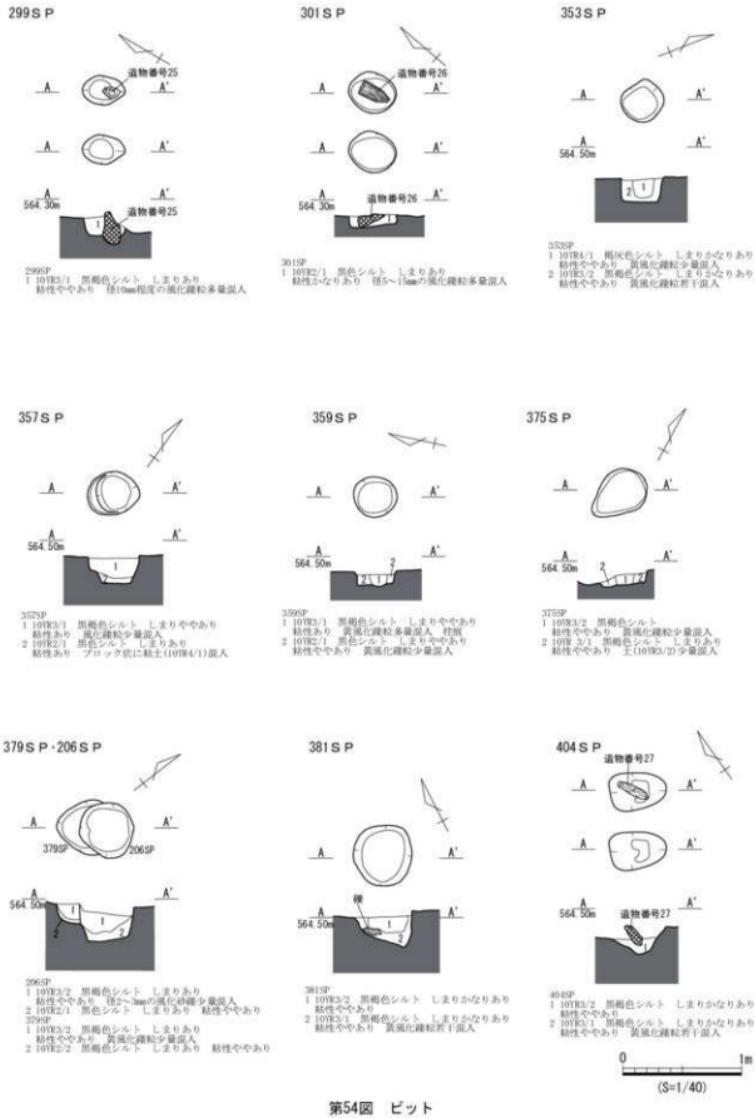
SH 2



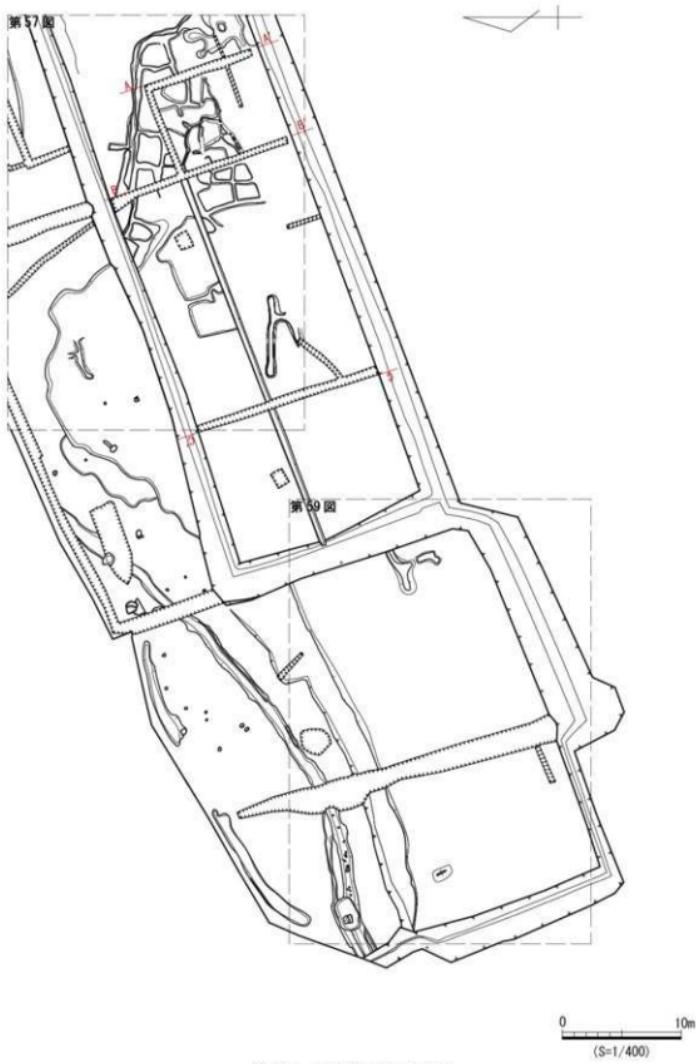
第52図 堀立柱建物跡（3）



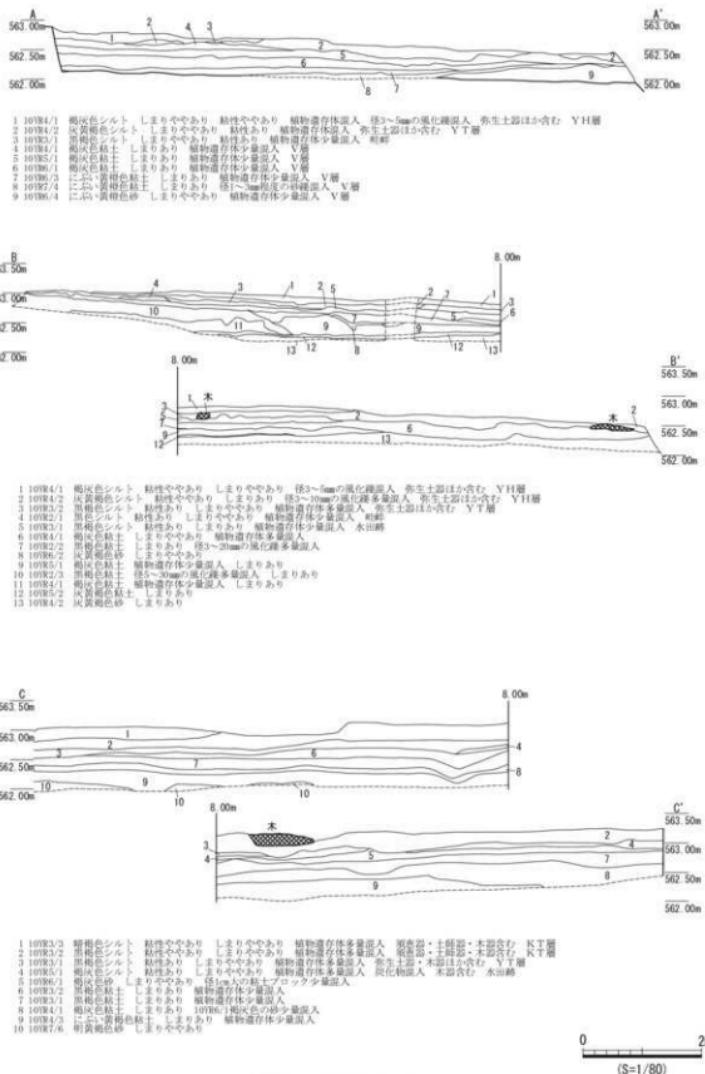
第53図 捩立柱建物跡（4）



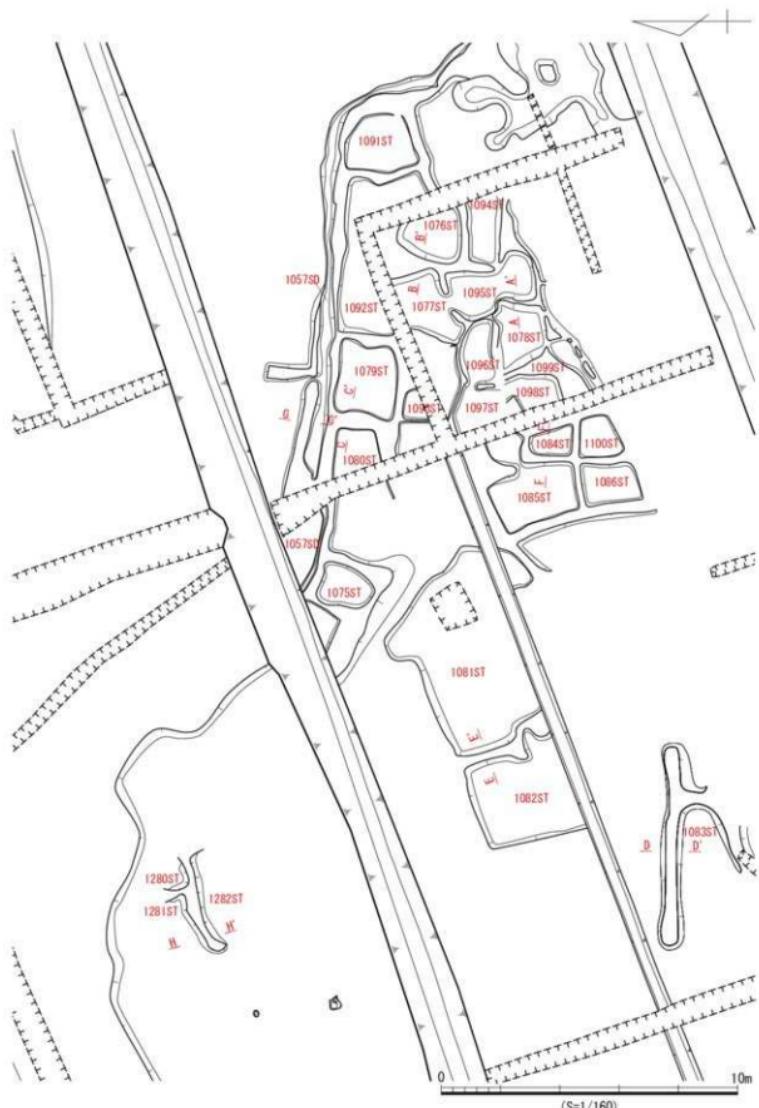
第54図 ピット



第55図 古墳時代水田跡（1）

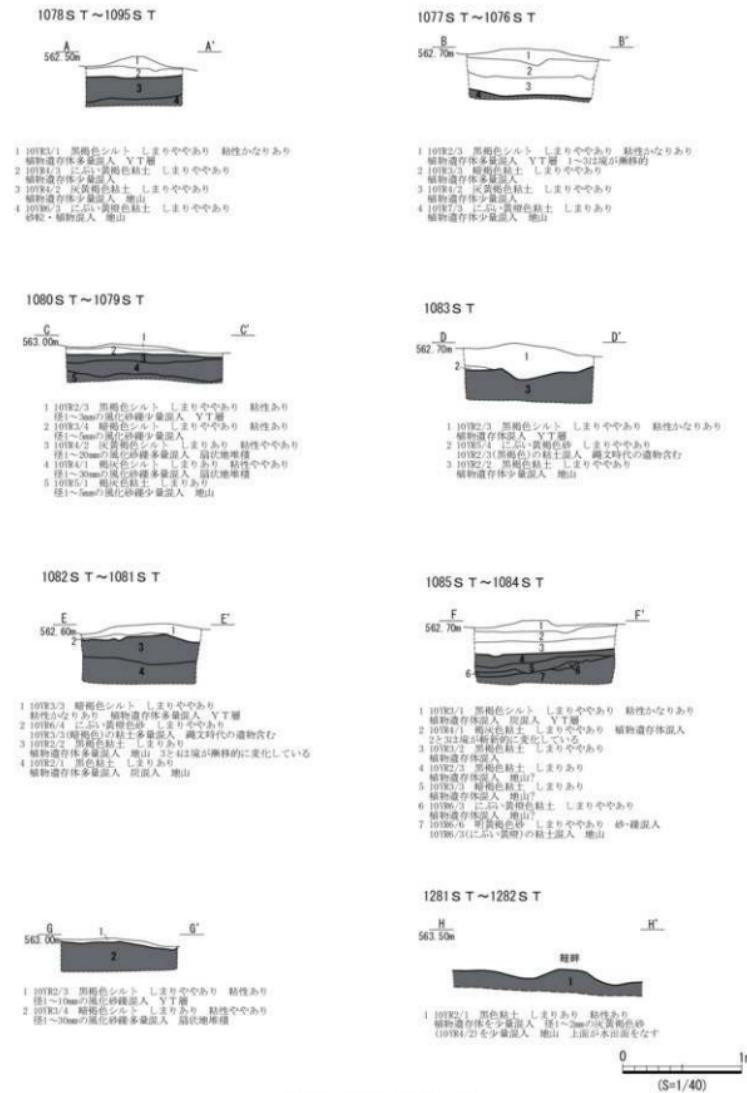


第56図 古墳時代水田跡（2）

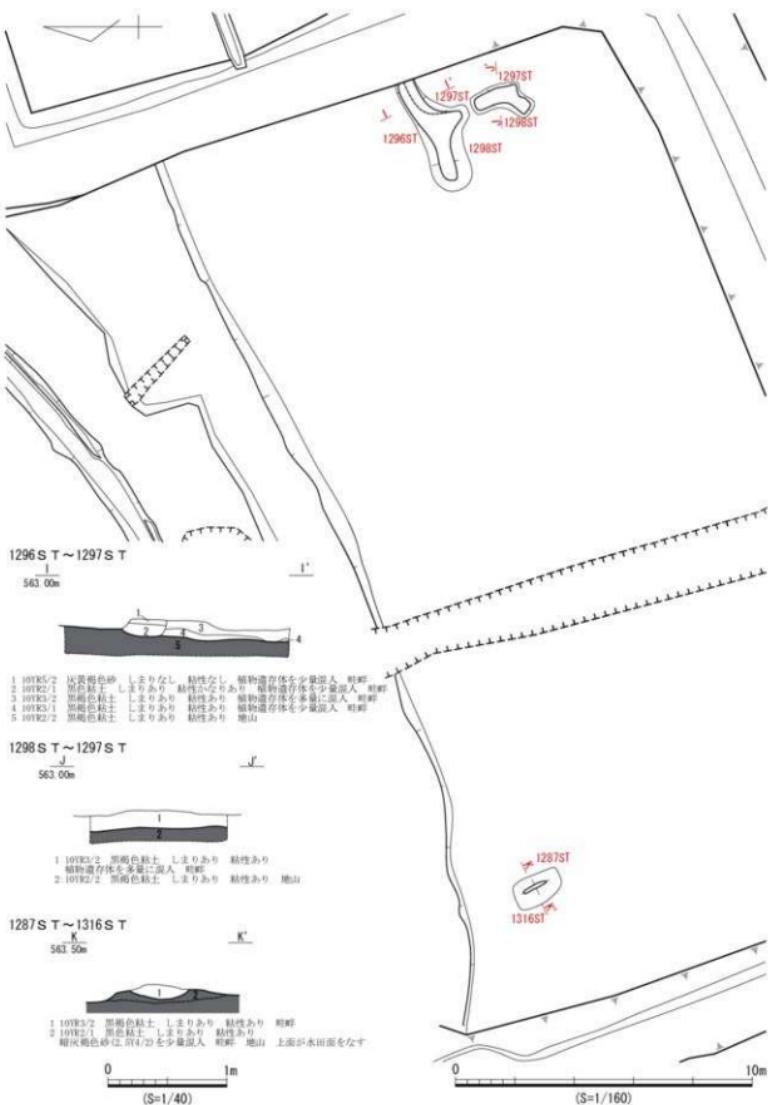


第57図 古墳時代水田跡（3）

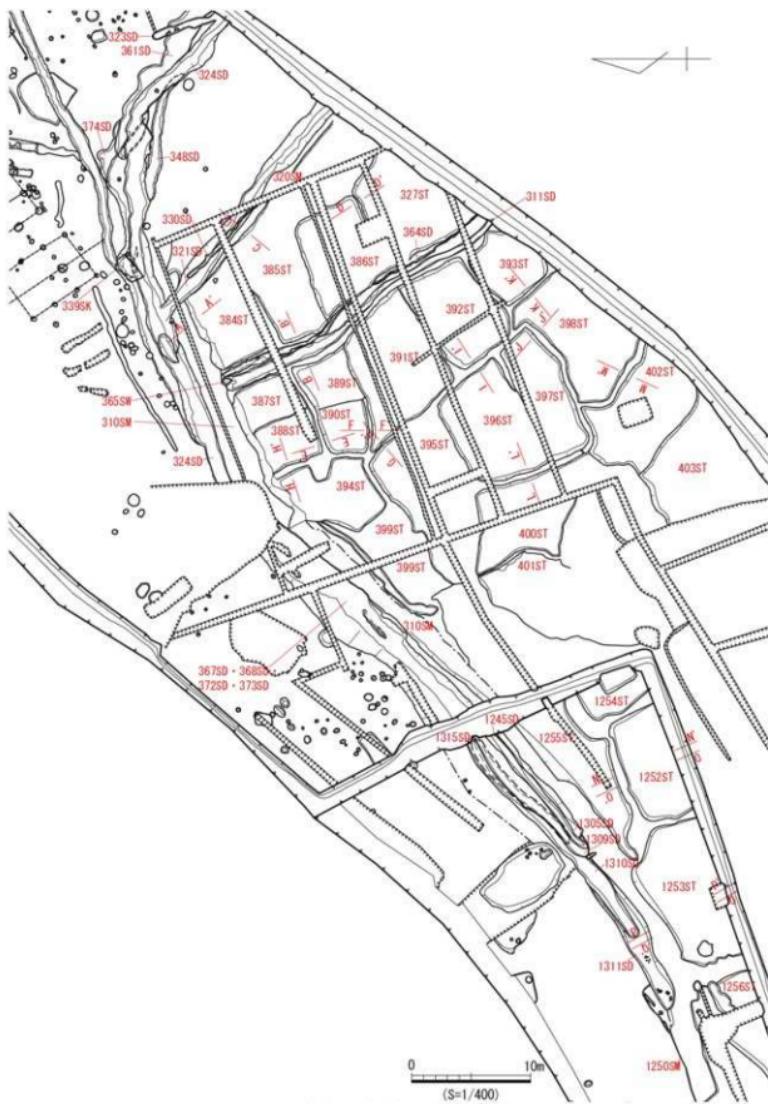
(S=1/160)



第58図 古墳時代水田跡（4）



第59図 古墳時代水田跡（5）



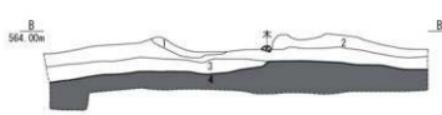
第60図 古代水田跡 (1)

310 S T ~ 384 S T



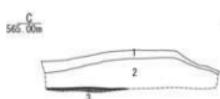
- 1 10TR2/2 黒褐色シルト しまりありあり 特性ややあり 径10~20mmの風化砂礫多量混入 膨脹性あり
- 2 10TR3/1 黒褐色シルト しまりありあり 特性ややあり
- 3 10TR2/2 黒褐色シルト しまりありあり 特性あり 径10mm程度の風化砂礫少量混入 IV層
- 4 10TR2/1 黒褐色シルト しまりありあり 特性あり 径5~10mmの風化砂礫少量混入 IV層

389 S T ~ 385 S T



- 1 10TR1/1 黒褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 2 10TR3/1 黑褐色シルト しまりあり 黏性あり
- 3 10TR2/1 黑褐色シルト しまりあり 黏性あり 径5~10mmの風化砂礫多量混入 IV層
- 4 10TR2/1 黑褐色シルト しまりあり 黏性あり 径5~20mm風化砂礫多量混入 IV層

385 S T ~ 320 S M



- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりややあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~15mmの風化砂礫多量混入 IV層

386 S T ~ 327 S T



- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりありあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりありあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑色粘土 しまりあり V層

390 S T ~ 388 S T



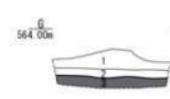
- 1 10TR2/1 黑褐色シルト しまりややあり 特性ややあり 径1~10mmの風化砂礫少量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりありあり 特性ややあり 径1~10mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑色粘土 しまりあり V層

390 S T ~ 391 S T



- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫多量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑褐色シルト しまりあり 径1~5mmの風化砂礫多量混入 IV層
- 4 10TR1/1 黑色粘土 しまりあり 特性ややあり 径1~3mmの風化砂礫少量混入 V層

395 S T ~ 391 S T



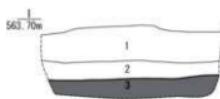
- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~10mmの風化砂礫多量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~10mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑褐色シルト しまりあり 径1~10mmの風化砂礫多量混入 III層
- 4 10TR2/1 黑色粘土 しまりあり 特性ややあり 径1~20mmの風化砂礫多量混入 IV層

394 S T ~ 388 S T



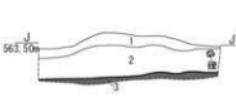
- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりややあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫多量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~20mmの風化砂礫多量混入 IV層

396 S T ~ 392 S T



- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑褐色粘土 しまりあり V層

397 S T ~ 398 S T



- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 3 10TR2/1 黑褐色粘土 しまりあり V層

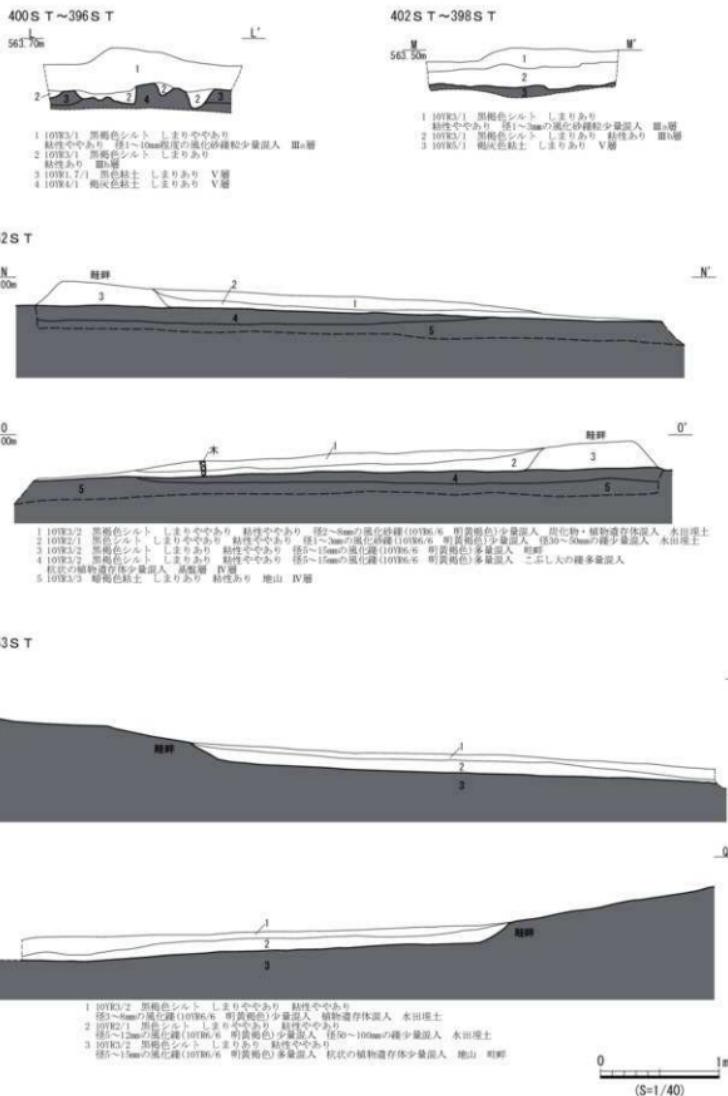
398 S T ~ 393 S T



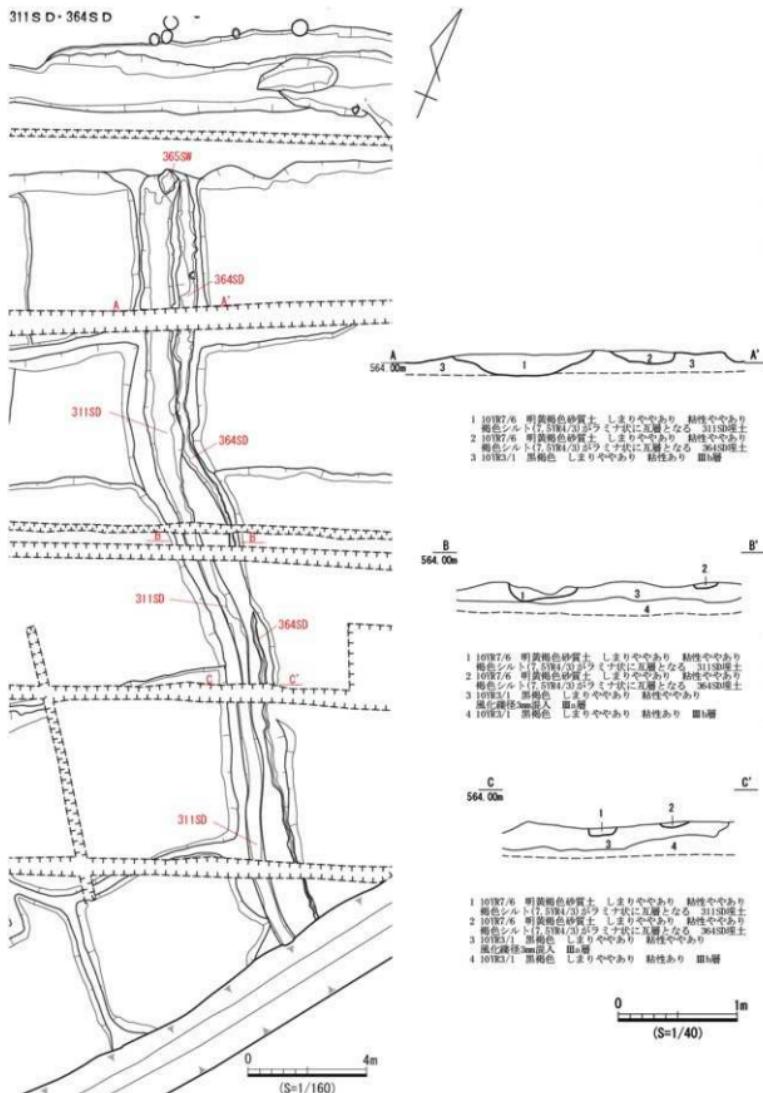
- 1 10TR3/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり 径1~5mmの風化砂礫少量混入 III層
- 2 10TR3/1 黑褐色シルト しまりあり 特性ややあり III層
- 3 10TR2/2 にじみ黄褐色粘土 しまりあり V層

0
(S=1/40)
m

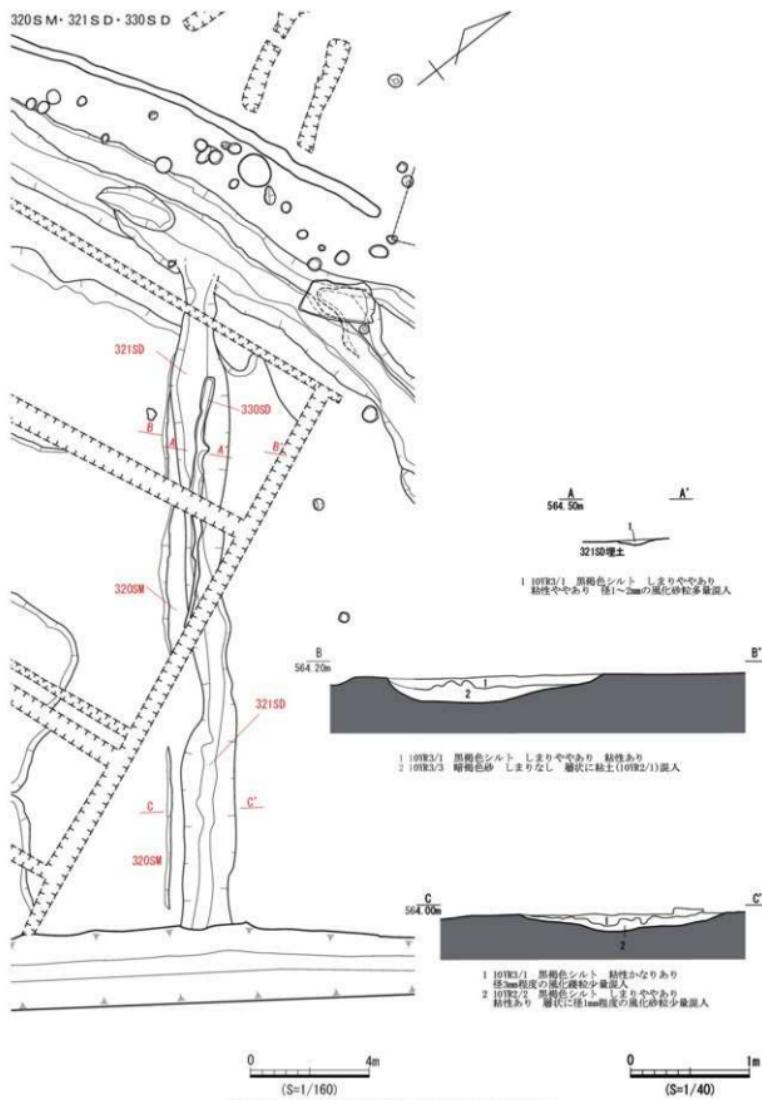
第61図 古代水田跡（2）



第62図 古代水田跡（3）

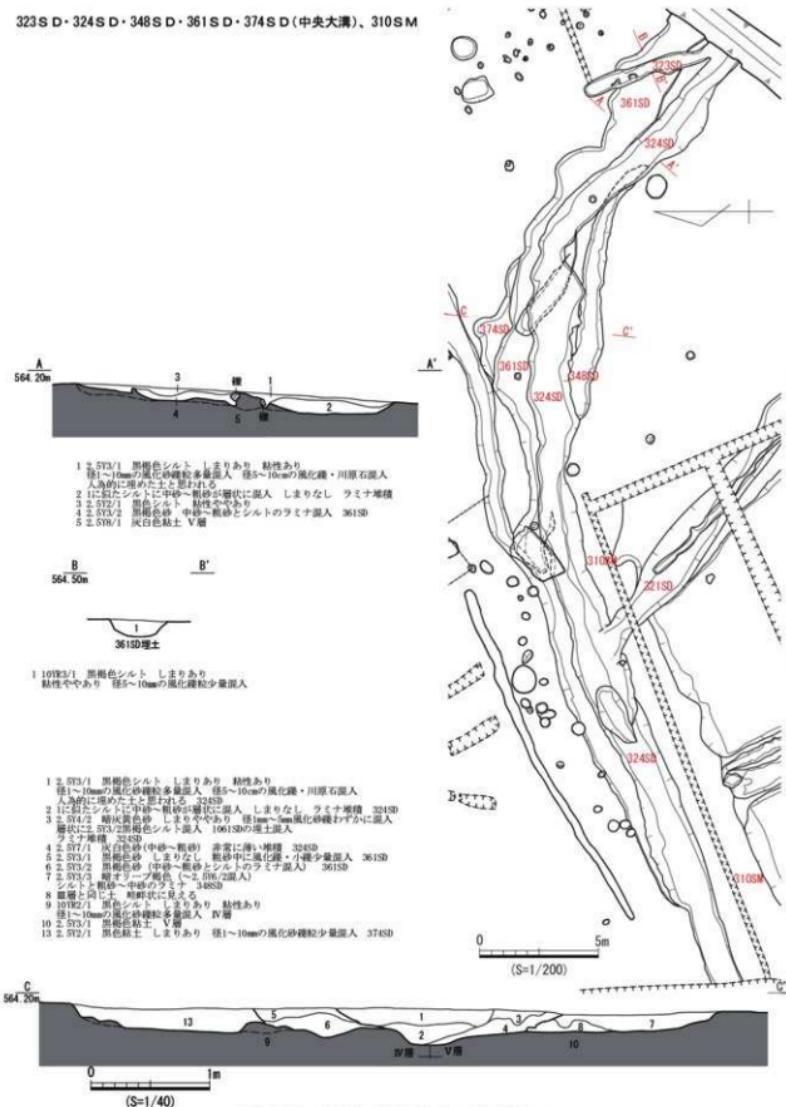


第63図 古代水田に関わる畦畔・溝状造構（1）



第64図 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構（2）

323S D・324S D・348S D・361S D・374S D(中央大溝)、310SM

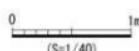


第65図 古代水田に關わる畦畔・溝状造構（3）

324S D(中央大溝)

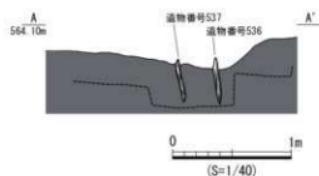
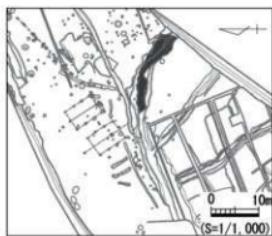


1 10TR2/3 黒褐色土、風化縫を含む：地山
2 10TR2/1 黒色粘質シルト 地山



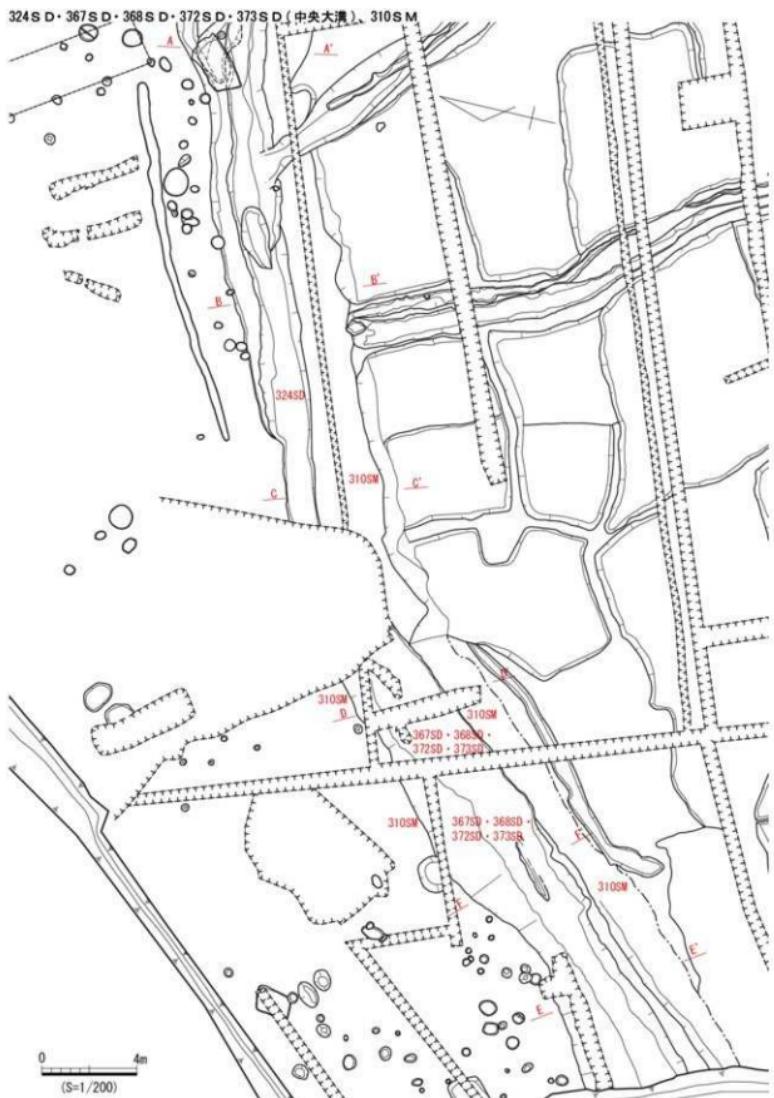
第66図 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (4)

324 S D (中央大溝)



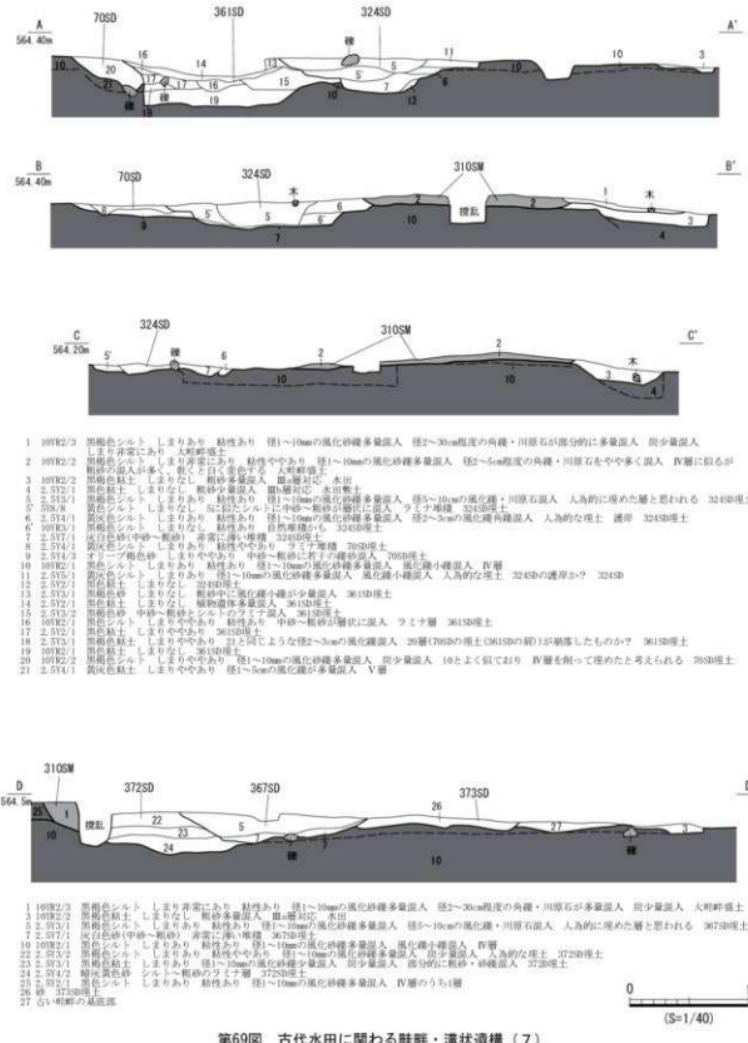
0 5m
(S=1/100)

第67図 古代水田に關わる畦畔・溝状遺構 (5)



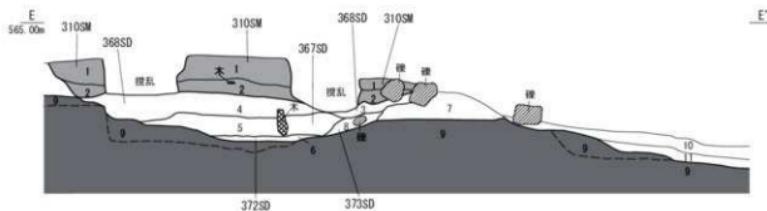
第68図 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構（6）

324S D・367S D・368S D・372S D・373S D(中央大溝)、310SM

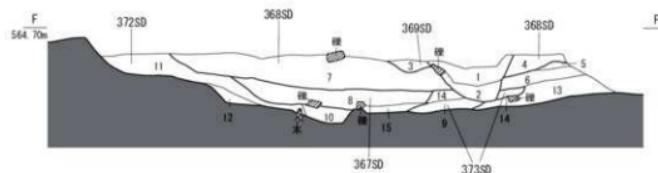


第69図 古代水田に關わる畦畔・溝状遺構（7）

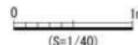
324S D・367S D・368S D・372S D・373S D(中央大溝)、310SM



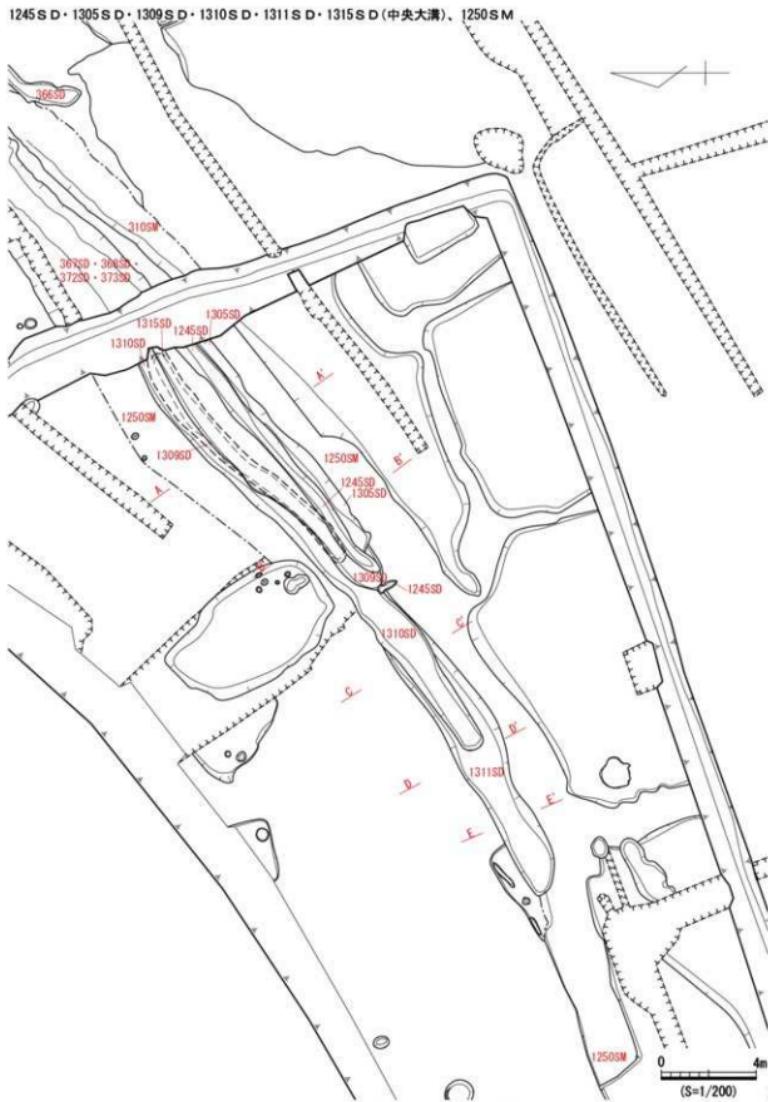
1. 2.515/1 黄褐色シルト。しまりや非常にあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。炭少量混入。吸水性高い。乾くと白くなる。
2. 2.512/1 黒褐色シルト。しまりややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。炭少量混入。人頭畠盛土
3. 2.512/1 黒褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。炭少量混入。人頭畠盛土
4. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。人頭畠盛土
5. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。人頭畠盛土
6. 2.515/3 黄褐色砂。テラナ堆積
7. 10W2/3 黑褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。炭少量混入。372SD底土
8. 2.515/3 黑褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。炭少量混入。372SD底土
9. 10W2/1 黑褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。人頭畠盛土
10. 2.513/2 黑褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。人頭畠盛土
11. 2.514/2 黑褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。人頭畠盛土



1. 2.513/2 黄褐色シルト。しまりややあり。粘性あり。径1~10mmの風化砂礫多量混入
2. 2.513/3 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややあり。径5~10mmの風化砂礫多量混入
3. 10W4/2 黄褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径5~10mmの風化砂礫多量混入
300cm
4. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径5~10mmの風化砂礫多量混入
300cm
5. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径5~10mmの風化砂礫多量混入
300cm
6. 2.513/2 黄褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。蛭ヶ原盛土。367SDに対応
7. 2.513/2 黄褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。蛭ヶ原盛土。367SDに対応
8. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。蛭ヶ原盛土
9. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。蛭ヶ原盛土
10. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。蛭ヶ原盛土
11. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径5~15mmの風化砂礫多量混入。372SD底土
12. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径5~15mmの風化砂礫多量混入。372SD底土
13. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径1~10mmの風化砂礫多量混入。372SD底土
14. 2.512/1 黑褐色シルト。しまりややややあり。粘性ややややあり。径5~10mmの風化砂礫多量混入。372SD底土
15. 2.514/4 オリーブ褐色シルト。径5~10mmの風化砂礫少量混入。372SD底土

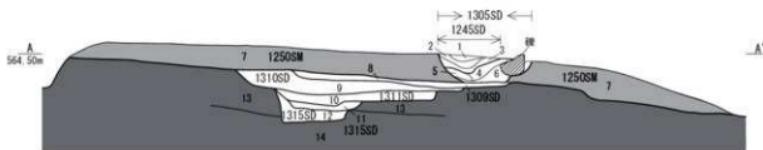


第70図 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構（8）

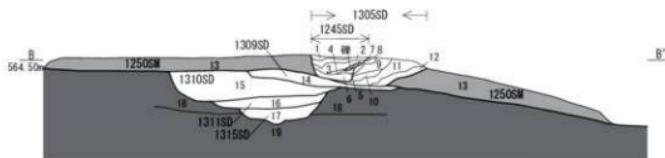


第71図 古代水田に関わる畦畔・溝状造構 (9)

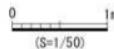
1245S D・1305S D・1309S D・1310S D・1311S D・1315S D(中央大溝)、1250S M



- 1 2. 07W/4 に近い黄色砂 しまりあり 粒性なし 黄褐色粘土(2. 07W/5/1)・黄褐色砂(10W5/6)混入 1245S D埋土
 2 2. 07W/1 黄褐色粘土 しまりあり 粒性あり 1245S D埋土
 3 2. 07W/4 に近い黄色砂 しまりあり 粒性あり 黄褐色砂(2. 07W/5/1)・黄褐色砂(10W5/6)混入 1245S D埋土
 4 2. 07W/1 黄褐色粘土 しまりあり 粒性あり 1305S D埋土
 5 2. 07W/1 黄褐色粘土 しまりあり 粒性あり 1305S D風化砂層(10W7/5)にぶく黄褐色 多量混入 1305S D埋土
 6 2. 07W/1 黄褐色粘土 しまりあり 粒性あり 1305S D埋土
 7 2. 07W/2 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径5~10mmの風化礫(10W6/6)・明黄色(2. 07W/5/1)多量混入 1250S M大耕野道土
 8 10W7/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 [にぶく黄褐色砂(10W5/6)]混入 1305S D埋土
 9 10W7/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1311S D埋土
 10 10W7/3 黄褐色砂 しまりあり 粒性なし こぶし大の風化礫混入 黑褐色砂(10W5/1)混入 1311S D埋土
 11 10W7/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~10mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1311S D埋土
 12 10W7/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径10~40mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1311S D埋土
 13 10W2/2 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径10~40mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 地山 IV層
 14 10W6/6 明黄色シルト しまりあり 粒性なし 地山 IV層

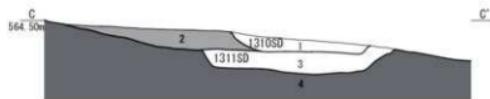


- 1 2. 07W/4 に近い黄色砂 しまりあり 粒性なし 黄褐色砂(10W5/6)混入 1245S D埋土
 2 2. 07W/1 黄褐色粘土 しまりあり 粒性あり [にぶく黄褐色(2. 07W/5/1)]混入 1245S D埋土
 3 2. 07W/4 に近い黄色砂 しまりあり 粒性なし 黄褐色砂(10W5/6)混入 1245S D埋土
 4 2. 07W/1 黄褐色粘土 しまりあり 粒性なし 黄褐色砂(10W5/6)混入 1245S D埋土
 5 10W5/6 に近い黄色砂 しまりあり 粒性なし 黄褐色砂(10W5/6)混入 1245S D埋土
 6 2. 07W/1 黄褐色砂 しまりあり 粒性なし 黄褐色砂(10W5/6)混入 1245S D埋土
 7 2. 07W/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1305S D埋土
 8 2. 07W/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1305S D埋土
 9 2. 07W/1 黄褐色シルト しまりなし にぶく黄褐色シルト(2. 07W/5/1)混入 1305S D埋土
 10 2. 07W/1 黄褐色砂 しまりなし にぶく黄褐色砂(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1305S D埋土
 11 2. 07W/1 黄褐色粘土 しまりあり 粒性あり 1305S D埋土
 12 2. 07W/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1305S D埋土
 13 2. 07W/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1305S D埋土
 14 10W7/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1305S D埋土
 15 10W2/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1311S D埋土
 16 10W2/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1311S D埋土
 17 10W1/2/1 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径3~5mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 1311S D埋土
 18 10W2/2 黄褐色シルト しまりあり 粒性ややあり 径10~40mmの風化礫(10W7/3)・にぶく黄褐色 多量混入 地山 IV層
 19 10W6/6 明黄色シルト しまりあり 粒性なし 地山 IV層

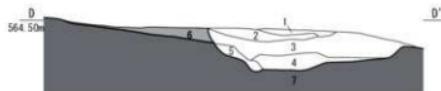


第72図 古代水田に関わる畦畔・溝状構造 (10)

1245S D・1305S D・1309S D・1310S D・1311S D・1315S D(中央大溝)、1250S M



- 1 10YR2/1 黒色シルト しまりあり 粘性あり 径3~6mmの風化礫(10YR2/3 に占比・黄褐色)少量混入 1310S D埋土
2 2.5Y3/2 黄褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 径5~10mmの風化礫(10YR6/6 明黄褐色)多量混入 1250S M埋土
3 10YR6/6 明黄褐色砂 しまりあり 粘性なし 黄褐色砂(10YR4/6) 混入 1310S D埋土
4 10YR2/2 黑褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 径10~40mmの風化礫(10YR2/3 に占比・黄褐色)混入 地山 IV層



- 1 10YR6/4 に占比 黄褐色砂 しまりややなり 粘性なし 細砂(10YR6/7) 多量混入 1311SD埋土
2 10YR4/1 黑褐色シルト しまりあり 粘性あり 径2~15mmの風化砂礫(10YR7/2 に占比・黄褐色) 多量混入 1311SD埋土
3 10YR3/1 黑褐色シルト しまりあり 粘性あり 明黄褐色砂(10YR6/6) 多量混入 こぶしの種混入
4 10YR6/6 黄褐色砂(10YR6/6) しまりあり 粘性なし 黄褐色砂(10YR6/6) 多量混入 1311SD埋土
5 10YR2/2 黑褐色シルト しまりあり 粘性あり 径5mmの風化礫(10YR4/1) 混入 1311SD埋土
6 10YR6/7 黑褐色シルト しまりあり 粘性ややなり 径5~10mmの風化礫(10YR6/6 明黄褐色) 多量混入 1250S M埋土
7 10YR2/2 黑褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 径10~40mmの風化礫(10YR2/3 に占比・黄褐色)混入 地山 IV層

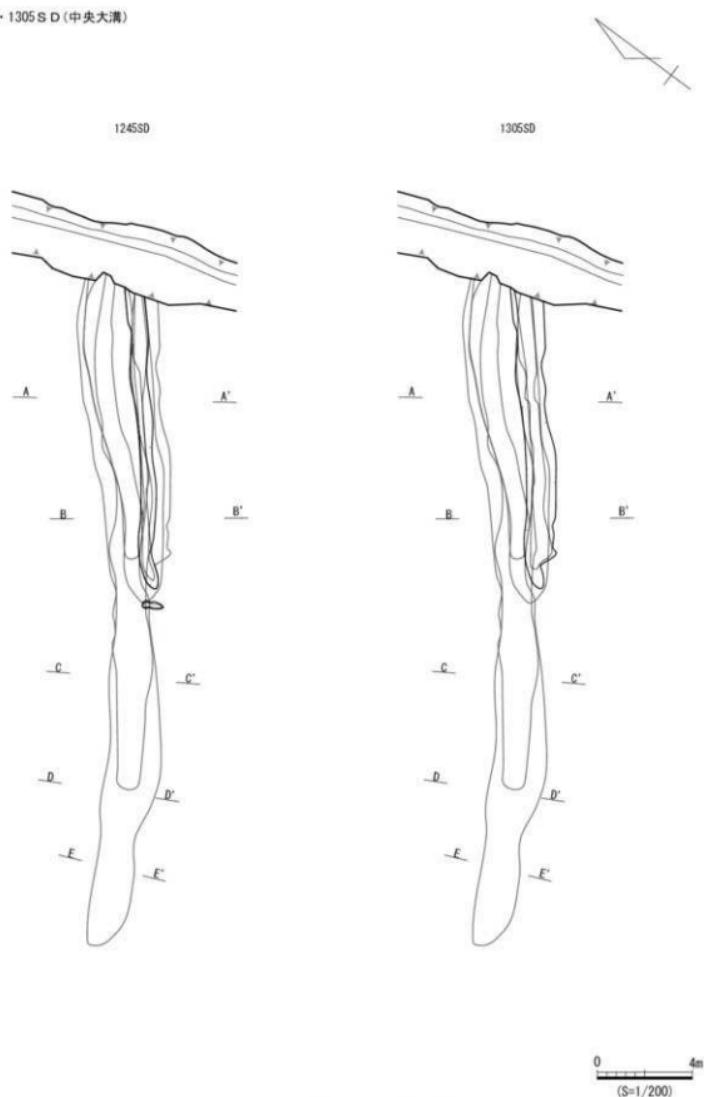


- 1 10YR6/6 明黄褐色砂 しまりややあり 黄褐色シルト(10YR4/1) 多量混入 細砂(10YR6/7) 多量混入 1311SD埋土
2 10YR4/1 黑褐色シルト しまりあり 粘性あり 径3~10mmの風化砂礫(10YR7/3 に占比・黄褐色) 多量混入 1311SD埋土
3 10YR6/6 黄褐色砂 しまりあり 粘性なし 細砂(10YR6/6) 黄褐色砂(10YR6/6) 多量混入 1311SD埋土
4 10YR6/6 黄褐色砂 しまりあり 粘性なし 黄褐色砂(10YR6/6) 多量混入 1311SD埋土
5 2.5Y3/2 黑褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 径5~10mmの風化礫(10YR6/6 明黄褐色) 多量混入 1250S M埋土
6 10YR2/2 黑褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 径10~40mmの風化礫(10YR2/3 に占比・黄褐色) 多量混入 地山 IV層

0 1m
(S=1/50)

第73図 古代水田に關わる畦畔・溝状遺構 (11)

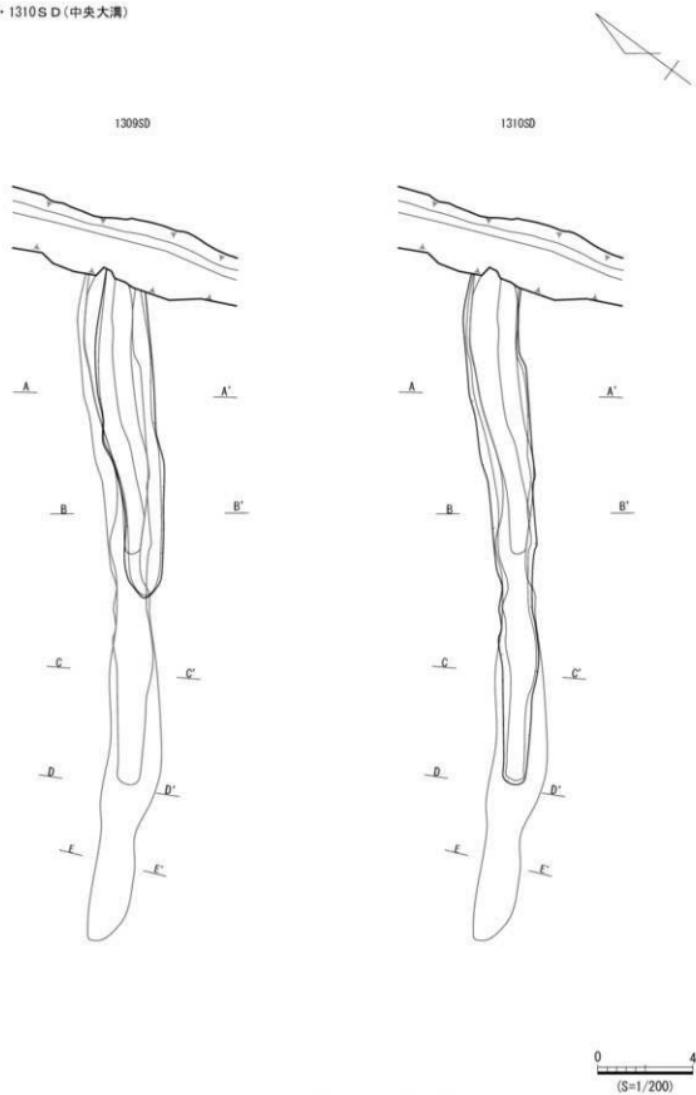
1245S D・1305S D(中央大溝)



第74図 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (12)

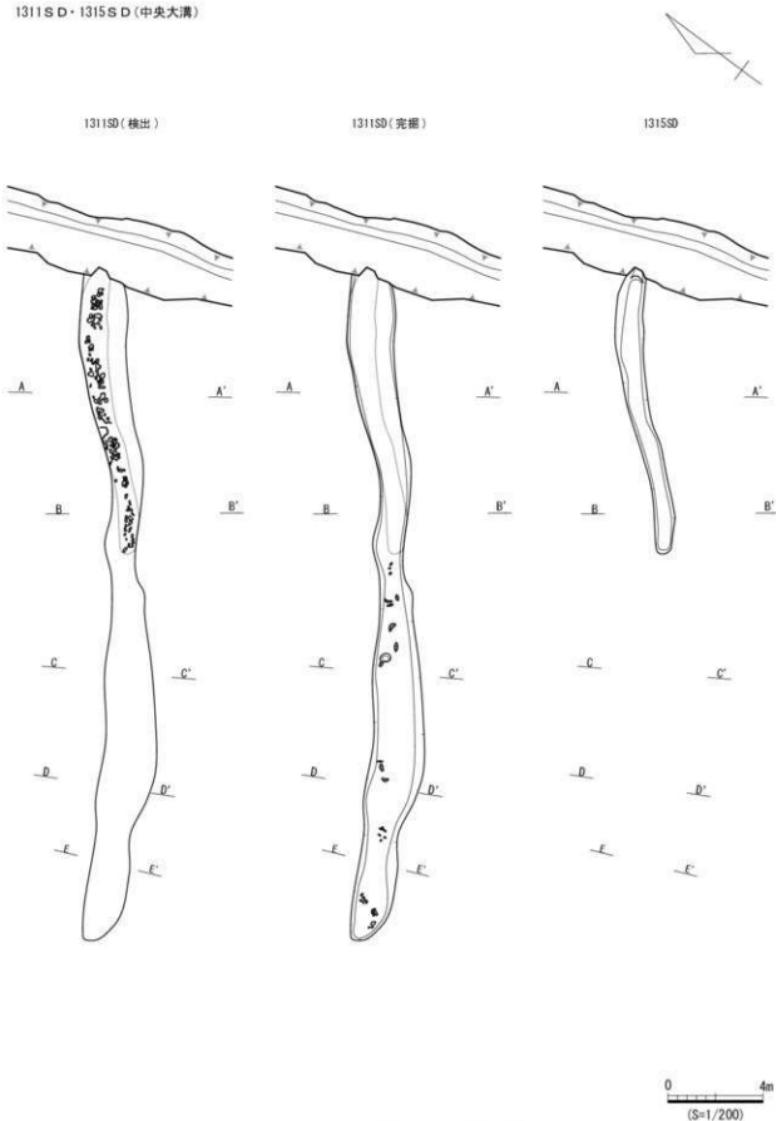
0
4m
(S=1/200)

1309SD・1310SD(中央大溝)

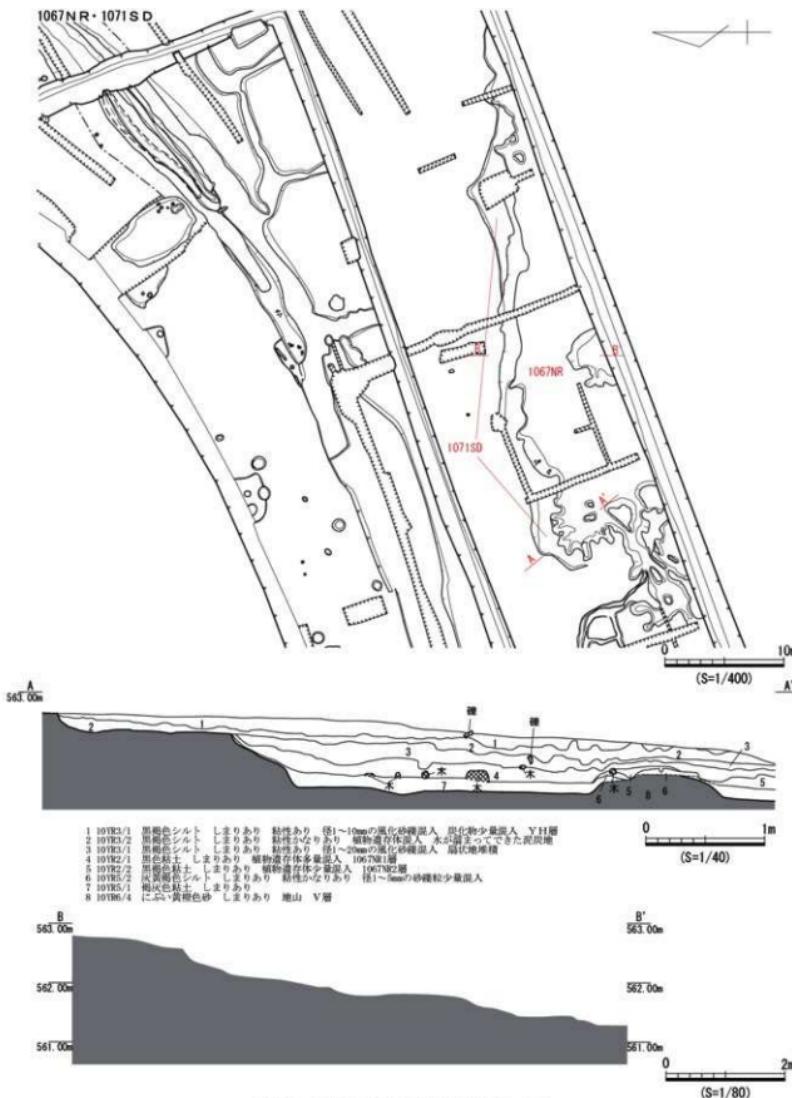


第75図 古代水田に關わる畦畔・溝状造構 (13)

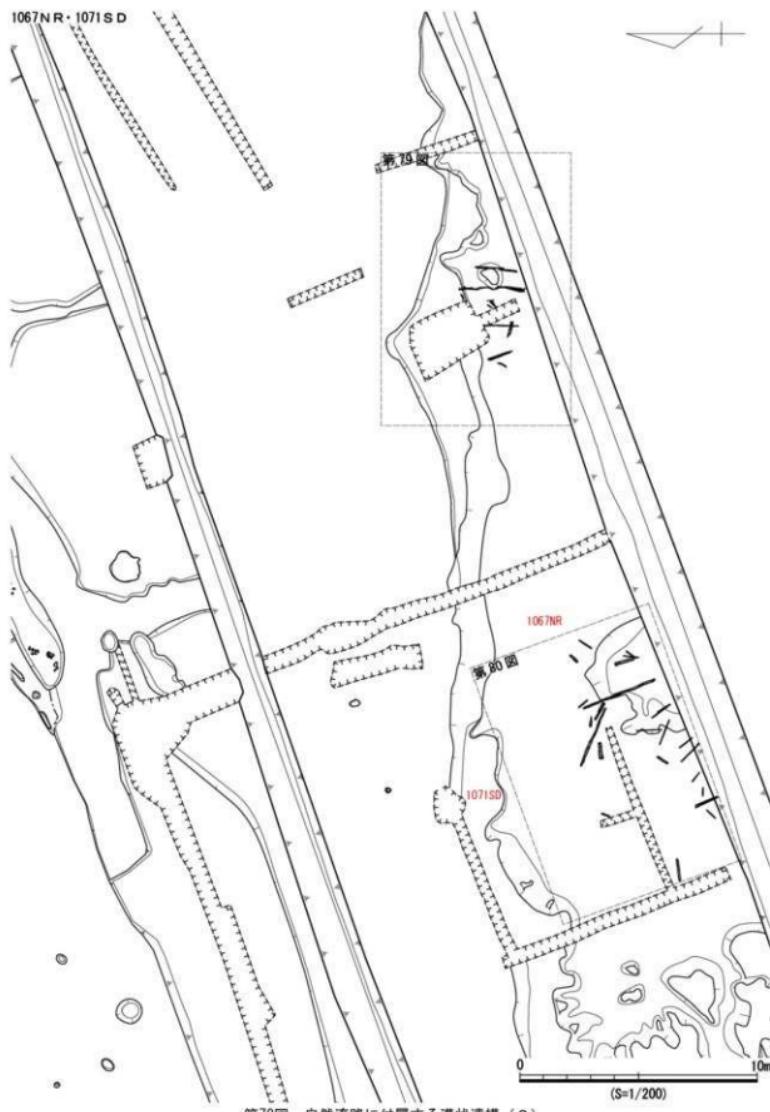
1311SD・1315SD(中央大溝)



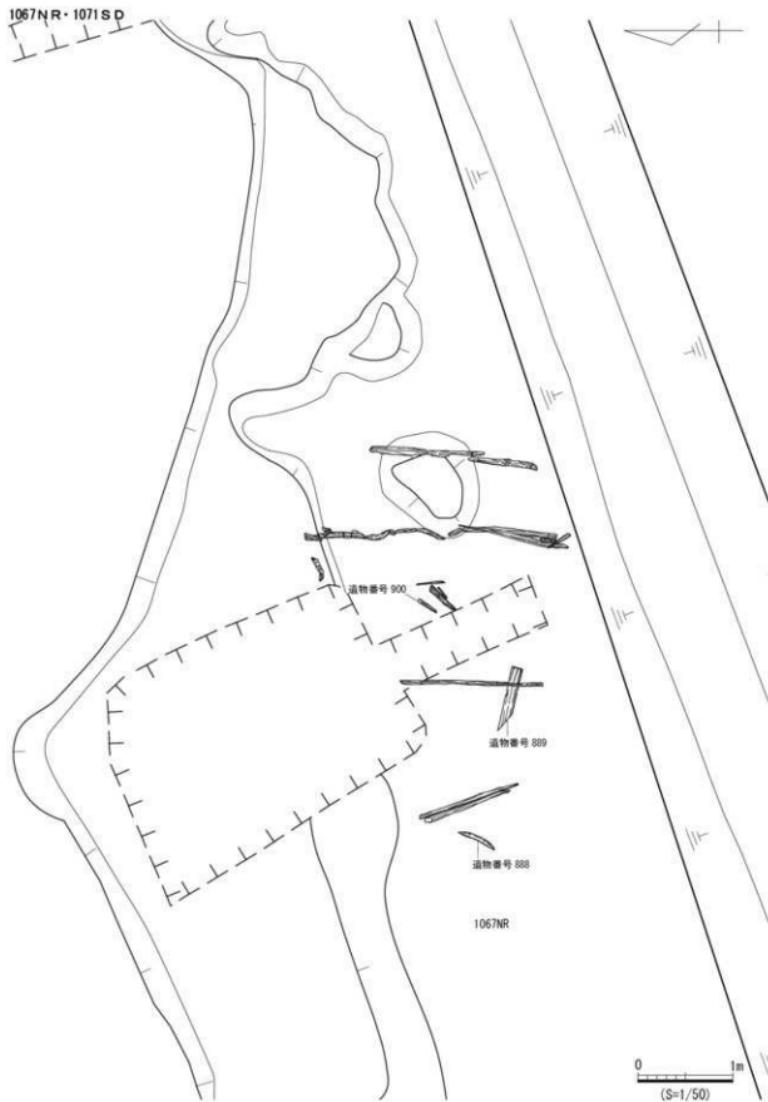
第76図 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (14)



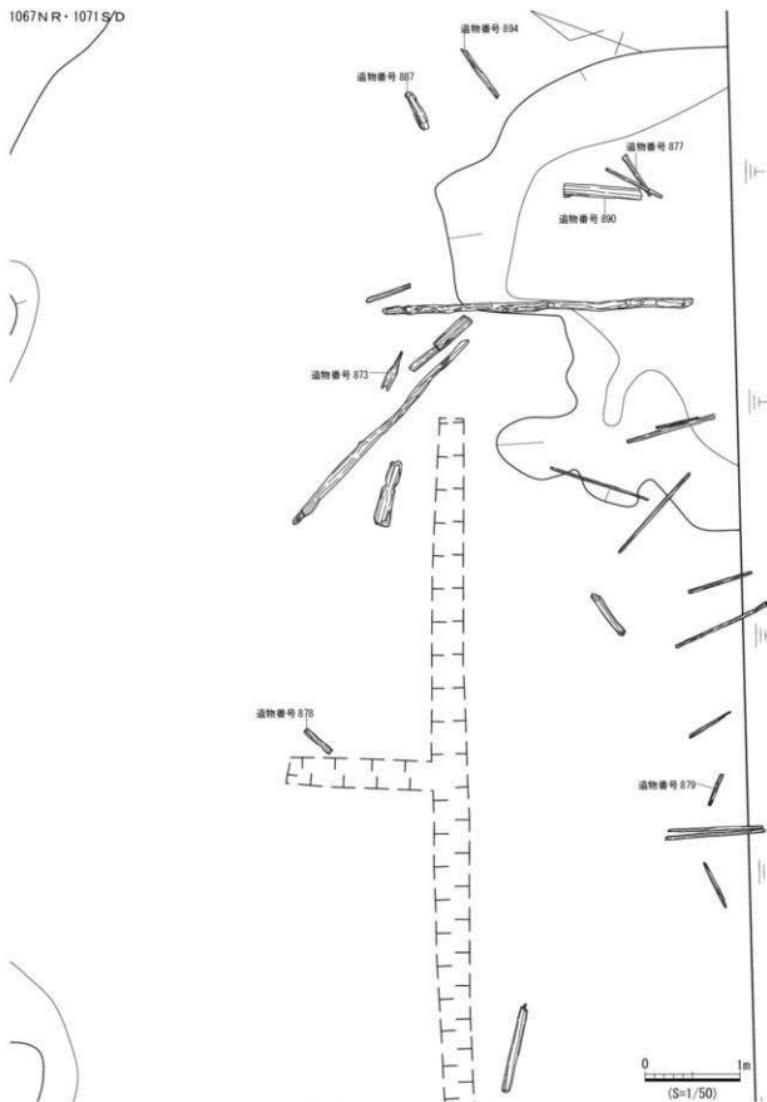
第77図 自然流路に付属する溝状造構（1）



第78図 自然流路に付属する溝状遺構（2）



第79図 自然流路に付属する溝状遺構 (3)

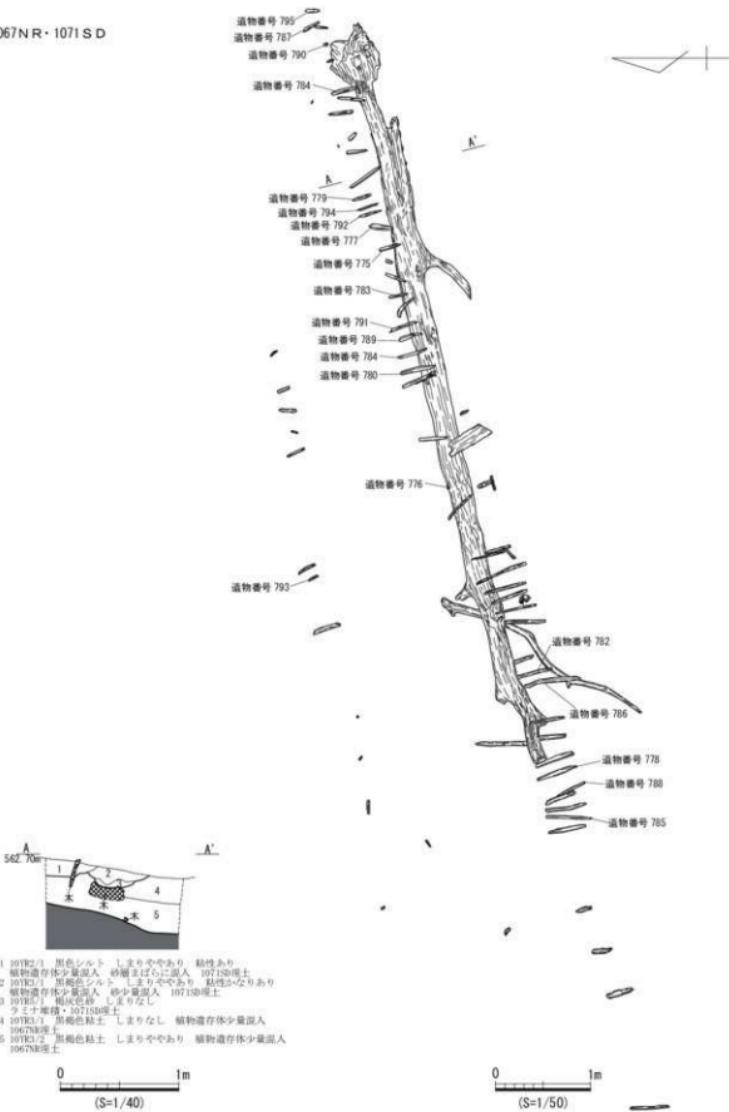


第80図 自然流路に付属する溝状遺構 (4)



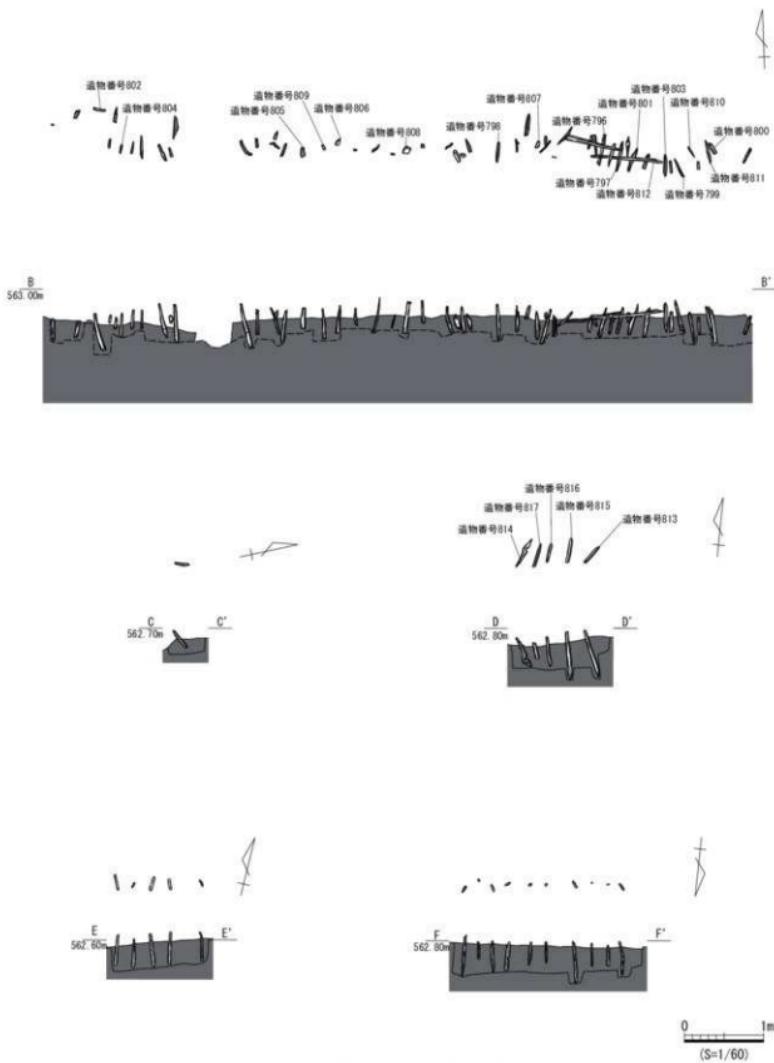
第81図 自然流路に付属する溝状遺構 (5)

1067N R・1071S D

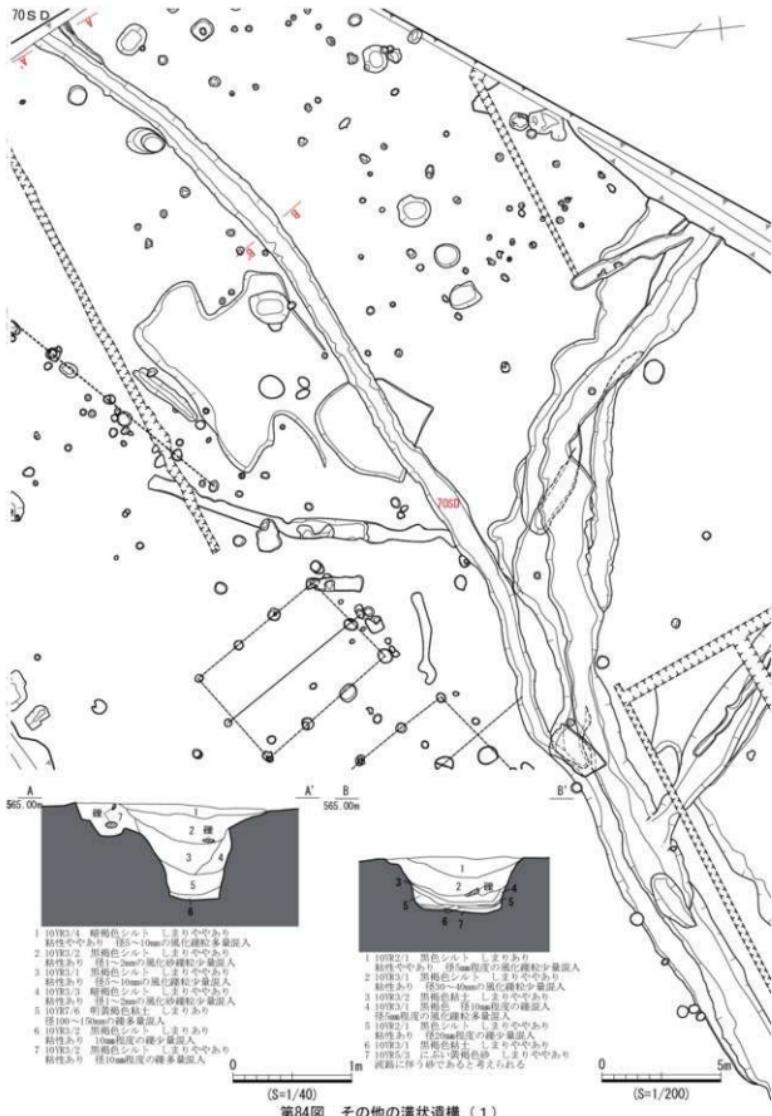


第82図 自然流路に付属する溝状構造（6）

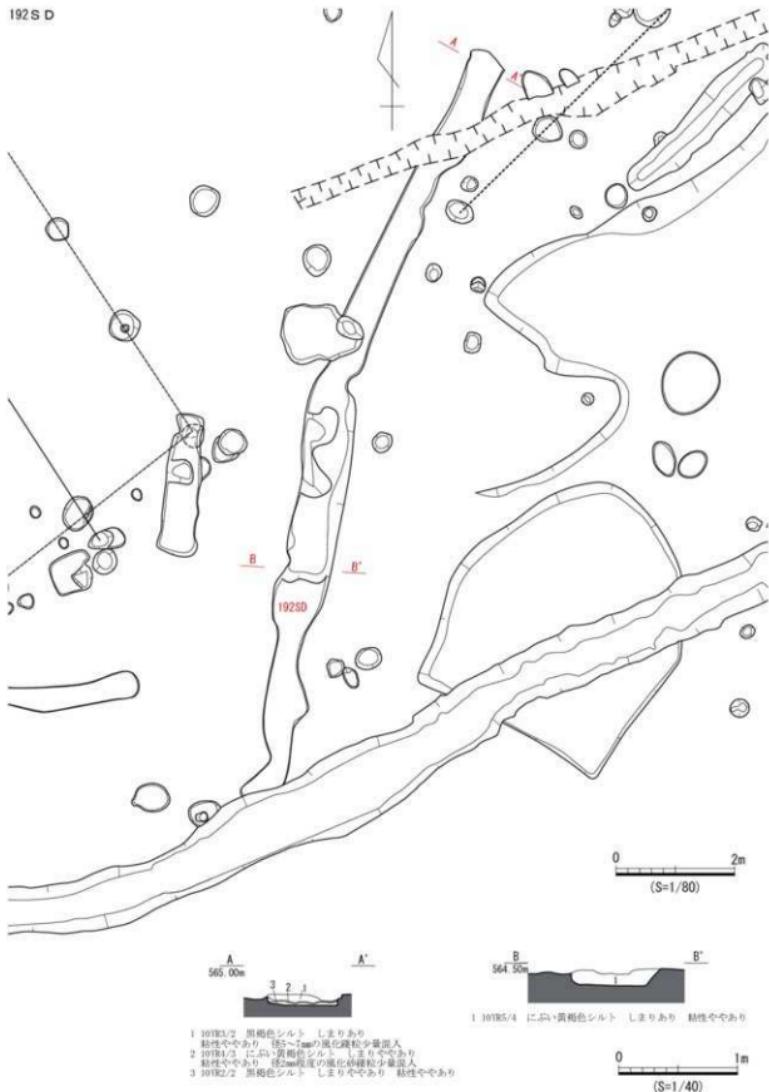
1067N R・1071S D



第83図 自然流路に付属する溝状遺構 (7)



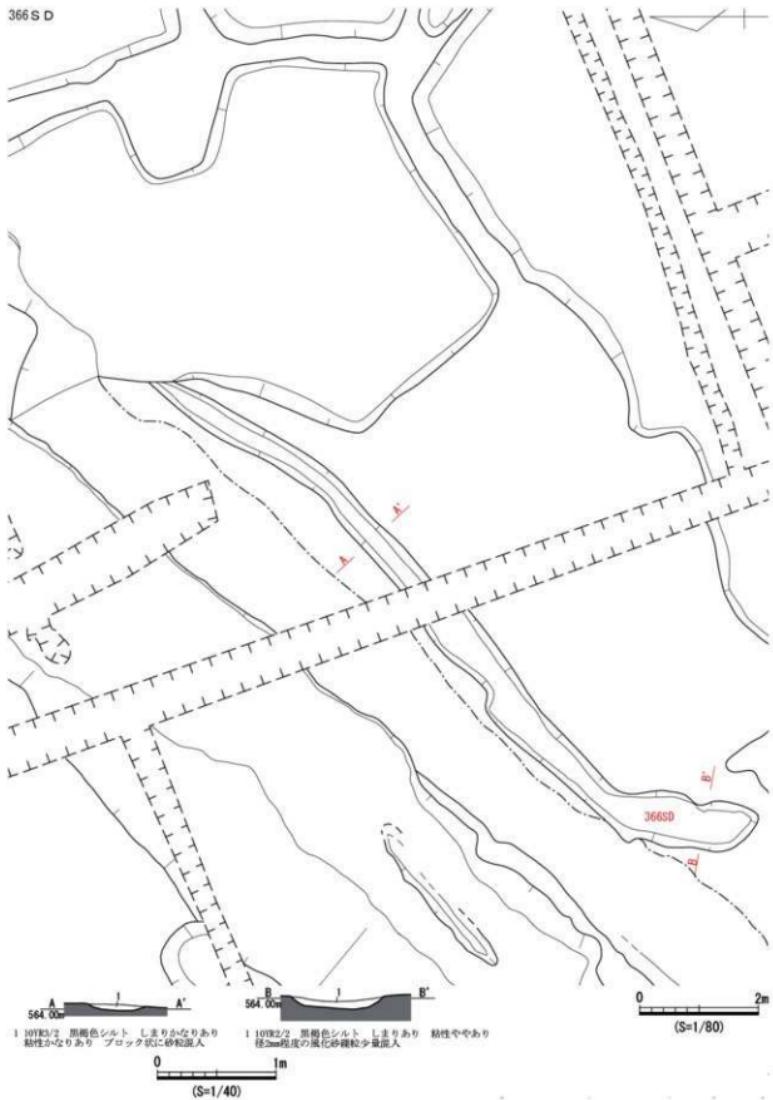
第84図 その他の溝状遺構（1）



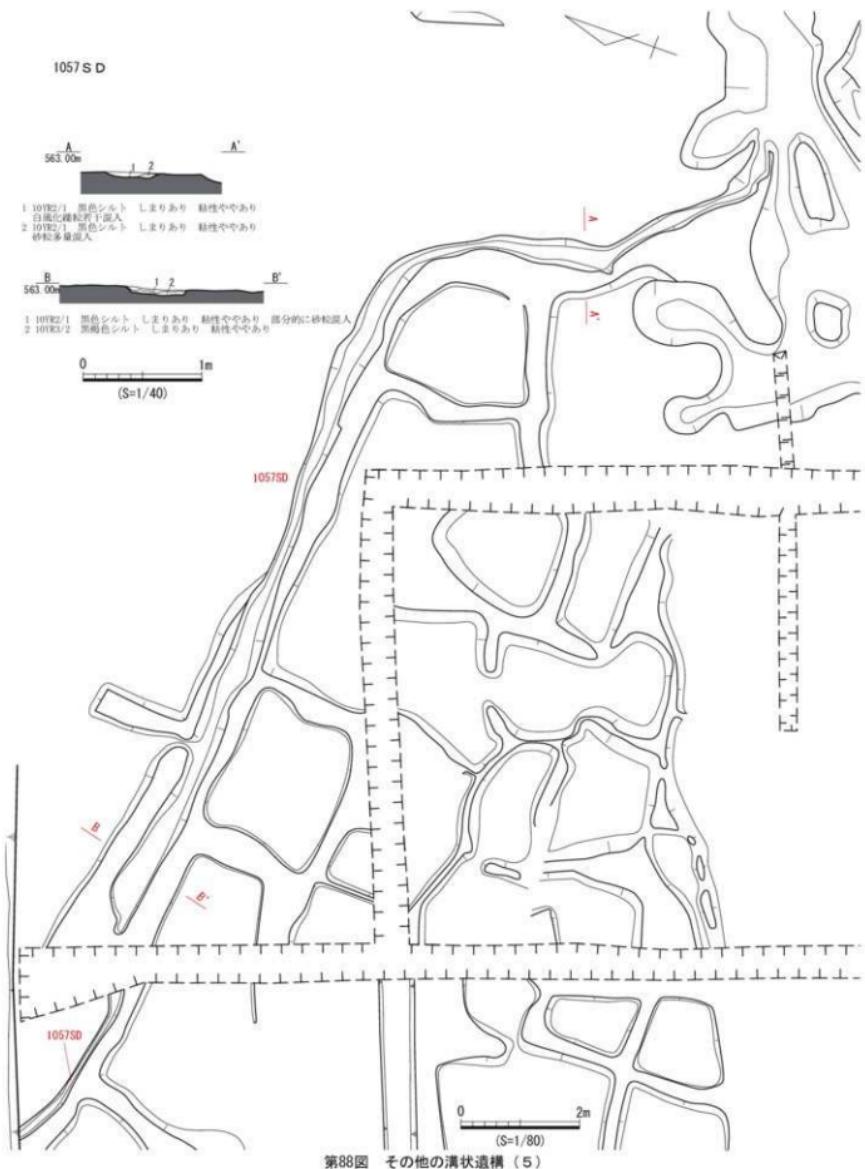
第85図 その他の溝状遺構（2）

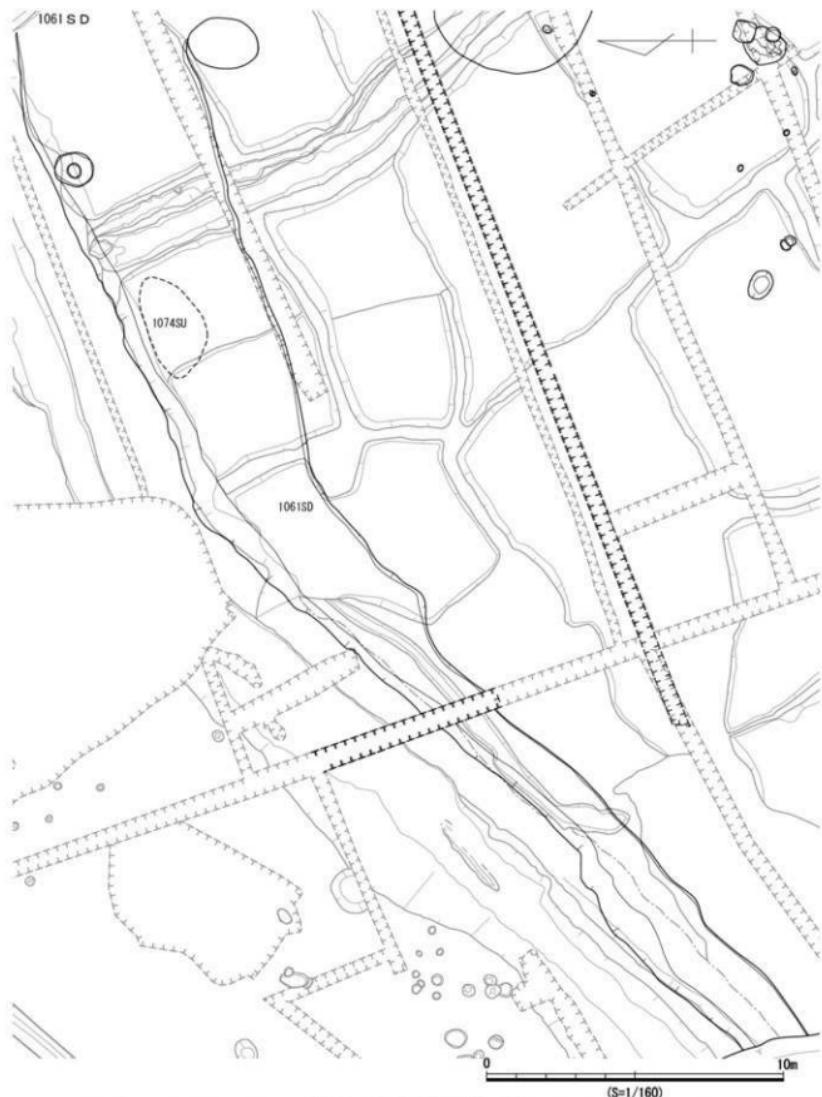


第86図 その他の溝状造構 (3)



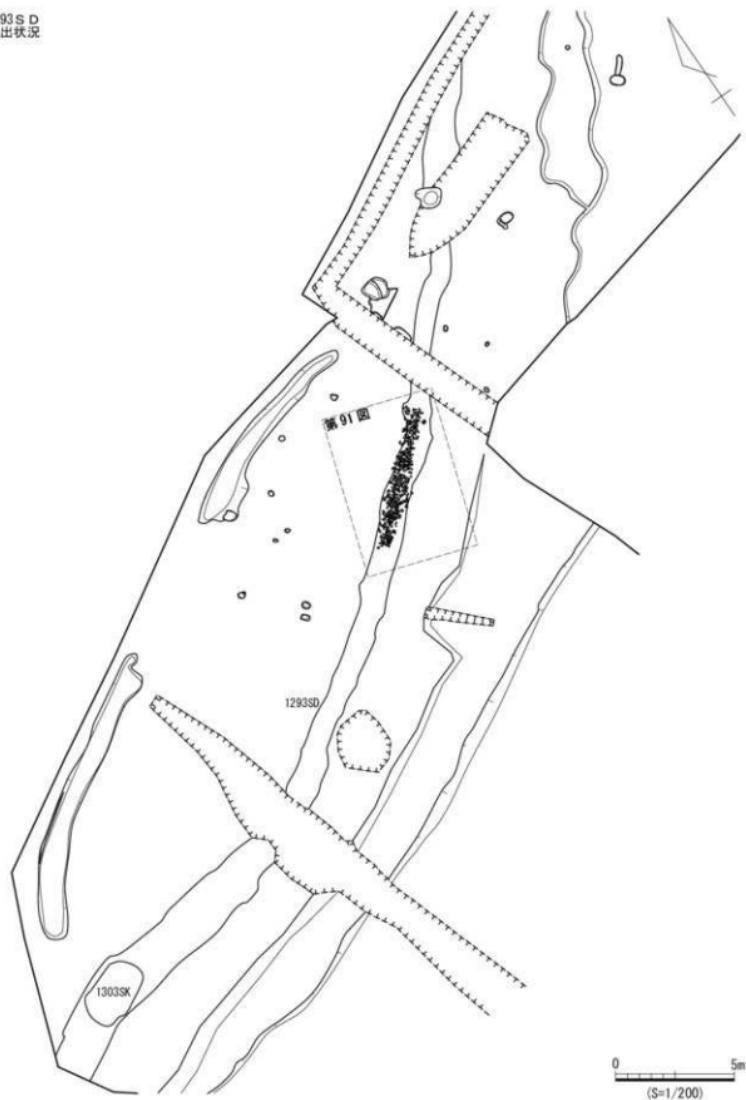
第87図 その他の溝状遺構 (4)





第89図 その他の溝状遺構 (6)

1293SD
検出状況



第90図 その他の溝状遺構 (7)

1293 S D
検出面の種出土状況

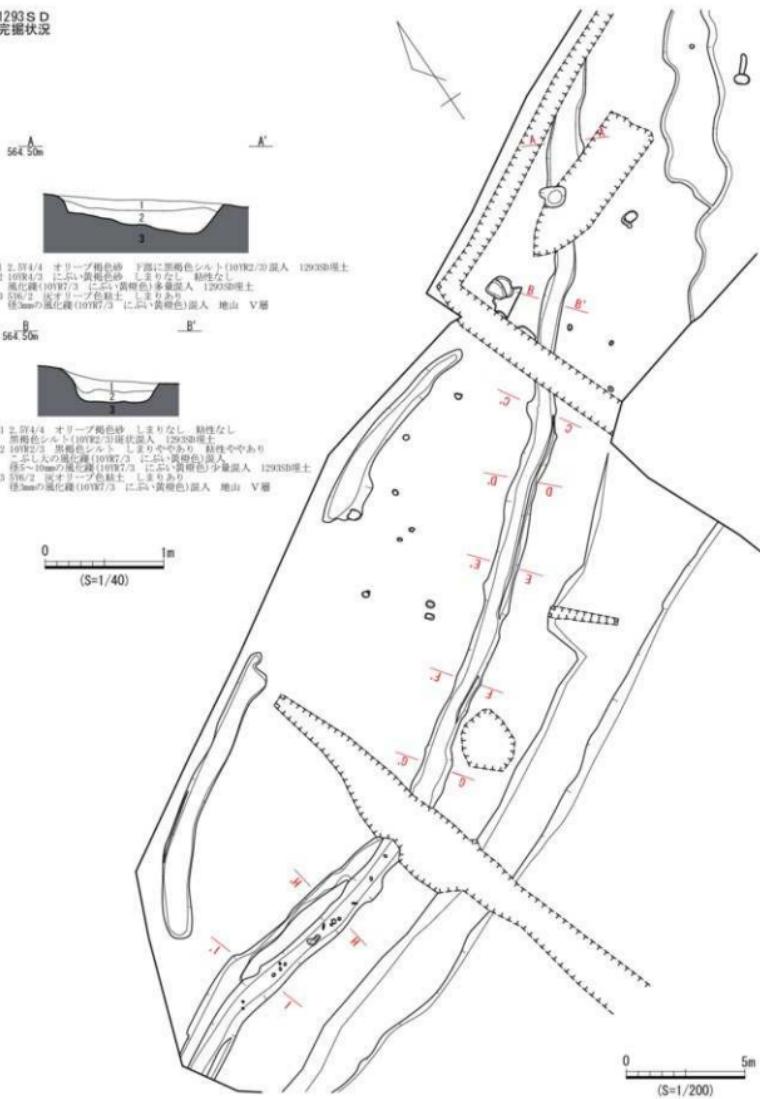


第91図 その他の溝状遺構 (B)

1293S D
埋土最下層検出状況

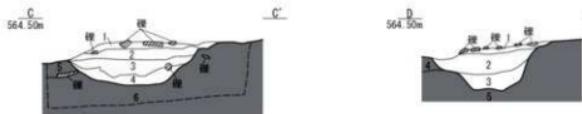


第92図 その他の溝状遺構 (9)

1293 S.D.
完掘状況

第93図 その他の溝状遺構 (10)

1293S D



- 1 10YE3/1 黒褐色土・土よりあり 粘性やあり
径2~5mmの風化砂礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入
- 2 10YE3/2 黒褐色シルト・土よりあり 粘性あり
径10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 多量混入 1293SD埋土
- 3 10YE3/3 黒褐色土・土よりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 4 10YE3/4 黒褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 5 10YE3/5 黒褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 6 3/2/6 地山 IV層

- 1 10YE5/1 黒褐色シルト・土よりあり 粘性ややあり
径2~5mmの風化砂礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入
- 2 3/3/4 黑褐色シルト・しまりあり 粘性なし
- 3 10YE4/1 黑褐色シルト・土よりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 多量混入 1293SD埋土
- 4 10YE4/2 黑褐色シルト・しまりややあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 多量混入 1293SD埋土
- 5 10YE4/3 黑褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 多量混入 地山 IV層



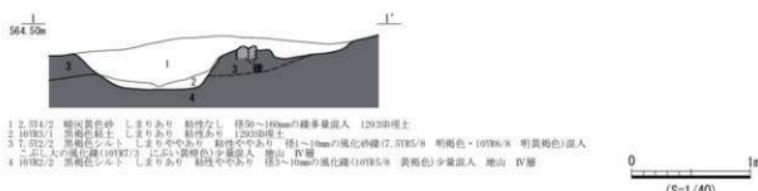
- 1 3/3/4/4 オリーブ褐色砂・しまりあり 粘性なし
黑褐色シルト (10YE2/2) と黒褐色シルト (10YE4/1) 混入 1293SD埋土
- 2 10YE2/3 黑褐色シルト・しまりあり 粘性あり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 3 10YE2/4 黑褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 4 10YE6/6 明黄褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり 地山 VI層

- 1 3/3/4/4 オリーブ褐色砂・しまりあり 粘性なし
- 2 10YE2/3 黑褐色シルト (10YE2/2) と黒褐色シルト (10YE4/1) 混入 1293SD埋土
- 3 10YE2/4 黑褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 4 10YE6/6 明黄褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり 地山 VI層



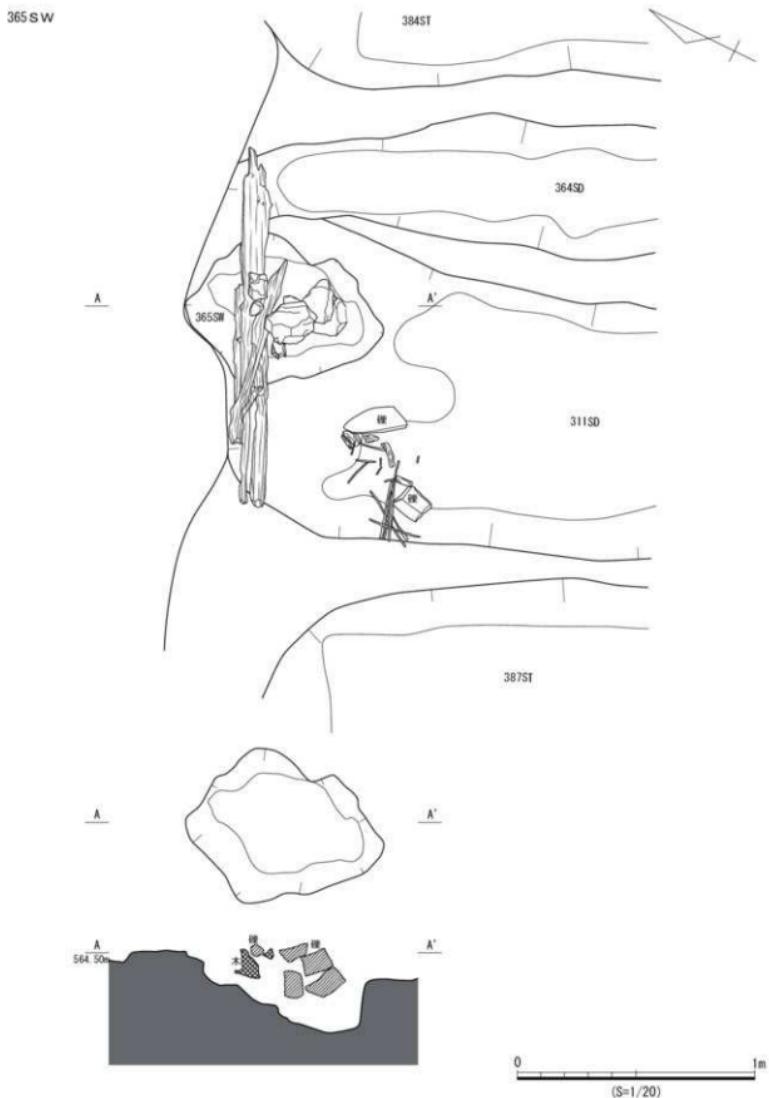
- 1 3/3/4/4 オリーブ褐色砂・しまりあり 粘性なし
黑褐色シルト (10YE2/2) と黒褐色シルト (10YE4/1) 混入 1293SD埋土
- 2 10YE2/3 黑褐色シルト・しまりあり 粘性あり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 3 10YE2/4 黑褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 4 10YE6/6 明黄褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり 地山 VI層

- 1 3/3/4/2 黑灰質土・土よりあり 粘性なし
750~1000mmの風化礫 (10YE2/2) 混入
- 2 10YE2/1 黑褐色土・しまりあり 粘性あり 1293SD埋土
- 3 7, 7/3/2/2 加筋土シルト・しまりややあり 粘性やややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 1293SD埋土
- 4 10YE2/2 黑褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE5/8 黄褐色) 少量混入 地山 IV層

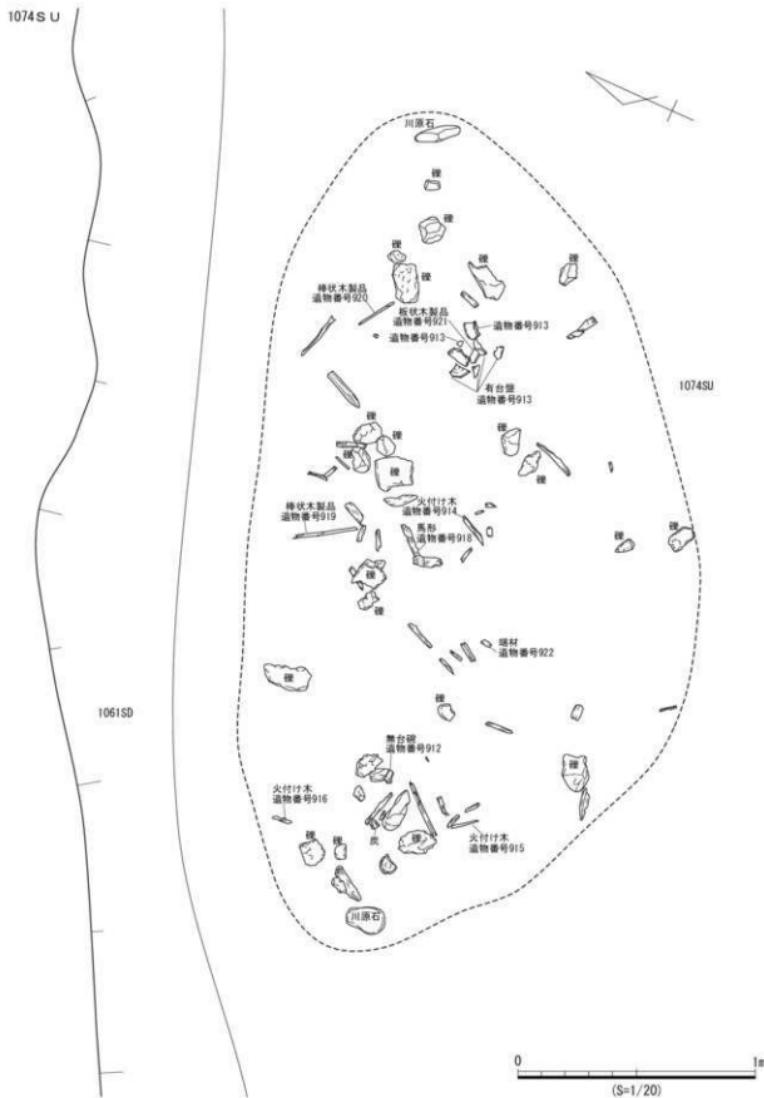


- 1 3/3/4/1 黑灰質土砂・土よりあり 粘性なし 径50~100mmの風化礫 (10YE2/2) 混入 1293SD埋土
- 2 10YE3/1 黑褐色土・土よりあり 粘性ややあり 1293SD埋土
- 3 7, 7/2/2 黑褐色シルト・しまりややあり 粘性ややあり 径5~10mmの風化礫 (10YE7/2 にふく 黄褐色) 少量混入 地山 IV層
- 4 10YE6/2 黑褐色シルト・しまりあり 粘性ややあり
径5~10mmの風化礫 (10YE5/8 黄褐色) 少量混入 地山 IV層

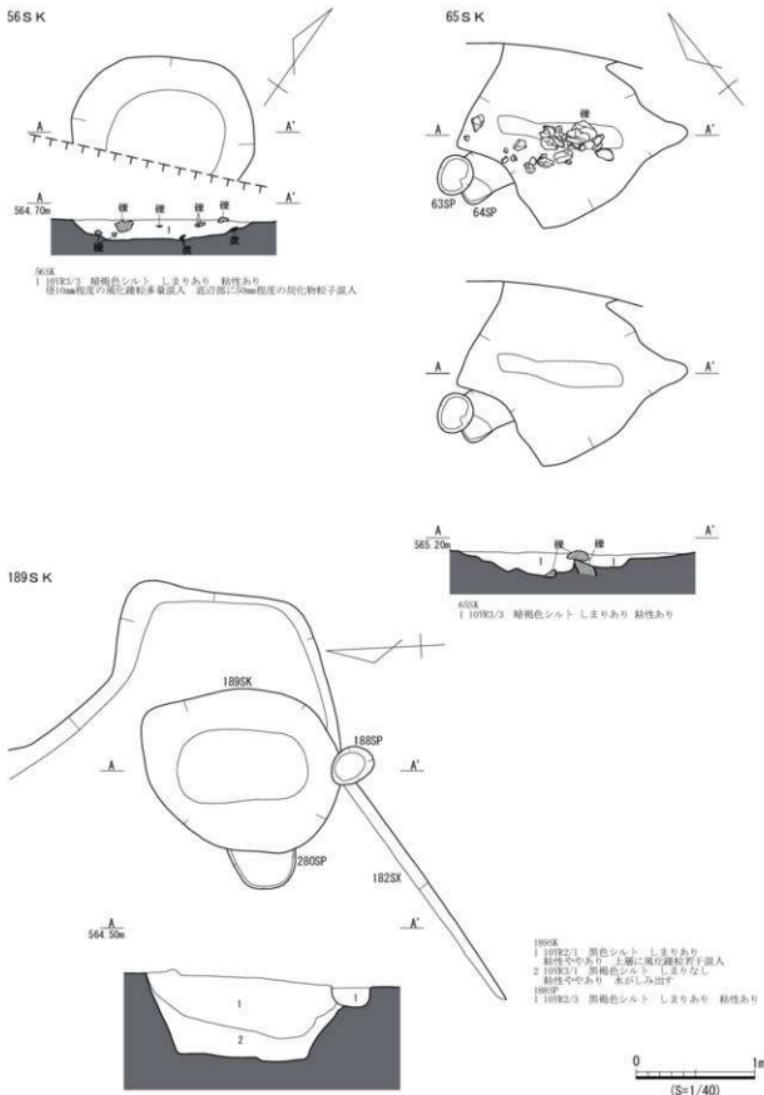
第94図 その他の溝状造構 (11)



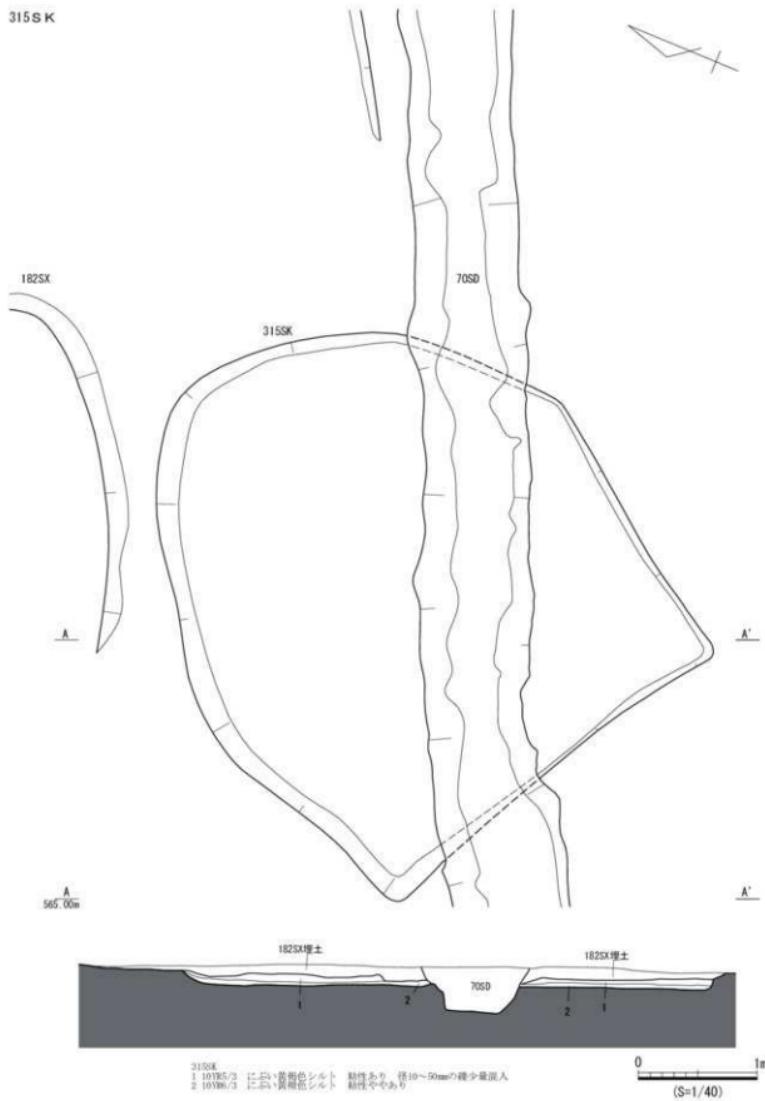
第95図 水制造構



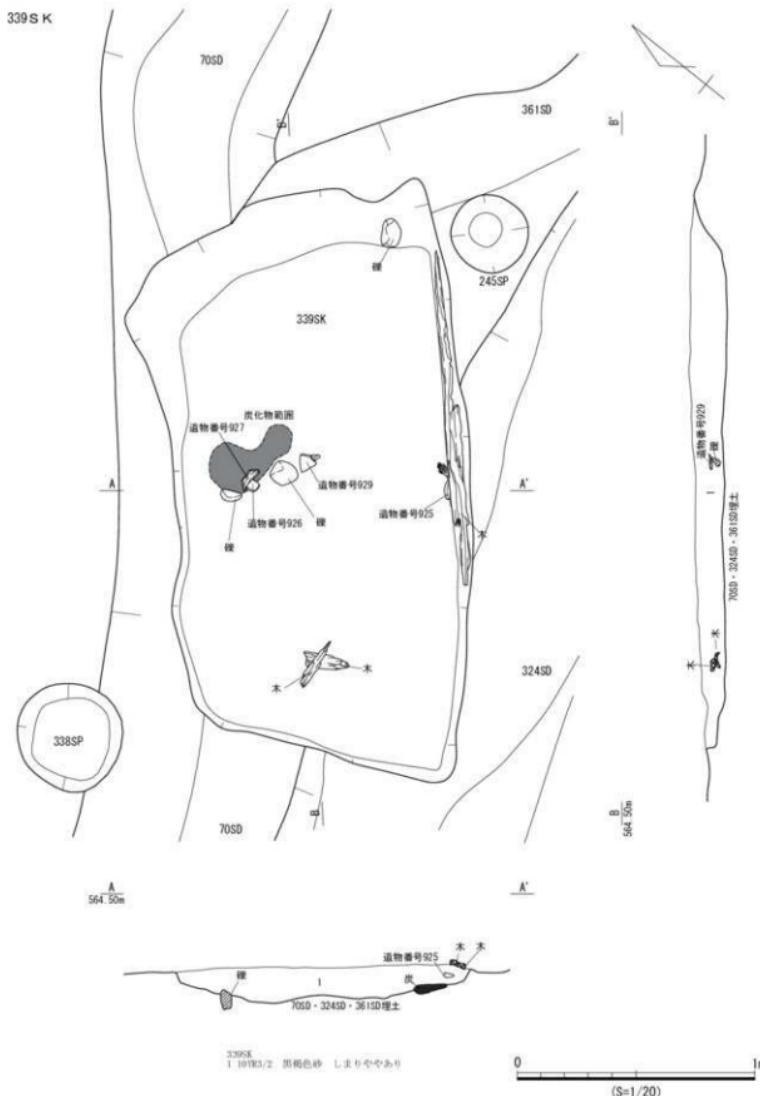
第96図 遺物集積



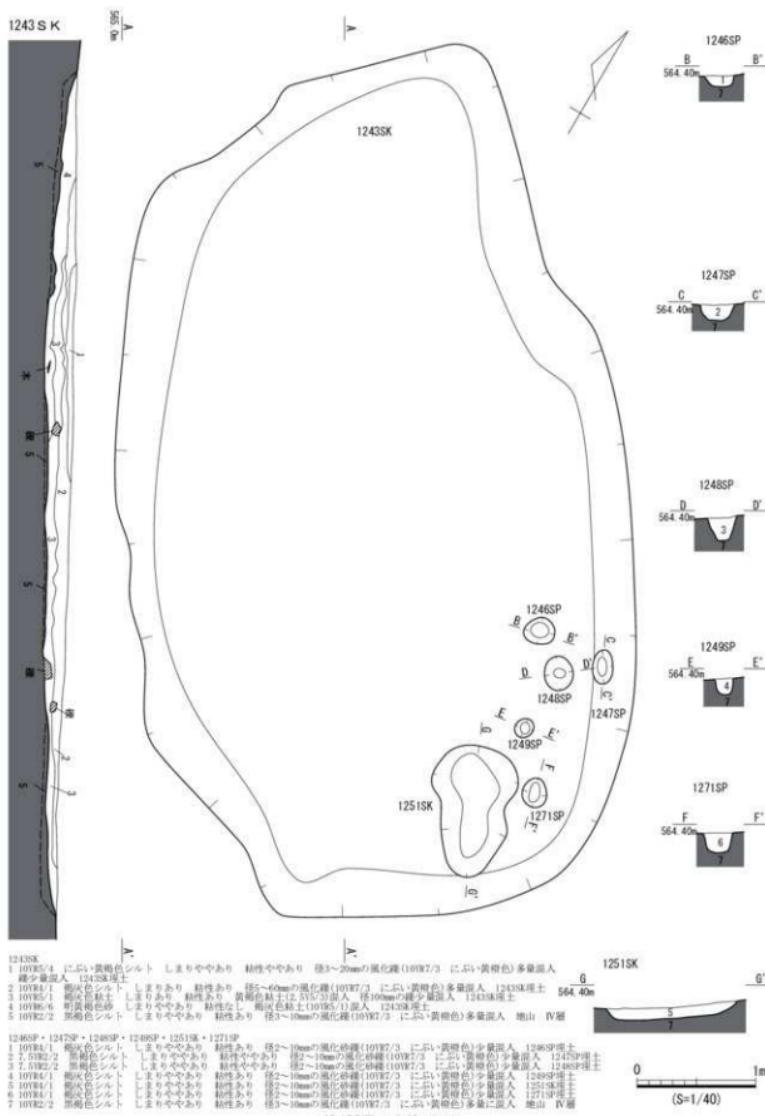
第97図 土坑（1）



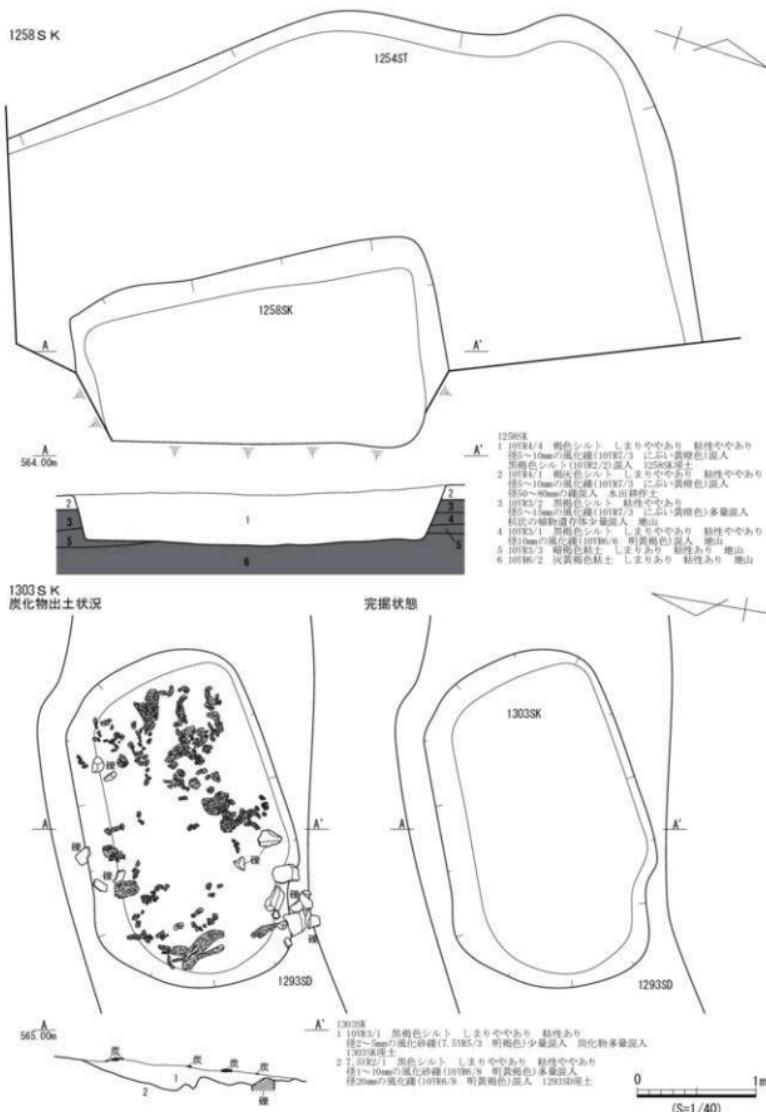
第98図 土坑 (2)



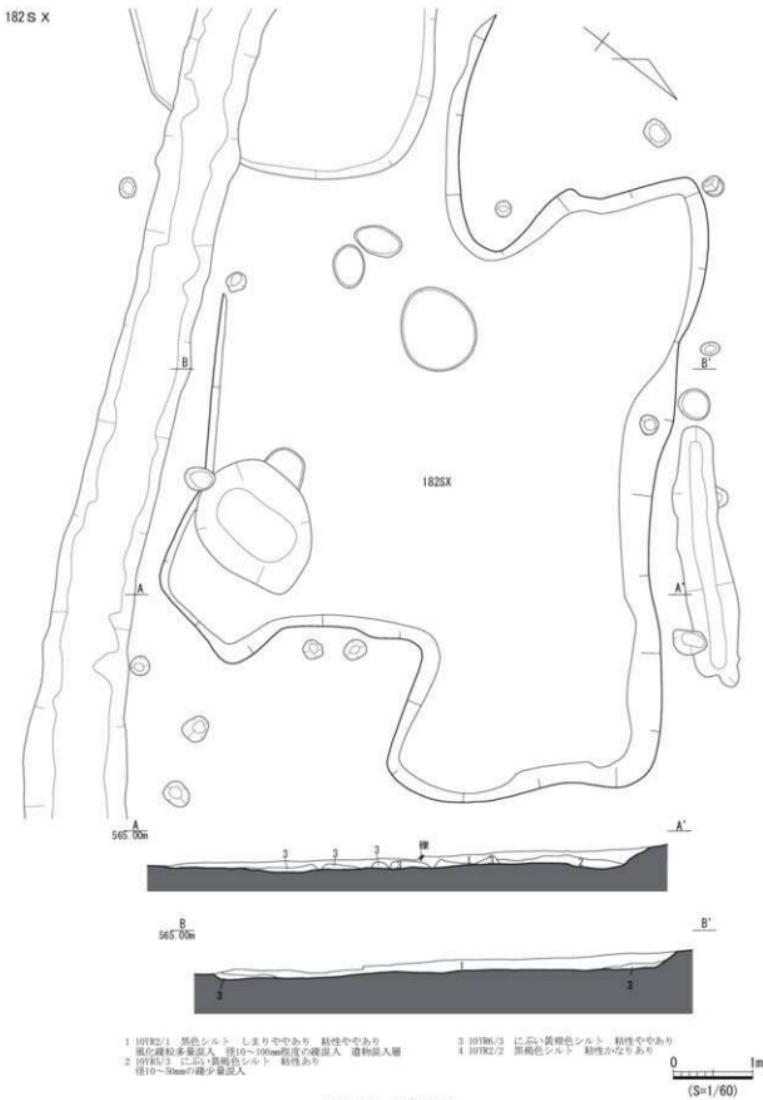
第99図 土坑（3）



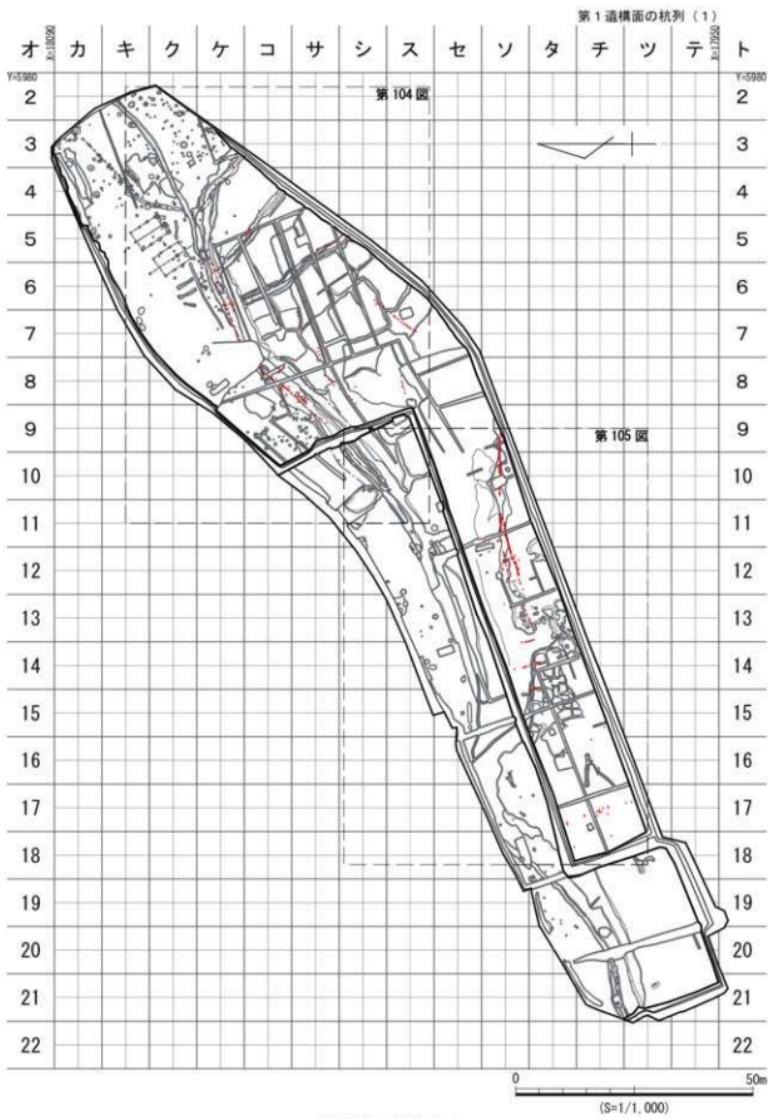
第100図 土坑（4）



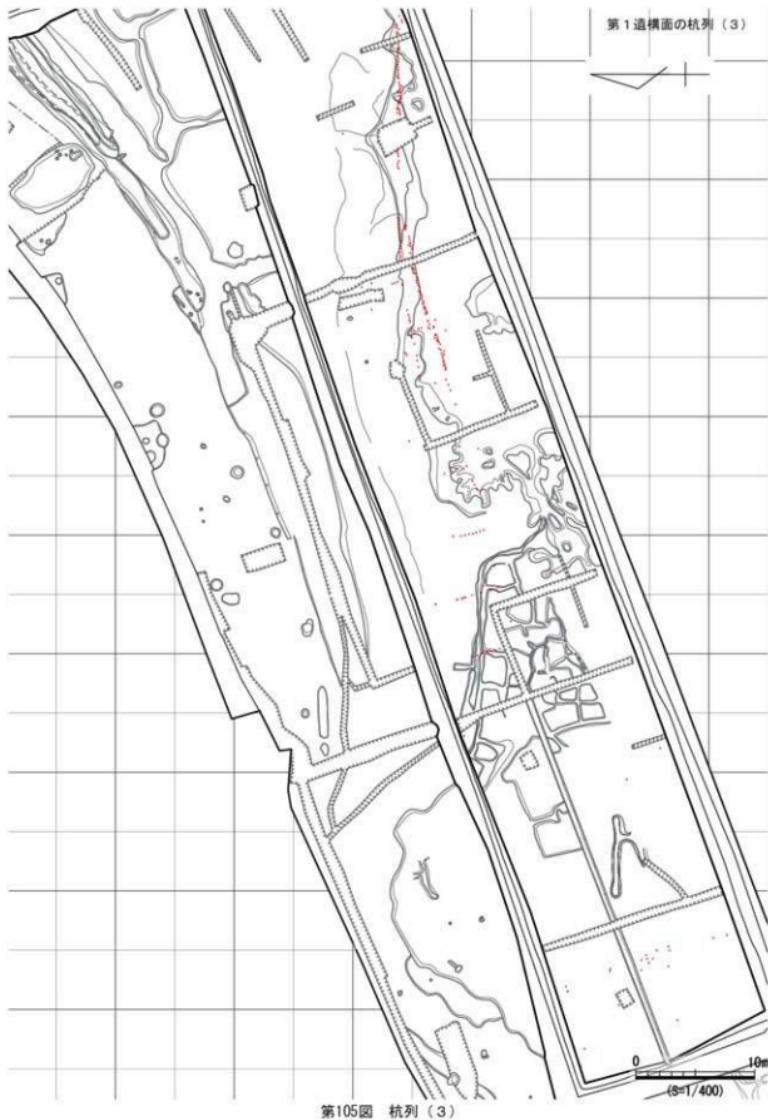
第101図 土坑（5）

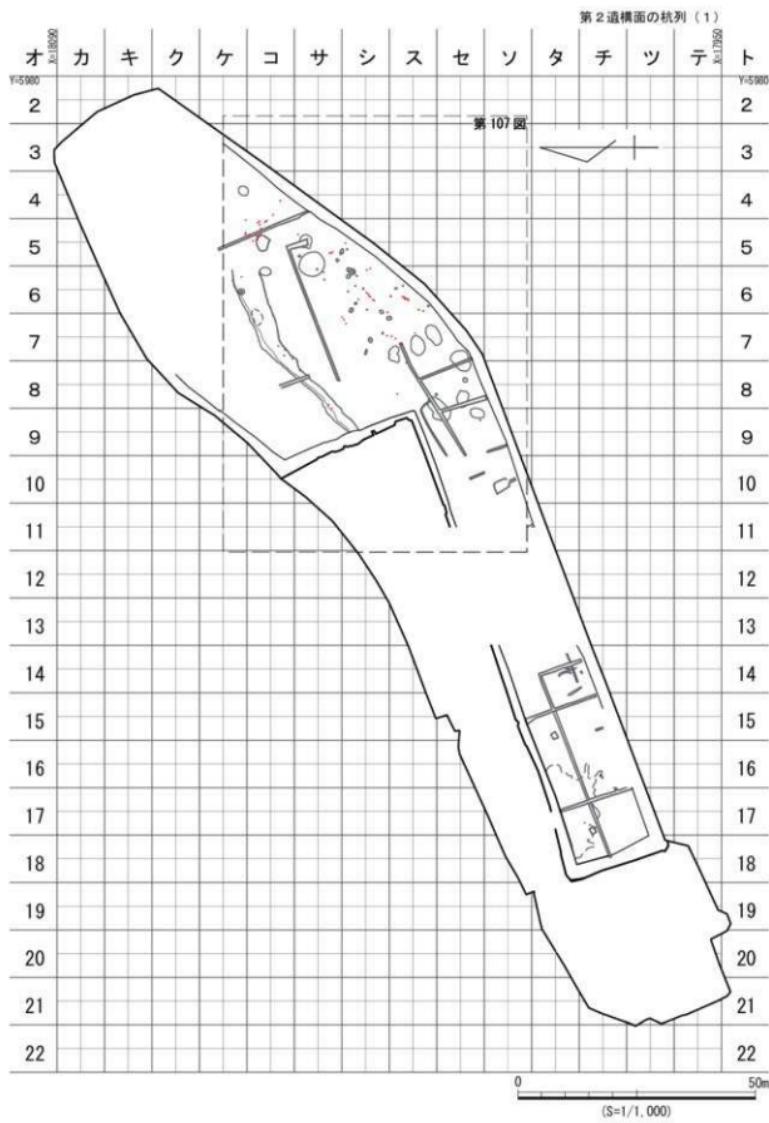


第102図 不明遺構

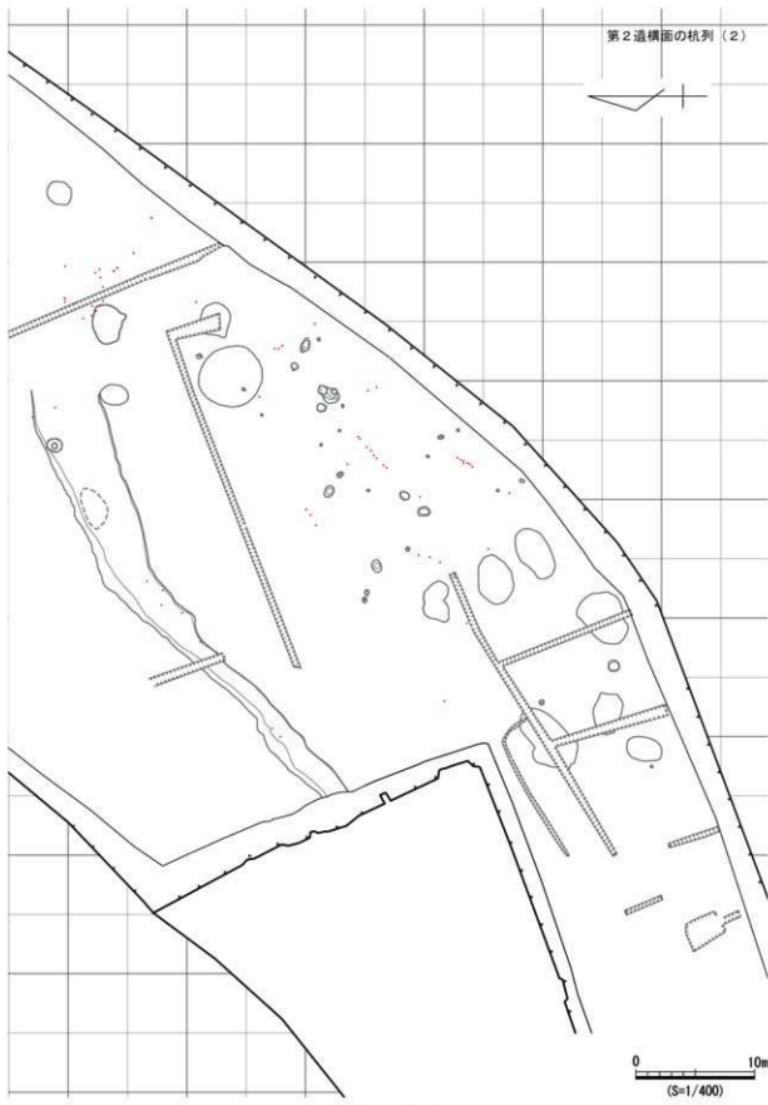








第106図 杭列（4）



第8表 遺構一覧表(1)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(新>旧) ●—当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
1	SP	9	ニ	IV	0.37	0.34	0.16			
2	SP	9	ニ	IV	0.45	0.45	0.20			●>20SK
3	SP	9	ニ	IV	0.34	0.31	0.42			
4	SP	9	ニ	IV	0.62	0.47	0.46			
5	SK	9	ニ	IV	0.62	0.50	0.40			
6	SP	9	ニ	IV	0.63	0.53	0.14			
8	SP	9	ニ	IV	0.30	0.25	0.38			
9	SK	9	ニ	IV	0.57	0.45	0.43			
10	SP	9	ニ	IV	0.18	0.17	0.07			
11	SP	9	ニ	IV	0.50	0.32	0.29	灰釉陶器1		
12	SP	9	ニ	IV	0.44	0.28	0.14			
13	SP	9	ニ	IV	0.17	0.17	0.08			
15	SP	8	ケ	IV	0.34	0.29	0.20			
16	SP	8	ケ	IV	0.26	0.24	0.29			
17	SP	8	ケ	IV	0.24	0.20	0.21			
18	SP	8	ケ	IV	0.27	0.24	0.29			
19	SP	8	ケ	IV	0.24	0.19	0.31			
20	SK	9	ニ	IV	1.55	1.04	0.27			2SP>●
21	SK	9	ニ	IV	1.14	0.70	0.35			
22	SK	9	ニ	IV	0.89	0.64	0.45			
23	SP	9	ニ	IV	0.24	0.16	0.21			
24	SP	9	サ	IV	0.20	0.16	0.25			
25	SP	9	サ	IV	0.37	0.28	0.32			
26	SP	9	サ	IV	0.30	0.30	0.30			
29	SK	9	サ	IV	残存 2.60	残存 1.73	0.11	須恵器5、灰釉陶器3	古代	
30	SP	9	サ	IV	0.26	0.20	0.19			
31	SP	9	サ	IV	0.50	0.30	0.32	木器類1		
32	SP	9	サ	IV	0.19	0.14	0.07			
33	SP	9	サ	IV	0.33	0.33	0.22			
34	SP	9	サ	IV	0.50	0.42	0.27			
35	SP	9	サ	IV	0.49	0.45	0.17			
36	SP	9	サ	IV	0.72	0.58	0.16			
37	SP	9	サ	IV	0.53	0.50	0.15			
38	SP	9	サ	IV	0.63	0.46	0.42			
39	SP	9	サ	IV	0.34	0.28	0.14	須恵器1		
40	SP	9	サ	IV	0.43	0.35	0.18			●>41SP
41	SP	9	サ	IV	0.53	残存 0.42	0.18	弥生土器ないし土師器1		40SP>●>42SP
42	SP	9	サ	IV	0.48	残存 0.43	0.20			41SP>●

第9表 遺構一覧表(2)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(折>回) ●=当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
43	SP	9	†	IV	0.45	0.41	0.11	発生土器ないし土師器1、灰釉陶器1		
44	SP	9	†	IV	0.26	0.25	0.18			
45	SP	9	†	IV	0.37	0.33	0.23			
46	SP	9	†	IV	0.27	0.19	0.16			●>47SP
47	SP	9	†	IV	残存 0.32	0.30	0.13			46SP>●
48	SP	9	†	IV	0.23	0.21	0.13			
49	SP	9	†	IV	0.19	0.18	0.14			
50	SP	9	†	IV	0.23	0.19	0.21	木器類3		
51	SP	9	†	IV	0.26	0.24	0.20			
52	SP	9	‡	IV	0.32	0.26	0.12			●>53SK
53	SK	9	‡	IV	0.94	0.55	0.22			52SP>●>54SP
54	SP	9	‡	IV	0.46	残存 0.16	0.15			53SK>●
55	SK	9	‡	IV	0.56	0.40	0.06			
56	SK	9	‡	IV	1.60	残存 0.85	0.17	須恵器11、灰釉陶器1、輸入磁器2、木器類3	古代	
57	SP	9	†	IV	0.24	0.21	0.12	須恵器1		
58	SK	3	‡	IV	残存 1.61	残存 0.76	0.11	須恵器1、灰釉陶器3	古代	
60	SK	3	‡	IV	残存 2.65	2.09	0.06	須恵器1、灰釉陶器2、古瀬戸系施釉陶器1	古代	61SK・62SK>●
61	SK	3	‡	IV	0.56	0.53	0.16			●>60SK
62	SK	3	‡	IV	0.60	0.54	0.05			●>60SK
63	SP	3	‡	IV	0.34	0.31	0.07	須恵器1、灰釉陶器1	古代	●>64SP
64	SP	3	‡	IV	残存 0.44	0.42	0.06			62SP>●
65	SK	3	‡	IV	1.81	残存 1.52	0.24	須恵器2	古代	
66	P(SAI)	3	‡	IV	0.32	0.29	0.13			
67	SP	3	‡	IV	0.17	0.15	0.14			
68	SP	2	†	IV	0.22	0.14	0.10			
69	SK	2	†	IV	0.84	0.78	0.49			
70	SD	2~7	†~‡	IV	残存 54.00	1.44	0.81	土師器30、須恵器29、灰釉陶器7、木器類12	古墳時代後期	297SK・299SP・301SP・338SP・339SK・341SP・361SD>●>315SK・335SK
71	SK	2	?	IV	0.72	0.68	0.21			
72	SP	2	?	IV	0.24	0.20	0.21			
73	SP	2	?	IV	0.25	0.26	0.24			
74	SK	2	?	IV	0.80	0.72	0.35			
75	SP	2	?	IV	0.30	0.30	0.22			
76	SP	2	?	IV	0.20	0.16	0.20			
77	SP	2	?	IV	0.24	0.18	0.20			
78	SP	2	?	IV	0.25	0.24	0.26			
79	SP	2	?	IV	0.20	0.20	0.12			
80	SP	2	?	IV	0.36	0.25	0.22			

第10表 遺構一覧表（3）

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ（m）			出土遺物	時代	重複関係（新>旧） ●—当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
81	SP	2	?	IV	0.26	0.24	0.13			
82	SP	2	?	IV	0.19	0.14	0.09			
83	SP	2	?	IV	0.45	0.38	0.17			
84	SK	2	?	IV	0.86	0.80	0.40			
85	SK	2	?	IV	0.70	0.60	0.30			
86	SK	2	?	IV	1.08	0.48	0.16			
87	SK	2	?	IV	1.40	1.00	—			88SP>●
88	SP	2	?	IV	0.23	0.21	0.16			●>87SK
89	SP	2	?	IV	0.39	0.38	0.08			
90	SK	3	?	91SK埋土	1.00	0.76	—			●>91SK
91	SK	3	?	IV	1.43	1.08	0.68			90SK>●
92	SP	3	?	IV	0.28	0.26	—			
93	SP	3	?	IV	0.33	0.28	—			
94	SP	3	?	IV	0.44	0.41	—			
95	SP	3	?	IV	0.26	0.21	0.06			
96	SP	3	?	IV	0.16	0.16	0.08			
97	SP	3	?	IV	0.42	0.30	0.14	弥生土器ないし土師器2		
98	SP	3	?	IV	0.25	0.21	0.15			
99	SK	3	?	IV	0.56	0.30	0.08			
101	SP	3	?	IV	0.26	0.20	0.37			
102	SP	3	?	IV	0.40	0.20	0.07			
103	SK	2	?	IV	1.10	1.03	0.16			104SP>●
104	SP	2	?	IV	0.34	0.30	0.13			●>103SK・105SP
105	SP	2	?	IV	残存 0.30	0.30	—			104SP>●>106SP
106	SP	2	?	IV	0.48	0.54	0.26	弥生土器ないし土師器1		105SP>●
107	SP	2	?	IV	0.60	0.45	0.24			
108	SK	2	?	IV	0.54	0.45	0.19			
109	SP	3	?	IV	0.33	0.32	0.21			
110	SK	3	?	IV	1.76	残存 1.05	0.33			111SP・113SK>●
111	SP	3	?	IV	0.38	0.40	0.21			●>110SK
112	SP	3	?	IV	0.27	0.26	0.10			
113	SK	3	?	IV	0.77	0.70	0.30			●>110SK
114	SK	3	?	IV	残存 0.73	残存 0.70	0.37			
115	SK	3	?	IV	残存 0.68	残存 0.55	0.04			
116	SP	2	?	IV	0.40	0.46	0.19			
117	SK	3	?	IV	1.40	1.33	0.45			
118	SK	3	?	IV	1.07	0.98	0.55			
119	SP	3	?	IV	0.28	0.23	0.13			

第11表 遺構一覧表(4)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(折>回) ●=当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
120	SK	3	?	IV	1.28	1.00	0.54			
121	SP	3	?	IV	0.33	0.20	0.05			
122	SP	3	?	IV	0.18	0.18	0.17			
123	SP	3	?	IV	0.31	0.31	0.08			
124	SP	3	?	IV	0.41	0.30	0.18			
126	SP	3	?	IV	0.41	0.23	0.15			
127	SP	3	?	IV	0.17	0.16	0.02			
128	SP	3	?	IV	0.15	0.14	0.08			
130	SK	3	?	IV	1.38	1.20	0.04			
131	P(SAI)	3	?	IV	0.49	0.39	0.16		古代	
133	SP	3	?	IV	0.28	0.19	0.11			
134	P(SAI)	3	?	IV	0.65	0.60	0.29		古代	
135	SK	3	?	IV	0.64	0.42	0.22			
136	SP	3	?	IV	0.26	0.23	0.11			
137	SK	3	?	IV	0.59	0.34	0.07			138SK>●
138	SK	3	?	IV	0.35	0.25	0.07			●>137SK
139	SK	3	?	IV	0.64	0.59	0.07			
140	SK	3~4	?	IV	1.43	1.08	0.15			
141	SP	3	?	IV	0.38	0.33	0.11	剥片類1		
142	SP	3	?	IV	0.28	0.24	0.18			
143	SP	3	?	IV	0.23	0.22	0.06			
144	SK	3	?	IV	0.55	0.30	0.09			
145	SP	3	?	IV	0.32	0.22	0.15	須恵器1		
146	P(SAI)	3	?	IV	0.66	0.60	0.30		古代	
147	SP	3	?	IV	0.31	0.26	0.18			
148	SK	4	?	IV	0.77	0.54	0.13			
149	SP	4	?	IV	0.26	0.24	0.11			
150	P(SAI)	4	?	IV	0.47	0.36	0.26		古代	
151	SP	4	?	IV	0.31	0.28	0.16			
152	SP	4	?	IV	0.30	0.26	0.17	須恵器1、灰釉陶器1	古代	●>153SK
153	SK	4	?	IV	0.61	0.60	0.33	須恵器1		152SP>●
154	SP	4	?	IV	0.25	0.21	0.26	土師器1		
155	SP	4	?	IV	0.37	0.28	0.16			156SP>●
156	SP	4	?	IV	0.23	0.19	0.12			●>155SP
157	SP	4	?	IV	0.39	0.31	0.17			
158	SP	4	?	IV	0.24	0.20	0.15	弥生土器ないし土師器1		
160	SP	4	?	IV	0.28	0.24	0.06	須恵器1		
161	SP	4	?	IV	0.34	0.20	0.20			

第12表 遺構一覧表（5）

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ（m）			出土遺物	時代	重複関係（新>旧） ●—当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
162	SP	2	キ～フ	IV	0.28	0.23	0.13			
163	SP	4	リ	IV	0.29	0.27	0.24			
164	SP	4	リ	166SK 埋土	0.23	0.22	—			●>166SK
165	SP	4	リ	166SK 埋土	0.24	0.24	—			●>166SK
166	SK	4	リ	IV	1.32	1.24	0.49			164SP・165SP>●
167	SP	4	リ	IV	0.34	0.30	0.20	須恵器1		
168	SK	4	リ	IV	現存 2.75	残存 0.64	0.50	須恵器5	古代	
169	SP	5	リ	IV	0.47	0.40	0.20			
171	SP	5	リ	IV	0.28	0.26	0.17			
172	SK	5	リ	IV	1.73	0.95	0.24	須恵器3	古代	
173	SK	5	リ	IV	0.95	0.70	0.30			
174	SP	4	リ	IV	0.50	0.39	0.08			
175	SP	4	リ	IV	現存 0.23	0.23	0.20			176SP>●
176	SP	4	リ	IV	0.23	0.21	0.19			●>173SP
177	SP	4	リ	IV	0.30	0.27	0.19			
178	SP	4	リ	IV	0.18	0.16	0.14			
180	SK	5	リ	IV	0.60	0.58	0.06	弥生土器ないし土師器1、須恵器1		
181	SK	4	リ	IV	0.20	0.18	0.07			
182	SX	3～4	リ～フ	IV	現存 9.80	6.20	0.25	弥生土器ないし土師器1、土師器11、須恵器85、灰釉陶器32、木器類1	古代	244SP>●
183	SP	3	リ	IV	0.43	0.30	0.12			
184	SP	3	リ	IV	0.29	0.23	0.13			
185	SP	3	リ	IV	0.28	0.25	0.23			
186	SP	3	リ	IV	0.35	0.30	0.12			
187	SP	3	リ	IV	0.35	0.28	0.17			
188	SP	3	リ	IV	0.38	0.27	0.18			●>189SK
189	SK	3	リ	IV	1.77	1.41	0.76			188SP>●>280SP
192	SD	4	リ～フ	IV	13.25	0.82	0.23	須恵器48、灰釉陶器15、近世陶器3、木器類2	古代	404SP>383SK>●
193	SP	4	リ	IV	現存 0.50	0.43	0.17	須恵器4	古代	
194	SP	4	リ	IV	現存 0.30	0.24	0.16			
195	SP	4	リ	IV	0.42	0.29	0.21			●>196SD
196	SD	4	リ	IV	3.20	0.60	0.17	弥生土器ないし土師器1、須恵器55、灰釉陶器2	古代	195SP>●>247SP
197	SP	4	リ	IV	0.28	0.26	0.27			
198	P(SAI)	4	リ	IV	0.50	0.41	0.28	須恵器1	古代	
199	SP	4	リ	IV	0.23	0.15	0.25			
200	SP	4	リ	IV	0.30	0.26	0.38			
201	P(SAI)	4	リ	IV	0.48	0.34	0.36		古代	

第13表 遺構一覧表(6)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(折=既) ●=当造構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
202	SP	4	†	IV	0.24	0.23	0.16			
203	SP	4	†	IV	0.30	0.25	0.30			
205	SP	4	†	IV	0.33	0.26	0.15	須恵器1		
206	SP	4	?	IV	0.44	0.40	0.30	須恵器2	古代	●>3768P
207	SD	5	?	IV	2.40	0.68	0.06	須恵器1		●>3765P・376P(SD)
208	SP	5	?	IV	0.19	0.16	0.06			
210	SK	5	?	IV	0.57	0.46	0.09			
211	P(SH2)	5	?	IV	0.63	0.35	0.26		古代	
212	SP	5	?	IV	0.41	0.39	0.17	須恵器2	古代	
213	SK	5	?	IV	0.66	0.62	0.21	弥生土器ないし土師器2、須恵器3、木器類7		
214	SP	5	?	IV	0.18	0.14	0.05			
215	SP	5	?	IV	0.18	0.16	0.06			
217	SP	5	?	IV	0.25	0.23	0.09			
218	SP	5	?	IV	0.27	0.20	0.04			●>220SP
219	P(SH2)	5	?	IV	0.64	0.55	0.29		古代	
220	SP	5	?	IV	0.36	0.24	0.05			218SP>●
221	SP	5	?	IV	0.28	0.21	0.10			
222	P(SH1)	5	?	IV	0.31	0.30	0.20	木器類2	古代	
223	P(SH1)	5	?	IV	0.42	0.36	0.25	須恵器2、灰釉陶器1、木器類1	古代	
224	SP	5	?	IV	0.21	0.16	0.11			
225	SP	5	?	IV	0.28	0.24	0.12			
226	SK	5	?	IV	0.84	0.74	0.13			
227	SK	5	?	IV	0.77	0.70	0.14			
228	SK	5	?	IV	0.62	0.41	0.16			
229	SP	5	?	IV	0.32	0.28	0.30			
230	SP	5	?	IV	0.30	0.28	0.14			
232	SK	5	?	IV	0.65	0.46	0.08	須恵器1		
234	SD	5	?	IV	3.90	0.62	0.08	木器類1		
235	P(SH2)	5	?	IV	0.51	0.50	0.28		古代	
236	SP	5	?	IV	0.30	0.25	0.06			
237	SP	5	?	IV	0.39	0.32	0.17	須恵器1		
238	P(SH1)	5	?	IV	0.41	0.41	0.41	木器類1	古代	
239	P(SH1)	5	?	IV	0.43	0.35	0.36	弥生土器ないし土師器1、木器類1	古代	
240	SP	5	?	IV	0.21	0.20	0.14			
241	P(SH1)	5	?	IV	0.31	0.31	0.23	木器類5	古代	
242	SP	4	†	IV	0.39	0.34	0.07	須恵器2、石罐1	古代	
244	SP	4	†	I&2SX 埋土	0.26	0.24	0.14			●>182SX

第14表 遺構一覧表(7)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位			大きさ(m)	出土遺物	時代	重複関係(新>旧) ●—当遺構
		東西	南北	長軸	短軸	深さ				
245	SP	5	ヶ	361SD 埋土	0.33	0.32	0.07			●>361SD
246	SP	5	?	IV	0.30	0.28	0.12			
247	SP	4	ヰ	IV	残存 0.34	残存 0.13	0.16	須恵器3、木器類3	古代	196SD>●
248	SP	3	?	IV	0.36	0.34	—			
249	SP	3	?	IV	0.22	0.17	0.33			
250	SP	3	?	IV	0.30	0.23	0.09			
251	SP	3	?	IV	0.20	0.18	0.19			
252	SP	3	ヶ	IV	0.23	0.21	0.09			
253	SP	3	ヶ	IV	0.24	0.20	0.23			
254	SP	3	ヶ	IV	0.30	0.30	0.09			
255	SP	3	ヶ	IV	0.24	0.16	0.03			
256	SP	3	ヶ	IV	0.24	0.21	0.10			
257	SP	3	ヶ	IV	0.23	0.22	0.14			
258	SP	3	ヶ	IV	0.30	0.22	0.09			
259	SP	3	ヶ	IV	0.29	0.27	0.17			
260	SP	3	ヶ	IV	0.20	0.19	0.09			
261	SP	3	ヶ	IV	0.28	0.26	0.16			
262	SP	3	ヶ	IV	0.27	0.16	0.14			
264	SP	3	ヶ	IV	0.23	0.17	0.11			
266	SP	3	ヶ	IV	0.21	0.17	0.09			
267	SP	3	ヶ	IV	0.37	0.23	0.23			
268	SP	3	ヶ	IV	0.38	0.23	0.14			
269	SP	3	ヶ	IV	0.34	0.28	0.08			
271	SK	7	ヰ	IV	1.65	1.16	0.15			
272	SK	7	ヰ	IV	1.44	0.98	0.17			
273	SK	7	ヰ	IV	1.40	1.00	0.15			
274	SK	8	ヶ	IV	1.34	0.90	0.06			
275	SK	8	ヶ	IV	残存 1.22	残存 0.73	0.04			
276	SK	7	ヶ	IV	1.00	0.96	0.03			
277	SK	7	ヶ	IV	0.66	0.48	0.03			
279	SP	7	ヶ	IV	0.46	0.35	0.09			
280	SP	3	?	182SX 埋土	残存 0.58	残存 0.46	0.14			189SK>●
281	SK	4	?	182SX 埋土	1.09	0.98	0.09			
283	SK	4	?	182SX 埋土	0.67	0.40	0.07			
284	SK	4	?	182SX 埋土	0.55	0.40	0.08			
286	SP	4	?	182SX 埋土	0.29	0.22	0.17			
287	SP	4	?	IV	0.45	0.36	0.04			
288	SP	4	?	IV	0.38	0.29	0.06			

第15表 遺構一覧表(8)

遺構番号	種別	検出グリッド 東西 南北	検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(折>日) ●=当遺構	
				長軸	短軸	深さ				
289	SP	4	?	IV	0.38	0.20	0.08			
290	SP	8	?	IV	0.43	0.41	0.08			
291	SP	4	?	IV	0.21	0.20	—			
292	SK	6	?	IV	1.65	1.02	0.13			
293	SK	6	?	IV	0.63	0.37	0.11			
294	SP	6	?	IV	0.35	0.29	0.09			
295	SP	6	?	IV	0.36	0.31	0.09			
296	SP	6	?	IV	0.36	0.26	0.13			
297	SK	6	?	IV	0.56	0.52	0.04		●>70SD	
298	SP	6	?	IV	0.35	0.26	0.17			
299	SP	6	?	IV	0.36	0.24	0.16	木器類1	●>70SD	
300	SP	6	?	IV	0.33	0.27	0.06			
301	SP	7	?	IV	0.41	0.36	0.10	木器類1	●>70SD	
302	SP	7	?	IV	0.28	0.18	0.14			
303	SP	6	?	IV	0.46	0.38	0.17		●>304SP	
304	SP	6	?	IV	残存 0.33	0.24	0.13		303SP>●	
305	SP	6	?	IV	0.48	0.42	0.15		●>306SK	
306	SK	6	?	IV	0.76	0.37	0.21		305SP・307SP>●	
307	SP	6	?	IV	0.41	0.40	0.14		●>306SK	
310	SM	5~9	ケシ	IV	残存 49.60	残存 2.88	—	弥生土器ないし土師器78、土師器14、須恵器700、灰釉陶器198、輸入磁器2、山茶碗2、常滑焼4、木器類177、スクレイバー1、磨石類1、古代瓦2	古代	342SP>●
311	SD	5~6	ケシ	III	残存 26.00	1.19	0.18	弥生土器ないし土師器22、土師器1、須恵器456、灰釉陶器142、土師質土器1、輸入磁器7、山茶碗2、常滑焼2、木器類869、石礫1	古代	365SP>●>364SD
312	SP	4	?	IV	0.31	0.30	0.17	須恵器1		
313	SP	3	?	IV	0.34	0.19	0.06			
314	SP	3	?	IV	0.38	0.23	0.13			
315	SK	4	?	IV	4.50	3.95	0.10	須恵器1	70SD>●	
316	SP	3	?	IV	0.24	0.25	0.17			
317	SP	4	?	IV	0.25	0.20	0.15	弥生土器ないし土師器1		
318	SP	5	?	IV	0.37	0.36	0.12	灰釉陶器1、木器類1		
320	SM	4~6	ケコ	—	残存 17.60	0.70	—	須恵器2	古代	
321	SD	4~6	ケコ	III	残存 21.60	残存 1.92	0.14	弥生土器ないし土師器9、土師器11、須恵器243、灰釉陶器11、綠釉陶器1、近世陶磁器1。木器類403、打製石斧1、削片類1	古代	336SD>●>324SD
323	SD	3	?	IV	残存 5.66	0.82	0.14	弥生土器ないし土師器1、須恵器2、木器類3	古代	●>361SD
324	SD	3~7	?	IV	残存 43.20	2.20	0.28	縄文土器3、弥生土器ないし土師器87、土師器12、須恵器726、灰釉陶器23、綠釉陶器8、木器類586、スクレイバー1、磨石類1、古代瓦1	古代	321SD・339SK>●>348SD・361SD
325	SK	4	?	IV	0.97	0.83	0.05			
326	SP	4	?	IV	0.44	0.35	0.26			

第16表 遺構一覧表(9)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(新>旧) ●—当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
327	ST	4~5	サヘシ	IIIa	残存 8.80	残存 5.44	—		古代	
328	SD	6~7	フヘク	IV	15.70	0.55	0.04			
330	SD	5	ケヘコ	321SD 埋土	残存 8.60	0.45	0.04	弥生土器ないし土師器1、須恵器15、木器類3	古代	●>321SD
334	SP	5	ケ	III	0.41	0.28	0.06			●>384ST
335	SK	5	ケ	IV	残存 0.57	残存 0.51	0.30	弥生土器ないし土師器8	70SD	●
336	SP	5	ケ	IV	0.52	0.47	0.10			
337	SP	6	ケ	IV	0.22	0.19	0.12			
338	SP	6	ケ	IV	0.42	0.45	0.10	須恵器3	古代	●>70SD
339	SK	5	ケ	361SD 埋土	2.54	1.38	0.16	土師器11、須恵器185、灰釉陶器21、木器類23、鉄滓1	古代	●>70SD+324SD+361SD
340	SP	6~7	ケ	IV	0.46	0.46	0.06			
341	SP	6~7	ケ	IV	0.44	0.35	0.05			●>70SD
342	SP	6	ケ	310SM 盛土	0.22	0.21	0.06			●>310SM
343	SK	5	ケ	IV	0.51	0.49	0.07	須恵器6	古代	
344	SP	5	ケ	IV	0.35	0.33	0.19			
345	SP	8	コ	IV	0.40	0.33	0.12	須恵器1		
346	P(SH1)	6	?	IV	0.44	0.36	0.31	木器類1	古代	
348	SD	3~5	ケ	V	残存 11.60	1.12	0.14	縄文土器2、弥生土器ないし土師器24、須恵器24、灰釉陶器1、木器類17、スクレイノイー1	古代	324SD>●
349	P(SH1)	6	?	IV	0.43	0.34	0.32		古代	
350	P(SH1)	6	?	IV	0.38	0.38	0.30		古代	
352	P(SH1)	6	?	IV	0.43	0.32	0.35	木器類1	古代	
353	SP	6	?	IV	0.35	0.35	0.20			
354	P(SH2)	5	?	IV	0.71	0.61	0.34	須恵器1	古代	
355	SP	6	?	IV	0.49	0.42	0.22			
356	SP	5	?	IV	0.37	0.29	0.07			
357	SP	5	?	IV	0.44	0.35	0.28			
358	P(SH2)	5	?	IV	0.51	0.42	0.22		古代	
359	SP	5	?	IV	0.36	0.34	0.12			
360	SP	6	?	IV	0.35	0.32	0.15			
361	SD	3~5	ケ	V	残存 25.76	1.08	0.26	弥生土器ないし土師器53、須恵器76、木器類44、砥石1	古代	245SP+323SD+324SD+339SK>●>70SD+374SD
364	SD	5~6	ケヘシ	III	残存 25.84	残存 0.70	0.11	弥生土器ないし土師器2、須恵器25、灰釉陶器9、木器類27	古代	311SD>●
365	SW	6	ケ	III	0.84	0.66	0.25	弥生土器ないし土師器4、須恵器39、灰釉陶器11、常滑焼1、木器類29	古代	●>311SD
366	SD	7~8	コヘシ	III	残存 13.25	残存 0.95	0.07	弥生土器ないし土師器6、須恵器37、灰釉陶器9、木器類2	古代	
367	SD	8~9	コヘシ	IV	—	—	—	弥生土器ないし土師器88、土師器24、須恵器98S、灰釉陶器140、土師質土器1、常滑焼1、近世陶磁器1、木器類173、砥石2、鉄滓4、古代瓦3	古代	
368	SD	8~9	コヘシ	—	—	—	—	弥生土器ないし土師器9、土師器1、須恵器79、灰釉陶器55、輪入磁器2、木器類19	古代	

第17表 遺構一覧表(10)

遺構番号	種別	検出グリッド 東西 南北	検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(折>回) ●=当造構
				長軸	短軸	深さ			
369	SD	8~9	+	368SD 埋土	残存 3.04	0.40	0.10		
370	P(SH2)	5	モ	IV	0.52	0.51	0.21		古代
371	SP	4	?	IV	0.33	0.30	0.18		
372	SD	8~9	ヨシ	IV	—	—	—	弥生土器ないし土師器44、土師器19、須恵器213、灰釉陶器59、輪入 器1、木器類72、打製石斧3、古代瓦5	古代
373	SD	8~9	ヨシ	IV	—	—	—	弥生土器ないし土師器25、須恵器116、灰釉陶器21、木器類22	古代
374	SD	4~5	ヨシ	IV	残存 5.60	残存 1.60	0.20	弥生土器ないし土師器8、須恵器1、 木器類1、打製石斧1	361SD>●
375	SP	5	?	IV	残存 0.50	残存 0.38	0.09	須恵器1	207SD>●
376	P(SH2)	5	?	IV	残存 0.40	残存 0.40	0.25	須恵器1	古代
377	P(SH2)	5	モ	IV	0.37	0.39	0.17		古代
378	P(SH2)	5	モ	IV	0.36	0.34	0.14		古代
379	SP	4	?	IV	残存 0.50	0.48	0.17	須恵器2	古代
380	P(SH2)	5	モ	IV	0.30	0.31	0.11		古代
381	SP	4~5	モ	IV	0.51	0.49	0.29	須恵器1	
382	SP	4	モ	IV	0.51	0.48	0.15		
383	SK	4	モ	IV	1.38	1.05	0.16	須恵器1	404SP>●>192SD
384	ST	5~6	ヨシ	IIIa	残存 7.92	残存 4.32	—		古代
385	ST	4~6	ヨシ	IIIa	残存 10.88	残存 4.88	—		古代
386	ST	5~6	ヨシ	IIIa	7.52	5.44	—		古代
387	ST	6~7	ヨ	IIIa	5.04	3.48	—		古代
388	ST	7	ヨ	IIIa	4.96	3.68	—		古代
389	ST	6~7	ヨシ	IIIa	4.48	4.48	—		古代
390	ST	6~7	ヨシ	IIIa	4.16	3.64	—		古代
391	ST	6~7	ヨシ	IIIa	8.40	7.28	—		古代
392	ST	5~6	ヨシ	IIIa	8.32	5.56	—		古代
393	ST	5~6	ヨ	IIIa	5.56	残存 4.88	—		古代
394	ST	7~8	ヨシ	IIIa	6.56	6.00	—		古代
395	ST	7~8	モシ	IIIa	残存 13.28	残存 7.08	—		古代
396	ST	6~7	モシ	IIIa	9.76	6.56	—		古代
397	ST	6~7	ヨシ	IIIa	10.56	残存 3.20	—		古代
398	ST	5~6	ヨシ	IIIa	残存 10.48	残存 7.28	—		古代
399	ST	7~9	モ	IIIa	残存 8.16	残存 4.88	—		古代
400	ST	7~8	ヨシ	IIIa	残存 8.00	6.96	—		古代
401	ST	7~9	ヨシ	IIIa	残存 12.24	残存 4.80	—		古代
402	ST	6~7	モ	IIIa	残存 10.08	残存 7.20	—		古代
403	ST	6~8	ヨシ	IIIa	残存 10.56	残存 8.48	—		古代
404	SP	4	モ	383SK 埋土	0.47	0.32	0.18	木器類1	●>383SK>192SD

第18表 遺構一覧表(11)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(新>旧) ●—当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
1001	NW	7~8	セ	V	4.75	3.60	—			
1002	SK	8	セ	V	1.00	0.98	0.10			
1003	SP	9	セ	V	0.23	0.20	0.12			
1005	SK	5	ナ	V	0.65	0.60	0.04	弥生土器ないし土師器1		
1006	SK	5	ナ~シ	V	1.25	0.74	0.26	須恵器1		
1007	SP	5	シ	V	0.27	0.20	0.32			
1012	SP	5	ナ	V	0.52	0.28	0.04			●>1013SP
1013	SP	5	ナ	V	0.23	0.21	0.04			1012SP>●
1017	SP	6	エ	V	0.50	0.31	0.23			
1018	SP	6	エ	V	0.25	0.19	0.14			
1019	NW	7	エ	V	4.15	2.95	0.52	木器類4		
1020	NW	7	エ~セ	V	4.55	2.61	0.64			
1022	SP	6	ナ	V	0.33	0.30	0.33			●>1022NW
1023	NW	5~6	ナ	V	5.35	5.10	—			1022SP>●
1024	SP	6	シ	V	0.27	0.17	0.24			
1025	SP	6	シ	V	0.50	0.48	0.07			●>1027SK
1026	SK	6	シ	V	0.72	0.70	0.08			●>1027SK
1027	SK	6	シ	V	残存 1.45	残存 1.15	—			1025SP・1026SK>●
1028	SK	6	シ	V	0.77	0.69	0.10			
1029	SP	6	シ	V	0.20	0.17	0.15			
1030	SP	6	ナ	V	0.26	0.15	0.22			
1032	SP	6	シ	V	0.22	0.17	0.09			
1033	SP	6	シ	V	0.35	0.35	0.13			●>1034SP
1034	SP	6	シ	V	0.43	0.30	0.11			1033SP>●
1035	SK	6	シ	V	1.02	0.73	0.36			
1036	SP	6	シ	V	0.25	0.18	0.09			
1040	SK	6	シ	V	0.86	0.68	0.08			
1041	SP	6	エ	V	0.28	0.18	0.11			
1043	SP	6	エ	V	0.21	0.21	0.07			
1045	SP	6	エ	V	0.42	0.28	0.03			
1049	SK	7	シ~エ	V	1.00	0.76	0.09			
1050	SP	7	シ	V	0.35	0.33	0.17			
1051	SP	7	シ	V	0.48	0.35	0.24			
1052	SP	7	シ	V	0.50	0.30	0.15			
1053	SK	7	シ	V	1.02	0.76	0.11			
1054	SP	8	エ~セ	V	0.40	0.38	0.13			
1055	NW	7	エ	V	3.35	2.14	—			
1057	SD	13~ 15	ナ~シ	YT	残存 23.50	0.50	0.05	弥生土器ないし土師器4、木器類3、打製石斧1	弥生~古墳時代	

第19表 遺構一覧表(12)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(折=既) ●=当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
1058	SP	12	セ	IV	0.40	0.28	—	土師器1		
1059	SP	12	フ	IV	0.29	0.19	—	弥生土器ないし土師器1		
1061	SD	6~9	ケ~シ	V	残存 42.10	残存 6.00	—	弥生土器3、弥生土器ないし土師器87、土師器22、須恵器821、灰釉陶器284、山茶碗5、珠洲鏡1、常滑盤2、時代不明の土器類1、木器類1424、スクレイバー1、打製石斧1、銅鏡1、鉄鋤2、羽口1、古代瓦1	古代	1062SK>●
1062	SK	6	セ	V	1.25	1.10	0.06			●>1061SD
1063	NW	5	コ	V	3.30	2.75	—			
1064	NW	6	コ	V	2.35	1.73	—			
1065	NW	4	セ	V	2.05	1.90	—			
1066	NW	5	サ	V	3.03	残存 2.40	—	木器類5		
1067	NR	9~14	ナ~タ	V	残存 52.32	残存 9.52	0.48	弥生土器1、弥生土器ないし土師器496、土師器3、須恵器2、木器類818、スクレイバー1、楕円石器1、弥生~古墳時代打製石斧16、磨製石鎌1、石冠1、砾石1、磨石類5、剥片類14		
1068	NW	8~9	エ~セ	V	残存 5.95	残存 3.65	—			
1069	NW	8	セ	V	3.45	2.43	—			
1070	NW	9	セ	V	3.00	2.00	0.26	木器類3		
1071	SD	9~13	ナ~タ	V	残存 47.68	残存 2.72	0.16	弥生土器ないし土師器28、木器類238	弥生~古墳時代	
1074	SU	6~7	コ	V	3.55	1.93	—	須恵器9、木器類69	古代	
1075	ST	15	セ	KT	1.60	1.25	—	弥生土器ないし土師器1	弥生~古墳時代	
1076	ST	14	セ	YT	1.90	1.70	—		弥生~古墳時代	
1077	ST	14	セ	YT	残存 2.23	残存 1.35	—		弥生~古墳時代	
1078	ST	14~15	セ	YT	2.01	1.40	—		弥生~古墳時代	
1079	ST	15	セ	YT	2.40	1.98	—	弥生土器ないし土師器3、木器類3	弥生~古墳時代	
1080	ST	15	セ	YT	残存 4.38	残存 1.75	—	弥生土器ないし土師器4	弥生~古墳時代	
1081	ST	15~16	セ	KT	残存 5.95	残存 4.85	—		弥生~古墳時代	
1082	ST	16	セ	KT	残存 3.50	残存 3.15	—		弥生~古墳時代	
1083	ST	16	セ	KT	残存 2.10	残存 1.95	—		弥生~古墳時代	
1084	ST	15	セ	KT	1.30	0.90	—		弥生~古墳時代	
1085	ST	15	セ	KT	2.90	1.70	—	弥生土器ないし土師器2、木器類3、打製石斧1	弥生~古墳時代	
1086	ST	15	ナ~セ	KT	1.75	1.25	—		弥生~古墳時代	
1087	SP	14	セ	YT	0.58	0.24	—			
1088	SD	14	セ	YT	2.65	0.38	—			
1089	SD	14	セ	YT	2.90	0.36	—			
1090	SD	14~15	ナ~セ	YT	3.26	0.35	0.03			
1091	ST	14	セ	YT	2.30	1.90	—		弥生~古墳時代	
1092	ST	14	セ	YT	残存 4.98	残存 1.65	—		弥生~古墳時代	
1093	ST	15	セ	YT	残存 2.30	残存 1.53	—		弥生~古墳時代	
1094	ST	14	セ	YT	残存 2.25	残存 1.00	—		弥生~古墳時代	

第20表 遺構一覧表(13)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(新>旧) ●—当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
1095	ST	14	?	YT	2.75	1.35	—		弥生～古墳時代	
1096	ST	14～15	?	YT	1.93	0.95	—		弥生～古墳時代	
1097	ST	15	?	YT	残存2.18	残存1.15	—		弥生～古墳時代	
1098	ST	15	?	YT	残存1.30	残存1.10	—		弥生～古墳時代	
1099	ST	15	?	YT	残存2.00	残存0.60	—		弥生～古墳時代	
1100	ST	15	?～?	KT	1.40	1.38	—		弥生～古墳時代	
1202	SK	18～19	?	V	1.05	0.94	0.10	弥生土器ないし土師器1、近世陶磁器1		●>1206SK
1206	SK	18	?	V	残存1.44	0.87	0.03			1202SK・1210SK>●
1209	SK	19	?	V	残存0.86	残存0.23	0.04			
1210	SK	19	?	V	残存0.59	残存0.14	0.07			●>1206SK
1215	SP	19	?	V	0.24	0.17	0.06			
1217	SP	19	?	V	0.21	0.14	0.04			
1218	SP	19	?	V	0.27	0.21	0.05			
1219	SD	19～21	?～?	V	22.45	1.55	0.05	弥生土器ないし土師器3、須恵器19、灰釉陶器6、近世陶磁器2、木器類29、剝片類1	古代	1259SK>●
1220	SB	11～12	ス	IV	残存4.30	0.92	0.11	弥生土器ないし土師器79、土師器459	古墳時代初頭	1250SM・1311SD>●
1221	SK	17	?	IV	0.65	0.44	0.11	弥生土器ないし土師器2、木器類1		●>1222SK
1222	SK	17	?	IV	残存0.85	残存0.23	0.05			1221SK>●
1223	SK	18	?	IV	0.73	0.58	0.08	弥生土器ないし土師器1		
1224	SB	13	ス	V	残存3.86	残存2.06	0.07			1225SK>●
1225	SK	13	ス	V	1.16	0.99	0.08			●>1224SB
1226	SK	12	ス	V	1.22	1.11	0.29			
1227	SP	13	ス	V	0.24	0.22	0.21			
1228	SP	13	ス	V	0.20	0.18	0.20			
1229	SK	14	ス	V	1.01	1.01	0.12	灰釉陶器1		
1230	SK	14	ス～セ	V	1.48	1.00	0.10			
1231	SK	15	セ	IV	0.74	0.62	0.18	須恵器2、灰釉陶器3	古代	
1232	SB	11	シ	IV	残存4.22	残存1.92	0.17	弥生土器ないし土師器18		
1233	SB	11～12	シ	IV	残存2.69	残存1.31	0.12			
1236	SK	13	ス～セ	IV	1.10	1.04	0.38			
1238	SK	13	セ	IV	0.92	0.80	0.18			
1239	SK	14	セ	IV	1.48	0.96	0.30	弥生土器ないし土師器1、打製石斧1		
1240	SP	13	ス	V	0.48	0.36	0.07			
1241	SK	12	ス	V	0.66	0.51	0.13			
1242	SP	13	ス	V	0.60	0.42	0.09	弥生土器ないし土師器1		
1243	SK	10～11	シ	IV	7.34	4.32	0.24	弥生土器ないし土師器2、須恵器16、灰釉陶器21、古瀬戸系施釉陶器1、中世ないし近世陶器1、木器類7	古代	

第21表 遺構一覧表(14)

遺構番号	種別	検出グリッド 東西 南北	検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(折=既) ●=当遺構
				長軸	短軸	深さ			
1244	SD	15	セ	IV	5.43	0.78	0.05	弥生土器ないし土師器10、打製石斧1、剥片類1	
1245	SD	9~10	シ	IV	残存 12.90	0.80	0.25	弥生土器ないし土師器2、須恵器11、灰釉陶器6、木器類2	古代
1246	SP	10	シ	IV	0.27	0.23	0.09		
1247	SP	10	シ	IV	0.29	0.17	0.13		
1248	SP	10	シ	IV	0.29	0.25	0.19		
1249	SP	10	シ	IV	0.17	0.15	0.14		
1250	SM	9~12	チ~セ	IV	残存 36.32	残存 5.92	0.33	弥生土器ないし土師器409、須恵器843、灰釉陶器408、輸入磁器4、山茶碗5、珠洲鏡1、木器類87、石器3、スクレイバ-1、打製石斧1、砾石1、磨石類2、剥片類3、鉄滓2	古代
1251	SK	10	シ	IV	1.12	0.73	0.10	弥生土器ないし土師器2	
1252	ST	9~10	エ	IV	残存 9.32	残存 4.48	-	弥生土器ないし土師器219、須恵器327、灰釉陶器15、山茶碗3、珠洲鏡1、古瀬戸系灰釉陶器1、近世陶器251、時代不明の土器類2、木器類239、剥片類1	古代
1253	ST	10~ 11	エ~セ	IV	残存 12.00	残存 6.40	-	縄文土器210、弥生土器ないし土師器307、土師器2、須恵器540、灰釉陶器245、輸入磁器5、山茶碗4、珠洲鏡2、古瀬戸系施釉陶器2、近世陶器221、木器類584、打製石斧1、剥片類2、平石器461、古鏡1、羽口1、古代瓦1	古代
1254	ST	9	シ~ス	IV	残存 2.88	残存 2.64	-	弥生土器ないし土師器76、土師器1、須恵器263、灰釉陶器21。木器類75、スクレイバ-1	古代
1255	ST	9~10	シ~ス	IV	残存 14.80	残存 4.08	-	弥生土器ないし土師器238、土師器4、須恵器1372、灰釉陶器64、絞釉陶器1、輸入磁器5、山茶碗15、珠洲鏡4、木器類169、打製石斧1、翼形石器1、砾石4、磨石類2、剥片類8、鉄滓10、古代瓦3	古代
1256	ST	11~ 12	エ~セ	IV	残存 5.52	残存 2.64	-	弥生土器ないし土師器27、須恵器38、灰釉陶器63、木器類63	古代
1257	D(1220 SB付属)	11~ 12	エ	1220SB 底床	1.36	0.21	0.08	弥生土器ないし土師器1	古墳時代初期
1258	SK	9	ス	1254ST 覆土	残存 3.14	残存 1.73	0.43	弥生土器ないし土師器2、須恵器8、灰釉陶器7、山茶碗1、木器類1、剥片類1	古代
1259	SK	20	フ	V	0.60	0.44	0.05		●>1219SD
1260	SP	20	フ	V	0.35	0.26	0.05		
1261	SP	19	フ	V	0.26	0.22	0.05		
1262	SP	19	フ	V	0.31	0.25	0.05		
1270	SK	11	ス	IV	0.90	0.70	0.07	土師器23、須恵器1、灰釉陶器1、木器類2	古代
1271	SP	10	シ	IV	0.25	0.22	0.17		
1272	SP	17	フ	IV	0.22	0.18	0.22		
1273	SP	17	フ	IV	0.50	0.43	0.16		
1274	SK	11	エ~セ	IV	1.36	1.32	0.16		
1275	SP	17	フ	IV	0.38	0.34	0.05		
1276	SP	17	フ	IV	0.19	0.17	0.04	弥生土器ないし土師器12	
1277	SP	18	フ	V	0.25	0.18	0.06		
1278	SP	18	フ	IV	0.21	0.15	0.18	弥生土器ないし土師器3	
1279	SP	18	フ	IV	0.25	0.18	0.11	弥生土器ないし土師器2	
1280	ST	16	フ	IV	残存 1.04	残存 0.32	-		弥生~古墳時代

第22表 遺構一覧表(15)

遺構番号	種別	検出グリッド		検出層位	大きさ(m)			出土遺物	時代	重複関係(新>旧) ●—当遺構
		東西	南北		長軸	短軸	深さ			
1281	ST	16~17	フ	IV	—	—	—		弥生~古墳時代	
1282	ST	16~17	フ	IV	—	—	—		弥生~古墳時代	
1283	SK	18	フ	IV	1.10	0.86	0.14	弥生土器ないし土師器1、須恵器2、木器類13	古代	●>1293SB
1286	SD	11~12	セ	1256ST 埋土	残存 2.96	残存 1.36	0.11	弥生土器ないし土師器4、須恵器11、灰釉陶器3	古代	●>1256ST
1287	ST	21	フ	IV	—	—	—		弥生~古墳時代	
1289	SP	19	フ	V	0.36	0.30	0.09			
1290	K(1224 SB付属)	13	ミ	1224SB 貼床	0.56	0.50	0.05			
1291	K(1224 SB付属)	13	ミ	1224SB 貼床	0.93	0.62	0.05			
1292	SP	20	チ	V	0.38	0.22	0.06			
1293	SD	18~21	フ~ラ	IV	残存 46.96	残存 2.16	0.42	調文土器2、弥生土器ないし土師器43、土師器125、須恵器52、灰釉陶器2、近世陶器1。木器類3、打製石斧3、剥片類1	古代	1283SK・1303SK>●
1294	K(1233 SB付属)	11	シ	IV	0.56	0.52	0.08			
1296	ST	18	フ	IV	—	—	—		弥生~古墳時代	
1297	ST	18	フ	IV	—	—	—		弥生~古墳時代	
1298	ST	18	フ	IV	—	—	—		弥生~古墳時代	
1299	P(1220 SB付属)	12	ミ	1220SB 貼床	0.30	0.30	0.15		古墳時代初頭	
1300	D(1220 SB付属)	12	ミ	1220SB 貼床	0.82	0.20	0.16		古墳時代初頭	
1301	SK	10	フ	IV	残存 0.45	残存 0.22	0.06			
1302	SK	21	チ	1303SK 埋土	0.64	0.44	0.22	須恵器3、灰釉陶器3	古代	●>1319SK>1303SK
1303	SK	21	チ	1293SD 埋土	2.84	1.76	0.21	弥生土器ないし土師器22、土師器4、須恵器36、灰釉陶器8、石鍬1	古代	1302SK>1319SK>●>1293SD
1305	SD	9~10	シ	IV	残存 12.30	残存 1.33	0.30	弥生土器ないし土師器21、須恵器65、灰釉陶器26、輪入磁器1、珠洲焼1、木器類10、剥片類1、羽口1	古代	1245SD>●>1309SD>1310SD>1311SD>1315SD
1306	K(1232 SB付属)	11	シ	1232SB 貼床	0.44	0.37	0.20			
1307	P(1232 SB付属)	11	シ	1232SB 貼床	0.25	0.24	0.40			
1309	SD	9~10	シ	IV	残存 13.23	残存 2.43	0.12	弥生土器ないし土師器15、須恵器51、灰釉陶器22、木器類1	古代	1245SD>1305SD>●>1310SD>1311SD>1315SD
1310	SD	9~11	シ~ス	IV	残存 21.40	残存 2.50	0.32	弥生土器ないし土師器66、土師器3、須恵器1、灰釉陶器15、珠洲焼1、木器類3、剥片類1、鉄錠1	古代	1245SD>1305SD>1309SD>●>1311SD>1315SD
1311	SD	9~12	シ~ス	IV	残存 29.00	残存 2.30	0.44	弥生土器、弥生土器ないし土師器21、土師器22、須恵器77、灰釉陶器23、打製石斧2、砥石1、剥片類4、羽口1	古代	●>1220SB 1245SD>1305SD>1309SD>1310SD>●>1311SD
1312	SK	10	チ	V	残存 0.74	残存 0.51	0.20			
1313	SP	10	フ	1250SM 盛土	0.31	0.24	0.11			●>1250SM
1314	SP	10	シ	1250SM 盛土	0.22	0.19	0.30			●>1250SM
1315	SD	9~10	シ	IV	残存 12.20	残存 1.23	0.28	弥生土器ないし土師器32	弥生~古墳時代	1245SD>1305SD>1309SD>1310SD>1311SD>●
1316	ST	21	フ	IV	—	—	—		弥生~古墳時代	
1319	SK	21	チ	1303SK 埋土	0.70	残存 0.27	0.13			1302SK>●>1303SK

第4節 遺物

1 土器類

土器類は、出土遺物総数82,567点のうちの63.90%に当たる52,764点が出土している。その内訳は、縄文土器1,314点（2.50%）、弥生土器157点（0.30%）、弥生土器ないし土師器15,462点（29.30%）、土師器1,077点（2.04%）、須恵器25,904点（49.09%）、灰釉陶器8,075点（15.30%）、綠釉陶器19点（0.04%）、土師質土器13点（0.02%）、輸入磁器82点（0.16%）、山茶碗146点（0.28%）、珠洲焼38点（0.07%）、常滑焼16点（0.03%）、古瀬戸系施釉陶器15点（0.03%）、近世陶磁器322点（0.61%）、中世ないし近世陶器53点（0.10%）、時代不明の土器類71点（0.13%）である。弥生土器ないし土師器、須恵器、灰釉陶器の3種別のみで土器類全体の9割を超える占有率を示しており、当発掘区の主要時期が、弥生時代終末期ないし古墳時代初頭、平安時代前半の2つの時期であることを読み取れる。

第1節でも記したように、発掘区北半（概ねス列以北）では須恵器・灰釉陶器が主体を占めるのに対し、発掘区南半（概ねセ列以南）では弥生土器ないし土師器が目立つという偏在傾向が認められる。981個体図示した。

（1）縄文土器 44・959～986

破片数で1,314点確認し、29個体図示した。当発掘区には確實に縄文時代に属するとみられる遺構ではなく、それらのうち28個体は包含層出土品であり、残る1個体も古代水田覆土中から出土したものである。出土地点が発掘区南半に偏る傾向が認められる。確認できた器種は深鉢のみである。図示したもののうち、全形が定かでなく深鉢とも浅鉢とも確認できない個体については、単に鉢としている。

縄文時代早期の遺物は少なく、図示したものでは1253S T 覆土から出土した44のみである。胎土に植物纖維を含む尖底土器である。前期・中期に属するとみられる個体は確認されていない。後期に属する残存状態良好な個体に959がある。3単位の突起を備える波状口縁の深鉢である。そのほかの掲載個体では、960などが後期に属する可能性がある。

晩期に属するとみられる個体は比較的多い。961は当発掘区の縄文土器では全形を窺うことのできる唯一の個体である。口縁部は全体の4分の3以上残存しているが、認められる突起は1箇所のみである。底部外面に網代圧痕が残る。962は小型の鉢である。胴部外面に浮線網状文が認められる。そのほか963～971なども晩期に属すると考えられる。

（2）弥生土器 865・987～1006

本書では出土した土師質の土器の分類に当たり、まず古代後期以降に属するとみなすことのできるものは「土師質土器」と呼んで除外した上で、弥生時代に属することが確実視されるものを「弥生土器」、古墳時代以降に属するものを「土師器」、いずれとも見分けのつかないものを「弥生土器ないし土師器」と判断した¹⁾。古代後期以降に属するものは除いて、土師質の土器の破片は16,696点出土しているが、それらのうち弥生土器とみて誤りないものは157点である。この点数自体は多いとは言えないものの、これは当発掘区では特に成果の大きな時期に位置づけられる弥生時代終末期ないし古墳時代初頭に属するとみられる個体を、分類上、弥生土器から除外する措置を採った結果に過ぎないことをお断りしておきたい。

21個体図示した。うち1個体（865）のみ自然流路跡1067N Rから出土し、残る20個体は包含層か

らの出土品である。出土地点が発掘区南半に偏る傾向が認められる。全形を窺うことのできる個体は皆無であるが、弥生時代前期に遡るとみられる個体は見当たらず、弥生時代中期と後期に属するもので占められる。鉢・壺・甕を確認した。

鉢 987

図示できたのは1個体のみである。987は底部を欠くものの、直立する短い口縁部を持ち、頸部はくびれ、胴部の中央よりや上で口縁よりふくらむ器形である。美濃地域の弥生時代後期に属する出土品に類例を見出すことができる²⁾。

壺 988・989

2個体図示したが、いずれも小破片である。988は大型の壺の口縁部とみられる。外面に竹管文が認められる。989は頸部の一端であろうが、外面に櫛条痕が認められる。

甕 865・990～1006

特に注目されるのは、弥生時代中期後半の飛騨地域独特の土器として知られる内垣内式土器³⁾の横羽状文甕と、それに類似する特徴を備える一群の甕である。

ア 内垣内式土器の横羽状文甕

内垣内式土器の横羽状文甕とみられるのは、990～995である。最も残存状態の良い992では、頸部から胴部にかけての外面に、ヘラ描きによる横方向の矢羽状沈線文、すなわち横羽状文が少なくとも2段にわたり認められる。また、990では頸部外面に横羽状文が認められる。残る4個体はいずれも小破片であるため文様構成を把握するのは困難であるものの、胴部外面に斜め方向のヘラ描き沈線文が認められ、それらは横羽状文の一端である可能性が高い。ただし、口縁部の残る個体である990・992・993のいずれにおいても、内垣内式土器の横羽状文甕の特徴の一つとされる口縁端部の刻目文を確認することができず、内垣内式土器の典型例とは隔たりをみせている⁴⁾。

イ 細かな横羽状文を持つ甕

内垣内式土器の横羽状文甕より細かなヘラ描き沈線を密に施すものに、996～999がある。996・997では、内垣内式土器と同じように、胴部外面のヘラ描き沈線が横方向の矢羽状をなすことを確認できる。さらに、小破片である999を除く3個体では、ヘラ描き沈線の周辺に櫛描き沈線を施している。それらについては、ヘラ描き沈線が密であることから、内垣内式横羽状文甕に先行する土器である可能性が考えられよう。また、櫛描き沈線の併用は、それらが櫛描文を多用する信州地域と関わりのある土器であることを示唆するものであり、系譜を考える上で興味深い。

ウ 櫛描文を持つ甕

それらと類似するものに1000がある。口縁部外面に横方向の沈線、その下方にも斜め方向の沈線を施しているが、施文原体はいずれも櫛状工具とみられる。これも内垣内式横羽状文甕に先行する土器の可能性が考えられる。

エ 櫛描き縦羽状文を持つ甕

以上に関連がある可能性があるものとして、まず、1001・1002の2個体を挙げることができる。胴部外面に羽状文を施しているが方向は横ではなく縦であり、施文原体はヘラ状工具ではなく櫛状工具である。また2個体いずれも残存部分の全面に施文が認められることから、帶状に施される横羽状文の場合とは異なり、器面の大部分を覆うように施文されていた可能性が高い。類似するものに、自然

流路跡1067N Rから出土した口縁部から胴部上端にかけての破片865がある。この個体では、胴部外面に縦羽状文の可能性のある櫛描文が認められるのに加え、頸部外面に櫛描き波状文が認められる。これら3個体については、器形が判明しないため確かなことは言えないものの、とりあえず櫛描文を多用する信州地域と関わりのある土器とみるべきであろう。

オ その他の壺

1003は口頭部の破片とみられる。口縁部外面に管状の櫛状工具による刺突文、頭部外面に棒状工具による刺突文と櫛描き波状文が認められる。1005は口縁部外面に櫛描き波状文が認められる。1006は甕の頸部付近の破片であろうが、器形は明らかとはならない。1004は、主に美濃東部地域にみられる弥生時代中期の条痕文系土器の甕であろう。

(3) 弥生土器ないし土師器

当発掘区で出土した土師質の土器には、弥生土器とも土師器とも判別し難いものが少くない。單に特徴に乏しかつたり特徴的な部位を含まぬ小破片であるなどの理由から判別できないケースに加え、時代区分上の弥生時代と古墳時代の境付近に位置付けられる個体で、共伴遺物に恵まれぬためにいざれども断定に至らなかったケースが非常に多い。判断に迷うケースでは断定を控える方針を探ったため、該当するものは、破片数で15,462点、図示した個体では31個体に及ぶ。確認した器種は、高坏・鉢・壺・甕である。

やはり、出土地点が発掘区南半に偏る傾向が認められる。包含層出土品が多くを占めるが、自然流路跡1067N Rからまとまった量が出土していることが注目されよう。

高坏 1007~1010

4個体図示したが、残存状態良好なものはない。最も状態の良い脚部破片である1007は、高い円錐状の形状に復元できる。

鉢 1011・1012

2個体図示した。1011は台付鉢であるが、古代に属する遺物の可能性もある。1012は小型の鉢の底部であろう。

壺 864・871・1013~1016

6個体図示したが、残存状態良好なものはない。1067N Rから出土した871は内外面にヘラミガキ痕が認められ、細頸壺の口頭部と推定される。1014は北陸系の有段口縁壺とみられ、外面に赤彩が認められる。1016は小破片のため定かではないものの、台付壺の胴部中央屈曲部付近の破片の可能性がある。

甕 236・834・866~870・1017~1028

19個体図示した。北陸系の土器と信州系の土器が混在するほか、縦方向の櫛描文を施す特徴的な甕が出土している。

ア 北陸系の有段口縁甕

有段口縁を持つ甕が多数出土している。掲載したものでは、236・834・866~868・1017~1020が該当する。これらは北陸系の土器と捉えるべきであろう。しかし、いざれも段の作り方が比較的緩やかなことから、北陸地方でも飛驒に隣接する北東部、すなわち便宜的に旧国名で述べるなら越中・越後地域で出土するものに類似するとの印象を受ける。残存状態の良い個体が少くないため確かなことは言

い難いが、北陸地方の編年における法仏式から月影式にかけての時期に属する遺物が多いという印象を受ける。

なお、これらと共通する特徴を備える良好な個体に、堅穴住居跡1220 S Bで出土した土師器壺5・6があるので、そちらも参照されたい。

イ 信州系の櫛描文壺

870・1021・1022は、いずれも口縁部外面に櫛描き波状文が認められる。1021では、頸部に櫛描き簾状文も認められる。これらは信州系の土器と捉えるべきであろう。

ウ 縦方向の櫛描文を持つ壺

外面に縦方向の櫛描文を持つ壺が出土しており、それらは当発掘区ではとりわけ特徴的な土器に数えられる。該当するのは、869・1023～1027である。⁷⁾砂行遺跡（関市下有知）ほかでみられる美濃山間・内陸地域の条痕文系壺との類似を指摘することができる⁸⁾。また、堅穴住居跡1220 S Bで出土した土師器壺7が同様の特徴を備えているので参照されたい。

エ その他の壺

1028は頸部に稜を持つ壺である。外面に黒色炭化物が付着していることから、煮炊具としての使用が想定される。

（4）土師器

弥生土器との判別が困難なものを除き、土師器は破片数で1,077点確認し、50個体図示した。確認した器種は、高壺・鉢・壺・甕・土錘・紡錘車・ミニチュア土器・製塩土器である。古墳時代初頭から平安時代に至る幅広い時代の遺物が認められる。堅穴住居跡1220 S Bにおいて、古墳時代初頭の残存状態良好な個体がまとめて出土したことが特筆される。

高壺 1・2・29・854・1029・1030

6個体図示した。堅穴住居跡1220 S Bにおいて、ほぼ完形の甕4個体、鉢1個体とともに出土した2個体（1・2）が特に注目される。いずれも全形を窺うことができる。これら2個体は、飛騨地域においては当該期の状態の良い類例が知られていないため、極めて貴重な資料と評価できる。

ア 東海系の有稜高壺

1は口径15.8cm、器高12.6cmを測るやや小型の高壺である。壺部の体部・底部境に稜を持つ有稜高壺で、脚部は口径を上回って大きく開き、底径は18.3cmに達する。脚部中央の4箇所に、等間隔に透かし孔を備える。内外面の調整は縦方向へラミガキを基本としている。搬入品か否かは定かでないとはいえ、典型的な東海系の高壺とみるべき個体で、濃尾平野土器編年における廻間II式に属すると捉えてよいであろう⁹⁾。

イ 北陸系の盤状有段高壺

同じく1220 S Bで出土した2は、口径24.3cm、器高13.8cmを測る大型の高壺である。壺部に段を持つ盤状有段高壺であるが、大きく開く壺部に対し脚部は不釣り合いに短小で、底径は10.8cmにとどまる。1とは異なり、壺部内外面では横方向へラミガキを施している。東海地方の高壺とは器形・調整技法ともに隔たりが大きく、北陸系の高壺と捉えるべきであろう。北陸地方でも特に北東部で出土するものに類似する⁷⁾。帰属時期については、1と同時期とみて違和感はない。

ウ その他の高坏

以上のはかに残存状態の良い高坏は出土していないが、より新しい時期に属するものとして1030を挙げることができる。坏部に明瞭な垂下稜を持つことから、古墳時代中期の大型高坏とみてよいであろう。

鉢 3・9

図示した2個体は、いずれも1220S B出土品である。3はほぼ完形品の台付鉢である。口径16.7cm、器高8.5cmを測る。外面に比べ内面は明らかに摩滅しており、これは使用痕と捉えることができる。体部外面には横方向へラミガキが認められる。北陸地方にも東海地方にも類例は散見されるので系譜については断定し難いものの、帰属時期については、同じく1220S Bで出土した高坏1と同時期とみて遼和感はない⁸⁾。

9は傾きから鉢の体部破片の可能性が高いと判断した。3同様、内面が著しく摩滅している。

壺 1031

図示したのは12ソグリッドで出土した口頭部破片1031のみである。1031は口径19.5cmを測る大型の有段口縁壺である。極めて厚手の作りで、胎土は粗い。当遺跡に近いウバガ平遺跡において類似する個体⁹⁾が出土しており、古墳時代前期ないし中期に属するとみることができよう。

壺 4～8・23・45・82・90・91・462・463・820・821・872・951・1032～1039

やや不明なものも含め24個体図示した。竪穴住居跡1220S B出土の残存状態良好な4個体(4～7)が特に注目される。それらは、これまで明らかとなっていた古墳時代初頭における飛騨地域の土器様相を端的に示す貴重な資料である。

ア 信州系の櫛描文壺

1220S Bから出土した4は、口縁部と胴部上端の外面に櫛描き波状文を施し、頭部外面には櫛描き簾状文を施す信州系の壺である。信州地域の古墳時代初頭の土器様式である御屋敷式土器とみることができる。ただし、口縁部があまり開かないこと、底部が分厚くてあまり平らではないこと、胴部の波状文が1列のみであること、以上を典型例との相違点として指摘しておく。

飛騨地域においては、信州系櫛描文土器の出土例は小破片程度しか知られていないかったため、このような残存状態良好な個体の発見は、今回の調査における特に貴重な成果の一つと評価してよいであろう。

イ 北陸系の有段口縁壺

1220S B出土品のうち5・6の2個体は、北陸系の有段口縁壺である。いずれも全形を窺うことができる。5は特に残存状態良好な個体で、直立する長い口縁部、下半では丸みを減じて緩やかな円錐形となる球形の胴部、ごく小さな平底、以上を器形の特徴とする。口縁部は内面にも段を設けており、飛騨地域で出土する有段口縁壺としては比較的整った作りとの印象を受ける。ただし、外面に横ナデを施すのみで擬回線文を施してはいない点は、北陸地方西部の越前・加賀地域で出土する典型例とは異なる。より小型の6では口縁部が異なっており、有段口縁ではあるものの外反気味である。しかも内面を観察すると、一旦、直立気味に立ち上がってから外反するのではなく、頭部から直に外に向かつて緩やかに開いている。これら鋭さを欠く作りから、有段口縁壺としては5よりもさらに典型例からは離れた個体と捉えるべきであろう。

以上からこれらの2個体には、北陸地方西部で出土する典型例に比べれば退化傾向が認められると言るべきであろう。しかし、北陸地方でも北東部の越中・越後地域の出土例と比較した場合には大きな違和感はなく、北陸地方の古墳時代初頭の土器様式である白江式土器に併行すると判断する¹⁰⁾。これは、共伴する土師器高杯1が濃尾平野土器編年の廻間II式に属するとみられることに符合する。

ウ 縦方向の櫛描文を持つ壺

1220S Bから出土した7は、櫛描きにより施文された壺である。口縁部から胴部上端にかけての外面に縦方向の櫛描文を施し、頭部外面には横方向の櫛描文を施す。さらに、胴部中央外面には、明瞭ではないものの、大振りな櫛描き波状文が認められる。4~6などとともに出土していることから古墳時代初頭の遺物とみて問題ないであろうが、従来、飛騨地域でも周辺地域でも類例があまり知られていなかった特異な壺である。当発掘区では、「弥生土器ないし土師器」に分類した壺869・1023~1027が同様の特徴を備えている。

先にも記したように、砂行遺跡（関市下有知）ほか美濃山間・内陸地域で出土している「櫛条痕」の条痕文系壺との類縁性を指摘することができる¹¹⁾。しかし、7では砂行遺跡例のように器面を覆い尽くすように施文されではおらず、口縁端部の内外面に施文が認められない点も異なる。さらに胴部にみられる波状文は砂行遺跡例にはみられない要素である。したがって、相違点も少なくないと判断すべきであり、飛騨の地域色の強い土器と捉えるのが妥当であろう。近隣では、当発掘区の南西約1kmに位置する赤保木遺跡において、同様の施文を持つ壺の口頭部破片が出土している¹²⁾。なお、未報告資料ではあるが、高山市国府町の藤ノ木遺跡において出土した土師器壺の中に、同様の施文を持つ個体がみられる¹³⁾。

エ S字状口縁台付壺

小破片のみではあるが、東海地方で古墳時代早期から前期にかけて広く普及するS字状口縁台付壺（S字壺）が出土している。その可能性のあるものは破片数で数えて10点を超えるとみられるが、比較的明瞭なもの4個体を選んで図示した。いずれも極めて薄手の作りを特徴とする。口頭部破片1033には、S字壺特有の屈曲した段構成が認められる。872・1032は胴部破片であろう。182S Xで出土した951は、脚台部の破片である。

オ その他の壺

内外面にヘラ削りを施す胴部破片8は、1220S Bから出土していることから古墳時代初頭に属するとみられる。そのほか古墳時代に属する可能性が高いものとして、まず¹⁴⁾1037がある。底部を欠くものの、口縁端部外面に面を持ち、口頭部は屈曲しつつ外反し、胴部は球形であるといった諸特徴が当遺跡A地区出土品に類似することから、古墳時代中期に属するとみられる¹⁴⁾。類似する特徴を備える口頭部破片821・1034・1035も、それを前後する時期の遺物と捉えてよいであろう。

以上に対して、帰属時期が古代に下るとみられる壺に、154S P出土の23、324S D出土の463、1293S D出土の820がある。これら3個体は、口縁部の開きや頭部のくびれがあまり目立たない寸胴な器形を特徴とする。類似する壺は、飛騨北部に位置する太江遺跡（飛騨市古川町）から飛騨南部の上ヶ平遺跡（下呂市森）に至る飛騨地域の古代の遺跡において普遍的にみられることが知られている¹⁵⁾。当遺跡の近隣では、三枝城跡（高山市上切町）で検出した古代の竪穴住居跡において残存状態良好な個体がまとまって出土したほか¹⁶⁾、当遺跡B地区の出土遺物中にも散見される¹⁷⁾。

324 S Dから出土した462は北陸地方に普遍的にみられるロクロ技法による甕で、胸部上半にカキ目が認められる。同様の甕は飛騨地域でも少数ながら出土しており、それらは回転糸切り技法定着後の8世紀後半以降の須恵器と共伴することが知られている¹⁸⁾。462も須恵器無台碗・有台盤などとともに出土しており、既往の知見に矛盾しない。

土錘 92・168・195～197・563～565・623・1040～1044

14個体図示した。当発掘区では須恵器や灰釉陶器の陶錘も出土しているが、それらに比べいずれも小型で細身であり、最も重い623でも重さ8.4gにとどまる。なお、これら14個体はすべて須恵器・灰釉陶器集中区域である発掘区北半で出土しており、より大型の須恵器・灰釉陶器の陶錘とともに使われた古代の遺物である可能性が高い。

紡錘車 1046

1046は甕の胸部を打ち欠いて作られた円盤であり、中央に円形の貫通孔を備える。孔の周囲は摩滅しており、紡錘車としての使用が想定される。12ソグリッドで出土した。

ミニチュア土器 1045

1045は手捏成形による鉢状のミニチュア土器である。全面にナデ・オサエの痕跡が認められるほか、底部内面には爪痕が認められる。今回の調査で確認した土師器のミニチュア土器は、この1個体のみである。16チグリッドで出土した。

製塩土器 194

破片1点のみではあるが、畦畔310SMにおいて製塩土器が出土している。194は底部の破片とみられ、円柱状の脚部を備える。成形は手捏ねによるものであり、外面は褐色を呈する。

(5) 須恵器

土器類で最も多く出土したのは須恵器である。破片数で数えて25,904点確認した。用途で大別すると、食膳具が18,572点、貯蔵具が7,256点、その他の特殊器種が76点となる。確認器種は、食膳具に属するものとして、坏蓋・坏身・返り蓋・摘み蓋・無台坏・有台坏・双耳坏・無台碗・有台碗・無台盤・有台盤・脚台盤・脚付盤・高坏・貯蔵具に属するものとして、翫・横瓶・平瓶・フラスコ形瓶・甕・壺・鉢・壺蓋、その他の特殊器種として、紡錘車・円面硯・風字硯・火舎・瓶・陶錘、以上28器種である¹⁹⁾。古墳時代に属する器種もみられるものの、個体数としては少数にとどまる。底部糸切り技法普及後に盛行する無台碗・有台碗・有台盤といった器種が数量面で他を圧することから、平安時代前半に属するものが主体を占めると捉えよう。

512個体を図示した。転用硯、ヘラ書き土器、墨書き土器を多く含むことを大きな特徴とするが、それらについては灰釉陶器の該当例とともに後述することとし、ここでは、まず器種ごとに傾向を概観しつつ、特徴的な個体を取り上げて報告する。

坏蓋 267・403・464・551・554・952・1047・1048

次に掲げる坏身とセットになる蓋で、古墳時代に広く普及したとされる器種である。出土数は少なく、図示できたのは7個体にとどまる。

いざれも口径8cm台から11cm台の小型品であることから、概ね古墳時代終末期に属するとみてよい。ただし、複雑なヘラ書きのある2個体(464・1048)については、古墳時代の坏蓋と限定せず、古代以降の特殊用途の蓋である可能性を視野に入れるべきであろう。

坏身 465・1049

坏蓋同様、当発掘区ではあまり出土していない古墳時代の器種で、図示できたのは2個体にとどまる。さらに、いずれも口径8cm台の小型品であることも、坏蓋にみられた傾向に符合する。いずれも口縁部の立ち上がりが内側に傾き、長さが短いことから、古墳時代終末期に属するとみられる。

返り蓋 83・241・608・842・843・1053・1054

口縁端部の内面に返りを持つ蓋である。古墳時代終末期から古代にかけて短期間のみ普及したとされる。当発掘区における出土数は少なく、7個体を図示できるにとどまる。全形を窺うことのできる個体はなく、摘みが残存する個体もない。返りはいずれも短小である。

摘み蓋 22・84・93~97・242~244・404~406・466~468・556・567・609・624・822・856・947・953・954・1055~1073

端部を内側に折り返した口縁部を持つ蓋である。返り蓋とは対照的に出土数が多い。口縁端部が残存しないため断定には至らないものも含め、44個体図示した²⁰⁾。

全形を窺うことのできる個体として、324SDで出土した466、361SDで出土した556がある。天井部外面に扁平な円盤状の摘みを備えるのを基本とする。特殊な個体として、環状の摘みを備えるもの(624)、仏塔状の特殊摘みを備えるもの(243・1062)などを挙げることができる。それらと同様の摘みを持つ蓋は、飛騨地域では太江遺跡(飛騨市古川町)で少数ながら確認例がある²¹⁾。その扁平な器形のためか、硯に転用されることが多いのもこの器種の特徴である。この点については、後掲の第23表を参照されたい。

なお、摘みが省略されたタイプの蓋、すなわち平頂蓋と確認できる個体は、出土していない。

無台坏 169・198・237・469~474・625~628・823・1074~1082

当発掘区では、広い底部と直立気味の体部を備える食膳具である坏は、体部の傾きがより緩やかな後発器種である碗に比べ、あまり出土していない。高台を持たない坏である無台坏は、小破片のため断定に至らないものを含め23個体図示したものの中では823のみ。

底部の切り離しはヘラ切りによることが確認される個体が多いが、図示したものの中では823のみ回転糸切り痕が認められる。324SDで出土した6個体(469~474)は、胎土に黒色粒を多量に含み、ほかとは異質な一群をなしている。

有台坏 28・46・47・85・98・170・199・200・273・276・410・475~481・558・629~632・825~829・1083~1113

高台を持つ坏である有台坏は、無台坏に比べれば出土数が多い。59個体図示した。

底部外面の切り離しは、回転ナデ・回転ヘラ削りなどの調整が施されることにより痕跡を読み取りにくいものが少なくないものの、概ねヘラ切りによるとみられる。ただし、827・828など、回転糸切り痕が認められる個体もある。324SDで出土した478は、同じ溝状造構から出土した無台坏469~474と同様に、胎土に黒色粒を多量に含む。最も残存状態のよい個体である1100は、口縁部の1箇所を外側に折り曲げ、片口状としている。192SDで出土した273は底部のみの破片であるが、内面に漆が付着している。

双耳坏 275・603・633

体部に把手を備えた坏を双耳坏とした。有台坏の一種であるが、当遺跡ではB地区でも出土してい

る特徴的な器種であるので、別扱いとした。把手の本数を確認できた個体はないが、坏部に接続する把手を確認できた3個体を双耳坏の可能性のあるものとみなし、すべて図示した。

最も残存状態のよい個体は、196 S Dで出土した275である。口径10.8cmの小型の有台坏の体部中央に、長さ3.5cmの把手を貼り付けている。比較的堅緘で、精製品との印象を受ける。

無台碗 12・31・48・86・99~101・172・173・201~203・238・277・407~409・482~489・557・568~573・610~612・634~636・824・835・844~846・855・857・912・924・1114~1151

坏に比べて体部の傾きが緩やかで底径の小さな後発器種である碗は、当発掘区では坏よりはるかに出土数が多い。高台を持たない碗である無台碗は、当発掘区では最も多く出土した器種である。85個体図示した。

同一器種として括ってはいるものの個体間の差異は大きく、これは幅広い時期差を示唆するとともに、複数の产地の製品が混在することを示すものと捉えることができる。例を挙げれば、飛驒地域の遺跡で多くみかける赤黒い色調の個体(487・1125など)のほか、美濃須須窯産を思わせる淡い灰色の個体(569・835など)もみられる。また、坏の場合とは対照的に、底部に回転糸切り痕が認められる個体が多いものの、408・409のようにヘラ切りによることが明らかな個体も稀ではない。このような糸切り個体とヘラ切り個体の混在は、当遺跡出土の無台碗全般に認められる特徴である²³⁾。367 S Dで出土した573は、焼成不良で軟質の個体である。367 S Dでは、同様に軟質の灰釉陶器碗2個体(592・596)とともに、同様の特徴を備える無台碗がまとめて35個体以上出土しており、付近で須恵器・灰釉陶器の生産が行われていた可能性がある。

食器以外の用途を想定できる例として、483・855・1123・1139がある。口縁部を中心に煤が付着しており、灯明具として使用された可能性が高い。1311 S Dで出土した857は、内面のほぼ全面と体部外面上半の一部に黒色の漆が付着しており、漆を溜める容器として使用されたとみられる。

有台碗 32・49・102~104・239・240・278・490~492・574~576・637・836・858・956・1152~1167

高台を持つ碗である有台碗は、無台碗に比べれば出土数は少ない。34個体図示した。

無台碗の場合と同じく、個体間の差異が大きい。239・1160のような赤黒い色調の個体と、102・858のような淡い灰色の個体が混在する。大きさにもばらつきが認められ、多くの個体は無台碗より大型であるが、576・1158・1161のような小型の個体もみられる。

無台盤 580・641

盤は高台を備えるのを通例とする器種であるが、当発掘区では無台の個体も少数ながら出土している。確認できたのは、図示した2個体のみである。全形を窺うことのできる唯一の個体である580は、口径14.4cm、器高2.5cm、底径6.2cmを測り、底部外面には回転糸切り痕を残している。出土地点は367 S Dである。1061 S Dで出土した641は、口縁部の形状は不明ながら、大きく開く体部を持つとみられる。

有台盤 33・105~107・165・204・279・411~413・493~496・579・642~649・837・838・848・913・937・955・1168~1189

高台を持つが、有台碗より扁平な器形の食膳類を有台盤とした。51個体図示した。

盤は口縁部が明瞭に折れる器形を基本とするとされるが²³⁾、すでに当遺跡B地区の出土品で検証されているように²⁴⁾、当遺跡の有台盤は口縁部形状が多様である。当発掘区出土品でも同様であつて、

口縁部が明瞭に折れるタイプ（33・105など）のほか、直線的に伸びるタイプ（644・648など）、強く外反するタイプ（642・645など）、端部外面に面を持つタイプ（494・579など）がみられる。さらに、無台碗・有台碗に顕著であった個体間の色調の差異が、有台盤でも同様に認められる。495・1171などは赤黒い色調を呈し、1169・1174などは淡い灰色である。

扁平な器形のためか硯に転用されることが多いのもこの器種の特徴で、当発掘区で確認された転用硯では、器種別では有台盤を使用したと推定される個体が最も多い。この点については、後掲の第23表を参照されたい。

脚台盤 927

927は径の大きな脚台を持つとみられることから、脚台盤に分類した。須恵器では稀な器種であり、当発掘区でもこれが唯一の確認個体である。墓とみられる339S Kにおいて、円面硯925などとともに出土した。

脚付盤 650

1061S Dで出土した650は、高杯に似るもの、扁平な杯部の形状から脚付盤に分類した。やはり稀な器種であり、当発掘区でもこれが唯一の確認個体である。ほぼ全形を窺うことができるが、3つの透かし孔の間隔が45°・45°・90°と不均等である点が特徴的である。

高杯 555・566・923・1050～1052

脚付盤などとは異なり須恵器では一般的な器種であるが、当発掘区ではあまり出土していない。図示した6個体中、全形を窺うことのできるのは、361S Dで出土した555のみである。この個体をはじめとして、確認できた高杯は、概ね小型品で占められる。

甌 1208～1210

注ぎ口の円孔を持つ壺を甌とした。古墳時代の器種である。定かでないものを含め、3個体図示した。12年度試掘坑19で出土した1208のみ、残存状態良好である。頸部は短く、口縁部はあまり大きくはない。頸部と胴部中央に波状文を施している。陶邑窯編年²³のI型式3段階に遡るとみられ、搬入品である可能性が高い。

横瓶 421・1250

確認できた2個体を図示した。312S Dで出土した421は、残存する胴部上半の彎曲の具合から、横瓶と判断した。17ソグリッドで出土した1250は、口径3.8cm、器高8.5cmにとどまる小型品である。周辺遺跡に類例が見当たらない特殊品であるが、胎土や色調から平安時代前半の遺物と捉えて違和感はない。

平瓶 56・270・419・420

確認できた4個体を図示した。70S Dで出土した270は、口頸部の一部を欠くものの、全形を窺うことのできる残存状態良好な個体である。やや球状を呈する胴部形状から、古墳時代後期に遡るとの印象を受ける。321S Dで出土した2個体のうち、より球状の胴部を持つ419については同様のことが言えるが、より扁平で大型の420については、平安時代頃のものとみて違和感はない。この個体のみ高台を備える。1253S T覆土から出土した56は、把手部分であろう。

フラスコ形瓶 271

70S Dで平瓶270などとともに出土した271は、細頸と球状胴部を特徴とするフラスコ形瓶の完形品

である。古墳時代後期の7世紀代に遡る遺物とみるべきであろう。当発掘区では、これが唯一の確認個体である。

壺 57・112・113・174・281・503・850・851・928・1251～1263

22個体図示した。大型器種であるため残存状態の良い個体は稀であるが、全形を窺うことのできるものとして、281（311 S D出土）と503（324 S D出土）の2個体を挙げることができる。281の底部は明瞭な平底であり、そうした形状は須恵器甕としては必ずしも一般的とは言い難い。しかし、図示した個体の中では112・113・1251・1261が同様の平底であるほか、B地区でも確認例があり²⁰、当遺跡では決して珍しいものではない。

壺 10・52～55・109・110・175・207・246・247・269・272・417・418・504～508・550・577・859・957・1219～1249

直立する短い頸部を持つ短頸壺、細長い頸部を持つ長頸壺、以上をはじめとして大小様々な個体が出土している。定かでないものも含め、55個体図示した。

短頸壺で残存状態の良いものとして、504（324 S D護岸層出土）、505（324 S D 2層出土）、859（1311 S D出土）などがある。長頸壺には残存状態良好な個体はない。そのほか特異な個体として、底部に四足の剥離痕が残る272（70 S D出土）、筆立て状の突起を備える417（321 S D出土）、胴部に把手の痕跡を残す1227（19ツグリッド出土）などを挙げることができる。以上の中でも272は、三足ではなく四足である点が非常に珍しい。帰属時期については、同じく70 S Dで出土した平瓶270、プラスコ形瓶271と同時期とみて違和感はなく、古墳時代後期の7世紀代まで遡るとみられる。

鉢 50・111・268・502・552・1211～1214

定かでないものも含め、9個体図示した。全形を窺うことのできるのは、70 S Dで出土した268のみである。鉄鉢形と呼ばれる金属器模倣の鉢であるが、全体に分厚い上、底部外面にヘラ切り痕を明瞭に残すなど、あまり洗練された作りではない。帰属時期については、同じく70 S Dで出土した平瓶270、プラスコ形瓶271、壺272と同時期とみて違和感はなく、古墳時代後期の7世紀代まで遡るとみられる。

壺蓋 51・108・206・1215～1218

定かでないものも含め、7個体図示した。全形を窺うことのできるのは、1253 S T覆土から出土した51と、310 S Mで出土した206のみである。51は内面に墨が付着しており、硯に転用されたとみられる。

紡錘車 559

中央付近に貫通孔を持つ円盤である559は、紡錘車の紡輪であろう。重さ29.5 gを測る。出土地点は361 S Dである。

円面鏡 176・584・585・652・653・925・1278～1284

不確かなものを含めて13個体出土しており、すべて図示した。最も残存状態の良い個体は、7コグリッドで出土した1278である。脚台部を欠くものの硯面部はほぼ完存している。極めて平滑となっている硯面には、墨が付着している。1061 S Dで出土した652は、硯面部径21.0cm、高さ6.9cm、台径30.4cmに復元できる大型の円面鏡である。同じく1061 S Dで出土した653は、硯面に回転糸切り痕を残すなど、硯としては作りが粗い。墓とみられる土坑339 S Kで出土した925は、脚台部上半の構造を窺うことのできる個体で、方形の透かし孔を5箇所に設けていたとみられる。

風字硯 1285

1285は脚部を欠くものの、残存部分の形状と墨が付着することから風字硯と考えた。当発掘区の出土遺物中、古代の風字硯の可能性のあるものは、この1個体のみである。

火舎 561・586・1273～1277

香炉として使用した仮具とされる器種である。壺状の身の底部に3本の獸脚を備えるのを通例とするが、当発掘区では三脚が揃った個体は確認されておらず、全形を窺うことのできる個体はない。出土した獸脚7本をすべて図示した。

1275・1276には、身の底部から体部にかけての一部も残存している。この2個体はいずれも比較的小型であるが、脚は身の底部・体部境を中心に接合されている。586・1273でも底部の一部がわずかに残存しているが、身の形状を推測できるような状態ではない。残る3個体(561・1274・1277)は、身との接合部で剥離した状態とみられる。それらのうち561・1274は、脚上端の剥離面が平らであることから、身の底部下に脚を接合する形を探っていたものとみられる。一方、1277については、剥離面の形状から1275・1276のように底部から体部にかけて接合する形であったと推測される。なお、脚部の調整は指オサエによるのを基本としているが、1274のみヘラ削り調整を施している。

懸 177・1264～1266

調理具の懸は、須恵器ではあまり一般的な器種ではないが、その可能性のあるものが4個体出土している。いずれも須恵器としては軟質である。全形を窺うことのできる個体はないものの、1266には、この器種の特徴である底部の穿孔が認められる。

陶錘 114・209・581～583・614・651・1267～1272

確認した13個体をすべて図示した。円筒形ないし紡錘形を器形の基本とするが、114のみ球形である。全個体中、この114が最も重く、重さ53.3gを測るもの、残る12個体では1272が50.4gを測るのみで、ほかに50gを超える個体はない。

なお、当発掘区では、灰釉陶器と同じ胎土・色調で、より大型の陶錘も出土しているが、それらについても灰釉陶器として扱う。

(6) 灰釉陶器

灰釉陶器は、破片数で数えて8,075点確認した。その内訳は、碗・皿類7,294点、瓶類770点、その他の特殊器種11点である。碗・皿類には通常の碗と皿のほかに、盤・輪花碗・耳皿・段皿がみられる。瓶類については、一般的な器種である長頸瓶や小瓶が当発掘区でも確認されるが、それらのどちらともみなすことのできない大小様々な個体も、少なからず出土している。本書では、それらを壺と呼んで一括した。なお、胴部ないしは底部のみ出土した瓶類の個体については、長頸瓶と類推できる場合を除き、すべて壺としている。特に瓶類では須恵器との判別が容易ではないものがみられるが、器形に施釉所を求めるには困難な場合には、施釉の有無と胎土により判別した。以上のほか、特殊器種として陶錘が出土している。

飛騨地域で出土する灰釉陶器は、特に碗・皿類では釉を施さない個体が多く、当発掘区の出土品も例外ではない。しかし、よしま1号古窯跡(高山市上切町)をはじめとする高山市内の灰釉陶器窯の出土品中には灰釉を施した良品もみられることから、施釉の有無がそのまま搬入品か否かの判別の指標とはならないことに注意を要する。

碗・皿類 34~36・58~65・115~127・129・166・167・178~181・210~216・248~253・282・422・510・553・562・587~596・604・615・654~678・840・841・852・860・930・935・938~942・944・946・948・949・958・1286~1368

灰釉を施さず灰色を呈する個体が大部分を占めるが、より白っぽく、施釉した精製品も少数ながらみられる。特に古い特徴を備えた個体として、茎とみられる土坑339S Kにおいて須恵器円面硯925などとともに出土した碗930を挙げることができる。内面の全面に施釉し、口縁部が強く外反し、底部には角高台を備えるなど、猿投窯の黒雀14号窯式に符合する特徴が認められることから、9世紀前半頃に属するとみることができる。しかし、当発掘区の灰釉陶器の中では930は類例の少ない特異な個体と言るべきであって、大多数の個体では、より口縁部の外反が目立たず、高台は三日月形であるなど、930に比べ退化した要素が認められる。猿投窯編年に当てはめた場合、黒雀90号窯式、折戸53号窯式を経て、10世紀後半に相当するとされる東山72号窯式に至る遺物群と捉えることができよう²⁷⁾。

310 S Mで出土した216は盤である。類例から推測して、おそらく三足盤となるとみられる。内外面に施釉が認められる。輪花碗は2個体のみ確認した(860・1340)。このうち1311 S Dで出土した860は全形を窺うことのできる個体であるが、焼成不良で黄橙色を呈する。耳皿とみられるものは、310 S Mで出土した215のみである。段皿とみられるものは比較的多く、8個体を挙げができる(510・677・1363~1368)。ただし、全形を窺うことのできる個体ではなく、1368については唾壺の可能性も排除できない。

軟質の須恵器無台碗がまとめて35個体以上出土した367 S Dにおいて、同様に焼成不良の灰釉陶器碗が2個体出土しており(592・596)、付近で須恵器・灰釉陶器の生産が行われていた可能性がある。瓶類 37・130~133・217・509・616・679・680・830・1369~1386

碗・皿類に比べ、施釉が認められる個体が多い。131・509・1369~1372の6個体は、全形を窺うことはできないものの、長頸瓶とみられる。130・217・1373~1376の6個体は、小瓶であろう。1379は口径4.7cm、器高5.8cm、底径5.0cmを測る小型の壺である。瓶類で最も残存状態のよい個体である616はそれより大型の壺で、口径8.2cm、器高13.2cm、台径8.8cmを測る。出土地点は372 S Dである。

陶錘 617・681・1387・1388

灰釉陶器では陶錘という器種は一般的ではないが、当発掘区の出土遺物の中には胎土・色調ともに灰釉陶器碗・皿と同質の陶錘がみられるので、それらは須恵器の陶錘とは区別して扱った。

破片数で11点確認し、全形を窺うことのできる4個体を図示した。いずれも幅の広い紡錘形で、須恵器の陶錘に比べ大型である。最も重い1388では重さ104.4gを測るのをはじめ、いずれも重さ60gを超える。前述のとおり、須恵器の陶錘では50gを超える個体は稀であることから、材質を違えて意図的に作り分けがなされたか、あるいは両者の帰属時期に隔たりがあるのか、いずれかの可能性が考えられる。

(7) 須恵器・灰釉陶器の転用硯について

本書では、初めから硯として作られたのではない器種で、硯面としての使用が想定可能な平坦面に墨の付着が認められる個体を転用硯と認定する立場を取る。これは、他器種からの転用の場合、短期的ないし一時的な使用にとどまる場合が多いとみられることがから、硯としての使用に伴う硯面の擦り減りが認められることを認定の必要条件に加えるのは合理的ではないとの判断に基づく。そのため、

第23表 転用硯の器種と墨付着部位

器種	部位	個数	遺物番号
須恵器 摘み蓋	天井部内面+体部内面	1	466
	天井部内面	4	1066・1068・1071・1072
須恵器 摘み蓋?	天井部内面+体部内面	4	406・1065・1067・1069
	天井部内面+天井部外面+体部外面	1	95
須恵器 無台坪	天井部内面+天井部外面+体部内面+体部外面	1	468
	体部内面	1	405
須恵器 無台坪?	体部内面+体部外面	1	1073
	体部内面+体部外面+底部内面+底部外面	1	1081
須恵器 有台坪	体部内面+底部内面	1	627
	体部内面+底部内面	1	1106
須恵器 有台坪?	底部内面	1	1101
	底部外面	5	199・629・1084・1107・1109
須恵器 有台坪?	底部内面+底部外面	1	276
	底部外面	1	200
須恵器 無台碗	体部内面+底部内面	1	1120
	底部内面	1	1167
須恵器 有台碗	底部外面	1	1166
	底部内面+底部外面	1	1163
須恵器 有台盤	体部外面+底部外面	1	493・1180
	底部内面	5	279・496・644・1177
須恵器 有台盤?	底部内面+底部外面	1	1178
	体部内面+底部内面	1	1184
須恵器 有台盤?	体部内面	3	412・413・1182
	底部内面	3	643・1186・1187・1188
須恵器 罐蓋	底部外面	2	837
須恵器 不明	天井部内面+体部内面	1	51
	体部内面	1	87
灰釉陶器 碗	底部内面	2	205・501
灰釉陶器 碗?	底部外面	3	849・1191・1193
	底部内面+底部外面	2	929・1198
灰釉陶器 碗?	体部外面	1	665
灰釉陶器 盆	体部内面+底部内面+底部外面	1	1287 (底部内面には赤色の付着物もあり)
	体部内面+体部外面+底部内面+底部外面	1	1313
灰釉陶器 盆?	底部外面	4	422・588・671・1336
	底部内面	1	1334
灰釉陶器 盆?	体部内面+底部内面	2	214・1343
灰釉陶器 盆?	体部内面+底部内面+底部外面	1	1342 (底部外面には赤色の付着物もあり)
	底部内面	1	678
	底部外面	1	1355
灰釉陶器 盆?	体部外面+底部内面+底部外面	1	129
	底部外面	1	676
灰釉陶器 不明	底部外面	1	1360

研面の擦り減りを確認できず、いわゆる墨溜めとしての使用が想定されるものも、ここに含むものとする。

69個体確認し、すべて図示した。それら中には、ヘラ書きを伴うもの4個体(199・1101・1107・1360)、墨書きを伴うもの8個体(214・644・678・1071・1180・1187・1188・1343)を含む。第23表に示したとおり、壺など貯蔵具を使用した例は確認されず、須恵器・灰釉陶器ともにほぼ食膳具に限られることを特徴とする。朱墨とみられる赤色の付着物の認められるものは2例あるが、いずれも灰釉陶器である。なお、第23表には墨付着部位を記載してあるが、観察に当たっては、灰釉陶器の施釉範囲や須恵器の自然釉付着範囲には墨痕が残りにくいことに留意しなくてはならない。例を挙げれば、灰釉陶器碗1313の内面では、底部では全面に墨痕が明瞭に認められるが、体部では部分的にしか確認できない。確認範囲は、ほぼ釉のはげた範囲と割れ口に限られる。このような場合、本来は施釉範囲にまで墨が及んでいた可能性は高いとみるべきである。

(8) 須恵器・灰釉陶器の墨書き土器について

野内遺跡の須恵器・灰釉陶器にみられる大きな特徴として、多数の墨書き土器を含むことが挙げられる。すでに報告書を刊行したD地区では2個体、B地区では86個体確認している²⁹⁾。C地区では新たに161個体もの墨書き土器を確認し、小破片に至るまですべて図示した。それらの中には、ヘラ書きも施されているものが4個体(410・1145・1286・1299)、墨の付着が認められ転用硯としても使用された可能性のあるものが8個体(214・644・678・1071・1180・1187・1188・1343)含まれる。

第24表に示したとおり、器種別では須恵器・灰釉陶器ともにほぼ食膳具に限られる。特に多いのは、32例を数える須恵器無台碗と34例を数える灰釉陶器碗である。墨書きの記される部位については、内面よりは外面が圧倒的に優勢であり、特に底部外面が多い。

残存状態が良好でない個体が多数を占めるため判読率は高くはないものの、記された文字として、「縦」、「逢」、「宿」、「海」、「井」、「仁」、「麻呂」、「盃」、「内三」、「力」、「成」、「平」、「木」、「工」、「僧口」、「西」、「西井」を挙げることができる。ただし、「力」、「木」、「工」については、筆勢から判断して漢字を記したものではなく、記号として記したものである可能性が高い。「仁」、「井」の中にも、同様に記号と捉えるべきものが含まれる²⁹⁾。そのほか、記号状のものとして、「凡」、「互」がある。以上のうち、「海」、「仁」、「逢」、「西」、「凡」はB地区の出土品でも確認されている。B地区で最も多く確認された文字である「定」は、C地区では確実な例はないものの、324S Dで出土した須恵器有台碗490の体部外面5箇所に記された文字が「定」の可能性がある。

上記の文字・記号のうち、定かでないものも含め複数個体を確認したのは、「凡」(12個体)、「海」(10個体)、「仁」(8個体)、「井」(8個体)、「逢」(6個体)、「平」(2個体)である。それらのうち、「海」、「井」、「逢」、「平」は須恵器のみで確認され、灰釉陶器にはみられないことが注目される。特に「海」と「逢」については、坏が目立つという選択器種面での古相が認められることから、それらの文字が記されたのは灰釉陶器普及期より前に限られる可能性がある³⁰⁾。

(9) 須恵器・灰釉陶器のヘラ書き土器について

出土した須恵器・灰釉陶器には、墨書き土器のほか、ヘラ書き土器もみられる。一般に、ヘラ状工具などにより刻まれた文字等を「刻書」と呼び、それらのうち焼成前に刻まれたものが「ヘラ書き」、焼成後に刻まれたものが「線刻」とされるが³¹⁾、後者に該当する個体は確認していない。ヘラ書き土器は29個体確認し、すべて図示した。なお、それらの中には、墨書きも記されているものが4個体(410・1145・1286・1299)、墨が付着し転用硯の可能性のあるものが4個体(199・1101・1107・1360)含まれる。

第25表に示したとおり、器種別では須恵器の有台坏と無台碗が多く、灰釉陶器碗がそれらに次ぐ。刻まれる部位は底部外面が多い。刻まれる内容は、「×」をはじめとする単純な記号状のものが多いが、中には絵画状の複雑なものもみられる。特に入念に施したものに、324S Dで出土した464がある。天井部外面に鋸歯状、体部外面には波状のヘラ書きを密に施している。器形は古墳時代の坏蓋ないしは古代の壺蓋に近いものの、特殊用途のための蓋と捉えるべきかもしれない。

明らかに文字とみられるものは4例ある(642の内面・823³²⁾・1199・1286)。内面全面に灰釉が施された精製品の灰釉陶器碗1286では、「貞」と読めるヘラ書きと「僧口」の墨書きとが重ねて記されている。

(10) 緑釉陶器 511・512・1389~1391

破片数で19点確認した。飛騨地域の遺跡で、これだけの数の緑釉陶器が出土するのは極めて珍しい。

第24表 墨書き土器の器種と墨書き部位

器種	部位	個数	遺物番号・内容
須恵器 摘み蓋	体部内部	111064「絶」	
	天井部内部	41244・609「須」・953「□〔東カ〕」・1070	
須恵器 摘み蓋？	天井部外面	11071「須」	
	体部内部	11404	
須恵器 無台环	底部内部	6198「海」・626・628「□〔井カ〕」・1078・1079「□〔海カ〕」・1082	
須恵器 無台环？	底部外面	1169「□〔蓬カ〕」	
須恵器 有台环	体部外面	11104	
	底部外面	7410「□〔海カ〕」・476「□〔蓬カ〕」・632・1083「蓬」・1103「□〔井カ〕」・1102・1110	
須恵器 有台环？	底部内部+底部外面	11112	
	底部外面	348「□〔井カ〕」・1112	
	体部外面	5101・610「□〔上カ〕」・1121「井」・1149・1151	
	体部外面+底部内部	1845「体部外面：□〔記号状〕、底部内部：□〔記号状〕」	
	体部内部+底部外面	11144	
須恵器 無台碗	底部内部	11147	
	底部外面	173「□〔井カ〕」・201・202「仁」・407「□□〔井カ〕」・409「□〔海カ〕」・484 24「□〔井カ〕」・486・489「海」・611「□〔井カ〕」・634・635・636「□〔井カ〕」 846・924「麻呂」・1122「□〔井カ〕」・1124「海」・1129「□〔蓬カ〕」・1138「盃」・ 1140・1141・1142・1143・1145・1148	
須恵器 無台碗？	体部外面	248・612	
	体部外面	11278「□〔井カ〕」	
須恵器 有台碗	体部外面+底部内部	11490「体部外面：2箇所に〔内二〕、5箇所に〔□〔定カ〕〕、底部外面：〔内三〕」	
	体部外面+底部外面	11157	
	底部外面	104・492「方」（記号状）・574・836・1155「成」・1162「□〔井カ〕」・1164「仁」・ 81165「井」	
須恵器 有台碗？	体部外面	11154	
	体部外面	11183	
	体部外面+底部内部	1644「体部外面：平、底部内部：木」（記号状）	
須恵器 有台盤	体部外面+底部外部	1913「体部外面：上」（記号状）、底部外面：「上」（記号状）	
	底部内部	21179「平」・1180「仁」	
	底部外面	2955「□〔海カ〕」・1176	
	体部外面	3165「□〔井カ〕」・1183「□〔井カ〕」・1189	
須恵器 有台盤？	底部内部+底部外面	1838「底部内部：□〔井カ〕、底部外面：□〔井カ〕」	
	底部外面	21187「□〔海カ〕」・1188	
須恵器 不明	体部外面	1171「□〔井カ〕」・414・497「□〔井カ〕」・499・613「□〔井カ〕」・639・640・ 1194・1195・1203・1205	
	底部内部	4280・1197「達」・1206・1207	
	底部外面	9208・415・416・498「海」・500「海」・638・1196・1201・1204	
灰釉陶器 碗	体部外面	6660「仁」・668・1322・1337・1338・1339	
	体部外面+底部外面	1664	
灰釉陶器 碗？	底部外面	118・120・121・553「□〔井カ〕」・604・615「□〔井カ〕」・655「□〔仁カ〕」・ 663・666・667・670「□〔記号状〕」・1286「匁口」・1299「□〔人カ〕」・1300・ 1301・1315・1316・1321・1323「□〔井カ〕」・1324・1326・1327・1328・1329・ 1330「□〔井〕」・1331「□〔記号状〕」・1333	
灰釉陶器 碗	底部内部	436・1314「仁」・1325・1332	
灰釉陶器 盆	体部外面	2678・1358	
灰釉陶器 盆	体部外面+底部外面	11343「体部外面：仁」、底部外面：「仁」	
灰釉陶器 盆？	底部外面	8213・214・595「□〔井カ〕」・674・675「西」・1353・1354「西井」・1357「□〔井カ〕」	
灰釉陶器 不明	底部外面	11359	
灰釉陶器 不明	底部外面	21361・1362「□〔記号状〕」	

第25表 ヘラ書き土器の器種とヘラ書き部位

器種	部位	個数	遺物番号・内容
須恵器 売蓋	天井部外面	1952「×」	
須恵器 売蓋？	天井部外面+体部外面	1464（網目状、波状）	
	体部外面	11048（波状）	
須恵器 無台环	底部外面	823「□〔蓬カ〕」	
須恵器 有台环	底部外面	547（記号状ないし絵画状）・199・410・1101（平行線状）・1107	
須恵器 無台碗	底部外面	586・203（記号状ないし絵画状）・1126・1145・1146「×」	
須恵器 有台碗	底部内部	11575「×」	
須恵器 有台盤	底部内部+底部外面	1642内部：「□〔文字だが読めない〕、外面：記号状ないし絵画状	
須恵器 豆？	側部外面	11249（記号状ないし絵画状）	
須恵器 豆	側部内部	1850	
須恵器 内面環	硬面部外面	11278「×」ほか	
須恵器 不明	体部外面	1547「×」	
	底部外面	4622・1199「見口中」・1200「×」・1202	
灰釉陶器 碗	底部外面	21286「質」・1299「×」	
灰釉陶器 盆	底部内部	1942	
灰釉陶器 盆	底部外面	1679（平行線状）	
灰釉陶器 不明	底部内部	11360	

出土地点が須恵器・灰釉陶器集中区域に偏る傾向が顕著である。5個体図示した。

324 S Dで出土した511は、全形を窓うことのできる縁袖陶器皿である。軟質で、緻密な胎土は浅黄色を呈する。口径13.6cm、器高2.0cm、底径6.9cmを測る。体部は大きく開き、底部には平高台を持つ。高台は削り出しによるもので、底部外面には回転ヘラ削り調整を施す。全面にくすんだ緑色の縁袖が施されている。京都で生産され、当地に搬入された製品である。平安京II期古段階（9世紀半ば）に位置付けられよう。飛驒地域と中央とのつながりを示す貴重な資料である。

そのほかの4個体のうち、512・1390・1391は碗・皿類であろうが、1389については、器種不明ながら、広口壺・花瓶などの口か台、あるいはまた香炉の台、稜碗の蓋などの可能性が考えられる。511とは異なり、硬質である。内面にミガキ調整を施している。12年度試掘坑3で出土した。猿投窯産とみられ、猿投VI期新段階（9世紀末～10世紀初め）に位置付けられよう³³⁾。

(11) 土師質土器 288・597・1392～1397

先にも記したとおり、本書では、中世の土師器皿（かわらけ）をはじめとする古代後期以降の土師質の土器を「土師質土器」と呼び、古墳時代以来の土師器とは区別して捉えている。破片数で13点確認したが、すべて須恵器・灰釉陶器集中区域で出土している。8個体図示した。

1392のような手捏ね成形の個体と1397のようなロクロ成形の個体が混在する。形状にもばらつきが認められることから大きな時期幅があるものとみられるが、個々の個体の帰属時期を特定するのは困難である。288・597は口縁部内外に煤が付着しており、灯明具としての使用が想定される。

(12) 輸入磁器 66～69・218・219・254～256・283～287・605・606・618・1398～1425

破片数で82点確認した。内訳は、白磁8点、青磁74点である。須恵器・灰釉陶器集中区域で出土したもののがほとんどである。白磁6個体、青磁39個体、合わせて45個体を図示した。

全形を窓うことのできる個体はないものの、ほとんどは碗・皿である。ただし、青磁には鉢の可能性のあるものが1個体（1425）、香炉の可能性が高いものが1個体（1424）みられる。外面に鎬蓮弁文の認められる龍泉窯系の青磁碗が過半数を占めるなど、中世前期の典型的様相を示しており、概ね13世紀代から14世紀代にかけての時期に属するもので占められるとみて大過ないであろう。

(13) 山茶碗 38・39・71・134～139・257・682～684・945・1426～1442

本書では、灰釉陶器の流れを汲む中世の無釉陶器を山茶碗と呼ぶ。碗・小皿に加え、それらとともに東海地方で生産された鉢を含むものとする。破片数で146点確認した。器種別内訳は、碗68点、小皿20点、鉢58点である。碗・小皿88点の產地別内訳は、均質手の北部系山茶碗が46点（碗38点、小皿8点）、荒肌手の南部系山茶碗が42点（碗30点、小皿12点）である。碗15個体、小皿7個体、鉢9個体、合わせて31個体を図示した。

南部系山茶碗は、小皿に高台を備える個体がみられず、碗に高い高台を備える大型の個体がみられないことから、第4型式以前に遡る個体が含まれる可能性は小さいと判断される。概ね中世前期に属するもので占められるとみてよいであろう。碗1433には墨の付着が認められる。北部系山茶碗は、いずれも均質な胎土によるものであることから、東濃地方の製品とみられる。小皿には全形を窓うことのできる個体はない。碗の中で最も状態の良い39（1252 S T覆土出土）は、比較的薄手の作りで口縁端部が尖るなど、第7型式（明和1号窯式）の特徴を備える。未掲載のものも含め、出土した碗は39と厚さが同等、もしくは、より厚手の作りであることから、概ね中世前期に属するもので占められる

とみてよいであろう。ただし、平安時代後半にまで遡るような古相の個体はない。38と134には墨の付着が認められる。鉢には全形を窺うことのできる個体がなく、しかも摩滅の著しい個体が多いため判然としないが、概ね中世前期に属するもので占められるとみてよいであろう³⁴⁾。

(14) 珠洲焼 40・70・140・833・853・1443～1452

破片数で38点確認した。やはり、須恵器・灰釉陶器集中区域で出土したものが大半を占める。確認器種は鉢のみであり、甕・壺・瓶はみられない³⁵⁾、その他の特殊器種も出土していない。15個体を図示した。

全形を窺うことのできる個体はないものの、内面に擂目が認められる個体が多いことから、擂鉢として使用されたことは明らかである。装飾や刻印を施した個体は出土していない。口縁部形状に着目すると、最も古い特徴を備える個体である1446が珠洲系陶器編年の中II期（13世紀前半）に位置付けられる。そのほか、III期の特徴を備えるものとして833、IV期の特徴を備えるものとして853を挙げることができるほか、ほぼすべての個体がIII期からIV期に属するとみてよい。したがって、13世紀代から14世紀代にかけての時期に属する個体で占められることとなる³⁶⁾。

(15) 常滑焼 220・289・910・1453

越前焼と区別が付かないものを含め、破片数で16点出土した。それらのほとんどの出土地点は、須恵器・灰釉陶器集中区域である。赤物と呼ばれる近世の軟質陶器はみられない。全形を窺うことのできる個体はないが、比較的の特徴を残す4個体を図示した。

310SMで出土した220は鉢の口縁部破片であろうが、越前焼の可能性もある³⁷⁾。311SDで出土した289はL字状口縁を持つ壺で、13世紀頃の製品とみられる。365SWで出土した910は、12世紀ないし13世紀頃の三筋壺である。1453は15世紀頃の甕であろう³⁸⁾。

(16) 古瀬戸系施釉陶器 41・72・943・1454～1459

中世の古瀬戸系施釉陶器は、破片数で15点確認した。それらの多くは、珠洲焼・常滑焼などと同じく、須恵器・灰釉陶器集中区域で出土している。全形を窺うことのできる個体はないが、器種を推定できた9個体を図示した。1454の水注のみ古瀬戸前期に属するとみられるものの、直線大皿（72）、卸目付大皿（1458）、柄付片口（1455）など、全体としては古瀬戸後期に属するものが多いようである³⁹⁾。食膳具があまりみられないのも当発掘区の特徴である。

(17) 近世陶磁器 1460・1461

陶器・磁器合わせて破片数で322点確認した。全形を窺うことのできる個体はほとんどないが、特徴的な陶器2個体を図示する。1460は鉄絵皿である。ほぼ全面に厚い白色の釉を施し、底部内面には蘭竹文とみられる鉄絵が描かれている。瀬戸・美濃系の17世紀頃の製品とみられる。1461は擂鉢である。残存部分の内面全面に擂目が認められる。やはり瀬戸・美濃系の製品であり、帰属時期は18世紀以降であろう。

(18) 時代不明の土器類

破片数で71点を数える。それらの多くは、摩滅が進み、縄文土器・弥生土器・土師器のいずれとも判別できない土師質の土器である。なお、図示してはいないが、美濃須衛窯産中世陶器³⁰⁾の可能性のある小破片なども、わずかながら含まれる。

2 木器類

(1) 木器類の概要と報告方針

本書で「木器類」として報告する遺物は、「考古学的観点から報告する必要を認める木質遺物」である。そのため、明確な加工痕や使用痕をとどめる製品のみならず、伐採した木を板などに加工する前の段階の割板や、材の長さなどを微調整するために切り落とされて生じた端材、それに入為的な加工痕が明確でない木片をも含んでいる。破片数で数えて28,963点確認した。これは、出土遺物総数82,567点のうちの35.08%に当たる。他の遺物にも増して脆弱で、細かく分かれた状態で出土するのを常とすることから、個体数で数えた場合の出土数は数千個体程度にとどまるとみられる。それでもこの出土数は、飛騨地域の遺跡としては最多である。古墳時代の鋤・泥除け、古代の馬形などは、飛騨地域では初の出土例となる。910個体図示した。

木器類の分類方針

よく知られているとおり、木器類については土器類や金属器類に比べ体系的な分類が困難であり、当発掘区の出土品も例外ではない。その理由を当発掘区の出土品に即して言えば、以下ようになる。

- ①脆弱なため、全体形状や細部を読み取れる状態で出土する個体が限られる。
 - ②複数の部分品が組み合わされて一つの製品を構成することが多く、部分品のみでは完形品であっても製品としての全体形状や用途を知り得ない。
 - ③土器などに比べ二次加工・再利用品が多く、複数の用途に伴う形状・加工痕・使用痕が混在する個体も珍しくない。
 - ④製品に至る過程で生じる木片など、本来的に定型というものを持つはずもない種類の遺物も含まれる。
 - ⑤多くは溝状造構や水田跡など、水の溜まりやすい造構や包含層から出土するが、それらの多くは閉じた空間ではないため様々な時代の遺物が混在することとなり、共伴遺物から時代を特定することが難しい。
 - ⑥木の保存に適した環境を備えた遺跡のみで出土し、土器のようにどの遺跡でも出土するわけではないため、比較のための類例を近隣遺跡に求めることが困難な場合が多い。
 - ⑦容器としての使用を基本とした土器に比べ用途がはるかに広く、しかも現代人の想像を超えた使い方が広く行われた可能性さえあるため、多くの場合、用途の特定に困難を伴う。
- 分類基準を設けるに当たって特に問題となるのは、当発掘区の場合、用途を特定できないものが出土品の大半を占め、本書に掲載したような比較的の残存状態が良好な個体に限ってさえ、過半を占めることである。また、木器研究全体を見渡しても、現研究段階で推定されている各器種の用途は、今後の研究の進展により訂正を迫られる余地を多分に残していると判断する。以上から、当発掘区の出土木器類の分類に当たっては、用途別に大きく分類したのちに器種に分ける、ないしは器種名を与えたのち用途別に括るという手法は採用せず、以下のような分類法を探った。
- ①主として単体で使われる製品を「器具」とする。これまでの研究などから、すでに用途が十分に絞り込まれており、定着した器種名があるものについては、その名称を踏襲する(下駄など)。なお、例えば側板と底板からなる容器の場合、それらの組み合わせにより一つの個体となるという意味では、厳密には「単体で使われる」とは言えないこととなるが、この例のように構造がさほど複

難でなく、既往の出土例などから全体形状を十分推測可能であって器種名が周知されている調度品等については、ここに含むものとする。

②用途を特定できない器具、例えば、厚みの調整まで施された板や棒などのうち、他の部分品と組み合わせるための加工が認められないものについては、形状の特徴により分類し、「板状木製品」「棒状木製品」のように呼ぶこととする。

③製品を構成する部分品の可能性が高いものは「部材」とする。部材はさらに、建築物を構成する大型のものを「建築部材」、それより小型の調度品などを構成するものを「器具部材」というように分けて捉えることとする。なお、例えば板のような形状の木製品のうち、他の部分品との組み合わせを示唆する加工が認められる場合には「板状木製品」とはせず、ここに含む。加えて、当発掘区では、杭は単独では用いられず、横木と組み合わせるなどして列をなして護岸などに用いるのを通例としたことが判明しているので、それらを「土木部材」として部材の一種と捉えることとする。

④明確な人為的加工が認められるものの、製品とはみなしづらい、器具とも部材とも捉え難い木片については、「その他の加工材」として、以上とは区別する。厚み調整が施されておらず、製品としての板に至る前段階の板状の木片を「割板」と呼ぶ。また、割板の一端が切り落とされて生じた木片は「割板残材」とする。これに対して、製品化された材の長さなどを微調整するために切り落とされて生じた木片については、製作工程上の位置付けの相違を考慮し、「端材」として区別する。

⑤細かく割れるなどして本来の形状が明らかでなく、以上の分類のいずれとも判定し難い木質遺物を「分類不能木器」とする。この中には加工の有無が定かでないものも相当数含む。本書では、代表例として選んだ1個体を除き、図を掲載していない。なお、②・③・④をも含んでしまうこととなる「用途不明品」という分類名は、本書では採用していない。

以上をまとめると、第26表のようになる。これは必ずしも統一的・体系的ではないものの、当発掘区で出土した木器類の全体像を提示するには最も合理的な分類法である。

なお、二次加工が加えられ、本来とは別の用途で再利用が行われている場合には、基本的には最終形態で分類した。ただし、最終形態での用途や器種が特定できない場合も多く、この方針で一貫することは不可能であったため、再加工より前段階の推定形態で分類したものも少なくない。

掲載遺物抽出方針

第2節にも概略を記したが、ここで改めて詳述しておく。部材・加工材や「○○状木製品」以外、すなわち器種を特定できた器具については、ほぼすべての確認個体を図示した。ただし、個体数が極めて多く、かつ個性に乏しい器種（箸・火付け木）についてはこの限りではなく、全体傾向を提示できるよう抽出して図示した。その代わりとして、それらの器種については未掲載品も含めた「出土地点一覧」を掲載した。

器種名の特定に至らなかった器具、それに部材については、残存状態が良く、全体形状や加工痕・使用痕などを窺うことのできるものを抽出したほか、残存部分に特徴的な部位が認められる個体を中心を選んだ。その他の加工材、すなわち割板とその切れ端である割板残材、それに端材については、個々の個体は特徴に乏しいとはいえ、遺跡の性格を考察する上で重要と考え、可能な限り識別に努めて残

第26表 木器類の分類

器具	鍬	曲柄鍬 直柄鍬	水田などを耕すのに用いる農具。
	泥除け		鍬の身の後ろに装着し、泥の飛散を抑える器具。
	えぶり		水田などを平らにならすのに用いる農具。
	田下駄		水田で作業する際に、足の埋没を防ぐために履く農具。
	剝物容器		木材を削り抜いて作った容器。槽など。
	挽物容器		木材を挽り抜いておよその形を整えたのち、ロクロによって整形した容器。漆器椀など。
	曲物容器	橢円形曲物容器 円形曲物容器 曲物側板	薄板を曲げ、その両端の重ね合わせ部分を樹皮紙で縫り合わせて側板とし、これに底板を接合した容器。蓋板を備えることもある。
	組物容器		納を設けずに、板を釘や紐などで組み合わせて作った容器。
	桶		円筒形に並べた側板を竹などのタガで縛り、これに底板をはめ込んだ容器。
	杓杓		円形曲物に棒状の柄を取り付けた容器。
	容器蓋		曲物などの容器に被せる蓋。
	柵串		細長い薄板の両端を尖らせた串状の木製祭紀具。
	鳥形		
	馬形		動物や器物を抽象化した木製祭紀具。
	陽物形		
	椅子		腰掛けるための器具。
	下駄	津南下駄 差南下駄	齒を持つ木製のはきもの。
	櫛		多数の歯を持ち、髪の毛をすいたり、髪に挿して飾りに用いたりする道具。
	筋鉗車		糸を筋ぐるみに用いる円盤状の器具。
	栓		穴の口をふさぐ器具。
	木箇		文字を記した薄板。
	杓子		飯を盛るのに使用したとみられる、いわゆる「めししゃくし」。
	箸		長さ20cmくらいの細長い棒状に加工された小型の木製品。ただし、必ずしも食事具に限定されるわけではない。
	火付け木		一端ないしは両端に炭化部を持つ木片。ただし、用途は必ずしも「火付け」に限定されることはない。
	模造品		実用品とは違ひミニチュア製品など。
部材	串状木製品		細長く平らな串状を呈する木片で、用途を特定し難く、また部材と判断する根拠も見出せないものを括した。
	へら状木製品		幅広で平らなへら状を呈する木片で、用途を特定し難く、また部材と判断する根拠も見出せないものを括した。
	板状木製品		板状を呈する木片で、用途を特定し難く、また部材と判断する根拠も見出せないものを括した。
	棒状木製品		棒状を呈する木片で、用途を特定し難く、また部材と判断する根拠も見出せないものを括した。ただし、箸を除く。
	柱		
	柱根		
	礎板		
	梁・桁		
	垂木		建築物を構成する部材。板材や柱など、大工仕事に関わる部材全般を含む。
	厚板		
	その他		
土木部材	杭		
	樋木		横木を伴う杭列など、護岸をはじめとする土木に関する部材。
	樋木?		
	器具部材?		建築物より小型の調度品などを構成する部材。ただし、全体形状を十分推測可能であつて器種名が附記されているものは、ここに含まない。
	有孔薄板		
その他の加工材	その他		
	割板		製材段階の材材。厚み調整や面の仕上げ加工が施されておらず、製品化に至っていない板。
	割板残材		厚み調整や面加工の不十分な状態の割板の一端が切り落とされて生じた木片。
その他の加工材	端材		厚み調整や面加工を経た製品の板や角材などの一端を、長さ調整のために切り落としたことにより生じた木片。
	分類不能木器		本来の形状が判明せず、上記のいずれとも判別できない木質遺物。自然木と見分けの付かないものも含む。

存状態の良いものを図示した。

なお、当発掘区では、長さ1mを超えるような大型品も數十個体ほど出土しているが、それらの多くは原形をとどめておらず、建築部材・割板・自然木・伐採木のいづれとも判別できないものが大半を占めることを申し添えておく。

図化方針

原則として、想定される使用方法に従って設置した状態で平面図を描き、側面図ないしは断面図を添えた。使用方法の分からぬ個体については、原則として縦置きで表示した。ただし、端材と割板残材については、切り落とされる前の状態を想定し、図の上下端面のいづれかが切断面となるよう配置したため、この原則には従っていない。遺物観察表や文中で個体の部位を指す際には、掲載した平面図での向きに従っている。表裏の判定については、想定される使用状態で表となる方を表面としているが、平滑に仕上げられている方の面、あるいは情報量の多い方の面を表面とした場合もある。鉢の身では、柄と結合する面を裏面としているため、使用者側から見て反対側が表面となる。

観察の結果、読み取ることのできた加工痕等の起伏は、できる限り図示した。材の年輪は、平面図には表現せず、断面図に模式的に描くにとどめた。使用当時の形状を残さない部分、すなわち後世の欠損部分については、縦平行線によりその範囲を示すにとどめ、細かな表現を省略した。ただし、意味ある欠損、例えば建物の板材を廃棄ないしは転用のために粗く断ち切った場合の断ち切り痕などについては、この限りではない。なお、細かく分割して出土した個体などにみられる割れの線は、特に必要がない限り省略した。

木取り方法の分類と表示

木取り方法の分類は第27表に示したとおりである¹⁰⁾。板状の個体については「柾目」、「追柾目」、「板目」に分け、それ以外の形状の個体については「芯去」、「芯持」、「半割り」、「みかん割り」に分けた。以上に當てはまらない例外として、挽物容器に「横木取り」がみられた。

各個体の木取り方法は、遺物観察表に記した。実測図では、前述のとおり断面図に年輪方向を模式的に描くにとどめた。年輪の粗密は表現していない。器種ごとの木取りの傾向などについては、第5章において考察を加えているので参照されたい。

樹種同定分析

掲載した910個体のうち、590個体について樹種同定分析を実施した。その結果は「遺物観察表」(第2分冊15~92頁)に記載し、分析方法等については、第4章に分析担当者による報告を掲載した。また、器種ごとの樹種選択の傾向などについて、第5章において考察を加えているので参照されたい。

年代の推定

今回の調査では、年代測定を実施した木器類は、年輪年代測定法1個体、放射性炭素年代測定法3個体にとどまるため、主として考古学的手法による年代推定に頼ることとなる。しかし、一部の特徴的な個体を除き、個々の木器の年代を推定するのは決して容易なことではない。そこで、共に出土した土器類の組成や器形の特徴、共に出土した木器器種の傾向なども視野に入れた上で、総合的に判断することとした。したがって、この問題については、本節では必要最小限の記述にとどめ、第5章においてまとめて扱うこととする。

第27表 木取りの分類

	板目	年輪の接線方向に割る。 板状の製品などに用いられる。
	柾目	年輪に対して直交方向に割る。 板状の製品などに用いられる。
	追柾目	柾目よりやや斜め方向に割る。 板状の製品などに用いられる。
	芯去	樹芯を含まないように割る。 棒状の製品などに用いられる。
	芯持	樹芯を中心にはさむ。 棒状の製品などに用いられる。
	半割り	丸太を半分に割る。 製材段階の板などにみられる。
	みかん割り	半割りより細かく断面扇形になるように割る。 製材段階の板などにみられる。
	横木取り	木口面が製品の側面となるように削り出す。 挽物容器などに用いられる。

(2) 錄

水田などを耕すのに用いる農具である。身24個体、柄1個体、合わせて25個体確認し、すべて図示した。弥生土器と古墳時代土師器の集中区域である発掘区南半で出土する傾向が認められる⁴¹⁾。

分類に当たっては身と柄との結合方法に着目し、身の上半部に設けられた着柄軸に屈曲柄を繋縛して固定する「曲柄錄」と、身上に穿った枘孔に真っ直ぐな棒状柄を差し込んで固定する「直柄錄」に大別した。全25個体のうち、確認不能の4個体を除いた21個体中、曲柄錄が20個体を占め、直柄錄はわずか1個体にとどまる。

曲柄錄 873・874・1462～1474・1478～1481・1484

身19個体、柄1個体を確認した。曲柄錄の身は、柄を装着するために設けられた軸部と土中に打ち込まれる刃部からなるが、一般に、棒状の軸部を持つものと、軸部・刃部境に笠状突起を設けるものに大別できる。後者はその平面形がナスピに似るところから「ナスピ形錄」と通称される錄である。当発掘区で確認できた曲柄錄の身19個体中、ナスピ形錄であることが確実視されるものは15個体に及ぶ。その一方で、棒状軸部を持つことが確実視される個体はみられないことから、確認不能の個体を含め、当発掘区の曲柄錄はナスピ形錄で占められるとみて大過ないであろう。

当発掘区で出土したナスピ形錄の身について、主に刃部の平面形に着目して細分すると、以下のようになる(第108図)。

ナスピ形錄A類：刃部全体が曲線的で、下膨れ形状となるもの

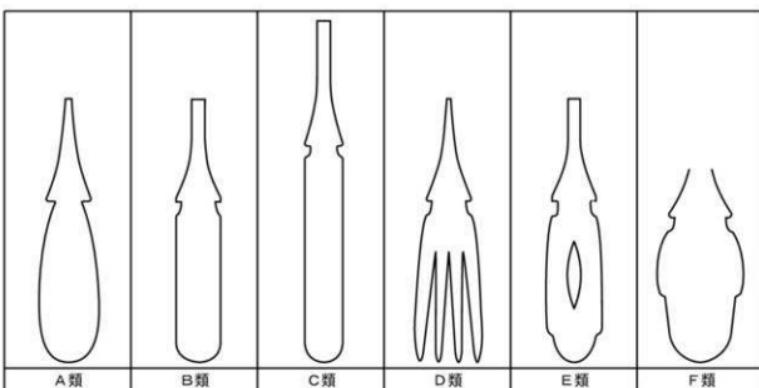
ナスピ形錄B類：刃部上端の肩の部分が張り、側縁が直線的で、短く幅広なもの

ナスピ形錄C類：刃部上端の肩の部分が張り、側縁が直線的で、細長いもの

ナスピ形錄D類：刃部が分岐し複数の歯を持つ、いわゆる又錄

ナスピ形錄E類：刃部中央に透かし孔を持ち、下端に鉄刃装着用の加工が認められるもの

ナスピ形錄F類：極めて幅広で、下端に鉄刃装着用の加工が認められるもの



第108図 ナスピ形錆の分類

A類は曲線的な形状を特徴とし、直線的な印象の強いB・C類とは際立った対照をなす。該当するのは、1462と1463の2個体である。全形を窺うことのできる1462では、刃部全体が曲線的で下彫れ形状を呈し、刃部下半では笠状突起よりも幅広となる。刃部下端付近にて最大幅を測る。軸部も緩やかな曲線で構成され、上端に向かい先細りとなっている。1463は軸部上端を欠くものの、軸部に対して刃部が目立って短小である。ただし、刃部下端には使用に伴い摩滅した痕跡が認められるので、本来は、刃部はより長かったとみられる。

B類とC類は、笠状突起の下、すなわち刃部上端の肩の部分が張り、刃部側縁が直線的なものである。軸部もA類に比べて先細りの傾向が薄く、より直線的であることを通例とする。当発掘区の鎌の身では、そのような作りのものが主体を占めるのであるが、長さと幅に大きな個体差が認められるため、刃部が比較的短く幅広なものをB類、細長いものをC類とした。

B類に属するのは、1465・1466・1467の3個体である。全形を窺うことのできる大型品の1466は、長さ61.2cmに対して、幅は11.0cmを測る。下端を除いて刃部幅は、笠状突起とほぼ同じ幅のまま一定である。より小型の1465は、刃部下半が左に彎曲するものの、やはり刃部幅は一定である。なお、B類の3個体とも、刃部側縁の延長線上の笠状突起側縁に狭小ながら面を持っており、製作に当たっては長方形の板から削り出されたことが分かる。

次にC類であるが、1468・1469・1470・1471の4個体のうち、典型的な個体である1469は、長さはB類の1466を上回る64.7cmを測るにもかかわらず幅は8.7cmにとどまり、非常に細身との印象を受ける。このほかC類に認められるB類との相違点として、柄との結合のための加工を軸部に加えるものがみられることを挙げてよいであろう。1470と1471では、軸部の表面に、柄を結合する際に紐を巻き付けるための溝ないし段差を設けている。そもそも、ナスピ形鎌では笠状突起下と軸部とで柄を紐結合するとされているが、軸部のうした加工は、長い身をより強く固定するための工夫と捉えることができる。同様の加工がC類の全個体に認められるわけではないものの、1469の軸部中央の表裏両面と左側面に認められる僅みや、1468の並外れて長い軸部もまた、同じ目的にかなうものと捉えることができ、C類では他のタイプにも増して強固かつ確実な紐結合が必要とされたことが窺える。

D類はナスピ形又鎌である。4個体確認しているが、残存状態の良い2個体はいずれも四又鎌である。1473は歯が4本とも部分的ながら残っており、下端先部分を除くほぼ全体の形状を窺うことができる。軸部から笠状突起にかけての形状はA～C類と大差ないが、軸部がより細身である。刃部は笠状突起よりも幅広となり、4本の歯を削り出している。そのうち外側の2本は内側2本に比べ、やや幅広である。1472では4本の歯のうち右半の2本は付け根で折れているものの、左半の2本は1473よりも状態が良く、内側の歯が細く直線的であるのに対し、外側の歯は幅広で、内側に向かい彎曲することが分かる。軸部は1473よりもさらに細身で、上端に向かって先細りとなる。上端付近の表面には、柄との結合のための溝を設けている。樹種は、1473が当発掘区の鎌に多いクヌギ筋であるのに対し、1472はアサダである。

それら2個体に次いで残存状態の良い1474にも四又鎌となる可能性が十分あり、刃部の分岐数が多いことを当発掘区の又鎌の特徴として挙げることができる。参考までに、ナスピ形鎌との確証はないものの、又鎌の歯の部分のみの破片である1475と1476も、やはり二又鎌というよりは四又ないし三又鎌とみるべきであろう。1475は直線的な歯で、上記3個体には欠けていた下端部分が残存しており、

使用に伴う摩滅の様子を窺うことができる。1476は彎曲する歯で、又鋸の左端部分であろう。1475と1476は同地点で出土しており、いずれも樹種は1472と同じアサダである。

1478は、ナスピ形又鋸であることは確実視されるものの、残存部分の形状からみて四又鋸にはなり得ず、むしろ二又鋸の可能性が高いと思われる。したがって、四又鋸が主体を占めるのは確かではあるものの、当発掘区の又鋸のすべてが四又鋸というわけではないことにも注意を払う必要がある。

E類とF類は、刃部に鉄製のU字形刃先を装着して使用したとみられる鋸である。鉄製刃先普及後に現われるタイプで、A～D類より新しい鋸である。確認できたのは1個体ずつにすぎないが、いずれもほぼ全形を窺うことができる。E類の1479では、刃部下端の幅を狭めるとともに周縁を薄く作っており、ここにU字形刃先を装着したことが想定される。刃部中央には紡錘形の透かし孔を穿っているが、これは当発掘区では唯一の確認例である。粘性の高い耕土から鋸を抜けやすくするための工夫とみられる。軸部の残存部分上端の表面に、柄との結合のための段差ないし幅広の溝が認められる。F類の1480は、ここまで見てきた他の鋸に比べ、極めて幅広の形状である。ただし、笠状突起はごく小さく、目立たなくなっている。刃部下半全体の幅を狭めて周縁を薄く作っており、1479よりも大型の鉄製U字形刃先を装着しての使用が想定される。軸部の形状は不明である。

なお、出土した曲柄鋸の中には、ナスピ形鋸の特徴である笠状突起が認められない個体も皆無ではない。873はほぼ全形を窺うことのできる個体であるが、軸部と刃部との境に笠状突起が見当たらない。しかし、笠状突起の有無以外は上記分類のナスピ形鋸A類の特徴を備えており、本来は存在した突起が損なわれたのちに、欠損部に加工を加えて整形し直した可能性が高い。軸部から刃部上半にかけての破片である874にも笠状突起が見当たらないが、これも同様の例とみなして問題ないであろう。やはり、当発掘区では、笠状突起を初めから備えない曲柄鋸は、その徴証を認めないと言わざるを得ない。

ところで、曲柄鋸の身の木取りについて触れておくと、すべて柾目材ないし追柾目材であり、板目材がみられないことを特徴とする。樹種については、クヌギ節が大半を占めるが、コナラ節が1個体みられるほか、上記のとおり又鋸にはアサダが3個体ある。

最後に、曲柄鋸の柄について記す。1484は、以上のような身と結合されて使われたとみられる曲柄である。一般に曲柄は、身との装着部分が膝のように銳角に屈曲して身の刃部の方向へ伸びる膝柄と、身との装着部分が身の刃部とは反対方向に反り返る反柄とに細分される。当発掘区の曲柄鋸の大半は軸部が細く、反柄を装着するタイプとみられることから、この個体は、身との装着部分を欠くものの、反柄となると思われる。丁寧に整形された芯去材であり、断面は梢円形である。下端には柄頭を削り出している。樹種はアサダである。

直柄鋸 1483

身が1個体出土したにとどまる。確実に直柄と判断される柄は出土していない。

1483は、ほぼ全形を窺うことのできる直柄鋸の身である。又に分岐しない刃部を持つ「平鋸」であり、さらに細分するなら、身幅の狭い「狭鋸」である。柄を差し込むための円孔を1つ備えるが、身の長軸に対して直交方向に穿たれてはいない。そのため、柄は身に対して銳角または鈍角の場合には、草を薙ぎ払う「払い鋸」としての使用法が想定されよう。クヌギ節の柾目材である。

(3) 泥除け 1485

鍔の内側に装着し、鍔先から跳ね散る泥が耕作者にかかるのを防止する耕起補助具とされる。1個体のみ確認した。出土地点は、発掘区南西端に当たる21テグリッドである。

唯一の確認個体である1485は残存状態良好である。平面形は隅丸台形を呈する。丁寧な加工を施し薄手に仕上げており、厚さは最大でも0.7cmにすぎない。上端に4箇所、中央右端に2箇所（一対）、紐結合のための孔が認められ、それらのうち上端右端と中央右端では樹皮紐が残存する。それらを補修痕とみた場合、この個体は、上端にあった鍔との結合部を欠失していることとなる。ただし、上端のそれらを鍔との結合のための装置とみることも不可能ではない。上端付近中央には、柄を差し込むための楕円孔を備える。その穿孔角度から、柄に対して鋭角に装着されたとみられる。下端付近中央には、それより小さな方形孔が認められるが、これは鍔の身ないしは柄と結びつけて固定する紐を通すためのものであろう。

一般に、泥除けは、直柄鍔、それも身幅の広い広鍔か横鍔に限って装着されるとされるが^②、上記のとおり、鍔の多くを曲柄鍔が占める当発掘区にあっては直柄鍔自体が稀であり、しかも狭鍔しか確認されていない。また、この個体の樹種は、飛騨地域では自生しないとされるアカガシ亜属であり、樹種同定を実施した全個体中、この材を使用している唯一の例である。以上から、同様の製品が当地で広く使用されたとは考え難い。他所で製作され、持ち込まれた見本品のようなものと捉えるべきであろう。

(4) えぶり 1486

身の部分1個体のみ確認した。1486は2つに割れているものの、ほぼ完形品である。中央に柄を差し込むための長方形の貫通孔を備える。柄と身のなす角度は、ほぼ直角となるとみられる。5本の歯はいずれも磨滅している。最大厚3.9cmと極めて厚いことと、半円形を呈する形状から、曲物か桶の底板に二次加工を加えて転用したものである可能性が高いと判断する。出土地点は6シ・7シグリッドであり、他の大部分の農具類とは異なり須恵器・灰釉陶器集中区域で出土していることも、そうした推測の傍証となる。

(5) 田下駄 1487

田下駄と断定できる個体は出土していないものの、その可能性のあるものとして1487を挙げることができる。1487は全体の半分以上を欠失しているとみられるが、容器の底板に二次加工を加えたものであろう。残存部分に2つの貫通孔と2つの切り欠きを持ち、それらは足を紐で固定するための加工と捉えることができる。本来の平面形は楕円形で、孔と切り欠きを4つずつ備えた田下駄とみてよいであろう。樹種はヒノキである。須恵器・灰釉陶器集中区域の5ケグリッドで出土した。

(6) 削物容器 887

887は、二次加工を受けているようであるが、表面を抉って窪ませており、削物容器の槽とみられる。長さ45.1cmを測る。樹種はサワラである。残存部右端に貫通孔が2つ連なるが、それらは二次加工によるもの可能性がある。1067N.Rで出土した。

このほか、器具部材に分類した881も、削物容器の槽に二次加工を加えて転用したものである可能性が高い。これも1067N.R出土品である。

(7) 挽物容器 290・291・1488～1493

ロクロによって整形した容器を挽物容器とした。当発掘区では漆をかけない白木作りの製品は確認されておらず、挽物容器の可能性があるのは、すべて全面に墨漆を塗った漆器椀・皿である。残存状態の比較的良いものと赤色漆絵が描かれているものを選び、8個体を図示した。それら以外に、掲載個体と同一個体の可能性の高いものを含め、小破片が数十点出土している。それらのほとんどの出土地点は、発掘区北半・すなわち須恵器・灰釉陶器集中区域である。

赤色漆絵が描かれているのは1491を除く7個体で、うち全形を把握できる皿3個体（1488・1492・1493）では部体外面に描かれている。これに対し、残存状態良好な椀1490では、部体外面のほか底部内面にも草花とみられる文様が描かれている。これら7個体の木胎の樹種は、いずれも上質漆器に用いられることが多かったとされるケヤキである。掲載した個体のうち、唯一、赤色漆絵が描かれていない皿1491は、厚手であり、部体・底部境の内面に明瞭な段を設けているなど、作りの点でも他の個体とは異なっている。また、これのみケヤキではなくブナ属を用いている。

(8) 曲物容器

大型の楕円形曲物容器と小型の円形曲物容器が出土している。一般に前者が古墳時代までに多く、後者が古代以降に多いとされるが、当発掘区の場合、それぞれの出土地点の土器様相から、そのことは概ね首肯される。合わせて42個体確認した⁴³⁾。

楕円形曲物容器 888・1498・1499

確認できたのは、図示した底板3個体である。いずれも弥生土器・土師器集中区域である発掘区南半で出土した。最も残存状態の良い1499は長径63.0cm、最大厚1.8cmを測る大型品で、平面形は隅丸方形に近い楕円形を呈する。側板を結合するための一対の孔が、周縁部に設けられた段をまたいで、ほぼ等間隔に5箇所認められる。それらにはいずれも樹皮紐が残っている。この個体については年輪年代測定を実施し、伐採年代576年+α（1～2年）との結果を得た⁴⁴⁾。

888と1498はこれよりはやや小型であろうが、それぞれ平面形は、1498が隅丸方形に近い楕円形、より曲線的な888は楕円形となるであろう。1499と同様、周縁部に段を持ち、結合のための樹皮紐を通す孔を穿っている。888では樹皮紐の脇に、紐のたるみを防ぐために小さな木栓が打ち込まれている。これら2個体では、裏面に刃物痕が多数認められる。

なお、器具部材に分類した1867も、元はこのような大型の底板であった可能性が高い。

円形曲物容器 88・147・182・258・260・685・686・1500～1531

側板と底板が共に出土したのは147・1507の2個体にすぎないが、それらのほかに底板のみ確認したものが37個体あり、合わせて円形曲物容器の確認個体数は39個体である。すべて図示した。大半の個体は、須恵器・灰釉陶器集中区域である発掘区北半で出土している。なお、底板とした円盤状の板の中には、曲物ではなく桶の可能性のあるものが含まれるであろうが、当発掘区では側側板の確認数はごく少数にとどまるので、曲物として扱う。また、蓋板の可能性のあるものも含まれるが、多くの場合、両者を判別することは困難であるため、ここでは一括して底板として扱う⁴⁵⁾。

39個体のうち、残存状態が良好でないものを除いた22個体について、底板に認められる側板との結合方法から分類すると、以下のようになる（第109図）。

A類：結合のための加工を施さず、側板の内側に底板をはめ込んだと推定されるもの

B類：側板の内側に底板をはめ込み、側板の外側から木釘を打ち込んで結合するもの

C類：底板の上に側板を載せ、底板の裏側から木釘を打ち込んで結合するもの

D類：底板の上に側板を載せ、樹皮紐で結合するもの

E類：底板周縁部に段差を設けて側板を載せ、樹皮紐で結合するもの

内訳は、A類7個体、B類8個体、C類1個体、D類1個体、E類4個体であり、このほかA類・B類のいずれの可能性もある特徴的なものが1個体ある。

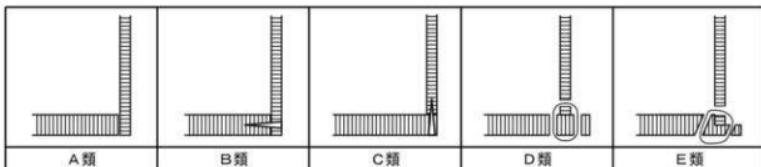
A類は、木釘や樹皮紐による結合の痕跡が認められないものである。代表例として、底板のみならず側板も残存する147を挙げることができる。この個体では、底板は完存しているにもかかわらず、側板との結合のための加工は見当たらない。単に側板の内側にはめ込まれている状態で出土した。側板は薄板を円筒形に曲げて作っており、大部分は2重、一部3重に重ねており、2箇所で樹皮紐により綴じ合わせている。側板内面には上下縁に対して直交方向のケビキが多数認められる。このほかの6個体は側板を伴っていないが、同様の結合方法を採っていたと考えられる。

当発掘区において最も多いタイプであるB類は、底板と側板の位置関係はA類と同様であるが、木釘を打ち込み、より強固に結合するものである。側板を伴う良好な個体に1507がある。底板と側板との結合は側板の上から水平方向に打ち込まれた木釘によるもので、4箇所認められる。いずれも木釘そのものが一部残っている。なお、147と同様に、側板は2箇所で樹皮紐により綴じ合わせている。残存状態の良い方の紐では、内面の上から2段目で紐をねじっている。これは、紐が抜けないようにするための工夫とみられる。

以上に対して、C～E類は底板の上に側板を置く結合方法である。C類に該当するのは1513のみである。ただし、他遺跡の事例を見渡しても一般的な結合方法とは言い難く、疑問が残る。底板から垂直方向に突き出した木釘を側板に直に打ち込むのではなく、何重かに重ねられた側板の間に挟み込ませたとも考えられる。

D類も該当するのは1514のみであり、当発掘区では珍しい結合方法である。1514では底板の周縁よりも少し内側に3対の小円孔が穿たれており、そのうちの1箇所では孔をまたいで樹皮紐が残存している。さらに、3対の孔の間を通るように側板が置かれた痕跡が認められる。ただし、1514は直径7.6cmと極めて小型であり、他の大部分の出土品とは異質な個体である。

E類は、当発掘区の楕円形曲物容器と同様に、底板周縁部に設けられた段をまたぐように一対の隙間をいくつか設け、ここに通した樹皮紐で側板と結合するものである。底板と結合された側板そのものは当発掘区では出土していないが、既往の諸事例から、側板にも同様の隙間を設け、樹皮紐を通して結合するものと推測できる。



第109図 円形曲物容器の底板と側板の結合方法

以上のほか、底板と側板の特徴的な結合がみられる個体として、1505を挙げておく。この個体では、底板の表面の周縁部と側面に、黒漆とみられる黒色の厚い付着物が認められる。これは側板との接合部の隙間を埋め、結合をより緊密にするために塗られたものと推測される。それらの付着範囲から、結合方法はA類・B類と同様、側板の内側に底板をはめ込む形であったことが分かる。

結合方法以外に目を向けると、いわゆる「ぶんまわし」、すなわちコンバス状の器具による円形加工の目安線が認められる個体がみられることを、この器種特有の特徴として挙げることができる。該当するのは、1502と1515であるが、1502では、ほぼ目安線に沿って整った円形に加工されている一方で、1515では周縁との間に最大で1.4cmもの誤差がみられる。以上のほか、底板に刃物痕が認められる個体が少くないことも、この器種の特徴である。特に顕著な1515では、裏面の残存部分のほぼ全面にわたって細かな刃物痕が認められる。

曲物側板 183・259・1532～1536

以上のほかに、曲物の側板のみ確認したものが7個体ある。これらについては、本来の形状を把握することができず、梢円形曲物とも円形曲物とも判別不能であるため、別分類とした。ただし、いずれも発掘区北半で出土しているので、円形曲物容器の側板である可能性が高い。

いずれも残存部分は全体のごく一部にすぎないとみられるが、上下縁に対して直交方向に施されたケビキを確認することができる。1536には綴じ合わせのための樹皮紐が残存している。

(9) 組物容器 1494～1497

枘を設げずに、板を釘や紐で組み合わせて作った容器を組物容器とした。掲載した4個体は、いずれも発掘区北半の出土品である。1496と1497は、左右両端に木釘がささる長方形の板で、小型容器の側板とみられる。いずれも5コグリッドで出土しており、元は1つの容器を構成していた可能性がある。6シグリッドで出土した1494には、そのような側板と組み合わせて容器を構成する底板ないしは蓋板の可能性を考えてよいであろう。ただし、具体的な組み方は判然としない。1495は大型容器の側板とみられ、樹皮による結合の痕跡が認められる。4コグリッドで出土した。

なお、当発掘区では、枘で板を組み合わせて作る指物容器は確認されていない。

(10) 桶 1538

彎曲する短冊状の形状と、裏面に認められる斜め方向の加工痕から、1538は桶の側板と判断した。一般に、桶をはじめとする結物容器が普及するのは中世後期以降とされているので、この個体の存在は、当発掘区の出土木器の中に帰属時期が中世後期以降に下るもののが混在することを示唆すると言えよう。8サグリッドで出土した。

このほかに同様の遺物は確認されていないが、板状木製品に分類したものうち1742には、その可能性がある。

(11) 柄杓 687・1537

柄杓の身の部分は確認されていないが、柄の可能性のあるものが2個体出土している。棒状の687は下端を欠くものの、上端では6方向から削り、先端を尖らせている。断面はほぼ正方形である。残存部の中央付近に木釘孔とみられる小孔が残っており、その位置から径13cmほどの身につけられた柄と推定できる。ほぼ全形を窺うことのできる1537では、より丁寧な加工を施しており、断面は八角形である。やはり木釘孔とみられる小孔が認められることから、柄杓の柄である可能性が高い。い

ずれも須恵器・灰釉陶器集中区域の出土品である。

(12) 容器蓋 274

容器関連の製品として、以上のほかに漆塗りの容器蓋が1個体出土しているが、他の容器とは帰属時代に大きな隔たりがあるとみなし、別分類とした。

274は表面・裏面には赤色漆、側面には黒色漆を塗っている。お櫃など筒型容器の蓋であろう。当発掘区出土の木器としては特に新しい時代に属するものであることは確かで、古くみても中世後期以降の製品であり、近代以降にまで帰属時代が下る可能性もある。発掘区北端に近い192 S Dで出土した。

(13) 斎串 145・1539

残存状態の良好な個体は出土していないが、145と1539は斎串の上半部とみられる。いずれも上端を三角形状に尖らせ、145では右側面に切り込みが残っている。出土地点は、145は須恵器・灰釉陶器集中区域内の1255 S Tであるが、1539は弥生土器・土師器集中区域となる16ソグリッドである。

なお、車状木製品としたものの中にも、斎串の可能性があるものがいくつかみられる(42・1700・1702・1707)。

(14) 形代

器具や動物などを抽象化して表現した祭祀具を形代とした。確認できたのは、鳥形・馬形・陽物形である。出土地点には大きなばらつきが認められ、発掘区北半の須恵器・灰釉陶器集中区域に偏る傾向は、意外にも希薄である。馬形が多数出土したことが注目される。

鳥形 73・882

全形を窓うことのできる個体は出土していないが、73と882は、いずれも鳥を横から見た姿を抽象化して削り出した鳥形と判断した。73は小型品で目立った特徴を欠くものの、鳥の頭部から胴部中央にかけての部分とみられる。大型品の882も同様の部位が残存するが、表面には装飾的な加工痕を残しており、さらに翼固定用と思われる貫通孔が2つ認められる。

馬形 423・688～691・918・1540～1552

馬形と判断した19個体をすべて図示した。他遺跡での出土例に照らして典型的な馬形と言えるもの

第28表 馬形の属性一覧

遺物番号	輪の表現	飼差し込み用の切り込み	目の表現	木取り	樹種	特記事項
423	×	×	—	柾目	ヒノキ	
688	○	○	×	柾目	ヒノキ	
689	×	○	×	柾目	ヒノキ	切り込みは両面にある。
690	×	×	×	柾目	ヒノキ	あるいは鳥形か。
691	○	×	—	柾目	アスナロ属	
918	○	○	—	柾目	ヒノキ	
1540	×	—	○	柾目	アスナロ属	目の表現は両面にある。
1541	○	○	—	柾目	ヒノキ	切り込みは両面にある。
1542	△	△	×	柾目	ヒノキ	
1543	○	○	—	柾目	ヒノキ	切り込みは両面にある。
1544	○	○	×	柾目	ヒノキ	切り込みに木片残存。
1545	×	×	○	柾目	サワラ	目の孔は貫通している。
1546	×	△	×	柾目	ヒノキ	
1547	○	○	—	柾目	アスナロ属	切り込みは両面にある。
1548	○	○	—	柾目	ヒノキ	切り込みは両面にある。
1549	○	—	○	柾目	ヒノキ	目の孔は貫通している。
1550	○	×	—	板目	ヒノキ	
1551	×	×	×	柾目	ヒノキ	
1552	—	○	—	柾目	スギ	切り込みは両面にある。

「○」=あり、「△」=不明確、「×」=なし、「—」=不明

は少なく、さらには概して小型であり、復元長が20cmを超えると推定される個体はみられない。また、個体間の形状差が大きく、当発掘区での定型を見出すことも難しいため、馬を抽象化したと捉えてよいか定かではないものも含まれる。

以上のような様相から、当発掘区の馬形を細かく分類することにはさしたる意味がないものと判断せざるを得ないので、主な属性を表にまとめるにとどめておく（第28表）。半数以上の個体では、上端中央、すなわち背に当たる部位に鞍の表現が認められる。脚を差し込むためとみられる切り込みを設ける個体も半数を超えており、うち6個体では表面と裏面の両面に設けている。1544では切り込みに木片が残存している。目を表現するとみられる小孔を持つ個体は3個体にとどまる。木取りは1個体を除き柵目である。樹種については、ヒノキが14個体、アスナロ属が3個体、スギとサワラが1個体ずつとの分析結果を得ている。

陽物形 74

74はヒノキの芯去材による棒状製品で、ほぼ完形品である。中央から上半にかけて、螺旋状の刻みが施されている。上端には亀頭状の表現が認められ、男性の性器を写実的にかたどった形代とみられる。1253S Tの覆土から出土した。

（15）椅子 1553

1553は、大きさと形状、それに脚を差し込むための孔を設けていることから、脚差し込み式椅子の腰掛板と考えた。右端を欠くものの、左端の形状から、端部が半円形を呈する平面形であったことが窺える。裏面左端付近に脚を差し込むための方形孔が5つ並ぶ。ただし、不可解なことに、それらのうち1つは表面まできれいに貫通している。このほかにも、両側面に一対の切り欠き加工が認められるほか、裏面に刃物による傷が多くみられ、さらに、表面右端付近に貫通しない深い抉りが2箇所認められるなど、椅子としては必然性を見出し難い加工痕を多く残している。それらは、他器種への転用に伴う二次加工によるものとみるべきであろう。須恵器・灰釉陶器集中区域内に当たる7スグリッドで出土した。

（16）下駄

15個体確認した。ただし、それらのうち4個体の残存部分は歯のみである。すべて図示した。出土地点が須恵器・灰釉陶器集中区域である発掘区北半に偏る傾向が顕著である。

下駄には、大きく分けて、台と歯とを一本から削り出して作る連歯下駄と、台と歯を別に作り柄で組み合わせる差歛下駄がある。一般に、古代までの下駄は連歛下駄であるが、中世になると差歛下駄も使われるようになるとされる^⑩。当発掘区の出土品にはどちらもみられるが、連歛下駄が14個体を数えるに対し、差歛下駄は歯が1本出土したにとどまり、台の部分は確認されていない。なお、下駄には無歛下駄と呼ばれる歯を持たないタイプもあるとされるが、当発掘区の出土品にはみられない。

連歛下駄 75・141・142・144・292・1554～1562

当発掘区で出土した14個体の連歛下駄について、属性をまとめると第29表のようになる。一般に、連歛下駄を分類するに当たって特に重要視されるのは、前側の鼻緒孔（前壺）の穿孔位置である。すなわち、前壺が左右どちらかに寄るタイプと中央に位置するタイプがあり、前者が9世紀前半には姿を消すのに対し、より実用的な後者は8世紀中頃に出現し今日に至るとされる^⑪。当発掘区の出土品のうち判別できる個体は、すべて後者のタイプに属する。次いで注目すべき点とされるのは、歯の削

第29表 連歯下駄の属性一覧

遺物番号	細分	平面形	前歯の位置	歯の削り出し方	歯の形状	歯の立ち方	樹種	特記事項
75	A類	隅丸長方形	中央	台から連続	—	—	ヒノキ	
141	B類	隅丸長方形	中央	台との境が屈曲する	—	直立	ヒノキ	焼け火箸による穿孔?
142	A類	—	中央?	台から連続	台形?	直立	ヒノキ	
144	—	—	—	—	台形	直立	ヒノキ	歯のみ残存。
292	—	—	—	—	台形	直立	アスナロ属	歯のみ残存。
1554	A類	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	アスナロ属	
1555	A類	楕円形	中央	台から連続	台形?	直立	ヒノキ	
1556	A類	楕円形	中央	台から連続	台形?	直立	ヒノキ	差歯による補修痕あり。 焼け火箸による穿孔?
1557	A類	隅丸長方形	中央	台から連続	台形?	直立	—	
1558	A類	隅丸長方形	中央	台から連続	台形	直立	ヒノキ	
1559	—	—	—	—	—	—	—	
1560	—	—	—	—	—	直立	—	
1561	—	—	—	—	—	—	—	
1562	—	—	—	—	台形	直立	アスナロ属	歯のみ残存。

り出し方である。歯が台側縁の内側から削り出され、台と歯の間に段を持つタイプと、台と歯の側縁が連続し、両者の間に段を持たないタイプがあり、古墳時代の下駄では前者が多くみられるのに対し、後者はそれより遅れて普及するとされる⁴⁸⁾。当発掘区の出土品には前者に該当する個体はみられない。以上の2つの特徴から、とりあえず当発掘区の下駄には帰属時代が古墳時代にまで遡るものはないと言えよう。なお、下駄の帰属時代については、第5章においてさらに考察を加えることとする。

台の平面形からは、側縁が直線的で隅丸方形を呈するもの4個体(75・141・1557・1558)、側縁が緩やかに張り出して楕円形を呈するもの3個体(1554～1556)、以上のように大別できるが、両者間の形状差はあまり大きくはない。当発掘区の下駄を細分する場合、着目すべきなのは、むしろ、歯の削り出し方であろう。先に記したように、歯が台側縁の内側から削り出されるものはみられず、主体を占めるのは台と歯の側縁が連続し、両者の間に段を持たないタイプである。これを連歯下駄A類とする。該当するのは、75・141・1554～1558の7個体である。これに対して、141ではやや異なっており、歯上端と台との境の部分が屈曲し、歯が強く外側へ張り出す。これを連歯下駄B類とする。

次に、歯の形状については、まずA類では、良好な状態で歯が残っている1554・1558では歯は下側に開いて台形を呈し、それより歯の残存部分の短い個体のうち、142・1555～1557でも、残存部分から同様の形状となることが窺える。B類の141については残存部分が少ないので、不明である。なお、歯のみの状態で出土した3個体(144・292・1562)でも、歯はいずれも台形を呈しており、当発掘区の下駄では、歯の形状は台形を基本としたことが窺える。歯の立ち方については、A類・B類を問わず、どの個体でも側面から見て直立しており、台に対して外開きになるものはみられない。

技法面では、明確ではないものの141と1556では孔が炭化しているとみられ、これは焼け火箸による穿孔が行われた可能性を示唆すると言える⁴⁹⁾。1556では、前歯の部分に貫通する円孔が横に3つ並ぶが、おそらく、それらは差歛式に歯を補修するために穿たれたものと思われる。

樹種については、樹種同定を実施した10個体中、ヒノキが7個体を占め、残る3個体はアスナロ属との分析結果を得ている。樹種と形状に相関関係は認められない。

差歛下駄 143

前記のとおり、歯が1本出土したのみで、台は確認されていない。143は歯としてはほぼ完形品である。上端に柄を2つ削り出している。樹種はアスナロ属との分析結果を得ている。

(17) 櫛 1563

櫛は1個体のみ確認した。1563は残存長1.5cmの小型品であるが、下端に太めの歯を削り出してい

ることと、樹種が堅いイスノキであることから、櫛と判断した。イスノキは飛騨地域では自生しない木であるので、他地域からの搬入品であろう。出土地点は、須恵器・灰釉陶器集中区域に当たる7コグリッドである。

(18) 紡錘車 1565・1566

1565はほぼ完形品の紡輪である。長径8.5cmを測る。中央の径1.3cmの円孔に木製の軸が挿まっている。側面には小円孔が2箇所みられ、そのうち1箇所には木釘が残っていることから、曲物の底板か蓋であったものの転用とみられる。1566も中央に円孔を持つことから紡輪とみてよいであろうが、同様に曲物からの転用の可能性がある。出土地点は、1565が13コグリッド、1566が5コグリッドである。

(19) 植 1567・1568

穴の口をふさぐのに用いられる栓は単独では用をなさないが、部材とは性格を異にすると判断し、器具として扱う。確認したのは掲載した2個体のみである。7コグリッドで出土した1567は逆截頭円錐形、16コグリッドで出土した1568は幅広の頭部に軸部が付く形状である。形状の相違は使用される部位が異なることを示すにすぎず、帰属時代の差を示すとは限らないと思われる。1568の樹種は、当発掘区では主に鋸に用いられているコナラ節であり、特に強度が必要とされる部位での使用が想定される。

(20) 木筒 1564

1564は串状の薄板であるが、表面と裏面に墨で文字が書かれている。しかし、いずれも判読することはできなかった。なお、出土した木器類で文字が書かれているものは、この1個体のみである。出土地点は17コグリッドで、須恵器・灰釉陶器集中区域からは隔たりがある。

(21) 杓子 293・692・1569～1572

幅広の身と、それより幅の狭い柄からなる器具を杓子とした。飯を盛るのに使用する食事具と推定されている。確認した6個体をすべて図示した。

当発掘区の杓子は、柄の形状には大差がみられないが、身の先端が丸みを帯びて半円状をなすもの（A類）と、やや角張るもの（B類）の2種類に分けることができる。身の先端を欠く1572を除き、293・1569・1570がA類に属し、692・1571がB類に属する。やや特異な特徴として、293の柄の上端付近にみられる一对の貫通孔を挙げることができる。うち1つには樹皮が挿まっており、吊り下げるための工夫と思われる。5個体について樹種同定を実施し、1570のみアヌラ属で、残る4個体（293・692・1571・1572）はヒノキとの分析結果を得ている。

出土地点はすべて発掘区北半の須恵器・灰釉陶器集中区域であり、形状からも、いずれも古代の製品とみて違和感はない。

(22) 箸 76・146・184・294～313・513・514・693・911・931・1575～1643

長さ20cmくらいの細長い棒状に加工された小型の木製品を箸とした。破片数で298点確認しており、主に遺構内から出土したものから抽出した97個体を図示した。未掲載の個体も含め、出土地点が須恵器・灰釉陶器集中区域である発掘区北半に偏る傾向が極めて顕著である。

脆弱な小型品であるため、全形を窺うことのできる個体は多くはなく、図示したものの中では7個体を数えるにとどまる。最長24.9cm、最短18.5cmを測る。欠損品では、少なくとも一端を尖らせていることが確認できる個体が多数みられるものの、完形7個体のうち両端とも尖らせていることを確認できるのは、わずか1個体（294）にすぎない。さらに3個体（1575～1577）では、両端とも尖らせ

てはいないことを確認できる。加工は粗いものが多く、多くの個体では、断面形は円形と言えるほど滑らかではなく多角形を呈する。直径は0.5cm前後を測るものが多い。樹種はヒノキが圧倒的に多い。

なお、この器具の用途については、箸と呼んではいるものの、食事具と断定しているわけではないことをお断りしておきたい。一つの遺跡からおびただしい数が出土するケースがあること、地域的にも一遺跡内でも明確な規格性がない点が食事具としては不可解であること、祭祀具とともに出土するケースが多いこと、突き立てたり敷き詰めたり遺物を覆うようにして使用されている例があること、斎串の使用が衰退していく9世紀頃に出現し斎串にとってかわるよう全国的に普及していくこと、以上の特徴から、祭祀具とみる説も有力であることを申し添えておく⁹⁰⁾。

(23) 火付け木 185・186・221~232・321~401・424~456・515~527・598・607・699~772・883・884・914~916・932~934・1644~1696

一端ないしは両端に炭化部を持つ木片を火付け木とした。同様の器具は木器の出土する遺跡では普遍的にみられ、県内では柿田遺跡（可児市及び可児郡御嵩町）の出土例⁹¹⁾がよく知られているほか、当発掘区の近隣では、当遺跡のD地区において中世前期頃の掘立柱建物跡の柱穴などから出土している⁹²⁾。火付けに使用される雑具とも祭祀具ともされるが、用途について確説はない。

破片数で数えた出土点数は2,401点であるが、この中には形状から火付け木の可能性が高くとも炭化部を欠く破片を含んでいないため、火付け木の総数は個体数に換算しても2,000個体を超えることは間違いない。

278個体を抽出して図示した。加工法と形状から、細長く薄く削った串状のA類（177個体）、それより厚みのある角棒状のB類（56個体）、粗く割ったのみで多少なりとも整った面を持たないC類（43個体）、切断した木の枝をそのまま利用したD類（2個体）、以上の4類に分類できる。いずれにおいても大半の個体の加工は粗く、形状が整ったものは稀である。長さ10cm台から20cm台を測る個体が多いが、30cmを超えるものや10cm未満のものも稀ではなく、最大で62.0cm（1653）、最小で5.1cm（707・1661）と大きな

第30表 著出土地点一覧

出土地點	グリッド細分	層位	破片数
311SD	-	-	39
311SD~393ST	-	III (断ち割り)	1
321SD	-	-	1
324SD	-	護岸	1
339SK	-	-	1
365SW	-	-	1
366SD	-	I	2
397ST~398ST	-	III (断ち割り)	1
1061SD	-	-	1
1253ST	-	護土	1
4コ	NW	II	4
	SW	III	1
5ヶ	SW	II	1
	NE	II	1
5コ	NW	II	2
	SW	II	2
	NE	II	3
5サ	SW	II	2
	NW	II	1
5シ	SW	II	1
	NW	II	4
6コ	SE	II	1
	SW	II	5
	NE	II	3
6サ	SE	II	9
	SW	II	2
	NE	II	3
6シ	NW	II	7
	SE	II	17
	SW	II	1
	NE	II	3
6ス	NW	II	8
	SW	II	5
	NE	II	2
7コ	SE	II	14
	SW	II	24
	NE	II	13
7サ	NW	II	14
	SE	II	1
	NE	II	4
7シ	NW	II	1
	SW	II	1
	NE	II	1
7ス	SE	II	1
	SW	II	1
7セ	NW	II	1
	NE	II	3
	NW	II	2
8サ	SE	II	1
	SW	II	2
8シ	SW	II	1
8ス	NW	II	2
17タ	SW	KDT	1
12年度試掘坑3	-	-	7
12年度試掘坑4	-	-	41
12年度試掘坑6	-	-	4
12年度試掘坑7	-	-	9
12年度試掘坑9	-	-	1
12年度試掘坑11	-	-	2
北東耕上層出区	-	-	5
13年度試掘坑26	-	-	2
不明	-	-	1
合計			298

第31表 火付け木出土地点一覧

出力地点	ダリヤン分類	属位	破片数	出力地点		ダリヤン分類	属位	破片数	出力地点		ダリヤン分類	属位	破片数	
				層位	層位				層位	層位				
247SP	-	-	4	5シ	II	-	I	1	10ス	III	3	10セ	III	5
310W	-	II	2	5シ	II	43	III	1	10セ	III	1	11ス	III	2
3109W~384ST	-	断ち削り	15	6ケ	II	1	III	14	11ス	III	6	11セ	III	5
311B	-	II	7	6ケ	II	20	III	2	11セ	III	1	12セ	III	1
3119W~390ST	-	III(断ち削り)	76	6コ	II	67	III	15	12セ	III	1	13セ	III	1
3119W~390ST	-	III(断ち削り)	2	6コ	II	1	III	1	13セ	III	4	14セ	III	2
321B	-	III	7	6コ	II	21	III	1	14セ	III	2	14ソ	III	17
324B	-	II	37	6コ	II	4	III	4	14ソ	III	2	14タ	III	17
324B	-	2	19	6サ	II	16	III	1	15ソ	III	1	15タ	III	10
324B	-	3	6	6サ	II	12	III	1	15タ	III	2	16ス	III	2
339B	-	-	6	6サ	II	44	III	1	16ス	III	1	16タ	III	1
348B	-	-	1	6サ	II	16	III	1	16タ	III	1	17タ	III	1
361B	-	-	1	6シ	II	31	III	1	17タ	III	1	18タ	III	1
364B	-	-	1	6シ	II	2	III	1	18タ	III	1	19タ	III	1
365W	-	-	1	6シ	II	18	III	1	19タ	III	1	20タ	III	1
367SD	-	-	5	6シ	II	18	III	1	20タ	III	1	21タ	III	1
368SD	-	-	1	6シ	II	1	III	1	21タ	III	1	22タ	III	1
372SD	-	-	1	6シ	II	1	III	1	22タ	III	1	23タ	III	1
384ST	-	断ち削り	3	6ス	II	15	III	1	23タ	III	1	24タ	III	1
391ST~392ST	-	断ち削り	1	6ス	II	14	III	1	24タ	III	1	25タ	III	1
393ST~396ST	-	III(断ち削り)	3	6ス	II	7	III	1	25タ	III	1	26タ	III	1
392ST~393ST	-	III(断ち削り)	4	7ケ	II	5	III	1	26タ	III	1	27タ	III	1
392ST~396ST	-	III(断ち削り)	1	7ケ	II	42	III	1	27タ	III	1	28タ	III	1
394ST~388ST	-	III(断ち削り)	2	7ケ	II	14	III	1	28タ	III	1	29タ	III	1
396ST~400ST	-	III(断ち削り)	1	7ケ	II	1	III	1	29タ	III	1	30タ	III	1
397ST~398ST	-	III(断ち削り)	3	7ケ	II	79	III	1	30タ	III	1	31タ	III	1
398ST~402ST	-	III(断ち削り)	1	7ケ	II	99	III	1	31タ	III	1	32タ	III	1
105SD	-	-	1	7ケ	II	4	III	1	32タ	III	1	33タ	III	1
106SD	-	-	164	7サ	II	42	III	1	33タ	III	1	34タ	III	1
1061W	-	-	8	7サ	II	46	III	1	34タ	III	1	35タ	III	1
1071W	-	-	1	7サ	II	2	III	1	35タ	III	1	36タ	III	1
1079ST	-	-	1	7サ	II	11	III	1	36タ	III	1	37タ	III	1
1259SM	-	-	10	7サ	II	16	III	1	37タ	III	1	38タ	III	1
1259ST	-	断ち	39	7サ	II	15	III	1	38タ	III	1	39タ	III	1
1252ST~1255ST	-	断ち削り	29	7サ	II	19	III	1	39タ	III	1	40タ	III	1
1253ST	-	断ち	36	7サ	II	5	III	1	40タ	III	1	41タ	III	1
1253ST~1255ST	-	断ち削り	14	7サ	II	1	III	1	41タ	III	1	42タ	III	1
1253ST~1256ST	-	断ち削り	1	7サ	II	11	III	1	42タ	III	1	43タ	III	1
1255ST	-	断ち	164	7サ	II	7	III	1	43タ	III	1	44タ	III	1
1254ST	-	断ち	13	7サ	II	2	III	1	44タ	III	1	45タ	III	1
1256ST	-	断ち	5	7サ	II	4	III	1	45タ	III	1	46タ	III	1
1295SD	-	-	1	7サ	II	6	III	1	46タ	III	1	47タ	III	1
1301SD	-	-	2	7サ	II	6	III	1	47タ	III	1	48タ	III	1
3162D	-	-	1	7セ	II	5	III	1	48タ	III	1	49タ	III	1
3ケ	SI	III	1	7セ	II	4	III	1	49タ	III	1	50タ	III	1
4フ	SE	III	1	8コ	II	8	III	1	50タ	III	1	51タ	III	1
4ケ	SI	II	5	8サ	II	15	III	1	51タ	III	1	52タ	III	1
4	SI	II	5	8サ	II	8	III	1	52タ	III	1	53タ	III	1
4	SI	II	4	8サ	II	4	III	1	53タ	III	1	54タ	III	1
4	SI	II	1	8サ	II	31	III	1	54タ	III	1	55タ	III	1
5ケ	SI	III	2	8サ	II	60	III	1	55タ	III	1	56タ	III	1
5ケ	SI	III	5	8サ	II	1	III	1	56タ	III	1	57タ	III	1
5ケ	SI	II	1	8ス	II	21	III	1	57タ	III	1	58タ	III	1
5ケ	SI	II	7	8ス	II	25	III	1	58タ	III	1	59タ	III	1
5ケ	SI	II	8	8ス	II	8	III	1	59タ	III	1	60タ	III	1
5ケ	SI	II	6	9サ	II	6	III	1	60タ	III	1	61タ	III	1
5ケ	SI	II	9	9サ	II	1	III	1	61タ	III	1	62タ	III	1
5ケ	SI	II	7	9サ	II	2	III	1	62タ	III	1	63タ	III	1
5ケ	SI	II	2	9サ	II	5	III	1	63タ	III	1	64タ	III	1
5ケ	SI	II	6	9サ	II	2	III	1	64タ	III	1	65タ	III	1
5ケ	SI	II	9	9サ	II	4	III	1	65タ	III	1	66タ	III	1
5ケ	SI	II	4	9ス	II	6	III	1	66タ	III	1	67タ	III	1
5ケ	SI	II	1	9ス	II	2	III	1	67タ	III	1	68タ	III	1
5ケ	SI	II	2	9ス	II	2	III	1	68タ	III	1	69タ	III	1
5ケ	SI	II	10	10ス	II	1	III	1	69タ	III	1	70タ	III	1
5ケ	SI	II	17	10ス	II	3	III	1	70タ	III	1	合計		2,401

個体差がみられる。

炭化部位については、図を掲載した278個体中、両端が残存する253個体について調べてみると、一端のみ炭化するもの223個体（88.1%）、両端が炭化するもの29個体（11.5%）、全体が炭化するもの1個体（0.4%）となる。9割近くの個体では一端のみ使用しているが、両端を使用する個体も決して稀ではないと言うことができる。加工法・形状と炭化部位との間に相関関係は認め難い（第32表）。

製作に当たっては、板状ないし棒状の使用済み製品から刃物で削ぎ取って材を得ることも行われたとみられる。A類とB類には、確実ではないとはいえ、そのように想定できる個体が少くないが、両側面が整う338などはその例として挙げてよいであろう。木取りについては、原本から直に木取りされたとは限らないことから、薄い串状の個体であっても板目なし柾目と断することはできず、結果、大半の個体の木取りは芯去と判断した。ただし、C類にみかん割りがみられ、D類はすべて芯持である。

樹種については、同定を実施した62個体中、ヒノキが48個体でおよそ4分の3を占め、ほかには、マツ属複管束亞属9個体、サワラ2個体、ネズコ1個体、ヒノキ科1個体、モクレン属1個体がみられる。ヒノキが多いのは、当遺跡では器具・部材を問わず最も多く使われる材であったことと相関関係があると考えられる。

箸の場合と同様に、未掲載の個体も含め、出土地点が須恵器・灰釉陶器集中区域である発掘区北半に偏る傾向が顕著である。さらには、327~330・334・349・351の7個体が311SD内にまとまって出土したように、出土地点が溝状構造の中の一部の区域に集中する傾向が認められる（図版51最下段左）。このことは、一度にまとめて用いられ、一括廃棄されるような使用法を示唆するよう思える。

なお、串状木製品に分類したものの中に、未使用の火付け木とみることのできる個体が見出される（1698・1709）。それらと同様に、当発掘区で主体を占める火付け木A類の特徴を備えながら炭化部を持たないものは200個体余り出土しているが、やはり、出土地点が発掘区北半に偏る傾向が認められる。なお、それら以外にも、未使用の火付け木なのか、端材なのか、器具の一部なのか、あるいはまた自然木なのか、判別困難な木片が少なからず出土していることを申し添えておく。

(24) 模造品 78・1573・1574

鋸歯状の形状を特徴とする78は、農具のえぶりの小型模造品であろう。長さ18.7cmを測る。1253STの覆土から出土した。

1573と1574は、平成12年度試掘・確認調査において試掘坑3で出土した。1573は穂を写実的に表現した小型模造品であろう。同形のもの2つを連結するための欠込み状の仕口を設けている。1574もまた極めて写実的である。中央に柄を持ち、端を尖らせる形状から、鉛鉤など金属製从具の模造品の可能性が考えられる。

(25) 串状木製品 42・148・917・1697~1709

細長く平らな製品で、用途を特定し難いものを一括した。出土地点については、須恵器・灰釉陶器

第32表 火付け木の属性一覧

	A類	B類	C類	D類	合計
一端炭化	143	44	34	2	223
両端炭化	16	8	5	0	29
全体炭化	1	0	0	0	1
不明（欠損）	17	4	4	0	25
合計	177	56	43	2	278

集中区域に偏る傾向が認められる。16個体図示した。42・1700・1702・1707などには斎串の可能性がある。1703・1704は、斎串の未製品かもしれない。1706は箸とみることも可能である。また、前述のとおり、1698や1709は炭化部が認められないものの、形状が火付け木に類似することから、未使用の火付け木の可能性がある。

下端を特に鋭く尖らせ、平滑に仕上げている148については、木針の可能性があるほか、織機の糸調整具などの可能性も考えることができる。

(26) へら状木製品 1710~1713

幅広で平らな製品で、用途を特定し難いものを一括した。へらとしての使用痕が認められる個体はない。1710は大型で特に幅の広い個体であるが、下端を欠く。1712は精巧な作りであるが、欠失部分が多い。1711は杓子に近い形状であるが、幅が狭い。1713も杓子のような形状であるが、長さは11.0 cmを測るにすぎず、小型模造品とみなすべきかもしれない。以上の4個体は、いずれも須恵器・灰釉陶器集中区域で出土した。

(27) 板状木製品 187・314~320・694~696・878~880・921・1714~1744

板状を呈する製品で、用途を特定し難く、また部材と判断する根拠も見出せないものを一括した。部材との判別は、他の部分品と組み合わせるためにみられる加工の有無を判断基準とした。具体的には、切り欠き加工や柄孔などが認められるものは部材とし、そのような加工が認められないものは板状木製品としている。ただし、大きさや厚さなどから建築部材や土木部材と判断されるものについては、他の部分品との組み合わせのための加工が認められなくとも、ここに含んでいない。なお、出土地点については、須恵器・灰釉陶器集中区域に偏る傾向が認められる。46個体図示した。

上記のような分類の結果として、ここには大小様々な個体が含まれることとなり、なかには単体で使われる器具とはみなし難いものも少なくない。ある程度、規格性が認められ、用途を推定できるものとして、平面形が整った短冊形を呈する薄板（316・318・1717・1719・1722・1723・1725・1728）を挙げることができる。それらについては、曲物容器の側板などとしての使用を想定することが許されるであろう。

(28) 棒状木製品 149・150・188・233・457~459・875~877・919・920・1745~1770

棒状を呈する製品で、用途を特定しがたく、また部材と判断する根拠も見出せないものを一括した。38個体図示した。149・457・876・1765・1766など、農具や工具の柄の可能性のあるものが多数含まれる。それらに対して、188・1749・1761については、一端を尖らせていることから、何かに突き刺すような使用法を想定できる。なお、出土点については、須恵器・灰釉陶器集中区域で出土したものが比較的多いが、あまり顕著な偏りは認められない。

(29) 建築部材

建物を構成する部材を建築部材とした。後述の器具部材との判別に当たっては、より大型であることに加え、大工仕事による部材であることを念頭に置き、面の仕上げがより粗いことなども指標とした³³⁾。

建物のどの部分に使用されたのか不明のものも少なくない。組まれた状態で出土したものはない。出土点については、後述する器具部材に比べれば、発掘区南半の弥生土器・土師器集中区域で多く出土する傾向が認められる。ただし、柱根と礎板は、すべて須恵器・灰釉陶器集中区域に当たる発掘

区北東端で出土している。なお、柱根とは柱穴から出土した柱の根本部分のことであり、慣例に従い柱とは扱いを分けている。76個体図示した。

柱 897・1771~1774

柱穴に残った柱根を除き、5個体図示した。柱の場合、板に比べ面の調整などが粗くとも機能上、差し支えないとみられるので、ここには1772のように、柱として使用されたのか、製品素材の割材なのか、判然としないものも含まれる。

1067N Rで出土した897は、打削製材によるクリの角材である。土中にあったことによる腐食痕が下端に認められることから、柱と判断した。上端は粗く断ち切られている。

1771は、腐食する部分が多いものの、ほぼ全形を窺うことができる。上端・下端に断面方形の枘を削り出している。枘の部分を除き上端から下端まで、直交する2方向からの壁板を受けるための加工が施されていることから、隅柱とみられる。樹種はアスナロ属との分析結果を得ている。

1773は残存長186.6cmを測るクリの半割り材である。下端を表面と左右側面の3方向から斧のような工具で削って尖らせていることから、掘方を設けて据えるのではなく、地面に直接打ち込んで立てる打ち込み柱とみられる。上端を欠くものの、欠失部分には、輪溝^{ホウキ}のような、横架材を受ける凹形の加工が施されていた可能性がある。下端を除き、表面には加工を施していない。裏面も粗く削られたままの状態である。

柱根 14~21・25~27

実測図は11点図示してあるが、同一個体の可能性が高いものが2組含まれるため、実質の掲載個体数は9個体である。樹種同定未実施の25を除き、すべてクリの芯持材と判断される。25~27以外は、掘立柱建物跡SH1の柱穴に残存していたものである。

20では、下端付近に工具によって抉られてできた幅広の溝が認められるが、既往の類例から、運搬時に縄をかけるためのものであったと推測される。16と21では、上端はきれいに切断されており、それより上の部分を再利用したものとみられる。なお、SH1出土品のうち3個体について放射性炭素年代測定を実施し、17は9世紀初め~10世紀末、20は8世紀末~9世紀末、21は7世紀末~9世紀末との結果を得ている。詳しくは第4章第3節を参照されたい。

基礎 13

掘立柱建物跡SH1の柱穴223Pで出土した13は、柱の沈下を防ぐために柱の下に敷かれた基礎とみられる。この柱穴では柱そのものは出土しなかったものの、土層断面に認められる柱痕跡の直下に、水平方向に置かれていたことを確認している。厚さ3cmを測るクリの芯去材である。当発掘区では、基礎を確認できた柱穴は、この1例のみである。

梁・桁 1778・1779

1778は両端に段差を設けており、それらは直交する材を受ける欠込み状の仕口であったとみられる。ただし、いずれも先端を欠く。あまり丁寧な製材を経ておらず、裏面には丸太の曲面を残している。残存長238.0cmを測り、当発掘区の出土木器類の中では最長の個体である。

1779は残存長178.0cmを測る柱状の部材であるが、一端に欠込み状の仕口を設けていることから梁・桁と判断した。やはり各面の形状は、あまり整ってはいない。

垂木 1776・1777

1776は、下端を欠き、右側面も大部分剥落しているものの、上端に欠込み状に段差を設けていることと、柱や梁・桁とみるには細すぎることから、屋根を支えるために棟から軒先に渡す材である垂木と判断した。同様の理由により、1777も垂木と推定した。

厚板（壁板・床板・屋根葺き板） 889～891・895・896・899・1780～1814

当発掘区では、建物に使われたとみられる厚板も多数出土している。41個体図示した。残存状態良好で全形を窺うことのできる1797は、長さ96.1cm、幅16.9cmを測る。表面と左右側面は調整され平滑に仕上げられているのに対し、裏面は粗く、上下端面には工具による断ち切りの痕跡を明瞭に残している。同様の技法上の特徴を備える厚板は多数出土しており（891など）、それらは、斧・鎧・楔による打削製材のうち、厚みの調整や主要面の仕上げ加工を施した板材と捉えることができる。用途面では、それらの多くは建物の壁板ないし床板で、屋根葺き板も含まれる可能性があると判断した。なお、大型縦挽き鋸を使用する挽削製材によるとみられる板は確認されておらず、鋸の使用は、一部の材の上下端切断に限って認められる（1804など）。板状で最長の個体は、長さ207.5cm、幅23.1cmを測る1780である。

壁板と考えられるのは1781～1784である。1781と1782では、側縁付近に設けられた枘孔に幅広の樹皮紐が巻かれており、その中には木片がはさまっている。これは隣接していた別部材の結合部がちぎれて残ったものとみられ、板を重ね合わせてつないだ痕跡と考えられる。また、この2個体では、表面に手斧による加工痕が明瞭に残っている。これは見せることを意識した装飾的な加工であろう。対照的に裏面は粗く、これは露出していたことにより風食が進んだことによるのであろう。1783と1784には同様の枘孔が認められるが、1784では側縁を中央より薄く仕上げており、重ね合わせを意識した作りとなっている。

889は、建物の切妻部分にみられる合掌形の装飾板である妻壁板であろう。左端は上端を斜めに切り落とし、特徴的な直角三角形状を呈する。上端・下端に1箇所ずつ切り欠きを施しているが、これは他の部材との接合のための加工であろう。表面・裏面には、ほぼ全面にわたり、手斧による丁寧な加工痕が残っている。ただし、表面の方がより装飾的である。また、表面では、右端は加工痕が不明瞭となっており、さらに左端付近にも左端面に平行する斜めの圧痕が認められる。これらは他の部材との重ね合わせの痕跡と捉えてよいであろう。これほど明瞭な例はほかに見当たらないが、形状の類似する1786が同様の部材であるとみられる。

以上のほかにも、大きさや厚さから壁板の可能性が高い板は多数みられるが、当発掘区ではそれらの多くは、切り欠き加工を側面に施している。多くの場合、左右の対応する位置に、一対の同じような加工を施している（895・896・1785・1798・1800・1802・1803・1807など）。これらは大きさからみて主に壁板であろうが、建築部材でそのような加工が必要な部位は、具体的にはあまり想定できない。したがって、例えば、矢板など、他の用途に転用される際に施された加工である可能性を考えるべきであろう。また、一方の端部にきちんと端揃えの加工がなされているにもかかわらず、もう一方の端部には、工具の当たりの不規則な、粗い断ち切り痕を残すものがみられる（899・1785～1787・1793・1814など）。それらは、建物解体時もしくは他用途への転用時に、斧や鎧のような工具で断ち切られたことを示すものと捉えることができよう。なお、両端とも粗く断ち切られ、原形をとどめて

いない個体もみられる（1800など）。炭化部分の多い1792などは、焼失建物の部材であろう。

1788と1789は、厚みがあることから床板とみられる。いずれにおいても側縁の厚みを減じて薄く仕上げているのは、他の板と重ね合わせるためと考えられる。しかし、当発掘区の多くの板と同じく切り欠き加工が施されていることや、平面形が長方形ではないことから、やはり、他用途に転用するための二次加工が加えられているとみるべきかもしれない。1787のような比較的小型の板には板葺き屋根の葺き板の可能性があると考えるが、定かではない。

その他の建築部材 1775・1819・1823

1775は下半を薄くする形状から、建築物の枘などの隙間に詰める楔とみられる。ただし、上半は盤状工具により大きな方形の枘穴状に粗く抉っており、さらに、その上端には方形の貫通孔が1箇所認められることから、何らかの部材に二次加工されていると捉えるべきであろう。1819は残存状態が良くないが、枘穴状の貫通孔を複数備えることから、何らかの枠材とみられる。1823も枠材であろう。

（30）土木部材

杭と横木を確認した。遺構埋土や包含層から出土したものもみられるが、杭の多くは打ち込まれた状態で列をなしており、それらに対して横方向に差し込まれた横木とともに水田耕作に関わる施設を構成したとみられる。なお、一般に、杭・横木のほかに存在が想定される土木部材として矢板が挙げられるが、当発掘区では建築部材からの転用品の可能性があるものがいくつかみられるのを除けば（895・896など）、矢板は出土していない。80個体図示した。

杭 460・528～548・599・619・775～811・813～818・900・901・1824～1833

下端を地中に打ち込んだとみられる棒状ないし幅の狭い板状の木器を杭とした。遺構埋土や包含層から出土したものが數十点程度あるほか、打ち込まれた状態のものを破片数で670点確認した。その出土地点一覧を掲げる（第33表）。古墳時代の水田に関わるものと古代水田に関わるものに大別できるとみられる。図示した79個体のうち、打ち込まれた状態で出土したものは66個体あるが、弥生土器、土師器集中区域の1071 S Dに属する43個体は前者の例、須恵器・灰釉陶器集中区域の321 S D・324 S D・372 S Dに属する23個体は後者の例である。

両者を比較してみると、樹種については、1071 S D出土品では同定を実施した35個体中、サワラ14個体、クリ13個体、ヒノキ7個体、アスナロ属1個体であったに対し、321 S D・324 S D・372 S D出土品では、同定実施19個体中、クリ14個体、マツ属複管束亞属2個体、コナラ属・サワラ・ヒノキ各1個体となる。古墳時代までに多く使われた樹種のうち、サワラとヒノキは古代にはあまり使われておらず、結果として古代にはクリに偏るようになることが分かる。木取りについては、1071 S D出土品では、芯去34個体、半割り2個体、みかん割り7個体であったに対し、321 S D・324 S D・372 S D出土品では、芯去5個体、芯持16個体、半割り2個体となり、大きな隔たりを認めることができる。すなわち、古墳時代までは芯去をはじめとする粗く割った材を使用していたが、古代には、割らずにそのまま用いることが多くなったことが窺える。

横木 812

杭列に横方向に差し込まれた棒状の木器を横木とした。代表例として図示した812は、1071 S Dで検出された杭列において、杭の間を縫うように差し込まれた状態で出土した。一端のみ加工を施した芯持材である。しかし、この杭列全体にそのような横木が差し込まれていたわけではなく、確認され

第33表 桃出土地点一览

出土 地點	グリッド 細分	層位	破片数
310SM	-	-	6
311SD	-	-	3
321SD	-	-	13
324SD	-	遺構	45
348SD	-	-	7
364SD	-	-	9
367SD	-	-	48
372SD	-	-	8
373SD	-	-	3
1061SD	-	-	11
1071SD	-	-	227
4コ	SW	III	2
5ヶ	SE	III	3
5コ	NE	III	29
5サ	NW	H	1
5シ	NE	III	1
6ヶ	SW	III	3
6サ	NW	III	1
	SE	H	1
	SW	H	3
	NE	H	1
6シ	SW	III	2
	NE	H	1
	SE	III	5
	SW	III	28

出土地點	グリッド緯分	層位	破片数
6 ズ	NW	III	7
	SW	III	3
7 ヲ	SE	II	1
	NE	II	4
7 サ	SE	III	3
	SW	II	6
7 シ	SE	III	12
	-	II	1
7 ス	NE	III	18
	NW	II	1
8 コ	SE	III	6
	-	II	6
8 サ	NW	II	3
	SE	II	1
8 シ	SE	II	8
	SW	II	4
8 ス	NW	II	5
	SW	II	1
10セ	NE	II	1
	NW	III	2
11ゾ	SW	II	7
	SW	II	1
11ゾ	NW	YT	7
	-	II	1

出土地点	グリッド細分	層位	破片数
12ゾ	NE	YT	1
13ゾ	NE	YT	1
13タ	SW	YT	1
13タ	NW	YT	5
14ゾ	SE	YT	3
14ゾ	SW	YT	12
14タ	NE	YT	15
15ゾ	SW	YT	8
15タ	NE	YT	3
15チ	SW	KT	2
17タ	SW	KT	3
	NW	KT	8
17チ	SE	KT	4
	SW	KT	1
	SW	-	2
17ツ	NE	KT	2
18タ	SE	YT	1
18チ	SE	YT	1
合計			670

た横木は、わずか2本にとどまる。当発掘区全体を見渡した場合でも、横木と確認できるものは、杭に比べるるかに少数である。

(31) 器具部材

用途を特定できないものが多いが、ある程度推測可能なものや特徴的なものについて記述する。なお、器具部材の多くは発掘区北半の須恵器・灰釉陶器集中区域で出土しており、建築部材とは傾向の違いをみせている。77個体図示した。

紡織具部材の可能性があるもの 698・1834~1838

1834は、ほぼ全形をうかがうことができるが、中央に一周する帯状の装着痕が認められることから、他の部品と組み合わせて用いられた部材であることは明らかである。均整のとれた形状で、加工も丁寧である。4つの円孔が等間隔に並んでおり、中に木棒がはさまっている。全体が黒色に塗られているとみられるが、装着痕と木棒の隣りのみはげている。糸を巻き取るための道具である「かせ」であろう。すなわち、同様の形状のもの2つを棒状の部材で「工」字状に連結し、糸を巻き取っておくような使用法が想定される。このほか、「かせ」の可能性のある部材には1838などがある。

1837は残存長6.9cmにすぎない小破片であるが、下端を尖らせる特徴的な形状と加工が丁寧であることから糸巻の棹木と推定した。残存部分の上端に円孔が認められるが、これは数本からなる同様の棹木を結合する横木をはめ込むための枘穴であろう。

1061 S.Dで出土した698は、柄を持つ板状の部材であるが、柄の上端面に2本の木製の楔を打ち込んでおり、これは接合を抜けにくくするための工夫とみられる。各面の仕上げが丁寧であることから、織機の部材である可能性があると考えた。

容器部材の可能性があるもの 189・1839・1886

189と1839はいずれも薄板であるが、他の部材と結合するための樹皮組が残存している。容器の側板である可能性が高い。1886は黒色の漆を塗った長さ9.2cmの板であるが、容器に取り付ける脚の可能性がある。

有孔薄板 151・152・190・1840～1842

貫通孔を持つ小型の板である。組み合わせて容器などとなる可能性があろうが、判然としない。152と190では孔に樹皮が残り、1840では孔に木釘が残る。151では、貫通孔のほか、納状の突起も認められる。

その他の器具部材

1255 S Tの覆土から出土した154は、精円形の孔を備え、手で握るのにふさわしい形状であることから、鑿など工具の柄の可能性が考えられる。

1067 N Rで出土した881は、大きさや形状から台や机などの天板の可能性があると推定する。ただし、元は剖物容器であった可能性を考えるべきであろう。同じく1067 N Rで出土した886は小型の棒状で、上端を有頭状に削り出し、下端に段差を設けている。差し込んで用いる把手などの可能性が考えられる。

1847は用途を特定できないものの、裏面中央に大きな空洞を備え、上端まで貫通させるなど、極めて珍しい加工を施している。同形のものを2つ重ね合わせて空洞に組を通し、その長さを調整するような機能を持ったと想定される。その場合、自在鉤などとしての使用が考えられよう。

1887は片側が外に開く装飾的な形状であり、上端に枘を備える。完形品であるが長さは9.4cmにとどまり、小型の天板を支える脚とみられる。膳などの部材であろう。1850は、より重厚であるが、やはり上端に枘を持ち、脚の可能性がある。

(32) 割板 903・1896～1899

当発掘区で出土した厚板の中には、厚み調整や面の仕上げ加工が施されておらず、いわば製品化に至っていないものがみられる。先にも記したように、当発掘区では大型縦挽き鋸を使用する挽割製材による板は確認されておらず、板はすべて打削製材によって得ていたとみられるので、それら製材段階の板を割板と呼ぶこととする。5個体図示した

その典型例である1896は、全面に粗い加工痕が残り、形状も整っていない。上下端面は粗く断ち切られたままであり、左右側面は整った面を持つに至っていない。表面は凹凸が著しい。裏面は比較的整っているものの、平滑ではない。長さ91.0cm、幅17.6cmを測り、大きさからみて建築部材用であろうが、樹種は当発掘区ではあまり使われていないクロベである。

903はみかん割り材であるが、樹種がクヌギ節である点が注目される。これは当発掘区では古墳時代の鋸に限って使われている樹種なので、鋸製作のために集落に持ち込まれた素材の板とみることができる。長さ73.5cm、幅16.2cmを測り、大きさの点でも鋸の素材としてふさわしい。出土地点は1067 N Rであり、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が集中する区域に当たる。1897もみかん割り材であるが、樹種がクリであることから、建築部材の素材の可能性がある。

このような材が出土するということは、割板を製品へ加工するような施設が集落内にあったとみるべきであろう。出土地点が発掘区南半の弥生土器・土師器集中区域に偏るのは偶然とは思えず、そのような施設が営まれた時期が限定されることを示唆すると捉えるべきであろう。

(33) 割板残材 461・902・1900・1901

小型の木片である461・902・1900は、一見、次に述べる端材と見分けが付きにくいが、厚み調整や面加工の不十分な状態の割板の一端を切り落としたものである。割板を製品の板に加工する段階で生じたものと捉えることができる⁵⁰⁾。本書ではそれらを製品の切れ端である端材と区別するため、割板残材と呼ぶこととする。4個体図示した。

902・1900は丸木の曲面を残しており、321SDで出土した461は表面と左側面の形状が整っていない。同様に、不定形の薄板1901は、あるいは製品を壊したものかもしれないが、やはり、割板を製品の板に加工する段階で厚み調整のために剥ぎ取られた木片の可能性があると考える。そうした推測が妥当であるなら、これも集落における製品への加工施設の存在を示唆する遺物ということとなる。ただし、当発掘区では同様の木片が多量に出土しているわけではない。

なお、割板残材の出土区域には、割板の場合ほど顕著な偏りは認められない。

(34) 端材 77・157～159・192・234・235・922・1902～1932

当発掘区では、以上のはかにも加工痕をとどめる小型の木片が多数出土している。それらの多くは、厚み調整や面加工を経た製品の板や角材などの一端を、使用に先立って、長さ調整のために切り落としたことにより生じたものである⁵¹⁾。それらを端材と呼ぶ。39個体図示した。

出土した端材には、建築部材由来とみられるものと、器具ないしは器具部材由来とみられるものが混在する。不要と判断され廃棄された端部という端材の特性上、どちらとも判別不能なものが過半数を占めるため全個体を分類することは行わないが、234・1908・1910・1916のような厚みがあり加工が粗いものは前者、922・1904・1931のような小型で加工の丁寧なものは後者であろう。なお、いずれにおいても、樹種はヒノキが圧倒的多数を占める。

注目したいのは、割板の場合とは分布状況が大幅に異なり、建築部材由来か否かを問わず、出土地点が須恵器・灰釉陶器集中区域に偏り、弥生土器・土師器集中区域ではほとんど出土していないことである。この問題については、第5章において再び取り上げることとする。

取り立てて特徴的な個体というものは少ないが、特異な加工が認められるものに1927がある。これは蟻穴を設けた角材の一端を長さ調節のため切り取った残りであり、上端面には鋸によるとみられる切断痕が認められる。

(35) 分類不能木器 1933

以上の分類のいづれとも判定し難い木質遺物を一括する。具体的には、細かく砕けていて本来の形状が判明しない器具・部材や、加工痕や使用痕の有無が読み取れず自然木と見分けが付かない木片などである。代表例として1個体のみ掲載した。1933は、腐食が進むとともに細かく砕けているために加工範囲を読み取るのは困難であり、さらには、本来の形状を推定することも不可能である。

なお、これは人為的な加工が認められる例であるが、当発掘区の木器類の中には、全くの自然木と見分けのつかない木片も相当数含まれることを付言しておく。しかし、それらの中に、製材前の伐採木のようなものは見当たらないことから、調査範囲とその周辺区域には、伐採木を割って割板に加工する大規模な製材所のような施設は設けられていないかったと考えてよいであろう。

3 石器類

石器類は、接合前破片数で数えて738点、接合後個体数では730個体確認した。ただし、このうち半数を超える398点は剥片類と石核である。剥片類と石核を除き、確認した器種は、石鎌・石錐・スクレイパー・楔形石器・石匙・打製石斧・磨製石斧・磨製石鎌・石包丁・石冠・石錐・垂飾・紡錘車・異形石棒・砥石・磨石類、以上であるが、そのほか器種を特定できないものが4個体ある。第34表に石材別に分類した一覧を掲げる³⁶⁾。なお、石材の判定は、主として肉眼観察によるものである³⁷⁾。

器種別では、156個体を数える打製石斧が最も多い。そのほかの器種では、砥石が34個体と比較的多いことに注目すべきであろう。使用された石材については、当地域の通例とはやや異なり、下呂石の優位があまり目立たず、黒曜石と凝灰岩が比較的多い点が特徴的である。磨石類と大型の打製石斧では、当発掘区付近の汎濫原で最も容易に採取できる石材である濃飛流紋岩を用いる傾向が顕著である。時代別では、縄文時代に属するものが大半を占めるとみられるが、弥生時代の磨製石鎌（907）、石包丁（2016）、大型蛤刃磨製石斧（2010・2011）も出土しているほか、打製石斧にも弥生時代以降に属する可能性の高い大型品が含まれる。また、砥石の多くは、隣接する当遺跡B地区で確認した鍛冶関連遺構に関わる古代の遺物とみられる。131個体図示した。

石鎌 24・261～263・402・1934～1958

鋭利な先端部を作り出した石器のうち、矢柄の先端に装着しての使用を想定されるものを石鎌とした。35個体確認した。図示したのは、このうち30個体である。

全35個体について、まず、茎の有無により無茎鎌と有茎族に大別すると、分類不能の欠損品4個体を除いた31個体中、無茎鎌が23個体を占めるのに対し、有茎鎌は8個体にとどまる。次いで、基部の

第34表 石器類の器種別石材一覧

器種	石材	下呂石	チャート	凝灰岩	黒曜石	玉髓	流紋岩	緑色片岩	砂岩	蛇紋岩	泥岩	濃飛流紋岩	粘板岩	緑色凝灰岩	石英安山岩	花崗斑岩	不明	合計
石鎌		20	8	1	5	1												35
石錐		3	2		1													6
スクレイパー		6	14		6	1												27
楔形石器		2	2															4
石匙			1															1
打製石斧				93				42	2		3	16						156
磨製石斧				7							4			1				12
磨製石鎌													1					1
石包丁													1					1
石冠			1					1										2
石錐												1						1
垂飾			1															1
紡錘車			2															2
異形石棒			1															1
砥石			12				3		9		7		1					23
磨石類		13							2			24		3	2			44
剥片類		166	64		152	12											2	396
石核			1		1													2
不明石製品				1								1	1					1
合計		197	92	132	164	15	3	43	13	4	11	41	4	1	3	2	5	730

第35表 石器類出土地点一覧 (1)

第36表 石器類出土地点一覧（2）

出土 地點	ダリ ツア 細 分	局 位	石 器	石 器	ス タ レ イ バ ー	椭 形 石 器	石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 製 石 器	石 包 丁	石 冠	石 锤	兼 用	纺 锤	磨 石 棒	剥 片	石 核	不明 石 製品	合 計	
7ス	NW	III								1											1
	SE	II																			2
8ケ	SE	III																			1
8コ	SE	II																			1
	NE	II																			1
8サ	SE	II								1										1	
	SW	II																			1
8シ	NE	II																			1
	SW	II	1																	1	2
9サ	NE	II																			1
	SE	II																			1
9シ	SW	III																			1
9ゾ	NE	III				1															1
10ス	NW	I																		3	3
11シ	NE	I			1																1
11ス	SW	III																		1	
11セ	SW	YH																		1	
	II																			1	
11ゾ	NE	III																		1	
	YH		1																	1	
	III									1										1	
	NW	YH								1										2	
	SW	YH																		1	
12ス	SE	III																		1	
	SW	I							1											1	
12セ	SE	YH		1															5	6	
	SW	I	1																	1	
12ゾ	NE	III							1											1	
	YH				3				8							1	3	6	21		
12ゾ	III								1											1	
	NW	YH	2						2							1	2	3	10		
	SE	YH							1										1		
	SW	YH	1	1	1				1								1	3	7		
12タ	NW	YH			1				1											2	
13ス	SE	I																		1	
	SW	I																		1	
13セ	I																			1	
	NW	II																		1	
	SE	KDT							2											4	
	SW	I																		4	
13ゾ	NE	YH																		2	
	NW	YH							1											3	
	SE	YH							1								1	3		5	
	SW	YH	2						1								1	2		18	
13タ	NE	YT																		1	
	NW	YH															1	1		2	
	NW	YT							1											1	
14セ	NW	I																		1	
	II																2			2	
	SE	-															1			1	
	SW	III															1			1	
	SW	KDT							1								2			3	
14ゾ	NE	KDT							1								1	2		4	
	YH		1						1								1	8		11	
	NW	KDT							1								12	1		17	
	SE	YH							1	2							2			5	
	SW	YH							1	2							5			8	

第37表 石器類出土地点一覧（3）

出土地点	グリッド緯分	層位	石頭	石錐	スクレイパー	楔形石器	石芯	打製石斧	磨製石器	石包丁	石冠	石錐	垂錐	彷彌車	翼形石棒	砾石	廢石桶	剥片類	石核	不明石製品	合計
14タ	NE	III							1									1			2
	YH																	3			4
	NW	YH																1			1
	SW	KT						1													1
14ナ	TT																	1			1
	NW	-																1			1
15セ	NE	I																1			1
	III							1										2			4
	I																	1			1
	SE	II		1														2			3
	-																	1			1
	SW	III						2										6			8
15ゾ	KDT																	1			2
	NE	-																1			1
	NW	YH						3										3			6
	SE	YH																1			1
15タ	SW	KDT																1			1
	NE	YH																1			2
	YH	TT						1										1			1
	NW	YH						1										2			3
15ナ	TT																	1			2
	NW	YH																1			1
16セ	SE	YH	II															3			4
	SW	KDT																1	4		5
16ゾ	NE	III																1			1
	KDT	II																2			3
	YH																	1			1
	I																	3			3
	NW	KDT			1	1												7			9
	KT				2																2
	KT II																	1	2		3
	KDT																	3			1
	KT						1											1			2
	KT II						2														2
16タ	KDT	II																5			6
	KT																	15			15
	YH																				1
	III																	2			2
	KT							2													2
	YH							1													1
17ゾ	NW	KT II																1	4		4
	SE	I																1			1
	KT		II															1			1
	KT II																	3			3
	KDT																	20			28
	KT							1										6			7
	KT II																	1			1
	I																	1			1
	KT																	4			10
	KT II																	9			9
SW	KDT																	2			2

第38表 石器類出土地点一覧（4）

出土地点	グリッド番号	局位	石器	石器	スタイルバー	梯形石器	石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石器	石包丁	石冠	石錐	兼飾	結縛車	圓形石棒	砥石	磨石類	剥片類	石核	不明石製品	合計			
17タ	NE	KT															1	1				2			
		KTH						3											1			4			
		KDT																	3			3			
	NW	KT																	1			1			
		KTH	1					1												1		2			
		SE	KT					1														1			
	SW	KDT							1										1			2			
		KT																					2		
17チ	NW	KT																	1			1			
	SW	KT							1														1		
18ゾ	SE	KDT	2					1	1										2			6			
	SW	KDT							2										1			3			
18タ	I																		2			2			
	NE	KDT			1		3	1										2	5			12			
		KT	1																			1			
	NW	KDT							3										1			4			
18チ	SE	KDT																	2			2			
	NE	KT							2										1			4			
	NW	KDT																	3			3			
19タ	SW	KT															1			1		2			
	SE	I							1										2			3			
		KDT																	6			6			
	I			1	1														2			4			
19チ	NE	KDT							3										2			5			
		KT																				1			
	I																	1	4			6			
	NW	KDT	1															1	2			4			
	KDT	1																	3			4			
	SE	KT					1		1										14			16			
20チ	SW	KDT														1			1	2		4			
	I																		1			1			
	NE	KDT							1										1			2			
	NW	I																	1			1			
20ゾ	SE	KDT		1														1	3			5			
	SW	KDT	1															1				2			
	NE	KT																				1			
21チ	NW	KDT			1														1			3			
	KT																		1			1			
	KDT					1													1			1			
21ゾ	NE	KT																	1			2			
	KT																		1			1			
12年度試掘坑3	-	-																	1			1			
12年度試掘坑4	-	-																	1	4		5			
12年度試掘坑8	-	-				1		2										1	1	1		6			
12年度試掘坑12	-	-																	3			3			
12年度試掘坑13	-	-																	2			2			
12年度試掘坑15	-	-																	3			3			
12年度試掘坑17	-	-																		1		1			
12年度試掘坑18	-	-							1										2			3			
北東斜土壠出区	-	-		2					1									1	2			6			
13年度試掘坑25	-	-																	1			1			
13年度試掘坑27	-	-							1													1			
16年度試掘坑	-	-							1									1			2				
不明	-	-				4	2											1	2		1	10			
合計						35	6	27	4	1	161	12	1	1	2	1	1	3	1	36	44	396	2	4	738

形状に着目して分類すると、凹基無茎縫21個体、平基無茎縫2個体、凹基有茎縫5個体、平基有茎縫1個体、凸基有茎縫2個体となる^{⑨1}。石材については第34表のとおりであり、下呂石を主体としつつもチャート・黒曜石なども用いるという当地域の全般的傾向と軌を一にしているものの、黒曜石の占める割合が比較的高いと言える。なお、形状と石材との間に、特に相関関係は認められない。

石錐 1959～1961

先端が尖り、穿孔用工具としての使用が想定される石器を石錐とした。6個体確認し、うち3個体を図示した。全6個体中、摘み状の頭部を持つのは1959のみである。残る5個体の内訳は、不定形な剥片の一端に加工を施して錐部を作り出したもの2個体、頭部を持たず棒状のもの2個体、頭部を欠失するもの1個体である。

スクレイパー 89・1964～1968

素材剥片の縁辺部に連続する剥離を施して刃部を作り出した不定形の石器をまとめた。ただし、原則として剥離の範囲が一边の2分の1に達しないものについては、本書では剥片に分類している。

27個体をここに分類し、うち6個体を図示した。全27個体中、チャートが14個体、黒曜石が6個体を占めており、いざれも他器種に比べ目立って高率である。

楔形石器 1963

相対する二側縁に向き合う方向の剥離を施した石器を楔形石器とした。4個体をここに分類したが、図示した1963以外の3個体は、楔形石器とみてよいか判断に迷う不定形な個体である。1963の石材はチャートである。

石匙 1962

縁辺部に連続した剥離を施して刃部を作り出した石器のうち、摘み状の突起を作り出したものを石匙とした。確認個体は、図示した1962のみである。1962の石材はチャートである。

打製石斧 30・80・193・264・620・819・831・832・861・862・904～906・936・1969～2009

主に土掘り具としての使用が想定される斧形の打製石器を打製石斧とした。石器類の中では最も多く出土した器種である。156個体確認し、うち55個体を図示した。石器類全器種中、打製石斧の出土数が突出するのは、隣接する当遺跡B地区でも認められた現象である^{⑨2}。ただし、当発掘区における確認数は、B地区の確認数のほぼ3倍に達しており、他器種にも増して両地区間での差が大きい。

当発掘区で出土した打製石斧の特徴として、縄文時代に土掘り具として使用されたとされる通常サイズの個体のほかに、2002・2003・2007～2009のような濃飛流紋岩製の大型品が含まれることを挙げてよいであろう。それらの中には、2007～2009のように刃部に土擦れ痕と判断される顕著な平滑化部分を持つものがあることから、やはり土掘り具としての使用が想定される。しかし、通常の打製石斧とは、大きさ、形状、それに石材の選択に大きな隔たりが認められることから、それらとは帰属時代を異にし、信州・北陸などに類例のある弥生時代以降の土掘り具の可能性が高いと考える^{⑨3}。

磨製石斧 2010～2013

研磨により仕上げられた斧形の石器を磨製石斧とした。12個体確認し、うち4個体を図示した。砕けた状態で出土したものが多く、全12個体中、完形品と言えるのは2013のみである。縄文時代に属するものが多いとみられるが、2010と2011は弥生時代の太型蛤刀石斧である。2010は特に重量感があり、残存部分だけでも1,120.8gを測る。

当地域では、磨製石斧では主に蛇紋岩を用いることを通例とするが⁶¹⁾、当遺跡の出土品では蛇紋岩より凝灰岩の方が優勢である。なお、2011の石材については凝灰岩としておいたが、能登地方で縄文後期以降に用例のある硬質砂岩の可能性もある⁶²⁾。

磨製石鏃 907

研磨により仕上げられた鏃形の石器を磨製石鏃とした。唯一の確認個体である907は、基部付近に1孔を穿った有孔磨製石鏃である。有孔磨製石鏃は信州地域の弥生時代遺跡に特徴的な石器であることから、信州地域からの搬入品とみられる⁶³⁾。石材は粘板岩である。1067N Rで出土した。

なお、飛騨地域では、磨製石鏃は21箇所で24個体が確認されているとされる⁶⁴⁾。

石包丁 2016

刃部を持つ扁平な石器で、弥生時代の穂摘み具と想定されるものを石包丁とした。1個体のみ確認した。2016は平面形が三日月形をなす内擣刃の磨製石包丁である。ただし、刃部は摩滅が著しく、本来の形状をとどめていない可能性がある。上端付近の中央に2孔が穿たれている。石材は粘板岩である。出土地点は発掘区南西端に近い20ツグリッドである。

当遺跡ではB地区でも内擣刃の石包丁が出土している⁶⁵⁾。なお、飛騨地域において、当遺跡以外での確認例は高山市域の5例のみとされる⁶⁶⁾。

石冠 908・2018

冠状の形状を呈する用途不明の磨製石器を石冠とした。908は下半の多くを欠くものの、球頭状の頭部を持つ石冠とみられる。石材は緑色片岩である。1067N Rで出土した。2018は突出する頭部を持たない石冠で、横断面は均整のとれた二等辺三角形を呈する。左端面に敲打痕が認められる。石材は凝灰岩である。

石錘 950

主に漁網錘としての使用が想定される石器を石錘とした。1303S Kで出土した950は、上端と下端に打ち欠きを施した打欠石錘である。重さ58.2gを測る。石材は濃飛流紋岩である。今回の調査で確認した石錘は、この1個体のみである。

垂飾 2017

吊り下げて使用したとみられる石製装飾品を垂飾とした。確認したのは2017のみである。中央付近に認められる穿孔は、表裏両面から施されている。重さ7.2gを測る。軟質の凝灰岩製であり、特に質の良い石材を選んでいるわけではない。

紡錘車 2014・2015

糸を紡ぐのに使用したはずみ車を紡錘車とした。確実ではないものも含め、2個体（破片数では3点）出土した。2015は扁平な円盤状で、中央に表裏両面からの穿孔による円孔を備える。凝灰岩製で、重さ66.1gを測る。2014は周縁の一部を欠く。中央とその脇の2箇所に円孔を備えており、紡錘車と捉えてよいものか、確証はない。石材は凝灰岩である。残存部分の重さ24.1gを測る。

異形石棒 160

160は男性性器を写実的に表現した石製品である。全面に加工痕が認められるが、これは金属器によるものである可能性が高い。石材は軟質の凝灰岩である。古代水田跡1255S Tの覆土から出土したが、帰属時代については不明である。

砥石 161・265・560・600・601・863・909・2019～2030

物を研ぎ磨くのに使用した石器を砥石とした。34個体（破片数で36点）確認した。比較的の残存状態の良いものから19個体を選び、図示した。2021など大型品では砂岩、2029など中型品では泥岩、そして、265など小型品では凝灰岩を用いる傾向が認められる。

隣接する当遺跡B地区では、古代の鍛冶作業に関連する遺構・遺物を多数確認しており、当発掘区の砥石の多くも、それらと関わりのある遺物とみられる。石器類の他器種に比べ、出土地点が須恵器・灰釉陶器集中区域に偏る傾向が認められるのも、偶然ではないであろう。

磨石類 2031

球状ないし円盤状を呈し、使用痕としての窪みや敲打痕、磨痕、擦痕などが認められる石器を一括した。一般的な分類での磨石・敲石・石皿などが含まれる。確認した44個体中、濃飛流紋岩製のものが24個体を占める。

やや特異な1個体のみ図示した。2031は横断面が不整な五角形を呈する。また、主に面の境付近に多数の敲打痕が認められる。石材については、飛騨地城で石棒に用いる「^{しづか}塙屋石」（黒雲母流紋岩質溶結凝灰岩）に似ているものの、黒雲母の含有が顕著ではないことから凝灰岩と判断される⁶⁷⁾。とりあえず縄文時代の磨石と考えておくが、より新しい時代に属する砥石の可能性もある。

剥片類

剥片剥離や調整剥離により生じた石片を一括した。調整剥離を施したもの（R F）や縁辺に微細な剥離を施したもの（U F）についても特に区別せず、ここに含めた。

図示してはいないが、破片数で数えて396点確認している。当地域では最も優位を占めるのを通例とする下呂石が半数に満たぬ166点にとどまる一方で、黒曜石が152点に達しているのが注目される。

石核

剥片を剥離した残骸を石核とした。図示してはいないが、確認したのはチャートと玉髓が1点ずつ、計2点のみである。

不明石製品 2032・2033

以上のほか、器種の特定に至らなかつたものが4個体ある。うち2個体を図示した。

2032は長さ2.4cmを測る円柱状の石製品である。両端が摩滅して円錐状となっていることから、文字などを記すのに使われた近代以降の器具の可能性がある。

2033は円孔を1つ持つものの貫通しておらず、全体形状も整っていないことから、未製品とみられる。石材は粘板岩であるが、形状から磨製石鏃となるとは考え難く、むしろ垂飾の可能性を考えるべきであろう。

4 金属器類

破片数で32点確認した。明らかに近代以降の製品とみなされるものと、用途を特定できる残存状態ではないものを除き、16個体図示した。銅鏡2034・銅鈴774・耳環2035については、第4章第4節において成分分析結果を詳述しているので参照されたい。

銅鏡 2034

1個体のみ出土した。2034は凹基式の有茎鏡である。成分分析の結果、青銅製であることが判明した。

12ソグリッドのYH層から出土したものであるが、同グリッドの同層では弥生土器や古式土師器が多数出土しており、形態の特徴と併せ考え、弥生時代の製品とみてよいであろう⁶⁸⁾。

銅鉈 774

1個体のみ出土した。774はほぼ完形の鉈である。上半と下半を接合して作られており、鉈の部分は本体に差し込まれたのち、接着されている。接着に当たっては、いわゆる「ろう付け」の技法が用いられた可能性がある。成分分析の結果、銅製であることが判明した。部分的に認められる黒色付着物については金属ではないことが判明したため、漆膜の可能性が高い。

須恵器・灰釉陶器が多数出土した1061S Dからの出土品であり、古代の製品である可能性が高いと思われる⁶⁹⁾。

耳環 2035

1個体のみ出土した。2035は径1.9cmを測る小型の耳環である。成分分析の結果、銅製であることが判明したほか、鍍金・鍍銀や金銀箔張りなどは施されていないことも明らかとなった。出土地点の16セグリッドのKDT層は、弥生土器ないし土師器が優勢ではあるものの、須恵器・灰釉陶器も混在するため、帰属時期については明言し難い。

古銭 79・2036～2045

12個体確認した。いずれも銅銭である。ほとんどの個体は須恵器・灰釉陶器集中区域で出土している。判別可能な11個体を図示した。

2036は「乾元重宝」(759年初鋤)で、これのみ唐銭である。79・2040は「聖宋元宝」(1101年初鋤)、2037は「紹聖元宝」(1094年初鋤)、2038は「至和元宝」(1054年初鋤)、2039は「熙寧元宝」(1068年初鋤)、2041は「元符通宝」(1098年初鋤)で、以上6個体は北宋銭である。近隣遺跡における報告例を調べてみると、これらのうち「紹聖元宝」のみは、当遺跡D地区と三枝城跡でも1個体ずつ出土している⁷⁰⁾。2042～2045は、江戸時代の「寛永通宝」である。

小柄 2046・2047

平成12年度の試掘・確認調査時に試掘坑11(17チグリッド)において、2個体の小柄が出土した。いずれも柄の部分の残存状態は良好で、金色の輝きを保っている。蛍光X線分析の結果、いずれも主成分として銅と亜鉛が検出され、真鍮製であることが判明した⁷¹⁾。鉄製の刃身の大部分は欠失しているものの、柄に納められた茎の部分は残存していることがX線写真により明らかとなっている。ただし、銘は認められない。

2046は表面に意匠が施された小柄である。図柄は、漁に使う網を三角錐状に干した姿を文様化した「網干文」と、竹などを円筒形に組んで碎石などを詰め込んで作った護岸を文様化した「蛇籠文」とみられる。これらは幅広のものと狭いものの2種類の繋ぎにより彫り込まれている。図柄の背景には、3つを1単位とする魚々子が打たれている。裏面と背には、斜め方向のヤスリ目が認められる。この個体はいくつかの点で、極めて珍しい小柄と評価できる。一般に小柄は、高彫り・色絵・象眼・細密魚々子などを駆使し、彫物師の手により製作される。しかし、2046では盤のみにより図柄が表現されており、象眼などの手法は用いられていない。また、魚々子は細かく均質に施されるのではなく、3つを横並びではなく三角形状にまとめた珍しい繋ぎにより、不均等に施されている。その結果、単に地文としてではなく意匠として施されているとの印象を受ける。以上から、2046は刀装具を作り慣れた彫物師に

より製品ではなく、飾金具製作を本業とする鎌師による製品とみることができる。

もう一つの小柄である2047は、2046に比べ小型であり、文様を施していない。同一地点で出土し、真鍮製である点も共通することから、2046とともに使われた製品と捉えて違和感はない。あるいは小の刀に対応するセットなのかもしれない。ただし、一般に小柄はセットで使われるのを例とするわけではないことに注意を要する。

2046は類例をみない個体であり、2047は特徴に乏しいため、これら2個体の製作年代について明言するのは難しい。しかし、まず材質面では、近年、夏見城遺跡（滋賀県湖南市）で出土した真鍮製毛抜き⁷²⁾を根拠に、真鍮製品の使用開始時期を16世紀前半にまで遡らせる説が有力となっていることに注目したい。したがって、これまで不明確であった真鍮製品の本格的普及時期については、美術史区分での桃山時代（1573～1615年）ないし江戸時代初期頃とみることが妥当と思われる。次に寸法に注目すると、小柄の長さが三寸一分～二分（約9.5cm）、幅が四分五厘（約1.4cm）の規格に落ち着くのは16世紀後半のこととされるが⁷³⁾、2046はほぼこの大きさで作られており、規格定着後の製品とみなされる。さらに意匠面では、「網干文」と「蛇籠文」は平安時代から存在する古典意匠ではあるものの、特に室町時代と江戸時代中後期に復古的に流行したことが知られており、2046に施されたものは江戸時代のものよりは室町時代のものに印象が近いことも手掛かりとなろう。以上から総合的に判断し、これら2個体の小柄については、桃山時代から江戸時代初期、すなわち16世紀後葉から17世紀前半を前後する時期に製作された可能性を考えておきたい⁷⁴⁾。

当該区域において、このような特異な製品が出土した理由は不明である。試掘・確認調査においても本発掘調査においても、出土地点とその周辺からは、中世ないし近世に属する遺物はほとんど出土していない。古墳時代に遡るとみられる水田跡を除けば遺構を検出していない区域に当たり、墓や城館の存在などが確認されているわけでもない。当遺跡の北隣りに位置する三枝城跡に隣接する遺物の可能性は排除できないものの、三枝城跡発掘調査では城内から戦国時代以降の遺物は稀にしか出土しておりらず⁷⁵⁾、関連性を強く主張することはためらわれる。

5 鎌冶関連遺物

鉄滓37点、羽口9点を確認した。当発掘区内では鎌冶関連遺構は確認されていないが、隣接する当遺跡B地区では20基もの鎌冶関連遺構が検出され、多数の鎌冶関連遺物が出土していることから、それらはB地区からの流れ込み品であろう。残存状態の良いものから2個体ずつを選び、図示した。

羽口 81・2048

最も残存状態の良い羽口である2048の本来の形状は、外径8.8cm前後、内径2.4cm前後の円筒形と推定される。1253S T覆土から出土した81は、それより薄手の作りで、外径8.0cm前後となるとみられる。いずれも先端付近に鉄滓が付着している。

鉄滓 162・266

1250S Mから出土した266は、出土した鉄滓の中で最も大振りな部類に入る個体であり、69.8gを測る。下面が緩やかな曲面を呈していることから、楕円形鉄滓とみられる。1255S T覆土から出土した162は、より多くの鉄分を含んでおり、小振りながら62.4gを測る。

6 その他 163・164・549・602・621・773・2049・2050

古代の瓦の破片を22点確認した。内訳は、平瓦18点、丸瓦4点である。ただし、平瓦に分類したものの中には通常より厚みを持つ破片が含まれ、それらには軒平瓦の平瓦部となる可能性もある。なお、出土地点が須恵器・灰釉陶器出土区域に偏る傾向が顕著である。

遺構内出土品から比較的の残存状態の良い6個体を選び、図示した。549のみ丸瓦である。凹面には布目を残しているものの、凸面には残存部分の全面にナデ調整を施しているため、叩き痕は認められない。163・164・602・621・773は平瓦であるが、凹面に布目、凸面に縄目状の叩き痕を残すのを基本とする。ただし、凹面については、773以外の個体では調整を加えて布目を擦り消した部分が認められる。

軒丸瓦・軒平瓦の瓦当部分が出土していないため定かでないとはいえ、出土した平瓦・丸瓦全体を見渡す限りでは、飛驒国分寺と飛驒国分尼寺、及びそれらへの供給元である赤保木1～4号古窯跡で出土した瓦に比べて違和感のあるものはない。赤保木1～4号古窯跡は発掘区から南西に約1kmの近距離に位置しており、国分寺・国分尼寺のための瓦生産と当遺跡との関連性が注目されよう⁷⁶⁾。

平成12年度試掘坑18で出土した2049は、窯による焼成の際に製品を保護するための窯道具である匣鉢であろう。匣鉢は、当遺跡B地区でも1個体確認されている⁷⁷⁾。

2050は鼈甲製の櫛である。表面に笹を描いたとみられる文様を刻んでいる。発掘区北東端付近に当たる6キグリッドで出土した。江戸時代以降の製品であろう。

第3章 第4節 注

1) 本書では、濃尾平野土器編年における山中式及びそれと併行関係にある型式までを弥生土器と捉え、廻間口式以降を古墳時代の土器様式である土師器と捉える立場を踏襲している。なお、弥生土器と土師器の編年及び年代観については、主として以下の文献を参考にした。

①赤堀次郎編2002『考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』小学館

②加納俊介・石黒立人編2002『弥生土器の様式と編年—東海編—』木耳社

③財団法人大阪府文化財センター2006『古式土師器の年代学』

2) 砂行遺跡（閑市下有知）出土の鉢A類など。財団法人岐阜県文化財保護センター2000『砂行遺跡』第1分冊26頁などを参照されたい。

3) 内堀内式土器については、石川日出志1995「飛驒の弥生中期横羽状文甕」飛驒考古学会編『飛驒と考古学 飛驒考古学会20周年記念誌』、岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』に詳しい。

4) 当遺跡に近いウバガ平遺跡では、口縁部の残存する内堀内式土器の横羽状文甕8個体すべてで口縁端部刻目文を確認している。詳しく述べては岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』109～111頁を参照されたい。

5) 「縦方向の櫛摺文」と表現した施文については、本文でも記したように、美濃山間・内陸地域でみられる条痕文系甕の「櫛条痕」との関連を指摘することができる。しかし、美濃地域の例では器面の大半を覆い尽くすように施されるのに対し、当発掘区の出土品ではまばらに施されるものが多いため、「条痕」という表現はふさわしくないと判断した。なお、美濃地域の「櫛条痕」の甕については、財団法人岐阜県文化財保護センター2000『砂行遺跡』第2分冊53～62頁において詳述されているので、参照されたい。

6) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』所載の「高杯C」に相当するとみられる。このタイプの高杯は、廻

- 間II式期になると脚部が大型化し、底径が口径を上回るようになるとされる。
- 7) 北陸地方北東部における古墳時代初頭の土器様相を紹介した文献に、財団法人富山県文化振興財团2006『下老子塙川遺跡発掘調査報告』がある。
 - 8) 飛驒地域における台付鉢の出土例として、「弥生後期欠山期」の「高环形土器」として報告された薬師野遺跡(高山市江名子町第2号住居跡出土)の遺物1番(高山市教育委員会1981『薬師野遺跡発掘調査報告書』)、「弥生土器高环?」として報告された赤保木遺跡(高山市赤保木町)遺物719番(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』)、半田塚田C遺跡C9号住居跡出土の遺物2番(国府町史刊行委員会2007『国府町史 考古・指定文化財編』)を挙げることができる。
 - 9) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』所載の遺物260番。
 - 10) 白江式土器について詳細に論じた近年の論考に、次のものがある。

森本幹彦2005「古墳出現期における地域間関係－「白江式」の検討を中心として－」『東京大学考古学研究室研究紀要』第19号

11) 前掲注5) を参照のこと。

12) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』所載の遺物640・641番。

13) 藤ノ木遺跡出土土器類については、押井正行氏(高山市教育委員会)から御教示を賜った。なお、藤ノ木遺跡出土品には、口縁部の縱方向櫛描文と頸部の横方向櫛描文を確認できる個体は複数みられるものの、胴部の櫛描波状文の有無を確認できるほど状態の良い個体はみられない。

14) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』所載の甕A(遺物140・282番)が特に類似する。それらは古墳時代中期に盛行する胸状坏部低脚高环とともに出土している。なお、これに先行するとみられる土器器型がウバガ平遺跡の住居跡S B 1で出土しているが(岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』所載の遺物13・14番)、口頭部が屈曲せざ直線的である点が異なる。

15) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡 II』所載の遺物39・433・494・495番、財団法人岐阜県文化財保護センター2002『上ヶ平遺跡 II』所載の遺物117・118番など。

16) 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』所載の遺物108・109・113番など。

17) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』所載の遺物577・613・614番など。

18) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡 II』所載の遺物129・143番など。

19) 須恵器の分類と器種名。それに年代観については、原則として、東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』に示されたものに従った。

20) 本書では、口縁端部の形状が判明しない蓋については、ほぼ摘み蓋とみてよいと判断し、器種名を「摘み蓋?」としている。

21) 罩状摘みの例は、岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡 II』所載の遺物354・473番、仏塔状摘みの例は同書所載の遺物355番。

22) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』100~101頁など。

23) 東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』第1分冊222頁。

24) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』第2分冊201~202頁。

25) 中村浩1981『和泉陶器窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』柏書房。

26) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』所載の遺物255・423・589・1028番。

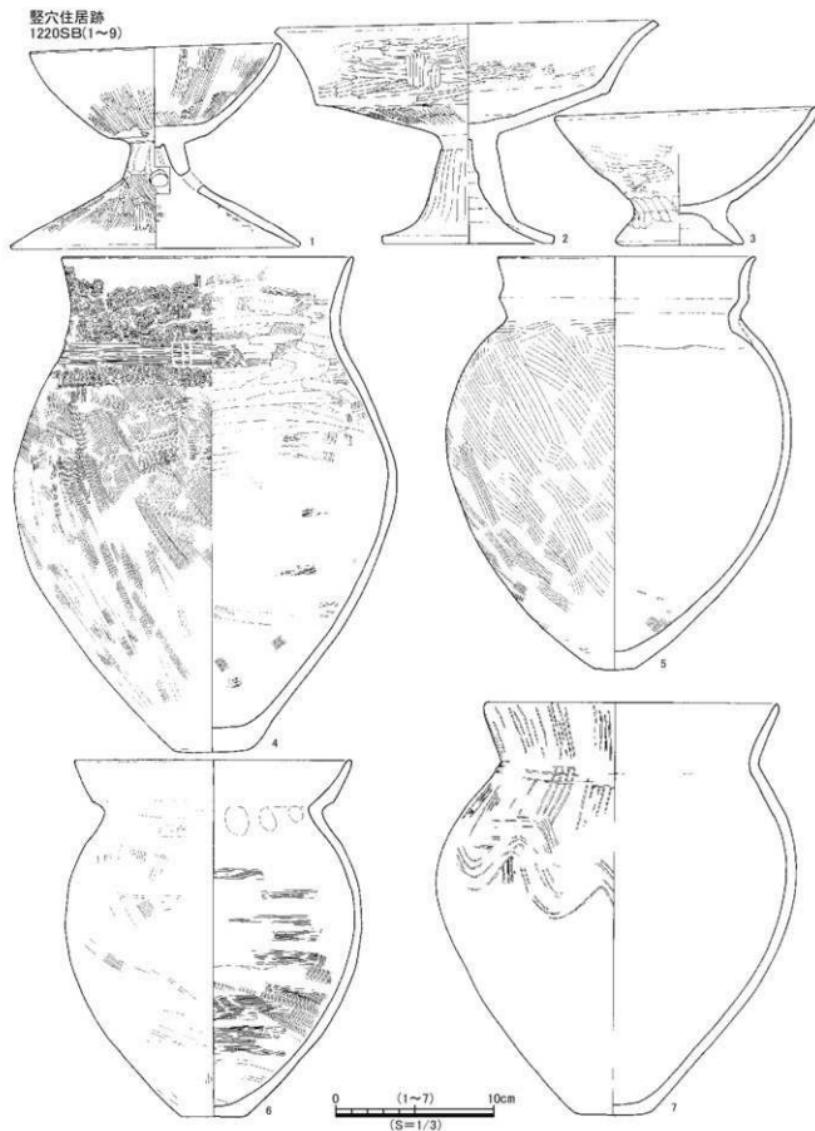
27) 当発掘区で出土した灰釉陶器については、在地窯をはじめ複数の産地の製品が混在する可能性があると思われるが、在地窯の調査が進展していない現状を考慮し、産地別に分類することは行っていない。年代観については、とりあえずの措置

ではあるが、最も普遍的な灰釉陶器編年である猿投窯編年を援用することとし、主に以下の文献を参照した。

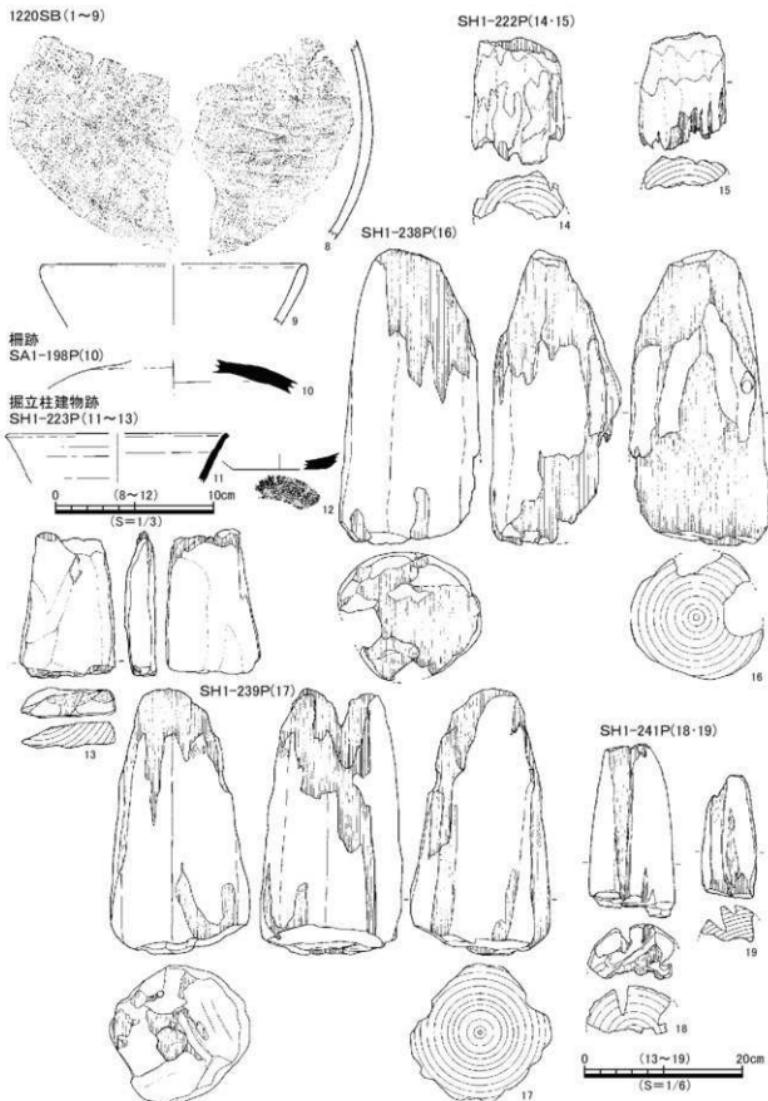
- ①齊藤孝正2000『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』至文堂
- ②愛知県史編さん委員会2010『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』
- 28) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』所載の遺物98・99番、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』第2分冊220頁。
- 29) 「井」は墨書き・ヘラ書きを問わず全国的に普遍的にみられるが、筆勢から漢字の「井」というよりは魔除け記号と判断されるケースが多いようである。高島英之2009『古代出土文字資料の研究』東京堂出版、274頁、平川南2000『墨書き土器の研究』吉川弘文館、296～302頁などを参照のこと。
- 30) 墨書き「海」「逢」は、B地区においても灰釉陶器に記された例ではなく、須恵器でも碗より环に記される傾向が認められる（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』第2分冊221頁など）。
- 31) 平川南氏による定義。平川南2000『墨書き土器の研究』吉川弘文館、13頁。
- 32) 遺物番号823のヘラ書き文字は欠損部分があるため判読できないが、「奉」の省略形の可能性がある。前掲31) 文献393～417頁を参照されたい。
- 33) 緑釉陶器については、古代の土器研究会1994『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』を参照したほか、尾野善裕氏（京都国立博物館）から御教示を賜った。
- 34) 山茶碗の編年と年代観については、藤澤良祐1994『山茶碗研究の現状と課題』『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号を参照した。
- 35) 珠洲焼については、以下の文献を参照した。また、三好清超氏（飛騨市教育委員会）から御教示を賜った。
 - ①珠洲市立珠洲焼資料館1989『珠洲の名陶』所収の「珠洲系陶器略編年図」
 - ②吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 36) 南洋一郎氏（福井県埋蔵文化財調査センター）の御教示による。
- 37) 常滑焼については、佐藤公保氏（愛知県教育委員会）、鈴木正貴氏（愛知県埋蔵文化財センター）から御教示を賜った。
- 38) 古瀬戸系施釉陶器については、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1996『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』を参照した。
- 39) 美濃須彌窯中世陶器については、財団法人岐阜県文化財保護センター2000『船山北古墳群・船山古窯跡群・船山北遺跡』などに報告例がある。
- 40) 第27表の作成に当たっては、株式会社パレオ・ラボから御教示を賜った。
- 41) 本文で報告した25個体のほかにも、鍍の可能性のある小破片は数点程度出土している。それらを含めても出土区域が発掘区南北に偏る傾向に変わりはない。
- 42) 黒崎直1996『日本の美術357 古代の農具』至文堂、41頁。
- 43) 本文で報告したもののほかに、細かく砕けた板状の木片の中に曲物底板の可能性のあるものが、さらに十数点程度みられる。
- 44) 光谷拓実氏（奈良文化財研究所）の御教示による。
- 45) 底板としたもののうち、特に中央部に円孔を穿つ258・1517・1518については蓋板の可能性があると言える。しかし、1517・1518に認められる側板との結合痕跡は、蓋としての使用にふさわしい特徴とは言えず、蒸し器などの底板の可能性をも視野に入れるべきであろう。
- 46) 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』、35～39頁など。
- 47) 秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104 下駄 神のはきもの』法政大学出版局、69～70頁。

- 48) 六大A遺跡（三重県多紀郡明和町）では下駄が多量に出土しており、古墳時代から古代にかけての型式学的な変遷を追うことができる。三重県埋蔵文化財センター2000『六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』によれば、連齒式の下駄は、歯と台との間に段を持つタイプから段を持たないタイプへ、という流れと、前歯・後歯ともに前後もしくは左右へ外開きにならるタイプから歯が直立するタイプへ、という2つの流れが複合しつつ、古墳時代から古代にかけて変化するとされている。なお、そのような古墳時代の下駄の特徴を備えた個体は、県内では曾根八千町遺跡（大垣市）で出土している（大垣市教育委員会1997『曾根八千町遺跡』所載の遺物286番）。
- 49) 下駄における焼け火箸穿孔については、これまでに知られている個体でもいくつか確認されている。主な例を挙げれば、前出の六大A遺跡では、前歯の片寄るタイプである1024番（古墳時代もしくは飛鳥時代以降）の前歯にみられ、『木器集成図録 近畿古代篇』所載の2312番（京都府古殿遺跡出土、12～13世紀）の前歯にもみられる。
- 50) 秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104 下駄 神のはきもの』法政大学出版局、275頁。
- 51) 財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センター2005『柿田遺跡』。
- 52) 財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』なお、同報告書における「燃えさし」が本書の火付け木に当たる。
- 53) 建築部材については、主に以下の文献を参照した。
- ①鳥取県埋蔵文化財センター2008『青谷上守地遺跡出土品調査研究報告3 建築部材（資料編）』
 - ②鳥取県埋蔵文化財センター2009『青谷上守地遺跡出土品調査研究報告4 建築部材（考察編）』
 - ③奈良文化財研究所2010『出土建築部材における調査方法についての研究報告』
- 54) ただし、当発掘区の出土品でも1778などにみられるように、建物の柱や梁・桁材などは板より面の調整などが粗くとも差し支えないため、それらから生じた端材を削板残材と判別することは困難と思われる。そのため、削板残材に分類した木片の中に建築部材の端材が混在する可能性はある。
- 55) 濁材の発生原因としては、製品の長さ調整のほか、既存の製品を別用途に再利用するための二次加工も考えられる。しかし、両者を見分けることは、事実上、不可能であるため、特に区別はしていない。
- 56) 第34表では接合箇個体数を示している。そのため、接合前破片数を示した「石器類出土地点一覧」（第35表～第38表）及び「出土地点別遺物破片数一覧表」（第39表～第52表）に比べ、打製石斧・劔鍤車・砥石の数に異同がある。
- 57) 石器類の石材については、主に若田修氏から御教示を賜った。
- 58) 石器の分類については、鈴木道之助1991『図録・石器入門事典（縦文）』柏書房、44頁を参照した。
- 59) 財團法人岐阜県文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』第1分冊30頁。野内遺跡B地区では、出土石器177個体中、打製石斧は54個体を数える。
- 60) 弥生時代以後の土掘り具については、馬場伸一郎氏（下呂市教育委員会）から御教示を賜った。また、財團法人富山県文化振興財团2004『黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡 発掘調査報告』において、その機能等について考察がなされている。
- 61) 例えば、ウバガ平遺跡では、出土した磨製石斧10個体中、蛇紋岩製のものが9個体を占める（岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』114頁）。
- 62) 久田正弘氏（財團法人石川県埋蔵文化財センター）の御教示による。
- 63) 壓磨石鐵について馬場伸一郎氏（下呂市教育委員会）から御教示を賜った。
- 64) 吉朝則富氏の研究による。国府町史刊行委員会2007『国府町史 考古・指定文化財編』106頁。
- 65) 財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』所載の遺物1230番。
- 66) 吉朝則富氏の研究による。高山市教育委員会1993『前平山陵遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』97頁、国府町史刊行委員会

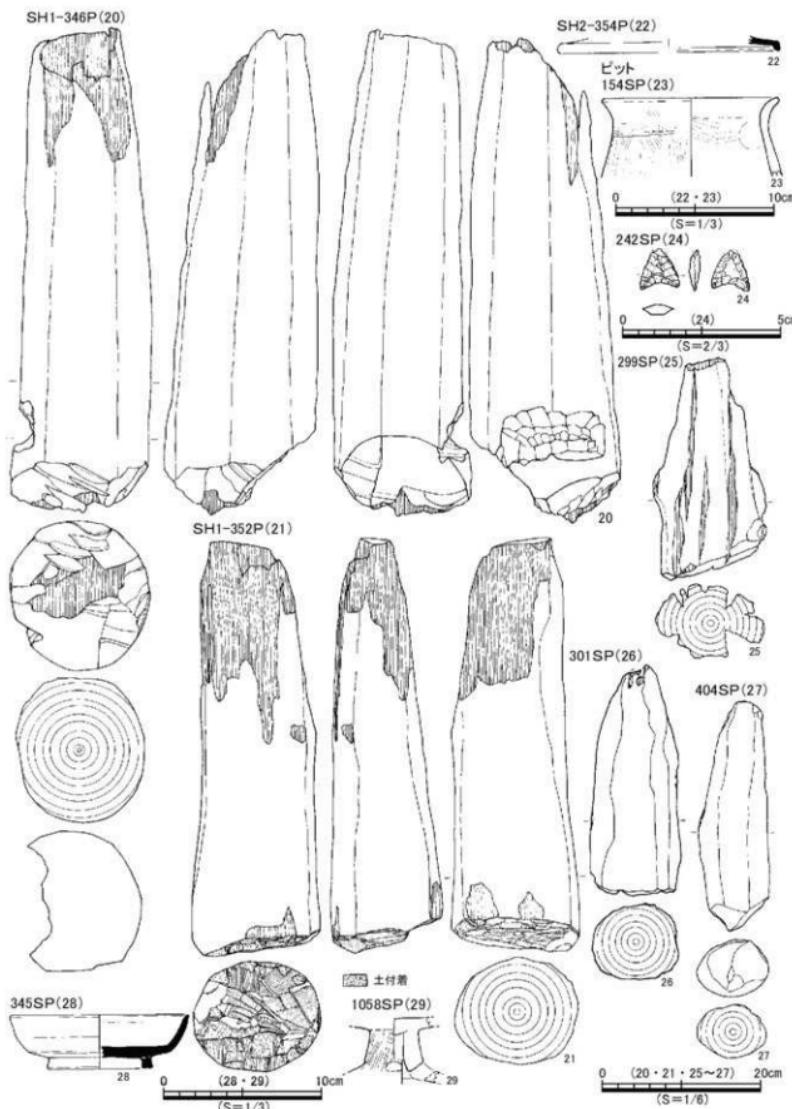
- 会2007『国府町史 考古・指定文化財編』108頁。
- 67)「塙屋石」については三好清超氏（飛騨市教育委員会）から御教示を賜った。
- 68)銅鑼については、田中勝弘1989「銅鑼」『季刊 考古学』第27号を参照した。また、庄瀬和雄氏（国立歴史民俗博物館）から御教示を賜った。
- 69)銅鏡については八賀晋氏から御教示を賜った。
- 70)財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』所蔵の遺物152番、岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』所蔵の遺物82番。
- 71)財団法人元興寺文化財研究所の分析による。
- 72)財団法人滋賀県文化財保護協会2011『夏見城遺跡』所蔵の遺物229番。この真鍮製品については、星真人2011「遺跡出土の化粧道具に関する覚書－夏見城遺跡出土の毛抜きから－」『財団法人滋賀県文化財保護協会紀要』第24号（－設立40周年記念号－）においても論じられている。
- 73)村上隆2007『金・銀・銅の日本史』岩波書店、102頁など。
- 74)以上の中柄2046・2047の記述に当たっては、久保智康氏（京都国立博物館）に資料を実見していただき、御教示を賜った。
- 75)高山市教育委員会1999『三枝城跡発掘調査報告書』及び、岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』。
- 76)飛騨国分寺、飛騨国分尼寺、赤保木1～4号古窯跡の出土瓦について、以下の文献を参照した。
- ①高山市教育委員会1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告』
- ②高山市教育委員会2001『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- ③高山市教育委員会2005『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 77)財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』所蔵の遺物53番。



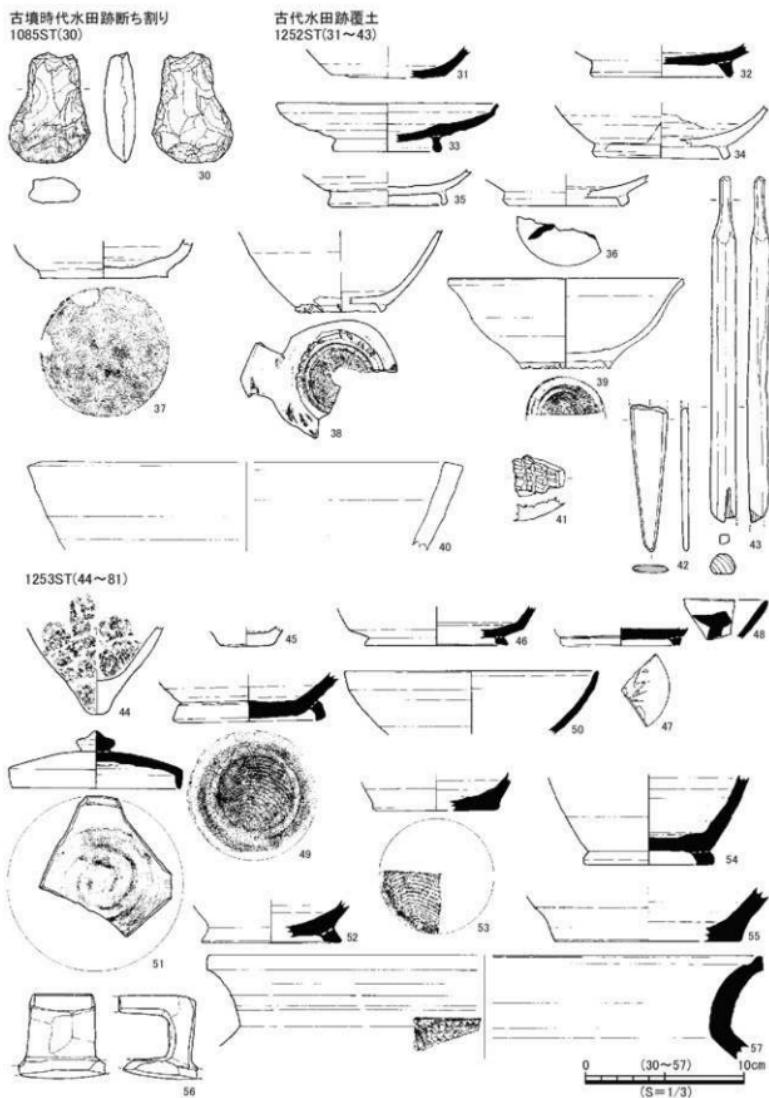
第110図 堅穴住居跡出土遺物（1）



第111図 積穴住居跡出土遺物（2）、柵跡出土遺物、掘立柱建物跡出土遺物（1）

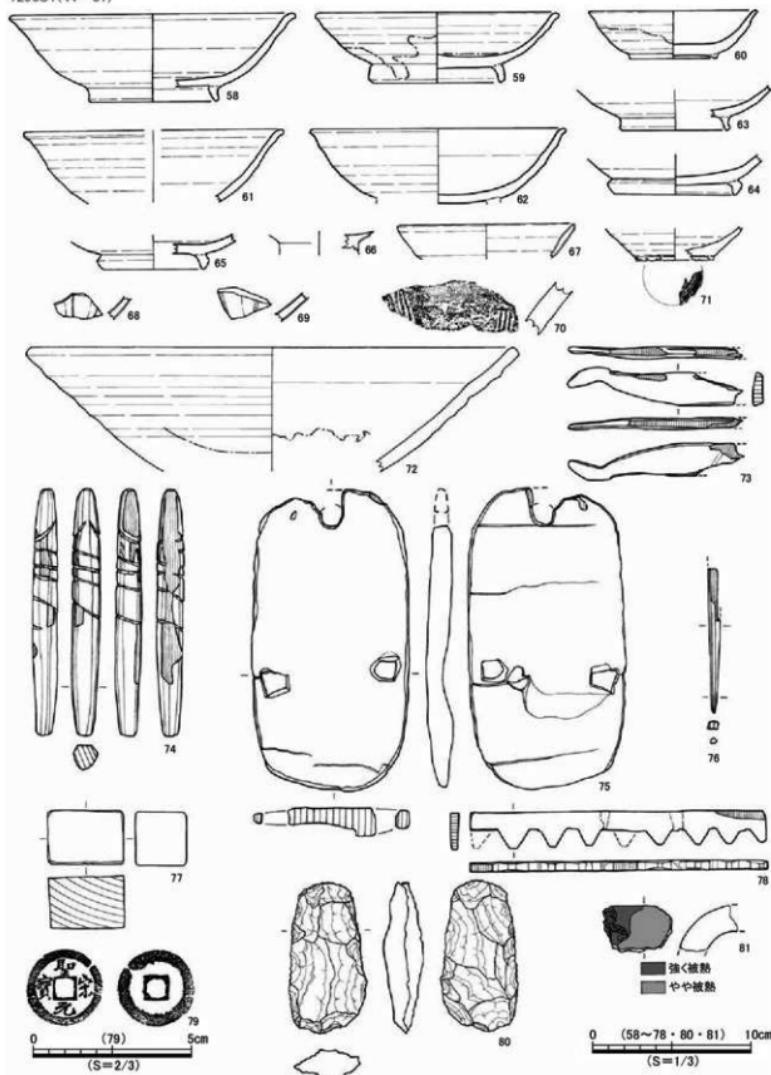


第112図 挖立柱建物跡出土遺物（2）、ビット出土遺物



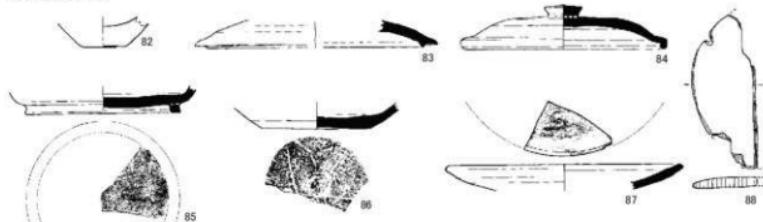
第113図 水田跡出土遺物（1）

1253ST(44~81)

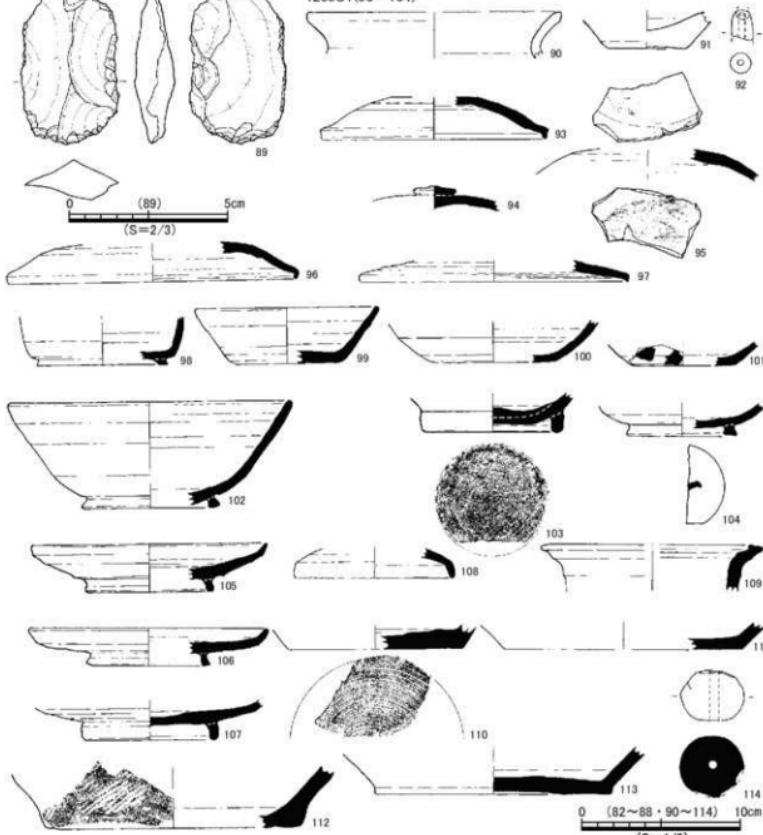


第114図 水田跡出土遺物（2）

1254ST(82~89)

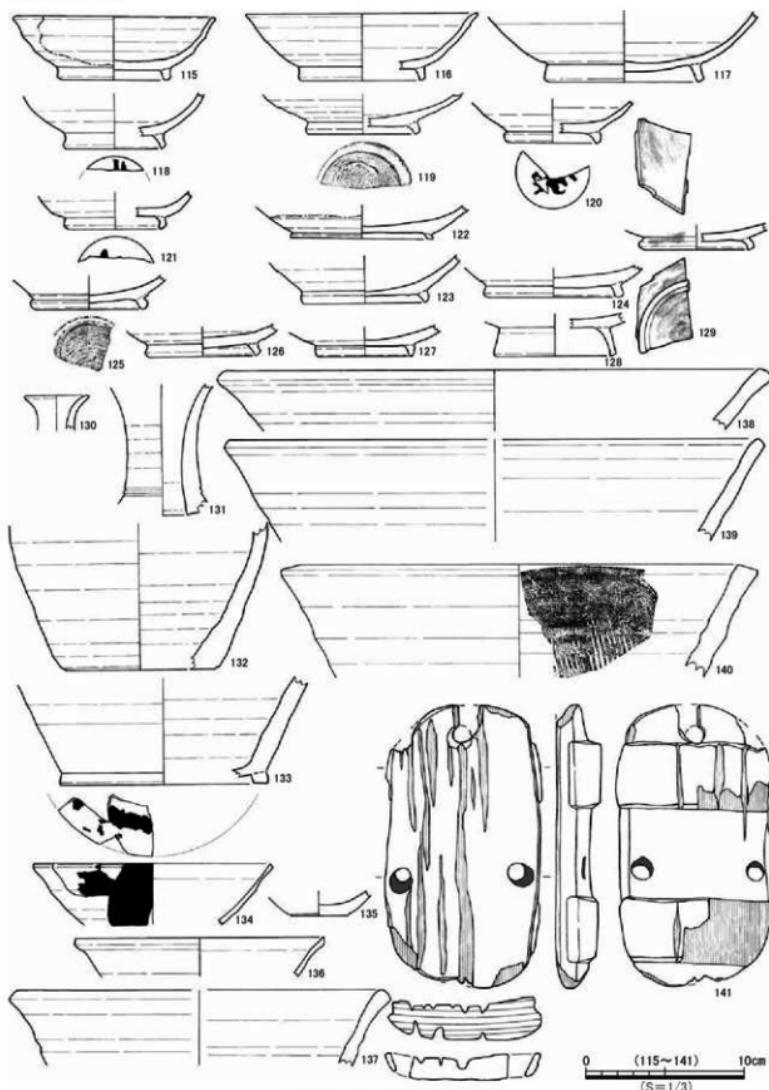


1255ST(90~164)

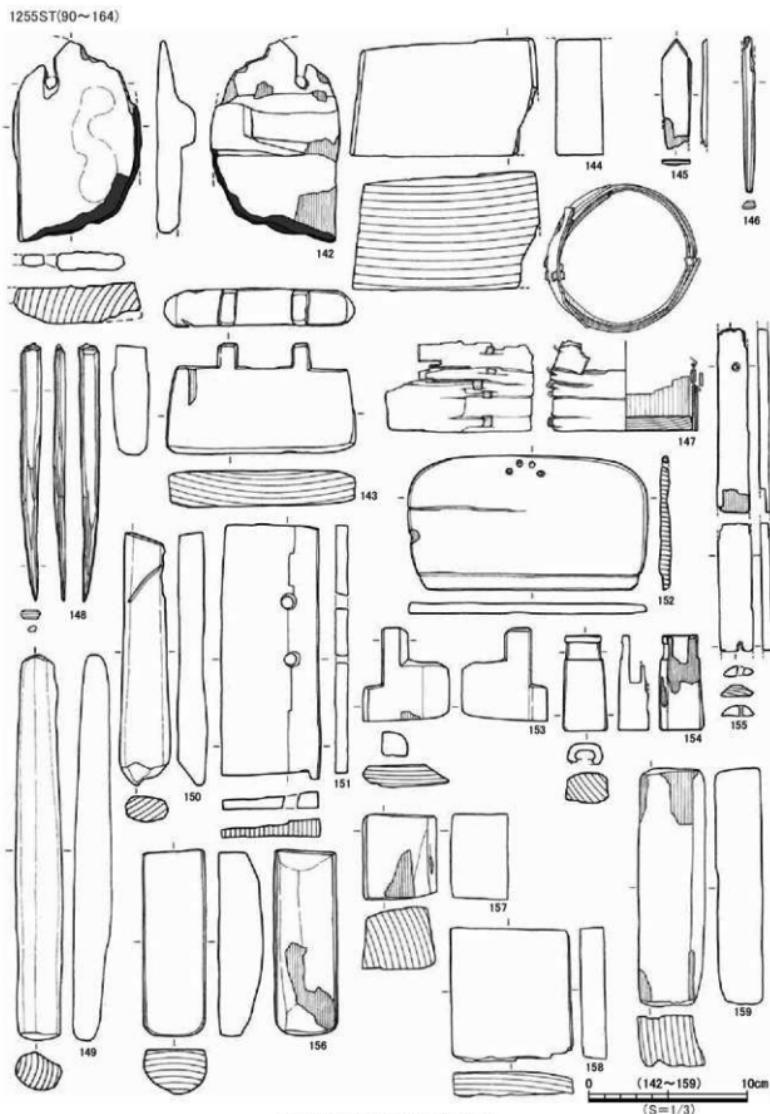


第115図 水田跡出土遺物 (3)

1255ST(90~164)

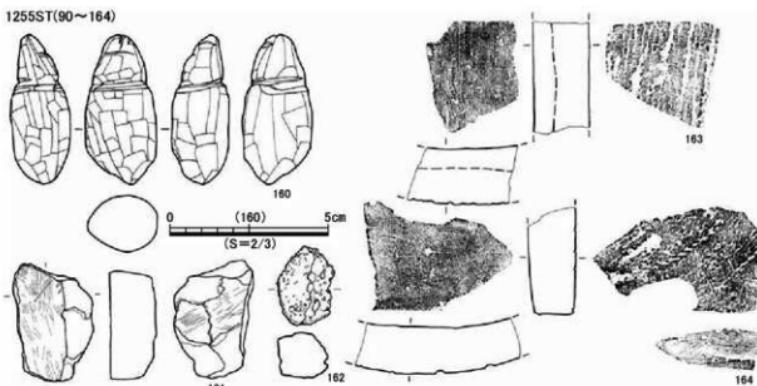


第116図 水田跡出土遺物 (4)



第117図 水田跡出土遺物（5）

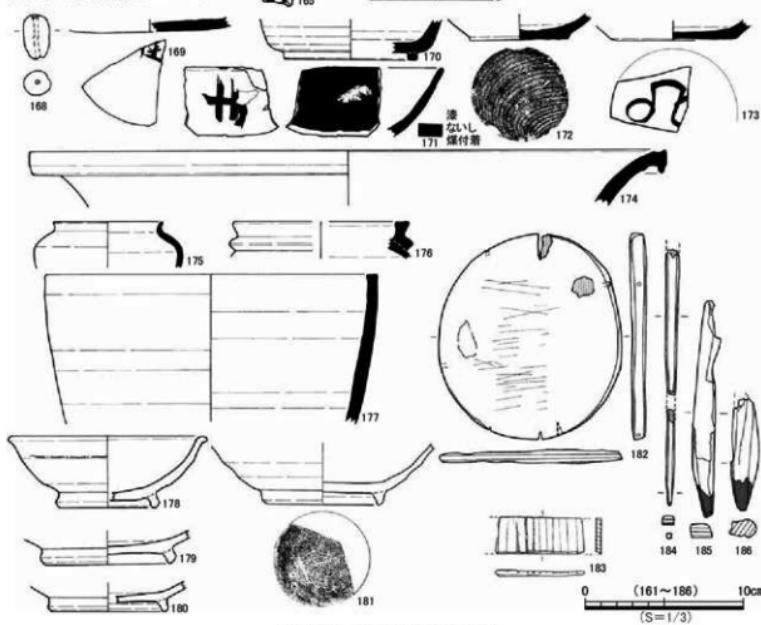
1255ST(90~164)



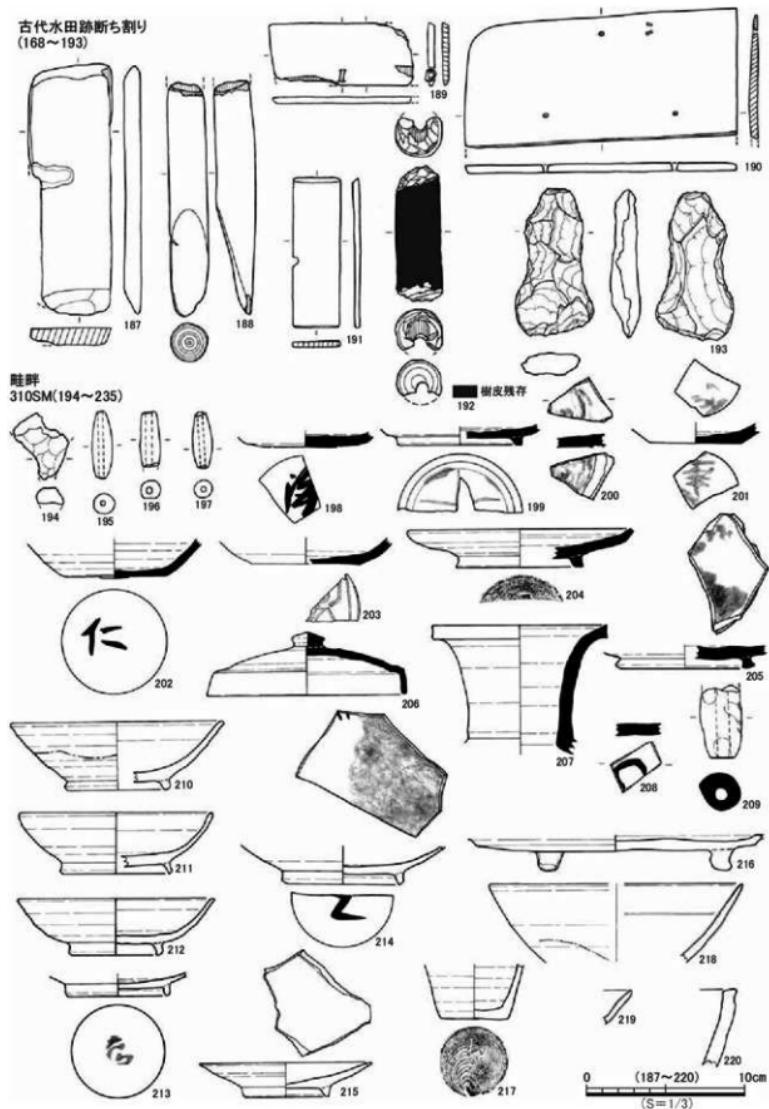
1256ST(165~167)



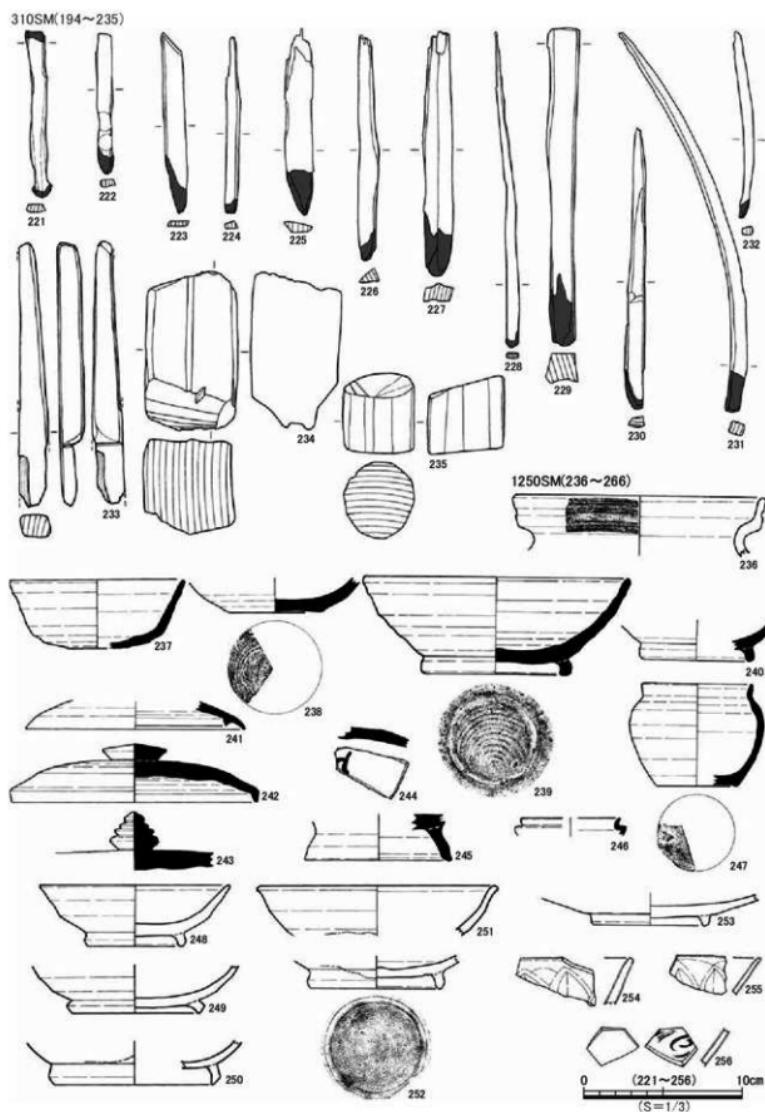
古代水田跡断ち割り(168~193)



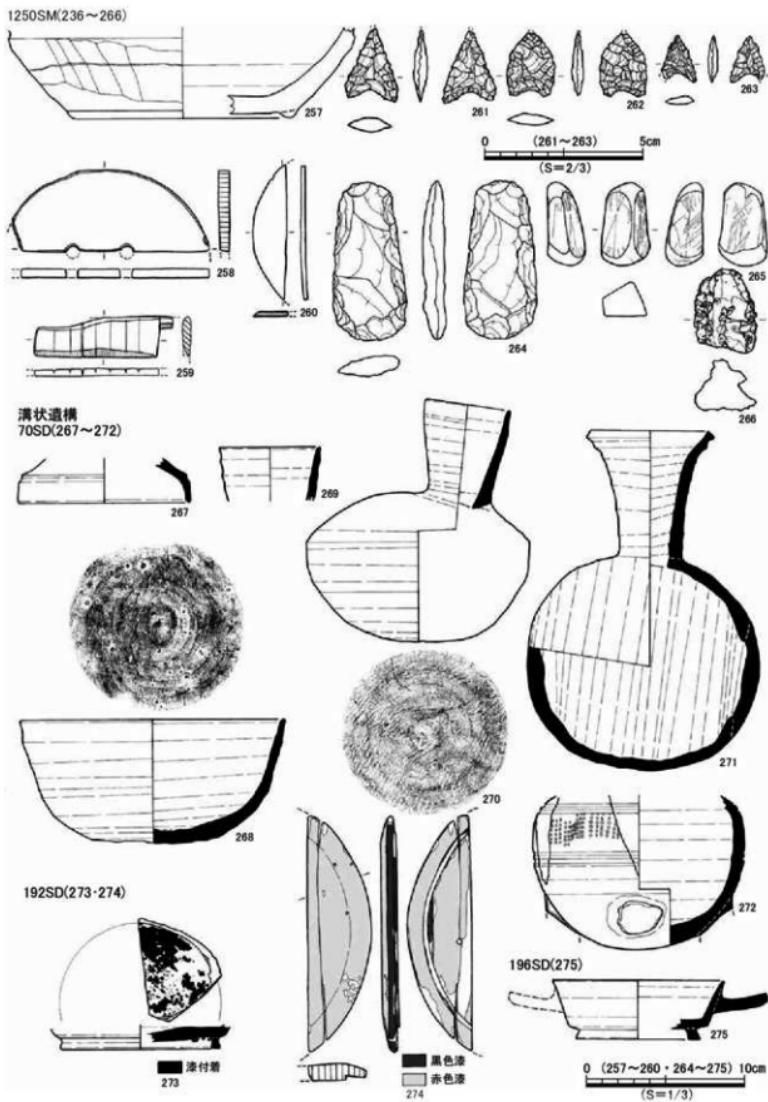
第118図 水田跡出土遺物 (6)



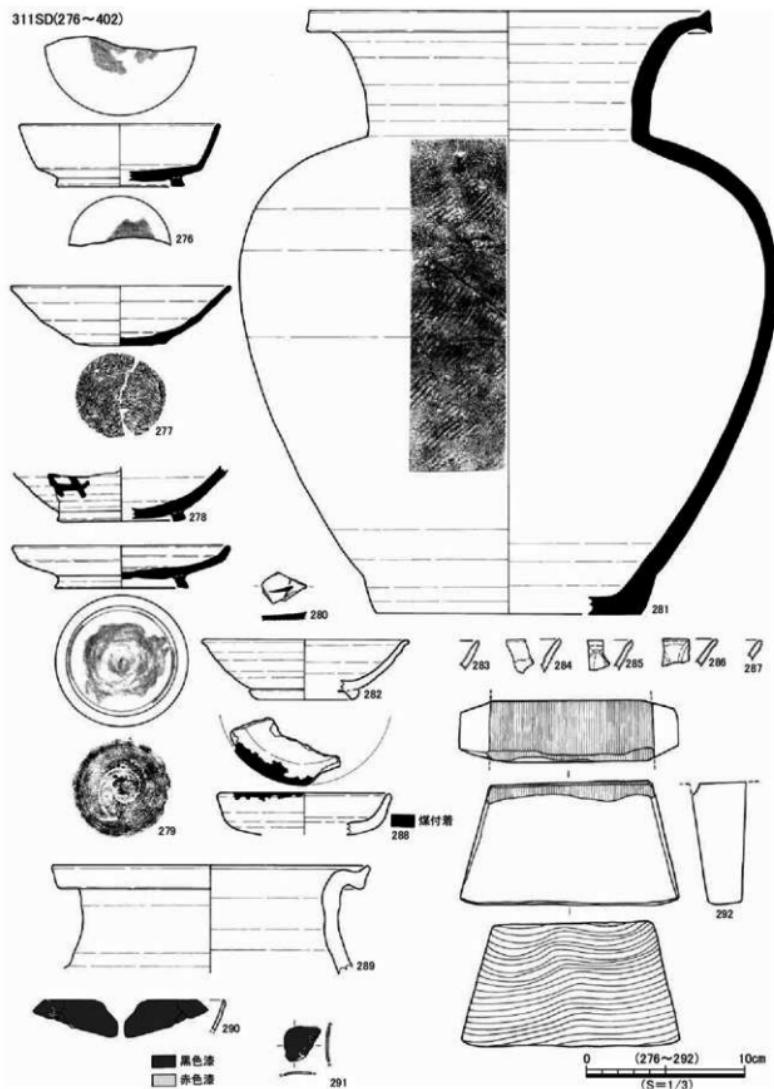
第119図 水田跡出土遺物（7）、畦畔出土遺物（1）



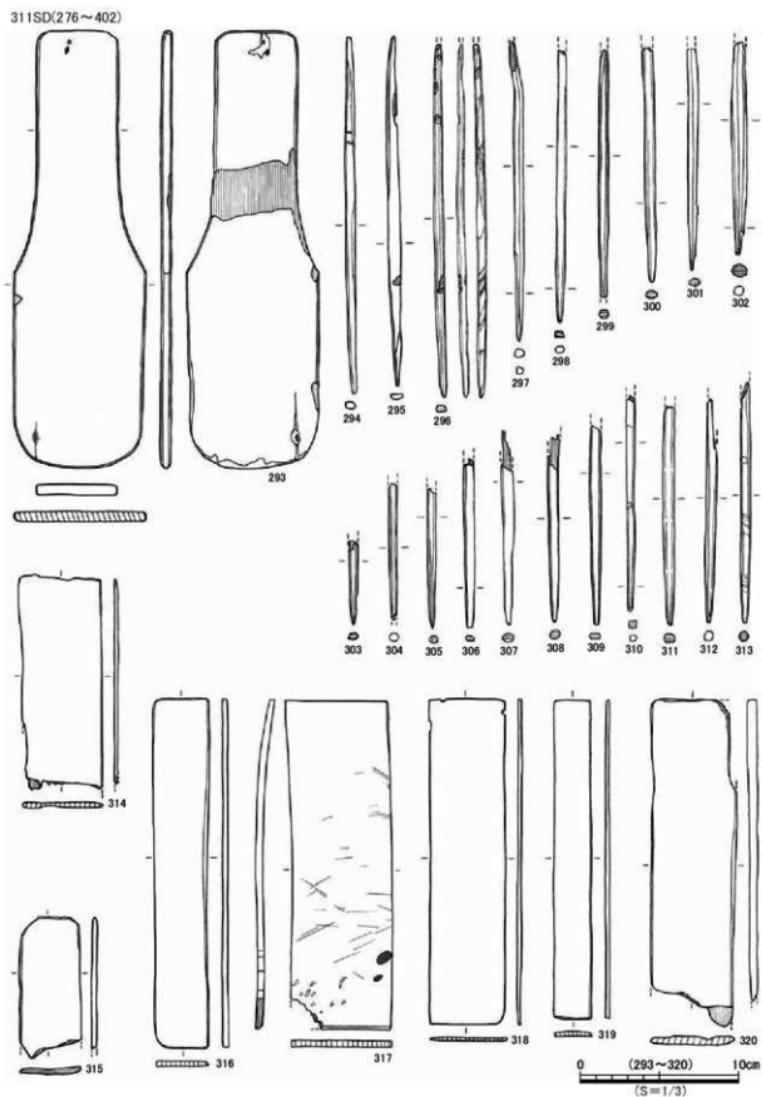
第120図 看畔出土遺物（2）



第121図 畦畔出土遺物（3）、溝状遺構出土遺物（1）

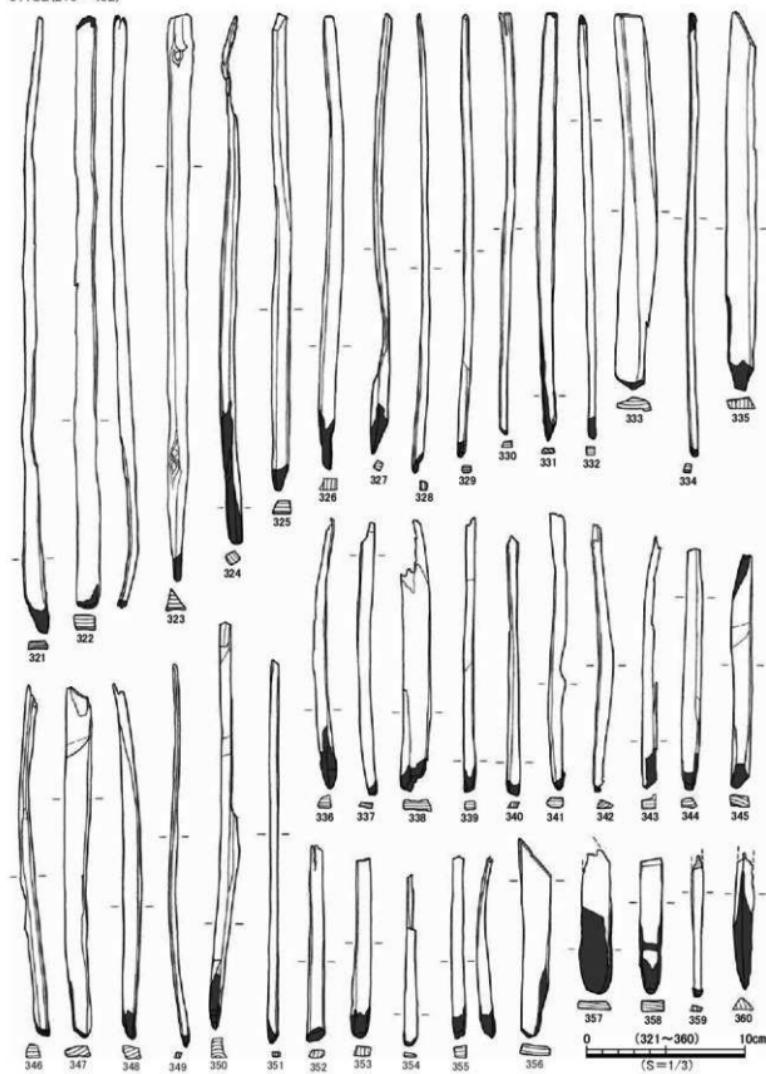


第122図 溝状遺構出土遺物（2）



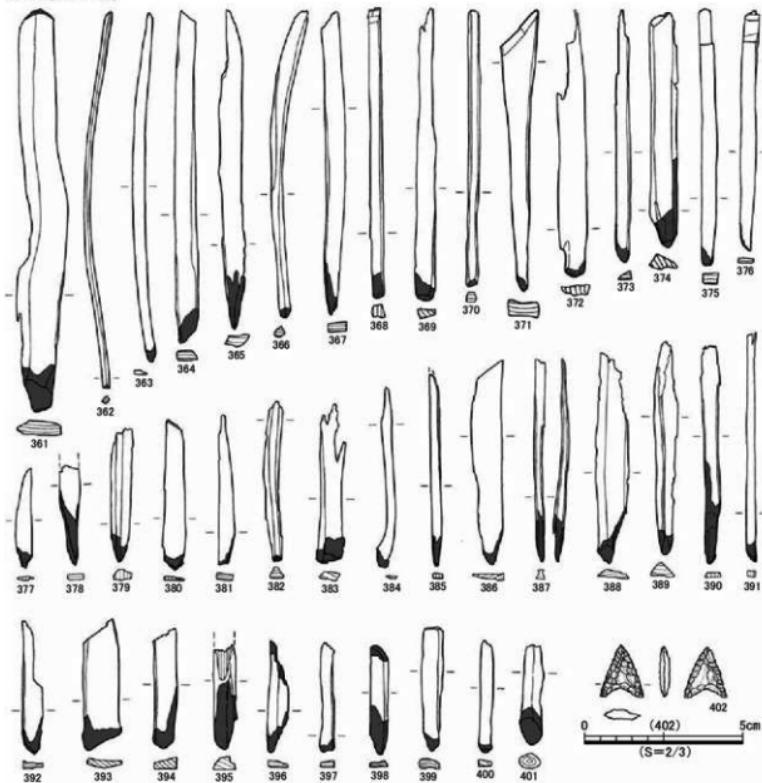
第123図 溝状造構出土遺物（3）

311SD(276~402)

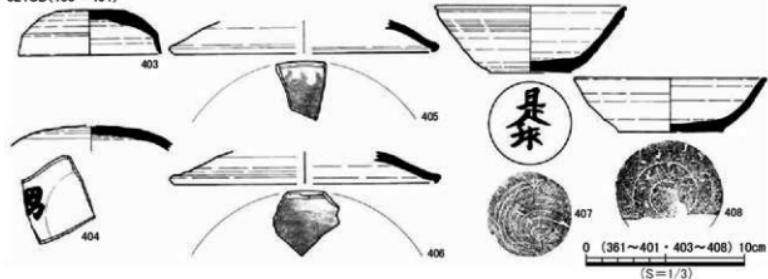


第124図 満状遺構出土遺物（4）

311SD(276~402)

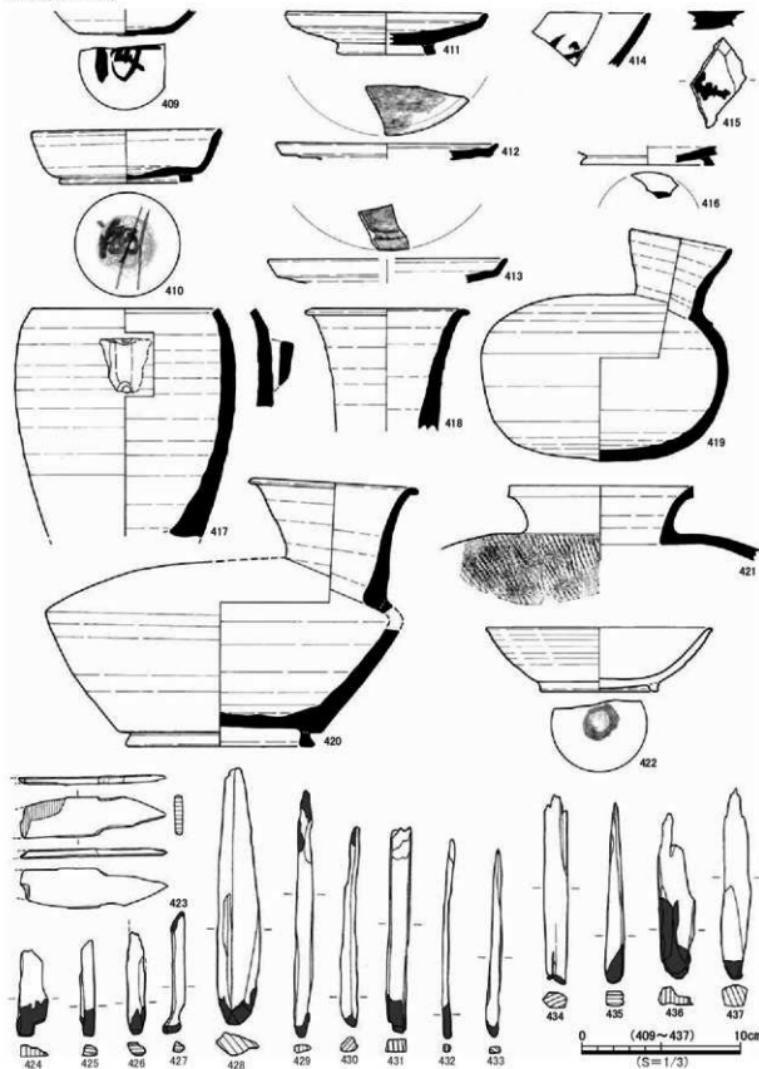


321SD(403~461)



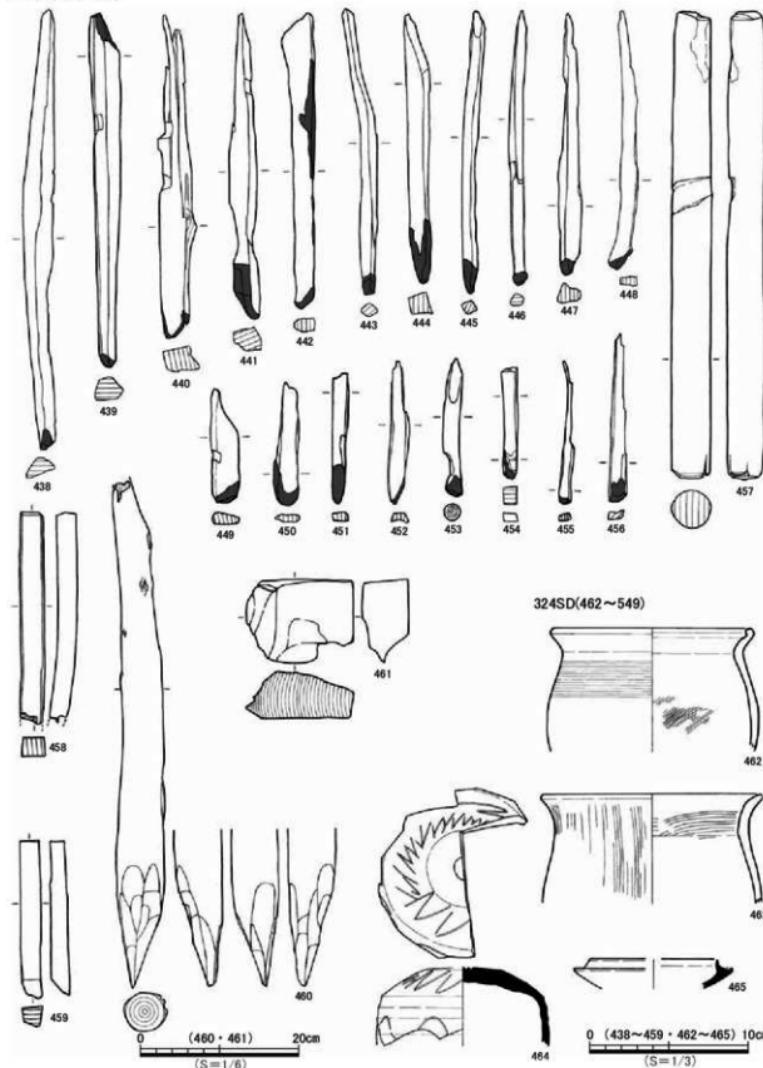
第125図 溝状造構出土遺物（5）

321SD(403~461)

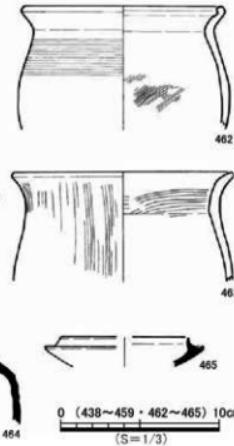


第126図 溝状遺構出土遺物（6）

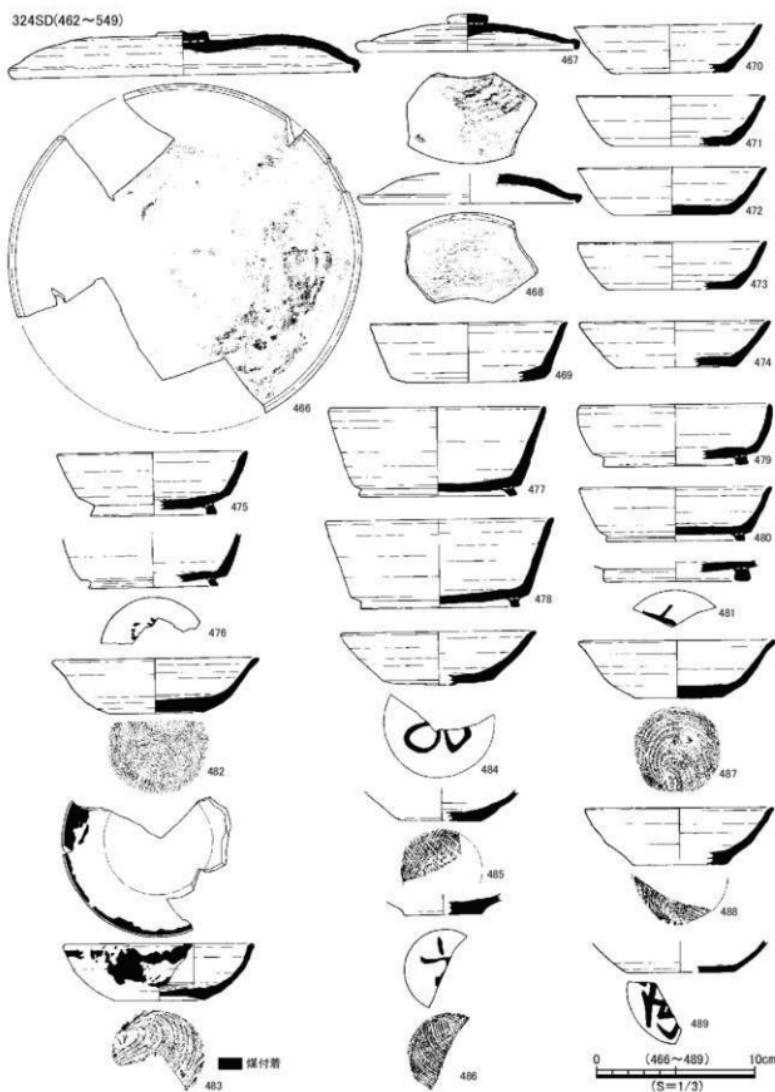
321SD(403～461)



324SD(462～549)

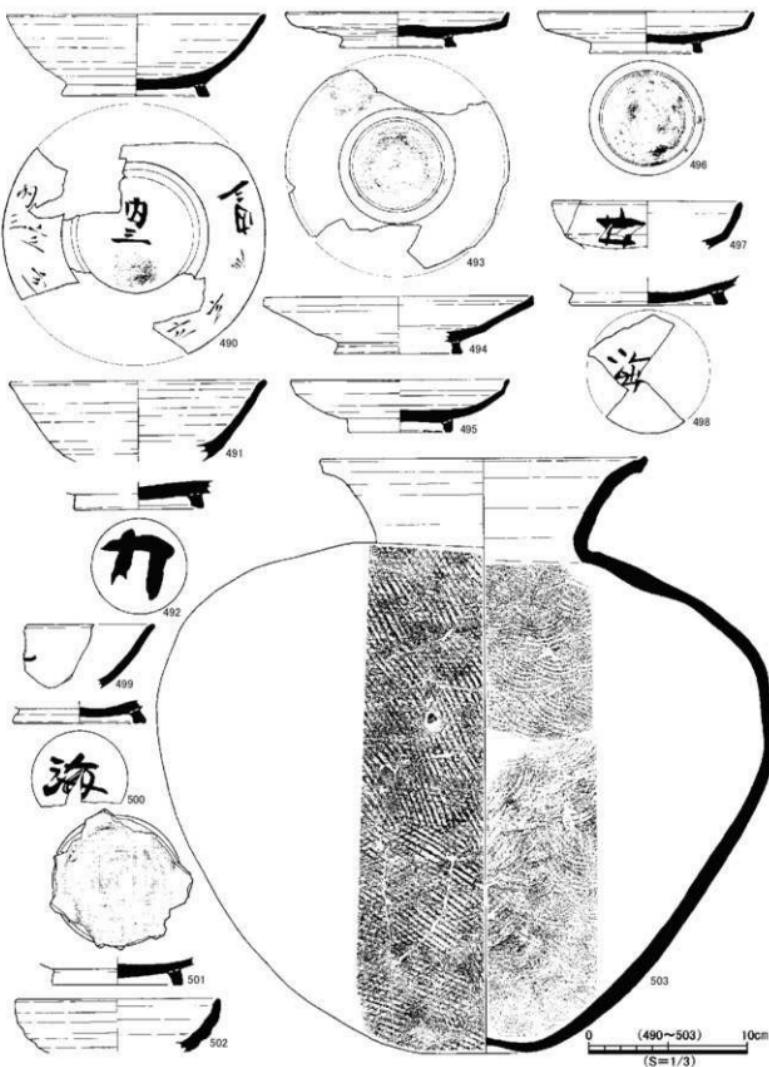


第127図 溝状造構出土遺物（7）



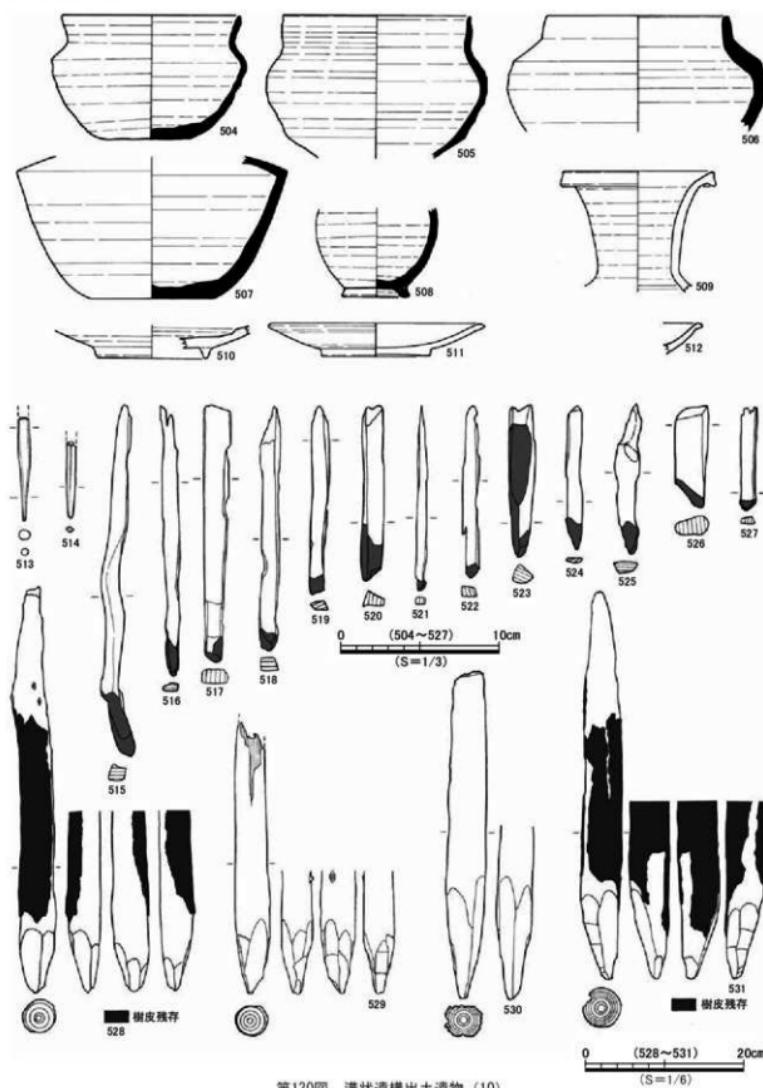
第128図 溝状遺構出土遺物 (8)

324SD(462~549)



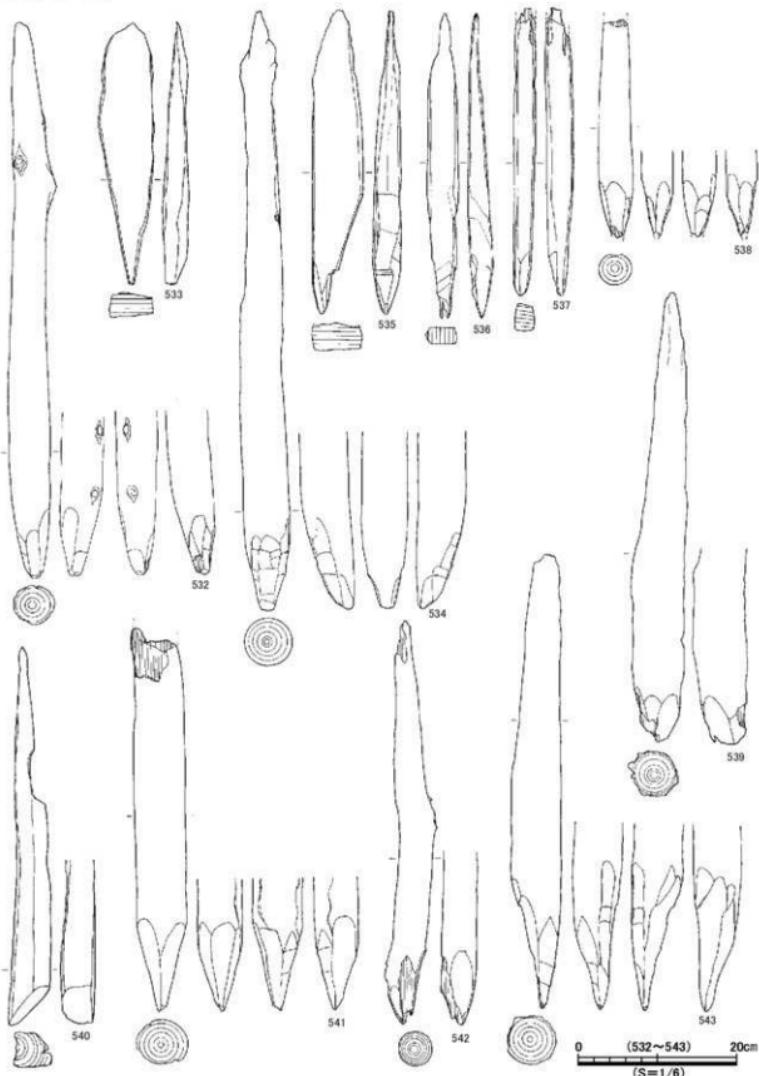
第129図 溝状造構出土遺物 (9)

324SD(462~549)



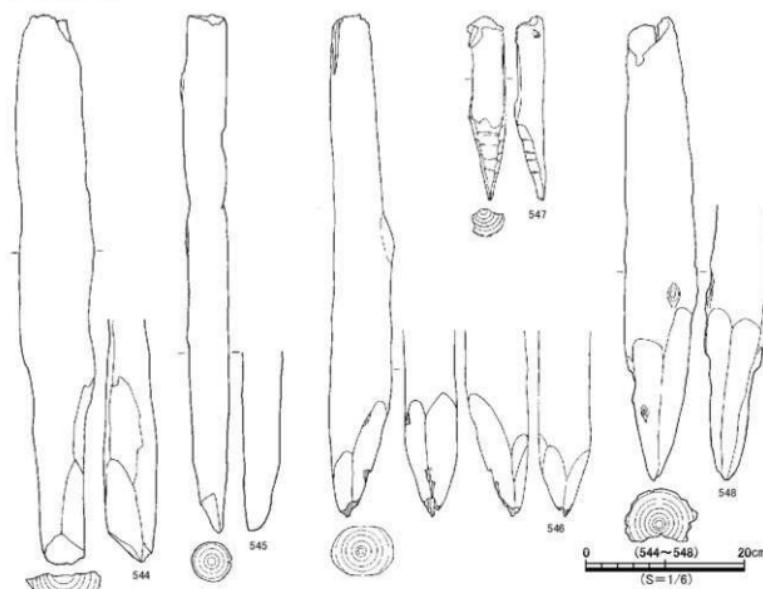
第130図 溝状遺構出土遺物 (10)

324SD(462~549)



第131図 溝状造構出土遺物 (11)

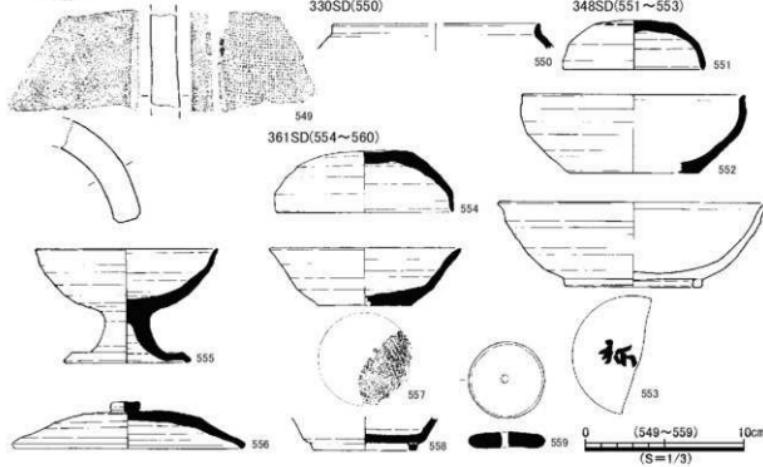
324SD(462~549)



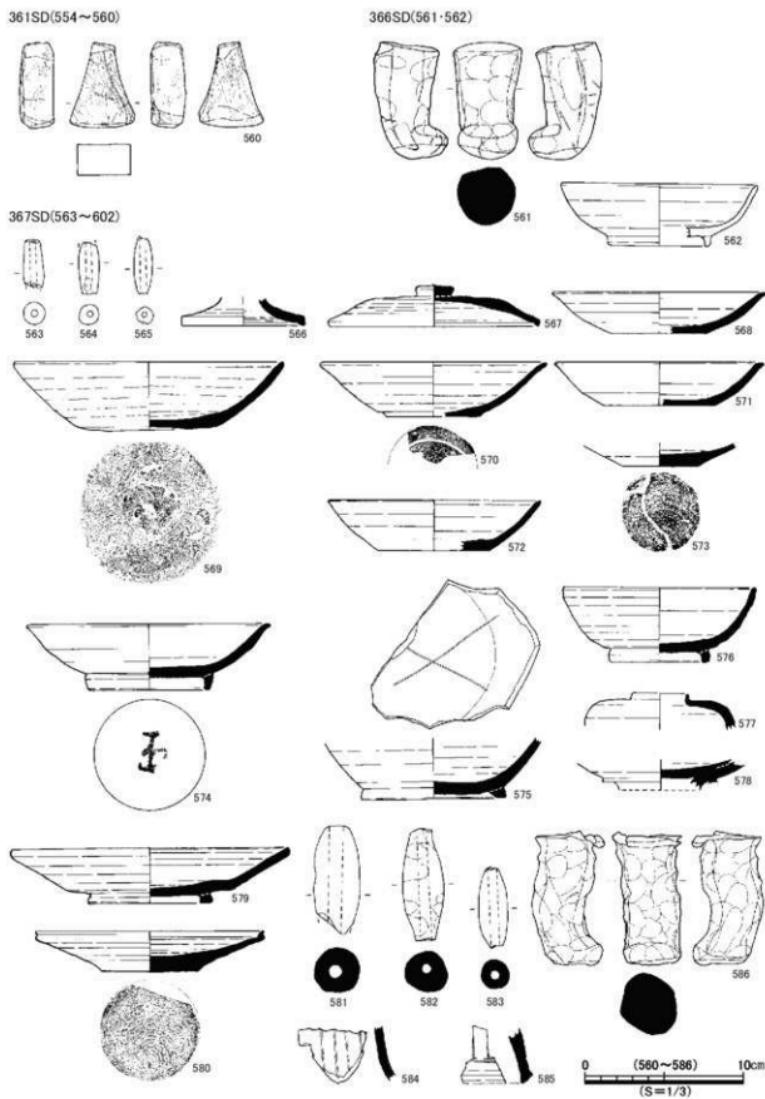
330SD(550)

348SD(551~553)

361SD(554~560)

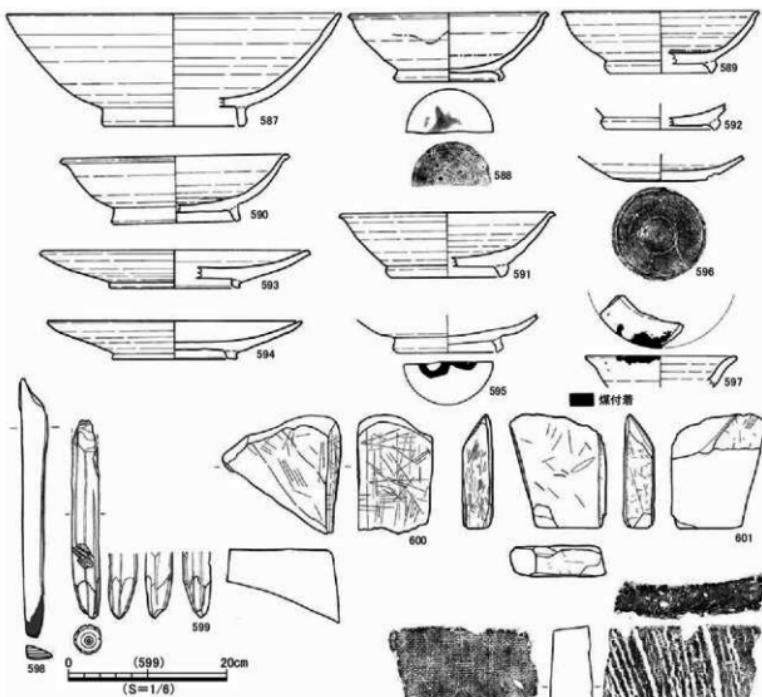


第132図 溝状遺構出土遺物 (12)

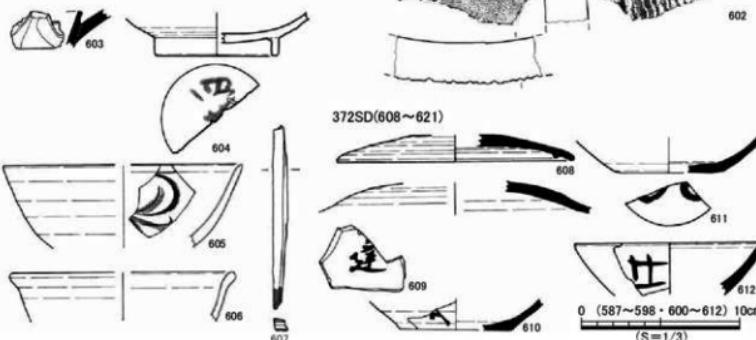


第133図 溝状造構出土遺物 (13)

367SD(563~602)

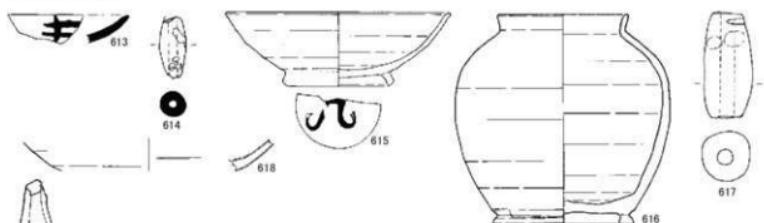


368SD(603~607)



第134図 溝状遺構出土遺物 (14)

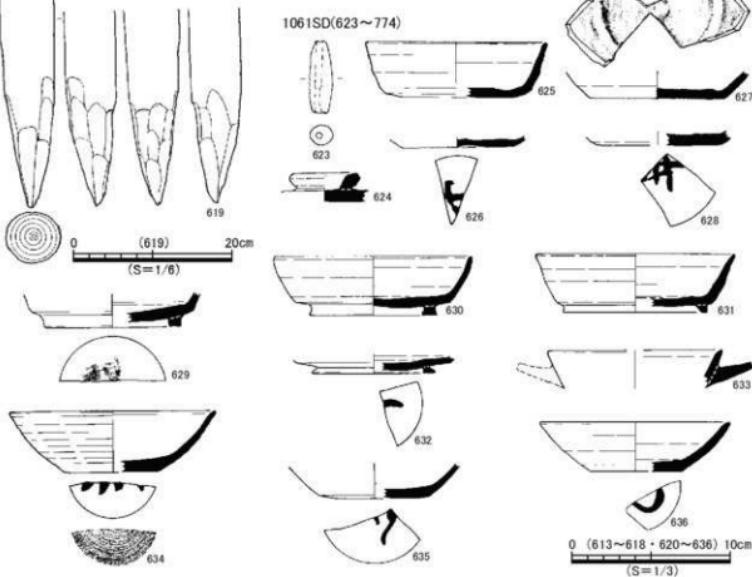
372SD(608~621)



373SD(622)

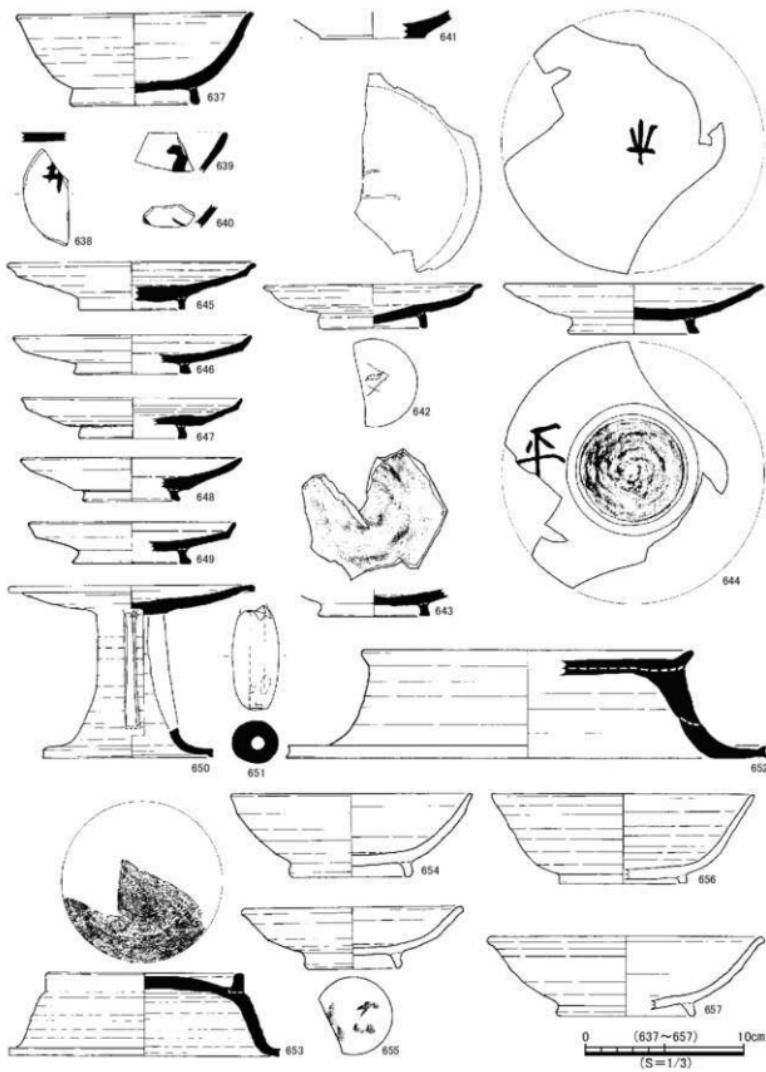


1061SD(623~774)



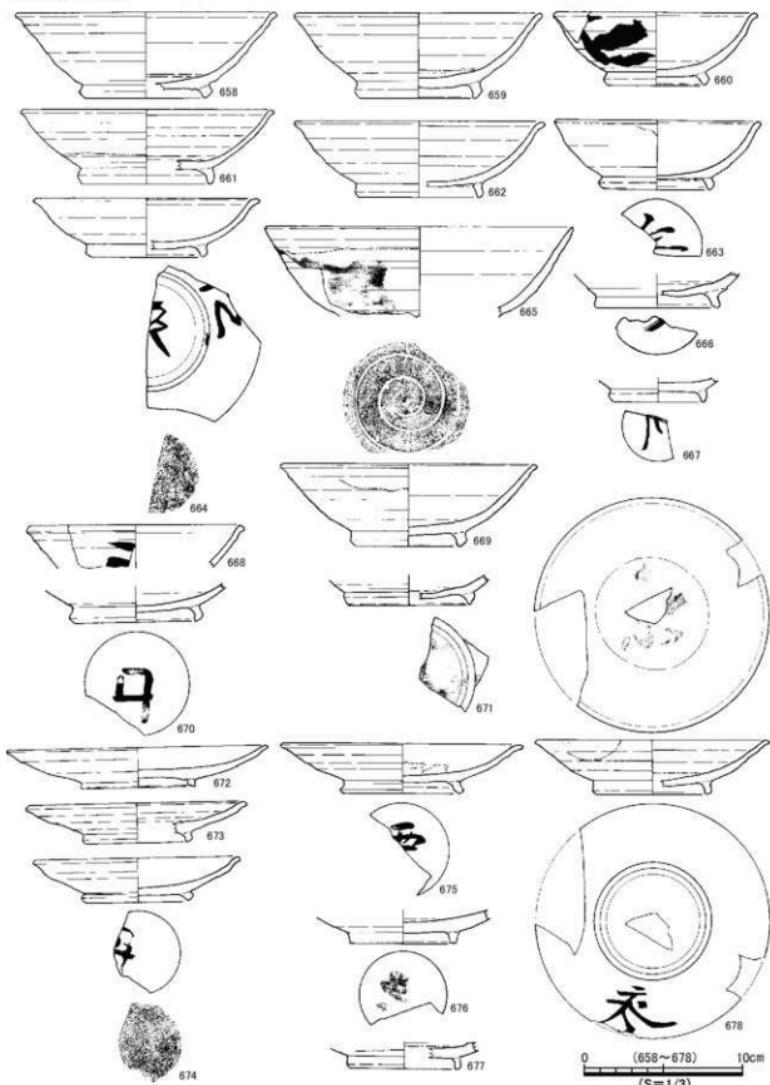
第135図 溝状造構出土遺物 (15)

1061SD(623~774)



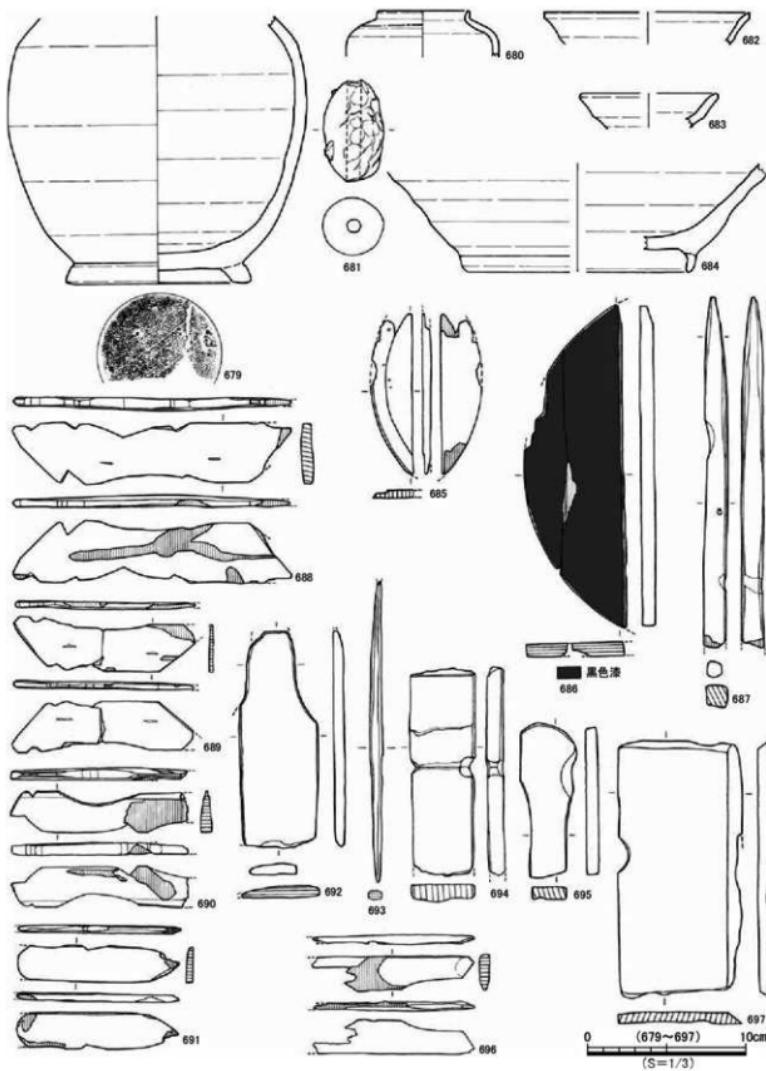
第136図 満状遺構出土遺物 (16)

1061SD(623~774)



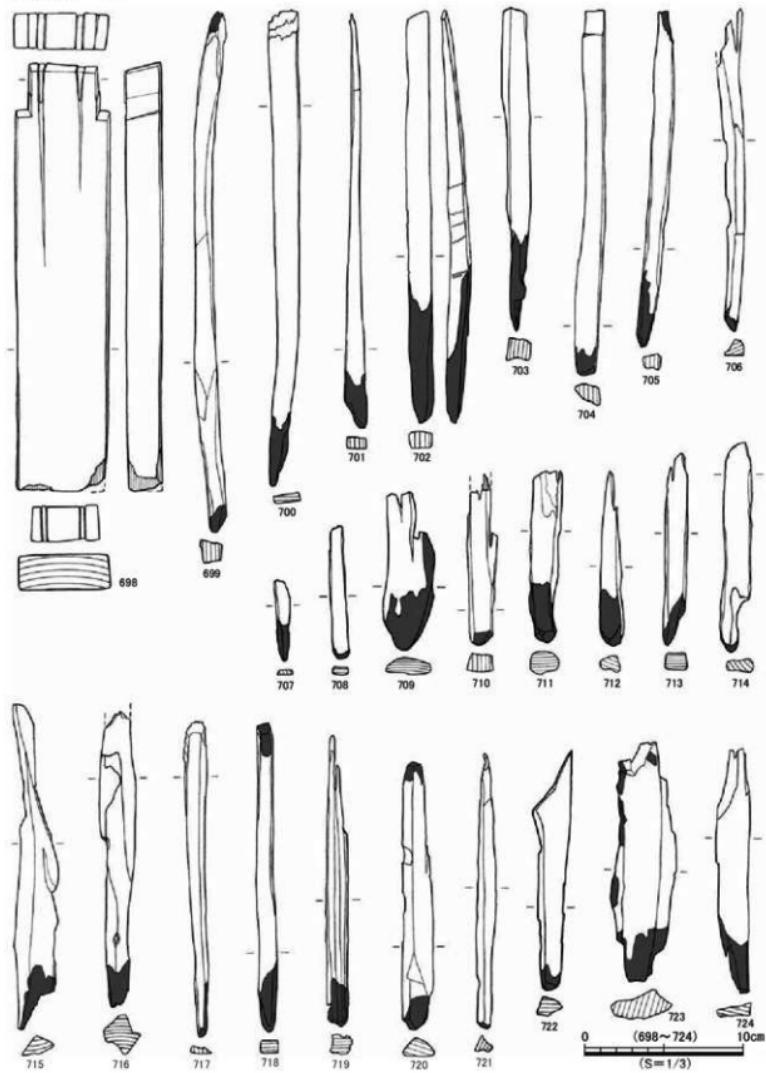
第137図 溝状造構出土遺物 (17)

1061SD(623~774)



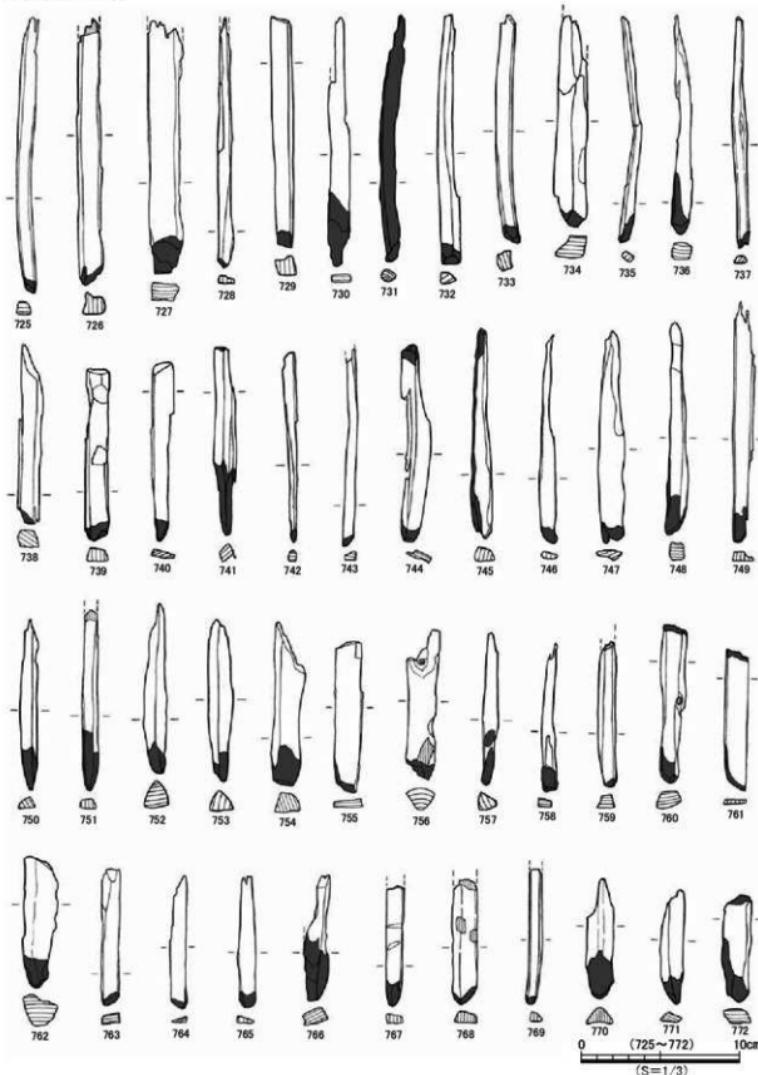
第138図 溝状遺構出土遺物 (18)

1061SD(623~774)



第139図 溝状造構出土遺物 (19)

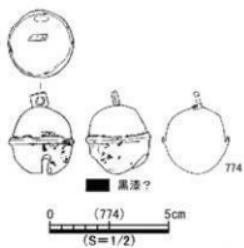
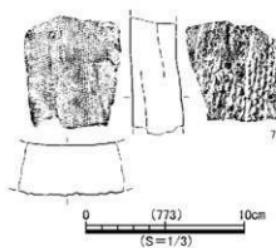
1061SD(623~774)



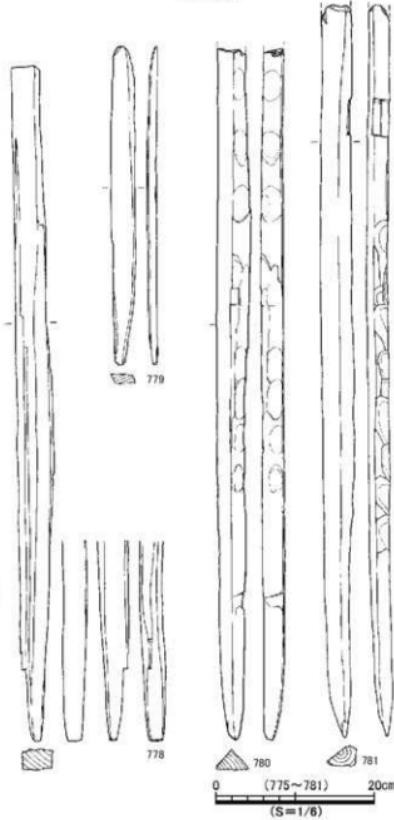
第140図 溝状遺構出土遺物 (20)

(S=1/3)

1061SD(623～774)

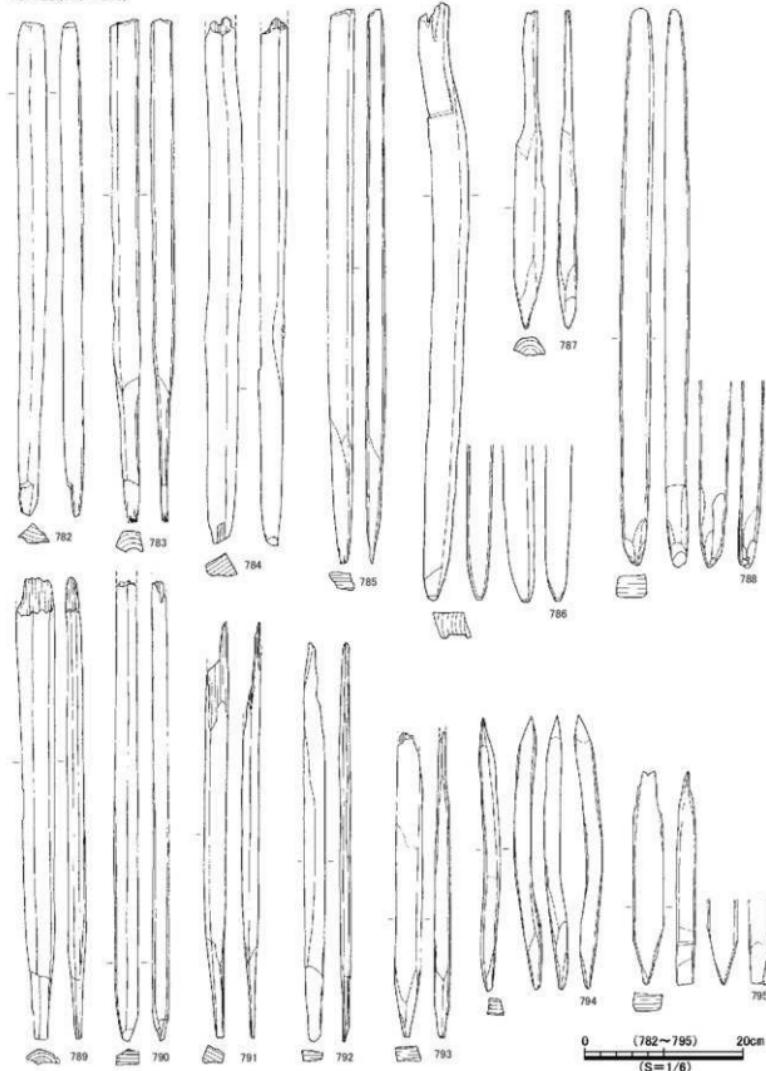


1071SD(775～818)



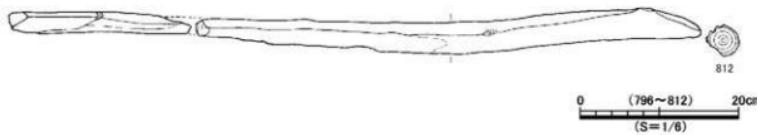
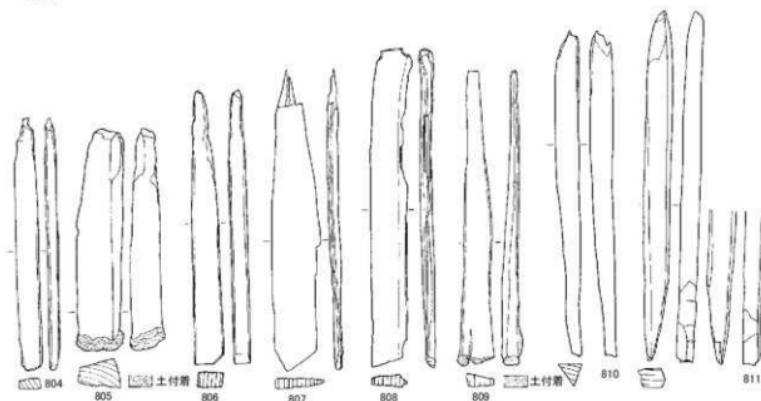
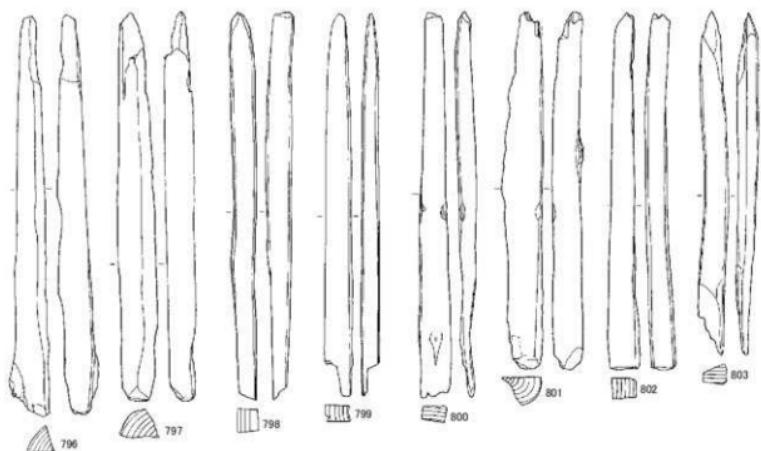
第141図 溝状造構出土遺物 (21)

1071SD(775~818)



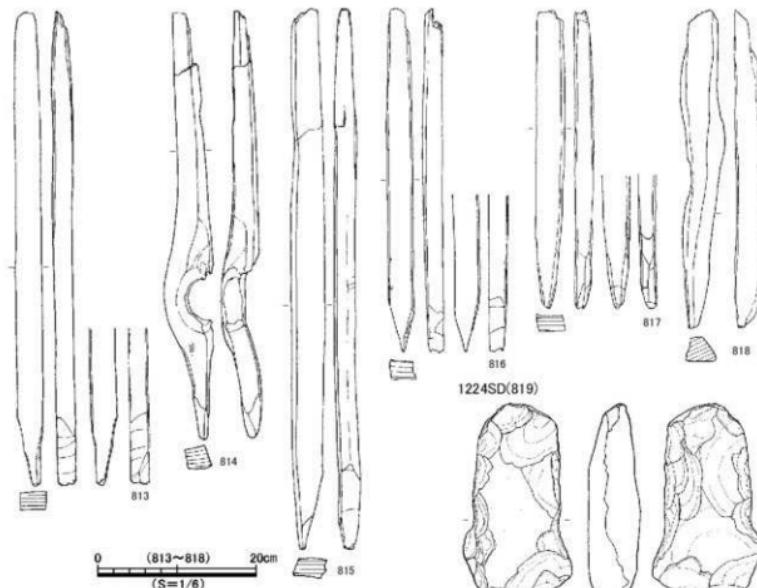
第142図 溝状遺構出土遺物 (22)

1071SD(775~818)

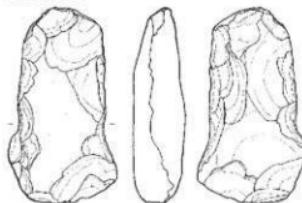


第143図 溝状造構出土遺物 (23)

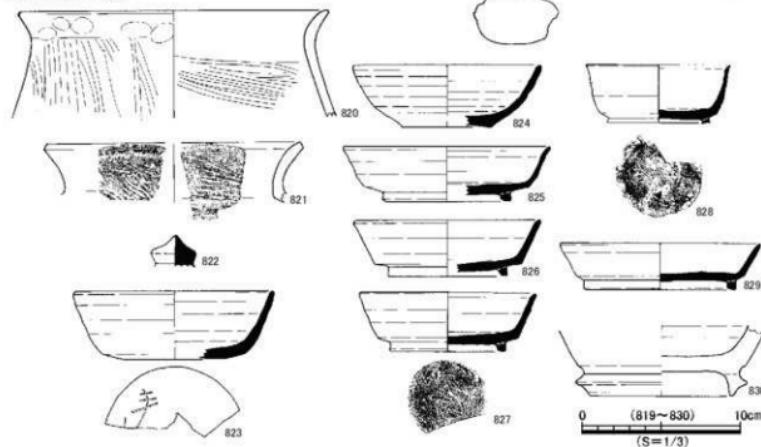
1071SD(775~818)



1224SD(819)

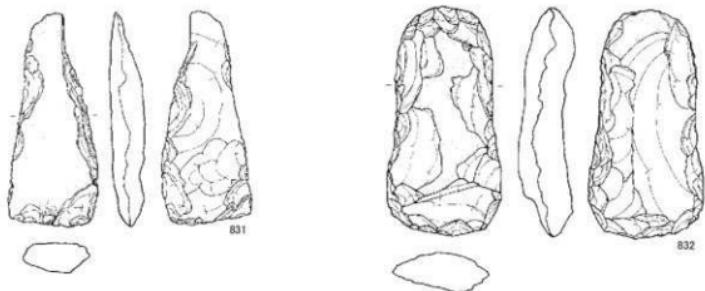


1293SD(820~832)

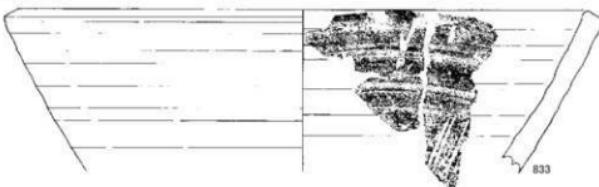


第144図 溝状遺構出土遺物 (24)

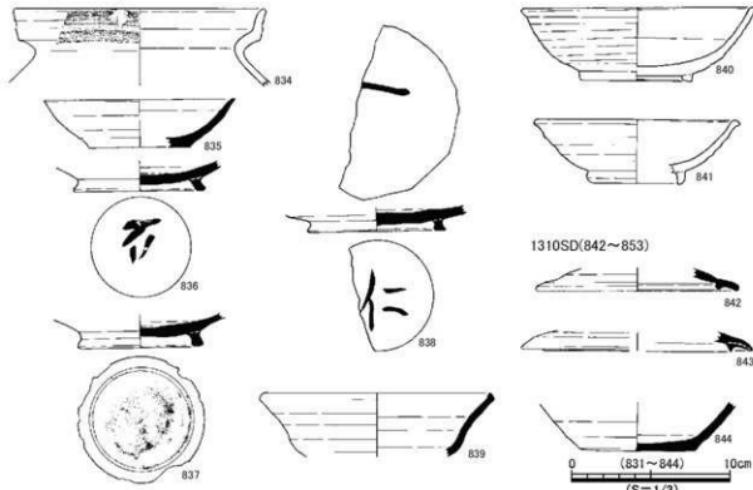
1293SD(820~832)



1305SD(833)

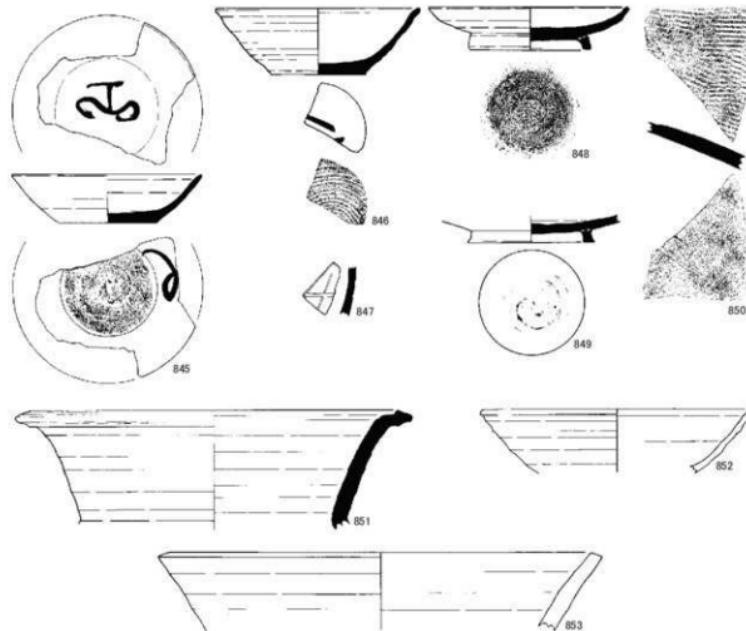


1309SD(834~841)

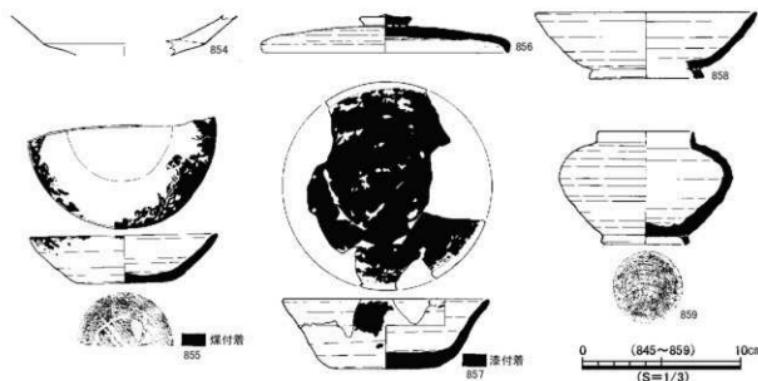


第145図 溝状造構出土遺物 (25)

1310SD(842~853)

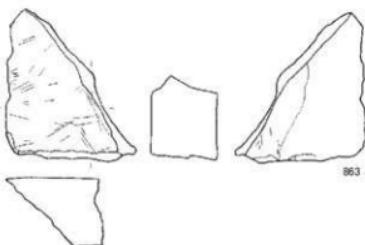
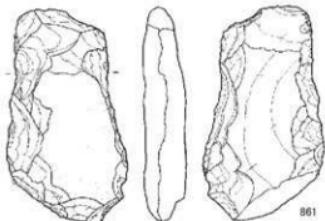
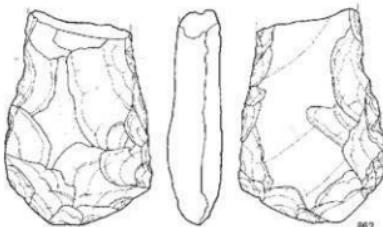
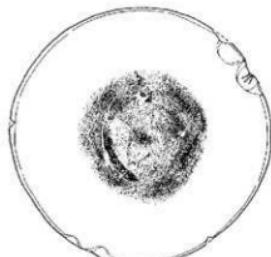


1311SD(854~863)

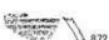
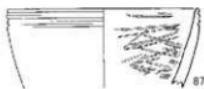
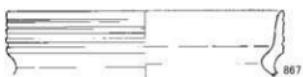
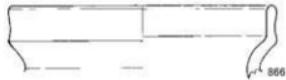
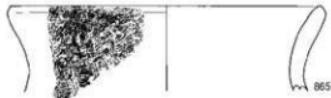


第146図 溝状遺構出土遺物 (26)

1311SD(854~863)



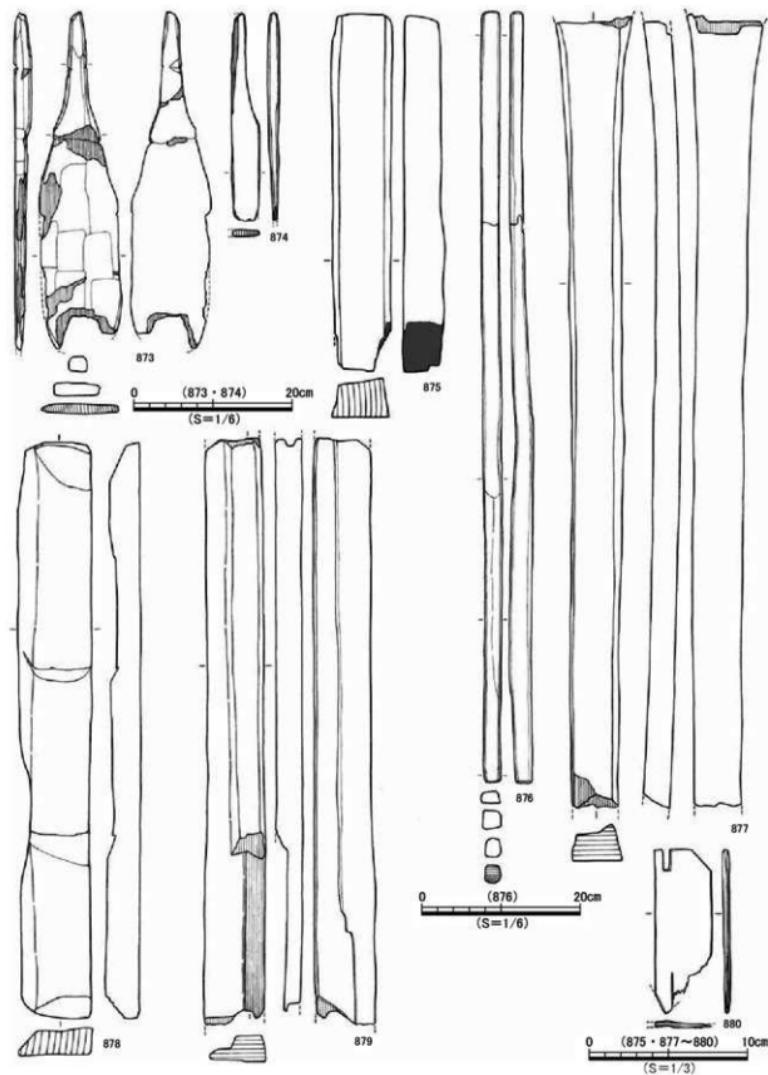
1315SD(864)

自然流路跡
1067NR(865~909)

0 (860~872)
(S=1/3) 10cm

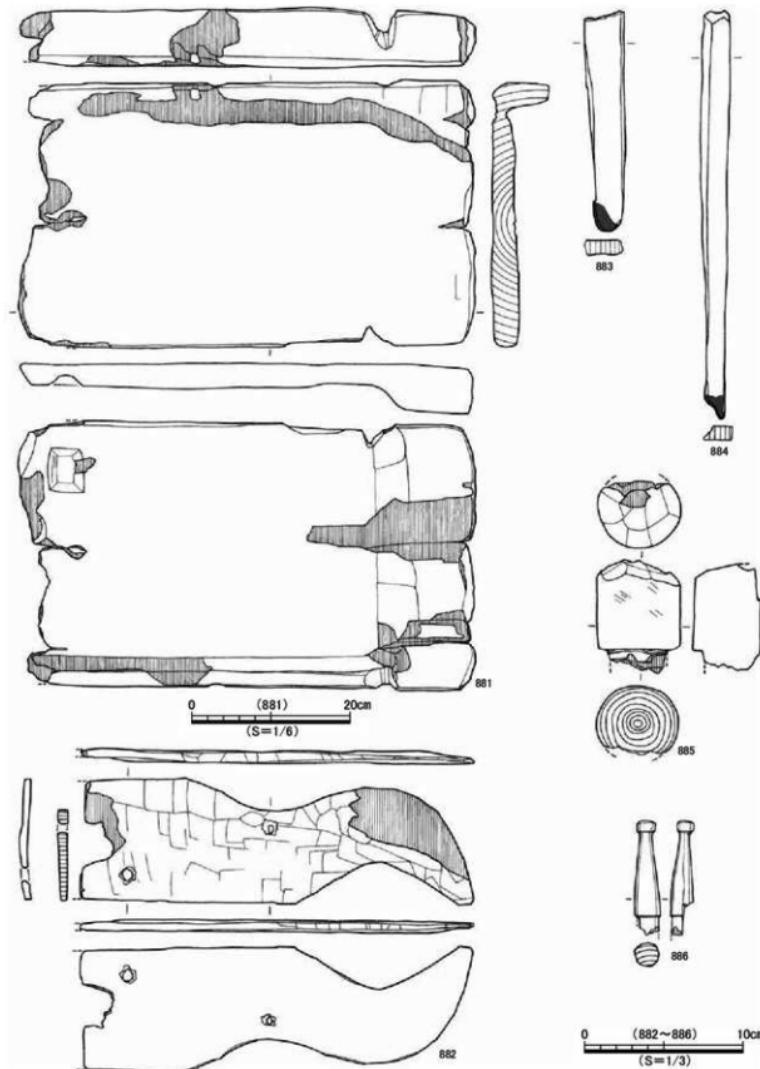
第147図 溝状遺構出土遺物 (27)、自然流路跡出土遺物 (1)

1067NR(865～909)



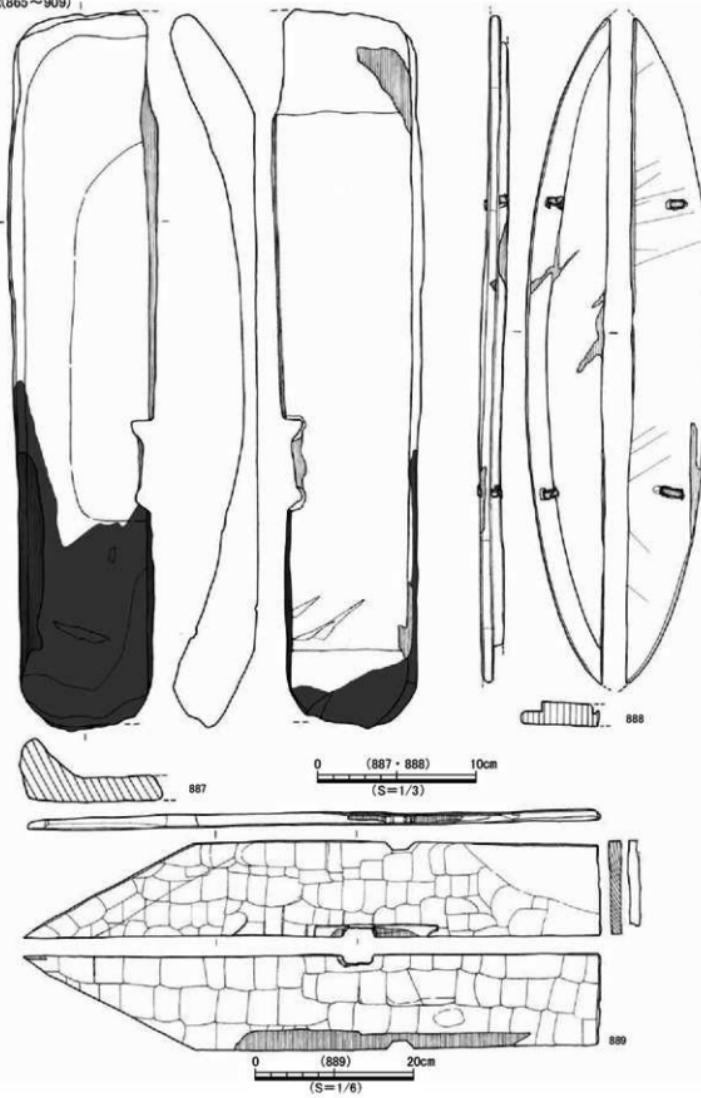
第148図 自然流路跡出土遺物（2）

1067NR(865～909)



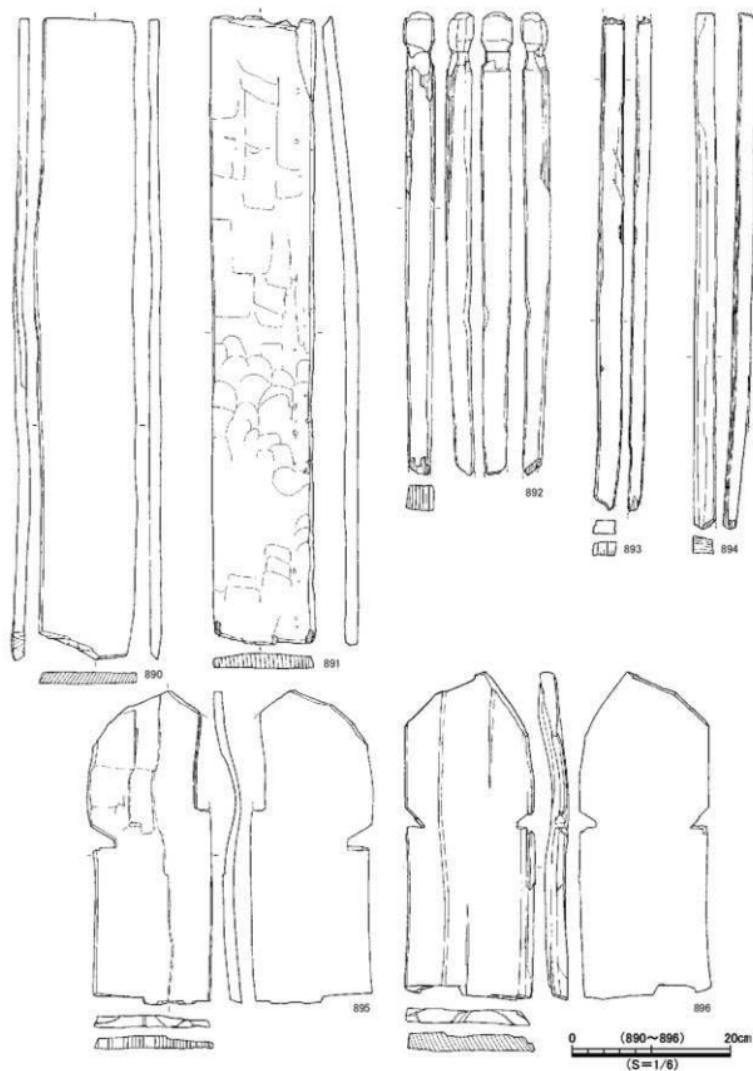
第149図 自然流路跡出土遺物（3）

1067NR(865～909)



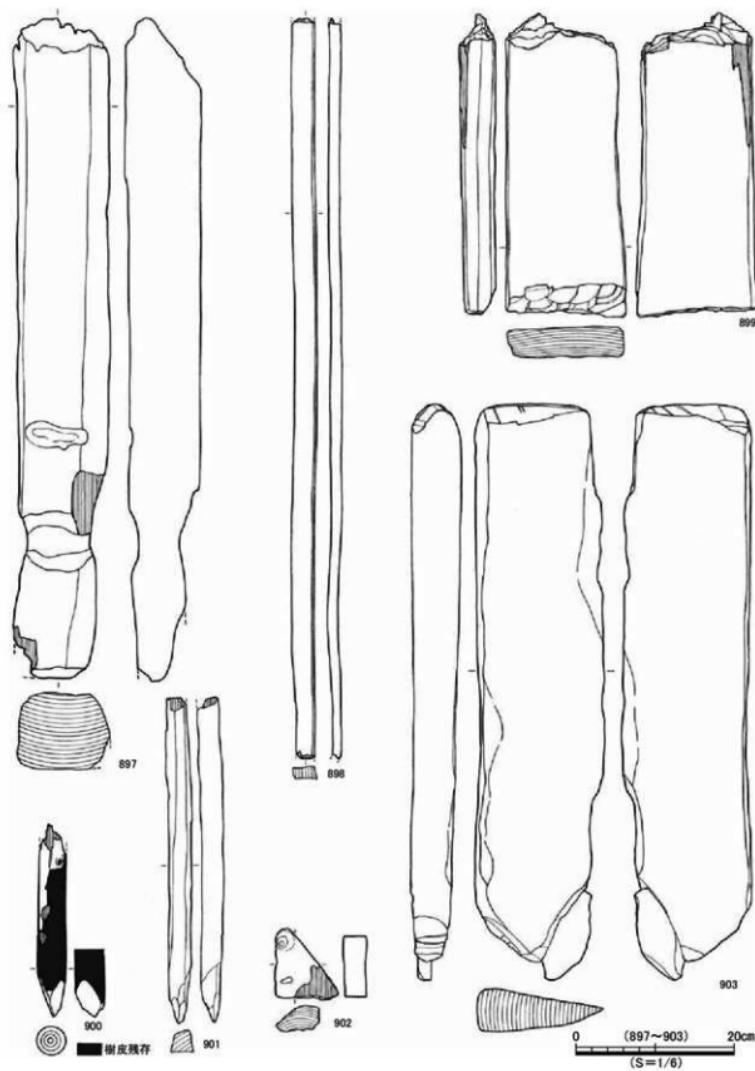
第150図 自然流路跡出土遺物（4）

1067NR(865～909)



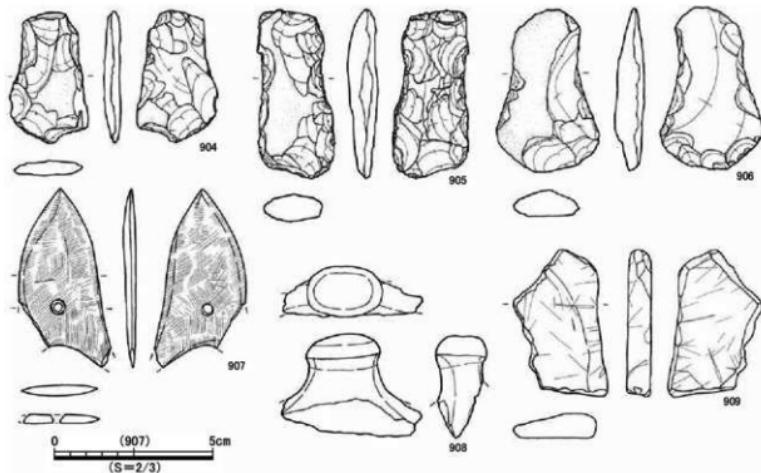
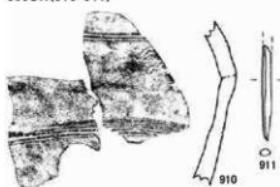
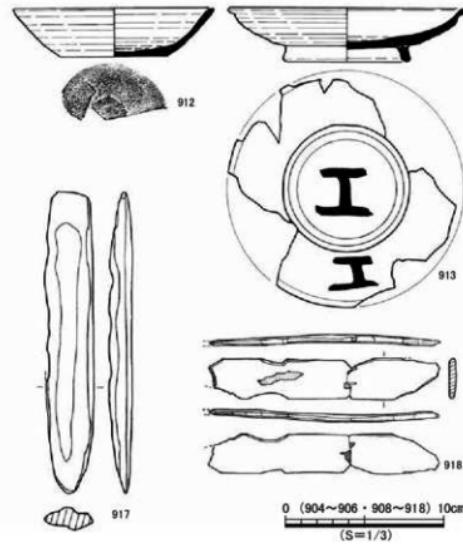
第151図 自然流路跡出土遺物（5）

1067NR(865～909)



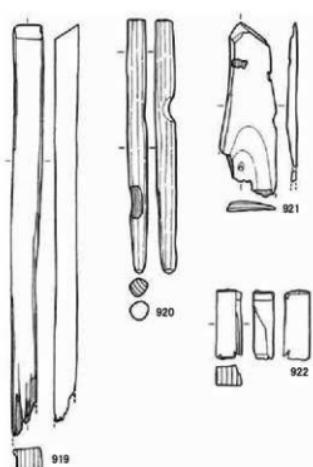
第152図 自然流路跡出土遺物（6）

1067NR(865～909)

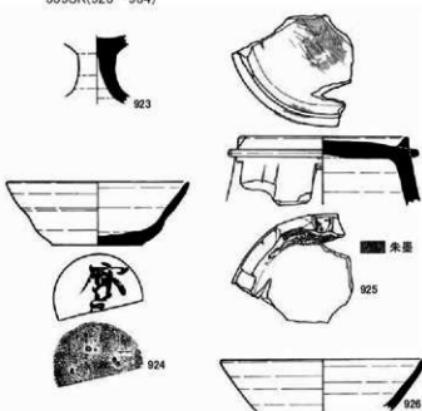
水制造構
365SW(910-911)遺物集積
1074SU(912～922)

第153図 自然流路跡出土遺物（7）、水制造構出土遺物、遺物集積出土遺物（1）

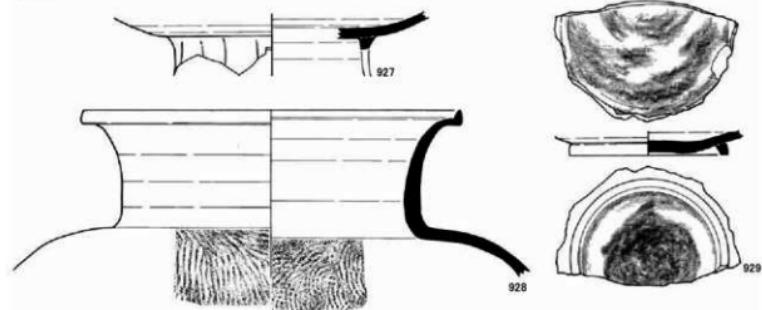
1074SU(912～922)



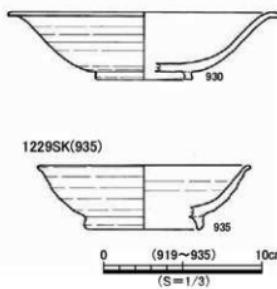
土坑
339SK(923～934)



朱墨

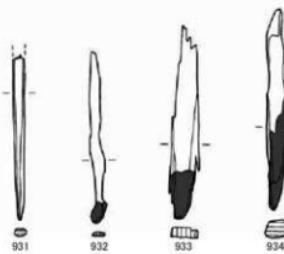


1229SK(935)

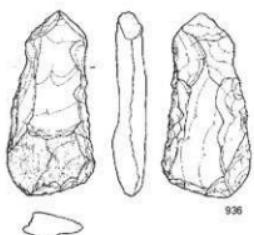


0 (919～935)
(S=1/3) 10cm

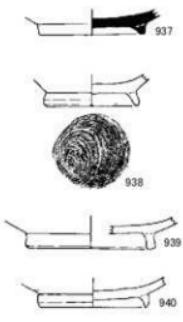
第154図 遺物集積出土遺物（2）、土坑出土遺物（1）



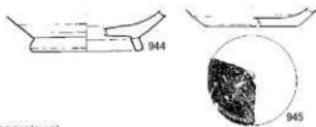
1239SK(936)



1243SK(937~943)



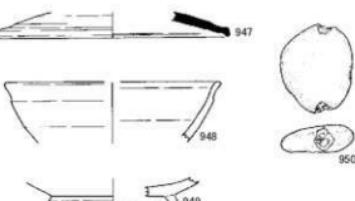
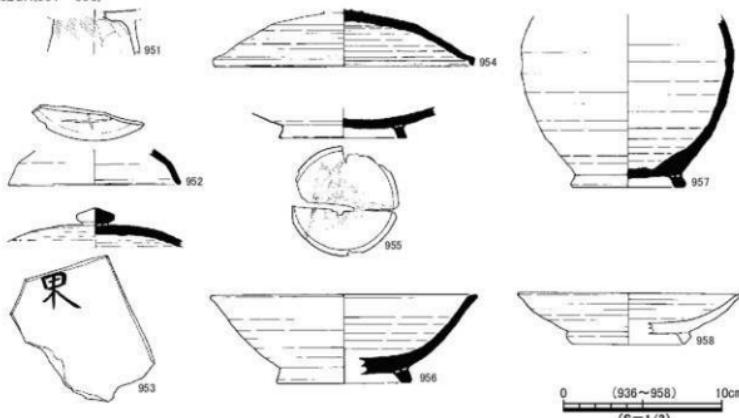
1258SK(944~945)



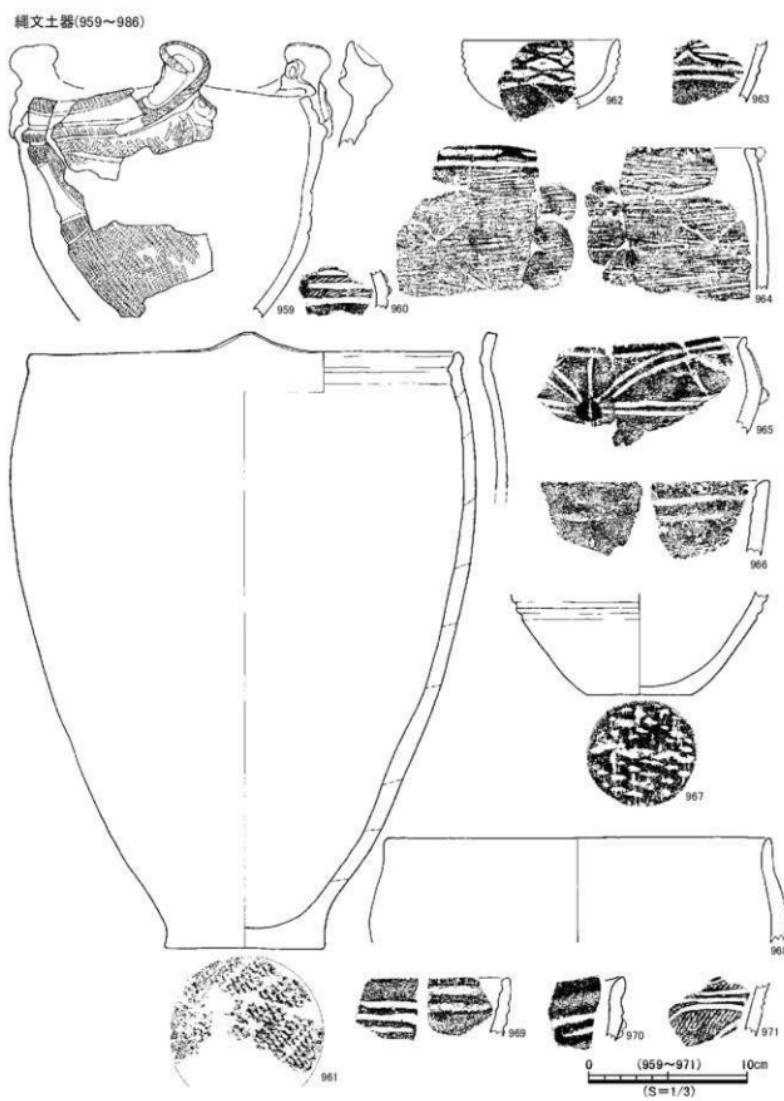
1270SK(946)



1303SK(947~950)

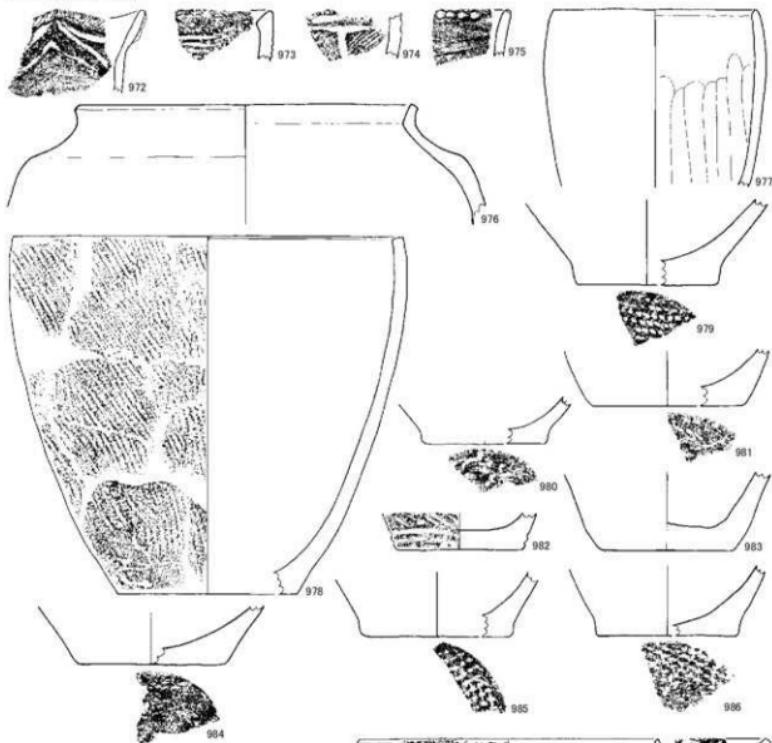
不明遺構
182SX(951~958)

第155図 土坑出土遺物（2）、不明遺構出土遺物

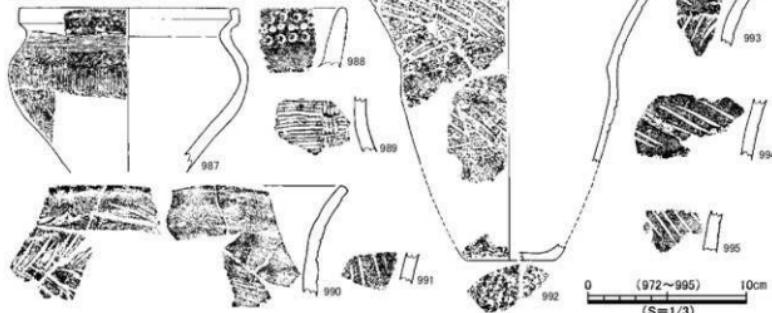


第156図 包含層出土土器類（1）

縄文土器(959～986)

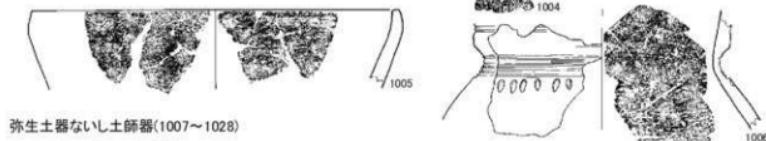
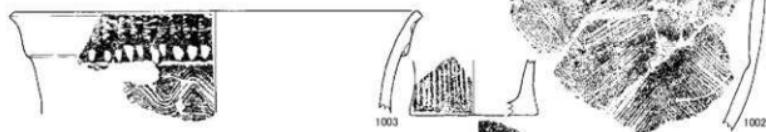
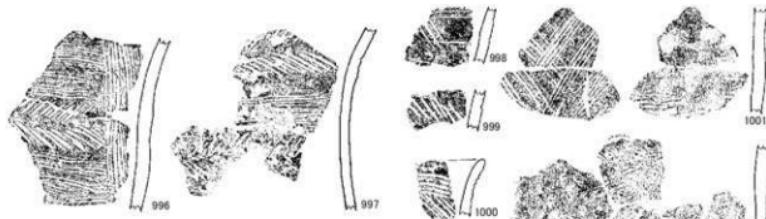


弥生土器(987～1006)

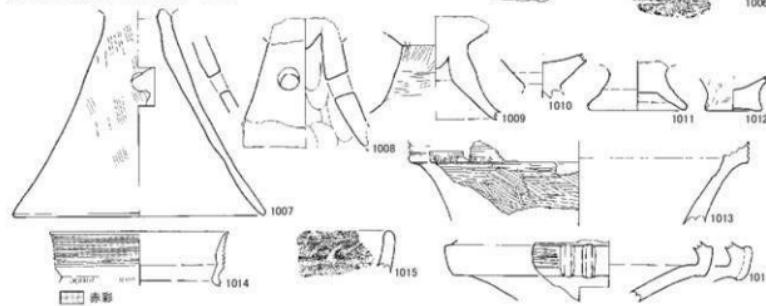


第157図 包含層出土土器類（2）

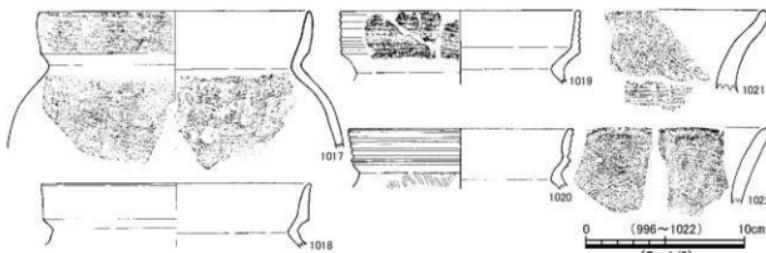
弥生土器(987~1006)



弥生土器ないし土師器(1007~1028)



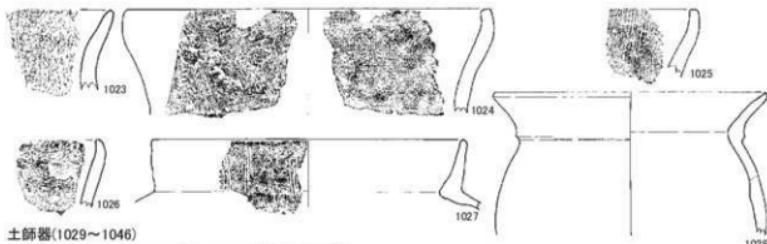
赤彩



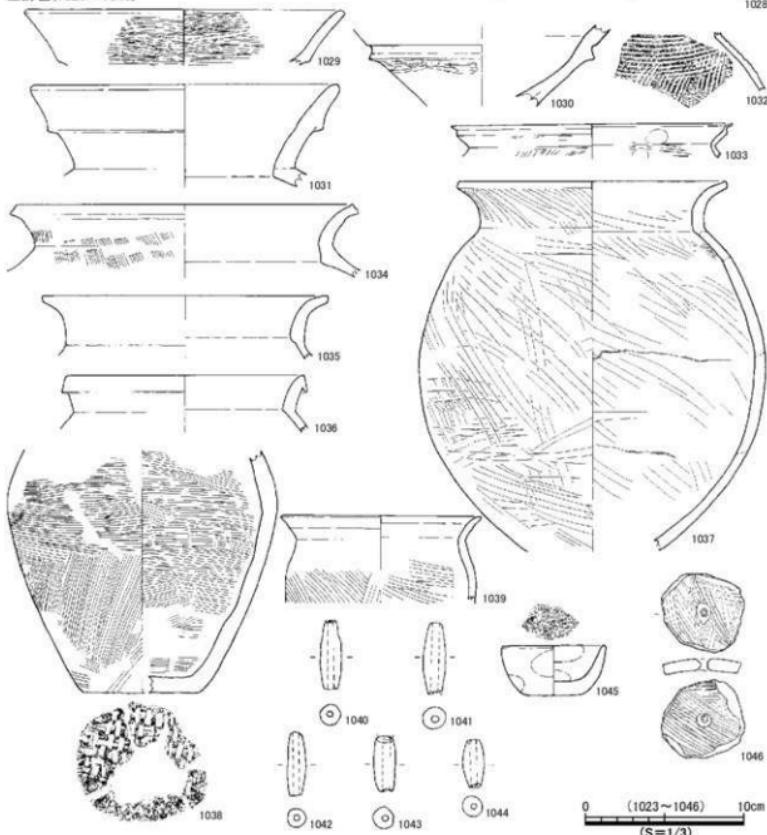
0 (996~1022)
(S=1/3) 10cm

第158図 包含層出土土器類（3）

弥生土器ないし土師器(1007～1028)

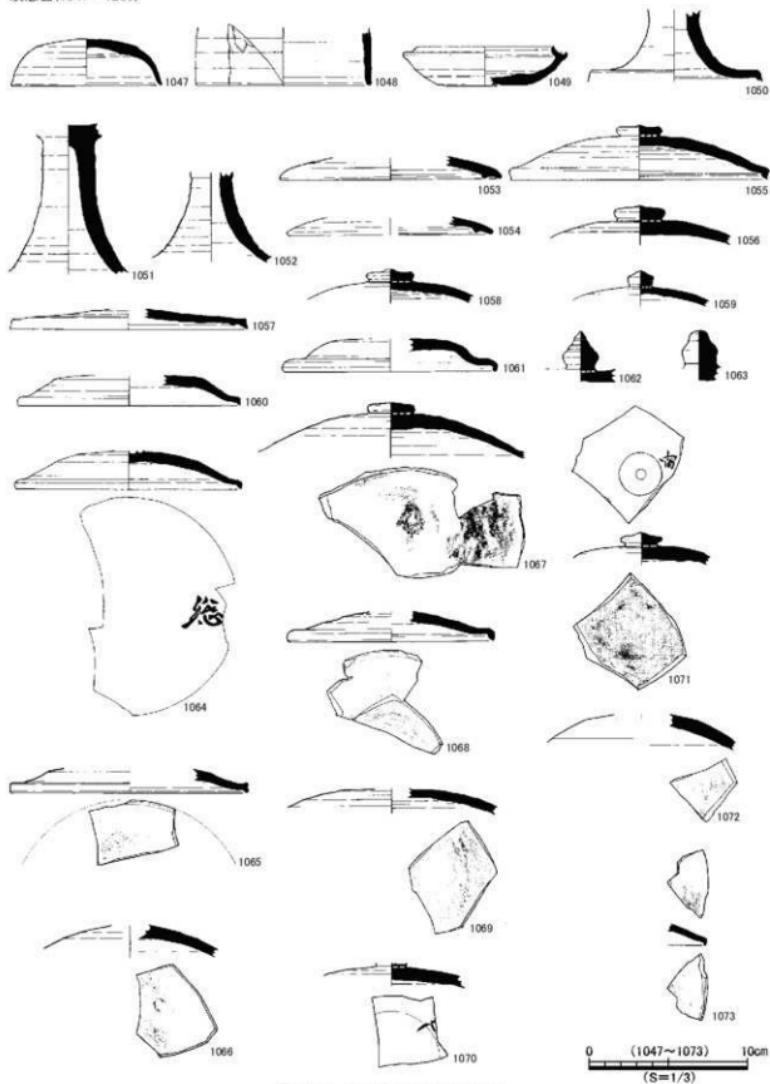


土師器(1029～1046)



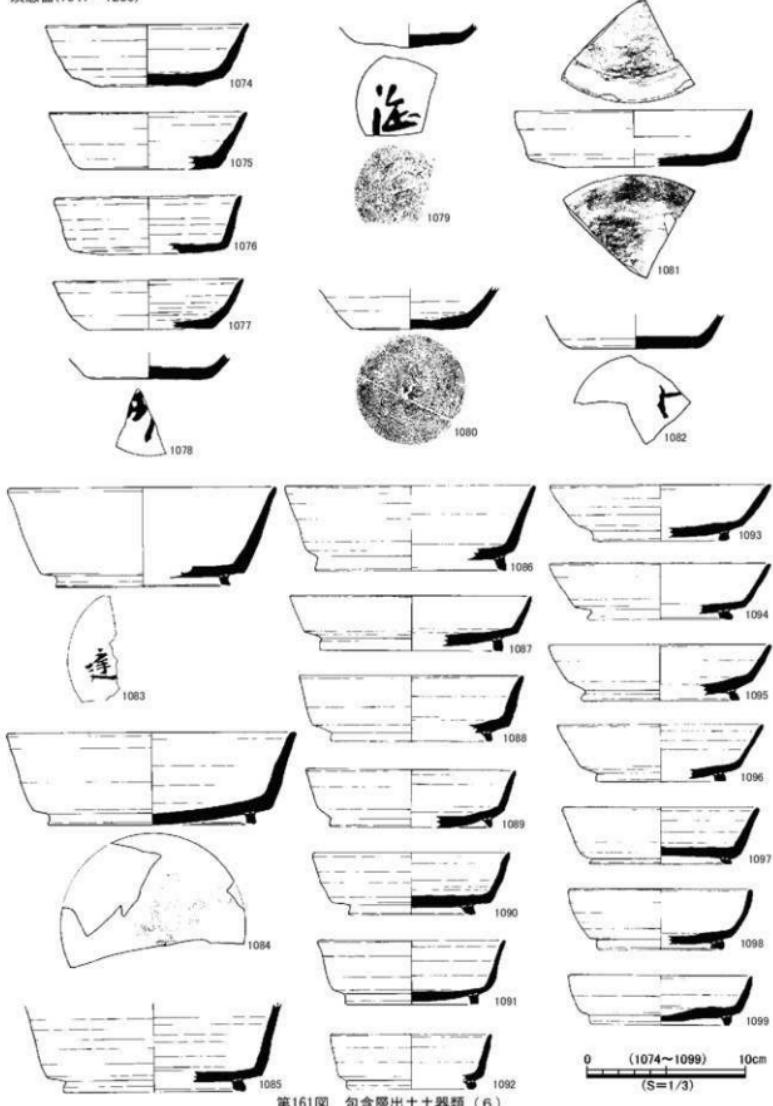
第159図 包含層出土土器類（4）

須恵器(1047~1285)



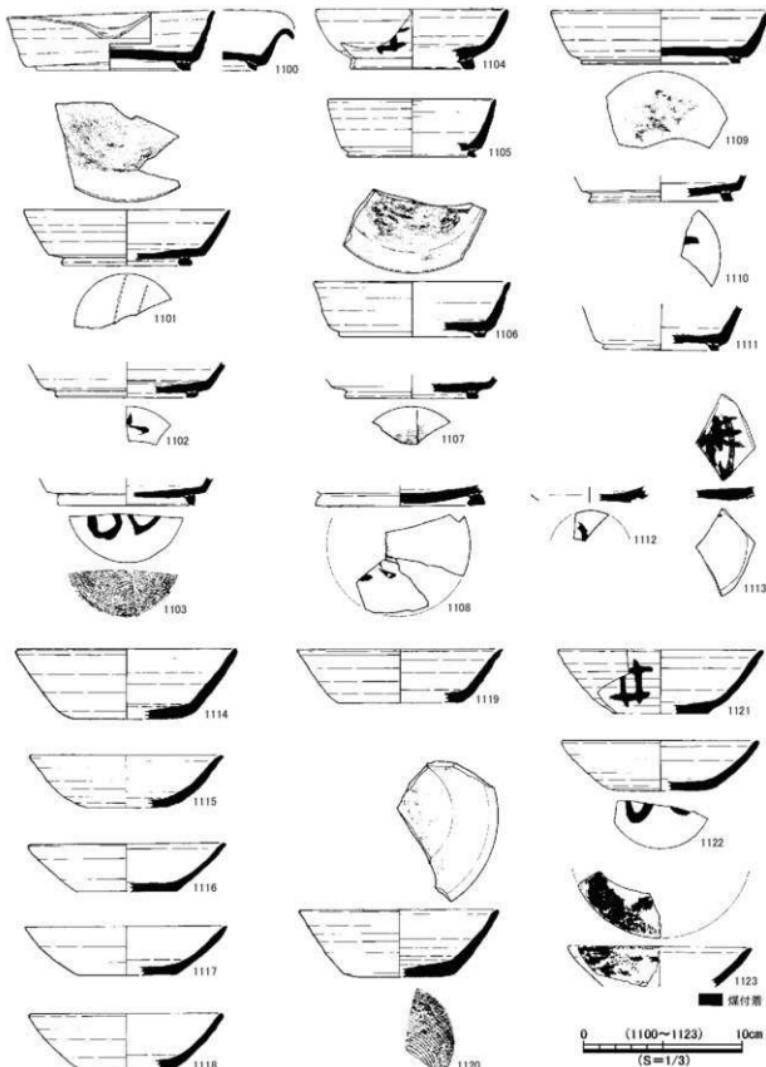
第160図 包含層出土土器類（5）

須惠器(1047~1285)



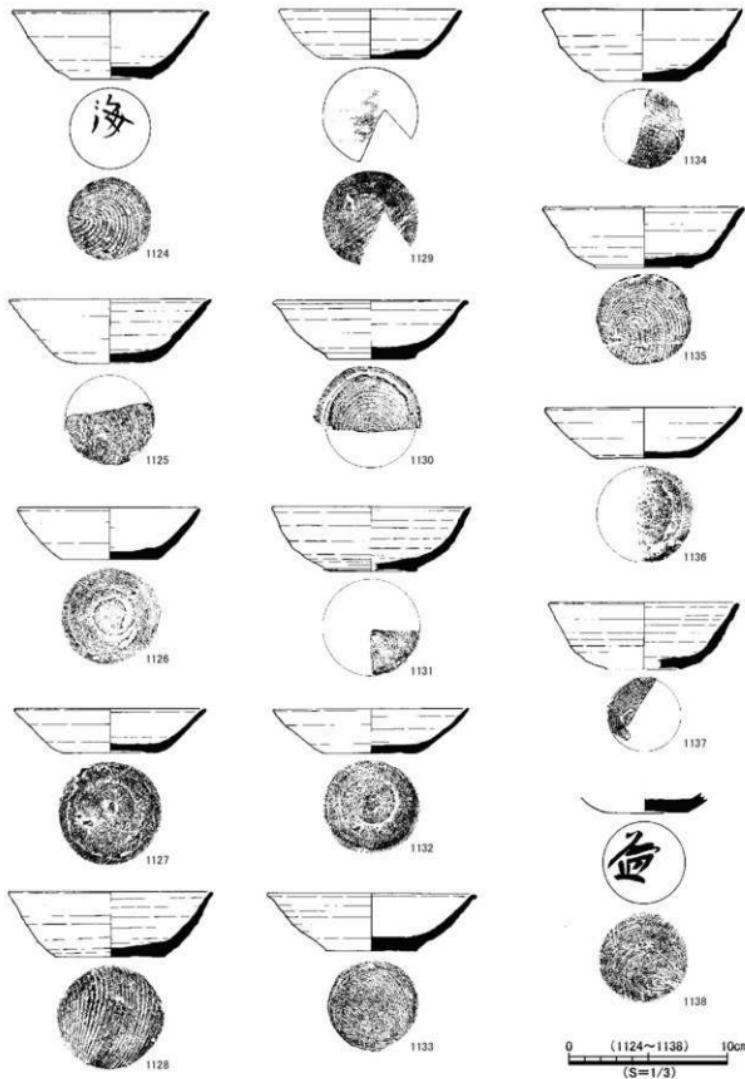
第161図 包含層出土土器類（6）

須恵器(1047~1285)



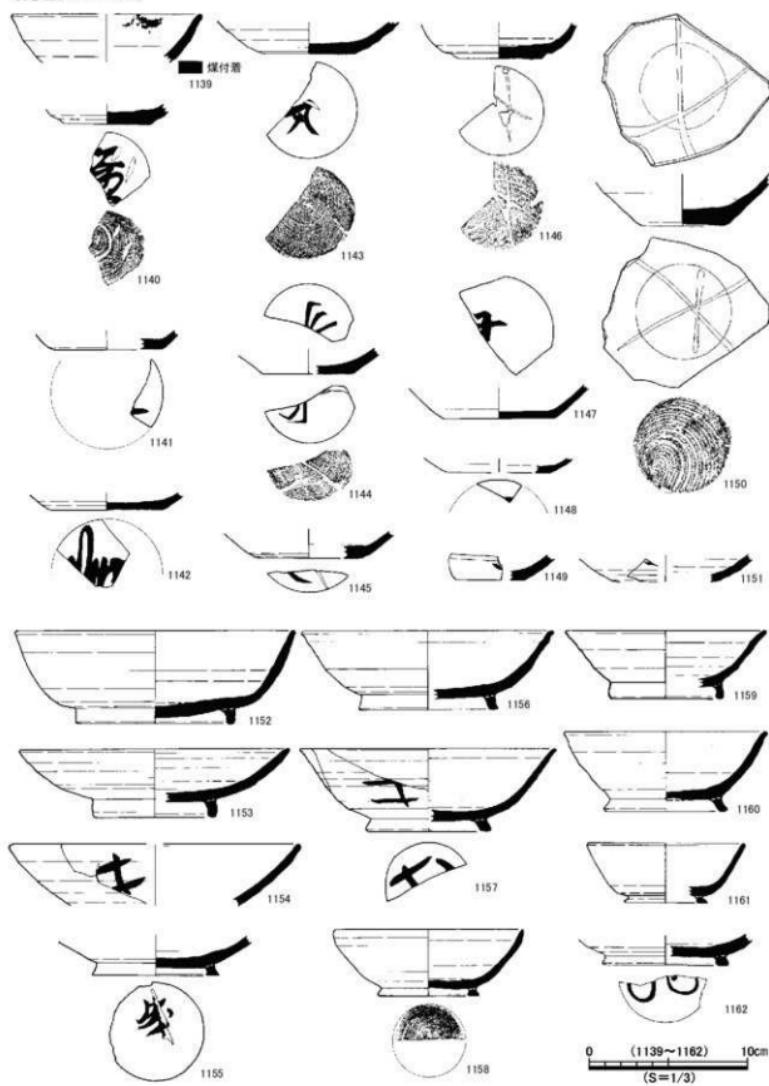
第162図 包含層出土土器類 (7)

須惠器(1047~1285)



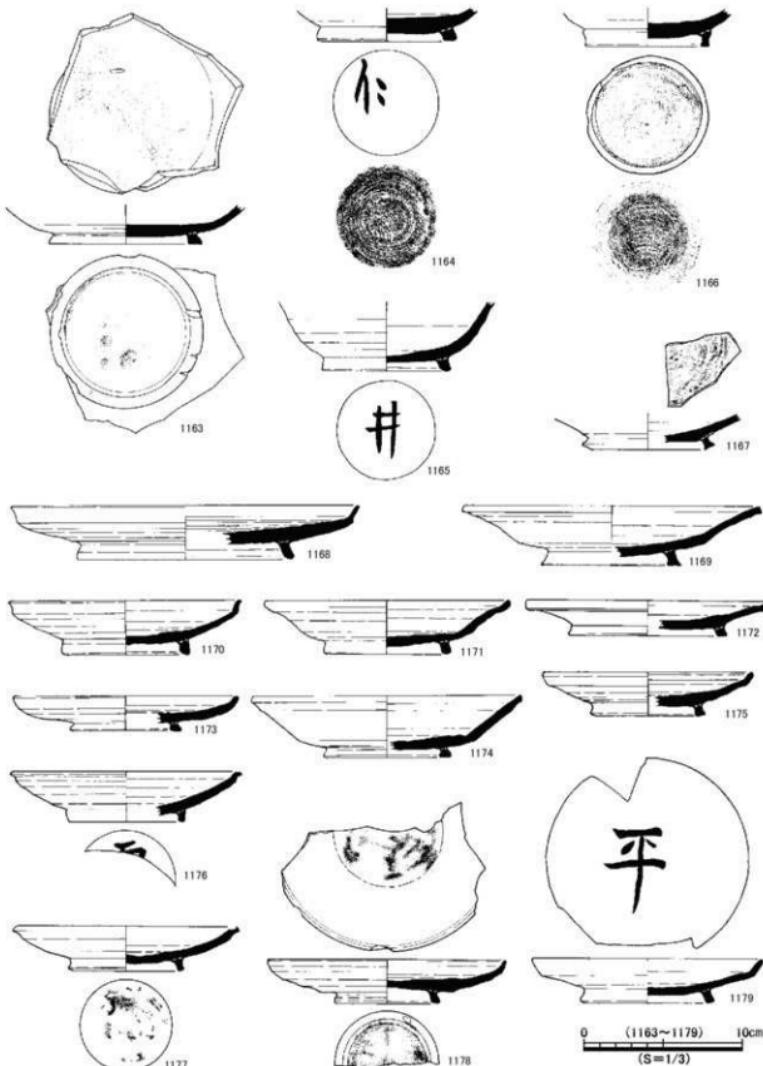
第163図 包含層出土土器類（8）

須恵器(1047~1285)



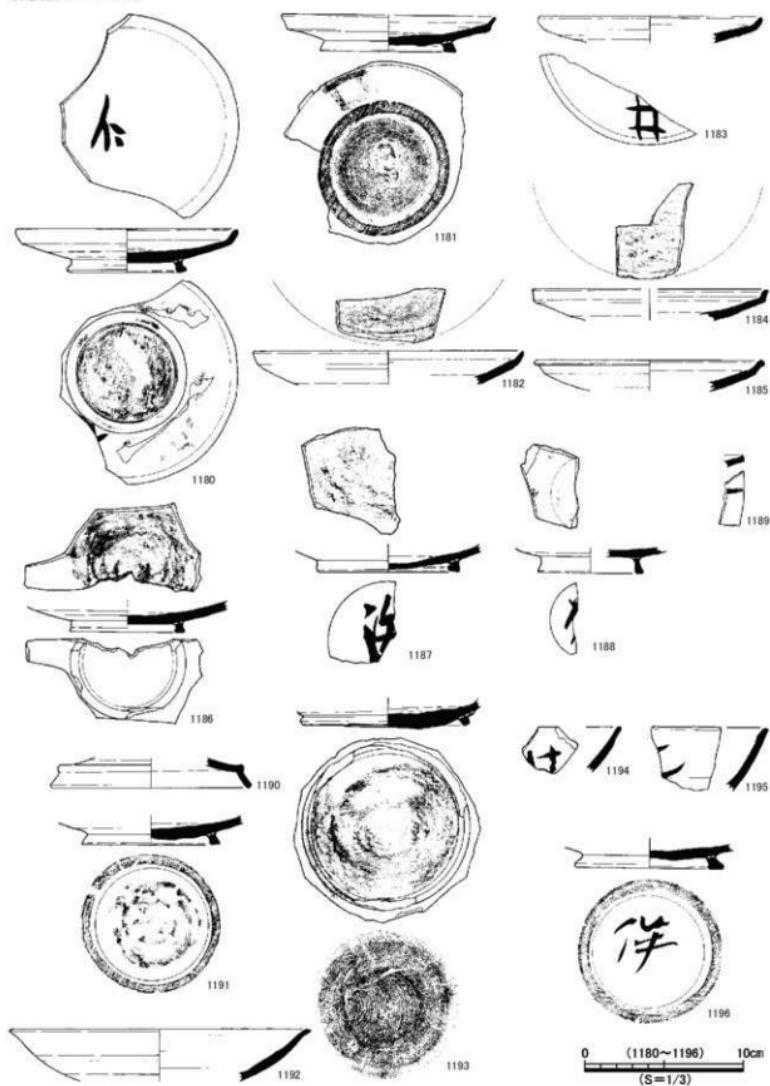
第164図 包含層出土土器類（9）

須惠器(1047~1285)



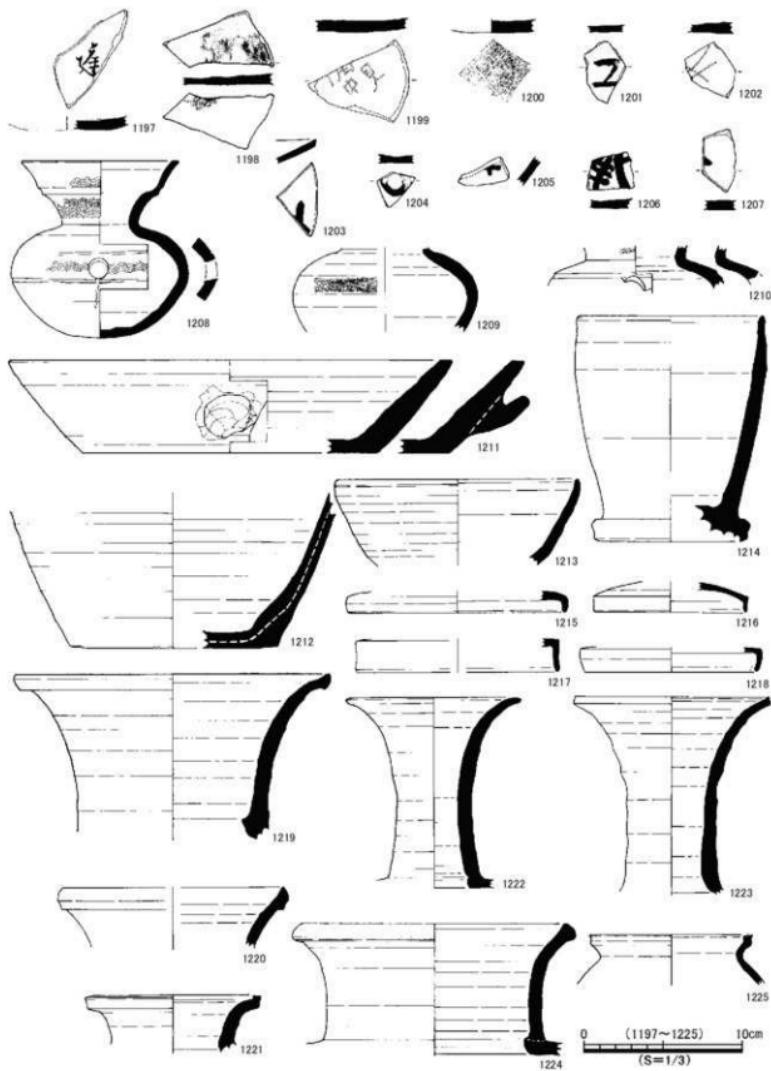
第165図 包含層出土土器類 (10)

須恵器(1047~1285)



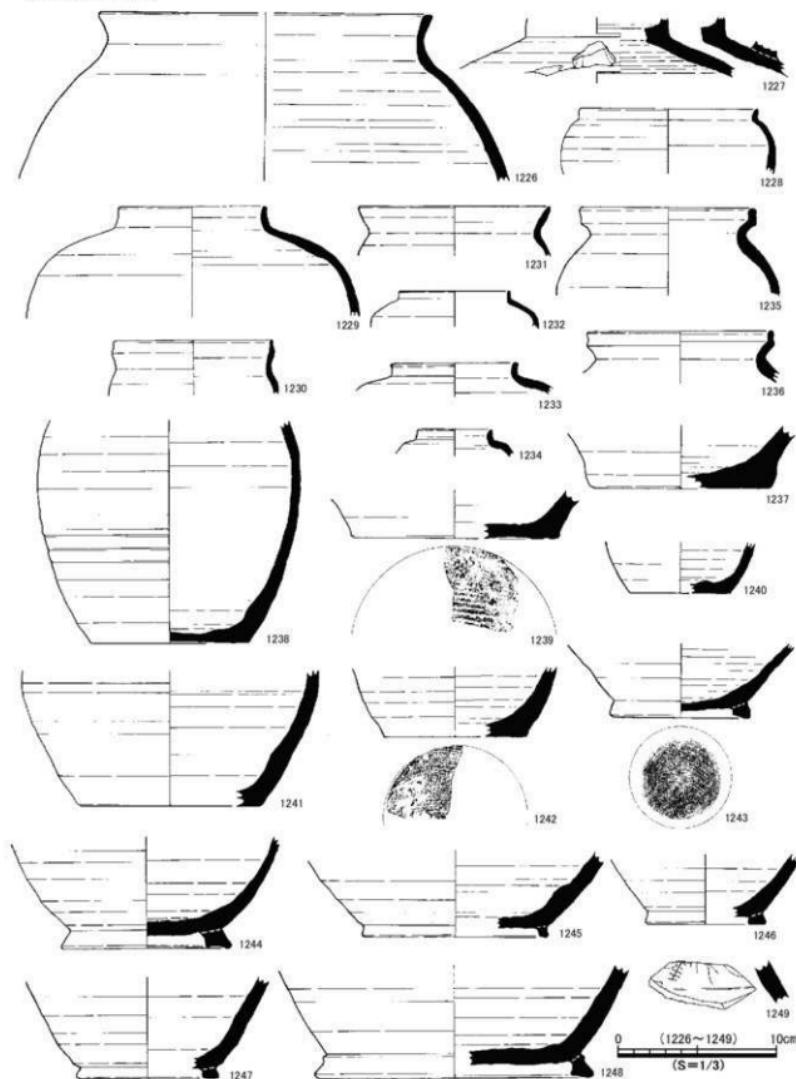
第166図 包含層出土土器類 (11)

須惠器(1047~1285)



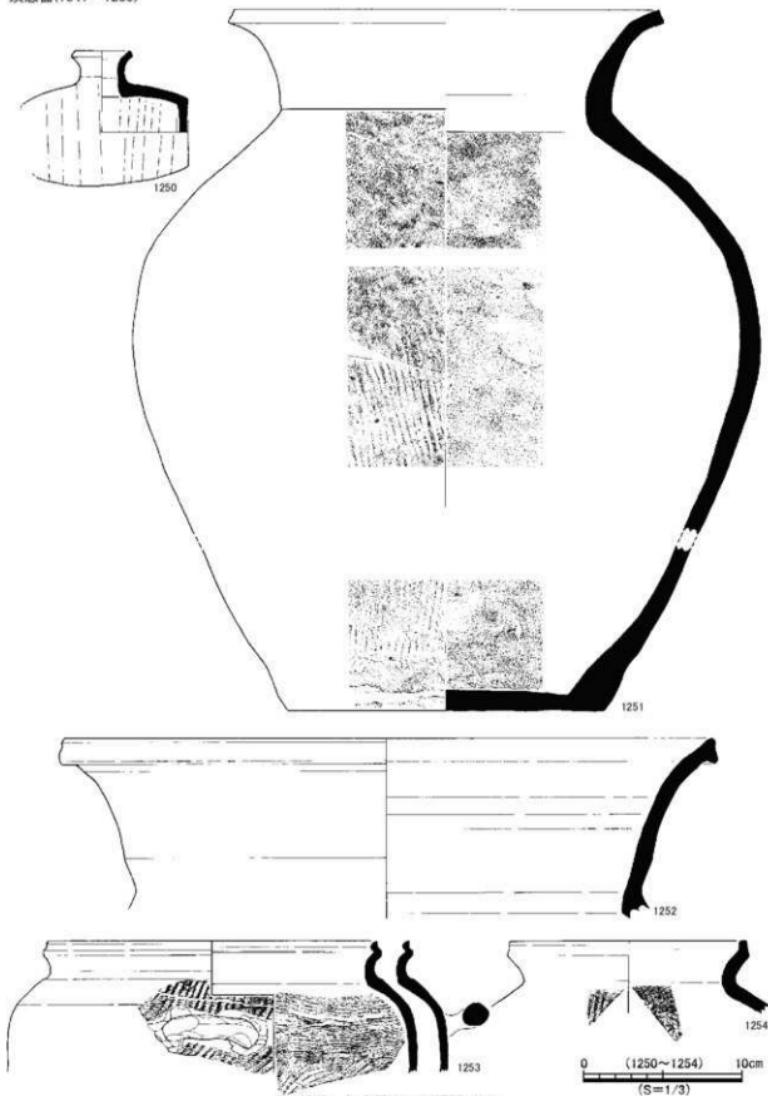
第167図 包含層出土土器類 (12)

須恵器(1047~1285)



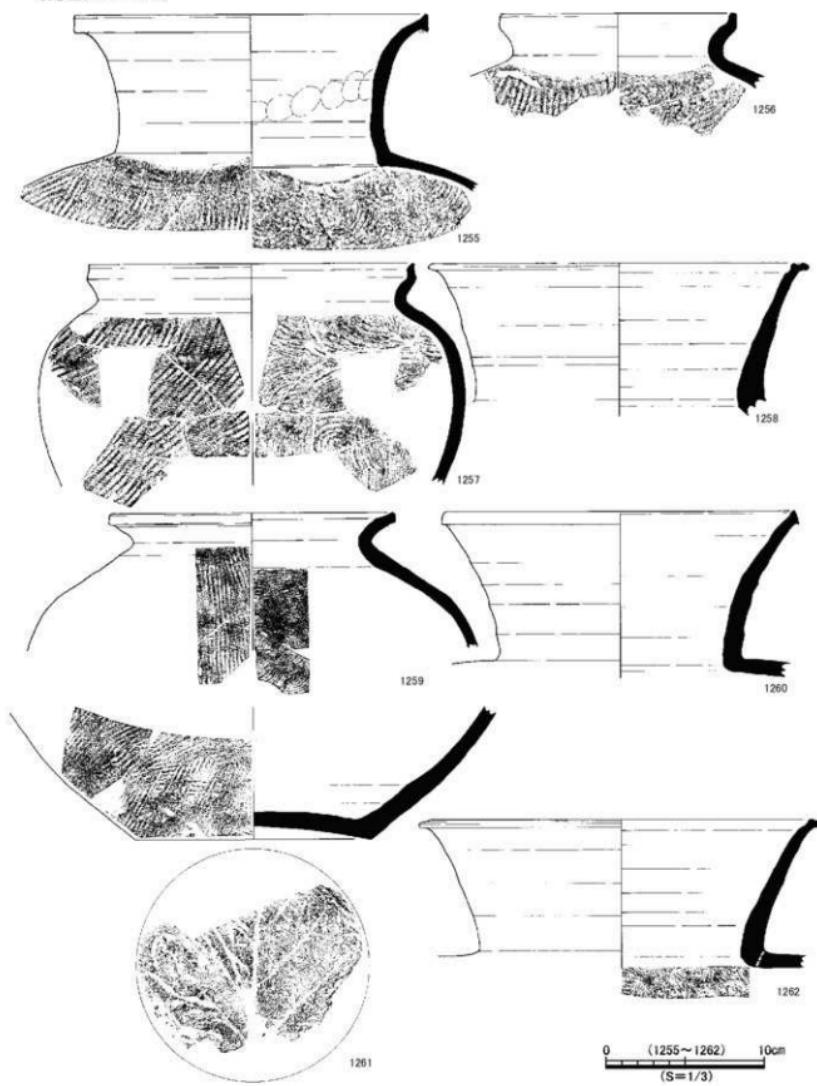
第168図 包含層出土土器類 (13)

須惠器(1047~1285)



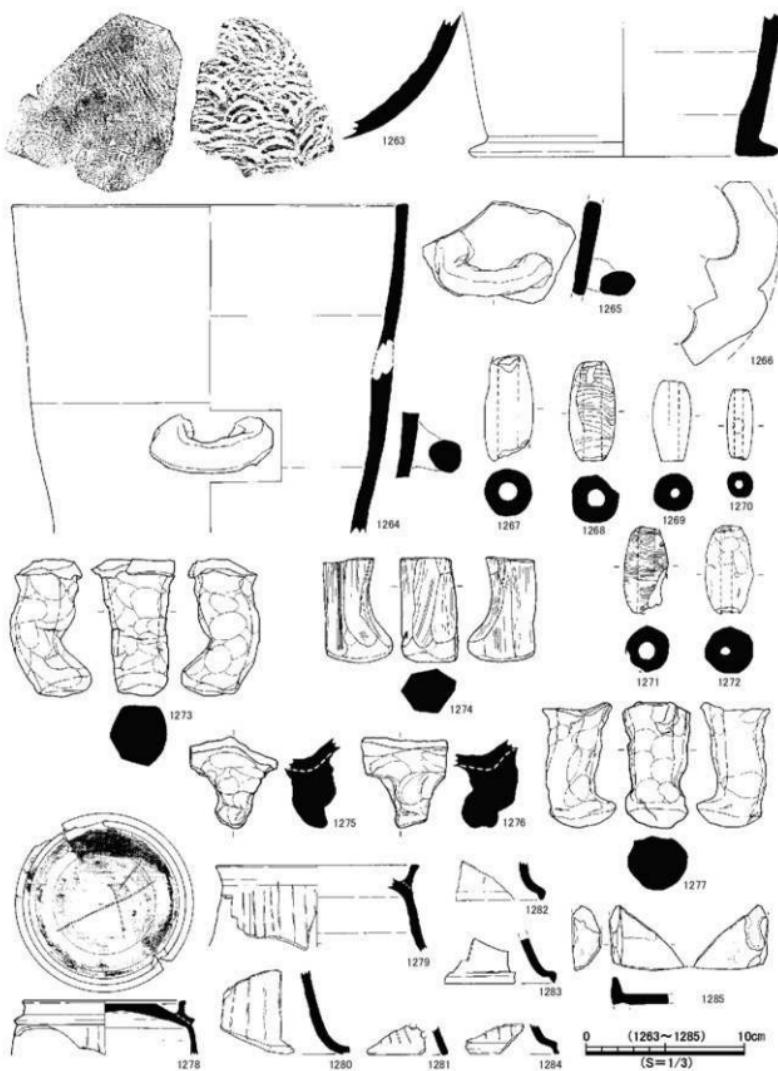
第169図 包含層出土土器類 (14)

須恵器(1047~1285)



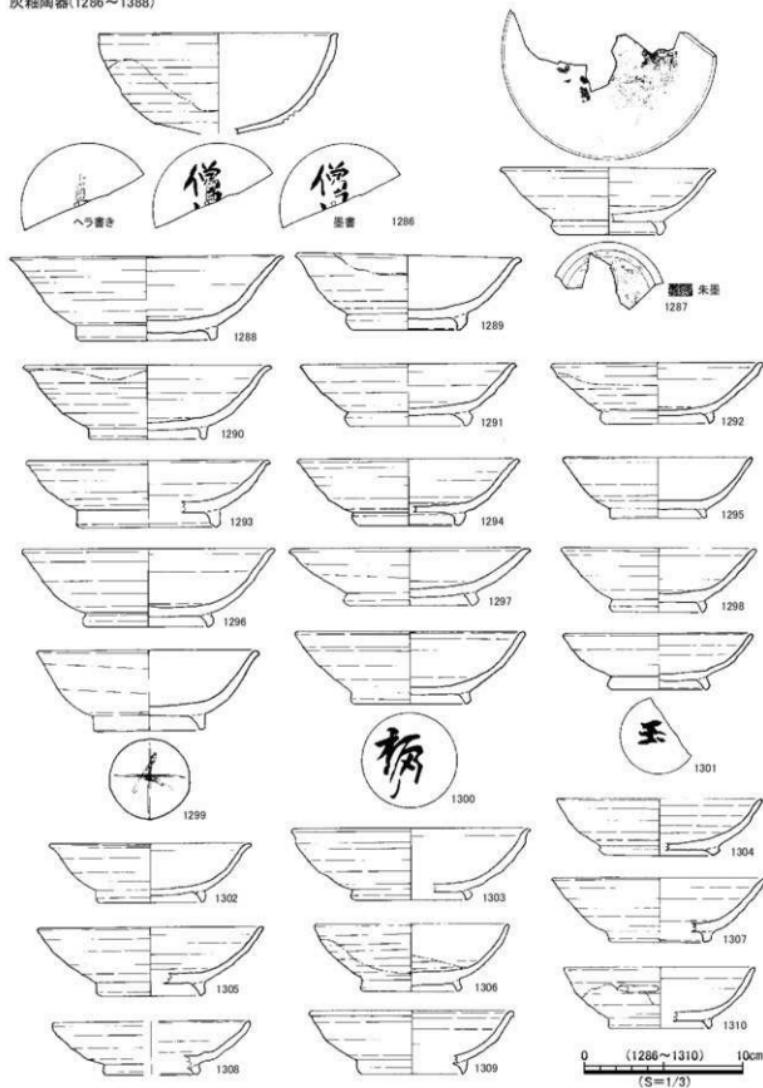
第170図 包含層出土土器類 (15)

須惠器(1047~1285)



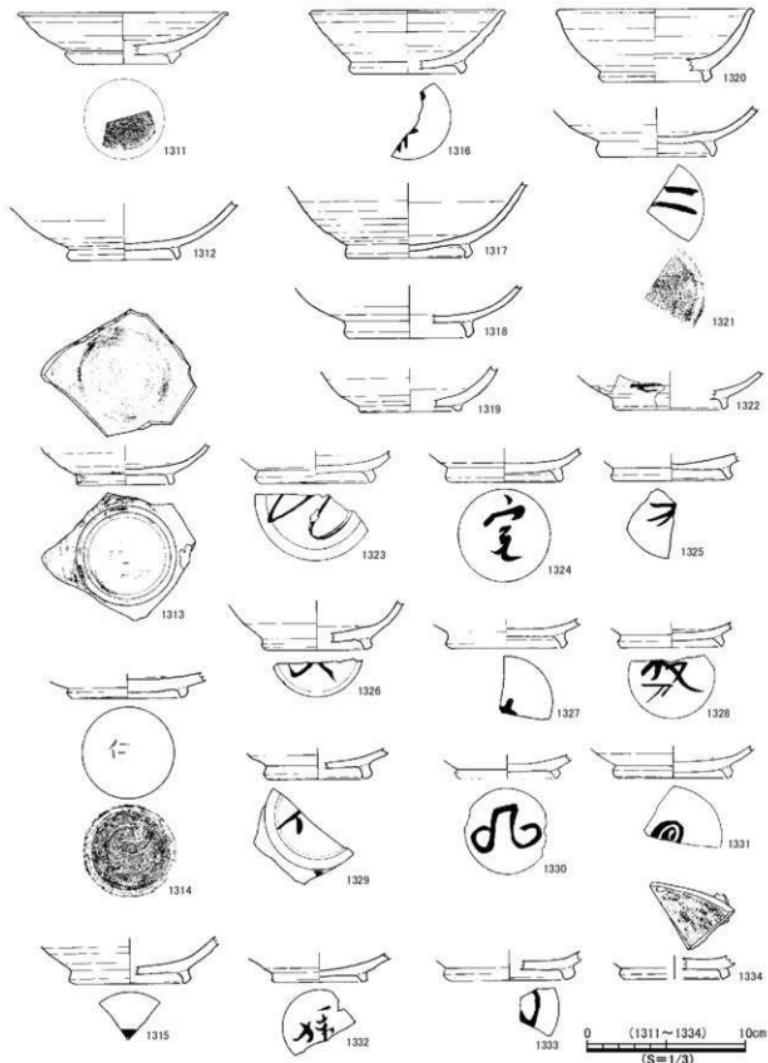
第171図 包含層出土土器類 (16)

灰釉陶器(1286～1388)



第172図 包含層出土土器類 (17)

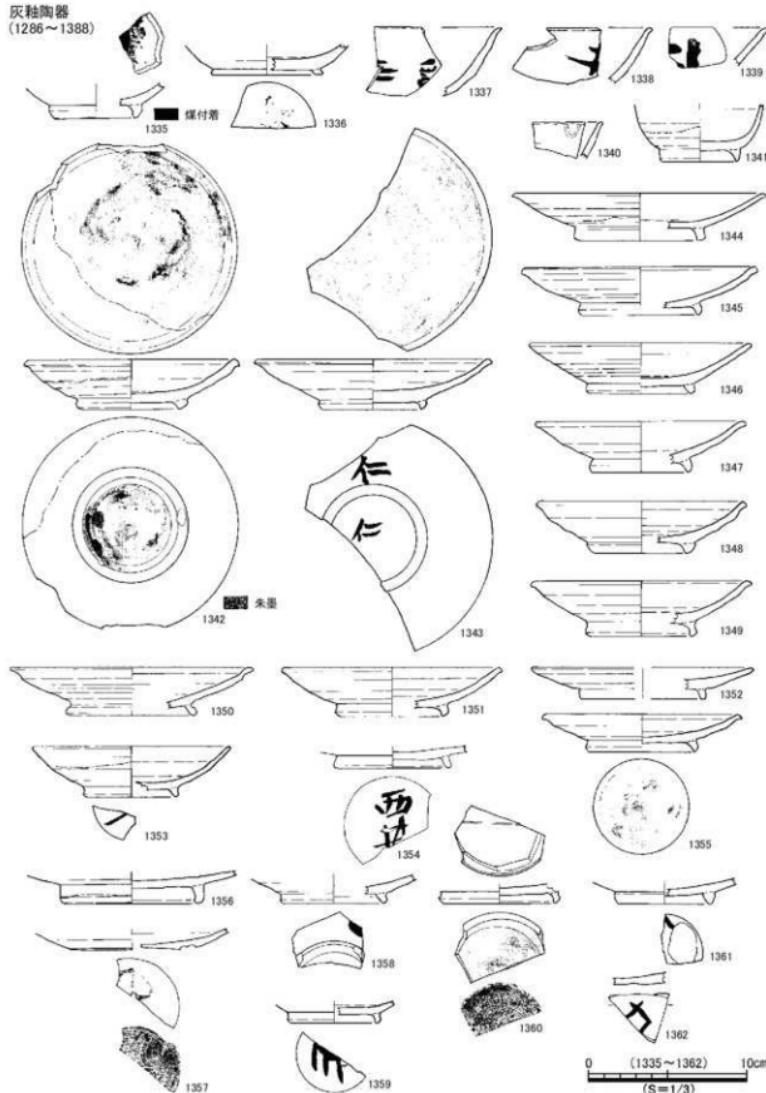
灰釉陶器(1286~1388)



第173図 包含層出土土器類 (18)

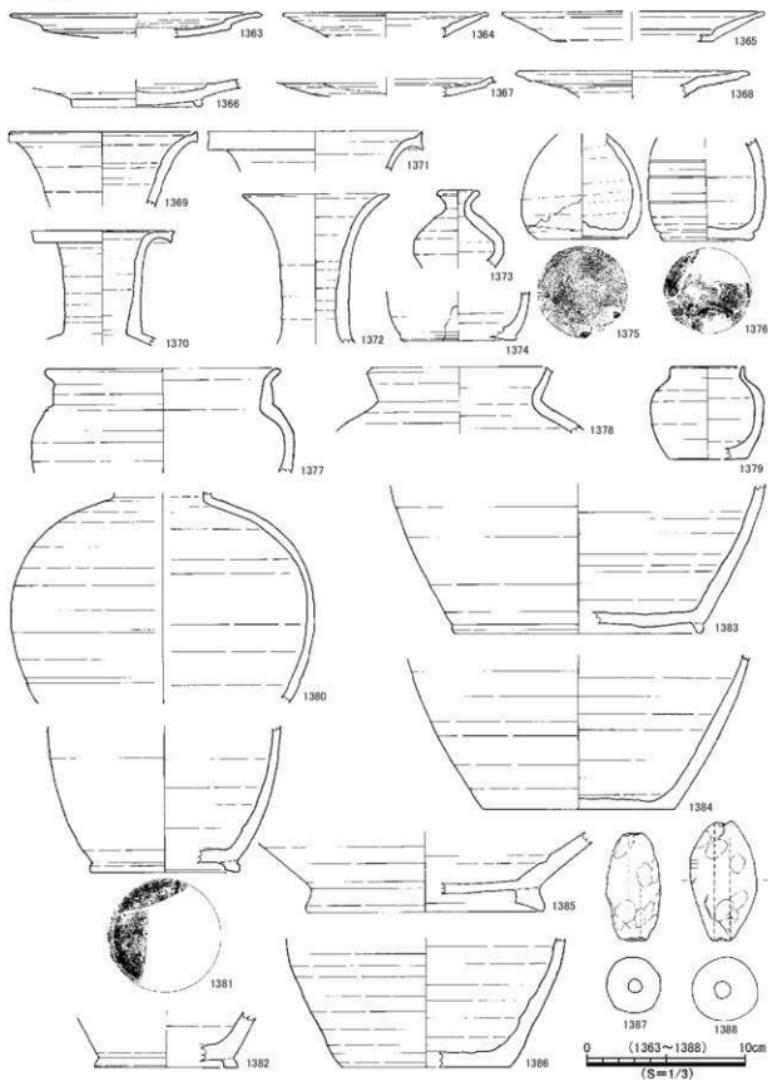
灰釉陶器

(1286～1388)



第174図 包含層出土土器類 (19)

灰釉陶器(1363～1388)



第175図 包含層出土土器類 (20)

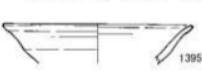
縁鉢陶器(1389～1391)



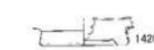
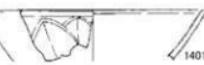
1390 1391



土師質土器(1392～1397)

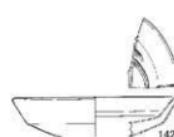


輸入磁器(1398～1425)

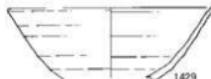


1421

1422



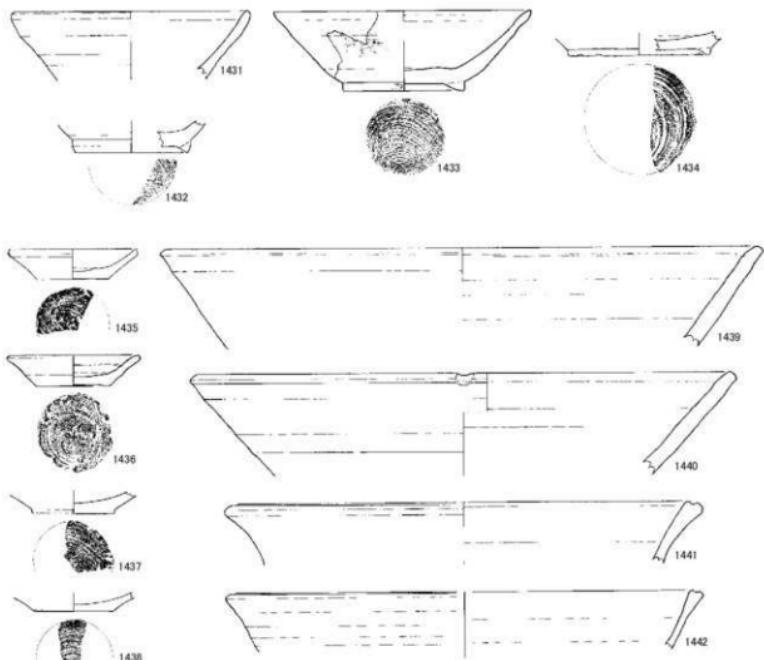
山茶碗(1426～1442)



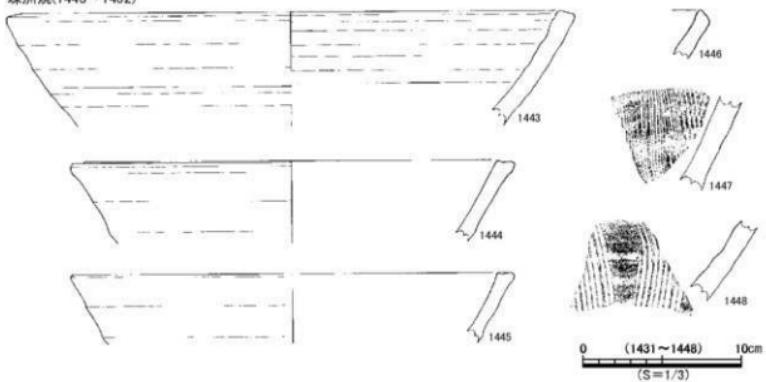
0 (1389～1430) 10cm
(S=1/3)

第176図 包含層出土土器類(2)

山茶碗(1426~1442)

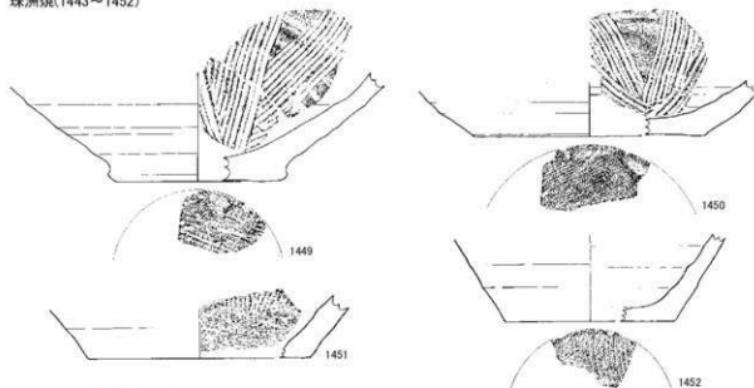


珠洲焼(1443~1452)



第177図 包含層出土土器類 (22)

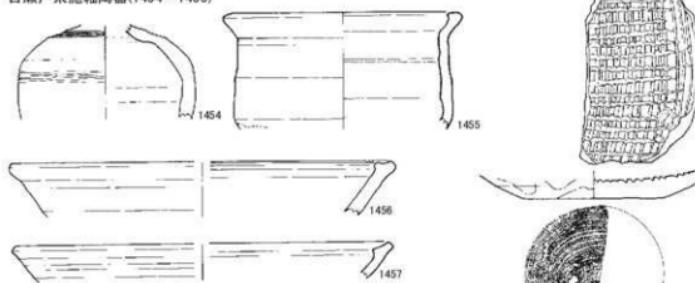
珠洲焼(1443~1452)



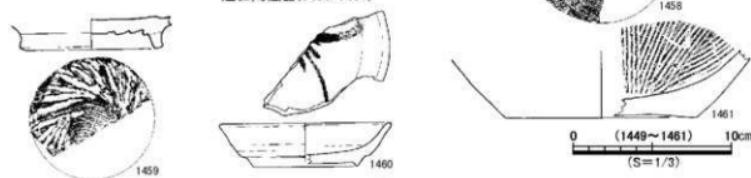
常滑焼(1453)



古瀬戸系施釉陶器(1454~1459)



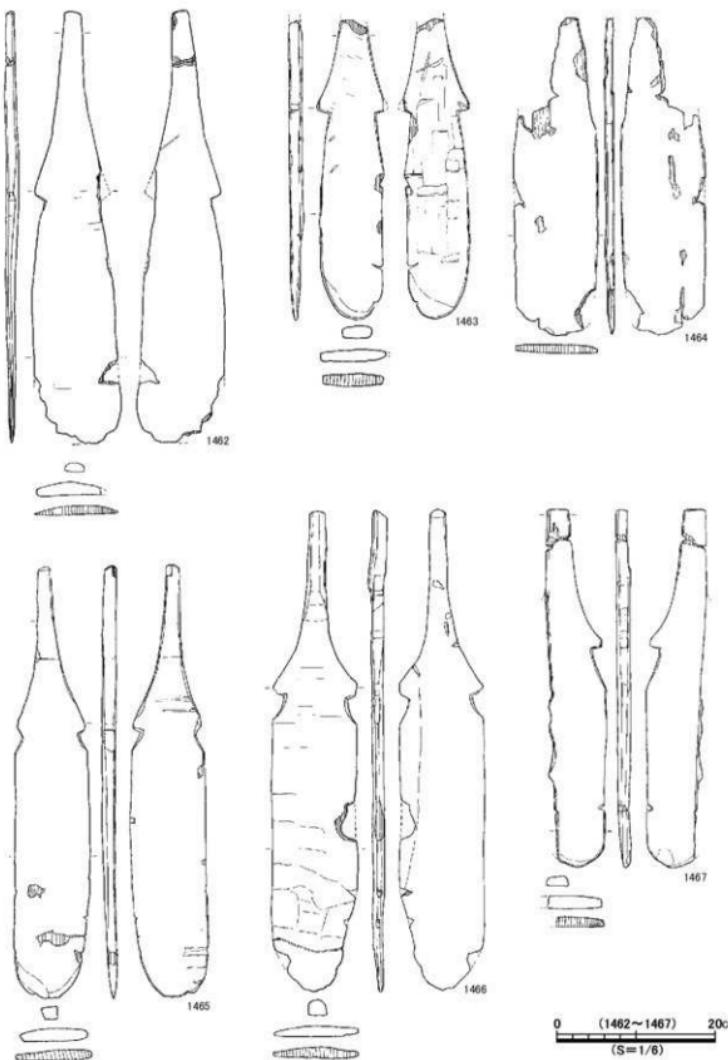
近世陶磁器(1460-1461)



0 (1449~1461) 10cm
(S=1/3)

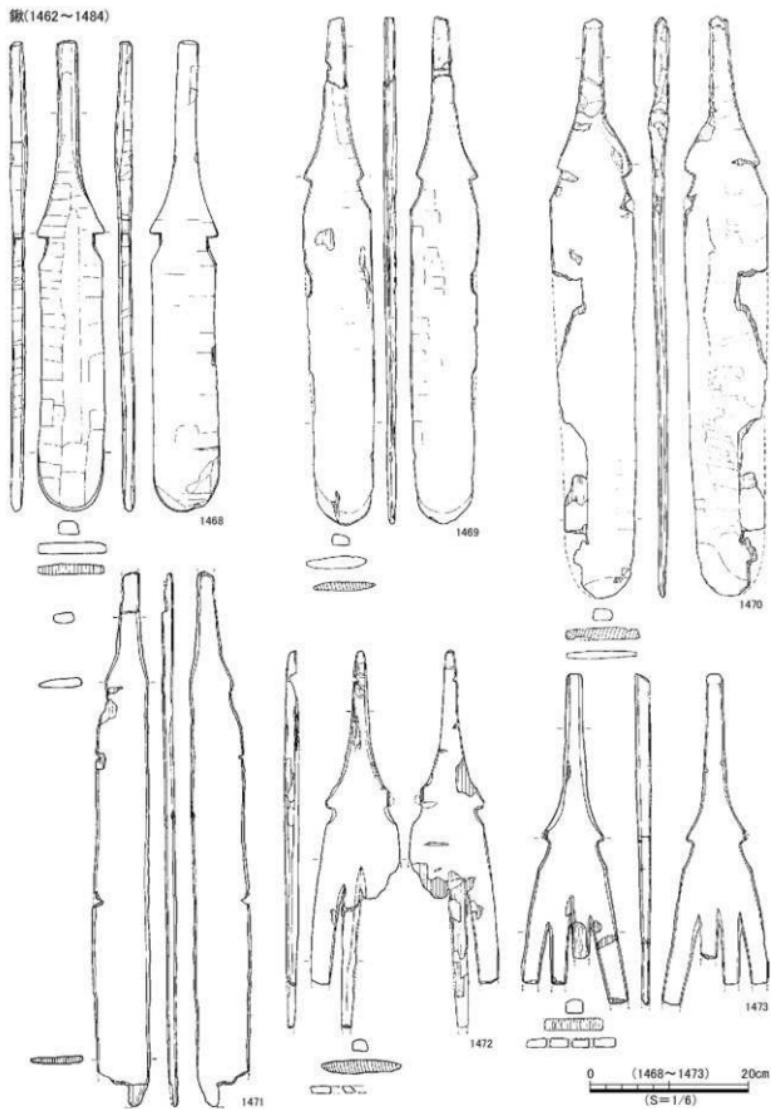
第178図 包含層出土土器類 (23)

鉛(1462～1484)



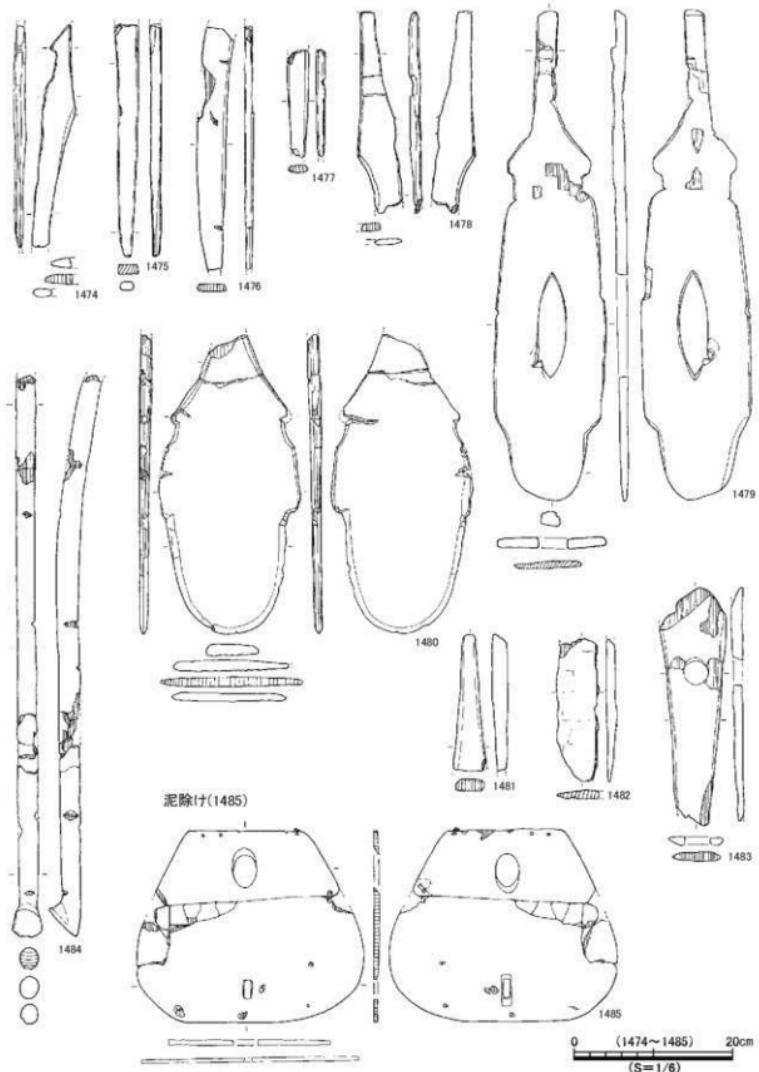
第179図 包含層出土木器類（1）

鉢(1462～1484)



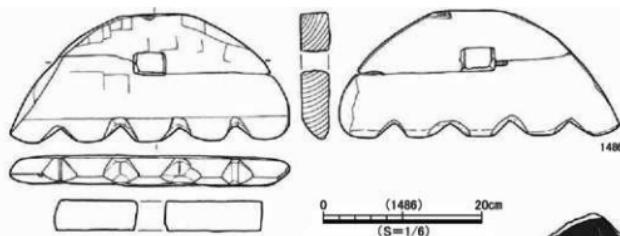
第180図 包含層出土木器類（2）

鉛(1462～1484)

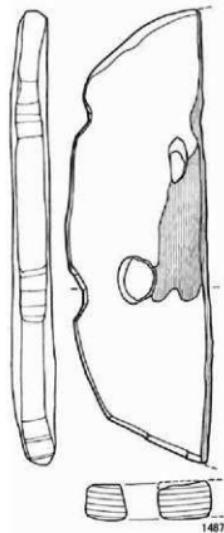


第181図 包含層出土木器類（3）

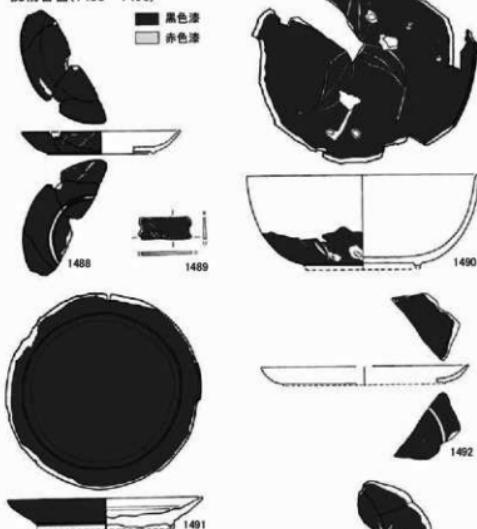
えぶり(1486)



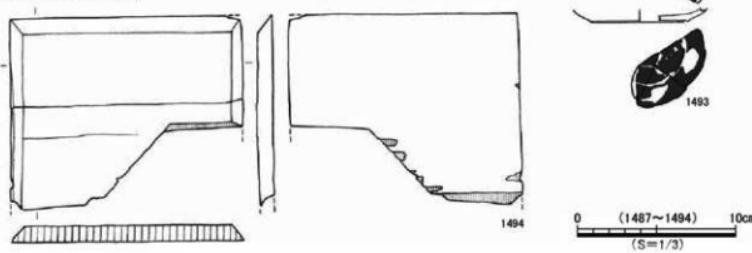
田下駄(1487)



挽物容器(1488~1493)

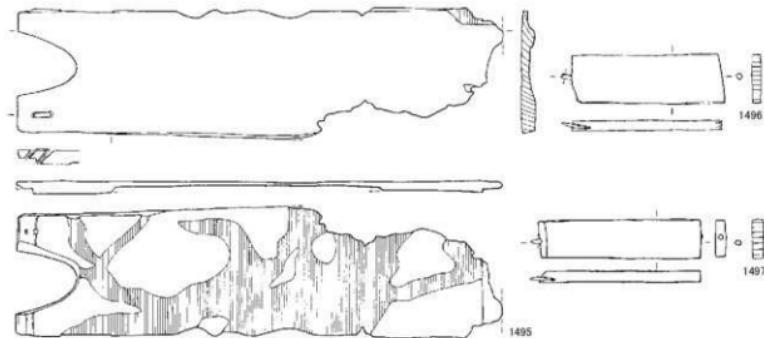


組物容器(1494~1497)

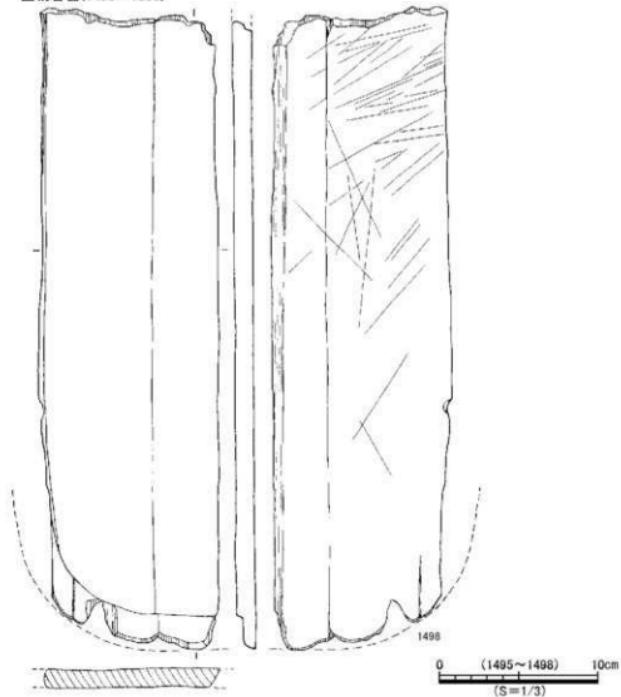


第182図 包含層出土木器類（4）

組物容器(1494~1497)

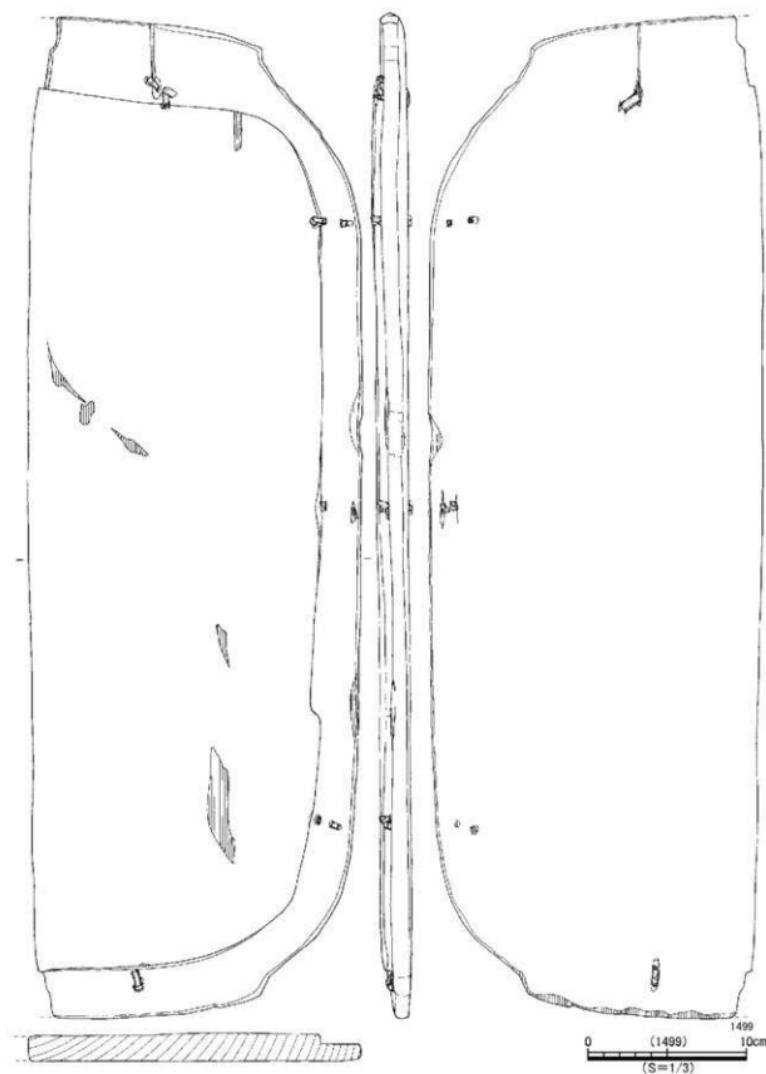


曲物容器(1498~1536)

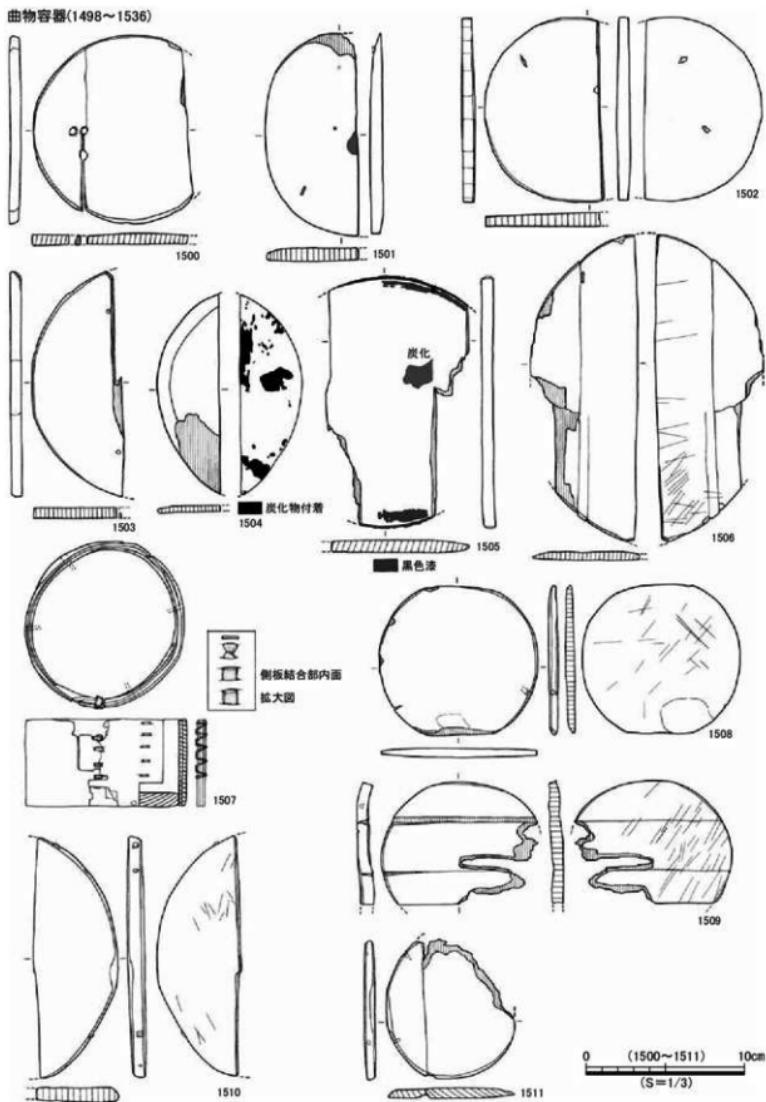


第183図 包含層出土木器類（5）

曲物容器(1498～1536)

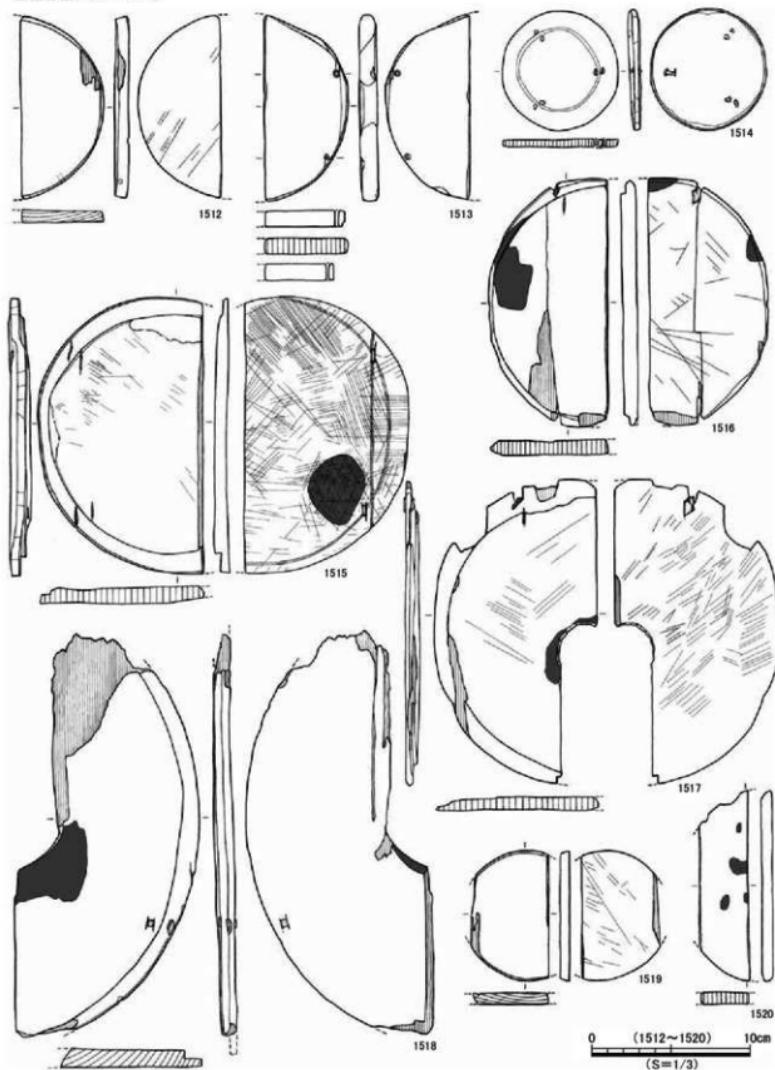


第184図 包含層出土木器類（6）

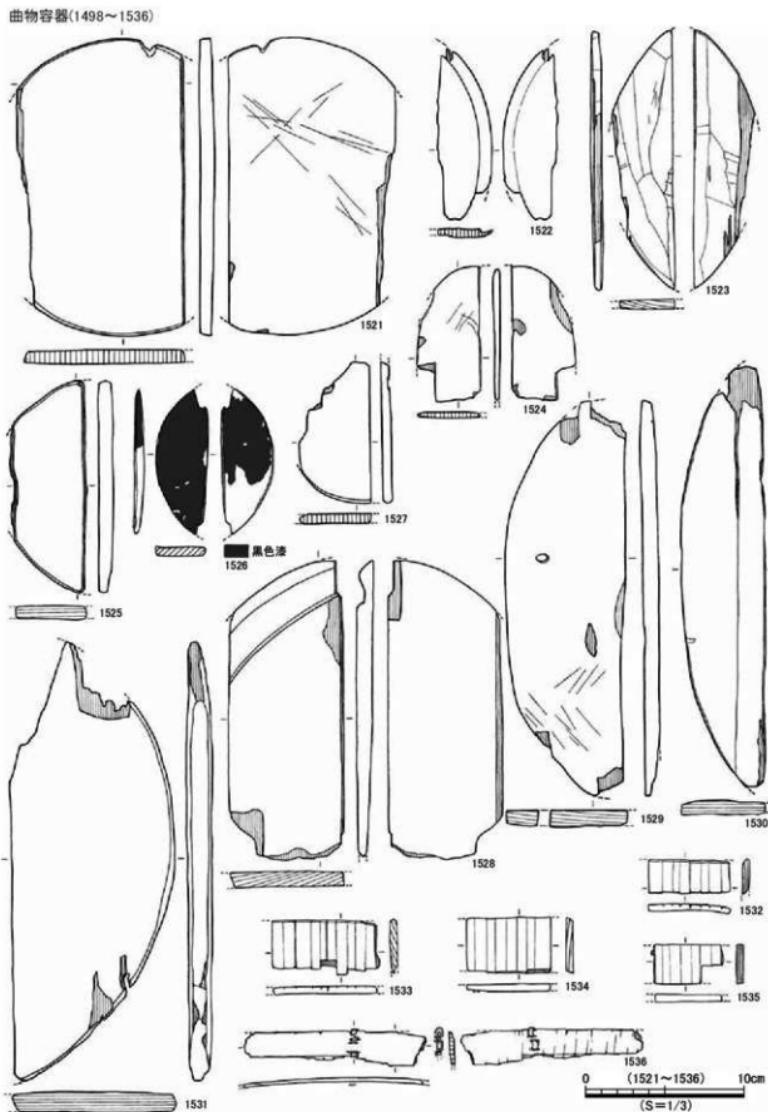


第185図 包含層出土木器類 (7)

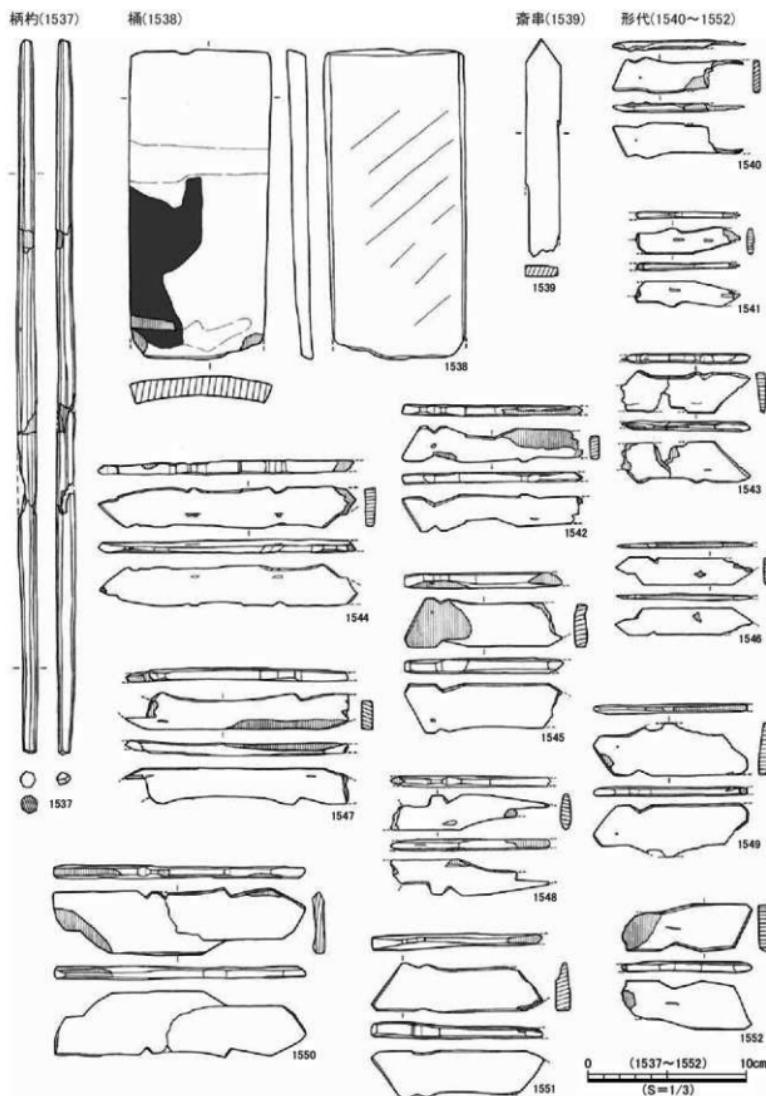
曲物容器(1498~1536)



第186図 包含層出土木器類（8）

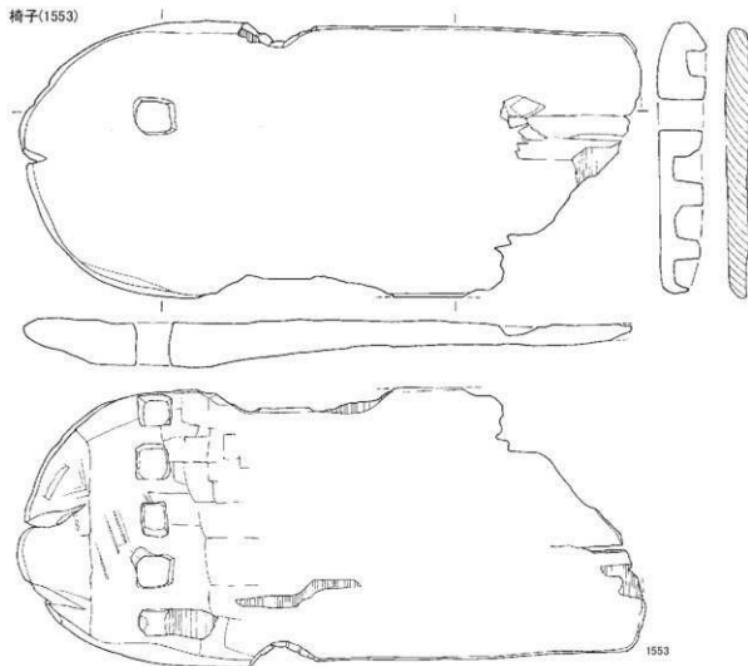


第187図 包含層出土木器類（9）

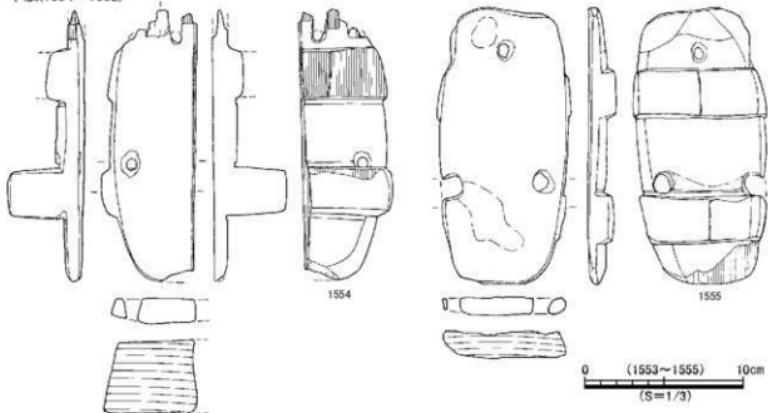


第188図 包含層出土木器類 (10)

椅子(1553)

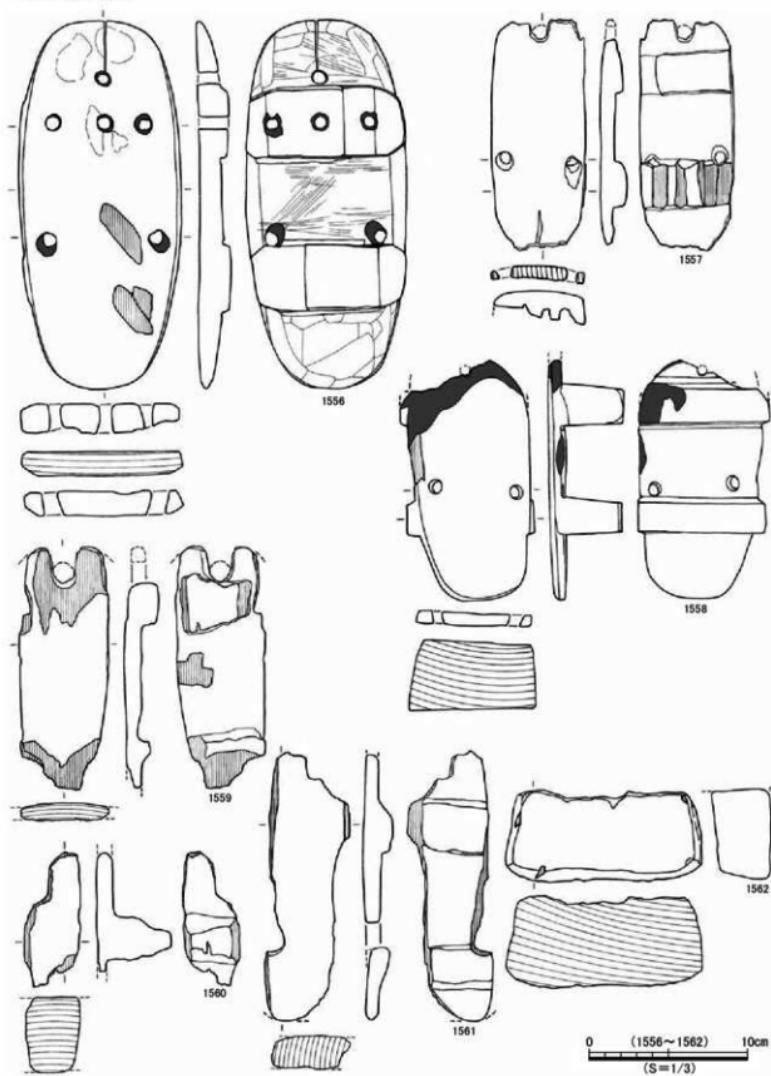


下駄(1554~1562)

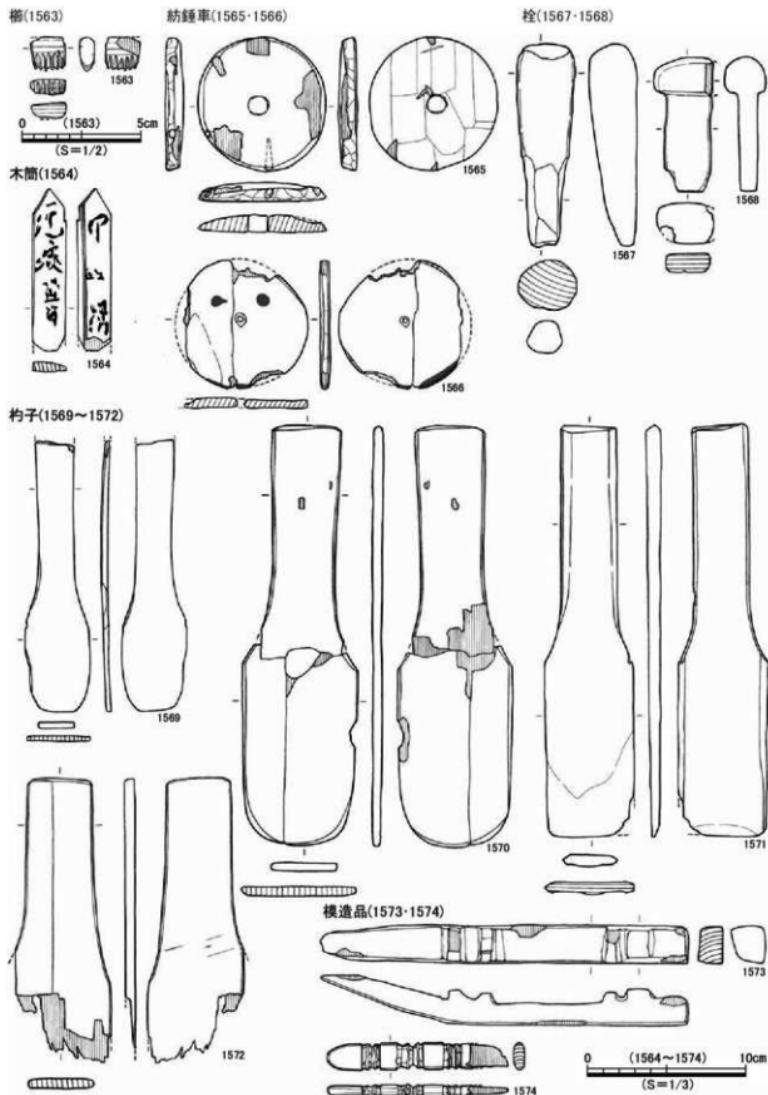


第189図 包含層出土木器類 (11)

下駄(1554～1562)

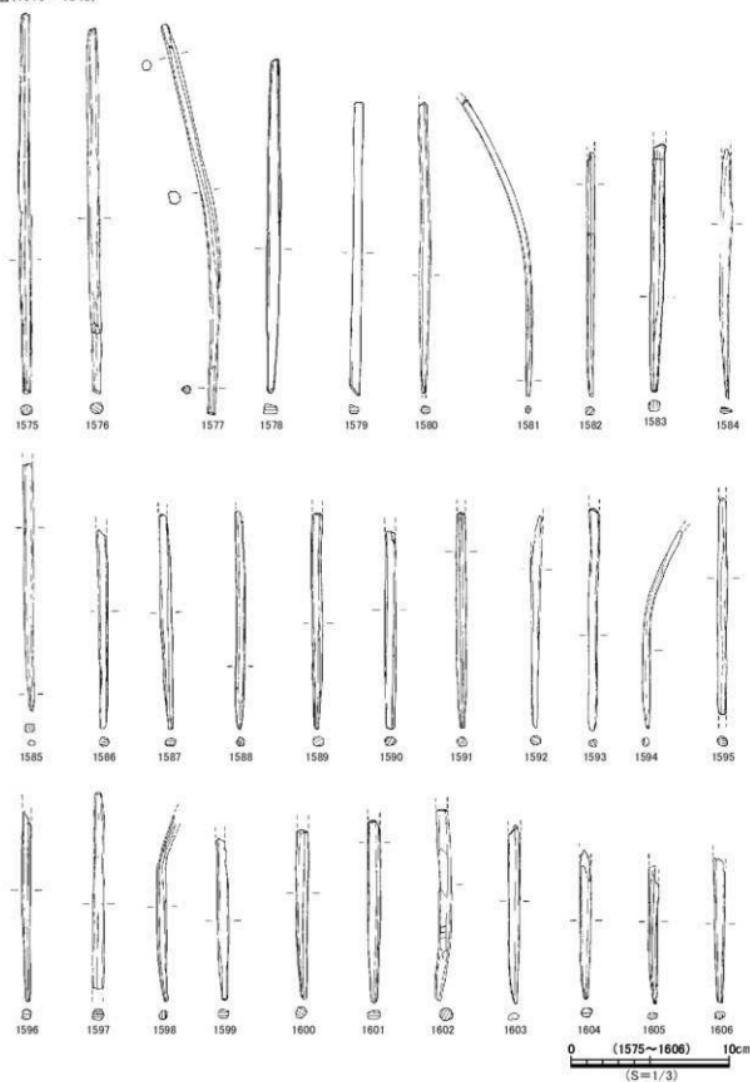


第190図 包含層出土木器類 (12)



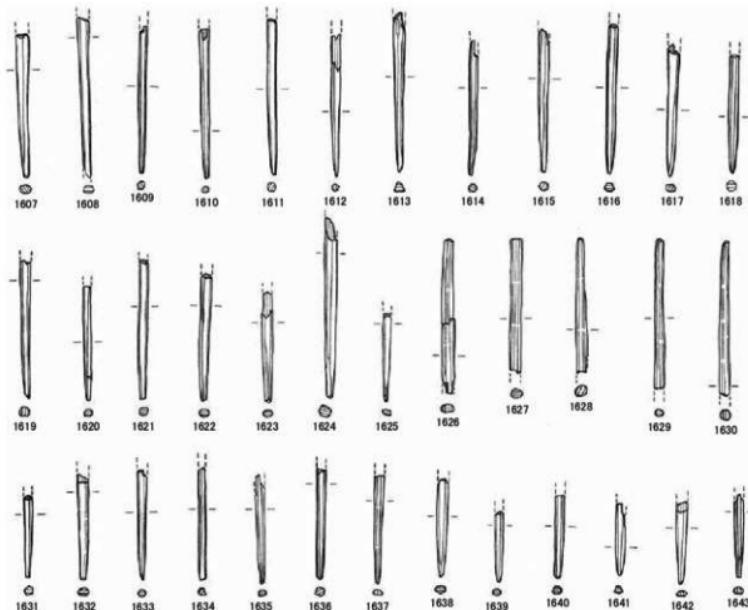
第191図 包含層出土木器類 (13)

著(1575～1643)

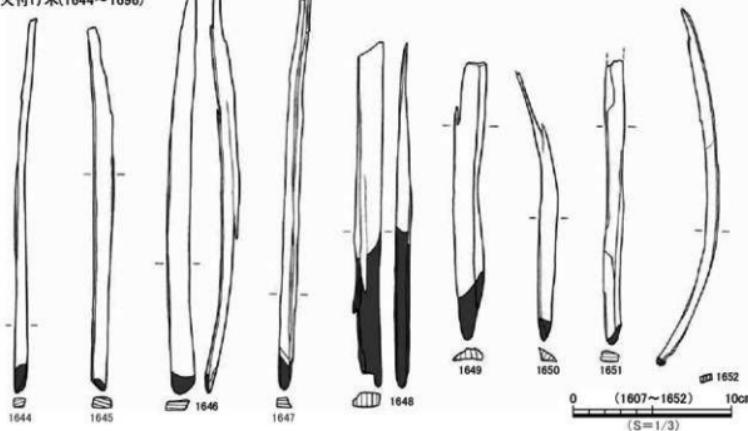


第192図 包含層出土木器類 (14)

箸(1575~1643)

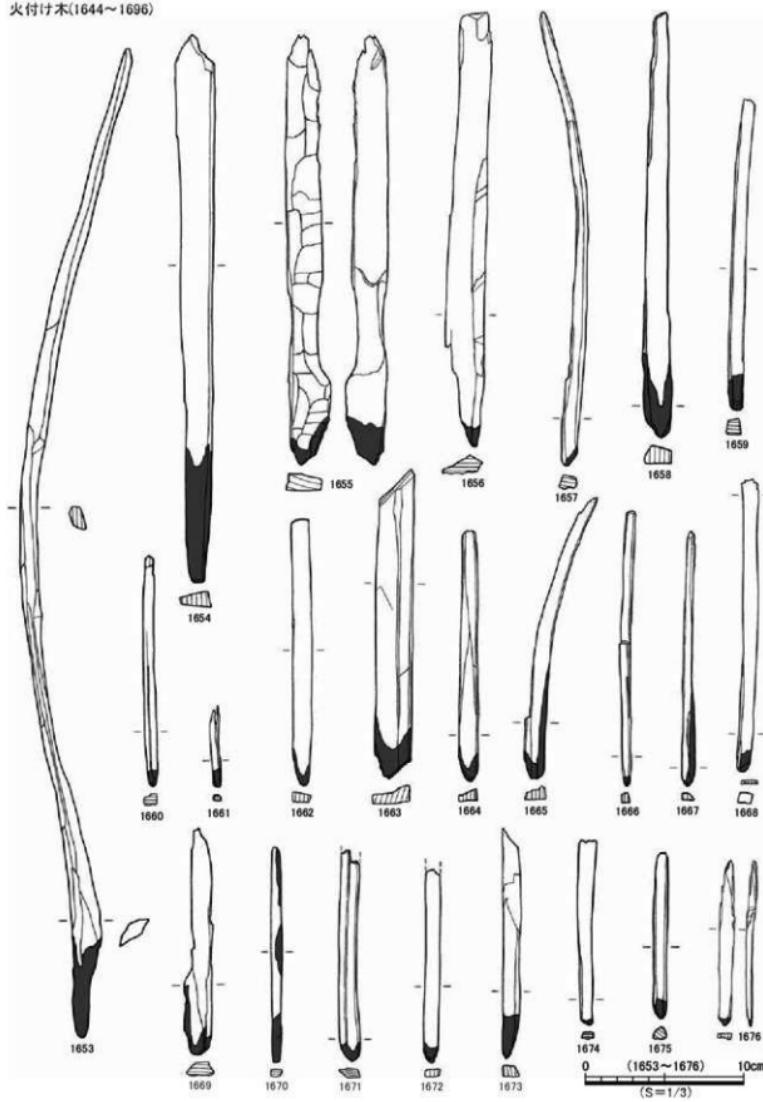


火付木(1644~1696)



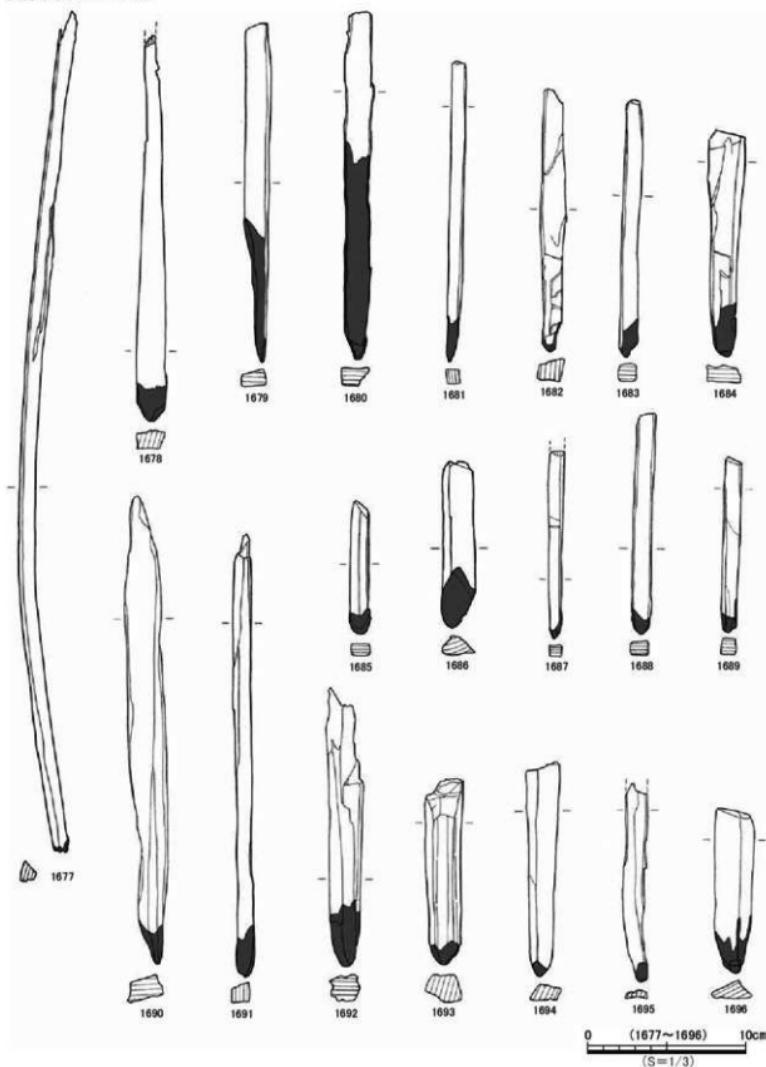
第193図 包含層出土木器類 (15)

火付け木(1644～1696)



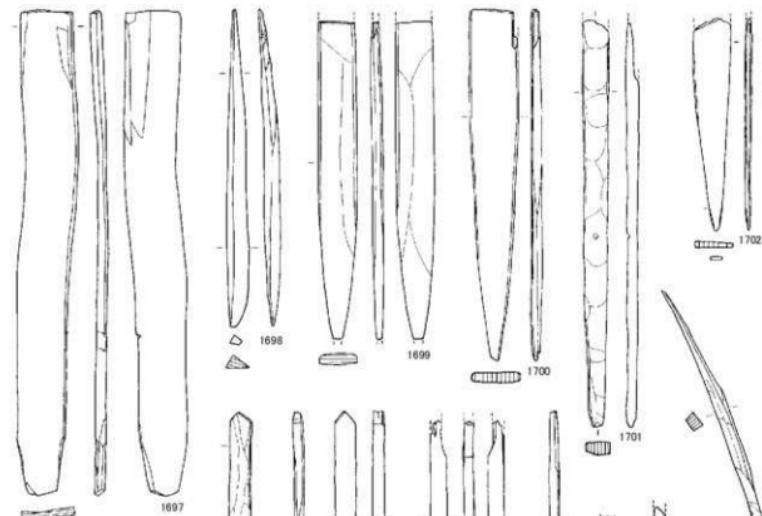
第194図 包含層出土木器類 (16)

火付け木(1644～1696)

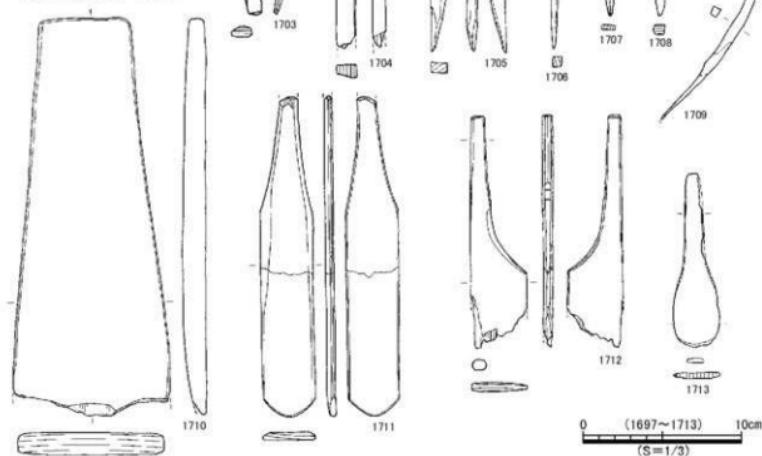


第195図 包含層出土木器類 (17)

串状木製品(1697~1709)

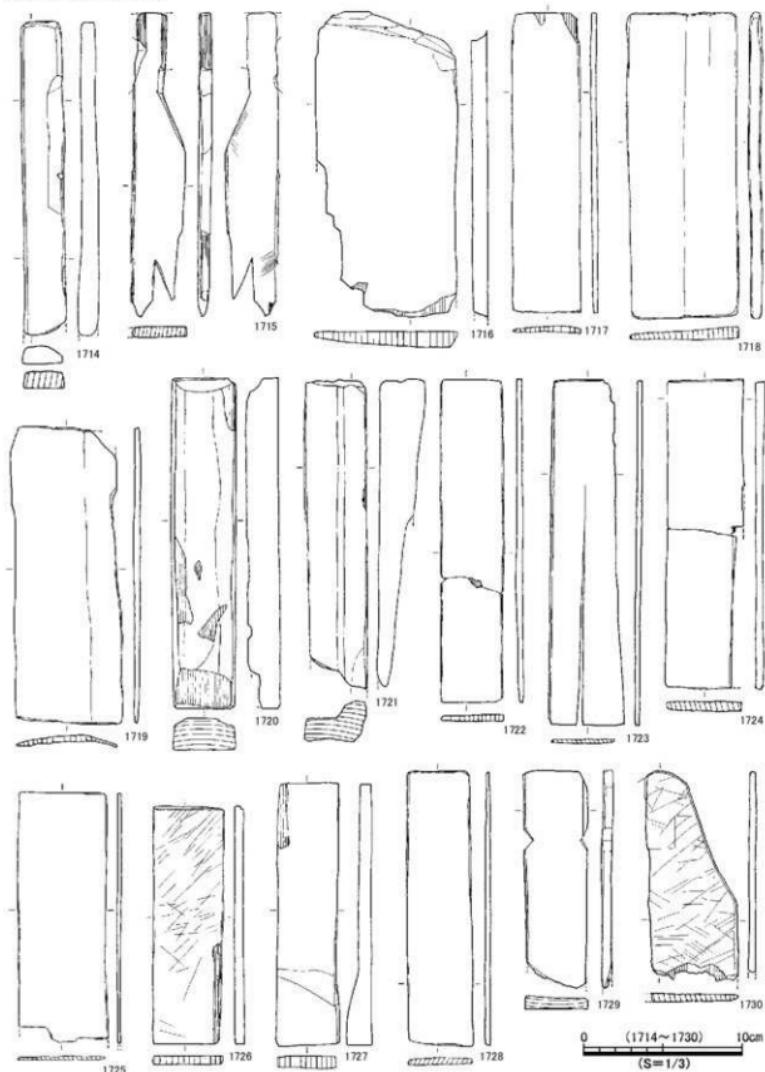


へら状木製品(1710~1713)



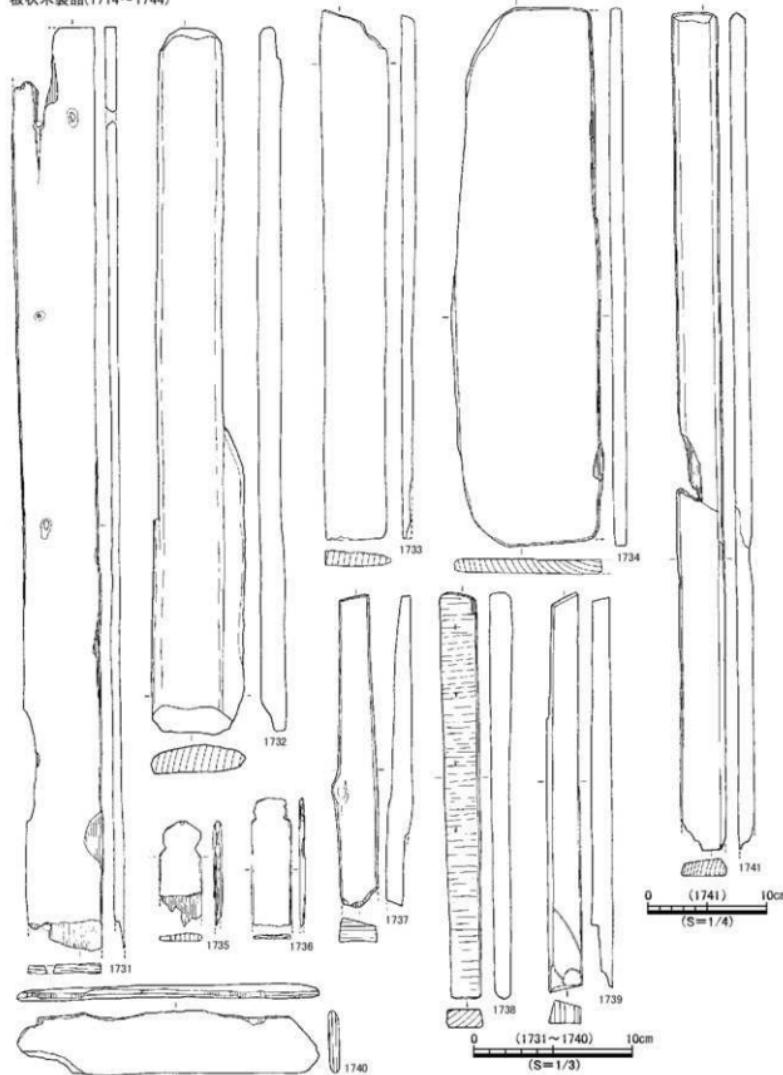
第196図 包含層出土木器類 (18)

板状木製品(1714～1744)



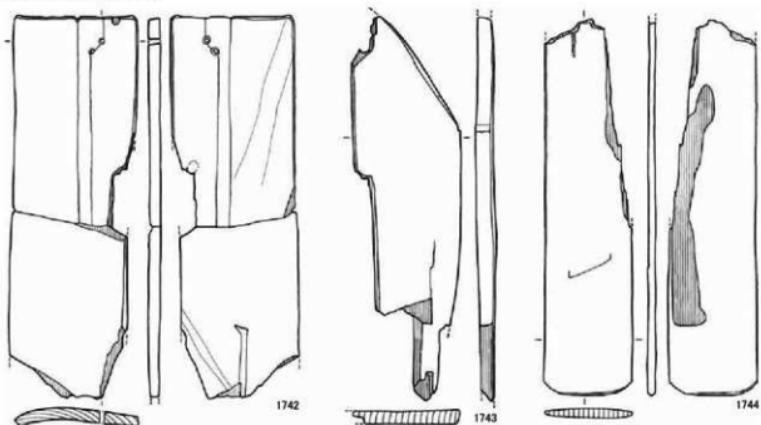
第197図 包含層出土木器類 (19)

板状木製品(1714~1744)

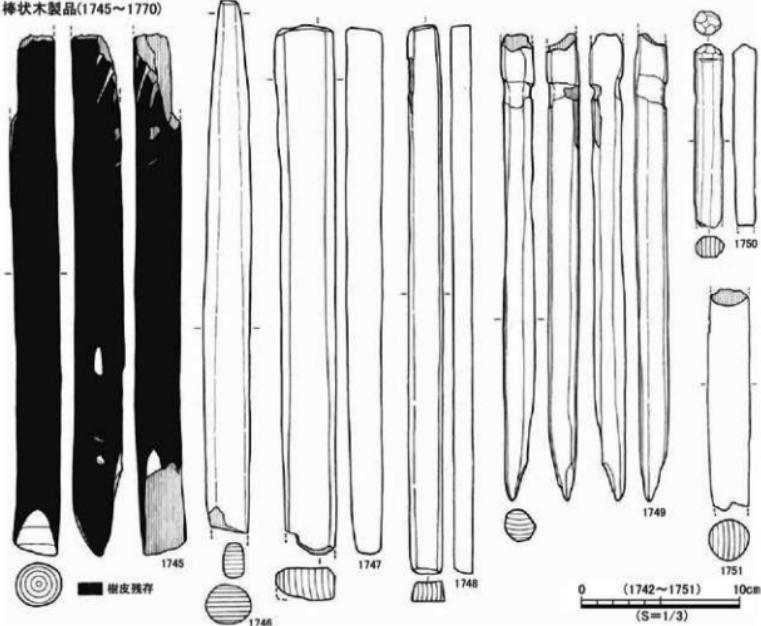


第198図 包含層出土木器類 (20)

板状木製品(1714～1744)

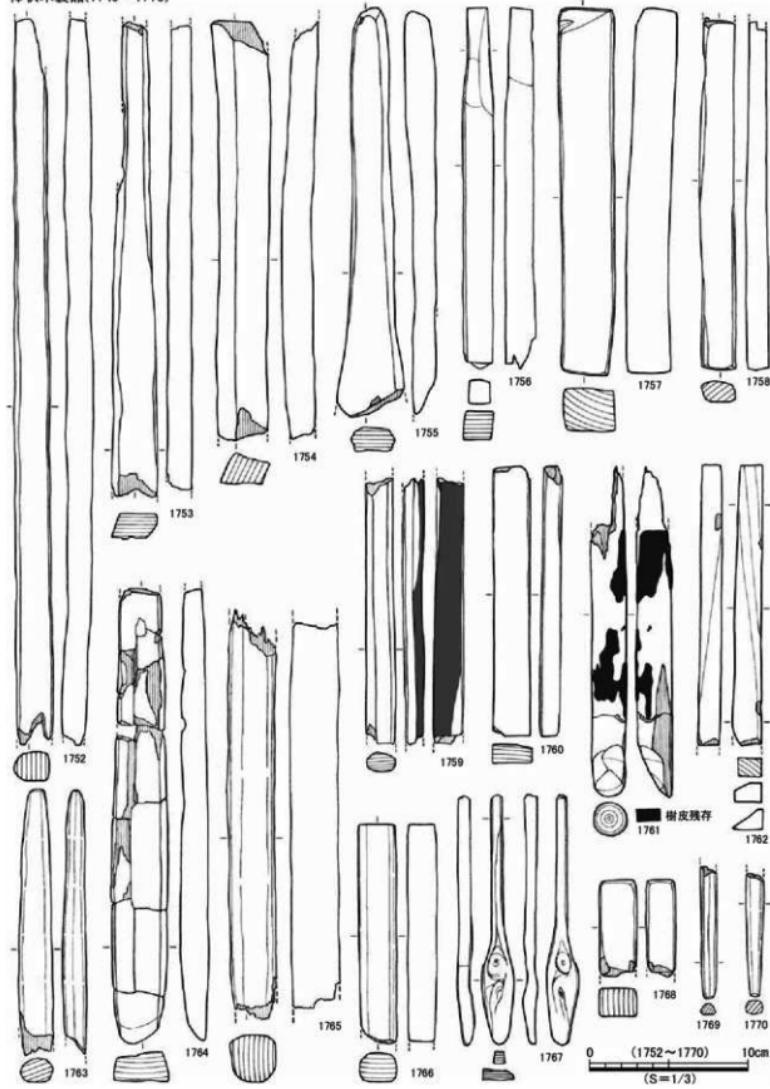


棒状木製品(1745～1770)



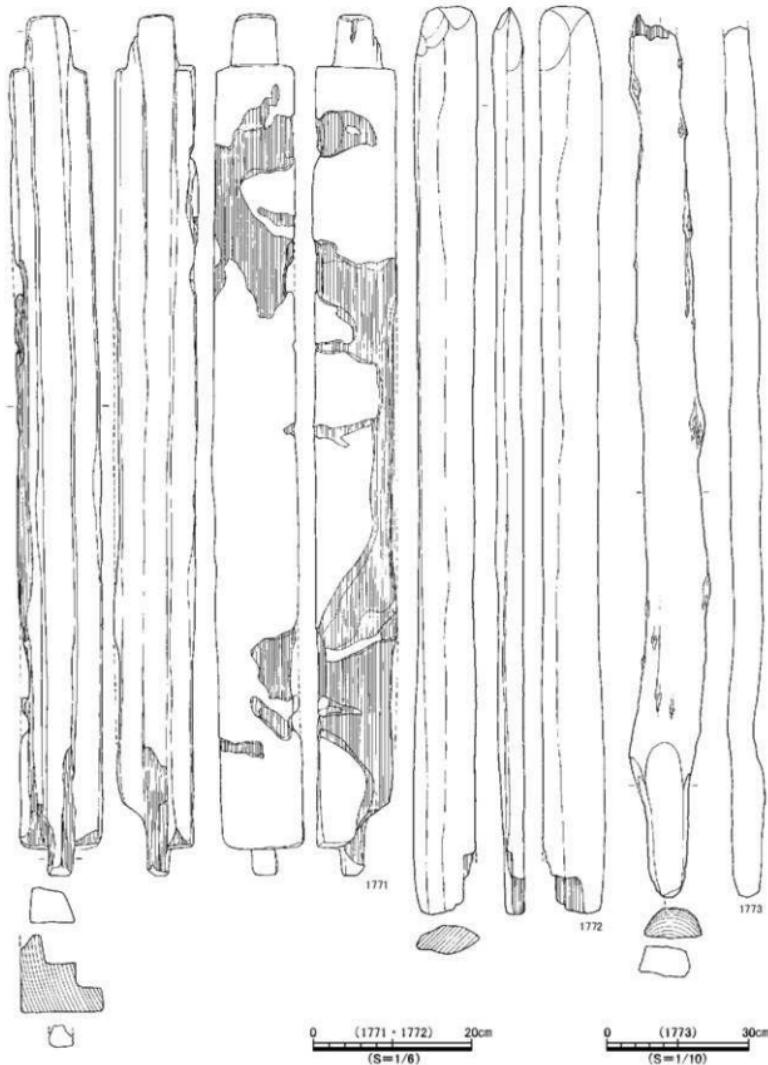
第199図 包含層出土木器類 (21)

棒状木製品(1745～1770)



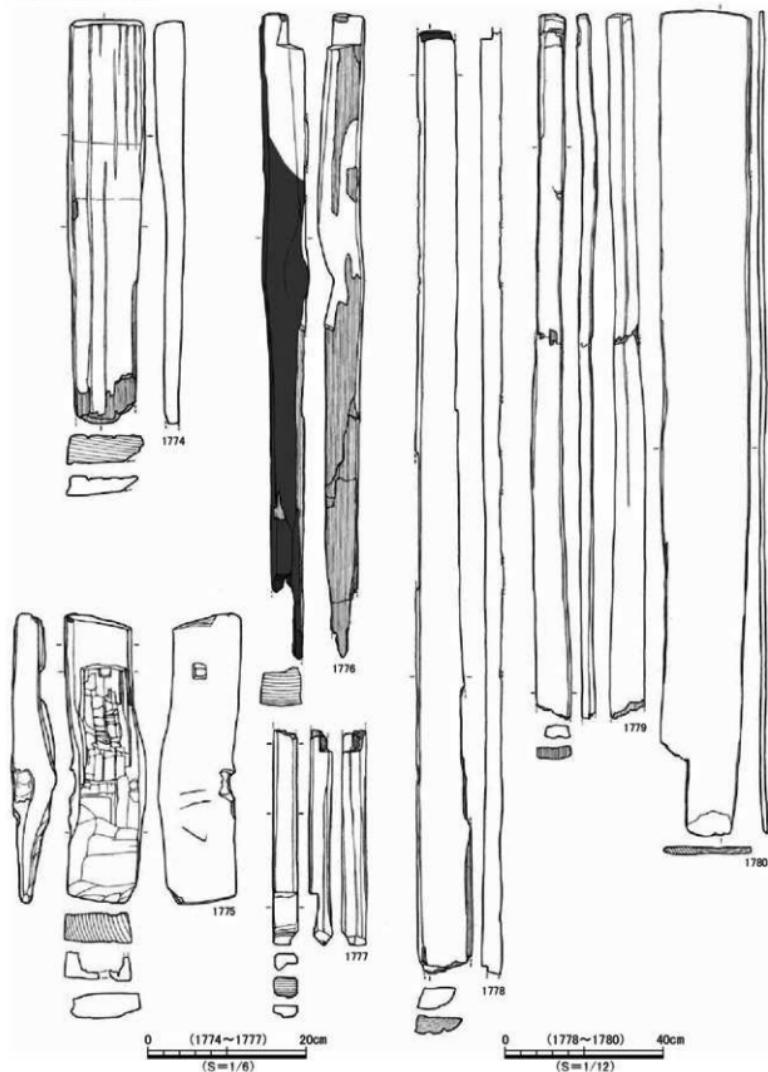
第200図 包含層出土木器類 (22)

建築部材(1771～1823)



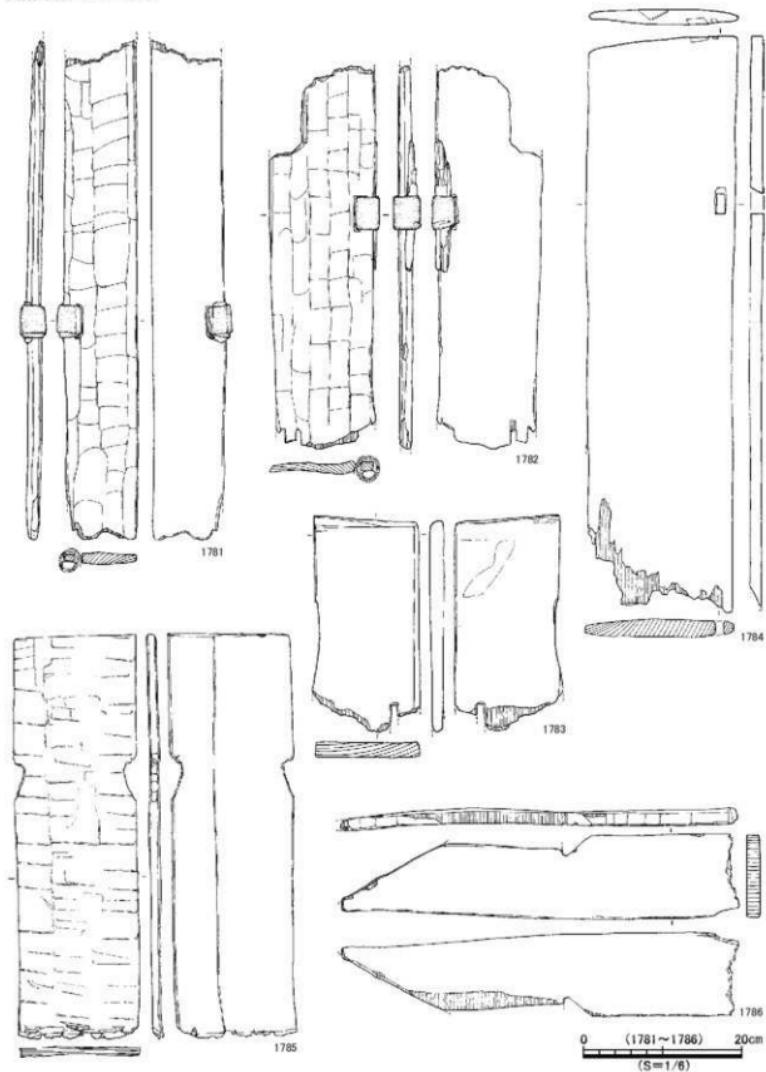
第201図 包含層出土木器類 (23)

建築部材(1771～1823)



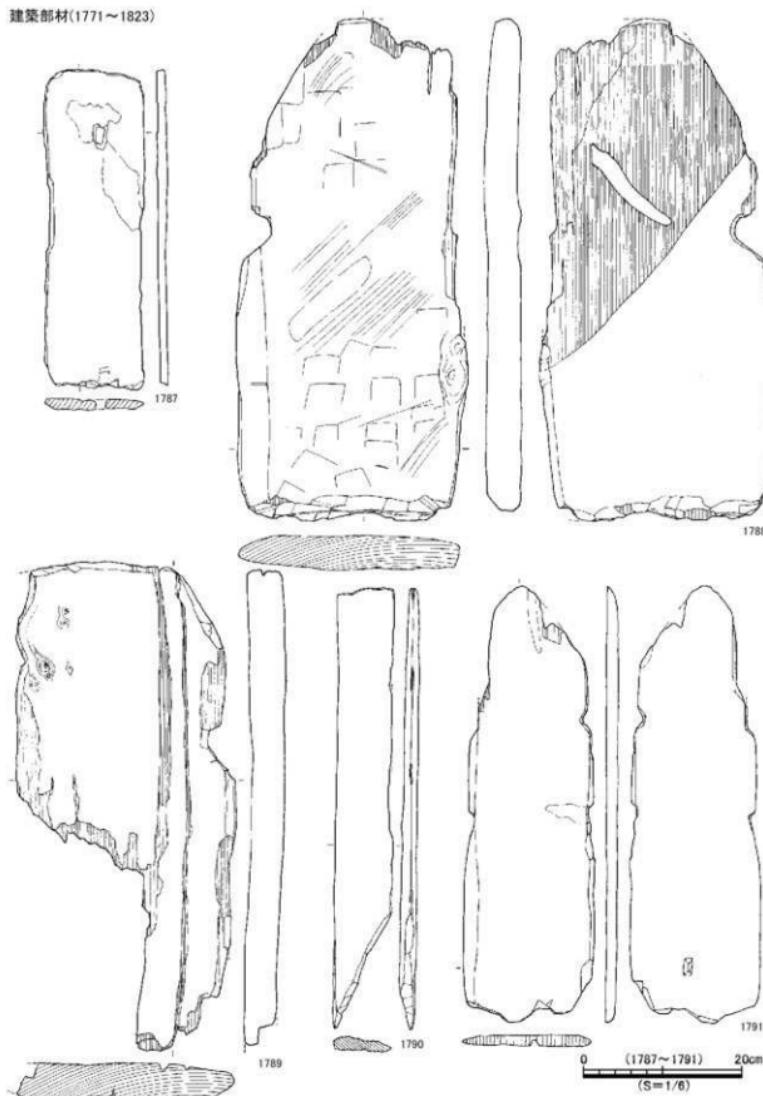
第202図 包含層出土木器類 (24)

建築部材(1771～1823)



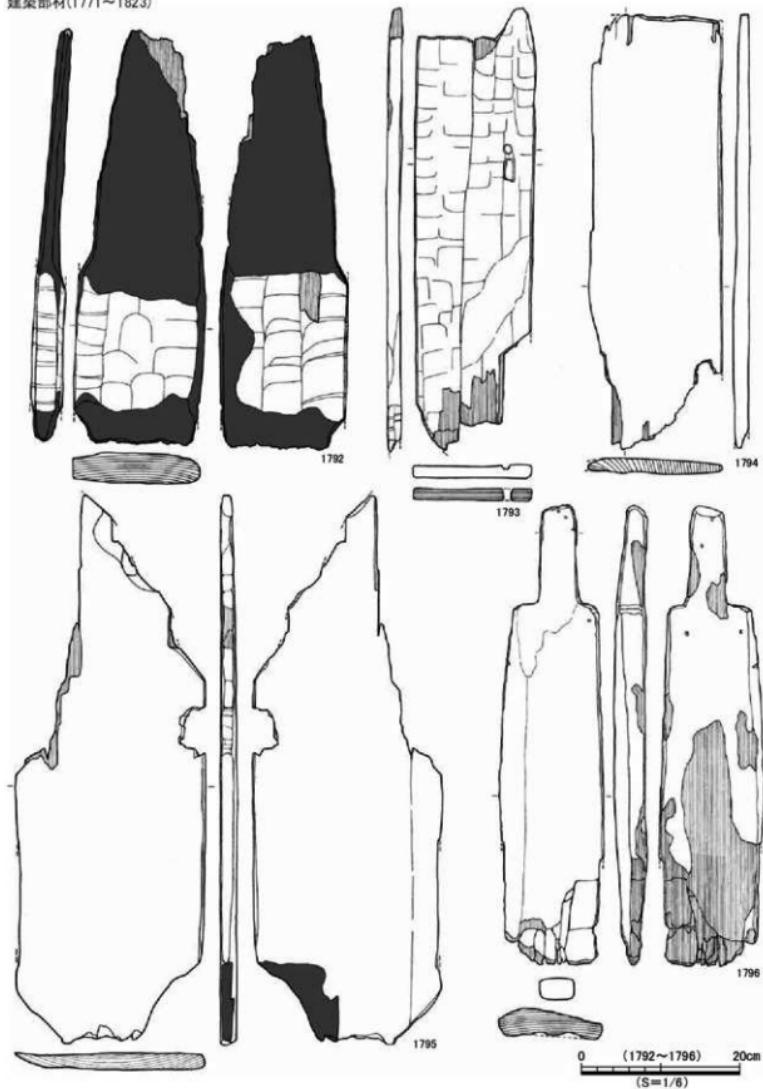
第203図 包含層出土木器類 (25)

建築部材(1771～1823)



第204図 包含層出土木器類 (26)

建築部材(1771～1823)



第205図 包含層出土木器類 (27)

建築部材(1771~1823)



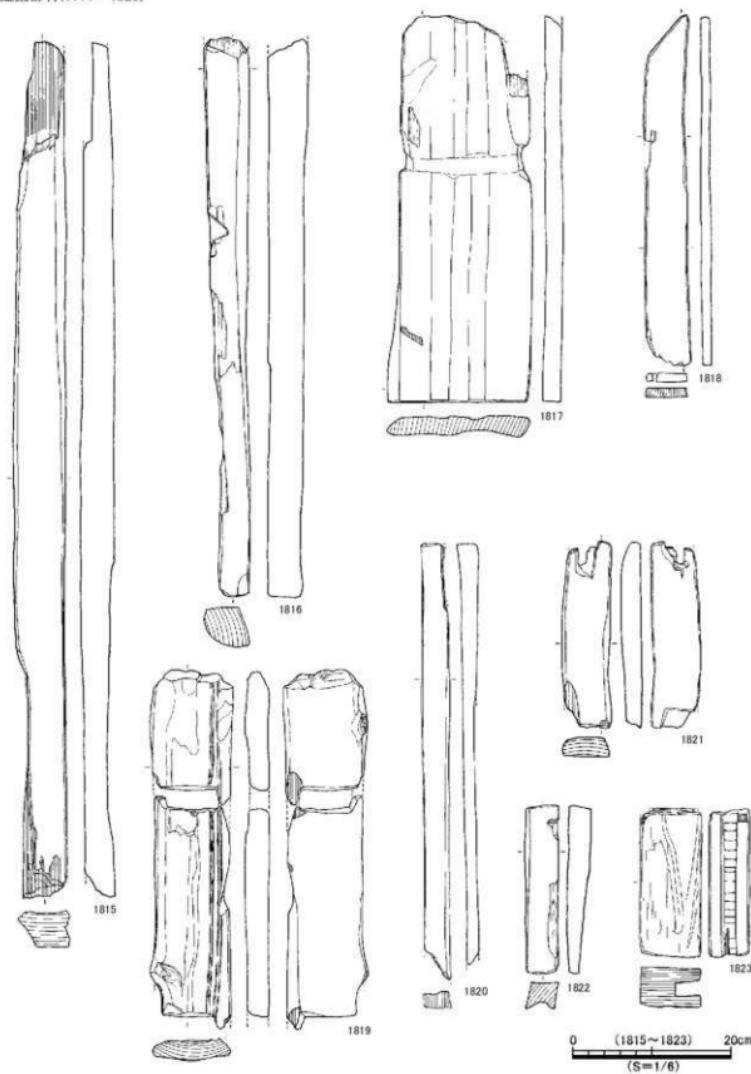
第206図 包含層出土木器類 (28)

建築部材(1771~1823)



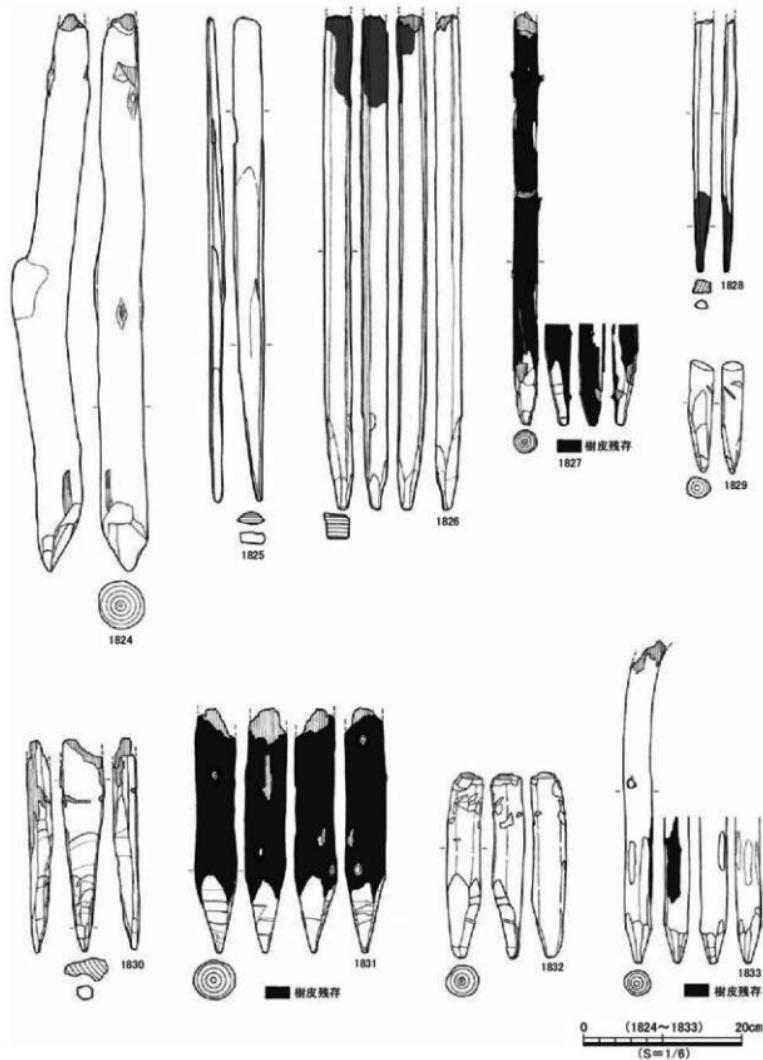
第207図 包含層出土木器類 (29)

建築部材(1771~1823)



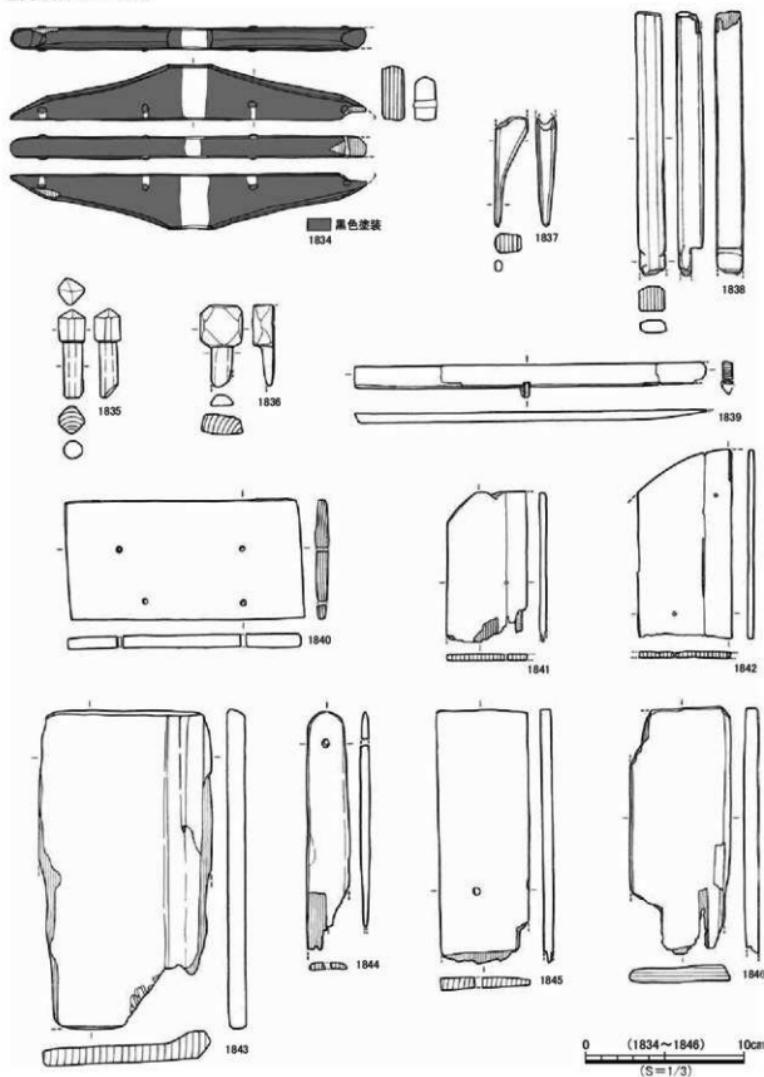
第208図 包含層出土木器類 (30)

杭(1824～1833)



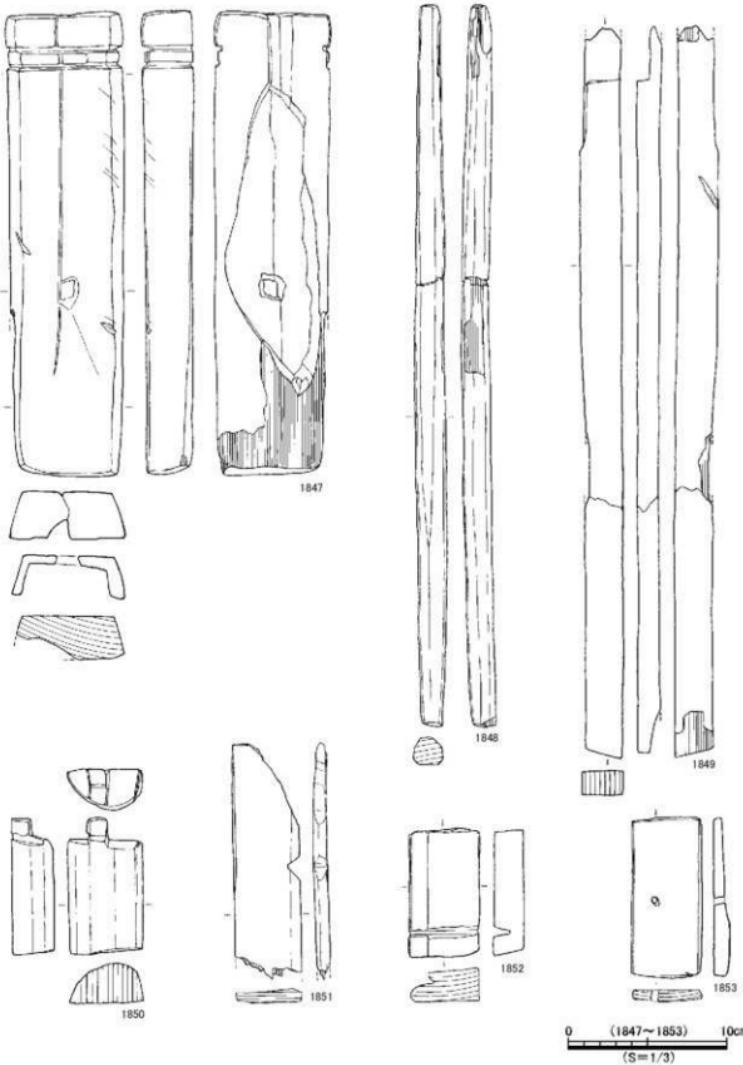
第209図 包含層出土木器類 (31)

器具部材(1834～1895)



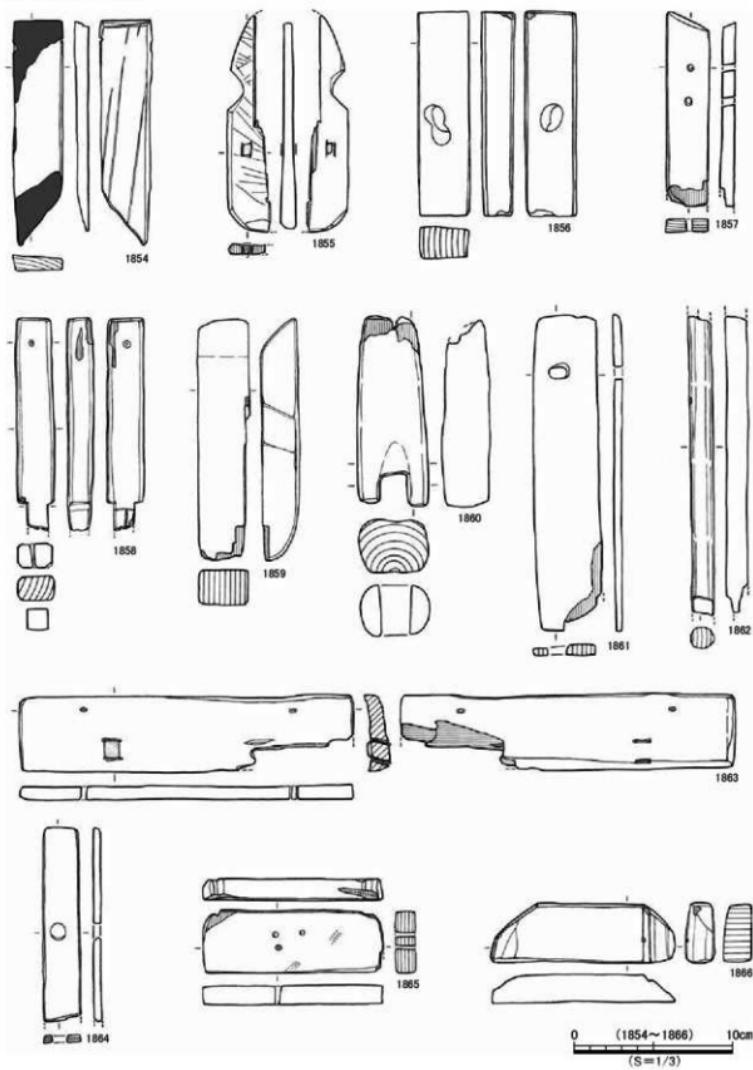
第210図 包含層出土木器類 (32)

器具部材(1834～1895)



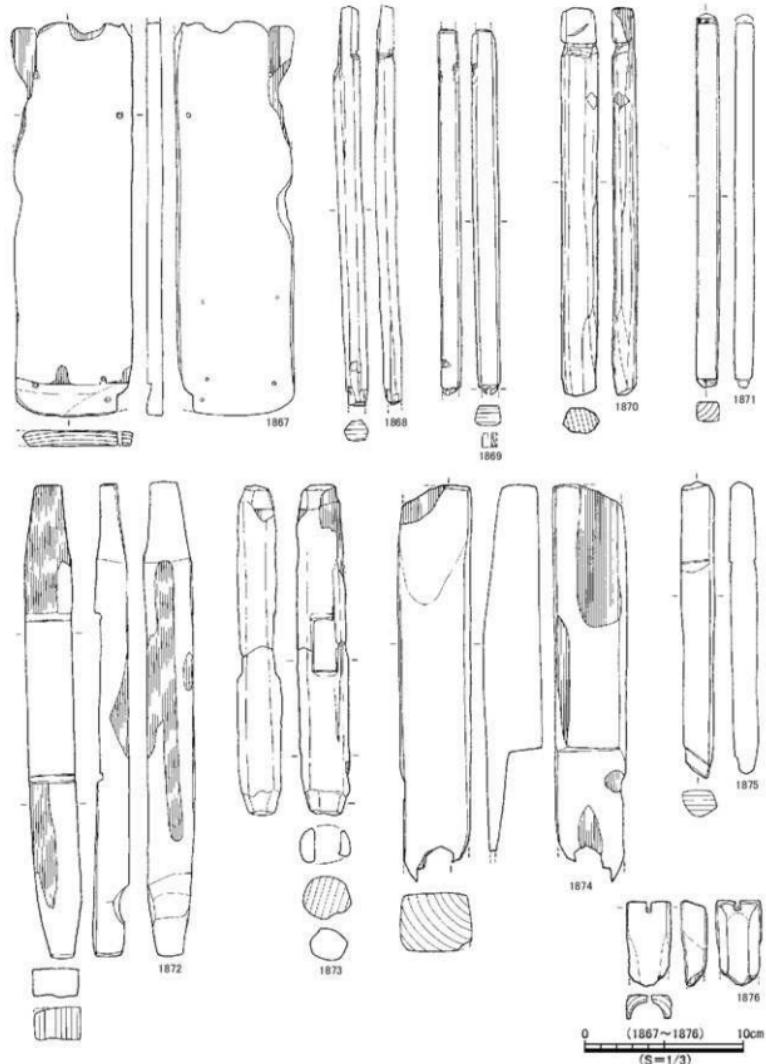
第211図 包含層出土木器類 (33)

器具部材(1834~1895)



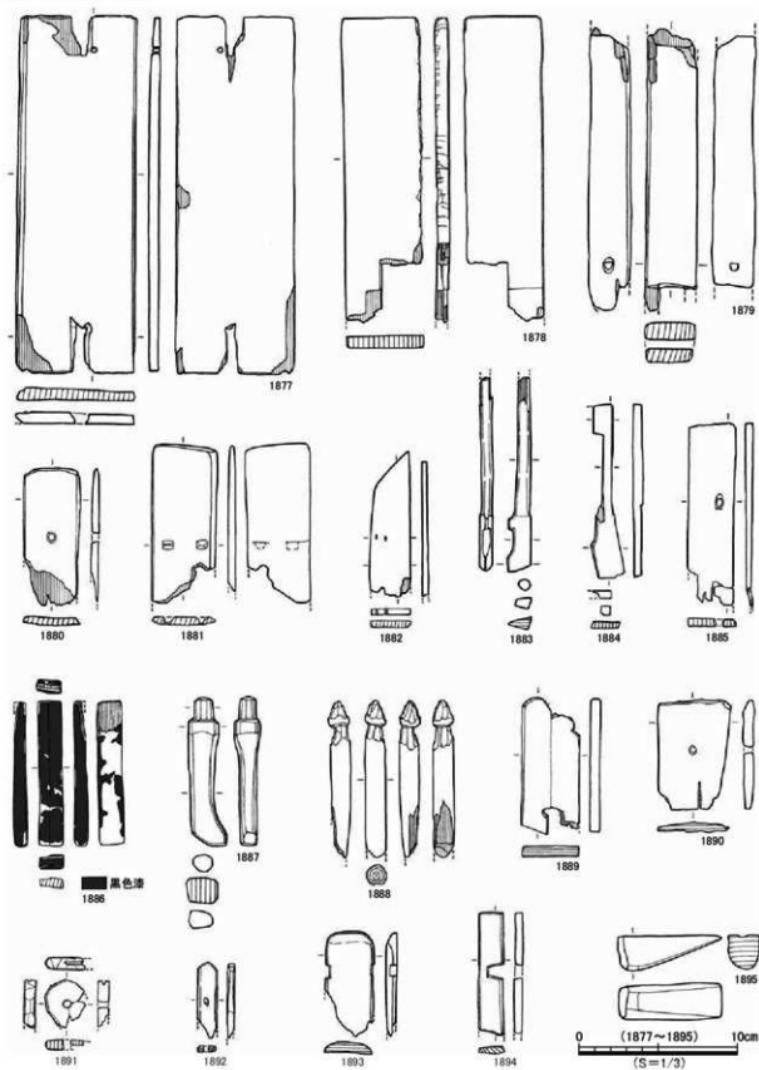
第212図 包含層出土木器類 (34)

器具部材(1834～1895)



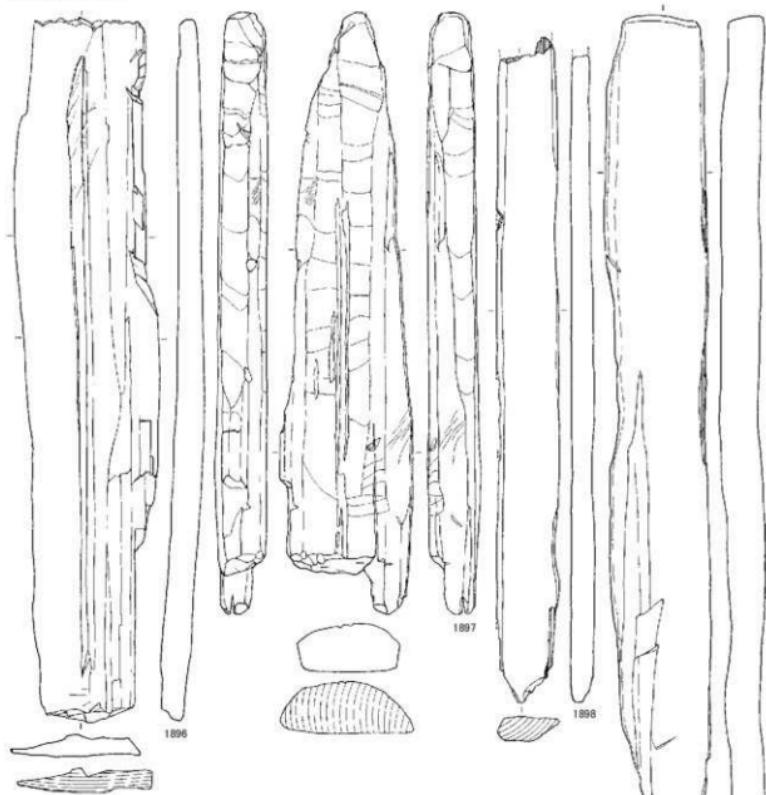
第213図 包含層出土木器類 (35)

器具部材(1834～1895)

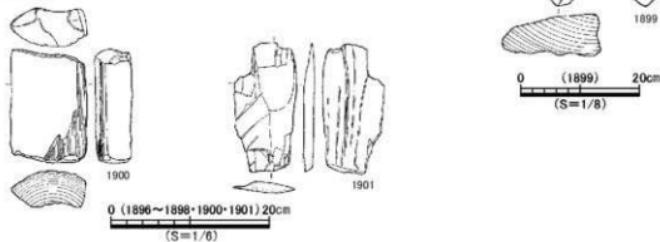


第214図 包含層出土木器類 (36)

割板(1896～1899)

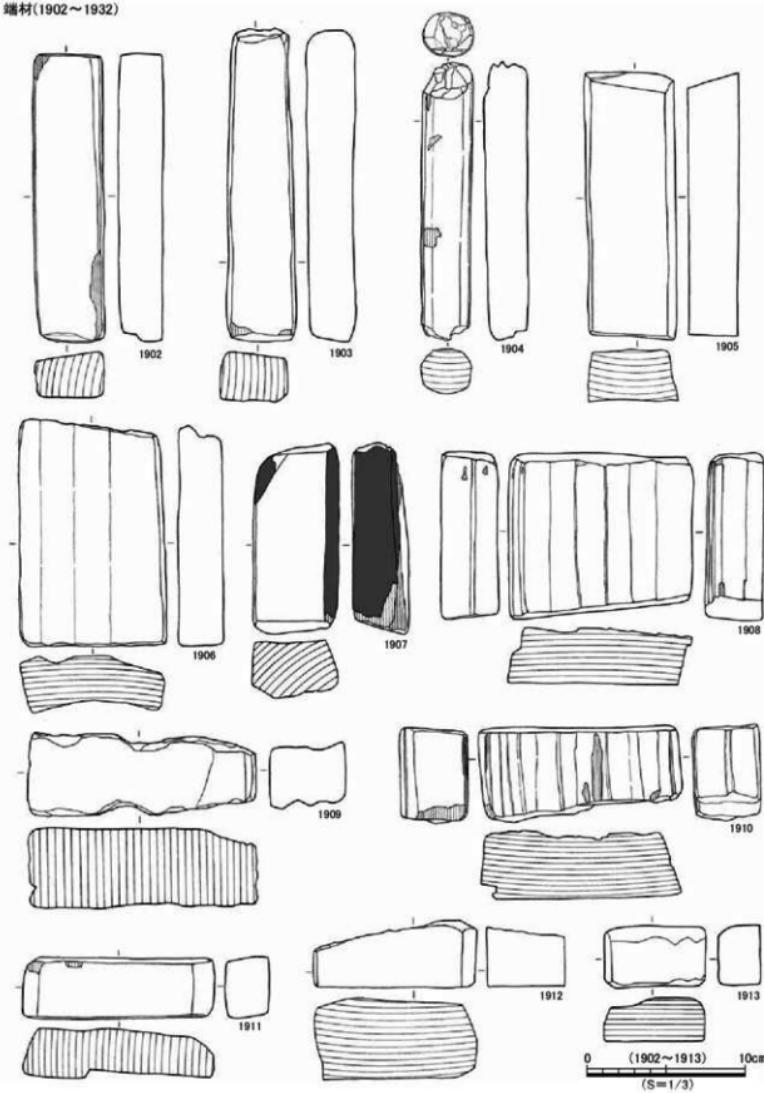


割板残材(1900・1901)



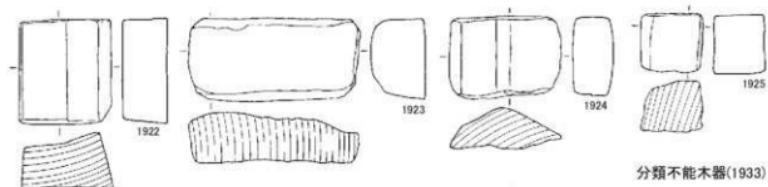
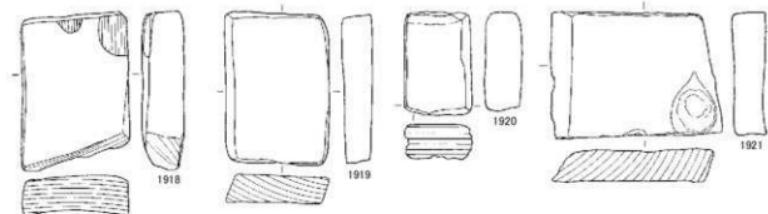
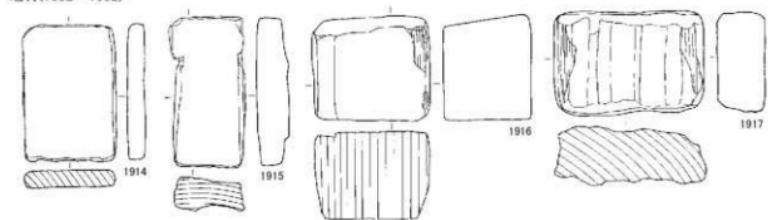
第215図 包含層出土木器類 (37)

端材(1902～1932)

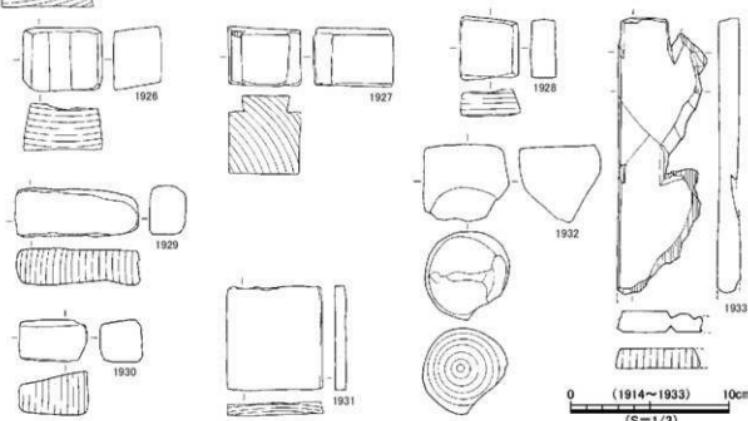


第216図 包含層出土木器類 (38)

端材(1902~1932)

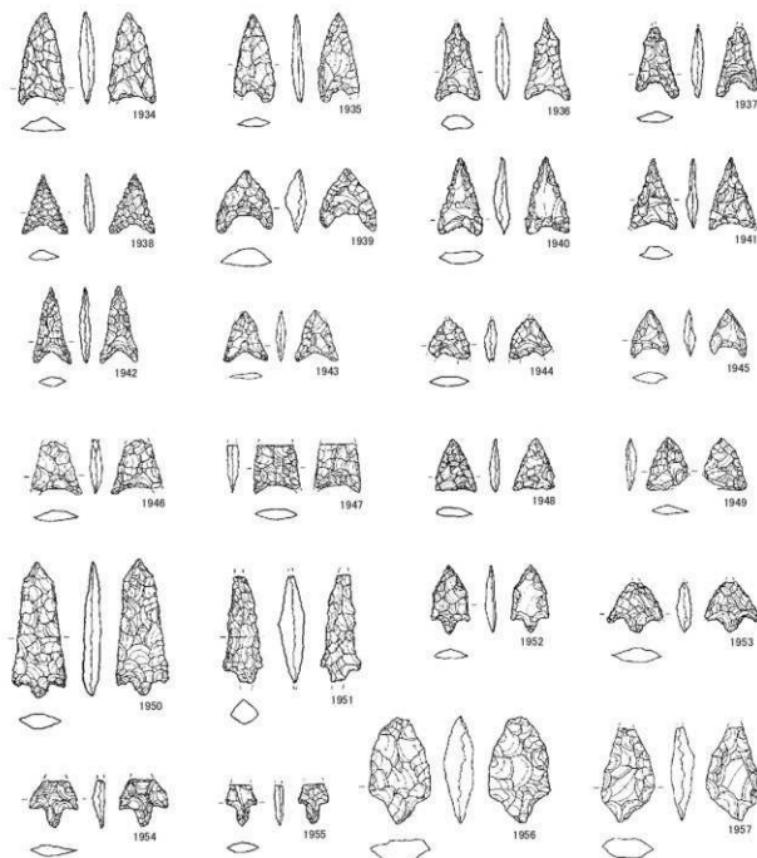


分類不能木器(1933)

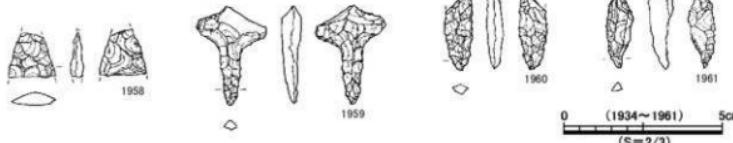


第217図 包含層出土木器類 (39)

石器(1934～1958)



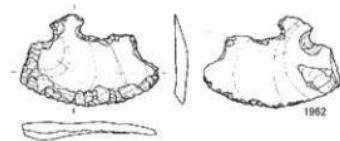
石錐(1959～1961)



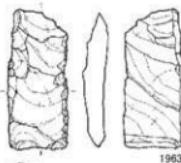
0 (1934～1961) 1cm
(S=2/3)

第218図 包含層出土石器類（1）

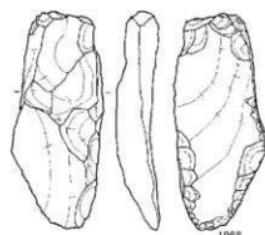
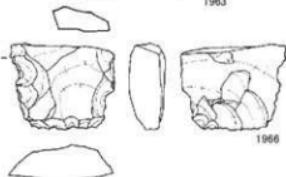
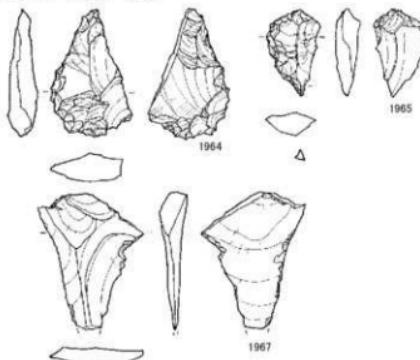
石匙(1962)



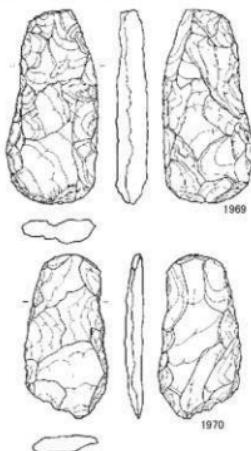
楔形石器(1963)



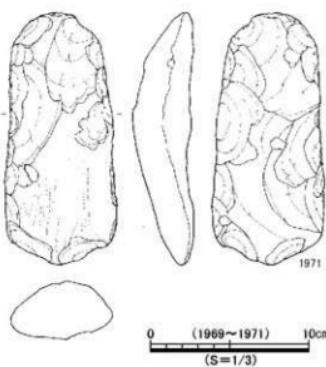
スクレイバー(1964～1968)



打製石斧(1969～2009)

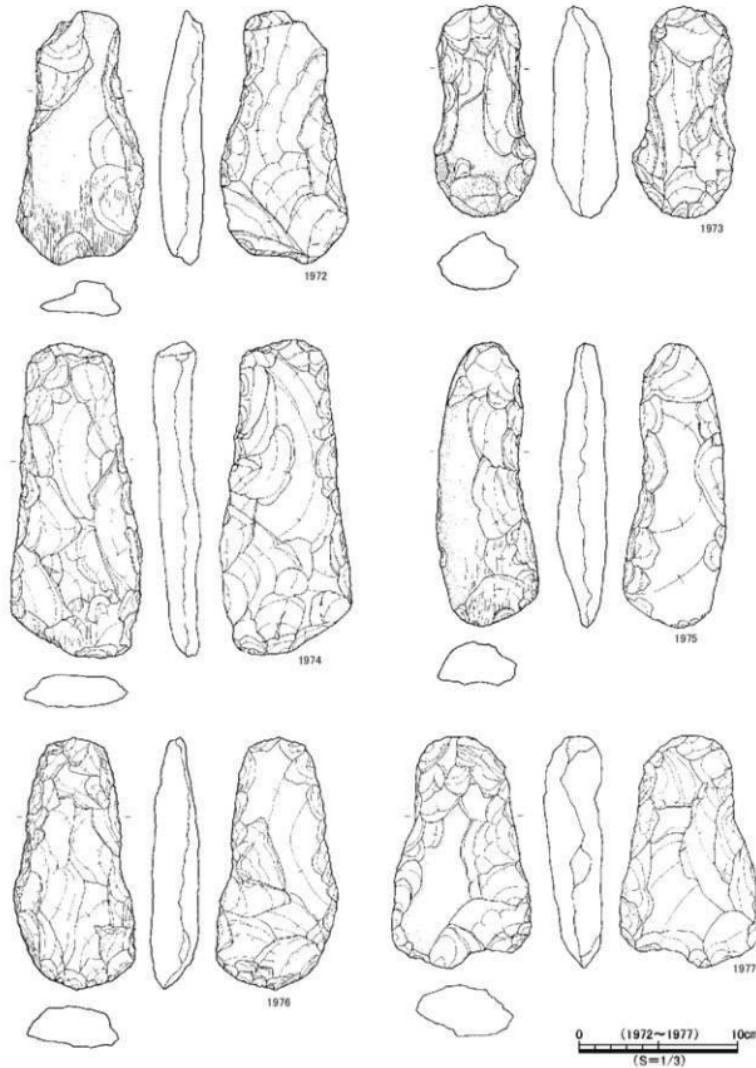


0 (1962～1968) 5cm
(S=2/3)



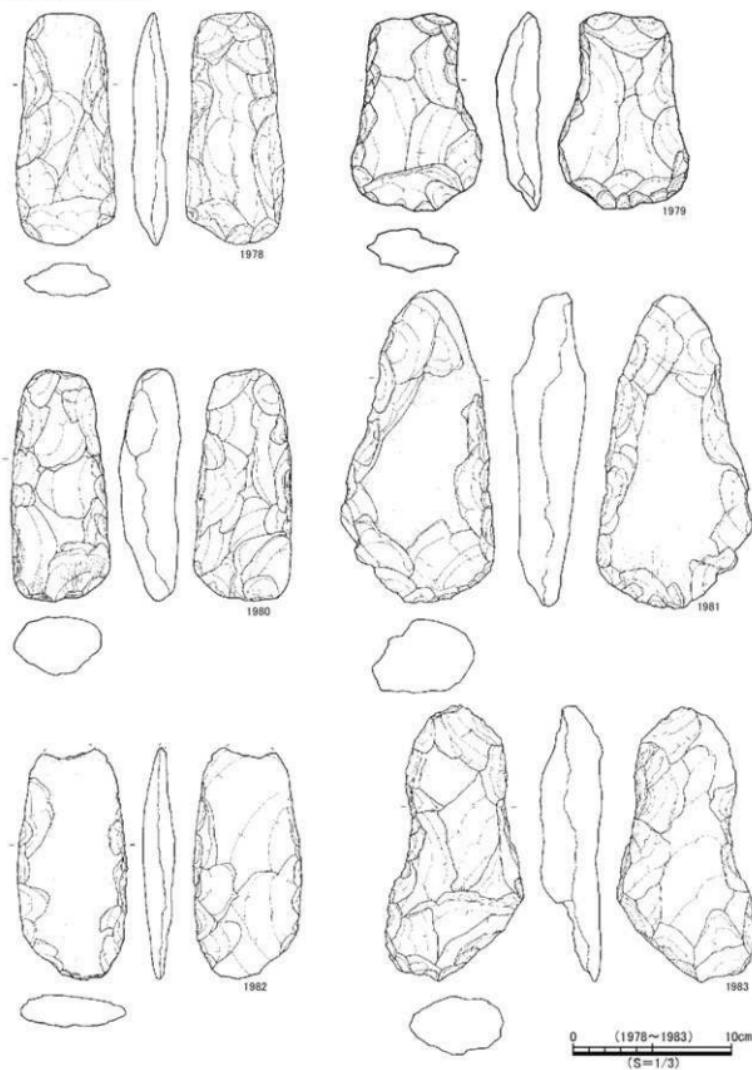
第219図 包含層出土石器類（2）

打製石斧(1969～2009)



第220図 包含層出土石器類（3）

打製石斧(1969~2009)



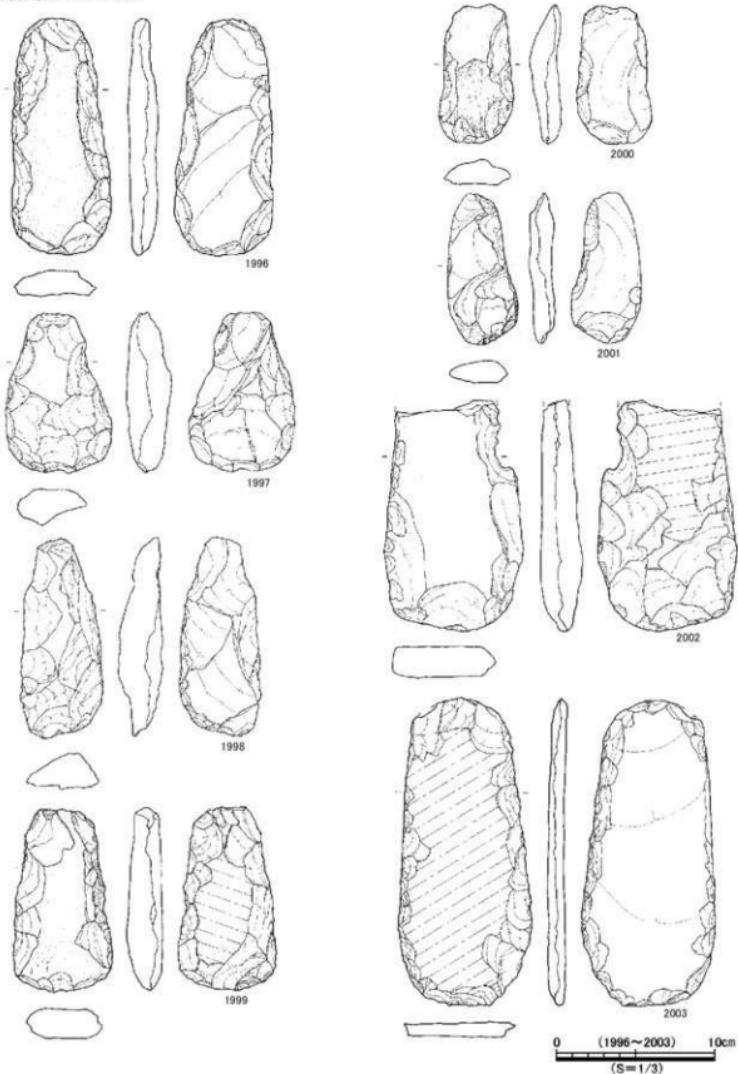
第221図 包含層出土石器類（4）

打製石斧(1969~2009)



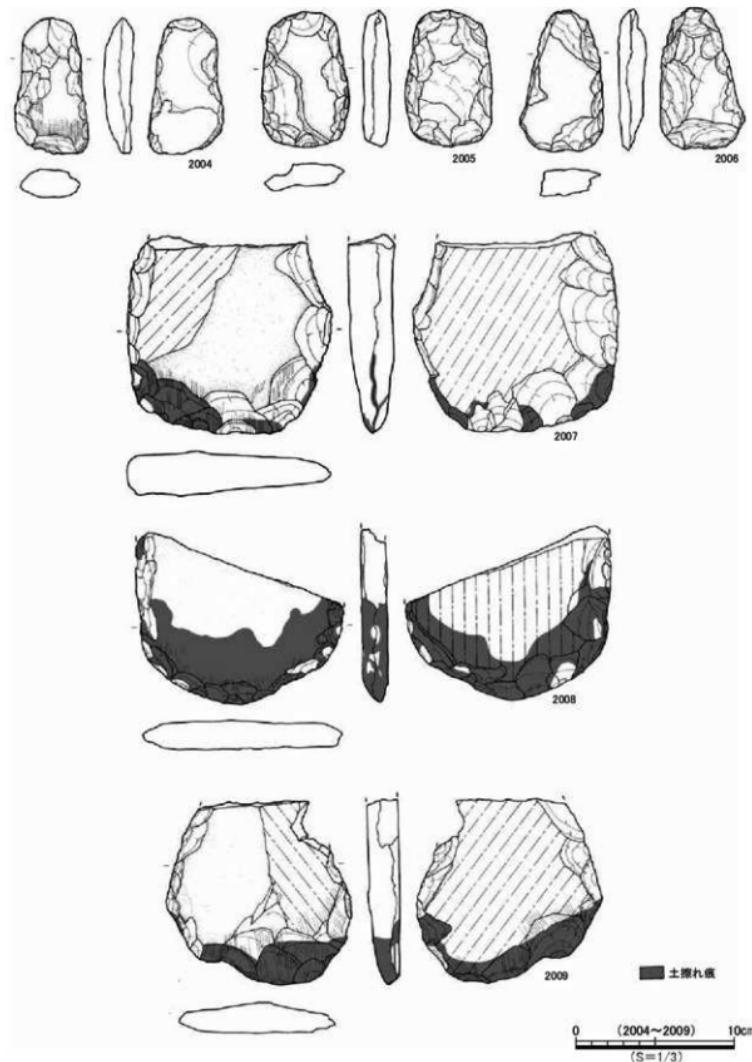
第222図 包含層出土石器類（5）

打製石斧(1969~2009)



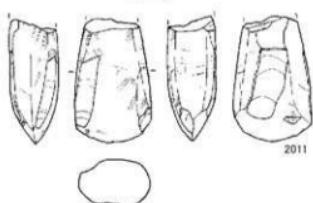
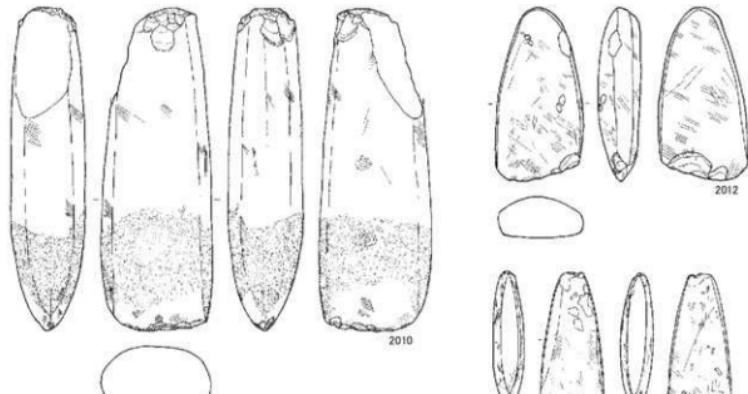
第223図 包含層出土石器類（6）

打製石斧(1969~2009)

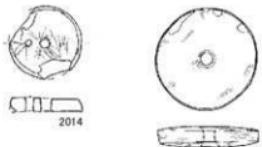


第224図 包含層出土石器類（7）

磨製石斧(2010～2013)



紡錘車(2014・2015)



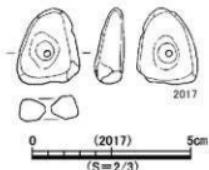
石包丁(2016)



石冠(2018)

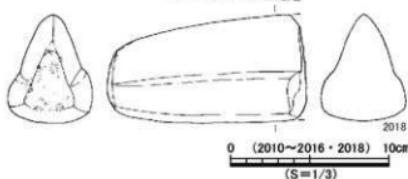


垂飾(2017)



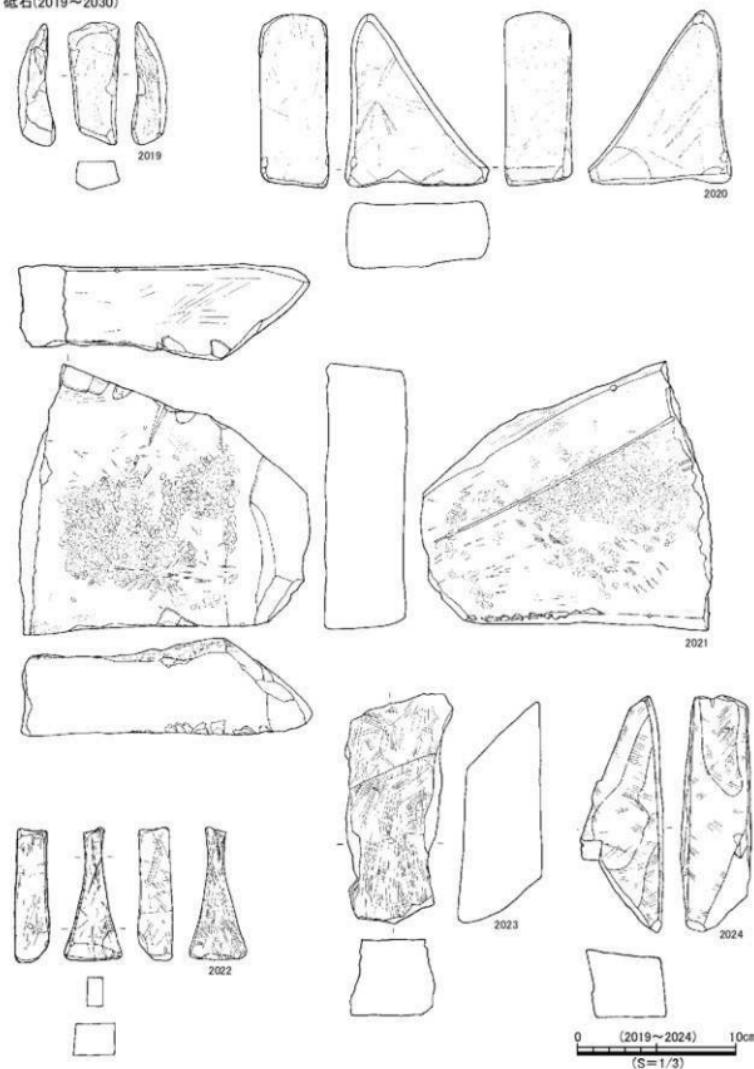
0 (2017) 5cm
(S=2/3)

第225図 包含層出土石器類（8）



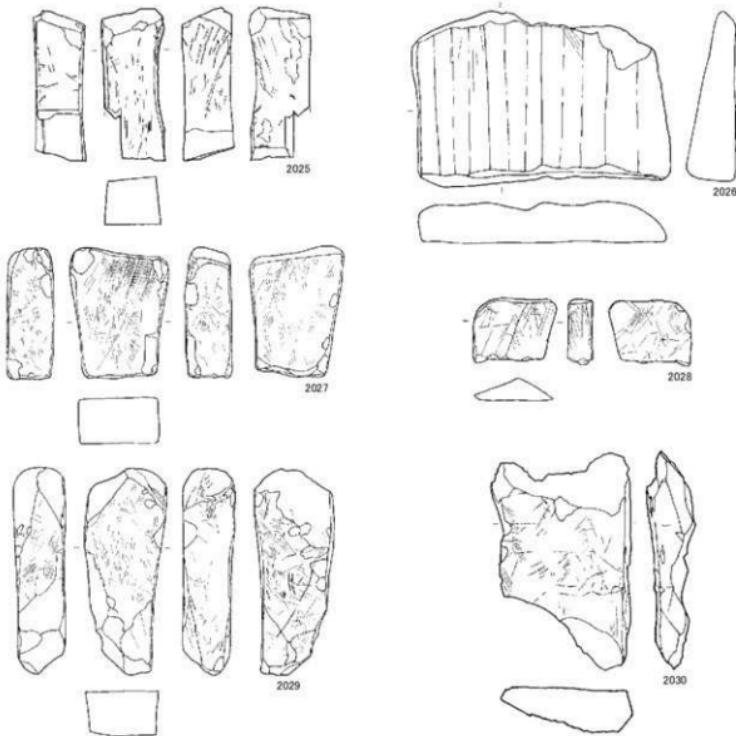
0 (2010～2016・2018) 10cm
(S=1/3)

砥石(2019～2030)

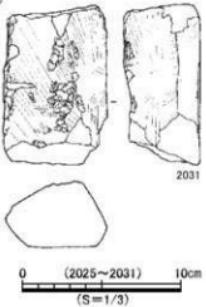


第226図 包含層出土石器類（9）

磁石(2019～2030)



磨石(2031)



0 (2025～2031) 10cm
(S=1/3)

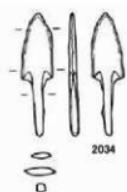
不明石製品(2032・2033)



0 (2032・2033) 5cm
(S=2/3)

第227図 包含層出土石器類 (10)

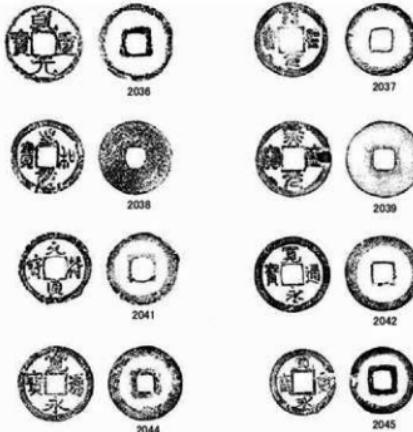
銅鏡(2034)



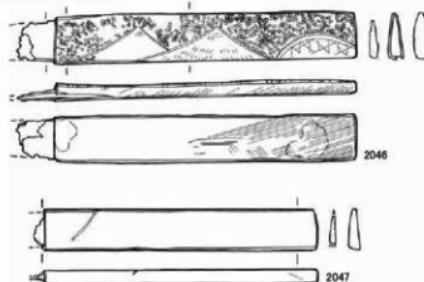
耳環(2035)



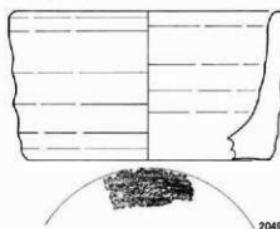
古銭(2036~2045)



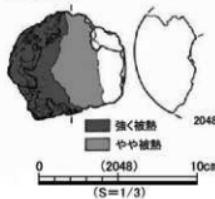
小柄(2046~2047)



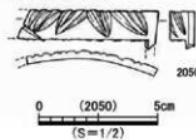
匯鉢(2049)



羽口(2048)



鼈甲製品(2050)



第228図 包含層出土金属器類・銀冶関連遺物・その他

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第122集

野内遺跡C地区

(第1分冊)

2012年3月9日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 新日本法規出版株式会社